

大阪府河内長野市

三日市遺跡発掘調査報告書

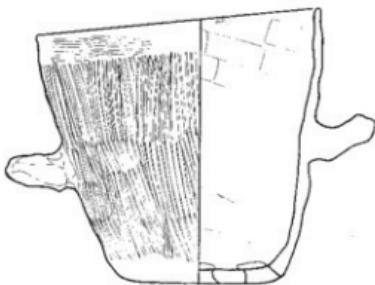
I

1988年3月

三日市遺跡調査会

大阪府河内長野市
三日市遺跡発掘調査報告書

I



1988年3月

三日市遺跡調査会

序 文

大阪府河内長野市は、大都市通勤圏内にありながら府下でもまれなほど自然環境に恵まれた景勝の地であり、古来から数多くの文化財を今に伝えるゆかしい町もあります。しかし、それ故、最近に至り本市の南の玄関口といわれる三日市町駅を中心に大規模な住宅開発が急増し、旧市街地との間に交通網をはじめ様々なギャップが顕在化し、都市機能を調整する必要性が強く求められていることも事実です。

このような状況の中、住宅都市整備公団によって三日市・片添両町にまたがる丘陵地に宅地開発の計画が策定されたため、文化財保護の観点から開発に先だって埋蔵文化財の発掘調査を行ったものです。

三日市・片添町一帯は、旧高野街道が通り、古くから交通の要衝として活況を呈する文化の集散地で、現在でも多くの文化財が点在する地です。今回の調査によって発見された古代から中世にかけての数々の遺構や遺物は、この地の歴史を明らかにするための貴重な資料であることはいうまでもありません。また、これらの結果から本調査が地域開発と埋蔵文化財の保護・保存のあり方に一石を投じたと確信するものであります。

なお、本調査を実施し得たのは、調査の意義をよく理解され、御協力を賜った地域住民の方々をはじめ住宅都市整備公団関西支社、同南大阪宅地開発事務所、大阪府教育委員会、河内長野市、河内長野市教育委員会、(財)大阪文化財センターに心から感謝の意を表するものです。また、大谷女子大学、奈良大学などの学識経験者の方々にはそのつど、適切な指導・助言をいただいたことを末尾ながらここに記し、深く感謝の意を表するとともに、今後とも文化財の保護に一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げる次第です。

理事長 平井 義信

例　　言

1. 本書は大阪府河内長野市片添町及び三日市町に所在する三日市遺跡の調査報告書である。
2. 調査は三日市・片添地区特定区画整理事業に先立行なわれたものである。
3. 調査及び本書に掛る経費は日本住宅都市整備公団が負担した。
4. 現地調査は昭和60年1月から昭和62年4月まで行った。
5. 本報告は古墳時代までとし、奈良時代以降は次回、報告書IIで行う。
6. 遺構実測の一部は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7. 調査の実施においては、下記の方々の協力を得た。

大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会・地元地主の方々・住宅都市整備公団関西支社・同大阪南宅地開発事務所・(財)大阪文化財センター・河内長野市都市整備部・南海三日市共同企業体・南海電気鉄道株式会社・株式会社大林組・前田建設工業株式会社・壱山建設株式会社・南海建設株式会社・地元市民の方々

8. 本書の執筆は各調査担当者と協議し、尾谷雅彦、高 正龍、四宮加容子が分担したが、一部下記のとおり、執筆を依頼した。

第5章第1節の一部	松山聰（(財)大阪文化財センター技師）
第6章第4節の一部	奥田尚（八尾市立刑部小学校教諭）
第6章第1節	パリノサーベイ株式会社
第2節	京都科学標本株式会社
第3節	西山要一（奈良大学文化財学科助教授）

9. 編集については前記の3名がおこない、総括責任は尾谷雅彦が負うものである。

10. 本書の作成については下記の方々の協力を得た。

和歌山県川辺町教育委員会・北野耕平・野堀正雄・中村浩・西山要一・山口誠一・奥田尚・水野正好・泉 拓良・酒井龍一・パリノサーベイ株式会社・京都科学標本株式会社・北岸昌男・鳴川修・加藤博章・橋本亨・三間江津子・谷 由美・笠井敏光・三宮昌弘

11. 遺物の整理、実測・トレースは四宮加容子が統轄し、遺物の写真は中西和子が撮影した。
12. 調査成果品は最終的に河内長野市教育委員会が保管し、一般に広く活用できるようにする。

凡 例

1. 本書の遺構名は下記の略記号をもちいた。

S I …竪穴住居	S B …掘立柱建物	S D …溝	S K …土壙
S T …古墳	S R …土壙墓	S S …竪穴系小石室墓	
S Y …窯状遺構	S X …その他	N V …自然地形	

2. 遺構番号は、各遺構ごとに一連番号を記した。

3. 地区名は、国土座標による調査地区割りに基づくものと調査工事発注に伴う調査区番号とを併用した。

4. 遺物番号と写真図版の番号とは一致するようにした。

5. 須恵器編年については、大阪府教育委員会発行の陶邑編年をもちいた。

6. 遺物実測図は、土器1/4その中で拓本を伴うもの1/2、埴1/6、埴輪1/2・1/4・1/6、鉄器1/2・1/4、石器は旧石器が2/3・台石が1/4・その他が1/2

7. 遺構図は規模により1/5・1/20・1/30・1/40・1/60・1/80・1/150

8. 土色については、新版標準土色帖1976. 9による。

目 次

序文
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次（含觀察表）
図版目次
付図目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の方法.....	4
第2章 位置と環境.....	7
第1節 位置と自然的環境.....	7
第2節 歴史的環境.....	11
第3章 遺跡の概要.....	17
第1節 概要.....	17
第2節 署序.....	18
第4章 遺構.....	21
第1節 縄文時代の遺構.....	21
1. 概要.....	21
2. 土壌 (S K)	21
第2節 弥生時代の遺構.....	25
1. 概要.....	25
2. 積穴住居 (S I)	25
3. 溝 (S D)	28
4. 自然地形 (N V)	29
第3節 古墳時代の遺構.....	32
1. 遺構の概要.....	32
2. 積穴住居 (S I)	32
3. 墓立柱建物 (S B)	56
4. 溝 (S D)	57

5.	土壤 (S K)	59
6.	古墳 (S T)	89
7.	土壙墓 (S R)	109
8.	豎穴系小石室墓 (S S)	114
9.	窯状遺構 (S Y)	119
10.	その他 (S X)	123
	第5章 遺物	129
	第1節 旧石器時代の遺物	129
1.	石核	129
2.	剝片	129
3.	微小剝離痕のある剝片	130
4.	二次加工のある剝片	130
5.	碎片	130
6.	トゥール	130
	第2節 繩文時代の遺物	134
1.	土器	134
2.	石器	137
3.	まとめ	139
	第3節 弓生時代の遺物	140
1.	土器	140
2.	石器	141
	第4節 古墳時代の遺物	142
1.	土師器	142
2.	須恵器	156
3.	韓式系土器	164
4.	埴輪	169
5.	鉄器	177
	第6章 遺構・遺物の科学的処理	245
	第1節 三日市遺跡（5地区 北側）試料花粉分析及び珪藻分析報告	245
	第2節 三日市遺跡出土豎穴住居跡の保存処理について	257
	第3節 三日市遺跡出土の金鴨器の保存処理	260
	第7章 まとめ	263
	第1節 遺跡の変遷	263
	第2節 古墳時代墳墓の変遷	269

挿図目次

第 1 図 調査区配置図及び調査区画設定図	5
第 2 図 遺跡位置図	7
第 3 図 調査地区地形区分図	8
第 4 図 河内長野遺跡分布図	9
第 5 図 塩谷遺跡遺物実測図（1）	11
第 6 図 塩谷遺跡遺物実測図（2）	12
第 7 図 五の木古墳遺物実測図	13
第 8 図 土層模式図（1/20）	18
第 9 図 S K70遺構実測図（1/30）	21
第 10 図 S K70遺物実測図	21
第 11 図 S K72遺構実測図（1/30）	21
第 12 図 S K72遺物実測図	22
第 13 図 S K73遺構実測図	22
第 14 図 S K73遺物実測図	23
第 15 図 S I 1 遺構実測図（1/80）	25
第 16 図 S I 1 炉断面実測図（1/30）	25
第 17 図 S I 1 遺物実測図（1）	26
第 18 図 S I 1 遺物実測図（2）	27
第 19 図 S I 2 遺構実測図（1/80）	27
第 20 図 S I 2 遺物実測図	28
第 21 図 S D30・32断面実測図（1/20）	28
第 22 図 S D30遺物実測図	28
第 23 図 S D32遺物実測図	28
第 24 図 N V 3 遺構実測図（1/200）	29
第 25 図 N V 3 遺物実測図（1）	30
第 26 図 N V 3 遺物実測図（2）	31
第 27 図 S I 3 遺構実測図（1/80）	33
第 28 図 S I 4 遺構実測図（1/80）	33
第 29 図 S I 4 遺物実測図	33
第 30 図 S I 5 遺構実測図（1/80）	34
第 31 図 S I 5 遺物実測図	34

第 32 図	S I 6 遺構実測図 (1/80)	35
第 33 図	S I 6 遺物実測図.....	35
第 34 図	S I 7 遺構実測図 (1/80)	36
第 35 図	S I 7 遺物実測図.....	36
第 36 図	S I 8 遺構実測図 (1/80)	38
第 37 図	S I 8 遺物実測図.....	38
第 38 図	S I 9 遺構実測図 (1/80)	39
第 39 図	S I 9 瓢状遺構実測図 (1/30)	39
第 40 図	S I 9 遺物実測図.....	40
第 41 図	S I 10 遺構実測図 (1/80)	41
第 42 図	S I 10 遺物実測図.....	41
第 43 図	S I 11 遺構実測図 (1/80)	42
第 44 図	S I 11 遺物実測図.....	42
第 45 図	S I 12 遺構実測図 (1/80)	42
第 46 図	S I 12 遺物実測図.....	43
第 47 図	S I 13 遺構実測図 (1/80)	43
第 48 図	S I 13 遺物実測図.....	44
第 49 図	S I 14 遺構実測図 (1/80)	45
第 50 図	S I 14 遺物実測図.....	45
第 51 図	S I 15 遺構実測図 (1/80)	46
第 52 図	S I 15 遺物実測図 (1)	47
第 53 図	S I 15 遺物実測図 (2)	48
第 54 図	S I 15 瓢状遺構実測図 (1/30)	49
第 55 図	S I 16 遺構実測図 (1/80)	50
第 56 図	S I 16 遺物実測図.....	50
第 57 図	S I 17 遺構実測図 (1/80)	51
第 58 図	S I 17 瓢状遺構断面図 (1/30)	51
第 59 図	S I 17 遺物実測図.....	52
第 60 図	S I 18・19・S D35 遺構実測図.....	53
第 61 図	S I 18・19・瓢状遺構実測図 (1/30)	54
第 62 図	S I 18 遺物実測図.....	54
第 63 図	S I 19 遺物実測図.....	55
第 64 図	S B11 遺構実測図 (1/80)	56
第 65 図	S B12 遺構実測図 (1/80)	57

第 66 図	S D35遺物実測図	57
第 67 図	S D40・41遺構実測図（1/40）	58
第 68 図	S D40遺物実測図	59
第 69 図	S D41遺物実測図	59
第 70 図	S K 1遺構実測図（1/30）	59
第 71 図	S K 1遺物実測図	59
第 72 図	S K36遺構実測図（1/30）	60
第 73 図	S K36遺物実測図	60
第 74 図	S K58遺構実測図（1/30）	60
第 75 図	S K58遺物実測図	60
第 76 図	S K63遺構実測図（1/30）	61
第 77 図	S K63遺物実測図	61
第 78 図	S K71遺構実測図（1/30）	61
第 79 図	S K71遺物実測図	61
第 80 図	S K101遺構実測図（1/30）	62
第 81 図	S K101遺物実測図	63
第 82 図	S K105遺構実測図（1/30）	63
第 83 図	S K106遺構実測図（1/30）	63
第 84 図	S K107遺構実測図（1/30）	64
第 85 図	S K108遺構実測図	64
第 86 図	S K108遺物実測図	64
第 87 図	S K109遺構実測図（1/30）	65
第 88 図	S K109遺物実測図	65
第 89 図	S K110・111遺構実測図（1/30）	65
第 90 図	S K111遺物実測図	65
第 91 図	S K112遺構実測図（1/30）	66
第 92 図	S K112遺物実測図	66
第 93 図	S K113遺構実測図（1/30）	67
第 94 図	S K113遺物実測図（1）	67
第 95 図	S K113遺物実測図（2）	68
第 96 図	S K114遺構実測図（1/80）	69
第 97 図	S K114遺物実測図（1）	70
第 98 図	S K114遺物実測図（2）	71
第 99 図	S K114遺物実測図（3）	72

第 100 図	S K114遺物実測図（4）	73
第 101 図	S K114遺物実測図（5）	74
第 102 図	S K115遺構実測図（1/30）	75
第 103 図	S K115遺物実測図（1）	76
第 104 図	S K115遺物実測図（2）	77
第 105 図	S K119遺構実測図（1/30）	78
第 106 図	S K119遺物実測図	78
第 107 図	S K120・121遺構実測図（1/30）	78
第 108 図	S K120遺物実測図	78
第 109 図	S K121遺物実測図	79
第 110 図	S K122遺構実測図（1/30）	79
第 111 図	S K122遺物実測図	79
第 112 図	S K123遺構実測図（1/20）	79
第 113 図	S K123遺物実測図	80
第 114 図	S K133遺構実測図（1/30）	80
第 115 図	S K133遺物実測図	80
第 116 図	S K134遺構実測図（1/40）	81
第 117 図	S K134遺物実測図	82
第 118 図	S K135遺物実測図	82
第 119 図	S K136遺構実測図（1/30）	82
第 120 図	S K136遺物実測図	82
第 121 図	S K137遺構実測図（1/30）	83
第 122 図	S K137遺物実測図	84
第 123 図	S K138遺構実測図（1/30）	84
第 124 図	S K138遺物実測図	85
第 125 図	S K140・141遺構実測図（1/30）	85
第 126 図	S K140遺物実測図	85
第 127 図	S K141遺物実測図	85
第 128 図	S K143遺構実測図（1/30）	86
第 129 図	S K143遺物実測図	86
第 130 図	S T 1～3 遺構実測図 平面（1/150）・断面（1/60）	87・88
第 131 図	S T 1 七器出土状況実測図（1/30）	89
第 132 図	S T 1 遺物実測図	90
第 133 図	S T 2 遺物実測図	91

第134図	S T 3 遺物実測図（1）	92
第135図	S T 3 遺物実測図（2）	93
第136図	S T 3 遺物実測図（3）	94
第137図	S T 4～7 遺構実測図 平面（1/150）・断面（1/60）	95・96
第138図	S T 4 土器出土状況実測図（1/30）	97
第139図	S T 4 遺物実測図	97
第140図	S T 5 遺物実測図	97
第141図	S T 6 上器出土状況実測図（1/30）	98
第142図	S T 6 遺物実測図（1）	98
第143図	S T 6 遺物実測図（2）	99
第144図	S T 7 遺物実測図	99
第145図	S T 8 遺構実測図 平面（1/150）・断面（1/60）、 鉄器出土状況実測図（1/5）	101・102
第146図	S T 8 遺物実測図（1）	102
第147図	S T 8 遺物実測図（2）	103
第148図	S T 8 遺物実測図（3）	104
第149図	S T 8 遺物実測図（4）	105
第150図	S T 8 遺物実測図（5）	106
第151図	S T 8 遺物実測図（6）	107
第152図	鉄鎌の分類及び各計測部名称	107
第153図	S R 1 遺構実測図（1/30）	109
第154図	S R 1 遺物実測図	109
第155図	S R 2 遺構実測図（1/30）	110
第156図	S R 2 遺物実測図	111
第157図	S R 3 遺構実測図（1/30）	111
第158図	S R 3 遺物実測図	112
第159図	S R 4 遺構実測図（1/30）	112
第160図	S R 4 遺物実測図	113
第161図	S R 5 遺構実測図（1/30）	114
第162図	S R 5 遺物実測図	114
第163図	S S 1 遺構実測図（1/20）	115
第164図	S S 2 遺構実測図（1/20）	116
第165図	S S 2 遺物実測図	117
第166図	S S 3 遺構実測図（1/20）	117

第 167 図	S S 4 遺構実測図 (1/20)	118
第 168 図	S Y 1・2 遺構実測図 (1/30)	119・120
第 169 図	S Y 3 遺構実測図 (1/30)	122
第 170 図	S Y 3 遺物実測図	123
第 171 図	S X 1 遺構実測図 (1/80)	123・124
第 172 図	S X 1 石敷出土状況実測図 (1/40)	123・124
第 173 図	S X 1 遺物実測図	126
第 174 図	包含層旧石器実測図 (1)	131
第 175 図	包含層旧石器実測図 (2)	132
第 176 図	包含層縄文土器実測図 (1)	135
第 177 図	包含層縄文土器実測図 (2)	136
第 178 図	包含層縄文土器実測図 (3)	137
第 179 図	包含層縄文土器実測図 (4)・石器実測図	138
第 180 図	包含層弥生土器実測図	140
第 181 図	包含層土師器実測図 (1)	150
第 182 図	包含層土師器実測図 (2)	151
第 183 図	包含層製塙土器実測図	154
第 184 図	包含層須恵器実測図 (1)	158
第 185 図	包含層須恵器実測図 (2)	159
第 186 図	包含層須恵器実測図 (3)	160
第 187 図	包含層須恵器実測図 (4)	161
第 188 図	包含層韓式系土器実測図	165
第 189 図	円筒埴輪 口縁端部 模式図	170
第 190 図	円筒埴輪 透孔模式図	171
第 191 図	包含層埴輪実測図 (1)	172
第 192 図	包含層埴輪実測図 (2)	174
第 193 図	包含層埴輪実測図 (3)	175
第 194 図	包含層埴輪実測図 (4)	176
第 195 図	三日市遺跡 (5地区北壁) 試料採取地点土層模式柱状図 (1/10)	245
第 196 図	三日市遺跡における花粉化石群集変遷	247・248
第 197 図	花粉・胞子化石顕微鏡写真 (1)	250
第 198 図	花粉・胞子化石顕微鏡写真 (2)	251
第 199 図	珪藻化石状況顕微鏡写真 (1)	255
第 200 図	珪藻化石状況顕微鏡写真 (2)	256

第 201 図 模型製作作業風景（1）	258
第 202 図 模型製作作業風景（2）	259
第 203 図 書X線写真	261
第 204 図 遺構変遷図（1）	264
第 205 図 遺構変遷図（2）	265
第 206 図 5地区住居配置図	266

表 目 次

第 1 表 河内長野市遺跡地名表	10
第 2 表 鉄鎌計測表	108
第 3 表 土師器器種分類	144
第 4 表 須恵器蓋杯形態分類	157
第 5 表 韩式系土器出土遺構表	166
第 6 表 出土韓式系土器砂礫觀察表	167
第 7 表 鉄器出土遺構表	178
第 8 表 土器觀察表	182～243
第 9 表 三日市遺跡試料花粉分析結果	249
第 10 表 珪藻の区分・適応性・環境	253
第 11 表 三日市遺跡試料珪藻分析結果	254
第 12 表 遺構時期別分布表	265
第 13 表 土師器・須恵器時期別分布表	268

図版目次

- 図版 1 遺構 遺跡全景写真
- 図版 2 遺構 S K73全景（南東から）、S K73縄文土器出土状況
- 図版 3 遺構 S I 1～2 全景（上が北東）、S I 1～2 全景（南西から）
- 図版 4 遺構 S I 1 全景（南から）、S I 1 遺物出土状況
- 図版 5 遺構 S I 2 全景（南西から）、S I 2 土器出土状況
- 図版 6 遺構 S D29全景（西から）、S D30全景（南東から）
- 図版 7 遺構 S I 3～16全景（上が南西）、S I 3～16全景（南から）
- 図版 8 遺構 S I 3～16全景（北西から）、S I 3 全景（南西から）
- 図版 9 遺構 S I 4 全景（西から）、S I 4 土器出土状況
- 図版 10 遺構 S I 5 集石検出状況（東から）、S I 5 全景（東から）
- 図版 11 遺構 S I 6 全景（南東から）、S I 7・8 全景（西から）
- 図版 12 遺構 S I 9 全景（北西から）、S I 9 竪状遺構
- 図版 13 遺構 S I 9 竪状遺構（上部土器除去後）、S I 10 全景（北東から）
- 図版 14 遺構 S I 13 全景（南東から）、S I 13 土器出土状況
- 図版 16 遺構 S I 14 全景（南東から）、S I 15 全景（北西から）
- 図版 17 遺構 S I 15 竪状遺構、S I 15 土器出土状況
- 図版 18 遺構 S I 16 全景（北東から）、S I 17 全景（南東から）
- 図版 19 遺構 S I 17 内 1. 土括（南東から） 2. 土括（南西から）
3. 竪状遺構（南東から） 4. 竪状遺構（北東から）、S I 17 遺物出土状況
- 図版 20 遺構 S I 18・19、S D35全景（北西から）、S I 18 竪状遺構
- 図版 21 遺構 S I 19 竪状遺構（左側）及び土器出土状況、S I 19 竪状遺構
- 図版 22 遺構 S B11 全景（南西から）、S B12 全景（南西から）
- 図版 23 遺構 S K63全景（北西から）、S K101全景（南から）
- 図版 24 遺構 S K110・111全景（北から）、S K113全景（北西から）
- 図版 25 遺構 S K114全景（東から）、S K114 土器出土状況
- 図版 26 遺構 S K115全景（北東から）、S K115完掘後
- 図版 27 遺構 S K121全景（南東から）、S K123全景（西から）
- 図版 28 遺構 S K134全景（東から）、S K134 土器出土状況
- 図版 29 遺構 S K137全景（北から）、S K137 土器出土状況
- 図版 30 遺構 S T 1～3 全景（上が東）、S T 1 全景（南から）
- 図版 31 遺構 S T 1 土器出土状況、S T 2 全景（上が東）

- 図版 32 遺構 S T 3 全景（東から）、S T 3 墓輪出土状況（東側部分）、（西側部分）
- 図版 33 遺構 S T 4 ~ 7 全景（上が南西）、S T 4 ~ 5 全景（南から）
- 図版 34 遺構 S T 4 全景（北東から）、S T 4 土器出土状況
- 図版 35 遺構 S T 5 全景（北から）、S T 6 ~ 7 全景（南から）
- 図版 36 遺構 S T 6 全景（南東から）、S T 6 土器出土状況
- 図版 37 遺構 S T 7 全景（南西から）、S T 8 全景（北から）
- 図版 38 遺構 S T 8 土器出土状況、S T 8 鉄器出土状況
- 図版 39 遺構 S R 1 全景（南西から）、S R 1 土器出土状況
- 図版 40 遺構 S R 2 全景（南西から）、S R 2 土器出土状況
- 図版 41 遺構 S R 3 全景（南から）、S R 3 上器出土状況
- 図版 42 遺構 S R 4 全景（東から）、S R 4 土器出土状況
- 図版 43 遺構 S R 5 全景（北東から）、S R 5 鉄劍出土状況
- 図版 44 遺構 S S 1 全景（南から）、S S 2 全景（北東から）
- 図版 45 遺構 S S 3 全景（北から）、S S 4 全景（南から）
- 図版 46 遺構 S Y 3 全景（南東から）、S Y 3 土器出土状況
- 図版 47 遺構 S Y 1 全景（南東から）、S X 1 全景（北東から）
- 図版 48 遺物 S K70 (1 ~ 2)、S K72 (4 ~ 8 • 10 ~ 12 • 14 • 16 ~ 18)、S K73 (19)
- 図版 49 遺物 S I 1 (20 ~ 24 • 27 • 28)
- 図版 50 遺物 S I 1 (25 • 26)、S I 2 (29 • 30)、S D 3 (31)、N V 3 (34 ~ 38)
- 図版 51 遺物 N V 3 (40 ~ 48)
- 図版 52 遺物 S I 4 (49)、S I 5 (50 ~ 54)、S I 6 (56 ~ 58)、
S I 10 (73 • 75 • 76)、S I 11 (77)
- 図版 53 遺物 S I 7 (59 ~ 62)、S I 8 (63 ~ 65)
- 図版 54 遺物 S I 9 (66 ~ 72)
- 図版 55 遺物 S I 13 (82 ~ 87 • 89 • 91 ~ 94)
- 図版 56 遺物 S I 13 (96 ~ 105)、S I 14 (106 ~ 108)
- 図版 57 遺物 S I 15 (110 • 112 ~ 114 • 120 ~ 123 • 132 • 134)
- 図版 58 遺物 S I 15 (118 • 119 • 124 • 126 ~ 131 • 133 • 135 ~ 142)
- 図版 59 遺物 S I 16 (143)、S I 17 (148 • 153 • 155 ~ 157 • 159 ~ 161)、S I 18 (163)
- 図版 60 遺物 S I 17 (144 • 145 • 147 • 149 ~ 151 • 154)
- 図版 61 遺物 S I 12 (78 ~ 81)、S I 19 (164 ~ 167 • 170 ~ 172)
- 図版 62 遺物 S I 19 (173 ~ 180)
- 図版 63 遺物 S D35 (182 • 186)、S D41 (189)、S K 1 (190 • 191)、S K36 (192)、
S K58 (193)、S K71 (199 • 200)

- 図版 64 遺物 S K63 (194~197)、S K101 (201・202)、S K108 (204)、S K111 (207)、
S K112 (208・209)
- 図版 65 遺物 S K113 (210~212・221~224・238・239)
- 図版 66 遺物 S K113 (240~243)、S K134 (410~413)
- 図版 67 遺物 S K114 (247・248・250・256・259・261・262・266・268・270・273・274)
- 図版 68 遺物 S K114 (276・278・281・282・288~292・294・295)
- 図版 69 遺物 S K114 (297・298・300~302・304)
- 図版 70 遺物 S K114 (277・306・307・310・311・313・317・336・340)
- 図版 71 遺物 S K114 (308・312・314~316・328・332・339・342)
- 図版 72 遺物 S K115 (343~348・350~353)
- 図版 73 遺物 S K115 (354~359・366~368・392)
- 図版 74 遺物 S K115 (371・372・376・377・379・380・382・383・386・387・390)
- 図版 75 遺物 S K119 (387)、S K120 (399)、S K122 (403)、S K123 (404)、
S K183 (423)、S K141 (426)、S K143 (427・430・431)
- 図版 76 遺物 S K121 (400・402)、S K136 (415)、S K137 (416~422)、S K140 (425)
- 図版 77 遺物 S T 1 (432~434・436~439・442・445・448)
- 図版 78 遺物 S T 1 (444)、S T 2 (449)、S T 4 (476~481)
- 図版 79 遺物 S T 3 (450~452・455・462)、S T 7 (488)
- 図版 80 遺物 S T 3 (459・461・465・466)
- 図版 81 遺物 S T 3 (453・456~458・469~474)
- 図版 82 遺物 S T 5 (482)、S T 6 (483~487)、S Y 3 (586)
- 図版 83 遺物 S T 8 (491・496・497・500)
- 図版 84 遺物 S T 8 (498・499・503)
- 図版 85 遺物 S T 8 (494・495・505~507)
- 図版 86 遺物 S T 8 (508~510・512・514・517・519・524・525・527・538・544・558・
559・567~570)
- 図版 87 遺物 S R 1 (571・572)、S R 2 (573~578)
- 図版 88 遺物 S R 3 (579)、S R 4 (580・581)、S R 5 (582)、S S 2 (583・584)、
S X 1 (589)
- 図版 89 遺物 包含層旧石器 (590~601)
- 図版 90 遺物 包含層繩文土器 (604・606・607・609・611・612・614~616・619・621・
624~627・629・631~633・637・639・642)
- 図版 91 遺物 包含層繩文土器 (644)、包含層石器 (645~653)、包含層石器 (645~653)、
包含層弥生土器 (654~656)

- 図版 92 遺物 包含層須恵器 (657・658・661～667・672・673・675)
図版 93 遺物 包含層須恵器 (671・674・676～679・689・690・693～695)
図版 94 遺物 包含層須恵器 (696・697・704・705・709・722・725・727)
図版 95 遺物 包含層須恵器 (692・701・706・707・711・712・714・715・717・718・
721・724)
図版 96 遺物 包含層土師器 (729～732・734・735・757)
図版 97 遺物 包含層土師器 (758・759・762・767・769)、
包含層韓式系上器 (774・775)、包含層製塙土器 (787)
図版 98 遺物 包含層土師器 (737・739～743・745・750・752・755・761・768・770・771)
図版 99 遺物 包含層韓式系土器 (776～781・783・784)、
包含層埴輪 (806・807・810)
図版 100 遺物 包含層埴輪 (798・802・805・809)
図版 101 遺物 包含層埴輪 (791～794・796・797・799・803・804)

付図目次

- 付図 1 三日市遺跡遺構全体図 5 地区
付図 2 三日市遺跡遺構全体図 2 地 (1)
付図 3 三日市遺跡遺構全体図 2 地区 (2)
付図 4 三日市遺跡遺構全体図 2 地区 (3)
付図 5 三日市遺跡遺構全体図 1 地区
付図 6 三日市遺跡遺構全体図 4 地区 (1)・1-2 地区
付図 7 三日市遺跡遺構全体図 4 地区 (2)
付図 8 三日市遺跡遺構全体図 6 地区
付図 9 三日市遺跡遺構全体図 3 地区・進入路

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

1. 遺跡の発見

本遺跡の発見は、昭和44年秋から同45年春にかけて実施された大師山遺跡及び大師山古墳の調査を契機に、同46年に実施した分布調査が端緒となった。大師山遺跡及び大師山古墳調査終了後、河内長野市教育委員会は関西大学考古学研究室の協力を得て、片添町の丘陵を分布調査した結果、土師質および瓦質の土器片が相当数散布しているのが確認された。このことから、この丘陵一帯が埋蔵文化財包蔵地である可能性の高い地域であると注目されるに至った。

2. 調査の原因

河内長野市は、近年大阪市のベッドタウンとして急速に発展してきた。このような状況下の中では市当局は、南海電鉄高野線三日市町前の整備計画を策定した。当該地域を区画整理し、駅前開発の中心地域とする方針に基づいて、その事業の実施を住宅都市整備公団へ依頼した。依頼を受けた公団は、その後必要な用地の確保並びに地権者への説明や協力要請を行い、昭和59年度事業認可手続きのめどが立ったことから、市教育委員会を通じ府教育委員会に埋蔵文化財の取扱について協議がなされた。

これを受けて府教育委員会は、前述の分布調査をもとに当該地は埋蔵文化財包蔵地の可能性が極めて高い地域であり、試掘調査を実施しその結果に基づいて再度協議すこと、合わせて調査を財團法人大阪文化財センターに委託される旨回答した。

3. 試掘調査

回答を受けた公団は、数回にわたり、調査の方法や実施時期、経費について同センターと協議し、昭和58年12月5日付けで委託契約を締結した。現地における調査は昭和58年12月6日から昭和59年3月8日まで実施された。

調査は事業予定区域の200,000m²に対し、幅2mの試掘溝を総延長1,000mにわたって設定し実施した。その結果ほぼ全域から縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認され、大規模な遺跡であることが予想された。

4. 本調査について

試掘調査の結果をもとに、府教育委員会・市教育委員会・公団の三者で、取扱についてその協議がなされ、記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。その協議のもとに、調査の実施機関・実施工程・調査経費等について、昭和59年9月10日づけで、三者において協定書が締結された。

これをもとに、調査の実施機関として、府教育委員会・市教育委員会・市・学識経験者からな

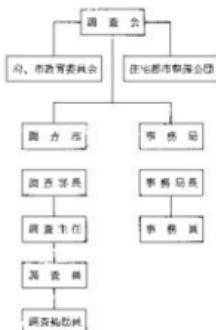
る三日市遺跡調査会が昭和59年11月1日に設立された。そして調査会と公団とにおいて昭和59年度の発掘調査業務の委託契約が締結された。ただちに昭和60年1月7日より現地調査を実施した。これ以後毎年度毎に委託契約を締結し、更に昭和60年8月15日には、公団と調査会とで、全調査費用の概算確定のため全体協定書を締結した。

現地調査は、昭和62年4月をもって一部を残し終了した。以後、昭和63年度事業終了を目指し内業整理と報告書作成業務を行っていく。

5. 調査組織

当該遺跡の調査は、大阪府教育委員会と河内長野市教育委員会によって設立された三日市遺跡調査会が行っている。この組織は以下のとおりである。

理事会 事務局 調査部によって構成されている。理事は学術経験者を含め関係行政機関職員に依って構成されている。



理事長	河内長野市教育委員会教育長	平井 義信（昭和59年～）
理事	大阪府教育委員会文化財保護課長	吉房 康幸（昭和59年～）
理事	関西大学教授	綱千 善教（昭和59年～）
理事	大谷女子大学教授	中村 浩（昭和59年～）
理事	河内長野市市長公室長	野手 正夫（昭和59年～昭和61年）
理事	河内長野市企画調整部長	芝上 利治（昭和61年～）
理事	河内長野市総務部長	西久保弘成（昭和59年～）
理事	河内長野市都市整備部長	向井 亨（昭和59年～）
理事	河内長野市教育委員会管理部長	水口 知治（昭和59年～昭和60年）
理事	河内長野市教育委員会指導部長	石橋 勝（昭和59年～昭和60年）
理事	河内長野市教育委員会教育次長	峰清 勝（昭和60年～）
理事	河内長野市教育委員会理事	堀内 邦夫（昭和60年～）
理事	河内長野市教育委員会社会教育課長	大谷 隆彦（昭和59年～）
事務局長		上野 英一（昭和59・60年）
		峰 正明（昭和61年）
		釜ヶ谷正己（昭和62年）
調査部長	大阪府教育委員会文化財保護課主幹	井藤 徹
調査主任	河内長野市教育委員会社会教育課	尾谷 雅彦
調査員	亀山隆（現亀山市教育委員会） 高 正龍 四宮加容子 上師春樹（現大阪市立田辺中学校教諭） 松本高志	

調査補助員 谷健二 谷口和美 久保八重子 鈴木雅子 佐々木恵里 田路幸子 小泉雅代
明地奈緒美 岡山かおり 金田佳子 古池陽子 中村清美 阪本桂子 楠本真紀
子 中西和子 平井令子 芝明美 松本准一 平岡祐子 福武世志子 橋本ひと
み 中西信子 吉田あけみ 奥田紀子 越膳静都子 東野麻衣子 半田香織 西
本由美 北野哲也 松田友克 田中良明 柳山典子 岩山まこ 西浦賢志 橋本
美和子 坂村秀彦 東尾明美 安木真治 宮本育美 熊野祐美 向博子 福本泉
八木理子 清田実保 平井香 加嶋慶子 川原有沙 大北素代 森本良 山崎
正芳 宝田忍

第2節 調査の方法

1. 調査地の策定

当該事業地はその面積が200,000m²と広大であり、試掘の結果、遺跡はこの事業地の70%の区域に広がると予想された。

このため、全域の調査については、その費用・期間・人的体制等の現時点での条件下では不可能に近い状況であった。このため調査対象面積の縮小を余儀なくされ、事業計画に基づき、工事における切り土部分及び道路2m以下の盛土部分について調査対象とした。残りの部分については盛土によって保存されるものとして調査対象から除外した。この結果、調査面積は約60,000m²と成了。この調査地域の策定方法については、記録保存における種々の問題をはらんでおり、批判の対象となることは調査者の認めるところである。

2. 調査地の区割り設定

調査の実施においては、便宜上N o 1～6までの6地区の調査区を設定した。しかし、これはあくまで調査年度、人員の配置や掘削作業の発注の為であった。

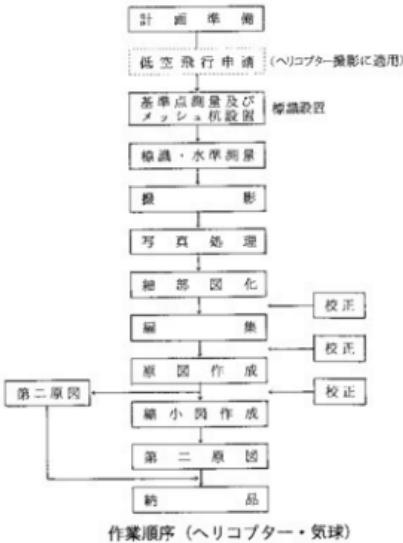
実際の調査における測図・遺物の取り上げや本書の記載については国土座標を基準（遺跡の原点はX=-174.0km、Y=-39.0km）とした方角地区割り図をもとにした。一部便宜上N o 1～6までの地区名を用いている。この区割りは大中小の3段階に設けた。大地区はI～IVに区画し、その中に100方眼のA～Pの中地区を配した。中地区は更に南北を1～20の数値で、東西をa～tで表し400等分した。つまり、小地区は5m方眼とし、遺物の取り上げ等を行った。

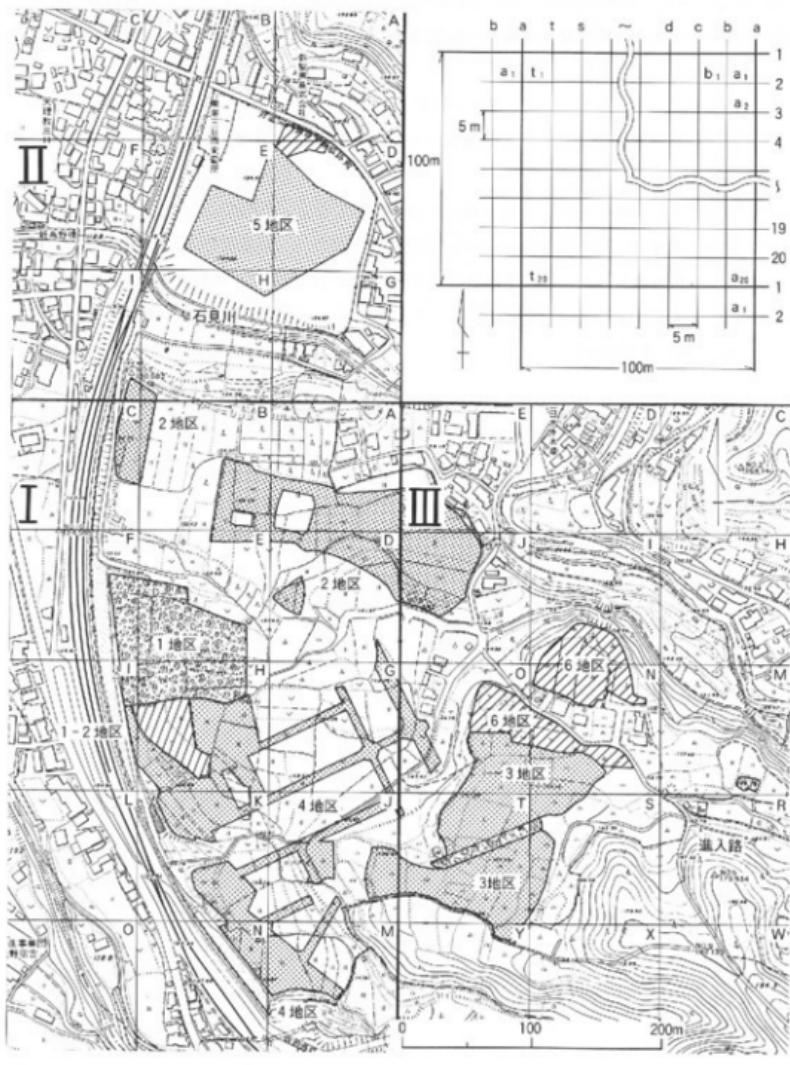
3. 航空測量について

調査における測図は、1/20を基本として、方法としては航空測量と遺り方他測量をもちいた。航空測量は全域を、遺り方測量は詳細図を作成するときに用いた。航空測量は当初ヘリコプターを用いたが、騒音等の問題が一部生じたところがあり、場所によつてはバルーンを使用した。ヘリコプターおよびバルーンによる測量仕様は以下のとおりである。

（1）基準点について

基準点測量の座標系は大阪府適用の第IV系（原点は緯度36° 0'、経度136° 0'）を使用した。（昭和43年10月11日建設省告示第3059・昭和47年5月15日建設省告示第





第1図 調査区配置図及び調査区画設定図

952号改正) 実際の基準点測量には住宅都市整備公団の成果を使用し、メッシュ杭設置の基準とした。メッシュ杭上には標識を設置し、細部図化の標定としてもらいた。標高の基準は東京湾平均海面とした。(T、P)

(2) ヘリコプター及びバルーン撮影の比較

[ヘリコプター撮影の長所] 撮影画面が大きい(23×23)。作業時間が短い。広い範囲に適用できる。

[ヘリコプター撮影の短所] 低空飛行申請が必要である(即時性にかける)。騒音・風圧がある(民家の密集地には不向き)。多繁期に機体確保が難しい(農薬散布等)。高価である。

[バルーン撮影の長所] 即作業に対応できる。滞留時間が長い。比較的廉価である。

[バルーン撮影の長所] 撮影画面が小さい(6×6)。作業時間が長い(範囲が広いと時間がかかる)。風に非常に弱い。

(尾谷)

第2章 位置と環境

第1節 位置と自然的環境

1. 位置

当該遺跡は、大阪府の南東に位置する河内長野市三日市町及び片添町に広がる。河内長野市域は旧河内国錦部郡に該当する。遺跡は約20haにわたって分布するものである。標高は130m～160m。遺跡の西側には南海電鉄高野線及び国道310号線・旧高野街道が走り、これより天見谷を北行し紀見峠を越えて和歌山県橋本市へと至る。また、石見川谷をさかのぼれば奈良県五條市へと至る。更に西へ向けば和泉地域へ至る街道が走る。つまり、この遺跡の立地するところは、旧大和・和泉・紀伊の国へ至る街道の要所に位置する。

2. 自然的環境

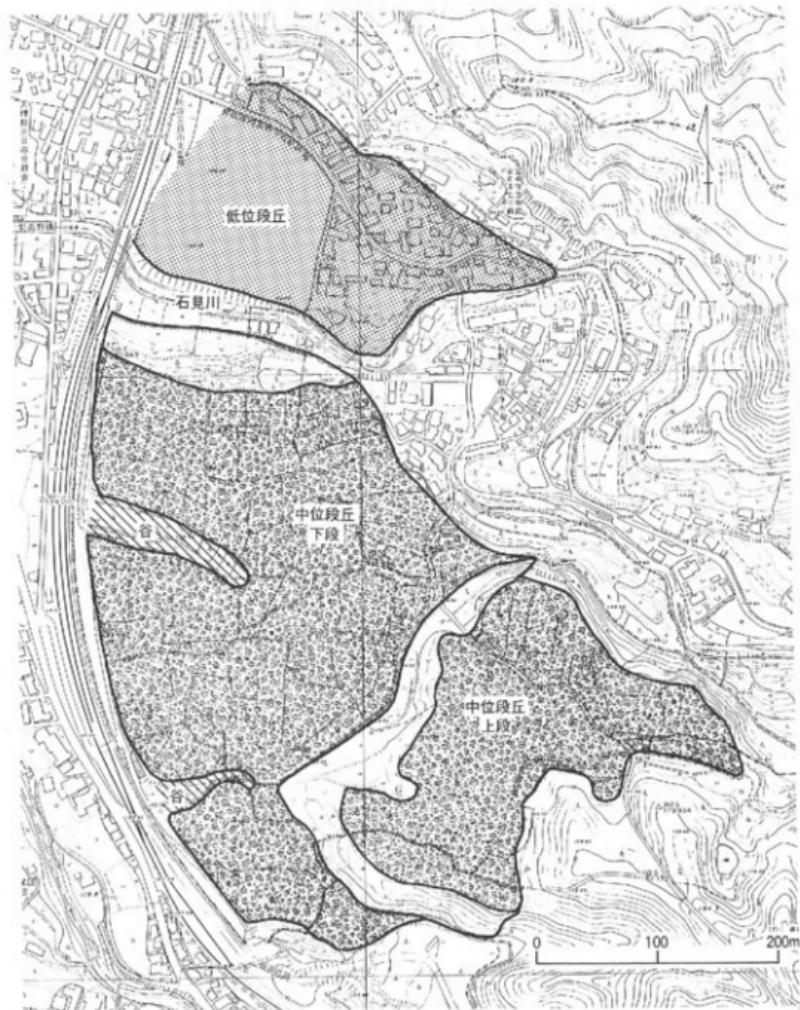
河内長野市は金剛・葛城山から派生する山地性丘陵が大部分を占めている。そして、この山系に源を発する石見川・天見川・石川・加賀田川・天野川に因って作られた狹小な谷と、天野川を除く他の小河川が合流した大和川の支流石川によって作られた河岸段丘により形成されている。

遺跡は、北西から西に流れる石見川の北側谷と南側丘陵つまり北流してきた天見川の東側丘陵に位置するところである。谷側は中位段丘・丘陵は高位段丘となる。

遺跡の立地する地形・地質を微視的に見ると、石見川の北岸標高120 mが低位段丘である。そして、天見川の東側は、標高135～145 mの下段と標高155～160 mの上段の2面から形成されている中位段丘である。この中位段丘の下段には、石見川から南に100 mごとに東西に入り込む2条の小谷によって画されている。いずれの谷も調査の結果、上段と下段の段丘崖の裾まで入り込んでいるのが確認された。



第2図 遺跡位置図



第3図 調査地区地形区分図



第4図 河内長野遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塙谷遺跡	弥生時代中期～中世	43	膳所藩陣屋跡	近世
2	千代田神社遺跡	中世	44	本多藩陣屋跡	近世
3	菱子尻遺跡	弥生時代～中世	45	長野神社遺跡	中世
4	小山田2号古墓	奈良時代	46	上原北遺跡	
5	小山田1号古墓	奈良時代	47	鳥帽子形八幡神社本殿	中世
6	寺ヶ池遺跡	旧石器時代～彌文時代		鳥帽子形城跡	中世
7	佐吉神社遺跡	中世		鳥帽子形古墳	古墳時代
8	伝「仲良廻」		48	末広窯跡	中世
9	長池窯跡群	中世	49	河合寺城跡	中世
10	青ヶ原神社遺跡	中世	50	河合寺境内	中世
11	駒六古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	51	福田家住宅	近世
12	高向遺跡	古墳時代後期～中世	52	大師山遺跡	弥生時代中期
13	忽持守跡	中世		大師山古墳	古墳時代前期
14	上原町墓地		53	大師山南古墳	古墳時代
15	高向南遺跡		54	魏心寺	平安時代～
16	高向神社遺跡		55	経塚	
17	宮山古墳	古墳時代後期	56	三日市遺跡・石仏遺跡	旧石器時代～近世
18	高木遺跡	旧石器時代～彌文時代	57	加賀田神社遺跡	
19	李山城跡	中世	58	庚甲	
20	日ノ谷城跡	中世	59	延命寺	
21,22	仁王山城跡	中世	60	川上神社遺跡	中世
23	摩尼院書院		61	石仏城	中世
24	金剛寺		62	左近城跡	中世
25	日野觀音寺遺跡	中世	63	清水遺跡	中世
26	稻荷山城跡	中世	64	薬師寺石造五輪	
27	旗城跡	中世	65	千早口覩南遺跡	中世
28	國見城跡(小庵城跡)	中世	66	岩願墓地	
29	南尻跡称堂跡		67	地藏寺	
30	梅園城跡	中世	68	伝人江町觀應跡	
31	清水阿弥陀堂跡	近世	69	旗尾城跡	中世
32	澁畠埋塗	近世	70	葛城第18岩城経塚	
33	堂村地藏堂跡	近世	71	天免原北方遺跡	中世
34	中村阿弥陀堂跡	近世	72	萬城第16経塚	
35	宮ノ下内墓	近世	73	蟹井郡北遺跡	中世
36	天神社遺跡	中世	74	蟹井郡神社遺跡	中世
37	西の村阿弥陀堂跡	近世	75	蟹井郡南遺跡	中世
38	東の村觀音堂跡	近世	76	流谷八幡神社遺跡	中世
39	光籠寺遺跡	近世	77	岩湧寺多宝塔	
40	五木古墳	古墳時代後期	78	萬城第15経塚	
41	古野古墳	古墳時代後期	79	岩湧山	
42	古野町遺跡	中世	80	尾崎遺跡	

第1表 河内長野市遺跡地名表

第2節 歴史的環境

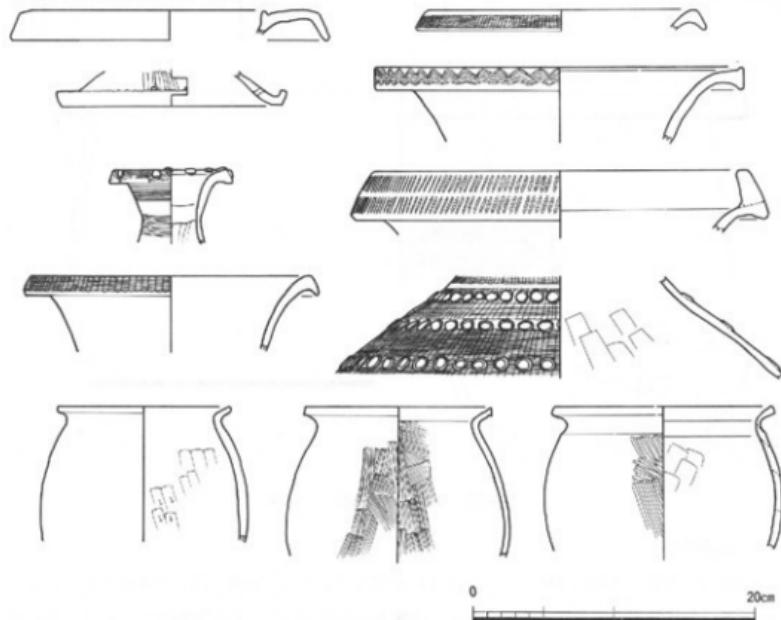
当市内には数多くの文化財が残されている。そして、その大半は建造物などの有形文化財が占めている。しかし、最近の開発行為により埋蔵文化財の存在も注目されるようになった。

1. 繩文時代

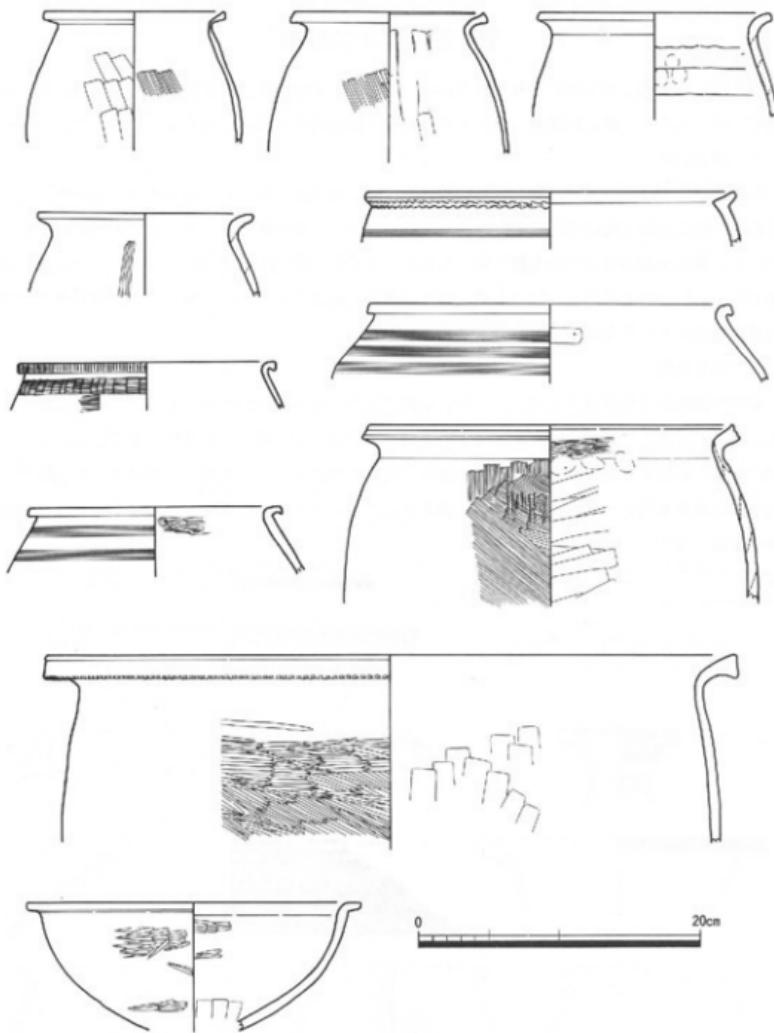
旧石器時代の確実な遺跡は知られていないが、寺ヶ池遺跡（6）からは有舌ボウントが出土しており、他にも縄文時代の石器も採取されている。また、菱子尻遺跡（3）からも石匙が出土している。最近の調査では高向遺跡（12）からもこの時代の遺物が確認されている。このような結果から、石川の最上流部においても縄文時代の遺跡が確認され、石川流域には下流域の著名な国府遺跡を初めとして全域に遺跡が分布することが判明した。

2. 弓生時代

前期の遺跡はまだ確認されていないが、中期になると塙谷遺跡が出現する。この遺跡は昭和46年に調査され畿内第II様式から第IV様式の土器（第5図、第6図）と石器類が出土している。後期になると石川を望む丘陵上に、大師山遺跡（52）が現れる。この遺跡は昭和45年に住宅開発において市教育委員会と関西大学によって調査された。その結果、住居跡と焼土壙が発見され、高地性集落と考えられている。



第5図 塙谷遺跡実測図（1）



第6図 塩谷遺跡実測図（2）

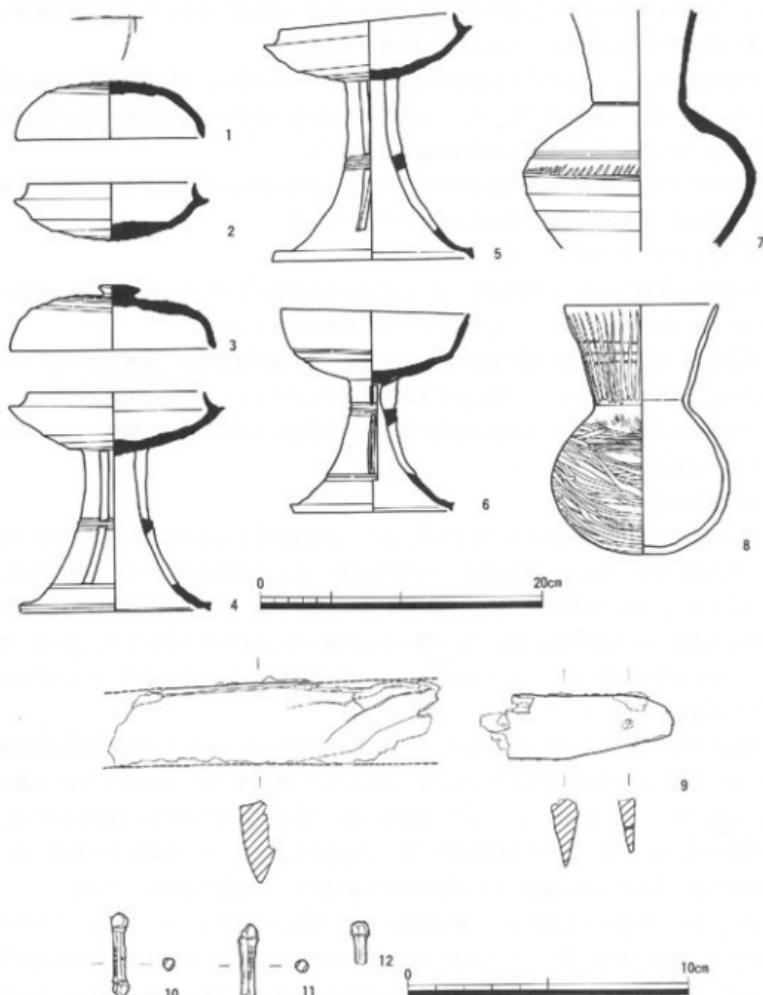
3. 古墳時代

この時代に入ると大師山遺跡と同じ丘陵上に前期古墳の大師山古墳（52）が築造されている。この古墳は昭和16年の発見時の調査で多くの車輪石や鋸形石などの石製腕輪類や内行花文鏡が粘

土郭から棺材とともに発見された。また、当初古墳と考えられていたが戦後の調査で前方後円墳であることが判明した。

中期の古墳は三日市遺跡から検出された以外確認されていない。

後期になると、市内においても若干の古墳が確認されている。まず、石川の本流域を見ると、北部では左岸の向野地区に五の木古墳(40)が位置していた。この古墳はすでに工場造成で削平



第7図 五の記古墳遺物実測図

され消滅したが、横穴式石室を有していたもので破壊される直前に奥壁部から多くの須恵器（第8図）と土師器が出土している。また、この周辺部には鉄道建設によって破壊されたと伝えられる双子塚古墳・法師塚古墳などが存在していたようである。石川の左岸段丘上の上原地区には横穴式石室を有する塚穴古墳（11）がある。この古墳は、江戸時代に一度破壊を受けた後再構築されたもので、現状の石室の石材は基の石材を割って再使用している。塚穴古墳の後背の丘陵裾部には、伝仲哀天皇陵（8）と伝承されている古墳状の高まりがある。また、右岸の丘陵の裾部にも横穴式石室を有すると言われる宮山古墳が位置している。

天見川流域を見ると、石川との合流付近の左岸の鳥帽子形の丘陵上には円墳の横穴式石室の鳥帽子形古墳（47）が位置している。更に、右岸の大師山古墳の位置する丘陵の裾部には大師山南古墳（53）が存在する。いずれも未調査で詳細は判明しない。

古墳時代の集落遺跡は三日市遺跡以外では、天見川の左岸の段丘上から工事中に須恵器と土師器が発見された尾崎遺跡（80）が確認されているだけである。

4. 奈良時代～平安時代

奈良時代の遺跡は少なく、高向遺跡（12）で若干の土器が出土している。その他には、小山田地区に2基の火葬墓（4・5）が存在していたことが確認されている。

平安時代においても前述の尾崎遺跡から黒色土器を伴った掘立柱建物が一棟検出されているだけである。他には、観心寺（54）境内から古瓦の出土が伝えられているだけである。

この時期の遺跡はまだまだ未確認の状態であるが、文献上から見れば今後の開発によって増加することは間違いない。

5. 鎌倉時代～室町時代

いわゆる中世の遺跡は市内各所で発見されている。集落遺跡としては東高野街道が市域に入るところの向野遺跡（39）、西高野街道沿いの古野町遺跡（42）、両高野街道が合流し天見川に沿って北行すると、南から尾崎遺跡（80）・石仏遺跡（56）・清水遺跡（63）・千早口南遺跡（66）・天見駅北方遺跡（71）・蟹井淵北遺跡（73）・蟹井淵南遺跡（75）が狭小な谷部に分布している。更に、石川の左岸の河岸の段丘上には高向遺跡（12）・高向南遺跡（15）・上原遺跡（11）など面的に広がる遺跡が分布している。

寺院跡では、石川の上流部の日野地区には日野観音寺遺跡（24）、石川本流域では長野神社遺跡（45）があり瓦や中世土器が出土している。これ以外には観心寺（54）や岩湧寺（77）の境内から同様に瓦や土器が出土している。また、金剛寺（23）では旧寺域内で中世墓が調査されている。

神社では、高向神社（16）や加賀田神社（57）では中世土器が出土し、鳥帽子形八幡宮（47）の修理では、文明12年銘の棟札と共に羽釜の中に土師皿が入った地鎮具が出土している。

また、本市の特徴として南北朝から戦国時代にかけて30余りの城砦が分布している。これらの城の中で、鳥帽子形城（47）と仁王山城（21・22）は河内国守護畠山氏の内紛による大永4年（1524）の畠山植長と畠山義英との合戦の文献に登場する。植長が鳥帽子形城に義英が仁王山城

に拠ってたたかっている。仁王山城は和泉山脈から派生する険しい山地の尾根上に位置する。烏帽子形城は高野街道と石川と天見川との合流部を望む丘陵上に位置する。烏帽子形城はこれ以後元和8年の廃城までこの地域一帯の要の城として一時期を除き存続していた。

前述の遺跡以外に生産遺跡としての炭焼き窯の検出がある。大師山遺跡や小山田地区長池窯跡群(9)、更には日野観音寺遺跡でも確認されている。時代を決めるべき出土遺物は少ないが平安時代から中世にかけての小型窯が多い。

7. 江戸時代

市内的一部は近江膳所藩の所領となり、膳所藩の河州出張所が置かれており、近世末の染付などの陶磁器類が出土している。また、江戸時代末から明治時代にかけて廃寺となった近世寺院の跡も、開発によって調査対象となってきている。

(尾谷)

〔参考文献〕

- 河内長野市教育委員会 1971 『大師山古墳・大師山遺跡発掘調査概要』
- 河内長野市教育委員会 『大師山古墳』
- 河内長野市教育委員会 1971. 9 河内長野市文化財調査概要『長池窯跡発掘調査概要—河内長野市小山田地区—』
- 大阪府教育委員会 1973. 3 大阪府文化財調査概要1972-11『菱子瓦遺跡発掘調査概要—河内長野市楠町東所在—』
- 金剛寺坊跡調査会 1975. 2 河内長野市文化財調査概要『天野山金剛寺 中世墓地発掘調査 河内長野市天野町所在』
- 河内長野市教育委員会 1976. 3 河内長野市文化財調査概要『棚原窯跡発掘調査概要—河内長野市上原町所在—』
- 関西大学 昭和52年3月 関西大学文学部考古学研究 第5冊『河内長野大師山一大師山古墳・大師山遺跡発掘調査報告—』
- 大阪府教育委員会 1982. 3 『石仏遺跡発掘調査概要—河内長野市石仏所在—』
- 大阪府教育委員会 1982. 8 『栗山遺跡—河内長野市清見台用地内—』
- 財團法人 大阪文化財センター 1984. 3 『三日市地区特定土地区画整理事業実施地区内 片添遺跡第1次発掘調査報告書』
- 三日市遺跡調査会 昭和60年3月 『三日市遺跡調査概要I』
- 財團法人 大阪文化財センター 1985. 4 『河内長野市上原地区 区画整理事業予定地内 分布調査報告書』
- 河内長野市教育委員会 1987. 4 河内長野市文化財調査報告書 第11輯『河内長野市埋蔵文化財調査報告書I』

- 三日市遺跡調査会 昭和61年3月 『三日市遺跡調査概要II』
- 河内長野市教育委員会 昭和61年3月 『上原遺跡試掘調査報告書』
- 河内長野市教育委員会 昭和61年 『三日市遺跡調査報告書（岩湧堂廻造成に伴う調査）』

第3章 遺跡の概要

第1節 概要

当遺跡からは、旧石器時代から江戸時代に至る遺構・遺物が検出された。遺構からみてみると大きく縄文時代（中期）、弥生時代（中期・後期）、古墳時代（前期・中期・後期）、鎌倉時代・室町時代、江戸時代の各時代に渡っている。

しかし、今回の報告が古墳時代まで一応区分しており、中世以降の記載は整理中でもあり次の報告に譲る。

1. 旧石器時代

遺物としてナイフ形石器などが出土しているが遺構は確認されなかった。

2. 縄文時代

早期から晩期までの土器は出土しているが、確実な遺構は5地区から中期の土壙が2基、後期の土壙が1基確認されている。

3. 弥生時代

前期ではなく、中期と後期の遺構が5地区から確認された。中期は円形竪穴住居が2棟、後期は溝が3条、土壙が1基検出されている。

4. 古墳時代

遺構は石見川北側の5地区と石見川南側の丘陵上1・2・4地区の西側端部に分布している。

5地区には、方形竪穴住居14棟（内須恵器を伴うもの8棟）と、掘立柱建物2棟、土壙6基が検出されている。石見川南側では、方形竪穴住居3棟、古墳8基（内円墳3基・方墳4基・不明1基）、土壙墓5基、竪穴式小石室墓4基、土壙40基、溝3条、そして、窯状遺構が3基検出された。これら以外に、自然地形である谷状地形が検出された。

以上のように、古墳時代の遺構が最も顕著である。次回に報告する中世においては、中世の遺構が最も顕著であることから、当遺跡の中心となる時代が古墳時代と中世であることは間違いない。

第2節 層序

1. 石見川北側

5地区に該当するところで、低位段丘に該当する。また、小谷出口の部分にあたり、小規模の沖積地の層序を示している。

層序の大部分は、近年まで操業していた工場の基礎に掘って虫食い状に擾乱を受けていた。

上層から次のようになる。①盛土（50cm）・②旧耕土I（6cm）・③旧耕土II（6cm）・④床土（4cm）・⑤灰色系の粘土（15~18cm）近世陶磁器まで含む遺物が含まれている。・⑥灰色

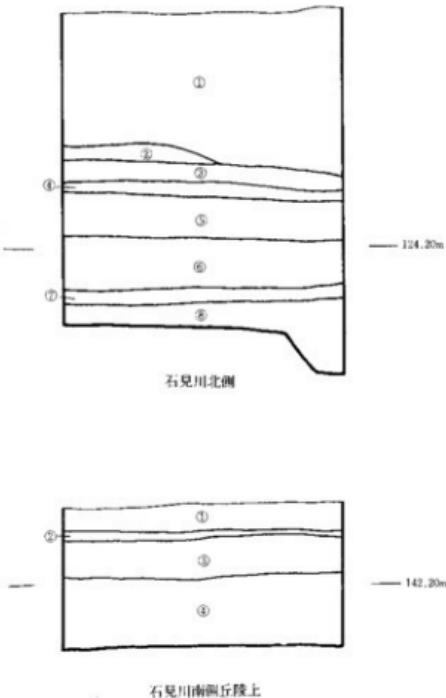
系のシルト（20cm）中世の遺物までが含まれている。・⑦褐色系のブロック土（5cm）整地層の可能性がある。・⑧褐色系粘土（15~20cm）古墳時代までの遺物が含まれている。遺構面は⑧層の上面の中世面と古墳時代・弥生時代・繩文時代が同一面で検出される地山面と2面検出された。地山までは平均G L-110cm。

地山は、いわゆる河川堆積層で、シルトをマックスとして疊や粘土混じりで構成され、下層には疊、シルト・砂の互層となっていた。

2. 石見川南側丘陵上

1~4・6地区に該当し、いずれも中位段丘である。この丘陵は、中世以降水田に順次開発されており、そのため削平も多く表土から遺構面となる地山面まで浅い。

表土となる耕土、床土、そして、各水田の傾斜側には水田造成時の



第8図 土層断面模式図 (1/20)

プロック上、包含層があり、場所により小さな谷などの微地形の変化から包含層が厚い場合があった。そして、包含層は旧石器から中世まで含む単一層であった。層序は4地区を例にとると次のようになる。①耕土（10cm）・②床土（5cm）・③黄色系のシルト（10cm）・④褐色系のシルト～粘土（20~30cm）中世までの遺物が多量に含まれている。

層厚は、地形により不均衡である。平均的には上面より下面の段丘の方が地山面が深くなっている。浅いところでG L-30cm深くてG L-80cm

地山は段丘疊層と呼ばれる玉石混じりのシルト～粘土と、その凹面に堆積する粘土混じりの疊層とに拠り構成されている。

(尾谷)

第4章 遺構

第1節 繩文時代の遺構

1. 概要

繩文時代の遺構としては、5地区II-E区から土壙3基（SK70・72・73）を検出した。SK70・73は縄文中期末SK72は縄文後期のものと思われる。SK73は土壙墓の可能性がある。

2. 土壙（SK）

(1) SK70 (第9・10図、図版48、付図1)

〔遺構〕 5地区II-E-1・13で検出した。平面はほぼ隅丸方形を呈するようだが、西側が調査区外に伸びるため不明である。

規模は長1.0m、検出幅0.5m、深さ0.2m

である。

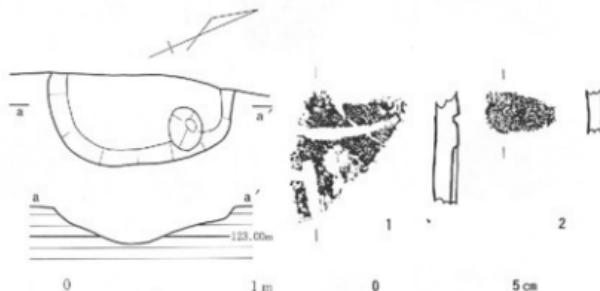
〔遺物〕 埋土から2点の縄文土器片（1・2）が出土した。これらは縄文中期末の北白川C式に属すると思われる。

(2) SK72 (第11・12図、図版48、付図1)

〔遺構〕 5地区II-E-j-15で検出した。平面は不整椭円形を呈する。

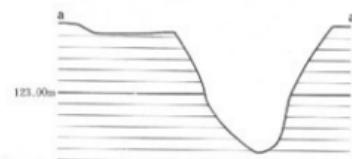
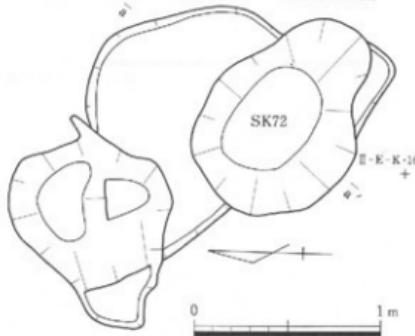
規模は径 1.15×0.85 m、深さ0.7mである。

〔遺物〕 埋土より16点の縄文土器片（3～17）が出土した。この内（5・10・11・16・17）は縄文後期の中津式に属するものと思われる。

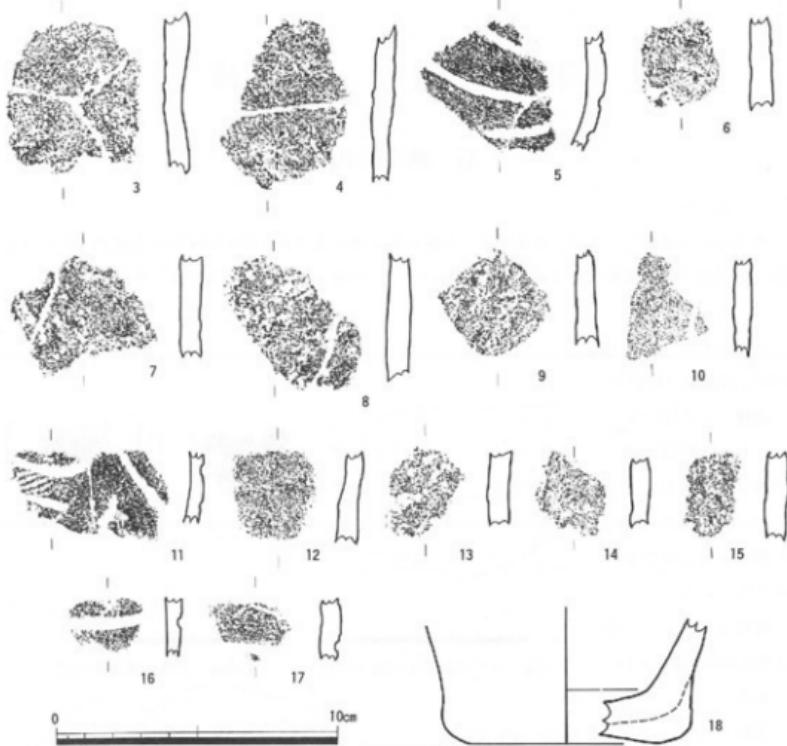


第9図 SK70遺構実測図 (1/30)

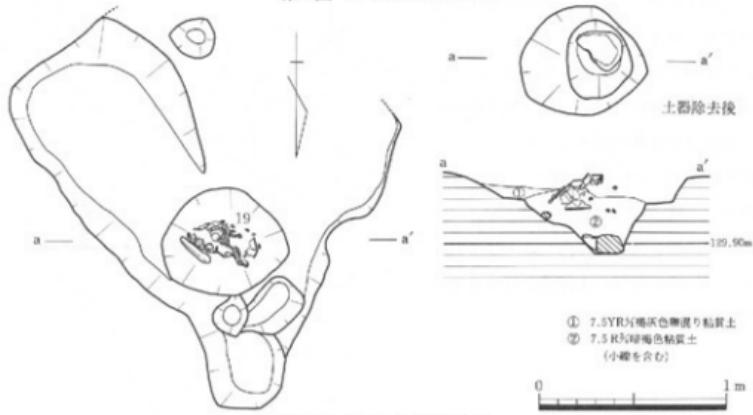
第10図 SK70遺物実測図



第11図 SK72遺構実測図 (1/30)



第12図 S K72遺物実測図

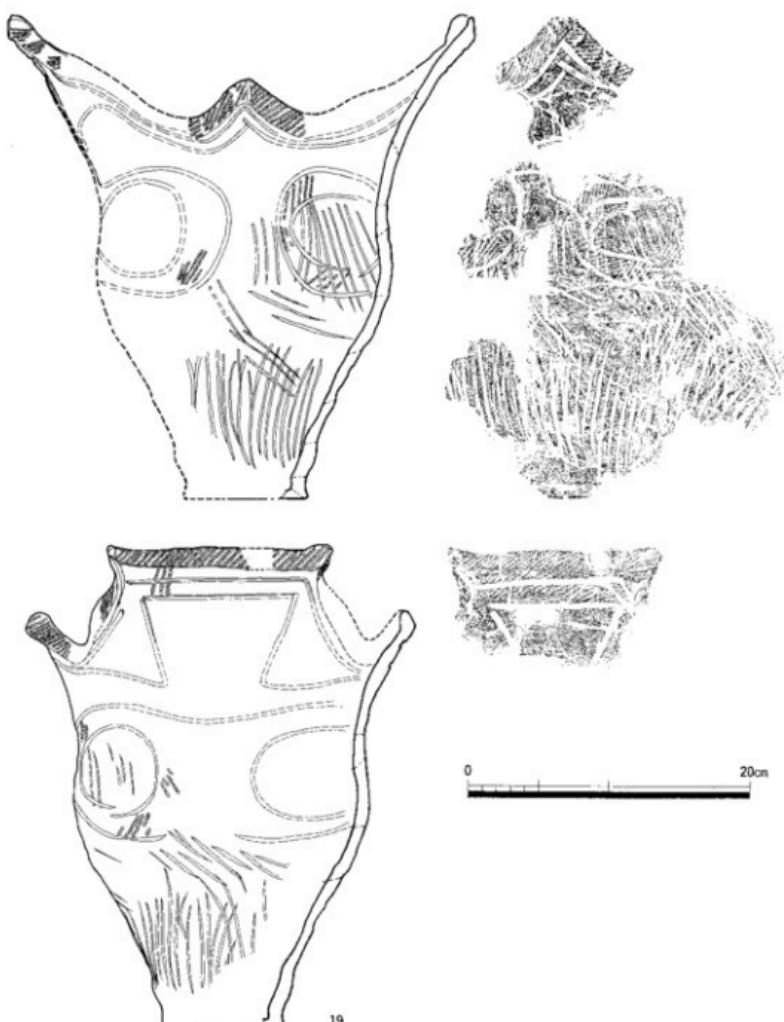


第13図 S K73遺構実測図

(3) SK73 (第13図、図版2・48、付図1)

〔遺構〕 5地区II-E-1・17-1・18で検出した。土壤南側が削平をうけている。平面は不整形である。土壤のやや北側よりにピット状に1段深く掘り込まれた部分がある。

規模は最大長2.1m、最深0.42mである。埋土は上層が褐灰色疊混り粘質土、下層が暗褐色粘



第14図 SK73遺物実測図

質土（小砾を含む）である。形態から見てSK73は土壙墓の可能性がある。

〔遺物〕 ピット状の掘り込みの底には20×23cmのフラットな石があり、その上方に縄文中期末の北白川C式に属すると思われる深鉢（19）が出土した。深鉢は一部欠失しているが、口縁部を西に向け底部を若干下に向いている。

第2節 弥生時代の遺構

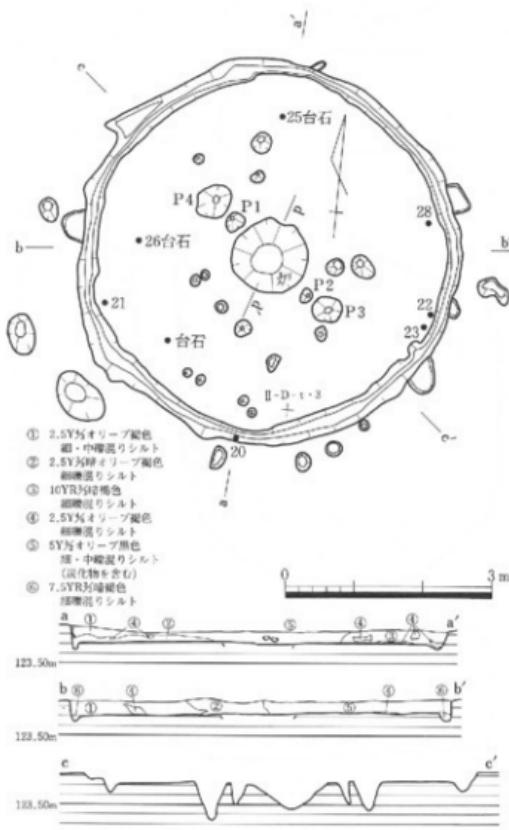
1. 概要

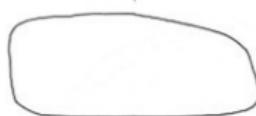
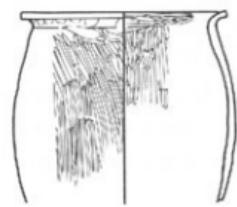
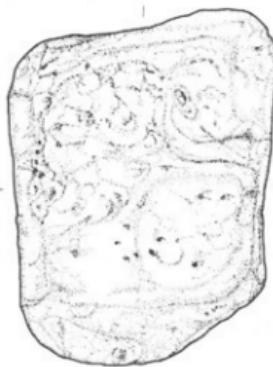
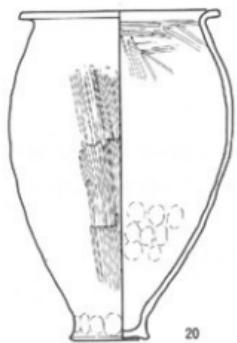
弥生時代の遺構としては、5地区北側から竪穴住居2棟(S I 1・2)、溝3条(S D29・30・32)を検出した。またSK100もSD32に切られていることから、少なくとも弥生時代以前の遺構であることは間違いないが、出土遺物がなく時期は決定できない。

そして、4地区I-G区の谷状地形(NV3)からも弥生土器が出土している。

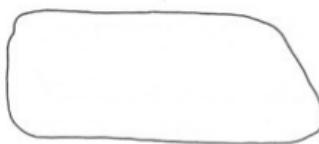
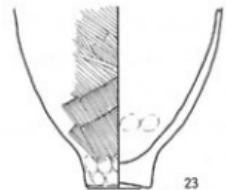
2. 竪穴住居(S I)

(1) S I 1 (第15~18図、図版4・49・50、付図1)





25



26



第17図 SII 遺物実測図 (1)

トと思われる。これらは平面が不整円形を呈し、径0.35～0.45m、深さは0.4～0.55mである。また、住居の外側にめぐるビットは恐らく副柱となるものと思われる。これらは平面が不整円形や不整形を呈するもので、

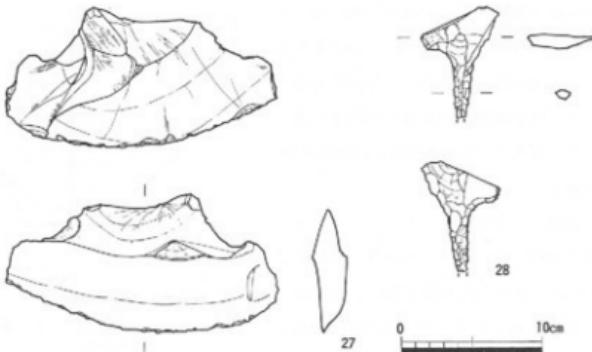
径0.14～0.4m、深さ0.11～0.18mである。

〔遺物〕 窓内Ⅲ～

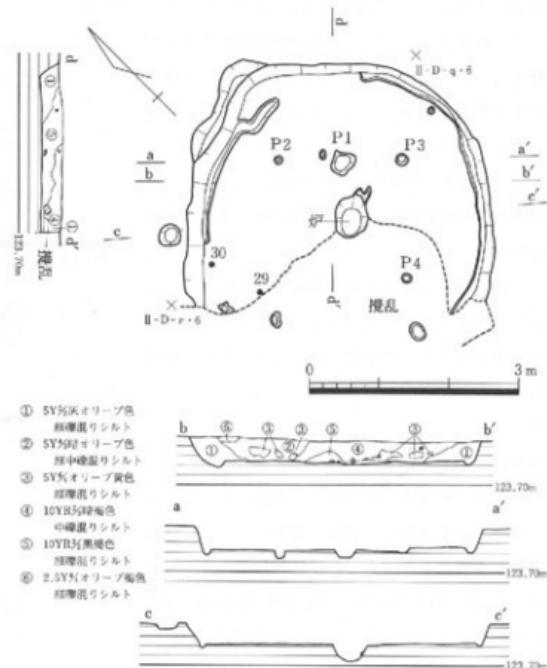
IV様式に属すると思われる甕5点(20～24)と台石3点(25・26)、石錐1点(27)、石刃1点(28)が出土した。甕は(21～23)が側溝のすぐ内側ほぼ床面から、(20)は側壁に貼りつくように出土し、

(24)は埋土からの出土である。台石(25・26)は作業台として使用されたと見られる平坦面をもつ石である。側溝から50～60cm内側の床面に点在していた。

他の1点は剝離が甚だしく固化しなかつたが、他の台石とは



第18図 S III 遺物実測図(2)



第19図 S I 2 遺構実測図(1/80)

ば同様な形態のもので法量は $20 \times 17 \times 9.6$ cmである。石錐は埋土からの出土である。石刃は他のサヌカイトの剝片3点とともに住居東側ほぼ床面から出土した。

(2) S I 2 (第19・20図、図版5・50、付図1)

〔遺構〕 5地区II-D-q・5~q・6で検出した。平面は円形を呈するものと思われるが、南西側は擾乱を受け約1/3が破壊されている。住居は直径4.4m、壁高0.3m。側壁に沿って幅0.1~0.3m、深さ0.04~0.07mの壁溝が周回する。

中央に径0.46×0.58m、深さ0.24mの炉を有する。

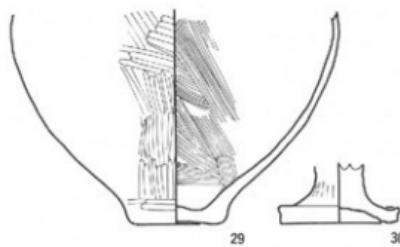
堅穴住居の主柱のピットに関しては、2つの考え方ができる。1つはS I 1と同じく2本主柱の住居を見てP 1を主柱とし、P 1に対応する柱穴は擾乱によって削平されたとする考え方である。もう1つは4本主柱の住居としてP 2~4を主柱と見る考え方である。この場合も擾乱によって柱穴1つが削平されたと見る。これらのピットは平面が不整円形を呈し、径0.13~0.4m、深さは0.06~0.12mである。

〔遺物〕 畿内III~IV様式に属する壺1点(29)と、高杯と思われる脚部1点(30)が出土した。住居西側ほぼ床面からの出土である。また埋土からはサヌカイト剝片が出土した。

3. 溝(S D)

(1) S D 29 (図版6、付図1)

〔遺構〕 5地区北東部、II-D-i・14~m・11で検出した。北西~南東方向にのびる。現状では2つに途切れているが、1連のものであったと思われる。全長は途切れている部分も含めて26.8m、幅0.2~0.45m、深さ0.05~0.15mである。溝底部のレベルは東で124.41m、西で124.33mとなっている。埋土は上層が黒褐色粘土、下層がにぶい黄色細礫混りシルトである。

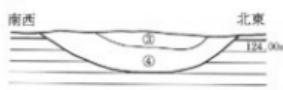


第20図 S I 2 遺物実測図

SD30

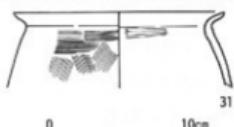


SD32



- ① 5YR4/7暗褐色粘土
- ② 2.5Y分に由い青色細礫混りシルト
- ③ 5Y分灰オリーブ色シルト
(中、大礫を多量に含む)
- ④ 7.5YR4/8褐色細礫混り粘土

第21図 S I 30・32断面実測図(1/20)



第22図 S D 30遺物実測図



第23図 S D 32遺物実測図

〔遺物〕 なし。

(2) SD30 (第21・22図、図版6・50、付図1)

〔遺構〕 5地区北東部、II-D-n・7~m・10で検出した。SD30はSD29の西端から約3m離れて始まり一部途切れて、逆L字状に屈曲し北西に伸びる。全長は途切れた部分も含めて17m、幅0.2~0.7m、深さ0.07~0.11mである。溝底部のレベルは東と西で124.25~124.27mとはほぼ同じである。埋土は上層が黒褐色粘土、下層がにぶい黄色細礫混りシルトである。SD29と近接し、埋土が同じであることから同一の溝の可能性がある。

〔遺物〕 埋土から

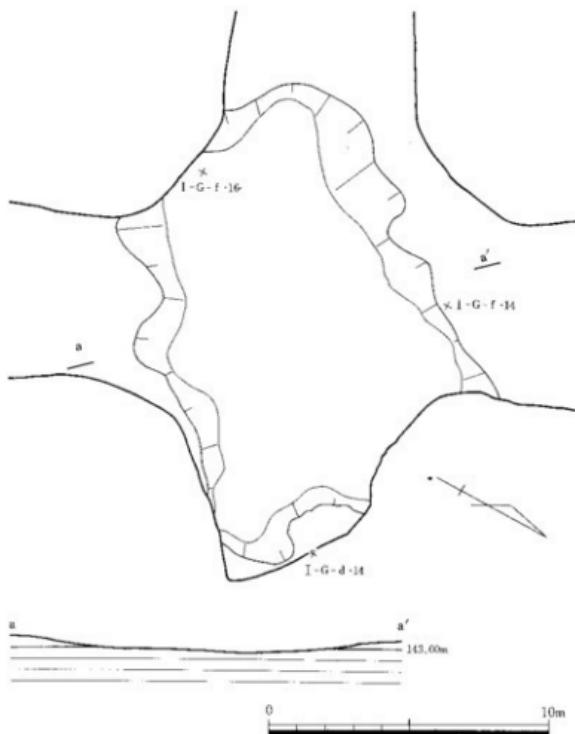
畿内III~IV様式に属

すると思われる甕

(31) などが出土し
た。

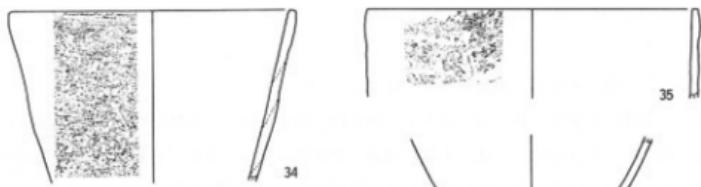
(3) SD32 (第21・
23図、付図1)

〔遺構〕 5地区北
西部II-D-t・8
~E-b・7で検出
した。SK100を切
る。西北西~東南東
方向に走り、西北西
は調査区外に伸びる。
検出長13m、幅0.4
~0.9m、深さ0.12
~0.14m。溝底部の
レベルは東と西では
ほぼ同レベルの123.85
m前後とはほぼ同じで
ある。埋土は上層が
灰オリーブ色シルト、
下層が中・大疊を多
量に含む灰褐色細礫混り粘土である。



第24図 NV 3 遺構実測図 (1/200)

〔遺物〕 埋土から畿内V様式に属すると思われる甕1点(32)、甕1点(33)、サヌカイト剝片
などが出土した。



0 20cm



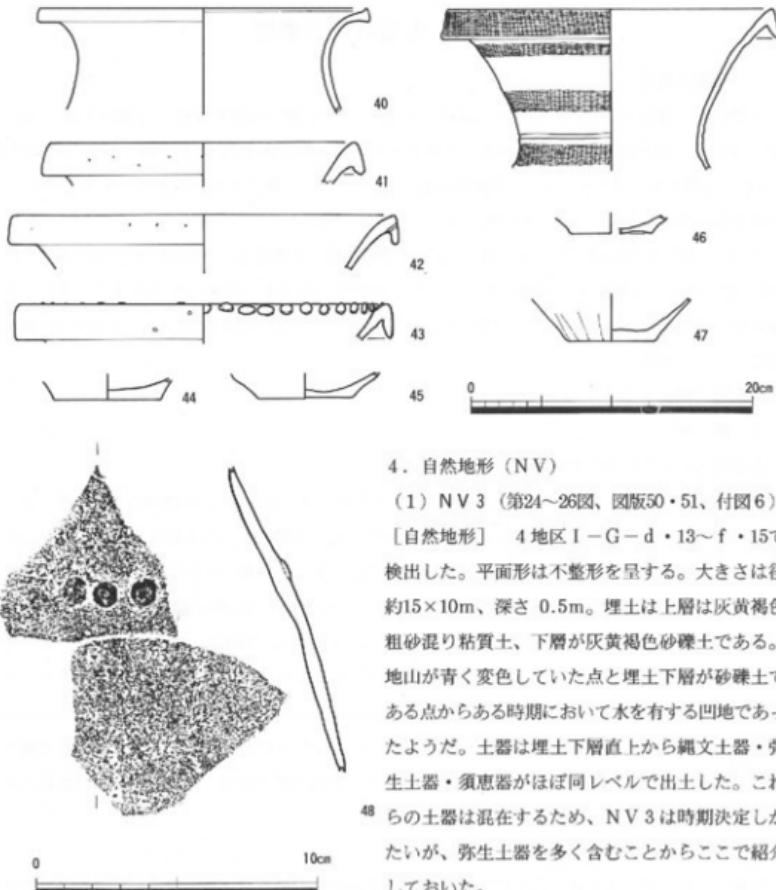
38



39

0 10cm

第25図 N V 3 遺物実測図 (1)



第26図 NV 3 遺物実測図（2）

【自然地形】4地区I-G-d・13-f・15で検出した。平面形は不整形を呈する。大きさは径約15×10m、深さ 0.5m。埋土は上層は灰黄褐色粗砂混り粘質土、下層が灰黄褐色砂礫土である。

4. 自然地形 (N V)

(1) NV 3 (第24~26図、図版50・51、付図6)

【自然地形】4地区I-G-d・13-f・15で検出した。平面形は不整形を呈する。大きさは径約15×10m、深さ 0.5m。埋土は上層は灰黄褐色粗砂混り粘質土、下層が灰黄褐色砂礫土である。地山が青く変色していた点と埋土下層が砂礫土である点からある時期において水を有する凹地であったようだ。土器は埋土下層直上から縄文土器・弥生土器・須恵器がほぼ同レベルで出土した。これらの土器は混在するため、NV 3は時期決定しがたいが、弥生土器を多く含むことからここで紹介しておいた。

【遺物】縄文土器は深鉢6点(34~39)などが、

弥生土器は壺8点(40~46・48)、器種不明底部1点(47)などが出土し、その他須恵器片も出土した。いずれも埋土下層直上からの出土で、これらは混在して出土した。

第3節 古墳時代の遺構

1. 遺構の概要

古墳時代の遺構としては、竪穴住居17棟（S I 3～19）、掘立柱建物2棟（S B11・12）、溝6条（S D35～38・40・41）、土壙46基（S K 1・36・58・63・69・71・74・101・105～115・118～144）古墳8基（S T 1～8）、土壙墓5基（S R 1～5）、竪穴系小石室4基（S S 1～4）、窓状遺構3基（S Y 1～3）、その他1基（S X 1）を検出した。

この中で竪穴住居14棟（S I 3～16）、掘立柱建物2棟、土壙6基（S K58・63・69・71・74・101）は、すべて5地区II-E区に集まつていて時期差はあるものの集落を形成する。また、古墳8基、土壙墓5基、竪穴系小石室墓（S S 1・3～4）などの埋葬施設は2・4地区の丘陵先端部に沿つて検出した。

2. 竪穴住居（S I）

（1）概要

古墳時代の竪穴住居は17棟検出した。

前期のものが6棟（S I 3～8）、中期のものが8棟（S I 9～16）、後期のものが3棟（S I 17～19）である。前・中期のものは5地区II-H区から、後期のものは4地区I-H・K区からまとまって検出された。前・中期の竪穴住居は河岸段丘上に、後期のものは丘陵上に立地している。出土遺物から見ると、前期のものは布留2式まで、中期のものは陶色編年I型式4～5段階、後期のものは同II型式4段階に該当するものである。5地区II-H区は工場跡地のため、前・中期の住居群は攪乱を受けているものが多く、また全く痕跡を留めないものも相当数存在するのではないかと思われる。

中期の竪穴住居からは韓式系土器を出土したもの（S I 9・11・12・13・15）や、窓状遺構を検出したもの（S I 9・15）もあり注目される。また後期の竪穴住居（S I 17）からは鉄鎌が出土した。

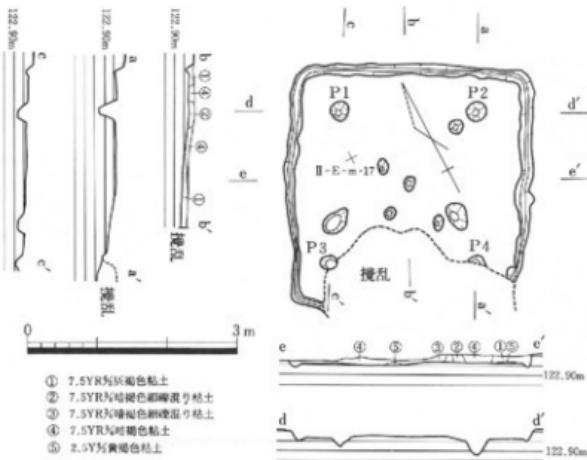
（2）S I 3（第27図、図版7・8、付図1）

〔遺構〕 II-E-1・16～m・17で検出した。平面形は方形を呈する。住居南東側は攪乱を受ける。一辺長3.5m、壁高0.1m。主軸方向はN-35-E。（住居の主軸方向に対しては、住居の正面が不明なものが多いので、単に北に対して東にどれだけ振っているかを表し、統一しておきたい）

側壁に沿つて幅0.1m、深さ0.02～0.06mの壁溝が周回する。

P 1～4は主柱のピットと思われ、その柱間は2.2×2.0mである。これらは平面が不整円形を呈し、径0.32～0.52m、深さは0.07～0.38mである。

〔遺物〕 墓土から土師器片が多数出土したが、図示できるものはなかった。



第27図 S I 3 遺物実測図 (1/80)

(3) S I 4 (第28・29図、図版7・8・9・52、付図1)

〔遺構〕 II-E-g・18~h・19で検出した。攪乱を受け住居北側しか残存していないが、平面は方形を呈するものと思われる。検出長5×2.5m、壁高0.2m。主軸方向はN-21-E。

側壁に沿って幅0.2m、深さ0.08~0.13mの壁溝が周回する。

P 1はその位置から見て主柱のピットの1つになると思われる。

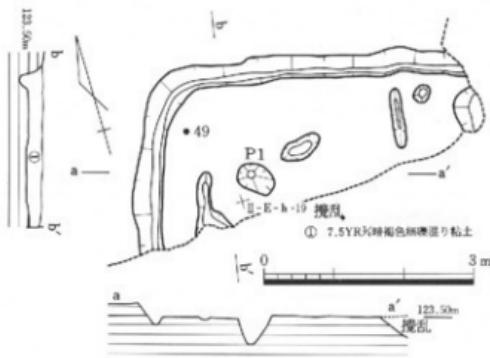
P 1は平面が梢円形を呈し、径0.38~0.5m、深さは0.42mである。

〔遺物〕 住居北西隅床面付近で土師器甕1点(49)などが出士した。

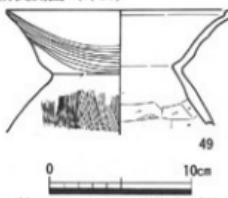
(4) S I 5 (第30・31図、図版7・10・52、付図1)

〔遺構〕 II-E-g・16~h・16で検出した。平面は方形を呈する。長4.8~4.5m、壁高0.36m。主軸方向はN-O-E。

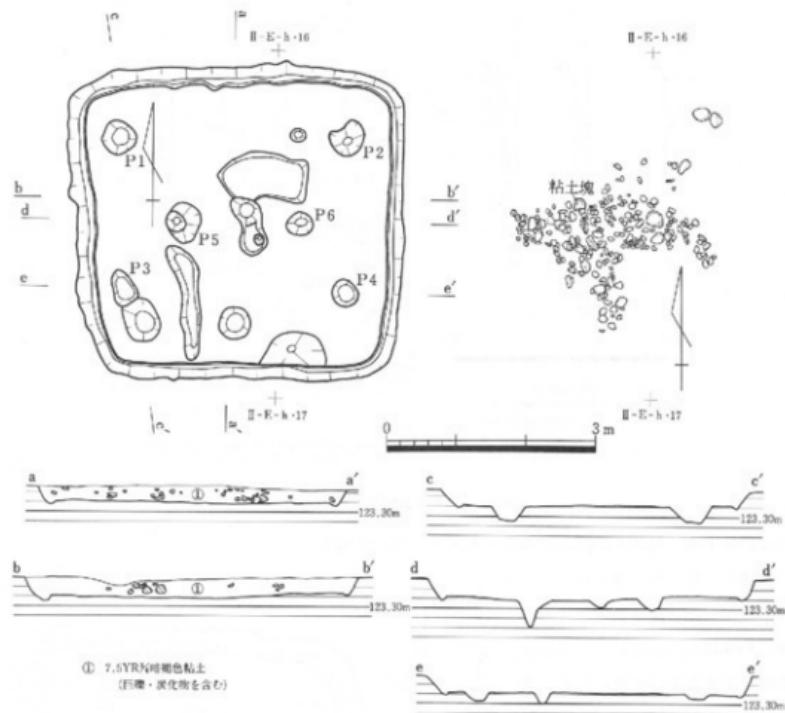
側壁に沿って幅0.1~0.22m、深さ0.03~0.08mの壁溝が集



第28図 S I 4 遺構実測図 (1/80)



第29図 S I 4 遺物実測図



第30図 S I 5 遺構実測図 (1/80)



第31図 S I 5 遺物実測図

会する。

P 1～4 が主柱のピットと思われ、その柱間は3.3×2.2mである。また P 5・6 も住居の中央に間隔よくならんでいるので、これらも主要な柱のピットになると推定される。これらのピットは平面が不整円形を呈し、径0.32～0.52m、深さは0.07～0.38mである。

住居中央ほぼ床面直上で径5～25m程度集石が見られた。これは住居の機能が失われた後に堆積したもので、何らかの施設として再利用されたものらしい。また、P 5 の北側から粘土塊が出

土した。

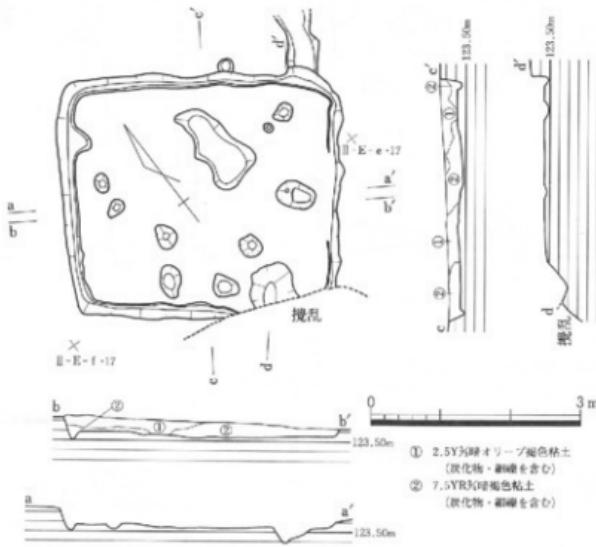
〔遺物〕 土師器小型丸底壺 1 点 (50)、土師器甕 3 点 (51~53)、土師器鉢 1 点 (54) が出土した。すべて埋土からの出土である。

(5) S I 6 (第32・33図、図版 7・8・11・52、付図 1)

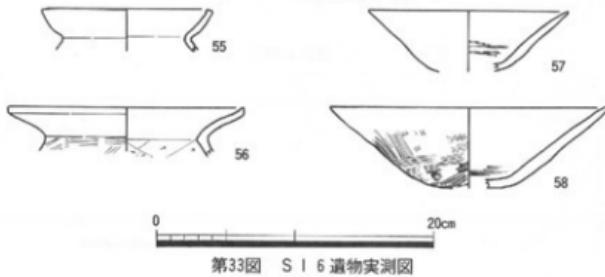
〔遺構〕 II-E-d・16~e・17で検出した。平面形は方形を呈する。住居南側は擾乱を受けた。長 4×3.5 m、壁高0.25m。主軸方向はN-30-E。

側壁に沿って壁溝が周回するが、南東側壁では一部壁溝が認められなかった。壁溝の幅0.1~0.16m、深さ0.03~0.08m。

本住居では主柱と断定できる明確なピットは見あたらなかった。



第32図 S I 6 遺構実測図 (1/80)

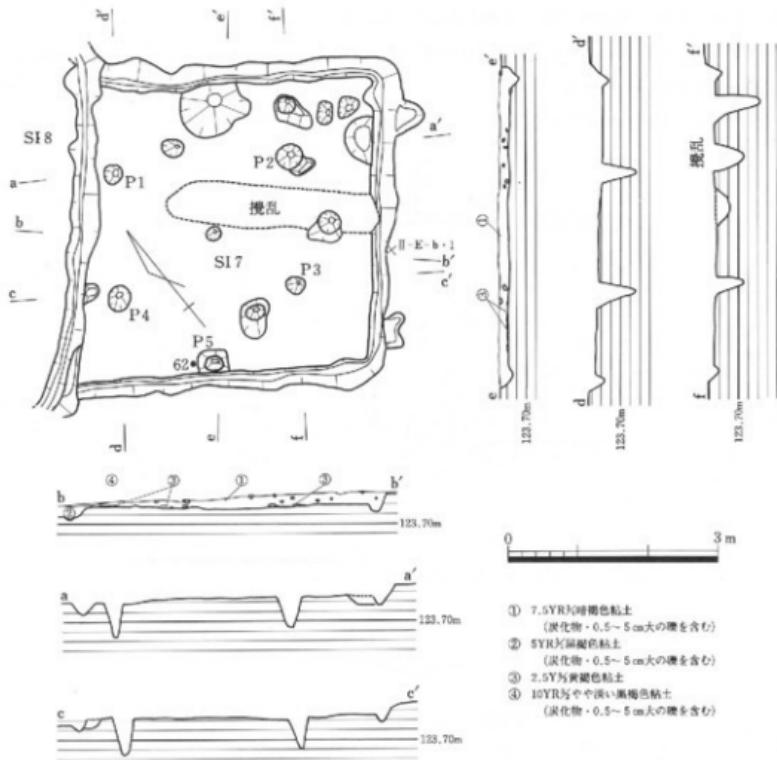


第33図 S I 6 遺物実測図

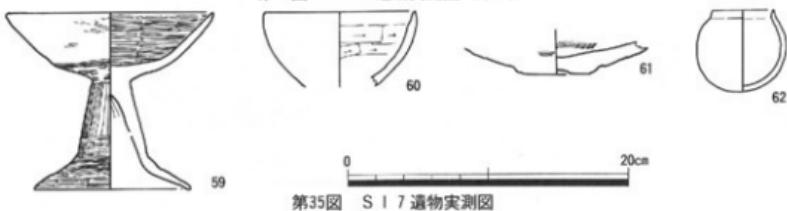
[遺物] 土師器甕 2 点 (55・56)、土師器高杯 2 点 (57・58) などが出土した。すべて埋土からの出土である。

(6) S I 7 (第34・35図、図版7・8・11・53、付図1)

[遺構] II-E-a・20~b・20で検出した。平面形は方形を呈する。S I 8 によって住居の北西側が切られ、また中央は溝状に攪乱を受けている。住居の規模は北東—南西方向が長4.6m、



第34図 S I 7 遺構実測図 (1/80)



第35図 S I 7 遺物実測図

北西—南東方向が残存長4.3mである。ところで、P 1～4はこの住居の主柱のピットと考えられることから、これらが住居の中央に正確に配置されていたのであれば、北西—南東方向の長は5.5mと推定することができる。壁高0.17m。主軸方向はN-36～40-E。

側壁に沿って幅0.14～0.32m、深さ0.05～0.1mの壁溝が周回する。

P 1～4が主柱のピットと思われる。その柱間は2.6×1.8mである。これらのピットは平面形が不整円形を呈し、径0.25～0.36m、深さ0.42～0.55mである。

〔遺物〕 土師器高杯1点(59)、土師器鉢1点(60)、土師器不明底部1点(61)、土師器ミニチュア壺形土器1点(62)などが出土した。(59～61)は埋土から、(62)はP 5の横ほぼ床面からの出土である。

(7) S I 8 (第36・37図、図版7・8・11・53、付図1)

〔遺構〕 II-E-b・19～c・20で検出した。平面形は方形を呈する。S I 7を切る。中央と西側は攪乱を受けている。長6.2×5.7m、壁高0.2m。主軸方向はN-57-E。

側壁に沿って壁溝がまわるが、北西側と北東側の一部には存在しない。壁溝の幅0.1～0.28m、深さ0.05～0.11m。

P 1～4が主柱のピットと思われる。その柱間は2.6×2.2mである。これらのピットは平面形が不整円形を呈し、径0.26～0.5m、深さ0.28～0.44mである。また住居の3隅にも主柱穴より規模の大きなピット(P 5～7)が並び、これらも主要な柱のピットとなると推定される。径0.45～0.65m、深さ0.25～0.35mである。

〔遺物〕 土師器小型丸底壺1点(63)、土師器高杯脚部2点(64・65)などが出土した。すべて埋土からの出土である。

(8) S I 9 (第38～40図、図版7・8・12・13・54、付図1)

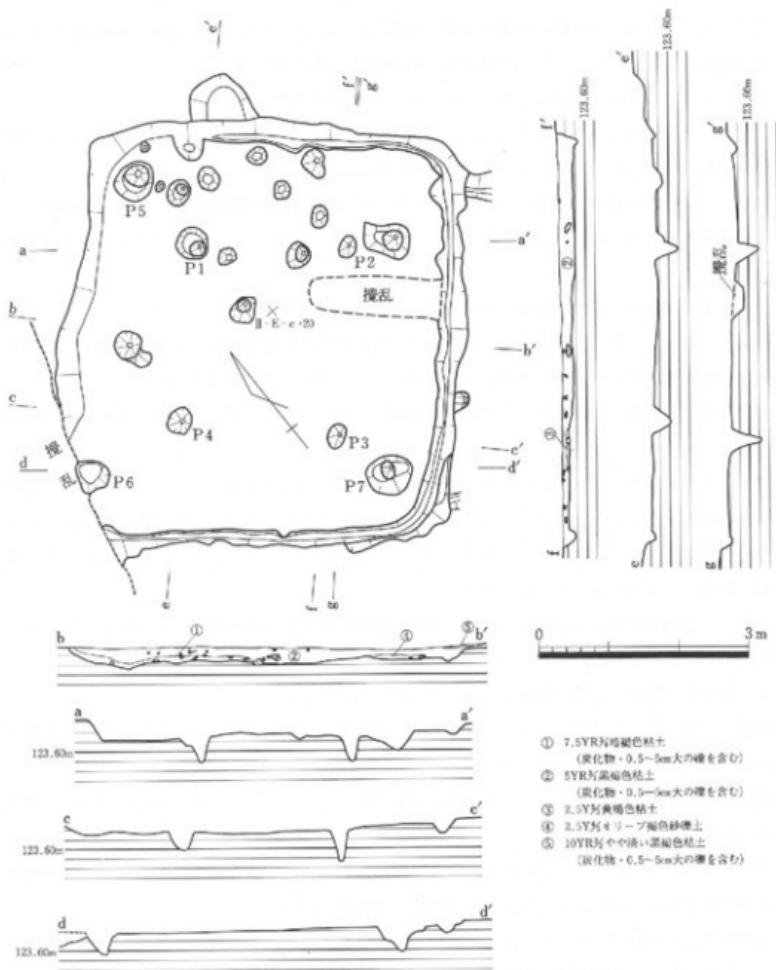
〔遺構〕 II-E-b・17～c・18で検出した。平面形は方形を呈する。住居西部は攪乱を受けている。長5.8m×5.5m、壁高0.2m。主軸方向はN-35-E。

側壁に沿って溝がまわるが、この溝は竈状遺構に接して終っている。溝の幅0.1～0.4m、深さ0.05～0.16m。

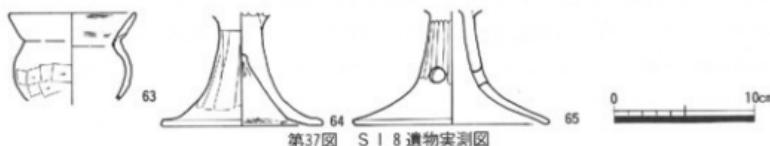
P 1～4が主柱のピットと思われる。その柱間は3.1×2.6mである。これらのピットは平面形が不整円形を呈し、径0.28～0.4m、深さ0.33～0.61mである。

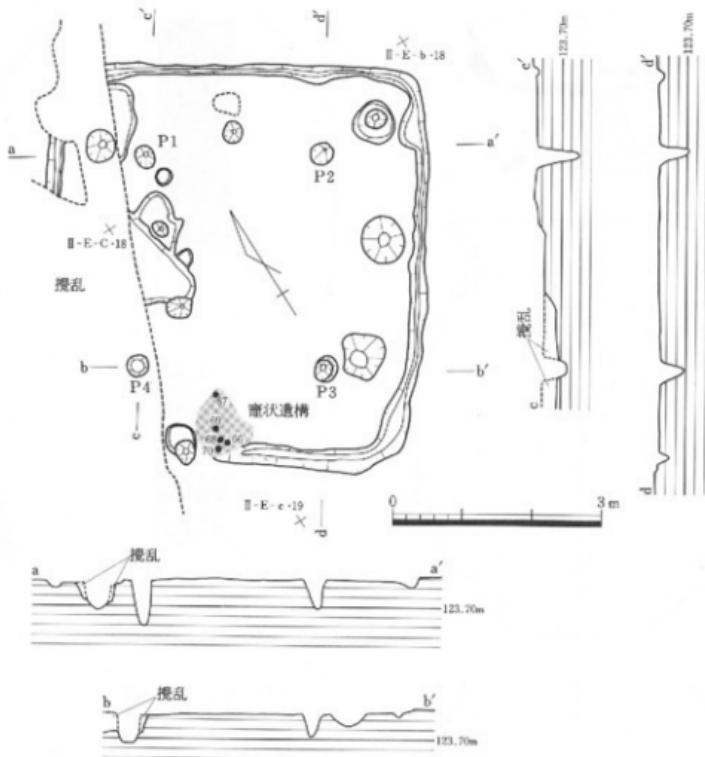
南西壁中央に径1.02×0.85m、深さ0.15mの焼土塊と炭の広がりが見られる。これは袖部は確認できなかったが、竈状遺構と判断される。

〔遺物〕 竈状遺構の上面から長胴壺や甕と思われる多くの韓式系土器(67・68・69・70)と須恵器甕片が出土し、同時に須恵器高杯(66)がなかば埋もれて逆倒した状態で出土した。(66)は竈状遺構の支脚として使われた可能性がある。この他、埋土からはタタキを有する韓式系土器片(71・72)などが出土した。



第36図 S I 8 遺構実測図 (1/80)





第38図 S I 9 遺構実測図 (1/80)

(9) S I 10 (第41・42図、図版7・13・52、付図1)

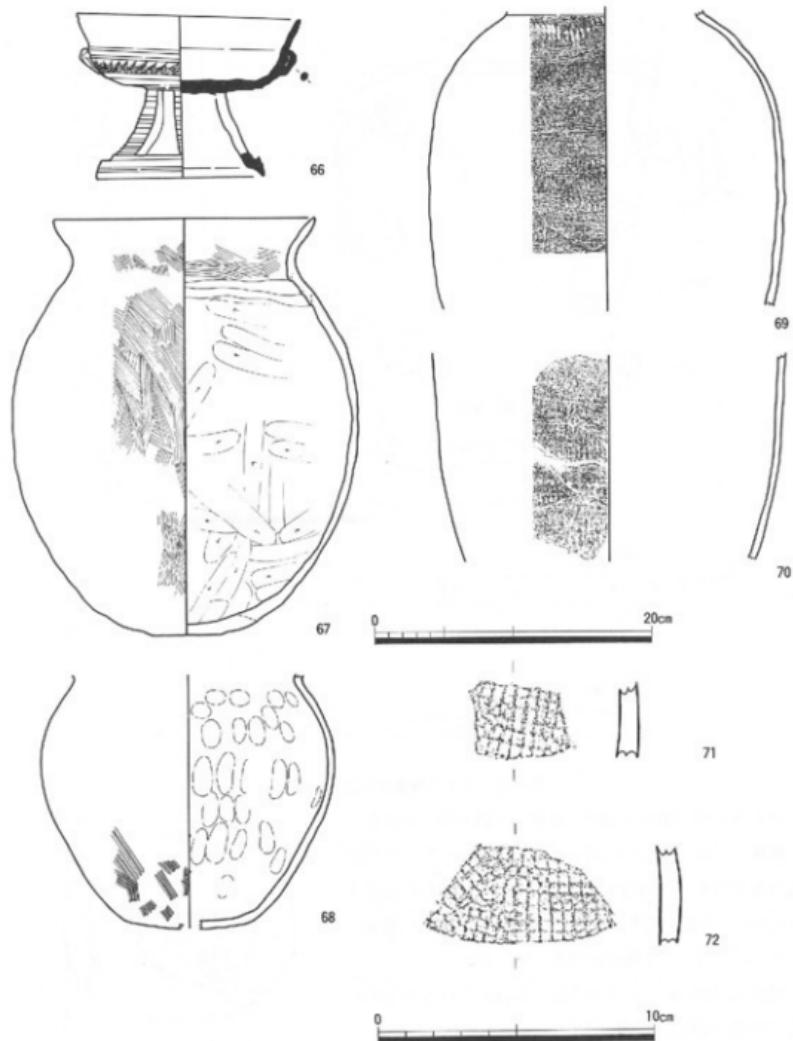
〔遺構〕 II-E-f・14～g・15で検出した。平面形は方形を呈する。住居内部は2ヶ所擾乱を受ける。長6.4×5.1m。上部が削平されているため、壁高は0.06mしか残っていない。主軸方向はN-30-E。

壁溝は南側に沿って2mの長さが認められただけである。壁溝の幅0.1m、深さ0.04m。

P 1～4 が主柱のピットと思われるが、住居自体の軸方向と若干食い違う点が気にかかる。その柱間は2.8m×2.3mである。これらのピットは平面形が不整円形を呈し、径0.34～0.5m、深さ0.3～0.4mである。また東

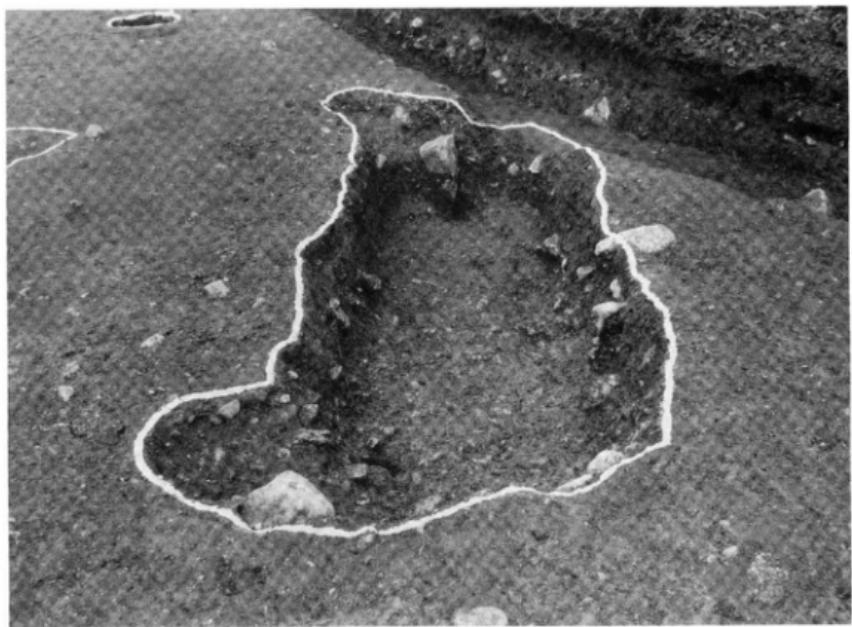


第39図 S I 9 竪状遺構実測図 (1/80)

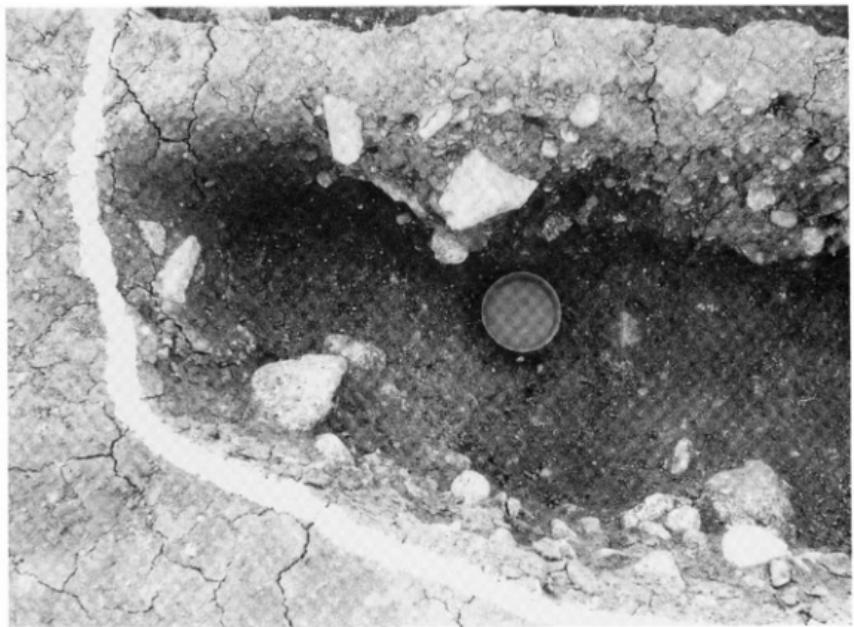


第40図 S I 9 遺物実測図

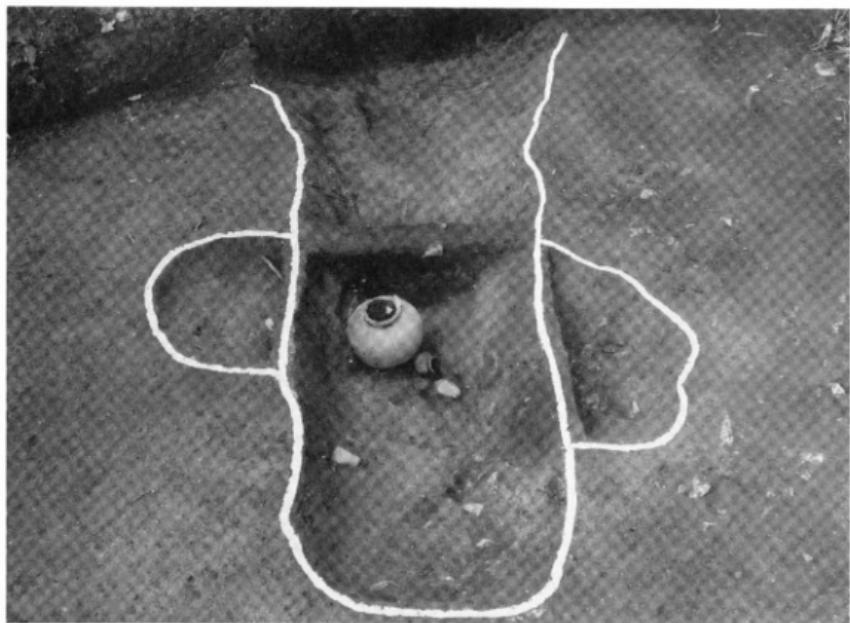
側壁沿いにほぼ等間隔に4つのピット（P 5～8）が存在する。これらがどのような機能をもつかは不明であるが、主要な役割を持つピットと思われる。これららピットは平面が不整円形を呈し、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.27mである。



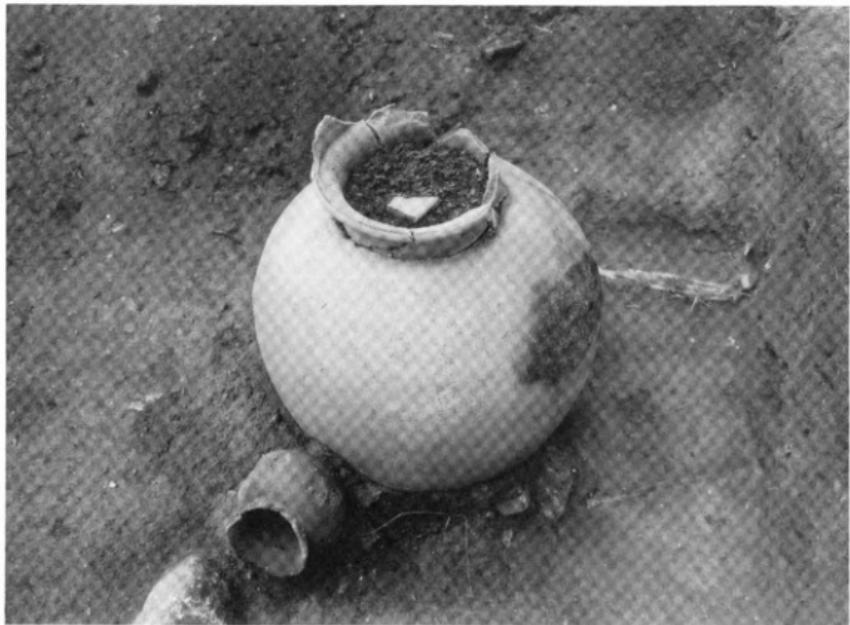
SR 3 全景（南から）



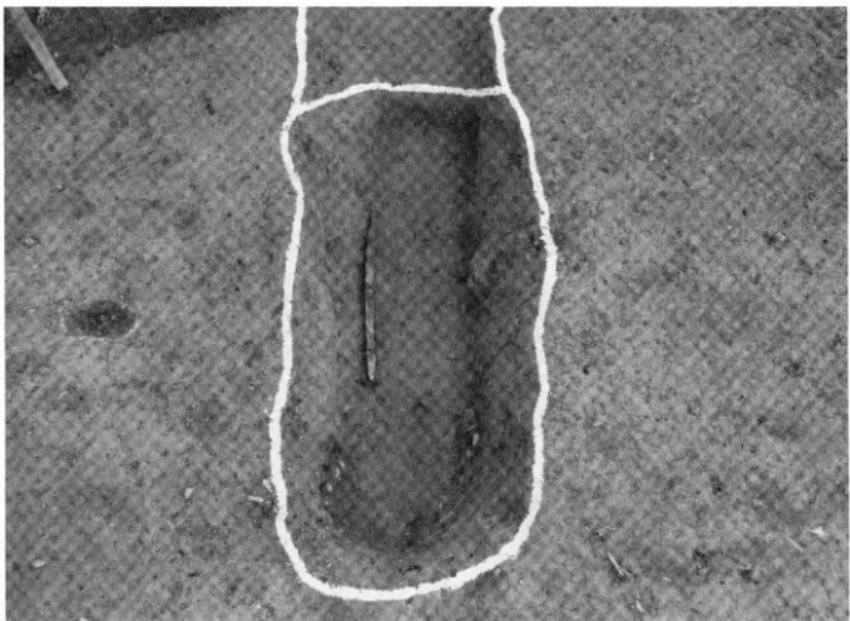
SR 3 土器出土状況



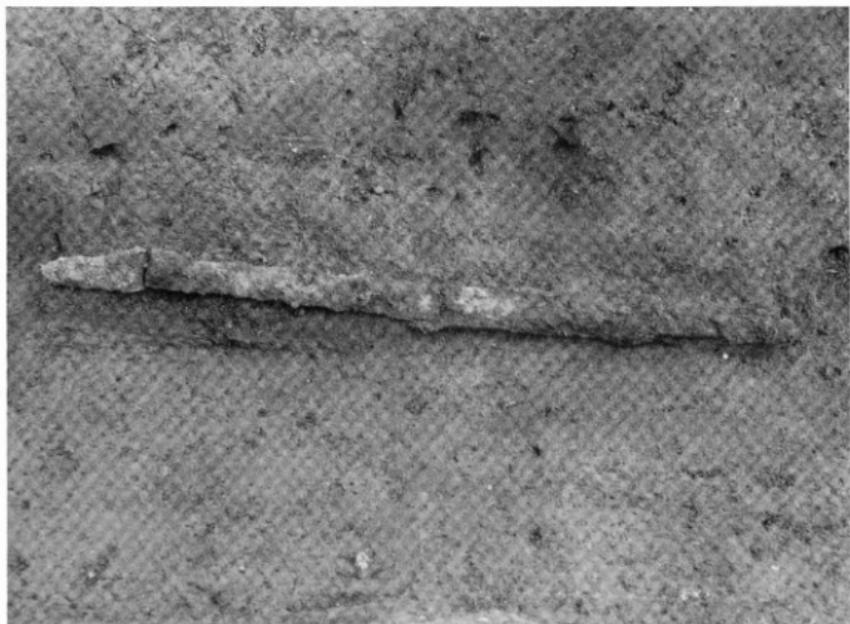
SR 4 全景（東から）



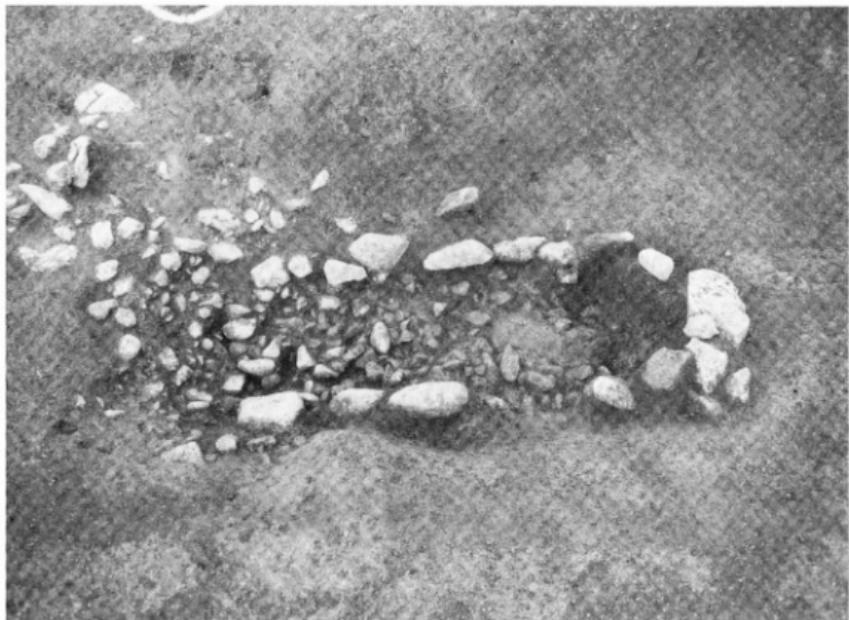
SR 4 土器出土状況



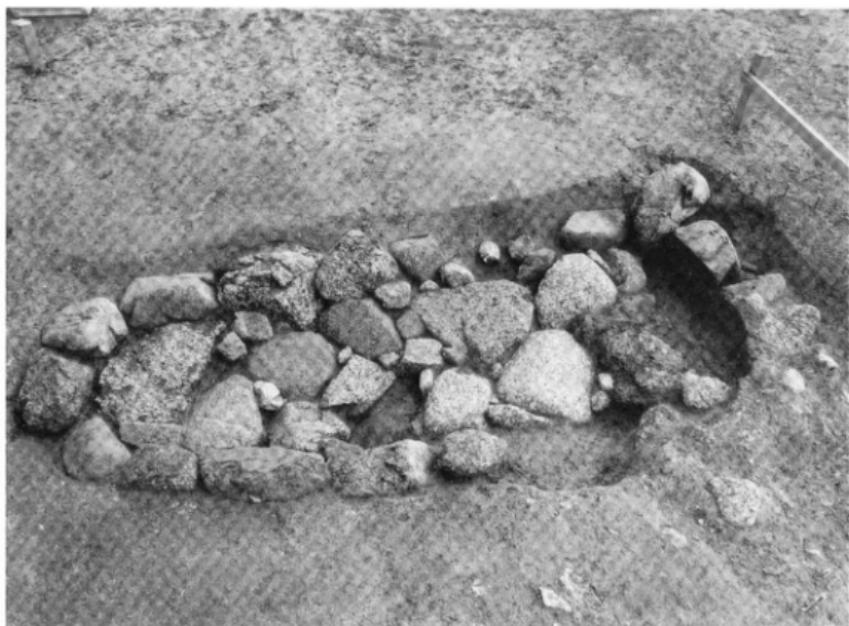
SR 5 全景（北東から）



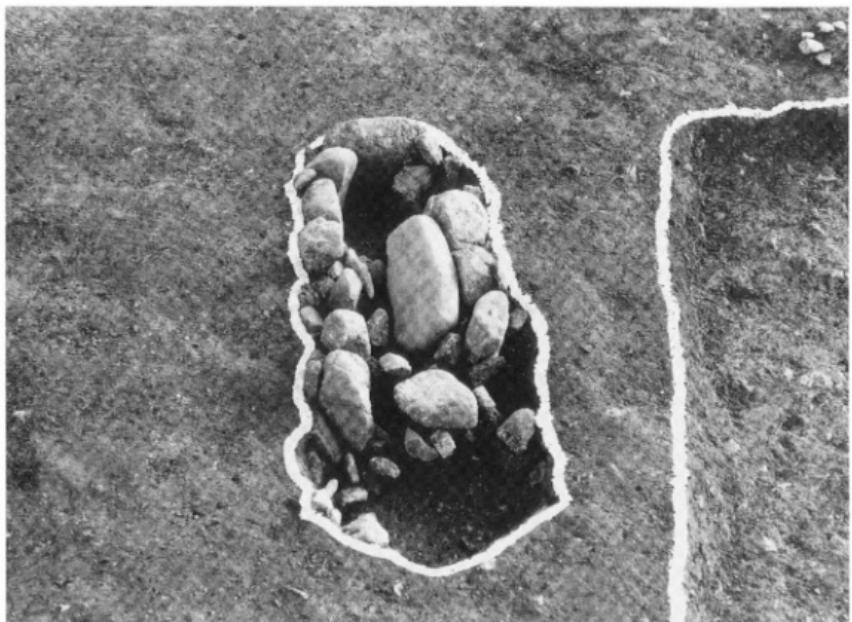
SR 5 鉄剣出土状況



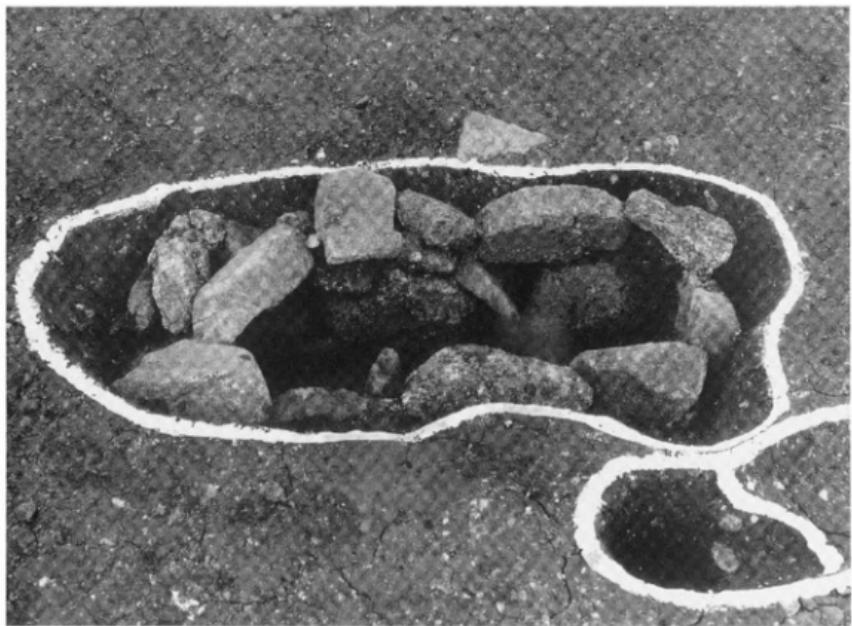
SS1 全景（南から）



SS2 全景（北東から）



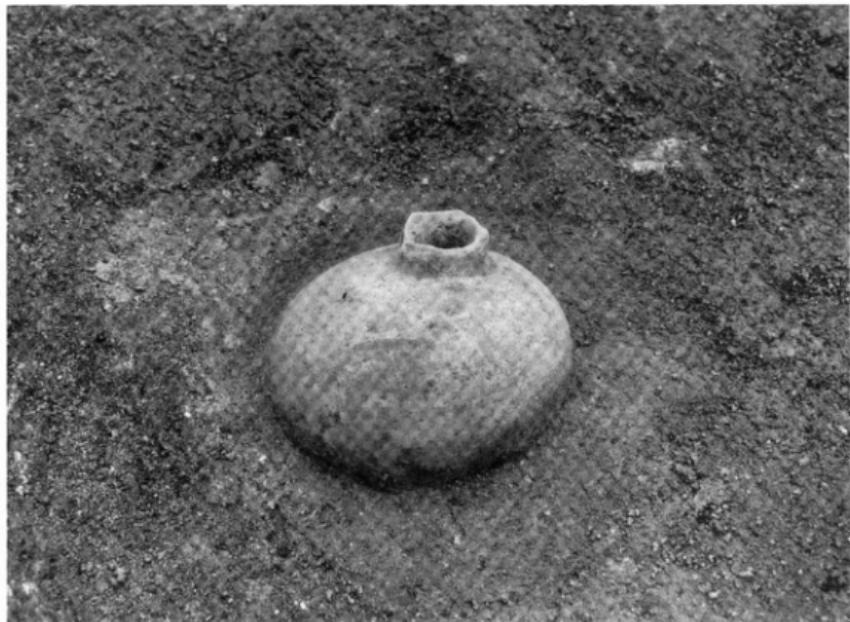
SS 3 全景（北から）



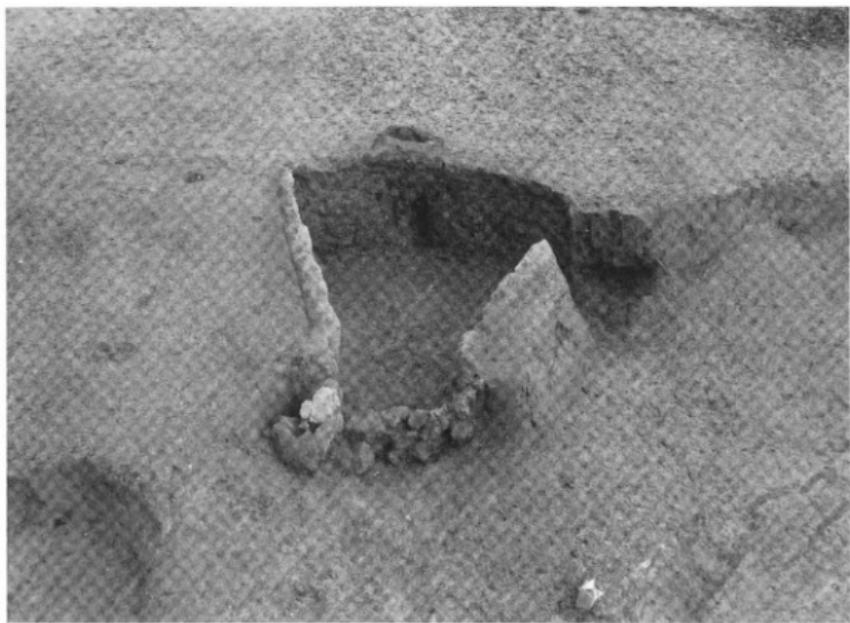
SS 4 全景（南から）



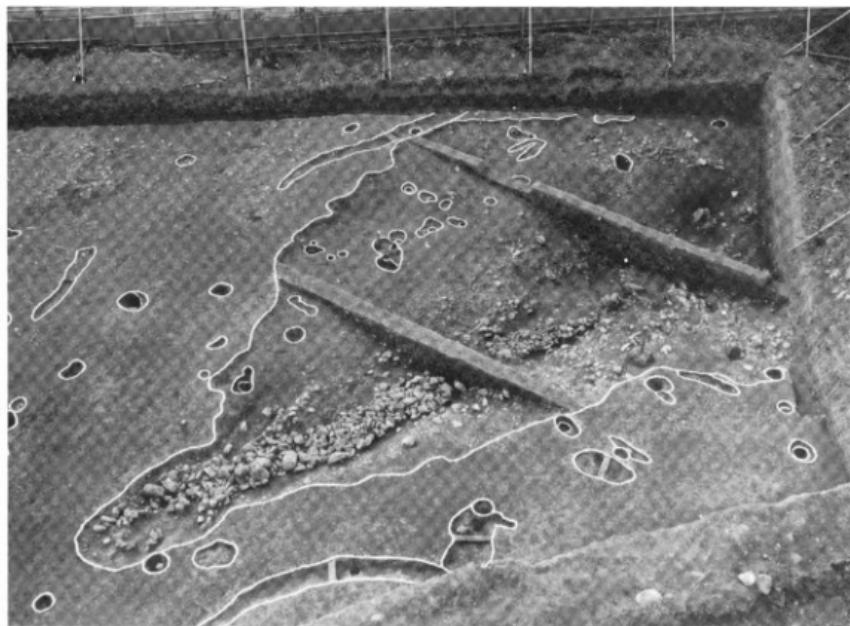
SY 3 全景（南東から）



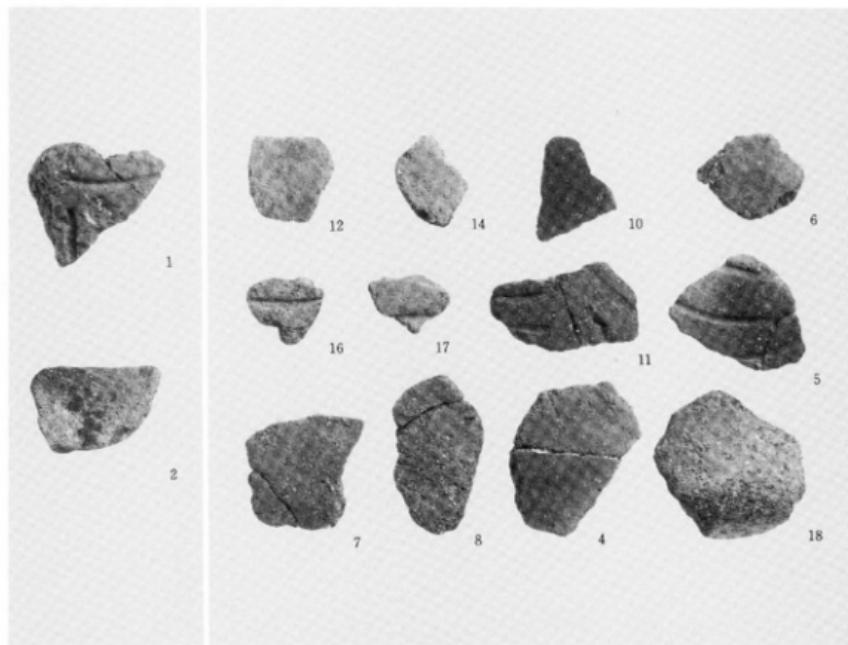
SY 3 土器出土状況



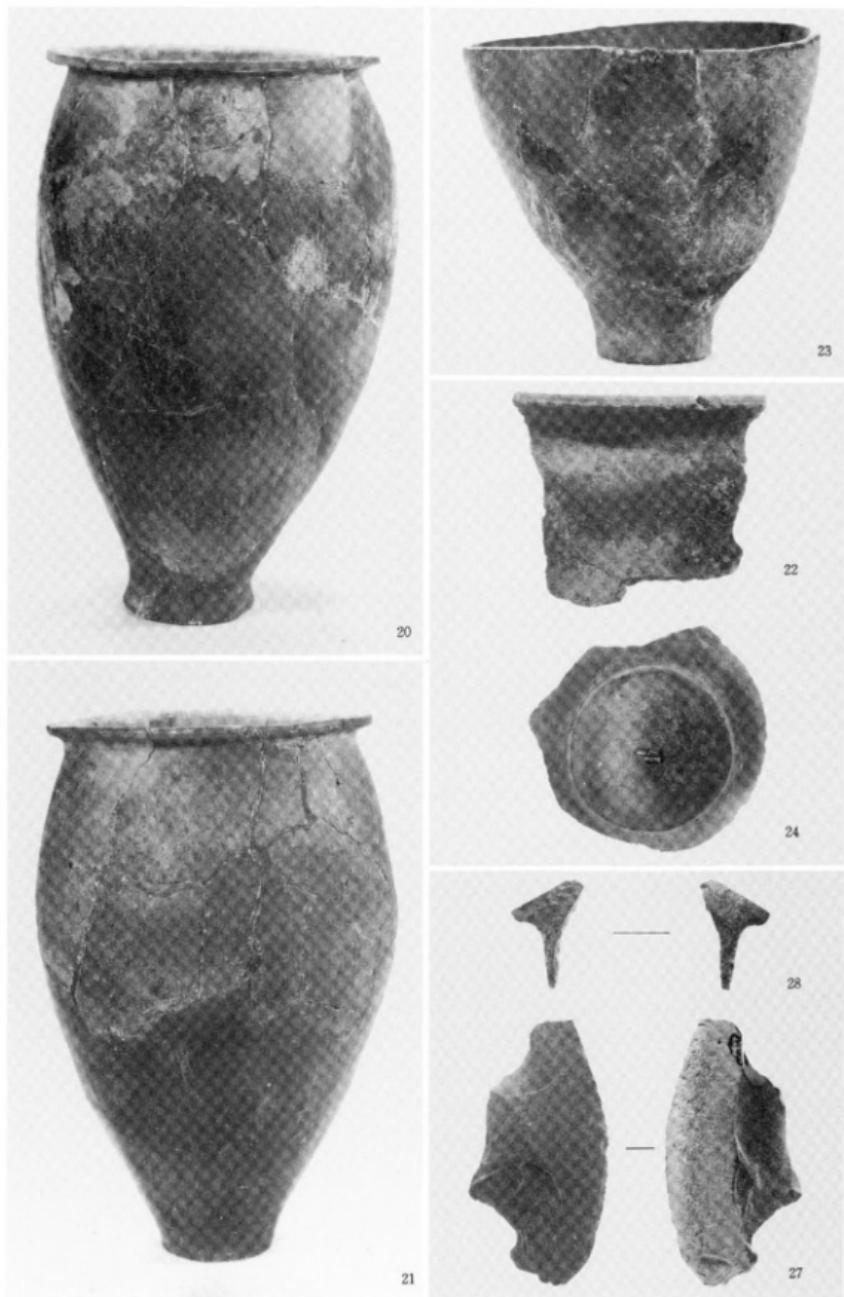
SY 1 全景 (南東から)



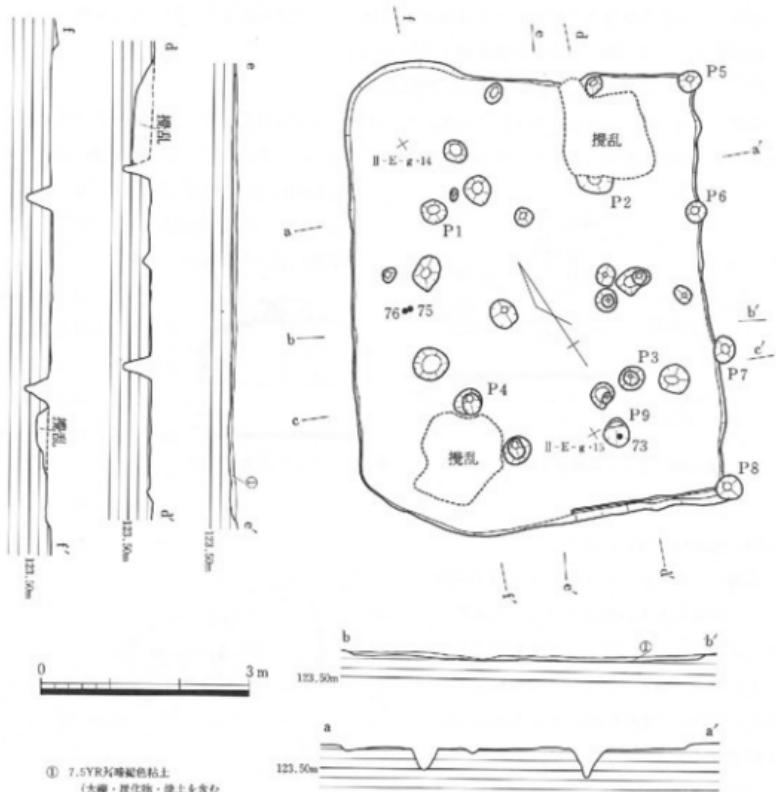
SX 1 全景 (北東から)



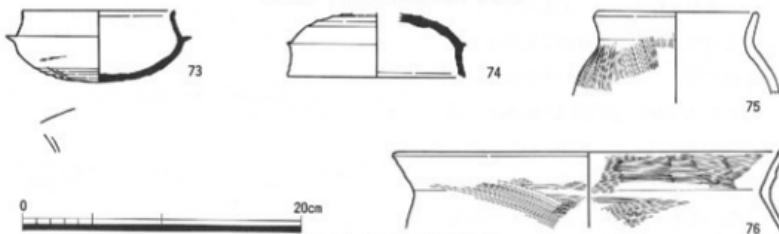
— SK70(1・2)、SK72(4～8・10～12・14・16～18)、SK73(19)



SI 1 (20~24・27・28)



第41図 SII 10遺構実測図 (1/80)



第42図 SII 10遺物実測図

〔遺物〕 須恵器杯身1点(73)がP9埋土上端から、須恵器杯蓋1点(74)などが埋土から、土師器甕2点(75・76)が住居西側床面から出土した。

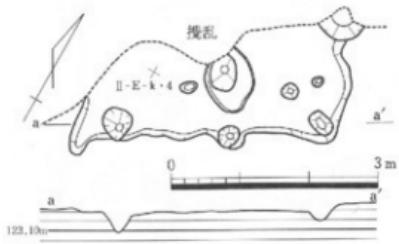
(10) S I 11 (第43・44図、図版14・52、付図1)

〔遺構〕 II-E-j・13~k・14で検出した。住居の大半は擾乱を受け、かろうじて南東部が残存する。やや不整形であるが、平面形が方形を呈するものと思われる。住居の規模は東西方向

が長3.8m、南北方向が残存長1.5mである。

壁高0.1m。主軸方向はN-60-E。

壁溝は認められない。



第43図 S I 11遺構実測図 (1/80)



第44図 S I 11遺物実測図

本住居では主柱は断定できる明確なピットは見あたらなかった。
〔遺物〕 須恵器高杯蓋(77)が埋土から出土した。

(11) S I 12 (第45・

46図、図版14・61、付図1)

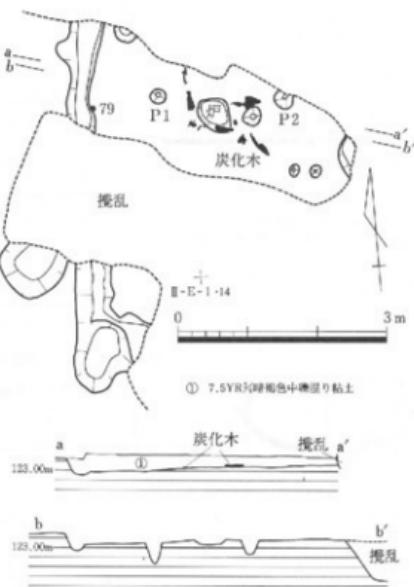
〔遺構〕 II-E-k・13~l・14で検出した。住居の大半は擾乱を受け、南西隅と中央部が残存する。住居は平面形が方形を呈するものと推定される。その規模はあきらかでないが、残存長は5.3×4.1mである。主軸方向はN-5-E。

住居床面からは焼けた炭化木を検出したことから、本住居は焼失したと推定される。

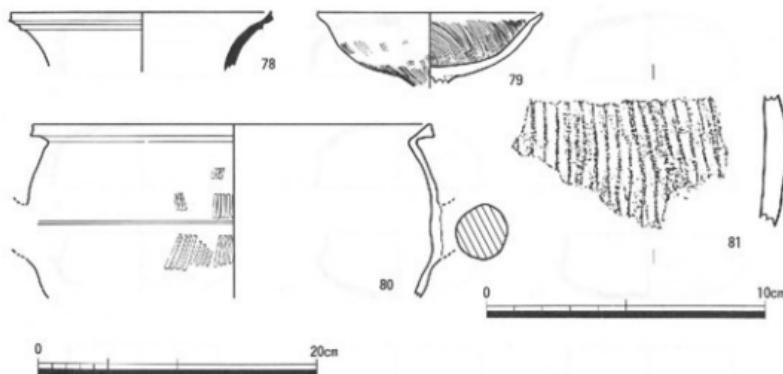
側壁に沿って壁溝が周回する。壁溝の幅0.2~0.26m、深さ0.05~0.1m。

P1・2が主柱のピットとも考えられるが、断定は難しい。その柱間は1.85mである。これらピットは平面形が不整形形を呈し、径0.2~0.24m、深さ0.3~0.36mである。

また、住居残存部中央に埋土に炭を含んだ平面形が不整形の遺構があり、炉の可能性がある。径0.44×0.48、深さ0.08m。

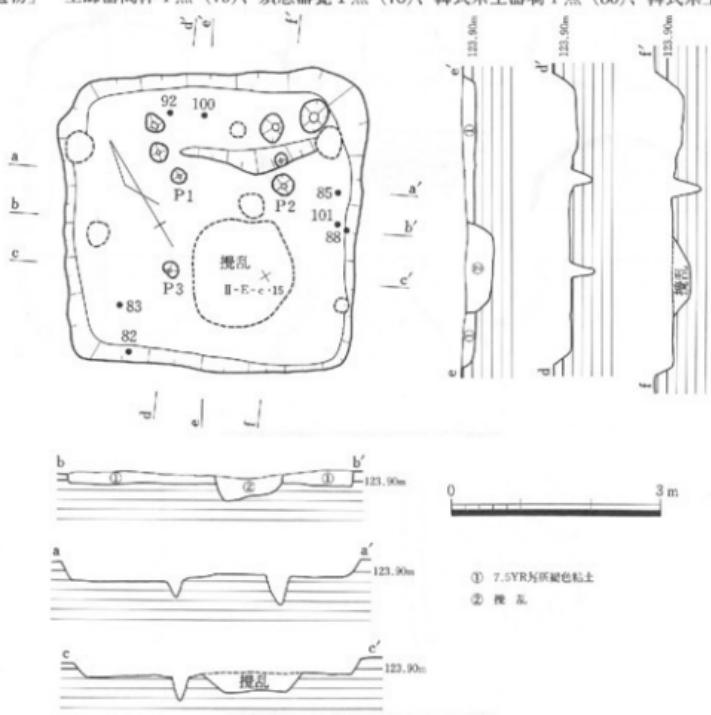


第45図 S I 12遺構実測図

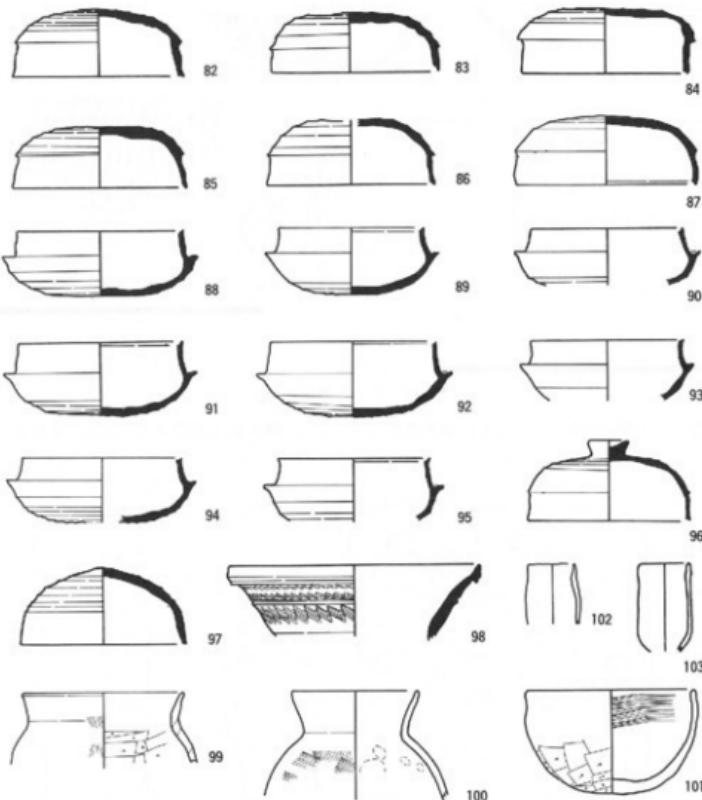


第46図 S I 12遺物実測図

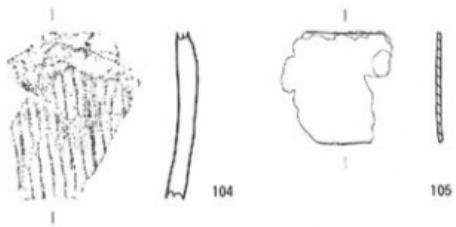
〔遺物〕 土師器高杯 1点 (79)、須恵器壺 1点 (78)、韓式系土器壺 1点 (80)、韓式系土器片



第47図 S I 13遺構実測図 (1/80)



0 20cm



0 20cm

第48図 S I 13遺物実測図

(81) などが埋土から出土した。

(12) S I 13 (第47・48図、図版7・8・15・55・56、付図1)

【遺構】 II-E-b・14~c・15で検出した。平面形は方形を呈する。住居内部は攪乱を受ける。1片4.3m、壁高0.25m。主軸方向はN-30-E。

壁溝は認められない。

住居北東側に床面より0.1~0.13m下がった土壤状の部分がある。

P 1~3が主柱のピットとも考えられるが、断定は難しい。その柱間は1.4×1.5mである。これらのピットは平面が不整円形を呈し、径0.2~0.28m、深さ0.37~0.44mである。

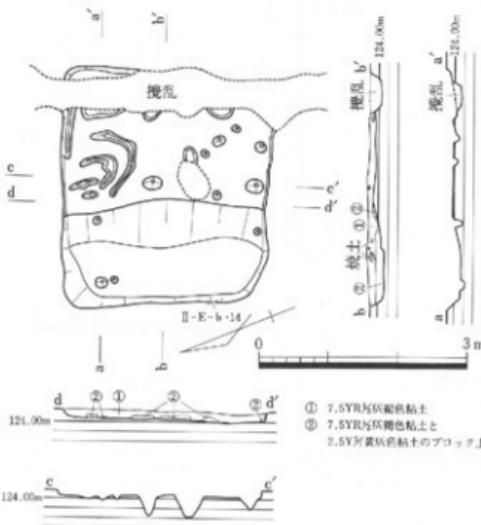
【遺物】 須恵器杯蓋6点(82~87)、須恵器杯身8点(88~95)、須恵器高杯蓋1点(96)、須恵器蓋1点(97)、須恵器壺1点(98)、土師器壺1点(99)、土師器壺1点(100)、土師器鉢1点(101)、製塩土器2点(102・103)、轉式系土器片2点(104)、不明鉄器1点(105)などが出土した。すべて埋土からの出土であるが、その内(82・83・85・88・92・100・101)は埋土下位からの出土である。

(13) S I 14 (第49・50図、図版7・8・16・56、付図1)

【遺構】 II-E-a・14~a・14で検出した。平面形は方形を呈する。住居東側は溝状に攪乱を受けている。長3.3×2.9m、壁高0.1~0.25m。主軸方向はN-25-E。

壁溝は北側壁に沿って0.6mの長さで認められただけである。壁溝の幅0.1m、深さ0.06m。

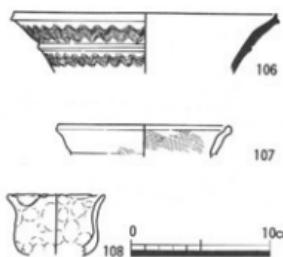
住居に西側2/5は床面より0.07~0.23m下がっている。



第49図 S I 14遺構実測図 (1/80)

本住居では主柱と断定できる明確なピットは見あたらなかった。

【遺物】 須恵器壺1点(106)、土師器壺1点(107)、土師器ミニチュア鉢形土器1点(108)などが出土した。すべて埋土からの出土である。



第50図 S I 14遺物実測図

(14) S I 15第51~54図、図版7・8・16・17・57・58、付図1)

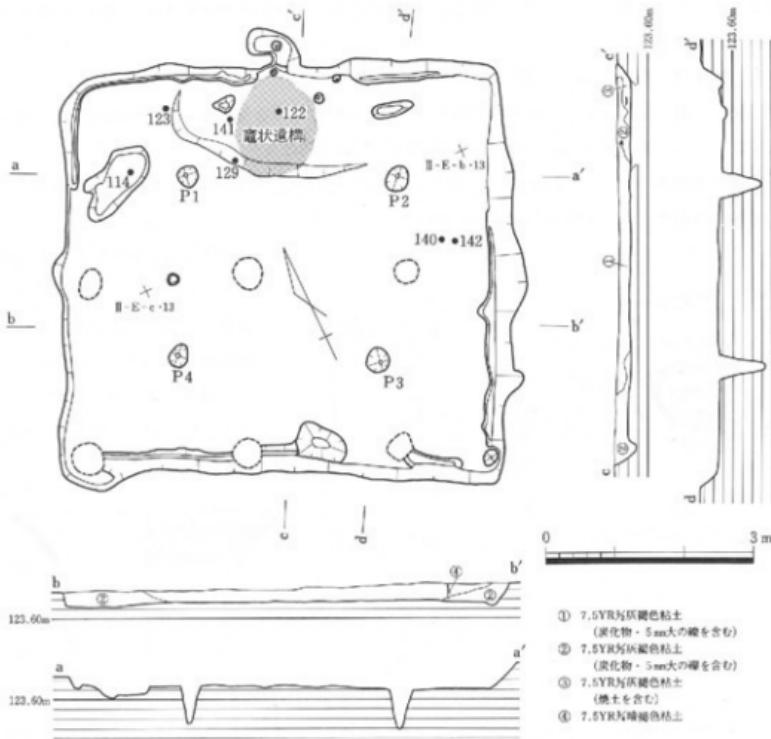
[遺構] II-E-a・12~c・13で検出した。平面形は方形を呈する。一部中世の掘立柱建物によって搅乱を受けている。長6.5×5.9m、壁高0.24m。主軸方向はN-25-E。

側壁に沿って壁溝が存在するが、連続しない。壁溝の幅0.14~0.24m、深さ0.05~0.1m。

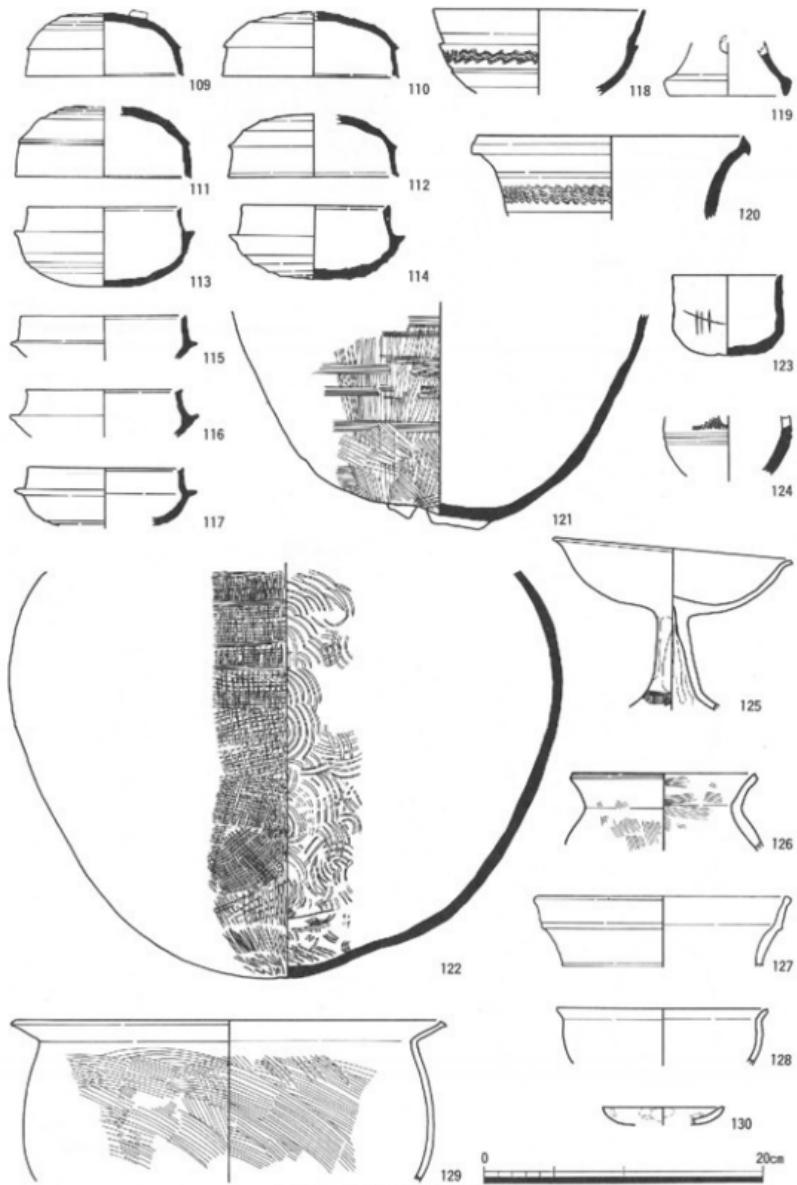
P 1~4が主柱のピットと思われる。その柱間は3.1×2.6mである。これらのピットは平面形が不整円形を呈し、径0.3~0.4m、深さ0.54~0.64mである。

住居北側中央に径2.7×1.4m、深さ0.2mの焼土塊と炭の広がりが見られる。これは袖部は確認できなかったが、竈状遺構と断定される。住居北壁中央から住居外へ短く逆L字状に突出している部分があるが、煙道の可能性がある。

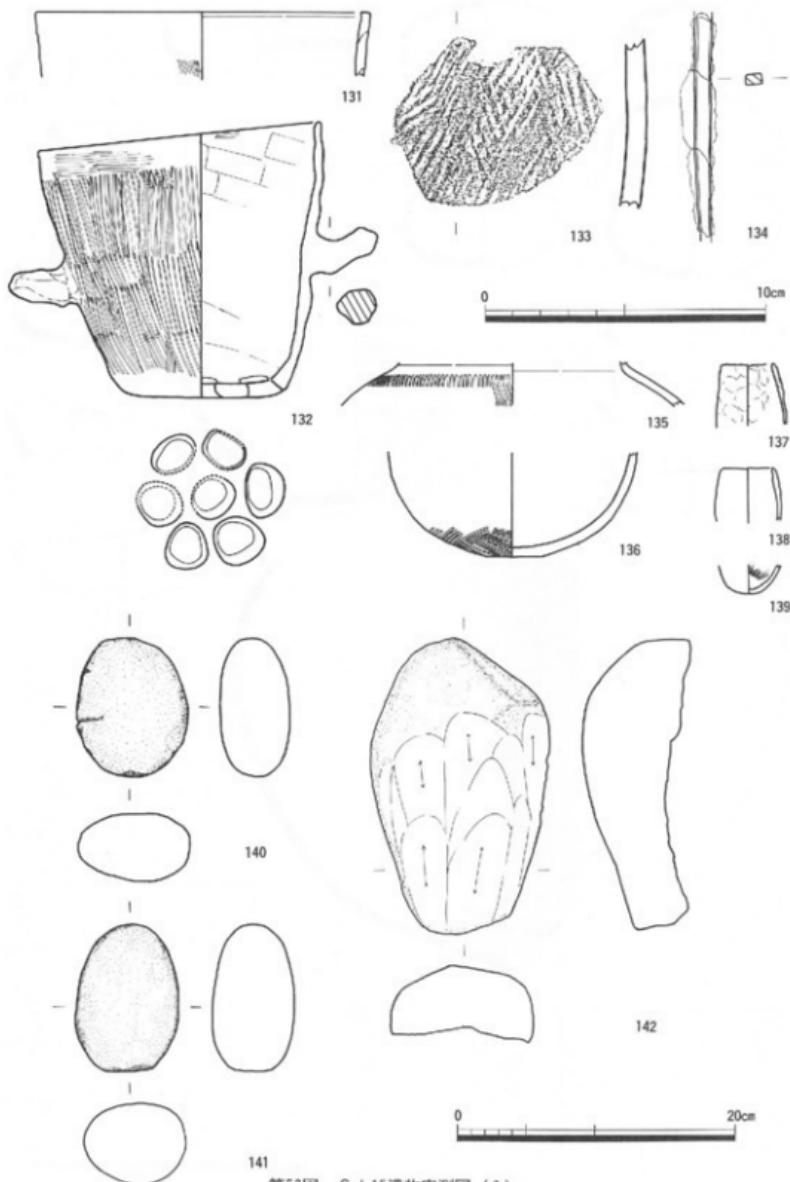
[遺物] 竈状遺構の中央やや北よりからは、こぶし大の石と須恵器壺片多数(122)、土師器壺胸部片が出土した。その他、須恵器杯蓋4点(109~112)、須恵器杯身5点(113~117)、須恵器



第51図 S I 15遺構実測図 (1/80)

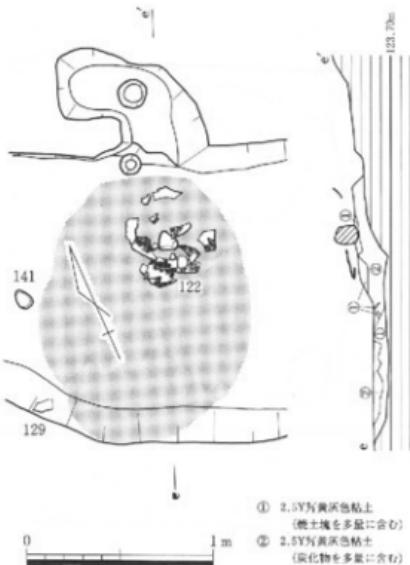


第52図 S I 15遺物実測図(1)



第53図 S-15遺物実測図(2)

高杯 2 点、須恵器蓋 2 点 (120・121)、須恵器縁 1 点 (123)、須恵器底 1 点 (124)、土師器高杯 1 点 (125)、土師器縁 2 点 (126・127)、土師器鉢 2 点 (129・132)、韓式系土器縁 1 点 (135)、韓式系土器器種不明底部 1 点 (136)、韓式系土器片 2 点 (133)、製塩土器 3 点 (134~139)、不明鉄器 1 点 (134)、叩き石 2 点 (140・141)、砥石 1 点 (142) などが出土した。(123・129) は床面から、その他は埋土から出土であるが、(140~142) は埋土下位からの出土である。



第54図 S 115竪状遺構実測図 (1/30)

(15) S 116 (第55・56図、図版7・8・18・59、付図1)

〔遺構〕 II-E-a・11~a・12で検出した。平面形は方形を呈する。住居内部は擾乱を受け、上部は削平されている。長5.1×4.9m、壁高0.06m。主軸方向はN-30-E。

壁溝は認められない。

住居南側壁に接して径1.6×1.2m、深さ0.28~0.47mの土壙が存在する。

P 1~3 が主柱のピットと思われる。4つ目のピットは擾乱により失われている。柱間は2.6×0.5mである。これらのピットは平面形が不整円形を呈し、径0.2~0.28m、深さ0.37~0.44mである。

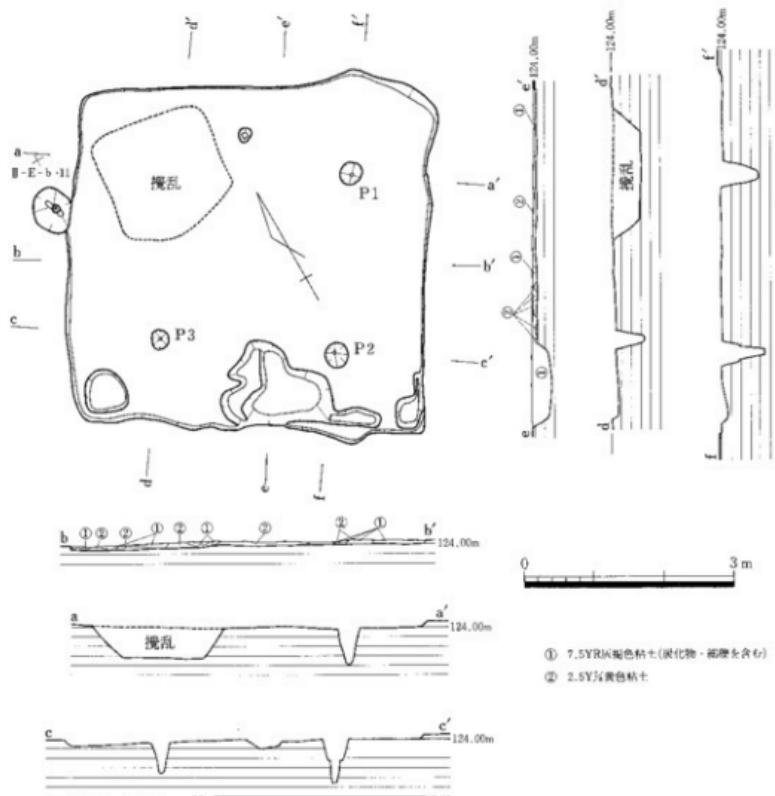
〔遺物〕 須恵器蓋 1 点 (143) などが埋土から出土している。

(16) S 117 (第57~59図、図版18・19・59・60、付図6)

〔遺構〕 I-K-j・3~k・4で検出した。住居南側が削平を受けその規模は明確でないが、平面形は方形（平行四辺形）を呈する。長6.2m（北西-南東方向）、検出長5.2m（北東-南西方向）、壁高0.15m（貼床面まで）。主軸方向はN-28~37-E。

床には4~12cmほど粘土が貼られている。住居内に存在するピット・土壙などは貼床した後、掘削されている。

壁溝は南東側壁に沿って1.6mの長さで認められただけである。壁溝の幅0.2m、深さ0.07m。

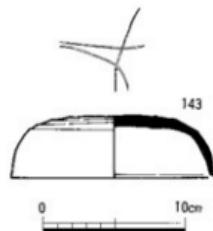


第55図 SII16遺構実測図 (1/80)

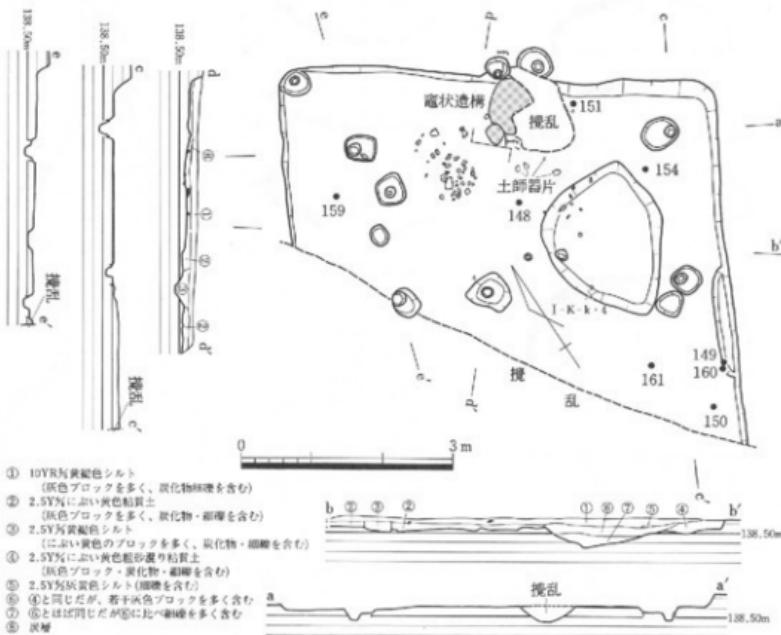
住居東側に径 1.7×2.12 m、深さ0.3mの土壌が存在し、貯蔵穴の可能性がある。

主柱と思われるピットはいくつかあるが、確定は難しい。これらピットの平面形は不整形を呈するものがあるが、おおむね隅丸方形を呈している。径0.3~0.5m、深さ0.15~0.2m。

北東側壁に接するように竈状遺構が存在する。東側に擾乱を受け残存状態は悪く、袖部も明らかでない。南側には径0.25mほどの焼土が付加されたような形跡があった。竈状遺構の東側には小さな集石状の遺構があり、やや窪んでいる。これは竈状遺構と関連するものと思われる。また、竈状遺構の前面には炭の薄い堆積が見られた。



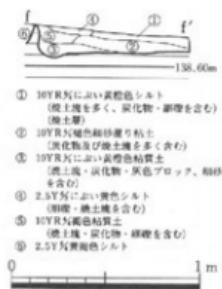
第56図 SII16遺物実測図



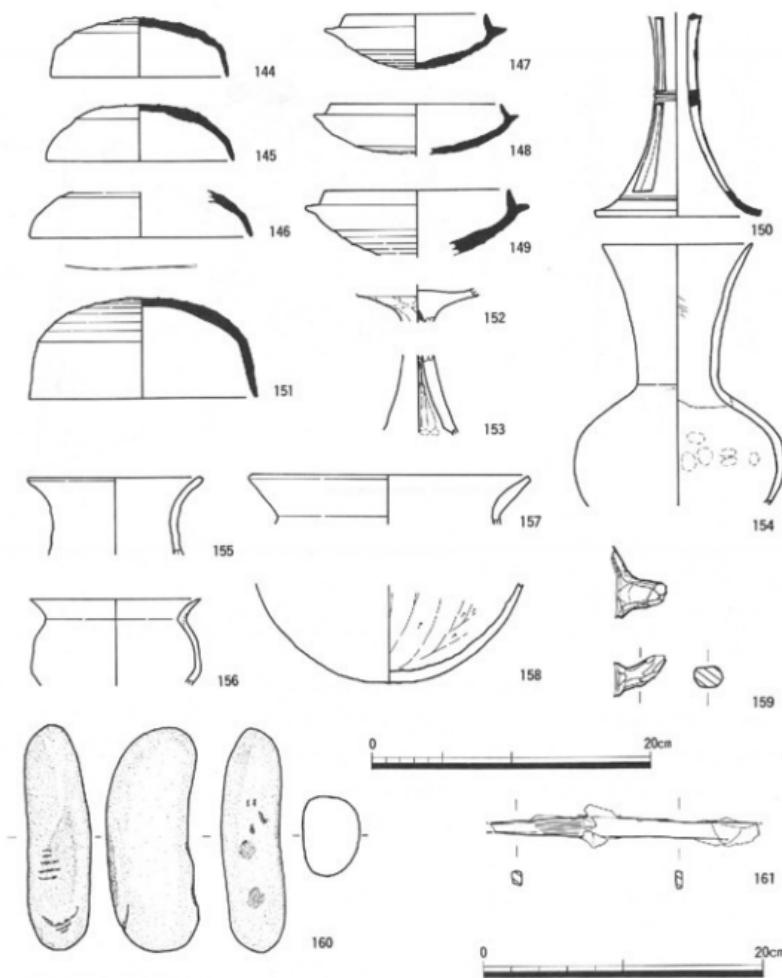
第57図 S I 17遺構遺構実測図 (1/80)

〔遺物〕須恵器杯蓋3点(144~146)、須恵器杯身3点(147~149)、須恵器高杯1点(150)、須恵器壺蓋1点(151)、土師器高杯2点(152・153)、土師器壺3点(154~155)、土師器壺3点(156~158)、土師器不明把手1点(159)、叩き石1点(160)、鉄鑿1点(161)などが出土している。

このうち土師器壺は2点分のみ図化したが、もう1点は(154)とほぼ同じ形態をもつ体部片である。(152)と(153)は同一個体である可能性が高い。また鉄鎌はその木質の残り方から鉄鎌であることは間違いないと思われるが、木質と接する逆刺状の部分が鋒なのかそうでないのか肉眼では判別しがたい。この鉄鎌の存在は丘陵を考えるうえで示唆を与えてくれる。



第58図 S-17の状態構
断面図 (1/30)

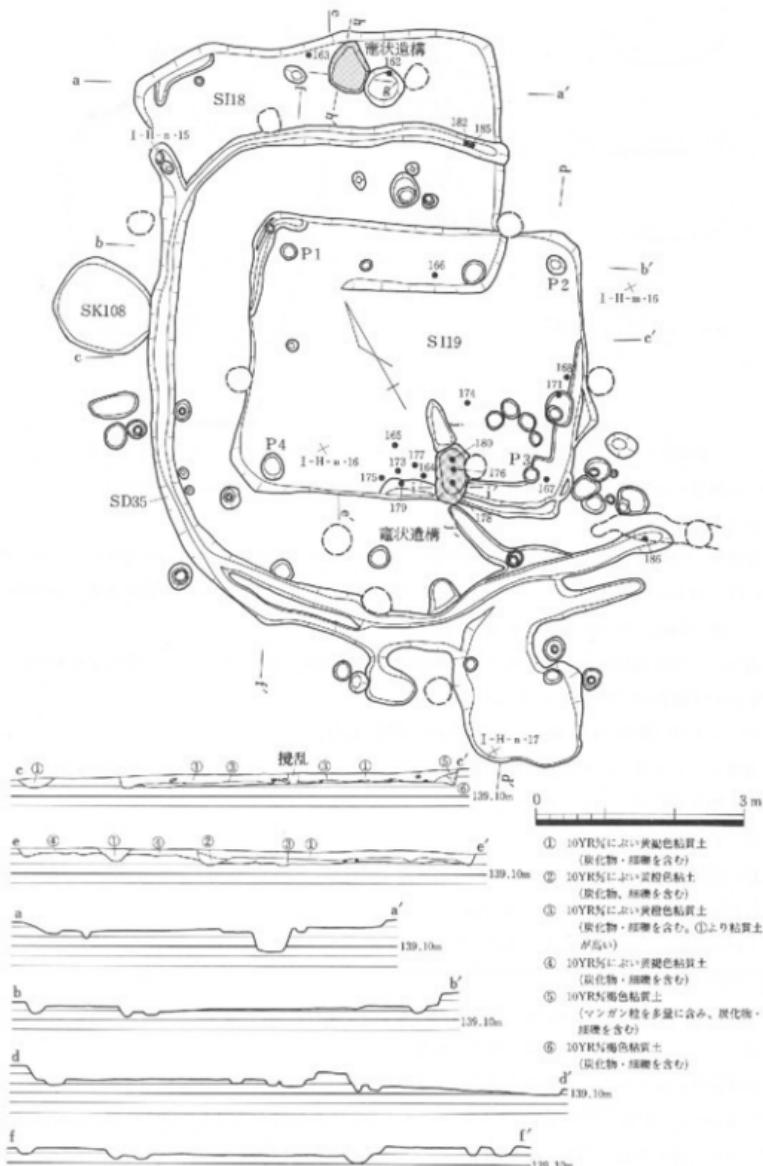


第59図 S II 17遺物実測図

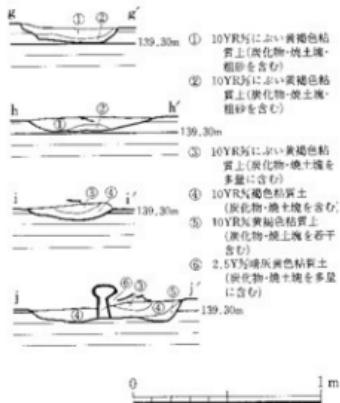
(17) S II 18 (第60~62図、図版20・59、付図6)

〔遺構〕 I-H-m・14~m・15で検出した。住居はS II 19に切られている。またSD35、中世の掘立柱建物によって攪乱を受ける。平面形は方形を呈する。長5.2m(北西~南東方向)、検出長0.3m(北東~南西方向)、壁高0.1m。主軸方向はN-25-E。

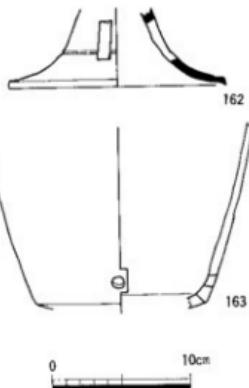
壁溝は北側壁に沿って1mの長さで認められただけである。ただ明確に溝状にはなっていない



第60図 S I 18・19・S D35遺構実測図



第61図 S I 18・19竪状遺構実測図(1/30)



第62図 S I 18遺物実測図

が、北側壁に沿う部分は床面より若干低くなっている。壁溝の幅0.2m、深さ0.03m。主柱は明らかでない。

北側壁に接するように竪状遺構が存在する。径 0.6×0.7 m、深さ0.08mの土壙状のもので、埋土に炭と焼土が多く含まれている。しかし、その袖部は確認できなかった。竪状遺構の南東側に接して径0.56m、深さ0.44mの土壙が存在する。

〔遺物〕 窫状遺構脇の土壙埋土上方から須恵器高杯脚部(162)が出土し、竪状遺構北西側ほぼ床面で土師器瓶(163)が出土した。

(18) S I 19(第60・61・63図、図版21・61・62、付図6)

〔遺構〕 I-H-m・15-n・16で検出した。住居はS I 18を切る。また中世の掘立柱建物によって攪乱を受けている。平面形は方形を呈する。長4.9m×3.9m、壁高0.12m。主軸方向はN-34-E。

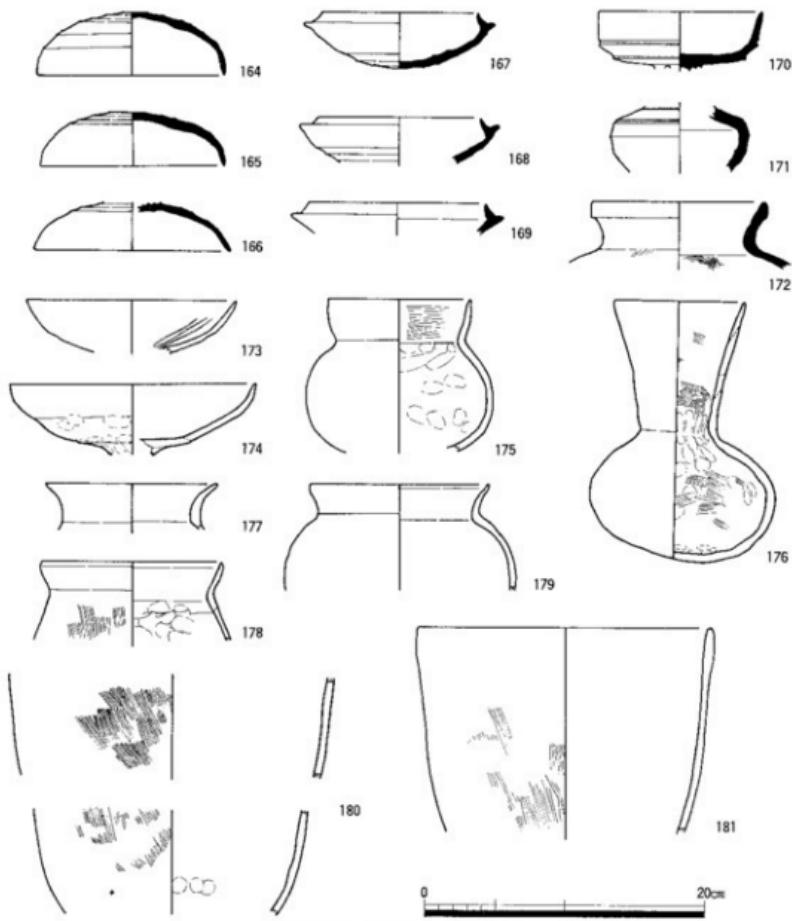
溝は側壁に沿って部分的に認められる。北側の溝は長1.9m、幅0.2m、深さ0.04m、南側の溝は長4.5m、幅0.2~0.4m、深さ0.08m。

主柱は四隅に位置するP 1~4がそれと考えられる。平面形はほぼ円形を呈し、径0.22~0.38m、深さ0.03~0.1mである。

また、S D35(後述)が住居の回りを囲むようにC字形にまわる。出土遺物を見てもS I 19と矛盾はなく、この住居に伴う溝と考えられる。

南西側壁に接するように竪状遺構が存在する。一部中世の柱穴によって攪乱を受けている。径 0.9×0.46 mの土壙状のもので、炭と焼土を多く含む褐色粘土質土を埋土とする。側壁は確認できなかった。竪状遺構の北側に接して長0.72m×0.3m、深さ0.06mの土壙が存在する。

また、北東側壁中央に接して長 2.3×0.95 m、深さ0.06m土壙状におちている部分がある。



第63図 SII 19遺物実測図

〔遺物〕 罐状遺構上面からは土師器壺（178）、土師器瓶（180）、須恵器杯蓋片が出土した。また土師器壺（176）を逆さまにしてその支脚として使用されていた。また罐状遺構のすぐ西側からは土器が集中した出土した。即ち、須恵器杯蓋2点（164・165）、土師器高杯1点（173）、土師器壺1点（175）、土師器壺2点（177・179）がそれで、ほぼ床面から出土した。その他須恵器杯蓋1点（166）、須恵器杯身3点（167～169）、須恵器高杯1点（170）、須恵器壺1点（171）、須恵器壺1点（172）、土師器高杯1点（174）、土師器瓶1点（181）などが出土した。この内、（166～168・174）はほぼ床面からの出土で、その他は埋土からの出土である。

3. 挖立柱建物 (S B)

(1) 概要

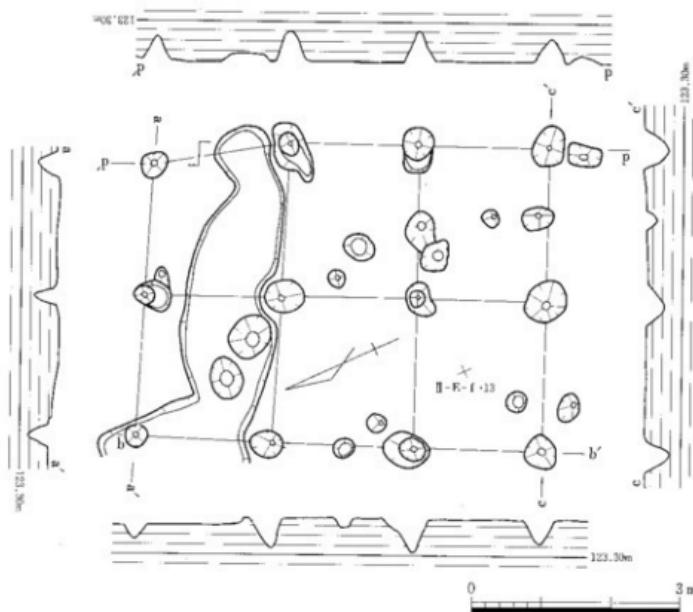
確実に古墳時代のものと思われる掘立柱建物は2棟のみである。5地区の中世の掘立柱建物が検出された暗褐色細礫混り粘土(古墳時代の土器を含む包含層)を除去後、前・中期の竪穴住居群と共に検出された。柱穴の中からは明確な時期を示す遺物は出土していないが、竪穴住居との位置関係を重視すれば、中期の竪穴住居に伴なうものと思われる。

(2) S B11 (第64図、図版22、付図1)

〔遺構〕 II-E-e・12~f・13で検出した。3間×2間(5.8×4.3m)の規模をもつ船柱の掘立柱建物である。主軸方向はN-23-E。

柱穴は平面形が不整円形を呈し、径0.3~0.94m、深さ0.2~0.5mである。

〔遺物〕 なし。



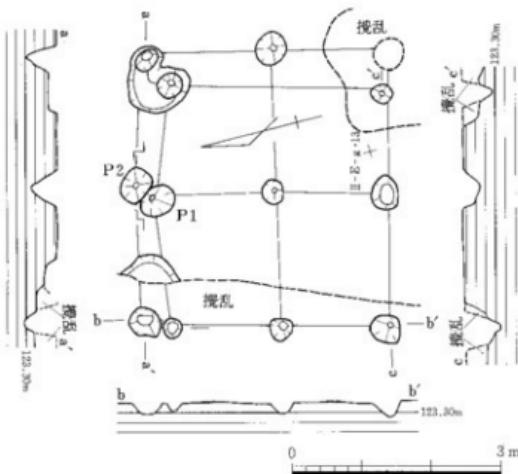
第64図 S B11遺構実測図 (1/80)

(3) S B12 (第65図、図版22、付図1)

〔遺構〕 II-E-f・12~g・13で検出した。2間×2間(3.5×3m)の規模をもつ掘立柱建物である。建物を拡張したと思われる柱穴が北側と東側にあり、その規模は4×3.5mである。主軸方向はN-18-E。

柱穴は平面形が不整円形を呈し、径0.25~0.5m、深さ0.1~0.4mである。

[遺物] なし。



第65図 SB12遺構実測図 (1/80)

4. 溝 (S D)

(1) 概要

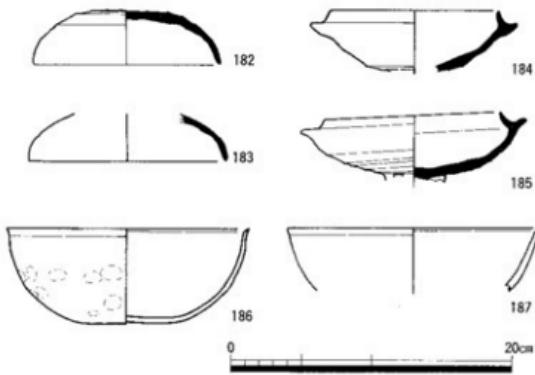
確実に古墳時代のものと思われる溝は6条のみで、すべて4地区から検出された。この内、周辺の遺構と関連付けることができ、ある程度その性格が把握できるのはSD35のみである。

(2) SD35 (第60・66図、図版20・63、付図6)

[遺構] I-H-m・15-n・17で検出した。SI19のまわりを包むようにC字状にまわる。そのまわり方と出土遺物から見てSI19に伴なう溝と思われる。SD35はSI19の南西側でこの溝は2つに別れて2mぐらい南進する。そして再び1つになるが、幅は広くなり、終り近くでは土壤状になっている。地形上北側に比べ南側がやや低くなっている、溝をあふれた水がこの土壤状の溜りに流れ込むようになっているようである。また竈状遺構付近からも溝の支線が伸びている。

土壤状になった部分を除外すれば、0.2~0.4mで、深さは0.08~0.23mである。

埋土はにぶい黄褐色粘質土



第66図 SD35遺物実測図

(炭化物・細礫を含む)である。

〔遺物〕 須恵器杯蓋2点(182・183)、須恵器杯身(184)、須恵器高杯杯部(185)、土師器鉢2点(186・187)が出土した。その中で杯蓋(182)は高杯(185)に被さったような状態で出土している。しかしながら、出土状況からみて(185)は脚部が欠失した後、杯身として転用された可能性が高く、また(182)の形態も杯蓋のそれであり(182)を杯蓋とした。これらは埋土下位から出土した。

(3) S D36~38(付図6)

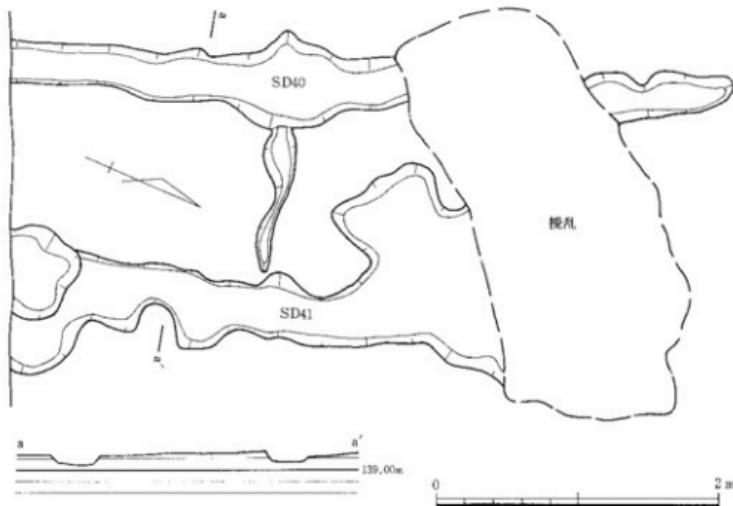
〔遺構〕 I-K-1・1で検出した。3条ともにS K114の西側に位置し、北東-南西方向に伸びる。南西側は擾乱を受け、本来の長さは不明である。規模はSD36が残存長2.9m、幅0.15~0.35m、深さ0.05m、SD37が残存長3.3m、幅0.2~0.45m、深さ0.05m、SD38が残存長1.8m、幅0.5m、深さ0.09mである。埋土はいずれも黄褐色粗砂混りシルトである。

〔遺物〕 いずれも須恵器片が出土したのみである。

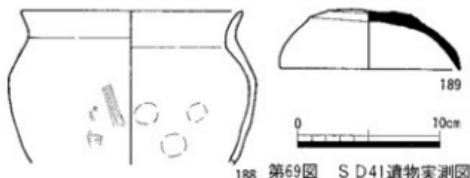
(4) S D40(第67・68図、付図7)

〔遺構〕 I-J-t・10-t・11で検出した。SD40はSD41と平行してほぼ南北方向に走る溝である。北側は擾乱を受けている。南側は調査区外へ伸びるため全体の規模は明らかでない。検出長5.2m、幅0.3~0.7m、深さ0.06m。

〔遺物〕 土師器壺(188)が埋土から出土した。



第67図 SD40・41遺構実測図(1/40)



188 第69図 S D41遺物実測図



第68図 S D40遺物実測図

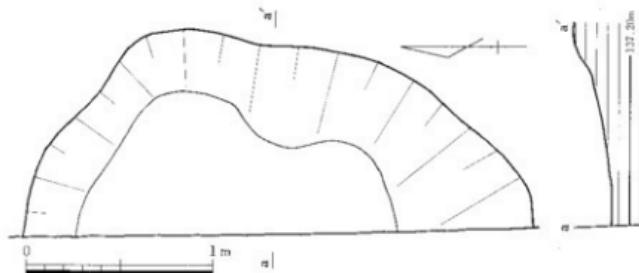
査区外へ伸びるため全体の規模は幅0.3~1.3m、深さ0.07m。

[遺物] 須恵器杯蓋（188）が埋土から出土した。

5. 土 壤 (SK)

(1) 概 要

埋土中などから古墳時代の遺物が検出され、古墳時代のものと思われる土壤は合わせて46基確認された。S K 1・36・58・63・69・71・74・101・105~115・118~144がこれに該当する。ただし、この中で土壤の中から土器片が数点出土したのみで、かつ性格も明確でないものについては説明を省略する。また、ここで言う土壤とは、所謂おち・おちこみと言われるものも含めてある。明確な区別が難しいためである。

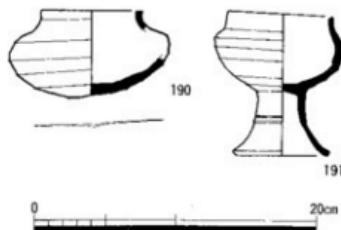


第70図 SK1遺構実測図 (1/30)

(2) SK1 (第70・71図、図版63、付図5)

[遺構] I-F-d・10で検出した。遺構の西側は調査区外にあるため形状は不明である。検出長2.7×1.1m、深さ0.21m。

[遺物] 須恵器短頸壺1点（190）、須恵器台付壺1点（191）などが埋土から出土した。



第71図 SK1遺物実測図

(3) S K36 (第72・73図、図版63、付図5)

〔遺構〕 I-H-p・4で検出した。平面形は不整形を呈する。長 2.6×1.9 m、深さ $0.1 \sim 0.15$ m。遺構の3方に柱穴とも考えられるピットがある。このピットは平面形は円形～椭円形を呈し、径 $0.15 \sim 0.34$ m、深さ $0.11 \sim 0.15$ m。

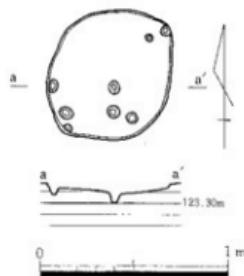
〔遺物〕 遺構の中央に、こぶし大の石を中心として土器片が多く出土した。この土器片はすべて須恵器甕(192)の破片であった。

(4) S K58 (第74・75図、図版63、付図1)

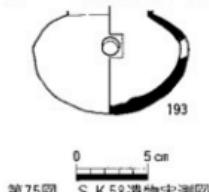
〔遺構〕 II-E-h・11～i・11で検出した。平面形は不整円形を呈する。長 $0.7 \times$



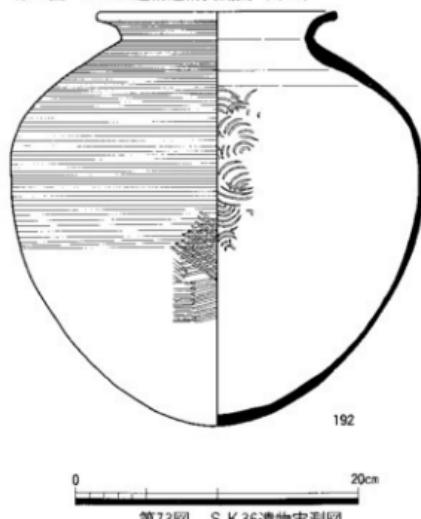
第72図 S K36遺構遺構実測図 (1/30)



第74図 S K58遺構実測図 (1/30)



第75図 S K58遺物実測図



第73図 S K36遺物実測図

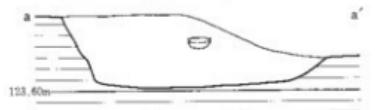
0.65m、深さ0.05m。暗褐色粘質土を埋土とする。

〔遺物〕 土壌北よりほぼ床面から須恵器甕1点(193)などが出土した。

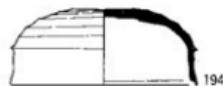
(5) SK63(第76・77図、図版23・64、付図1)

〔遺構〕 II-E-d・17~e・17で検出した。平面形は不整形を呈する。長2.3×1.4m、深さ0.4m。

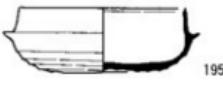
〔遺物〕 埋土から須恵器杯蓋1点(194)、須恵器杯身1点(195)、土師器甕2点(196・197)、製塩土器片などが出土した。



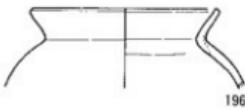
第76図 SK63遺構実測図(1/30)



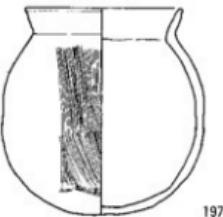
194



195



196



197

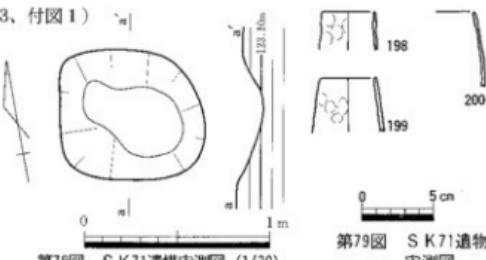


第77図 SK63遺物実測図

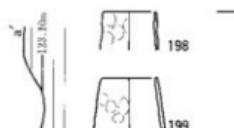
(6) SK71(第78・79図、図版63、付図1)

〔遺構〕 II-E-1・14で検出した。平面形は不整円形を呈する。径0.8×0.7m、深さ0.15m。

〔遺物〕 埋土から製塩土器片(198~200)や繩文土器片などが出土した。



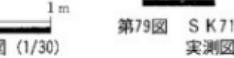
第78図 SK71遺構実測図(1/30)



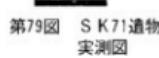
198



199



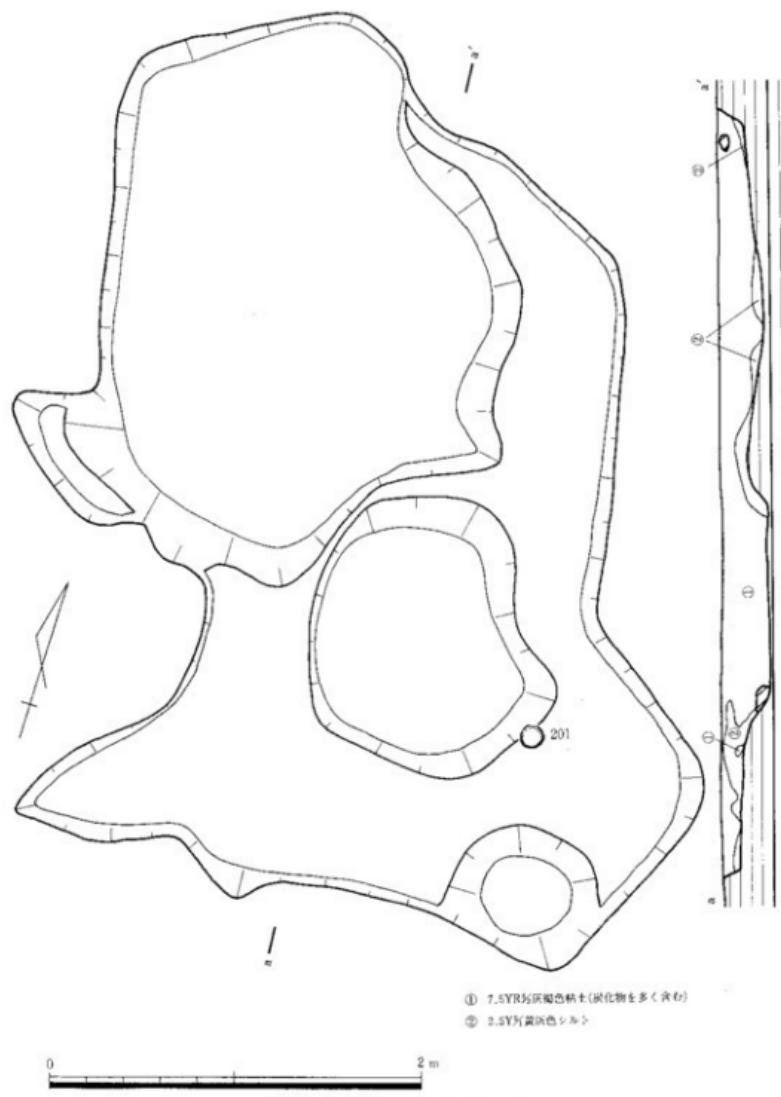
200



第79図 SK71遺物
実測図

(7) S K101 (第80・81図、図版23・64、付図1)

〔遺構〕 II-E-d・12-d・13で検出した。平面形は不整形を呈する。土壌の中央からやや



第80図 S K101遺構実測図 (1/30)

南よりに1段深くなった部分がある。長3.3×4.7m、深さ0.1~0.26m。埋土は上層が灰褐色粘土(炭化物を多く含む)、下層が黄灰色シルトである。

[遺物] 埋土から須恵器杯蓋(201)、須恵器高杯(202)などが出土した。

(8) SK105(第82図、付図3)

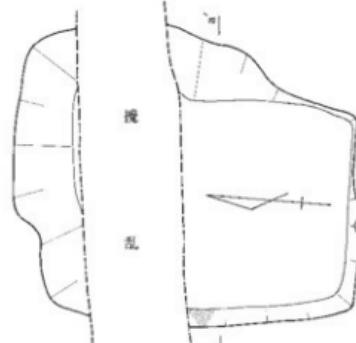
[遺構] III-E-1・19~1・20で検出した。平面形は隅丸方形を呈する焼土壙である。長1.1×0.8m、深さ0.12m。埋土は上層からオリーブ褐色砂質土(砂礫・炭化物を含む)、暗オリーブ褐色粘土混りシルト(炭化物を含む)、黒褐色シルト(炭化物を多く含む)である。

この遺構の性格は明らかでないが、周辺にもSK105と同じ焼土壙のSK106・107があり、これらと関係のある遺構と思われる。

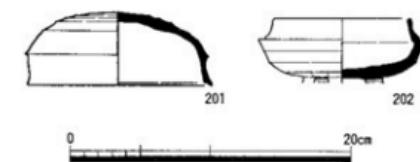
[遺物] 埋土から須恵器甕片などが出土した。

(9) SK106(第83図、付図3)

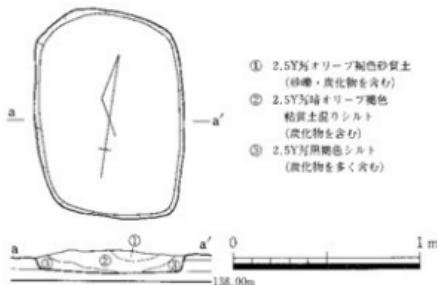
[遺構] III-E-1・20で検出した。平面形は不整形を呈するが、土壤南側の状態を見ると、本来は方形に近かったものが崩れたのではないかと思われる。焼土壙である。長1.8×1.6m、深さ0.37m。黄褐色砂質土混りシルト、褐灰色シルト、褐灰色粘土などを埋土として、1層を除き、すべて炭化物を含んでいる。



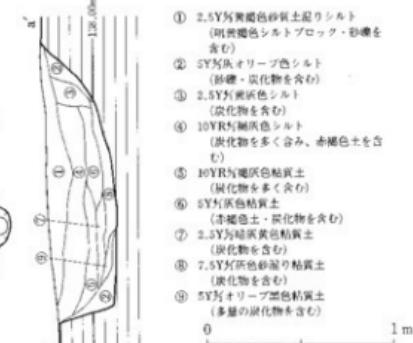
第83図 SK106遺構実測図(1/30)



第81図 SK101遺物実測図



第82図 SK105遺構実測図(1/30)



この遺構の性格は明らかでないが、周辺にもSK106と同じ焼土壙のSK105・1.7があり、これらと関係のある遺構と思われる。

〔遺物〕 埋土から須恵器片などが出土した。

(10) SK107 (第84図、付図3)

〔遺構〕 III-J-1・1・1・2で検出した。平面形は橢円形～隅丸方形を呈する焼土壙である。長1.3×0.9m、深さ0.15m。埋土は上層から灰オーリーブ色シルト（砂礫を含む）、灰黄褐色粘土（焼土を含む）、暗灰黄色粘質土（焼土・炭化物を含む）、黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）である。

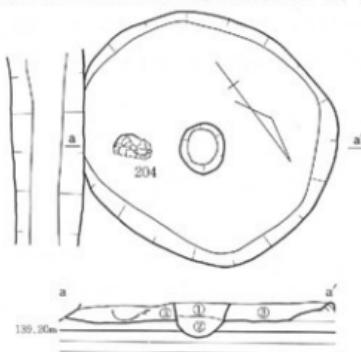
この遺構の性格は明らかでないが、周辺にもSK107と同じ焼土壙のSK105・106があり、これらと関係のある遺構と思われる。

〔遺物〕 出土遺物はないが、周辺遺構との関連から古墳時代のものと思われる。

(11) SK108 (第85・86図、図版64、付図6)

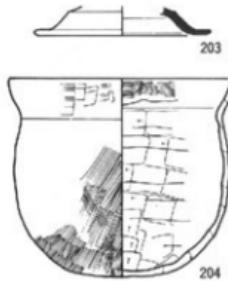
〔遺構〕 I-H-n・15で検出した。平面形は不整円形を呈する。遺構の端をSD35に切られ、中央では中世の遺構により攪乱を受けている。径1.4×1.3m、深さ0.1m。にぶい黄褐色粘質土（炭化物・砂礫を含む）を埋土とする。

〔遺物〕 須恵器蓋（203）が埋土から、土師器甕（204）がほぼ底面から出土した。



- ① 10YR5.5/4灰黄褐色粘質土（炭化物・細礫を含む）
- ② 10YR5.5にぶい黄褐色粘質土（細礫を含む）
- ③ 10YR5.5にぶい黄褐色粘質土（炭化物・細礫を含む）

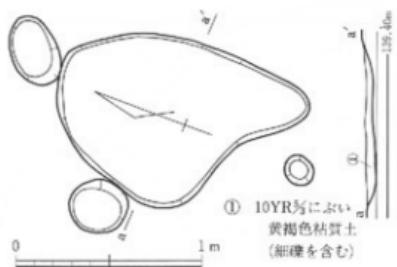
第85図 SK108遺構実測図



第86図 SK108遺物実測図

(12) SK109 (第87・88図、付図6)

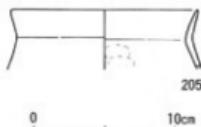
[遺構] I-H-1・16・1・17で検出した。平面形は不整円形を呈する。径 $1.35 \times 0.9m$ 、



第87図 SK109遺構実測図(1/30)

深さ $0.05m$ 。にぶい黄褐色粘質土(細礫を含む)を埋土とする。

[遺物] 土師器甕(205)などが埋土から出土した。



第88図 SK109遺物実測図

(13) SK110 (第89図、図版24、付図6)

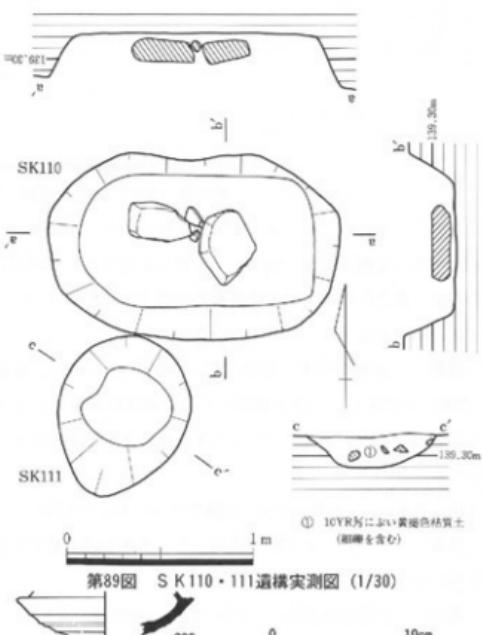
[遺構] I-H-1・17で検出した。平面形は不整円形を呈する。SK111と接する。側壁の一部が焼けている。底面近くに偏平な石を置いている。径 $1.57 \times 0.98m$ 、深さ $0.26m$ 。埋土は炭を多量に含むにぶい黄褐色粘質土である。

[遺物] 埋土から土師器片、須恵器片が出土した。

(14) SK111 (第89・90図、図版24・64、付図6)

[遺構] I-H-1・17で検出した。平面形は不整円形を呈する。SK110と接する。径 $0.88 \times 0.7m$ 、深さ $0.16m$ 。埋土はにぶい黄褐色粘質土(砂礫を含む)である。

[遺物] 埋土から須恵器杯身(206)、須恵器甕(207)などが出土した。



第89図 SK110・111遺構実測図(1/30)



第90図 SK111遺物実測図

(15) SK112 (第91・92図、図版64、付図6)

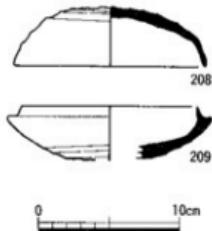


第91図 SK112遺構実測図 (1/30)

【遺構】 I-H-k・16~k・17で検出した。平面形は不整形形を呈する。北側は中世の造構により擾乱を受けている残存長2.35×1.95m、深さ0.12m。埋土は黄褐色粘質土（灰色土ブロック・砂砾を含む）である。

【遺物】 遺構の南側、底面より須恵器杯蓋（208）、須恵器杯身（209）が出土した。出土状況から見て两者は蓋杯としてセットになるものである。その他、同じく床面から土師器片も出土したが、図化できないものだった。

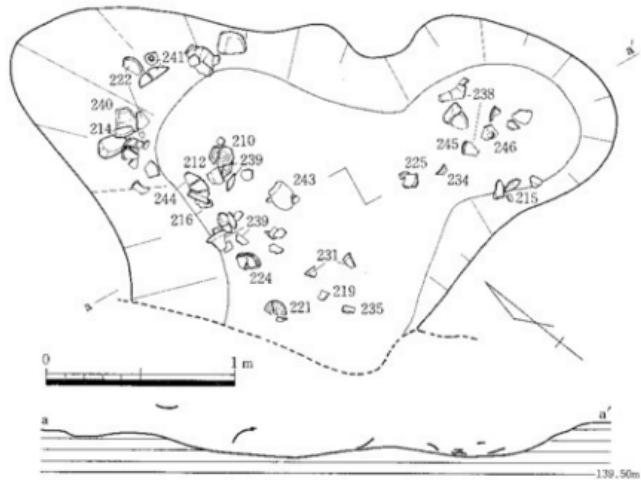
(16) SK113 (第93~95図、図版24・65・66、付図6)



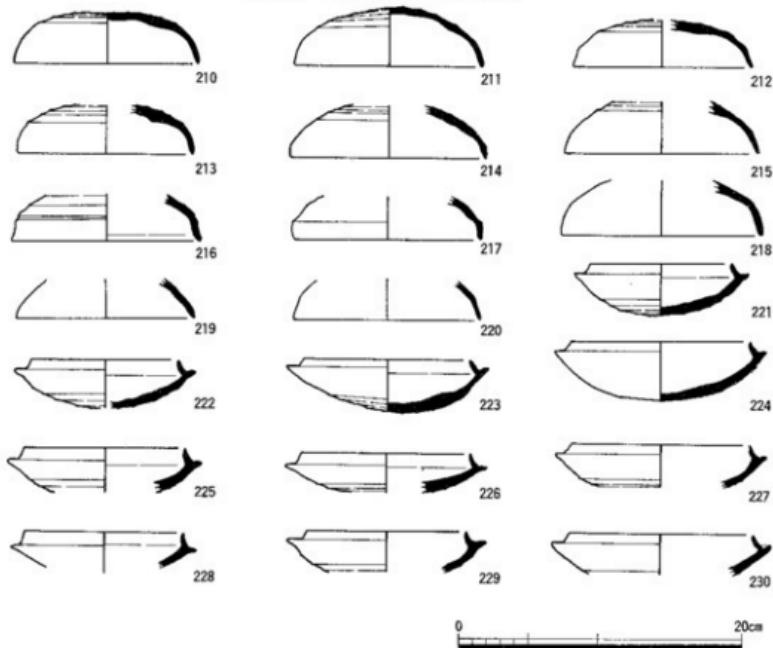
第92図 SK113遺物実測図

【遺構】 I-H-h・20で検出した。平面形は不整形形を呈する。西側は擾乱を受けている。残存長2.65×2.2m、深さ0.18m。

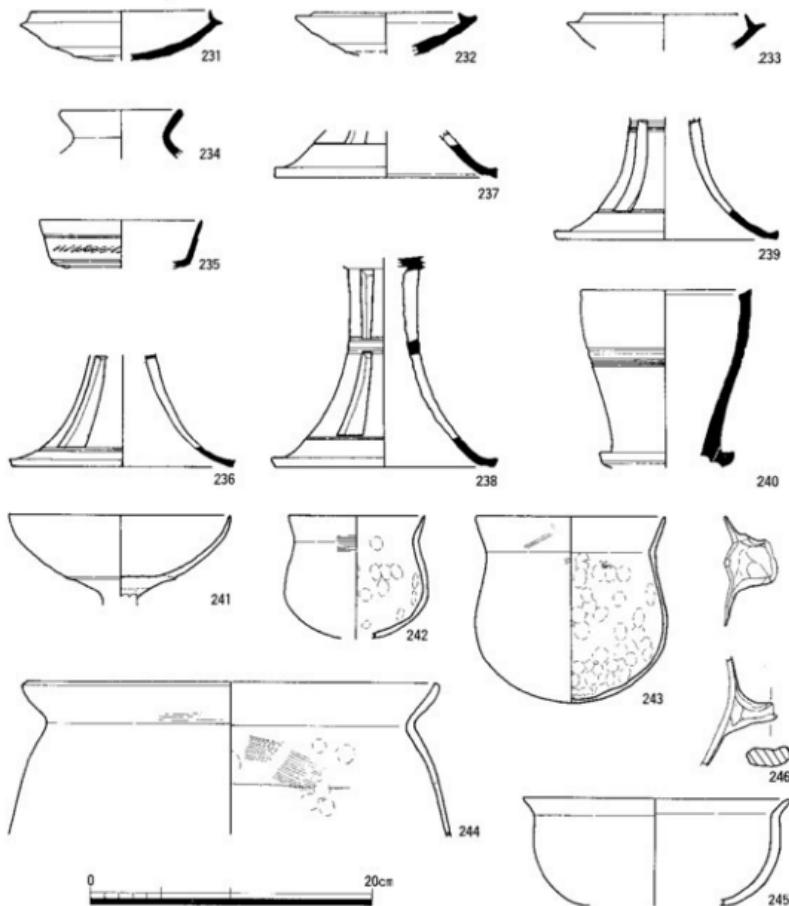
【遺物】 須恵器杯蓋11点（210~220）、須恵器杯身13点（221~233）、須恵器壺1点（234）、須恵器高杯5点（235~239）、須恵器ねり鉢1点（240）、土師器高杯1点（241）、土師器甕3点（242~244）、土師器鉢1点（245）、土師器器種不明把手1点（246）の他、多数の破片が出土した。（215・219・225・231・235・238・246）は底面近くから、その他は埋土から出土した。



第93図 SK 113遺構実測図 (1/30)



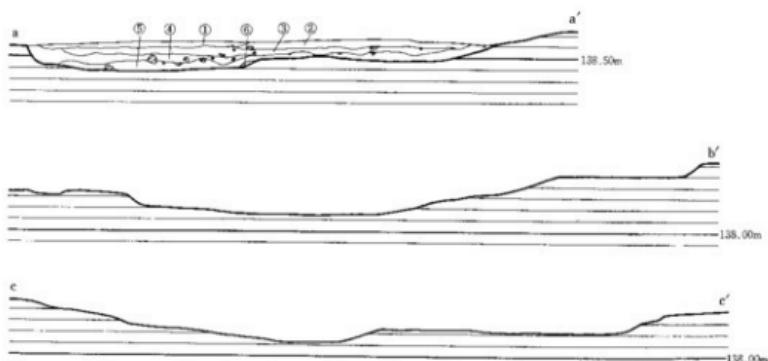
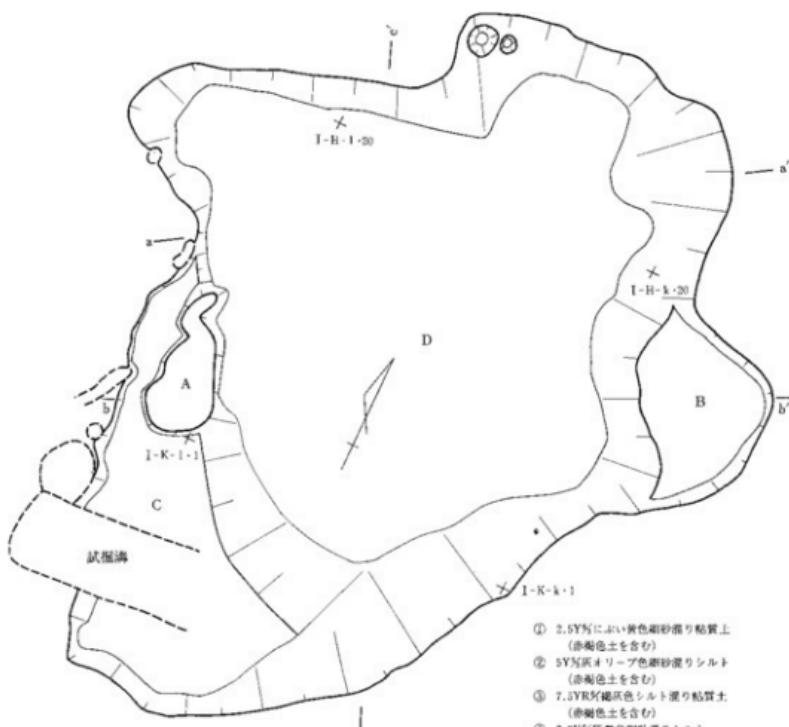
第94図 SK 113遺物実測図 (1)



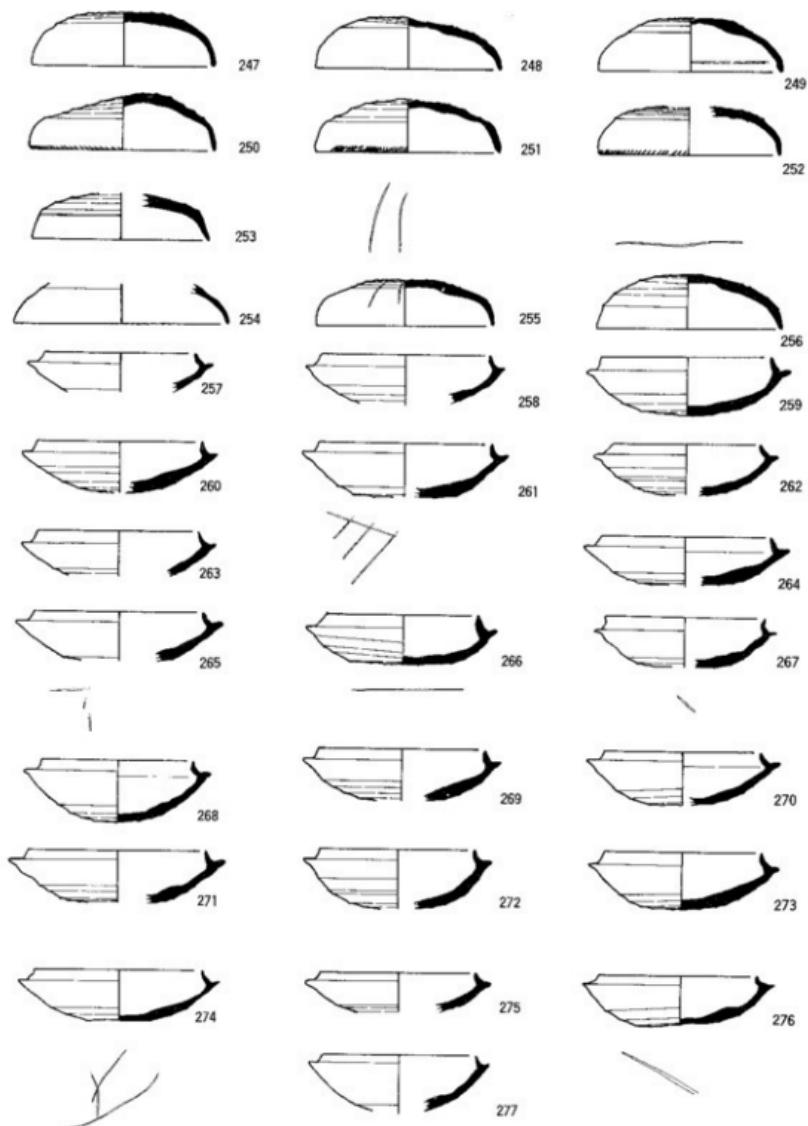
第95図 S K113遺物実測図 (2)

(17) S K114 (第96~101図、図版25・67~71、付図6)

「遺構」 I-H-j・19-K-l・1で検出した。平面形は不整形を呈するが、東側には少し隆起した部分（A）が存在する。一部他の遺構により攢乱を受けている。規模は長11.6×10.1mの長大なもので、本遺跡で検出した土壌の中で最大のものである。東西方向の緩斜面に位置しているため東と西側では0.44mの比高差がある。深さは一様でなく東側（B）と南西側（C）は深い部分がある。Bは深さ0.2~0.25m、Cは0.08m程度である。中央（D）もその中心に向かって緩やかに低くなっていくので、深さは一様でなく最大深0.5mである。埋土は上層から、にぶ

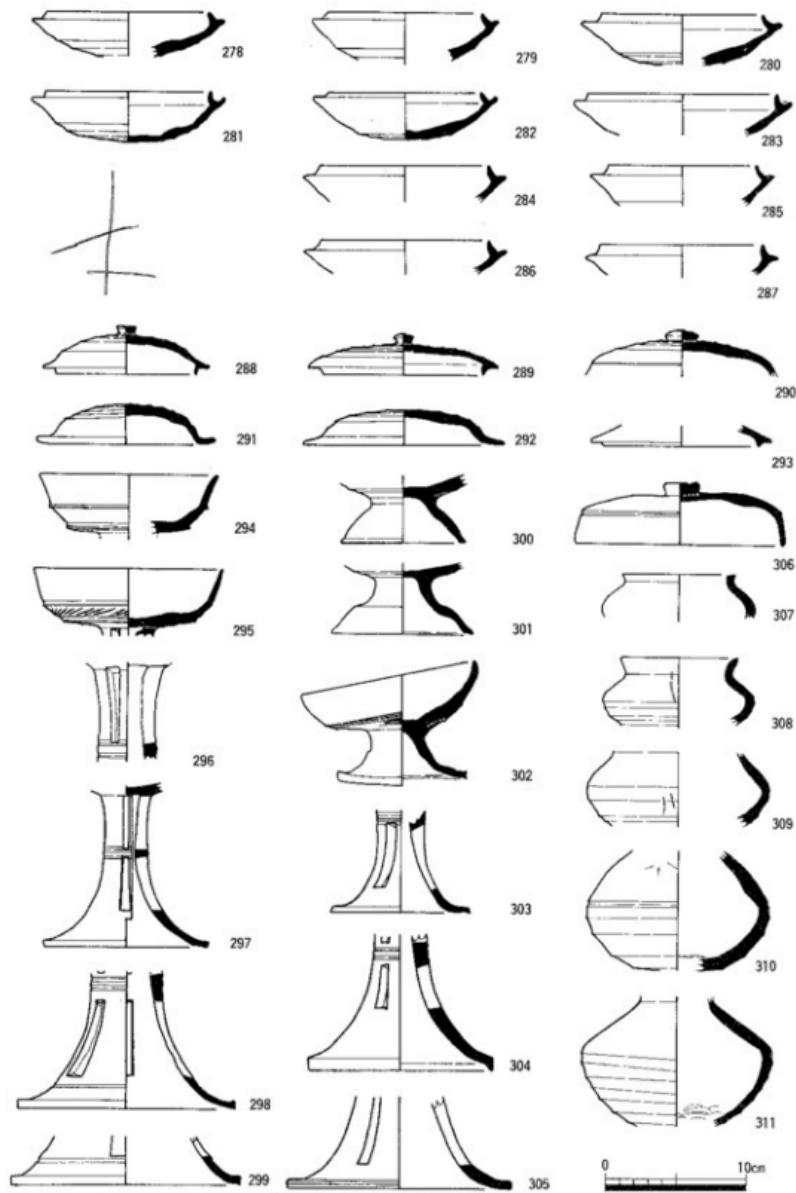


第96図 SK114遺構実測図 (1/80)

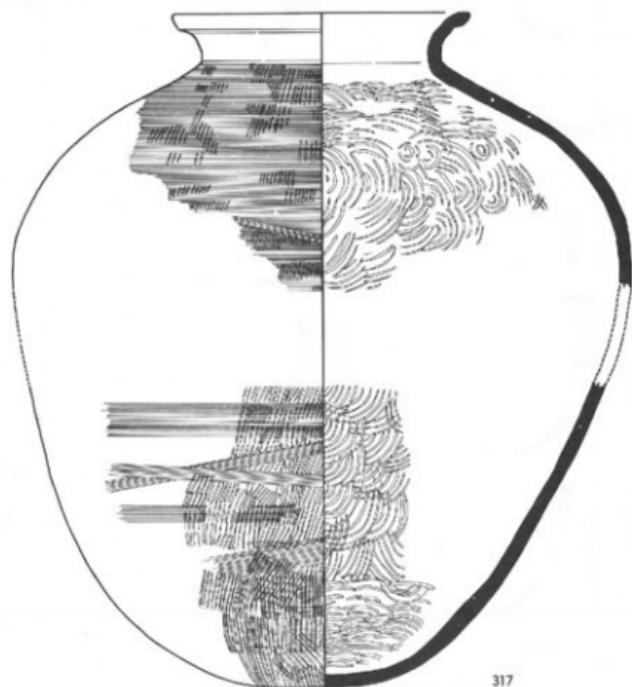
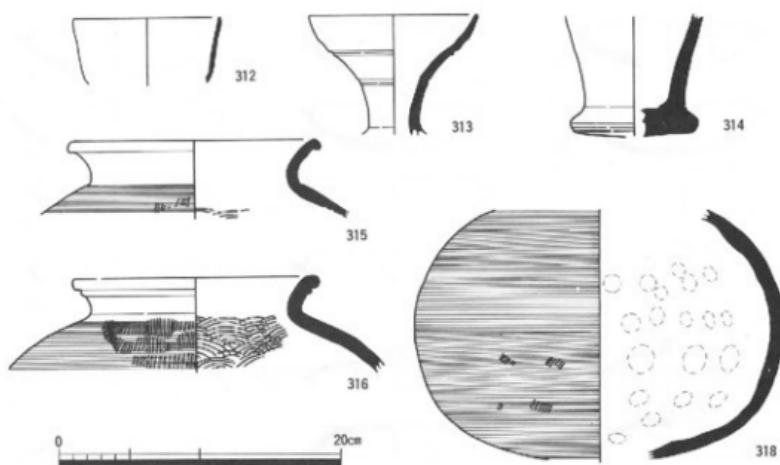


0 20cm

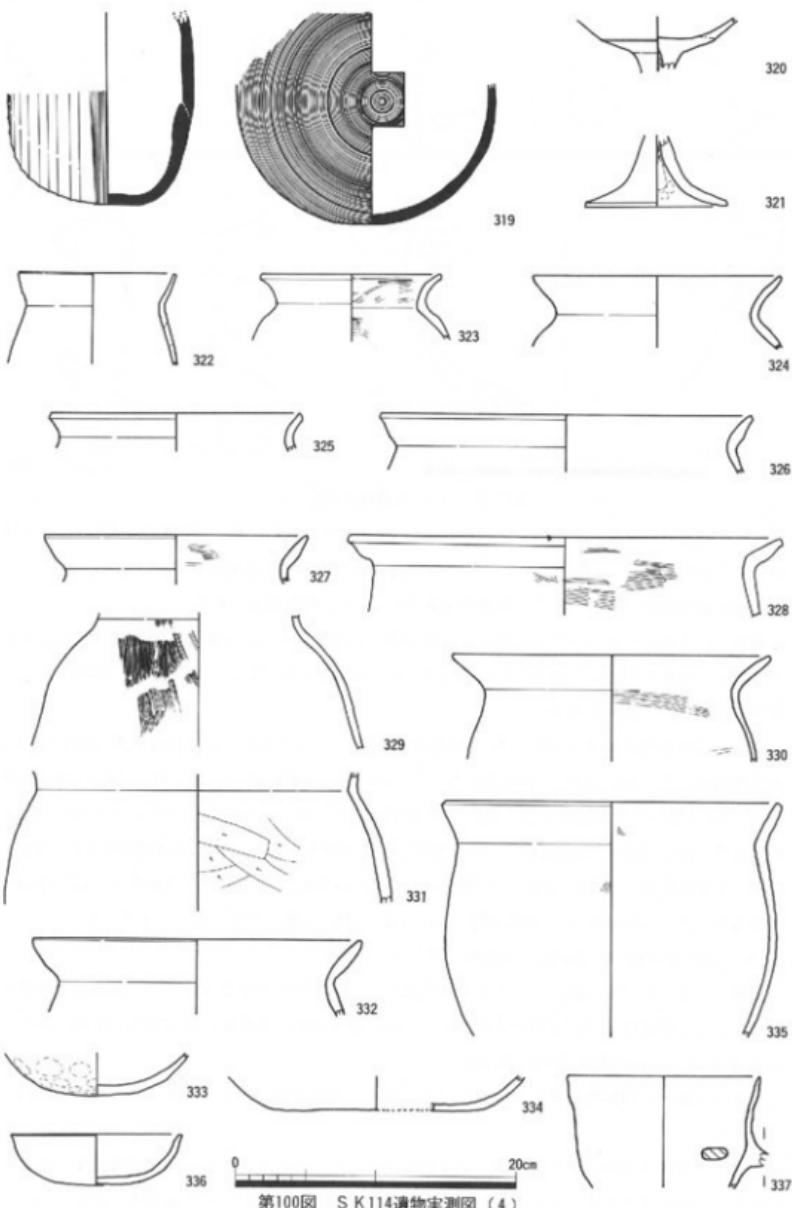
第97図 S K 114遺物実測図 (1)



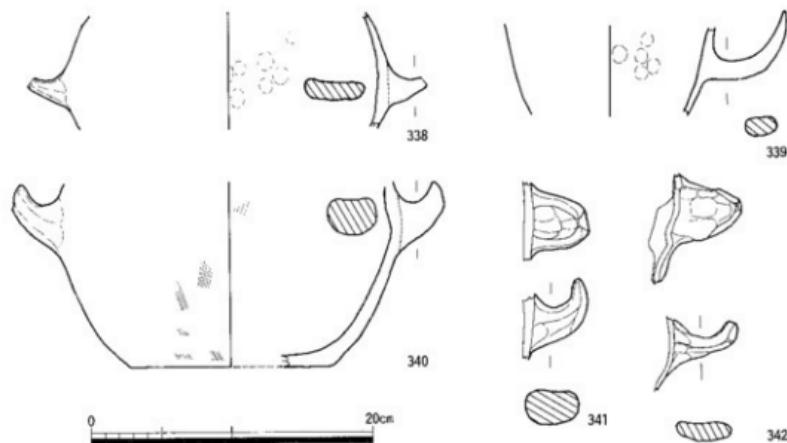
第98図 SK 114遺物実測図 (2)



第99図 SK114遺物実測図(3)



第100図 SK114遺物実測図(4)



第101図 SK 114遺物実測図（5）

い黄色細砂混り粘質土（赤褐色土を含む）、灰オリーブ細砂混りシルト（赤褐色土を含む）、褐灰色シルト混り粘質土（赤褐色土を含む）、灰黄色細砂混りシルト（赤褐色土・砂礫を含む）、オリーブ色細砂混り粘質土（黄褐色土・灰黄色土を含む）、淡い黄色粘土である。

〔遺物〕 遺構の全面にわたって多くの土器が出土した。しかし、土器の検出状況は集中的なものでなく、石や土とともに流入した状態と考えられる。底面から出土したものも一部あるが、大部分は埋土からの出土である。

遺物は須恵器杯蓋10点（247～256）、須恵器杯身31点（257～287）、須恵器蓋6点（288～293）、須恵器高杯12点（294～305）、須恵器壺蓋1点（306）、須恵器短頸壺2点（307・308）、須恵器壺3点（309～311）、須恵器塊1点（312）、須恵器甌1点（313）、須恵器ねり鉢1点（314）、須恵器甌2点（315～317）、須恵器横盆1点（318）、須恵器提瓶1点（319）、土師器高杯2点（320・321）、土師器甌12点（322～333）、土師器鉢2点（335・336）、土師器把手付鉢2点（337・339）、土師器壺2点（338・340）、土師器把手2点（342・342）の他、多数の破片が出土した。

(18) SK 115 (第102～104図、図版26・72～74、付図6)

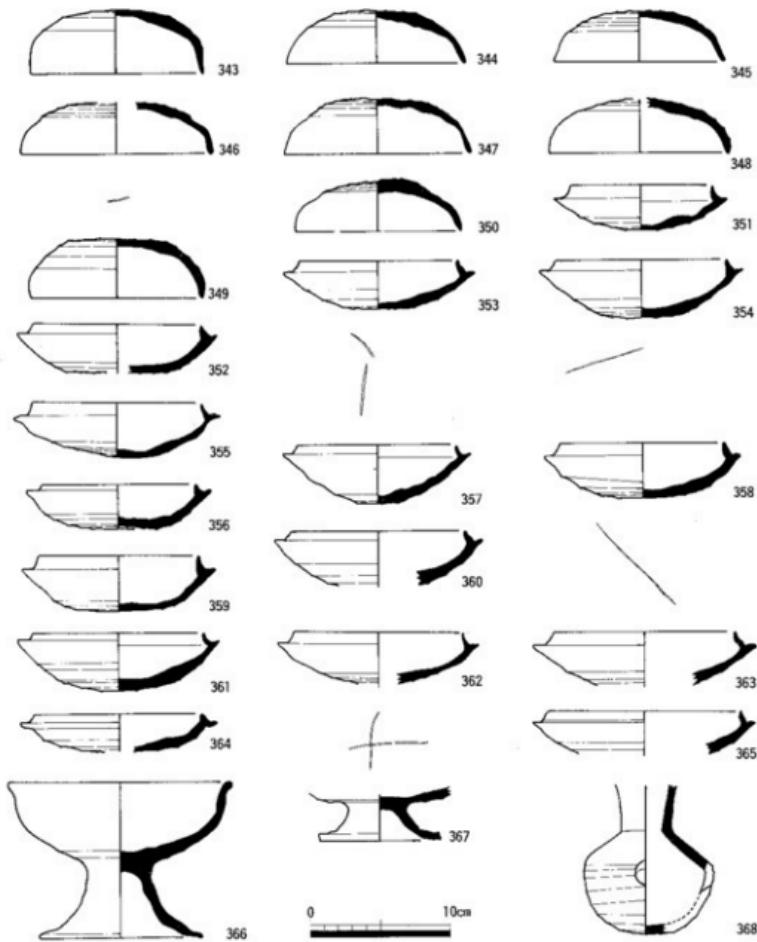
〔遺構〕 I-H-1・20～K-1・1で検出した。平面形は不整形を呈する。南西側は攪乱を受けている。遺構は2段に掘り込まれていて、下段の平面形は不整梢円形である。全体の残存長4.5×2.85m、下段の長深さ0.2～0.4m。

埋土は上層から黄褐色粗砂混りシルト、灰オリーブ粗砂混りシルト、灰オリーブ粗砂混り粘質土である。

〔遺物〕 遺構の全面にわたって多くの土器が出土した。しかし、土器の検出状況は集中的なものでなく、石や土とともに流入した状態と考えられる。底面から出土したものも一部あるが、大



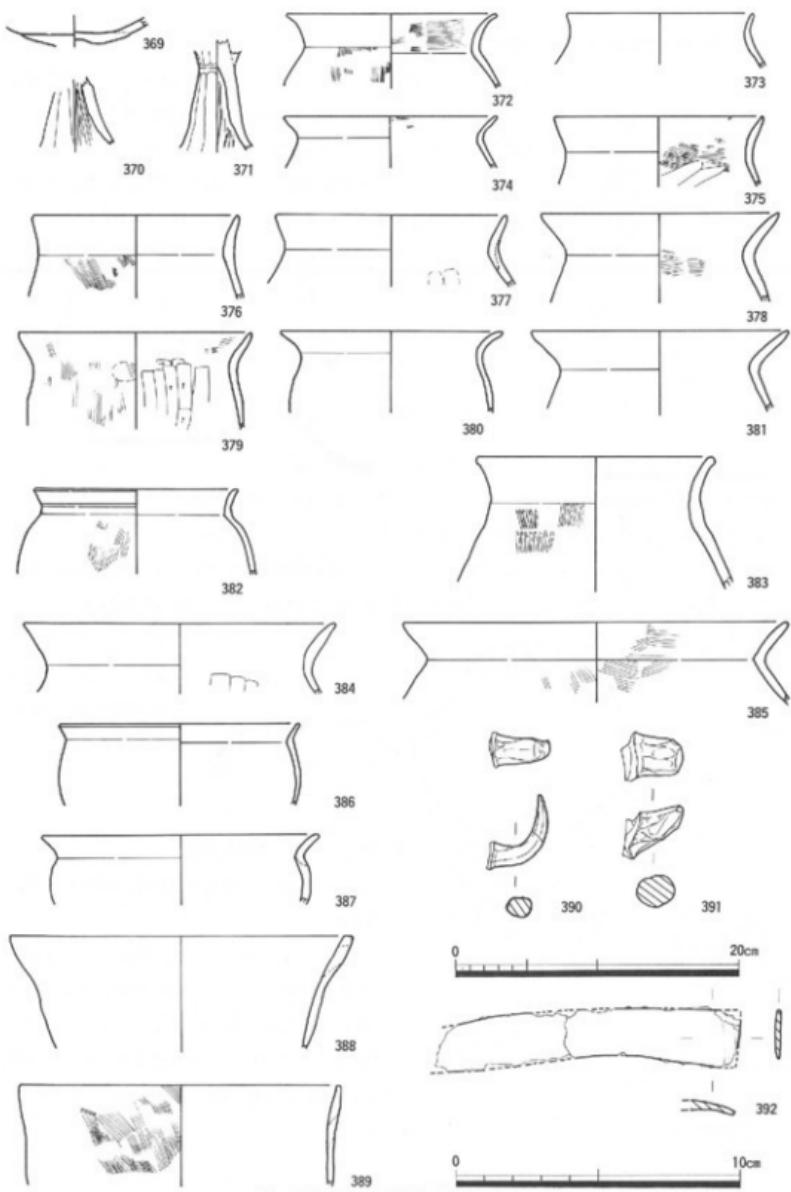
第102図 S K115遺構実測図 (1/30)



第103図 S K 115遺物実測図(1)

部分は埋土からの出土である。

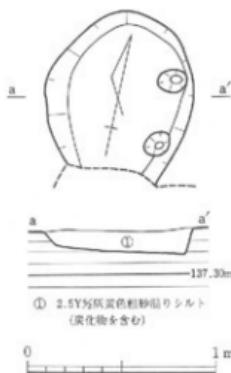
遺物は須恵器杯蓋8点(343~350)、須恵器杯身15点(351~365)、須恵器高杯2点(366・367)、須恵器甌1点(368)、土師器高杯3点(369~371)、土師器甌14点(372~385)、土師器鉢3点(386~388)、土師器瓶1点(389)、土師器把手2点(390・391)、鉄鎌1点(392)の他、多数の土器片が出土した。



第104図 S K115遺物実測図 (2)

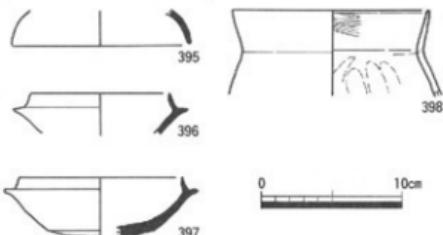
(19) S K119 (第105~106図、図版75、付図6)

〔遺構〕 I-K-1・1で検出した。平面形は梢円形を呈する。S K114を切る。南側は擾乱を受けている。残存長 0.78×0.85 m、深さ $0.08 \sim 0.14$ m。埋土は灰黄色粗砂混りシルト(炭化物を含む)である。



第105図 S K119遺構実測図 (1/30)

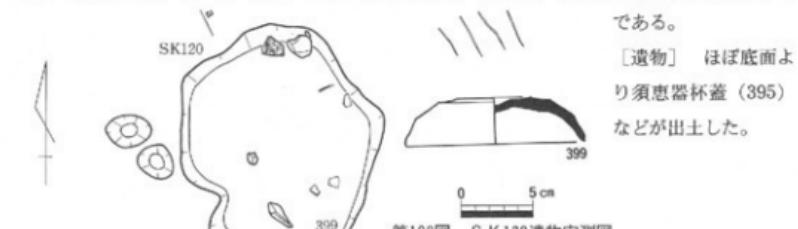
〔遺物〕 埋土より須恵器杯蓋1点(395)、須恵器杯身2点(396・397)、土師器甕1点(398)などが出土した。



第106図 S K119遺物実測図

(20) S K120 (第107・108図、図版75、付図6)

〔遺構〕 I-K-k・1~1・2で検出した。平面形は不整梢円形を呈する。南側は他の遺構によって擾乱を受けている。長 1.4×1.07 m、深さ $0.04 \sim 0.06$ m。埋土は黄褐色粗砂混りシルト



第107図 S K120・121遺構実測図 (1/30)

である。

〔遺物〕 ほぼ底面より須恵器杯蓋(395)などが出土した。

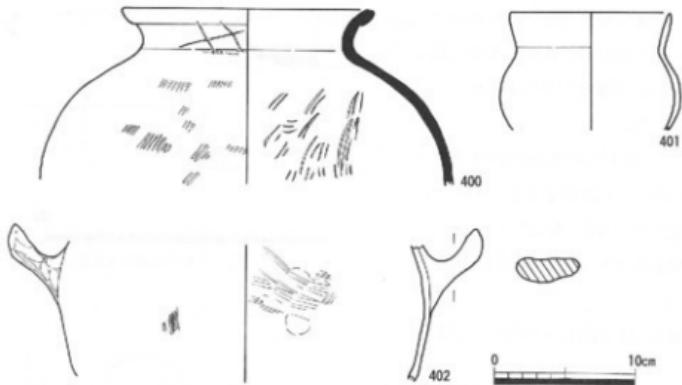
第108図 S K120遺物実測図

(21) S K121 (第107・109図、図版27・76、付図6)

〔遺構〕 I-K-1・2で検出した。平面形は不整梢円形を呈する。長 0.46×0.36 m、深さ 0.06 m。埋土は黄褐色粗砂混りシルトである。

〔遺物〕 ほぼ底面より須恵器甕(400)、土師器甕(401)、土師器鍋(402)などが出土した。

第109図 S K120・121遺構実測図 (1/30)

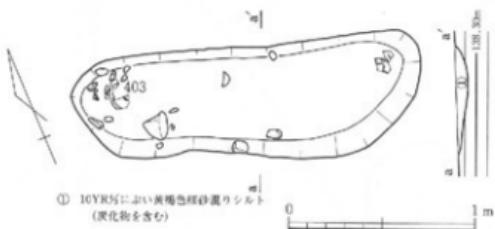


第109図 S K121遺物実測図

(21) S K122 (第110・111図、図版75、付図6)

【遺構】 I-K-m・4で検出した。平面形は長椭円形を呈する。長 1.85×0.57 m、深さ0.07m。埋土はにぶい黄褐色細砂混りシルト（炭化物を含む）である。

【遺物】 ほぼ底面より須恵器台付壺と思われる脚部（403）などが出土した。



第110図 S K122遺構実測図 (1/30)

第111図 S K122遺物実測図

(22) S K123 (第112・113図、図版27・75、付図6)

【遺構】 I-K-m・4・n・4で検出した。

平面形は不整円形を呈する。長 0.7×0.63 m、深さ0.1~0.13m。埋土は上層が浅黄色粗砂混りシルト（炭化物を含む）、下層が黒褐色細砂混り粘土（炭化物を多量に含む）

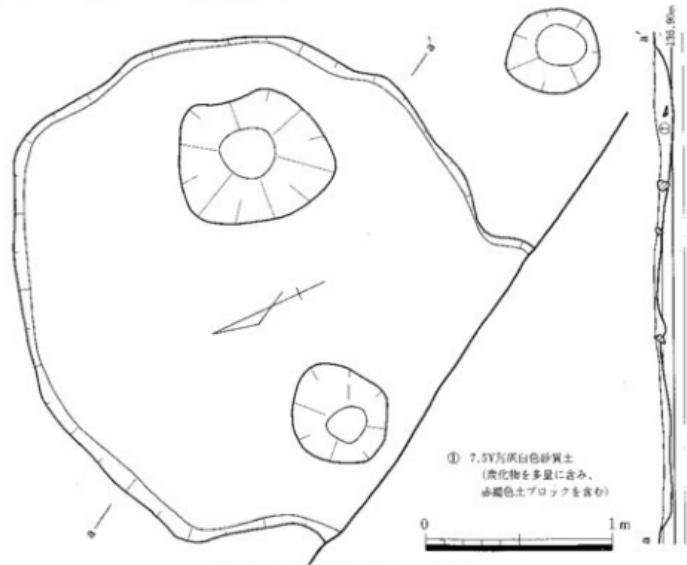


第112図 S K123遺構実測図 (1/20)

である。土壤の壁には焼けた痕跡は明確に残っていないが、底面に多量の炭化物が残り、土壤内で火が使われたことは間違いない。

〔遺物〕 埋土から須恵器杯身 2 点 (404・405)、土師器壺 1 点 (406)、土師器甕 1 点 (407) などが出土した。2 次焼成を受けた土師器甕は図化できなかった。

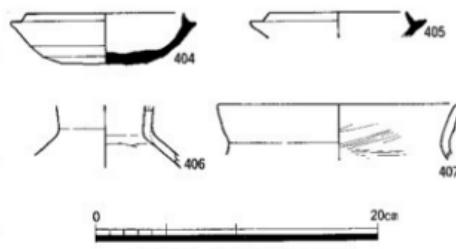
(23) S K 133 (第114・115図、付図 6)



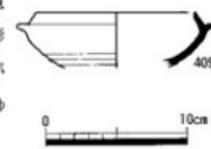
第114図 S K 133遺構実測図 (1/30)

〔造構〕 I-K-q・2で検出した。平面形は不整円形に近いが、南西側は調査区外にある。検出長 $2.58 \times 2.6\text{m}$ 、深さ $0.02\sim 0.1\text{m}$ 。遺構内には土壤状のおちが 2ヶ所ある。東側のものは平面形が不整円形を呈し、径 $0.82 \times 0.7\text{m}$ 、深さ 0.26m である。西側のものは平面形が不整円形を呈し、径 $0.5 \times 0.5\text{m}$ 、深さ 0.24m である。埋土は灰白色砂質土（炭化物を多量に含み、赤褐色土ブロックを含む）である。

〔遺物〕 埋土から須恵器杯身 (409) などが出土した。



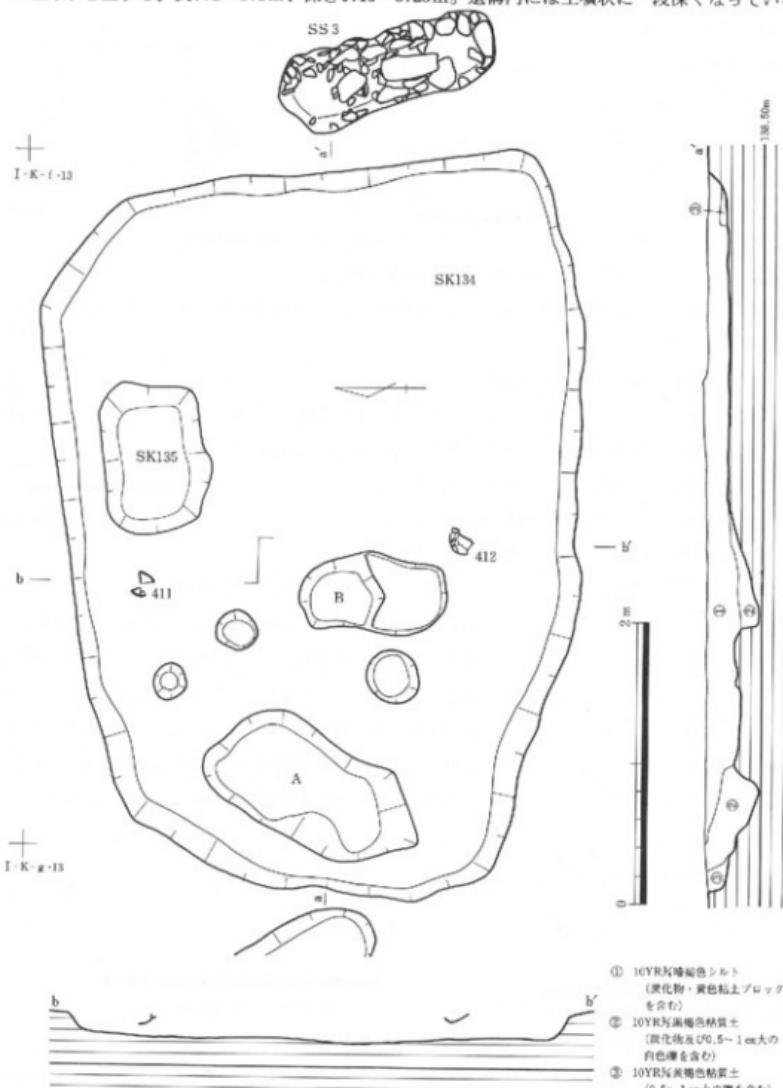
第115図 S K 133遺物実測図



第115図 S K 133遺物実測図

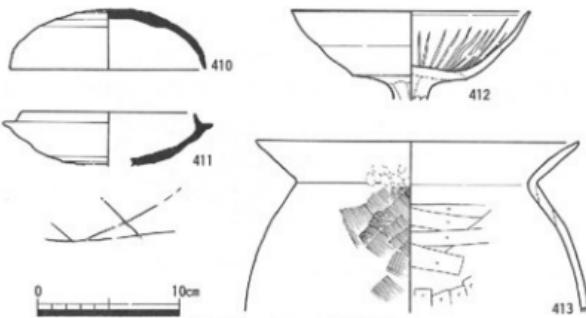
(24) SK134 (第116・117図、図版28・66、付図7)

[遺構] I-K-f-13～q-13で検出した。SK135によって擾乱を受けている。平面形は不整方形を呈する。長5.1×3.8m、深さ0.15～0.25m。遺構内には土壤状に一段深くなっている



第116図 SK134遺構実測図 (1/40)

部分がある。Aは平面形が不整椭円形を呈し、径 1.55×0.75 m、深さ0.18mである。Bは平面形が不整橢円形を呈し、径 1.05×0.55 m、深さ0.23mである。埋土は上層から黄褐色粘質土（礫を含む）、暗褐色粘質土（炭化物・



第117図 S K134遺物実測図

黄色粘土ブロックを含む）、黒褐色粘質土（炭化物・礫を含む）

【遺物】 埋土から須恵器杯蓋（410）、須恵器杯身（411）、土師器高杯（412）、土師器甕（413）などが出土した。

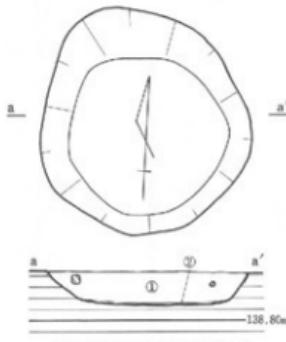
(25) S K135 (第116・118図、付図7)

【遺構】 I-K-f・13で検出した。S K134の埋土に掘り込まれていた。平面形が不整形を呈する焼土壙である。長 1.1×0.7 m、深さ0.22m。埋土は黒褐色粘土（炭化物・焼土を含む）



第118図 S K135遺物実測図

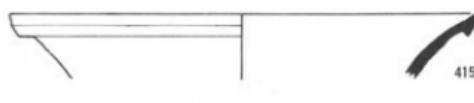
(26) S K136 (第119・120図、図版76、付図7)



第119図 S K136遺構実測図(1/30)

【遺構】 I-K-d・14~15で検出した。平面形が不整円形を呈する焼土壙である。長 1.2×1.12 m、深さ0.18m。埋土は上層が赤黒色粘土（炭化物を含む）、下層が炭層である。ところで、S K136から北西1.5mにはS K136とはほぼ同規模の焼土壙があり、こちらからは中世の遺物が出土した。それで、S K136も中世の遺構である可能性がある。

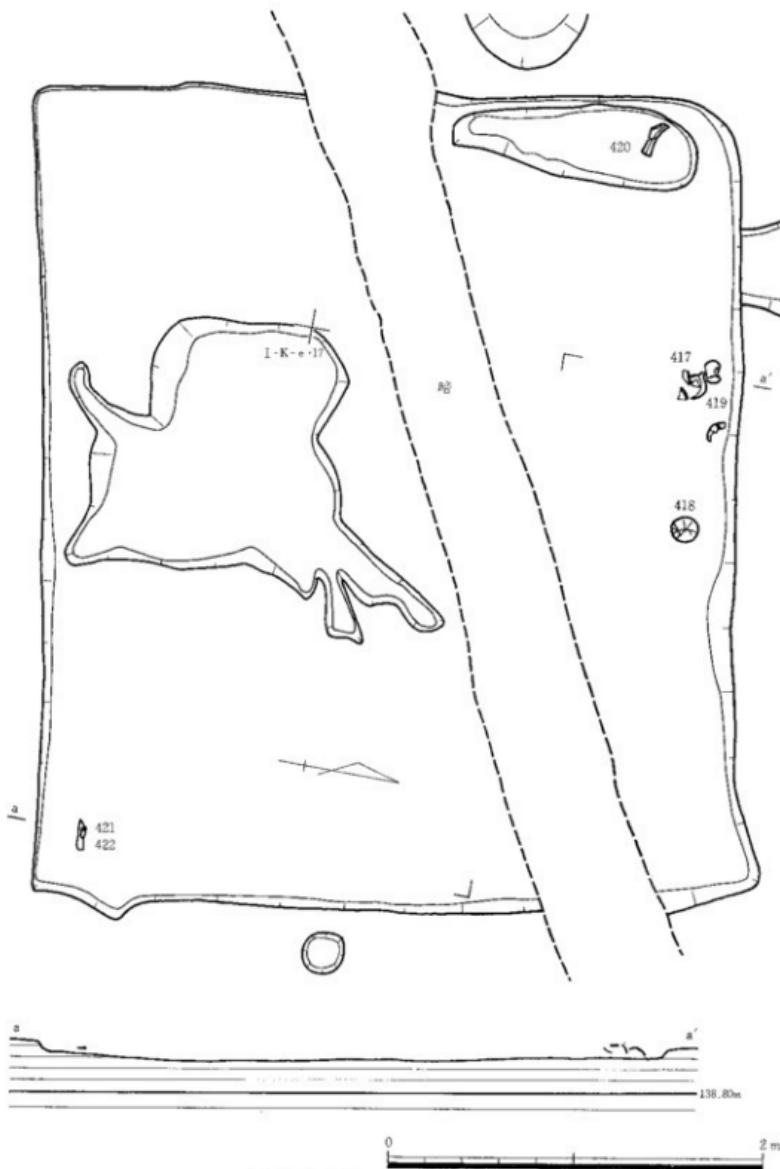
【遺物】 埋土から須恵器甕（415）などが出土した。



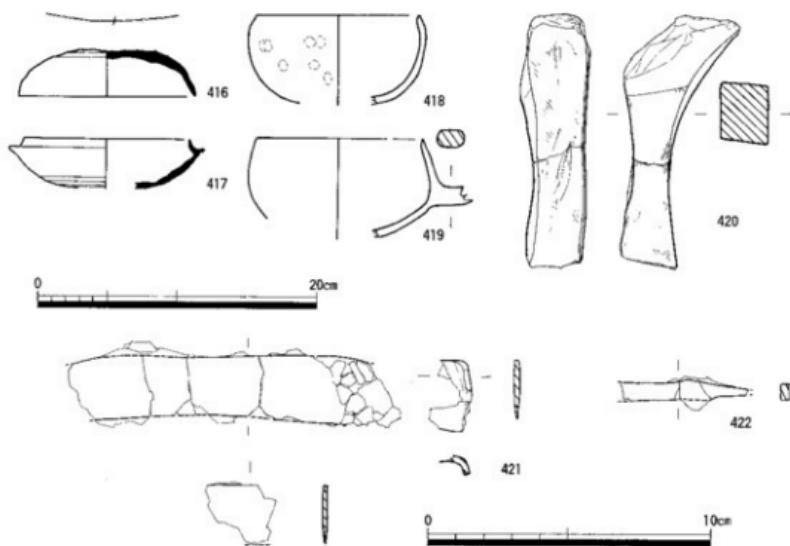
第120図 S K16遺物実測図

(27) S K137 (第121・122図、図版29・76、付図7)

【遺構】 I-K-d・16~e・17で検出した。方墳であるS T 4南東隅の陸橋部分に位置し、



第121図 SK 137遺構実測図 (1/30)



第122図 SK 137遺物実測図

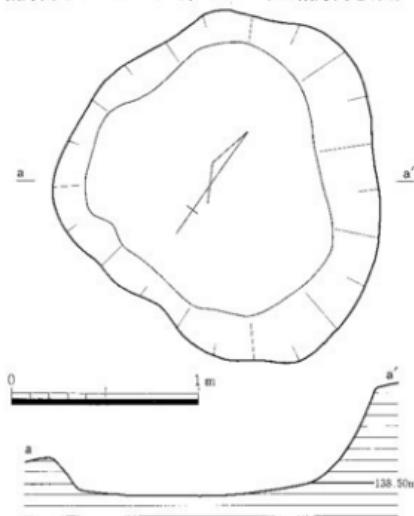
ST 4 の周溝を一部切る。中央部は暗渠により擾乱を受ける。平面形は整った方形を呈する。主軸方向は S-80-E で、ST 4 の主軸方向とほぼ一致し興味深い。長 $4.4 \times 3.7m$ 、深さ $0.07m$ 。

底面は平坦であるが、西側と南側やや中央よりの 2ヶ所に数cm 土壌状におちる部分がある。埋土は暗褐色粘土（礫を含む）である。

【遺物】 ほぼ底面より須恵器杯蓋 1 点 (416)、須恵器杯身 1 点 (417)、上師器把手付鉢 2 点 (418・419)、砥石 1 点 (420)、鉄鎌 1 点 (421)、不明鐵器 1 点 (422) などが出土した。(422) は (421) の上にのっている状態で出土した。

(28) SK 138 (第123・124図、図版75、付図7)

【遺構】 I-K-f・19で検出した。平面形は不規則円形を呈する。長 $1.9 \times 1.7m$ 、深さ $0.58m$ 。



第123図 SK 138遺構実測図 (1/30)

〔遺物〕 埋土より土師器瓶（423）が出土した。

(29) SK139 (第137図、付図7)

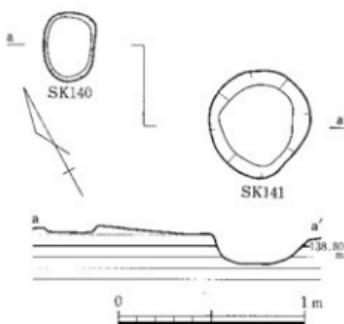
〔遺構〕 I-K-d・20～N-e・1で検出した。平面形は不整形を呈する。長 3.05×1.5 m、深さ0.48m。主軸方向N-57-E。暗褐色粘土（明黄褐色土・黒色土ブロックを含む）を埋土とする。ST6の中央に位置し主体部と思われたが、遺物は出土しなかった。

〔遺物〕 なし。

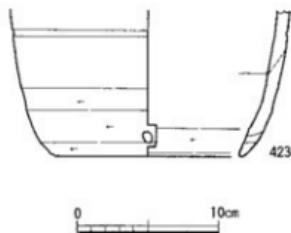
(30) SK140 (第125・126図、図版76、付図7)

〔遺構〕 I-K-d・20～N-e・1で検出した。ST7の南東1.2mに位置する。平面形は梢円形を呈する。長 0.37×0.27 m、深さ0.04m。

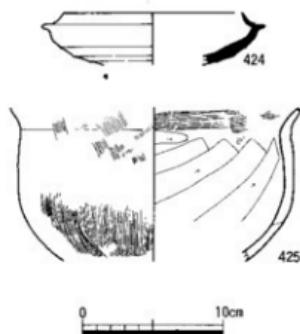
〔遺物〕 ほぼ底損から須恵器杯身（424）、土師器鉢（425）が出土した。



第125図 SK140・141遺構実測図



第124図 SK139遺物実測図

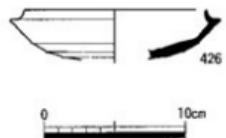


第126図 SK140遺物実測図

(31) SK141 (第125・127図、図版75、付図7)

〔遺構〕 I-N-d・1で検出した。ST7の南東約0.3mに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。長 0.57×0.53 m、深さ0.15m。

〔遺物〕 ほぼ底面から須恵器杯身（426）が出土した。



第127図 SK141遺物実測図

(32) SK142 (第137図、付図7)

〔遺構〕 I-N-c・2～d・2で検出した。平面形は不整形を呈する。北側は中世の遺構によって擾乱を受けている。長 2.3×0.76 m、深さ0.21m。主軸方向N-58-E。暗褐色粘土を埋土とする。ST7の中央に位置し主体部と思われたが、遺物は出土しなかった。

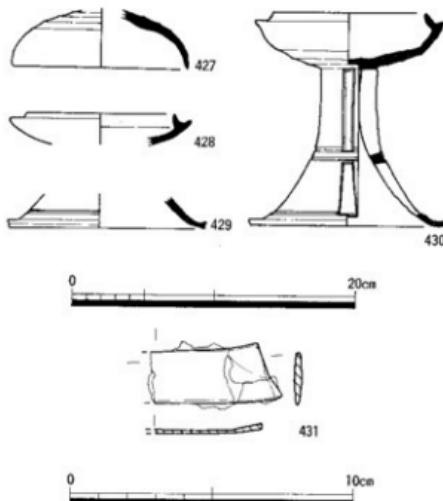
〔遺物〕 なし。

(33) SK 143 (第128・129図、図版75、付図7)

〔遺構〕 I-M-t・10-t・11で検出した。遺構の南西側が調査区外に伸びるため、平面形は明らかでない。北東側は中世の遺構によって攪乱を受けている。検出長2.23×1.08m、深さ0.12m。東壁に沿って径0.7m、深さ0.1m土壌状に1段深くなっている部分がある。埋土は上層が黄褐色粘土、下層が暗赤褐色粘土（炭化物・焼土を含む）である。

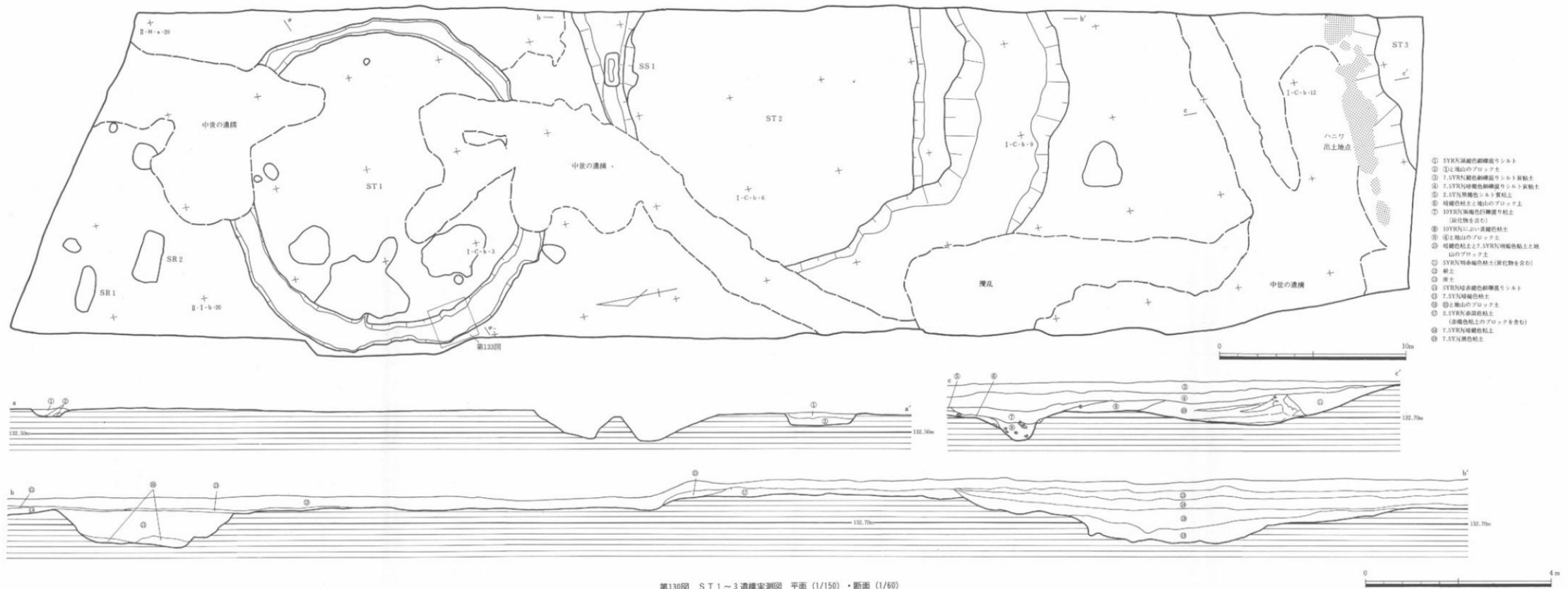


第128図 SK 143遺構実測図 (1/30)



第129図 SK 143遺物実測図

〔遺物〕 ほぼ底面から須恵器杯蓋1点（427）、須恵器杯身1点（428）、須恵器高杯2点（429・430）、鉄鎌1点（431）などが出土した。



6. 古墳 (S T)

(1) 概要

本遺跡では古墳と思われる遺構8基を検出した。いずれも2・4地区の丘陵先端部の調査区での検出である。墳丘は開墾によってほとんど削平され周溝のみが残存する。これらは3群にまとめることができる。北から順に第1群、第2群、第3群とする。この分布状況は土壇墓の分布状況とも一致し、墓群としてまとめることができる。

第1群はII-H-I区およびI-B-C区に位置し、S T 1～3は等高線に沿って南北に並ぶ。S T 1が円墳で、S T 2も円墳と思われるが、S T 3は調査区が制限されているため形態・規模は不明である。この内、S T 3は埴輪を使用している。周溝からの出土遺物から見て、北からS T 1→2→3の順に築造されたものと思われる。

第2群はI-I区に位置するもので、S T 8の1基のみを確認した。墳形は円墳と思われる。周溝から馬具類や鐵器などの鐵器類の他、多くの須恵器が出土した。

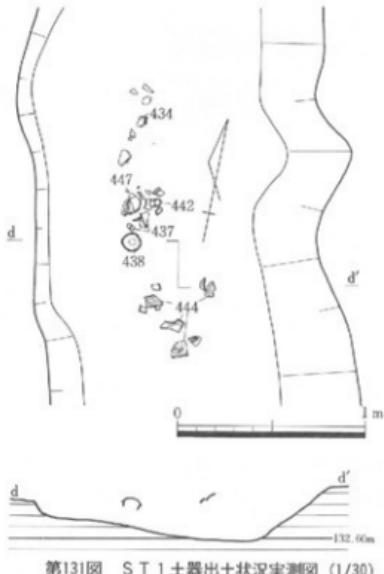
第3群はI-K-N区に位置し、S T 4～7が等高線に沿ってほぼ北北西—南南東方向に並ぶ。いずれも方墳と思われるが、S T 6・7はやや不整形を呈する。周溝からの出土遺物から見て、南からS T 6→5→4の順に築造されたものと思われる。(S T 7は時期不明)。

第1群のS T 2と第3群のS T 4は直線距離で35m離れている。両群は同時期に古墳を築くが、第1群が円墳を採用するのに対し、第3群は方墳を採用している。当時の墓制を考える上で興味深い。

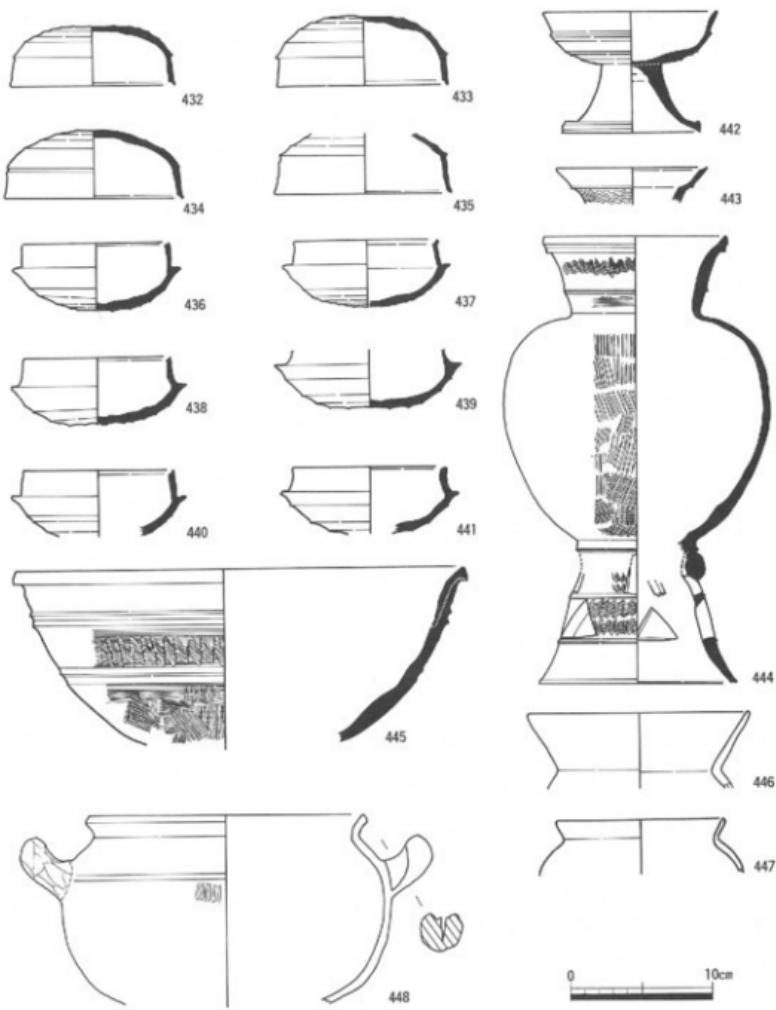
(2) S T 1 (第130～132図、図版30・31・77、78、付図2)

〔遺構〕 I-B-s・4～C-b・9で検出した。墳丘は開墾によって削平され周溝のみが残存する。この周溝も北東側と南側は中世の遺構によって擾乱を受けている。円墳と思われる。古墳の規模は周溝部分を含まないと径14.0～15.5m、周溝部分を含めると径17.2～18.9mである。周溝は幅0.5～1.9m、深さ0.12～0.3m。周溝の埋土は上層が黒褐色細砂混りシルト、下層が上層と地山ブロック土である。周溝の底レベルは東側が133.85m、西側が133.07mで東より西が0.78m低い。これは標高が東から西へ低くなっているためである。

〔遺物〕 須恵器杯蓋4点(432～435)、須恵器杯身6点(436～441)、須恵器高杯1点(442)、



第131図 S T 1 土器出土状況実測図 (1/30)



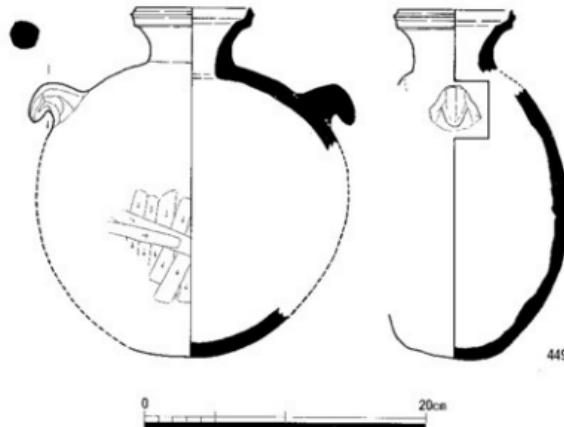
第132図 S T 1 遺物実測図

須恵器甕 1点 (443)、須恵器台付壺 1点 (444)、須恵器器台 1点 (445)、土師器甕 1点 (446)、
土師器甕 1点 (447)、韓式系土器壺 1点 (448) などが出土した。すべて周溝埋土からの出土で、
特に I-C-b+2 区からまとめて出土した。周溝から出土した須恵器は 5 地区で検出された
古墳時代中期住居群 (S I 9~16) と一致し、また韓式系土器が出土することなどこれら住居群

との関係が示唆される。

(3) S T 2 (第130・133図、図版30・31・78、付図2)

〔遺構〕 II-I-a・20~C-b・3で検出した。墳丘は開墾によってほとんど削平され、周溝のみが残存する。しかし、土層図(第130図)中の17はS T 2の盛土部分と思われる。周溝の北西側は中世の遺構によって擾乱を受けている。円墳と思われるが、古墳の東側が調査区外にあるため不確実である。古墳の規模は周溝部分を含まないと径18.0m、周溝部分を含めると径約26mと推定される。北側周溝中央には竪穴系小石室(S S 1)が検出された。周溝は幅1.3~6.3m、深さ0.26~0.89m。周溝の埋土は北側と南側で違うが、北側では上層が暗褐色粘土シルト、下層が上層と地山のブロックから須恵器壺瓶1点(449)などが出土した。

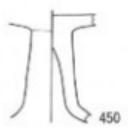


第133図 S T 2 遺物実測図

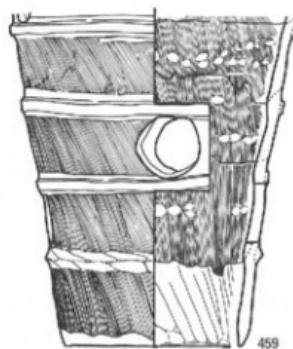
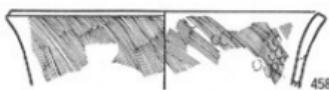
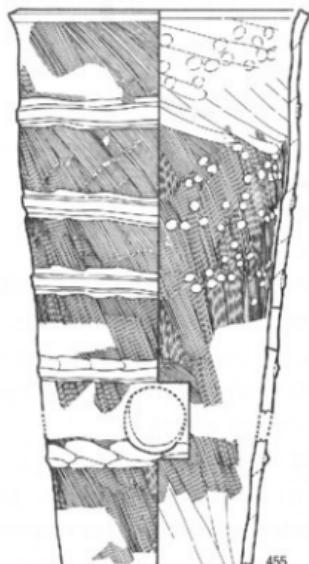
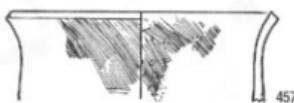
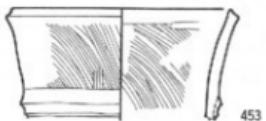
(4) S T 3 (第130・134~136図、図版30・32・79~81、付図2)

〔遺構〕 I-C-a・12~c・13で検出された。遺構の大部分が調査区外にあるため、形態・規模など全く分からぬ。S T 3が位置する付近の包含層からは多量の埴輪が出土し、また、土層図(第130図)中の11から多くの埴輪が帶状に出土した。この出土状況から調査区南端のテラス状になった部分を古墳であると推定した。しかし、削平を受けているため、その部分に埴輪が樹立していた痕跡は全く認められない。この部分のレベルは131.38mである。

〔遺物〕 墓輪が大部分を占める。周辺から出土した埴輪の中で、土層中11から帶状に出土したものをS T 3、その他のものを包含層(第191~194図)出土とした。普通円筒埴輪(453~465)以外に、朝顔形円筒埴輪(469・470)も出土した。形象埴輪としては人物埴輪(471・474)や家形埴輪(475)の一部と思われるものが出土した。その他埴輪に混在して土師器高杯の脚部3点(450~457)も出土した。

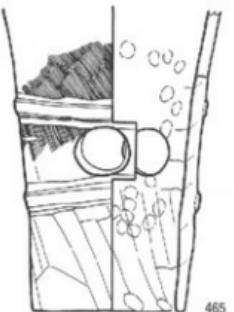
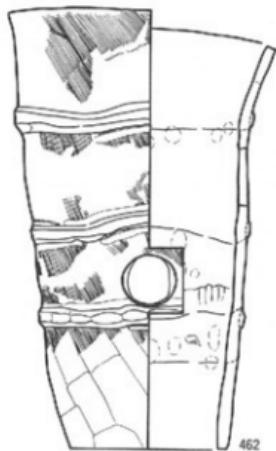
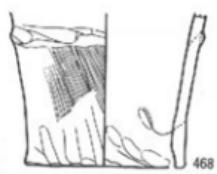
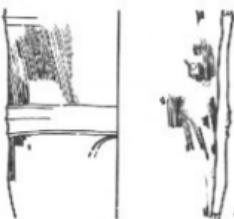
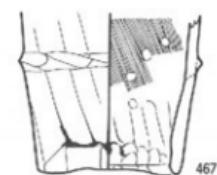
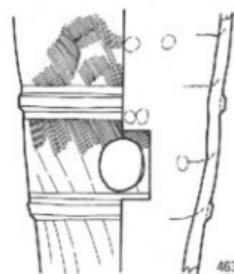
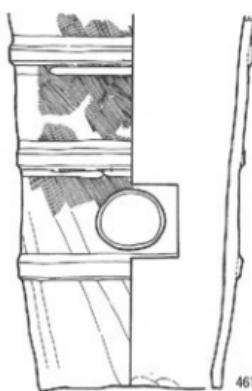


0 10cm



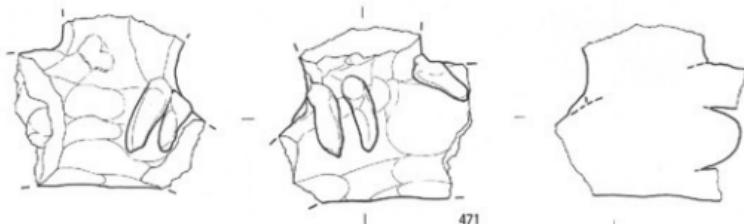
0 40cm

第134図 S T 3 遺物実測図 (1)



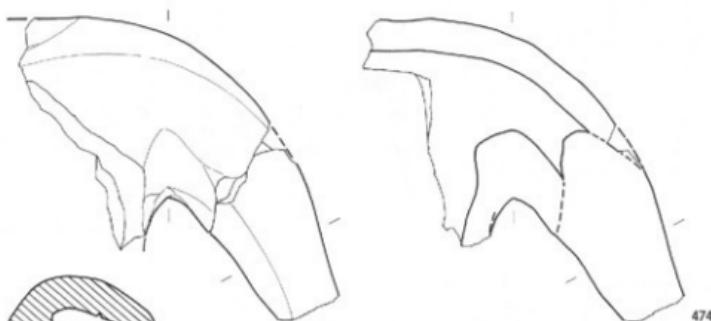
0 40cm

第135図 S T 3 遺物実測図 (2)

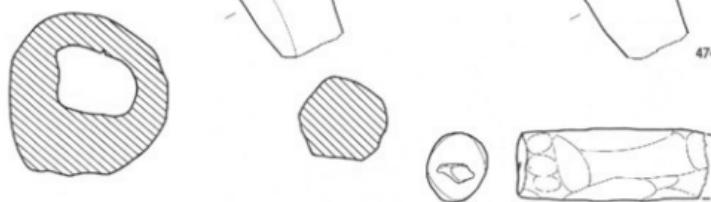


471
472

473



474



0 10cm

475

第136図 S T 3 遺物実測図 (3)



第137図 S T 4 ~ 7 道構実測図 平面 (1/150) * 断面 (1/60)

(5) S T 4 (第137~139図、図版33・34・78、付図7)

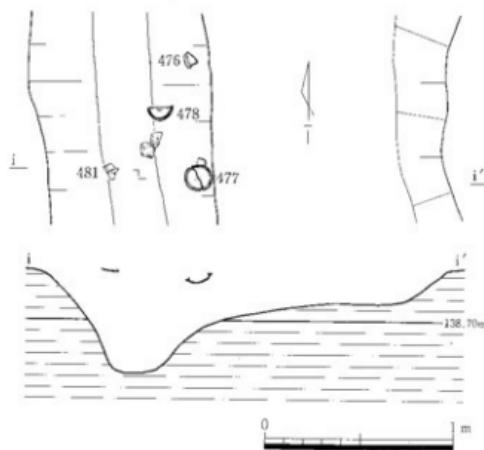
〔遺構〕 I-K-e・15~q・17で検出した。墳丘は開墾にはって削平され、周溝のみが残存する。周溝西側は中世の溝などにより擾乱を受けている。方墳と思われ、古墳の規模は周溝部分を含まないと長9.9(東西)×8.0(南北)m、周溝部分を含めると長11.4(東西)×11.1(南北)mである。主軸方向はN-81-E。

周溝は幅0.6~1.7m、深さ0.06~0.56m。周溝の埋土は南側で、上層から黒褐色粘土、明黄褐色粘土、にぶい黄褐色粘土である。周溝は南東隅で途切れ、陸橋部分を有する。ここにS T 137がS T 4と主軸方向を同じくして位置している。周溝の西側および南側と東側の西よりの部分は周溝が2段に掘られている。周溝の底レベルは東側が139.02m、西側が138.46mで東より西が0.56m低い。

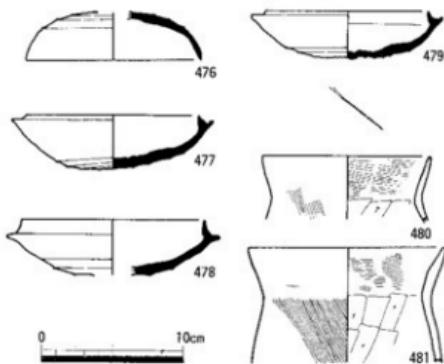
〔遺物〕 周溝埋土から須恵器杯蓋1点(476)、須恵器杯身3点(477~479)、土師器甕2点(480~481)などが出土した。

(6) S T 5 (第137・140図、図版33・35・82、付図7)

〔遺構〕 I-K-d・17~f・19で検出した。墳丘は開墾によって削平され、周溝のみが残存する。周溝西側は中世の溝により、北側は暗渠によって擾乱を受けている。また、南東側周溝の一部は調査区外にある。方墳と思われ、古墳の規模は周溝部分を含まないと長8.5(東西)×7.3(南北)m、周溝部分を含めると長10.8(東西)×9.5(南北)mである。主軸方向はN-77-E。



第138図 S T 4 土器出土状況実測図 (1/30)



第139図 S T 4 遺物実測図



第140図 S T 5 遺物実測図

周溝は幅0.48~2.1m、深さ0.08~0.27m。周溝の埋土は南側で、上層から暗褐色粘土、明黄色粘土、黒褐色粘土（炭化分を含む）、にぶい黄褐色粘土（砂粒を含む）である。周溝は南側中央と北側中央や西よりの2ヶ所で途切れ、陸橋部分を有する。周溝の底レベルは東側が139.00m、西側が138.71mで東より西が0.29m低い。

〔遺物〕 埋土から須恵器杯身（482）などが出土した。

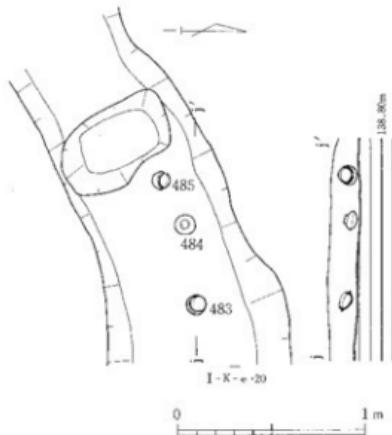
(7) S T 6 (第137・141~143図、図版33・35・36・82、付図7)

〔遺構〕 I-K-d・19~e・20で検出した。墳丘は開墾によって削平され、周溝のみが残存する。北東側と北西側の2方向にのみ周溝が存在する。方墳と思われ、古墳の規模は周溝部分を含まないと長5.2（北東-南西）×4.7（北西-南東）m、周溝部分を含めると長6.35（北東-南西）×5.4（北西-南東）mである。主軸方向は周溝の軸方向がそれぞれ違うので確定できない、北東側周溝を基準にすればN-46-W、北西側周溝を基準とすればN-60-Eである。

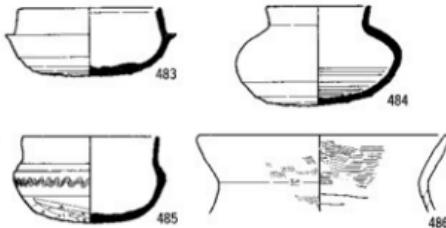
周溝は幅0.7~1.15m、深さ0.06~0.2m。周溝の埋土は上層が黒褐色粘土、下層がにぶい黄褐色粘土である。

また、S K139はS T 6のほぼ中央に位置し、土体部の可能性がある。ただし、S K139からは遺物は出土していない。

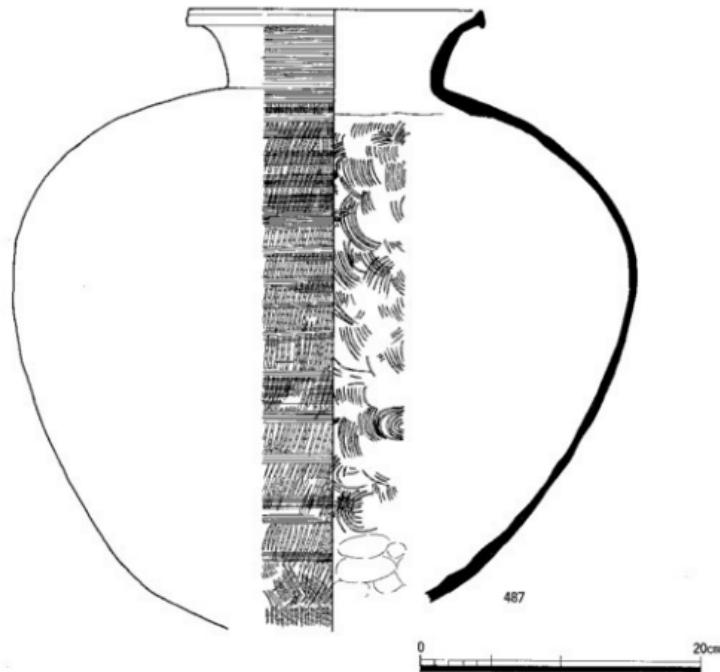
〔遺物〕 北西側周溝の北側で、北西方から並んで須恵器杯身（483）、須恵器短頸壺（484）、須恵器壺（485）、須恵器甕（487）が出土した。4点ともほぼ底面から出土し、甕（487）は底面をさらに掘り込んで据えつけられていたようである。（483~485）は完形で、（487）は多くの破片として出土した。埋土からは土師器甕（486）などが出土した。



第141図 S T 6 土器出土状況実測図 (1/30)



第142図 S T 6 遺物実測図 (1)



第143図 ST 6 遺物実測図（2）

（8）ST 7（第137・144図、図版33・35・37・79、付図7）

〔遺構〕 I-N-c・1～c・2で検出した。墳丘は開墾によって削平され、周溝のみが残存する。南西側は擾乱を受け周溝は確認できなかった。ST 4～6の例から見てST 7も方墳と思われるが、平面形は不整形を呈する。古墳の規模は周溝部分を含まないと長6.4m（北西—南東）、残存長4.5m（北東—南西）、周溝部分を含めると長8.8m（北西—南東）、残存長5.2mである。主軸方向は平面形が不整形であるので確定できない。

周溝は幅0.5～1.8m、深さ0.11～0.22m。周溝の埋土は暗褐色粘土である。

また、SK142はST 7のはば中央に位置し、主体部の可能性がある。ただし、SK139からは遺物は出土していない。

〔遺物〕 周溝埋土から土師器高杯（488）、土師器壺（489）、須恵器壺片などが出土した。これらは破片であるため時期は確定できない。しか



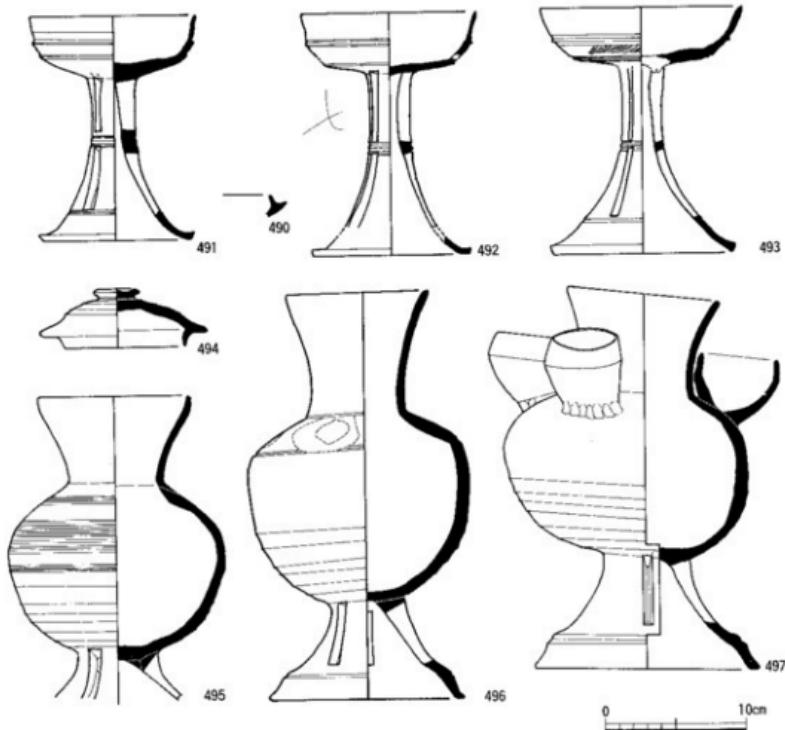
第144図 ST 7 遺物
実測図

し、出土した須恵器壺胴部片とST 6出土の壺(487)を比較した場合、ST 7出土壺の方が内部のアテグ痕を丁寧にナデケシしているので、ST 6のものより古いと言えるかも知れない。第3群は周溝埋土から出土した土器を見る限り、南から北へ(ST 6→ST 5→ST 4)築造されていて、この事とも符合する。

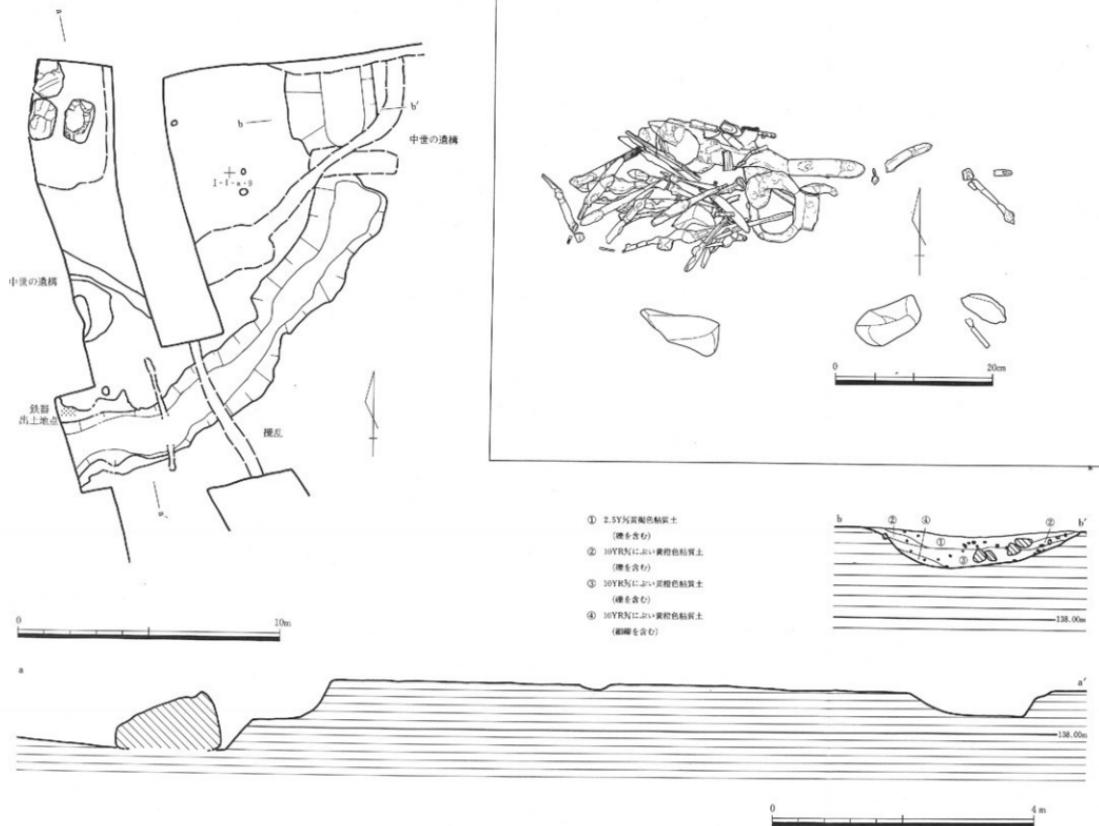
(9) ST 8 (第145~151図、図版37・38・83~86、付図6、第2表)

〔遺構〕 I-H-s・8~I-b・11で検出した。墳丘は開墾によって削平され周溝のみが残存する。すぐ西側は南海高野線のため切断され、北側も擾乱・削平を受け全体の約1/4しか残存していない。円墳と思われる。古墳の規模は推定だが、周溝部分を含まないと径22m、周溝部分を含めると径27mである。周溝は幅1.15~3.4m、深さ0.3~0.5m。周溝の埋土は東側で、上層から黄褐色粘質土(礫を含む)、にぶい黄橙色粘質土(礫を含む)、にぶい黄褐色粘質土(礫を含む)、にぶい黄褐色細礫混り粘質土(礫を含む)である。

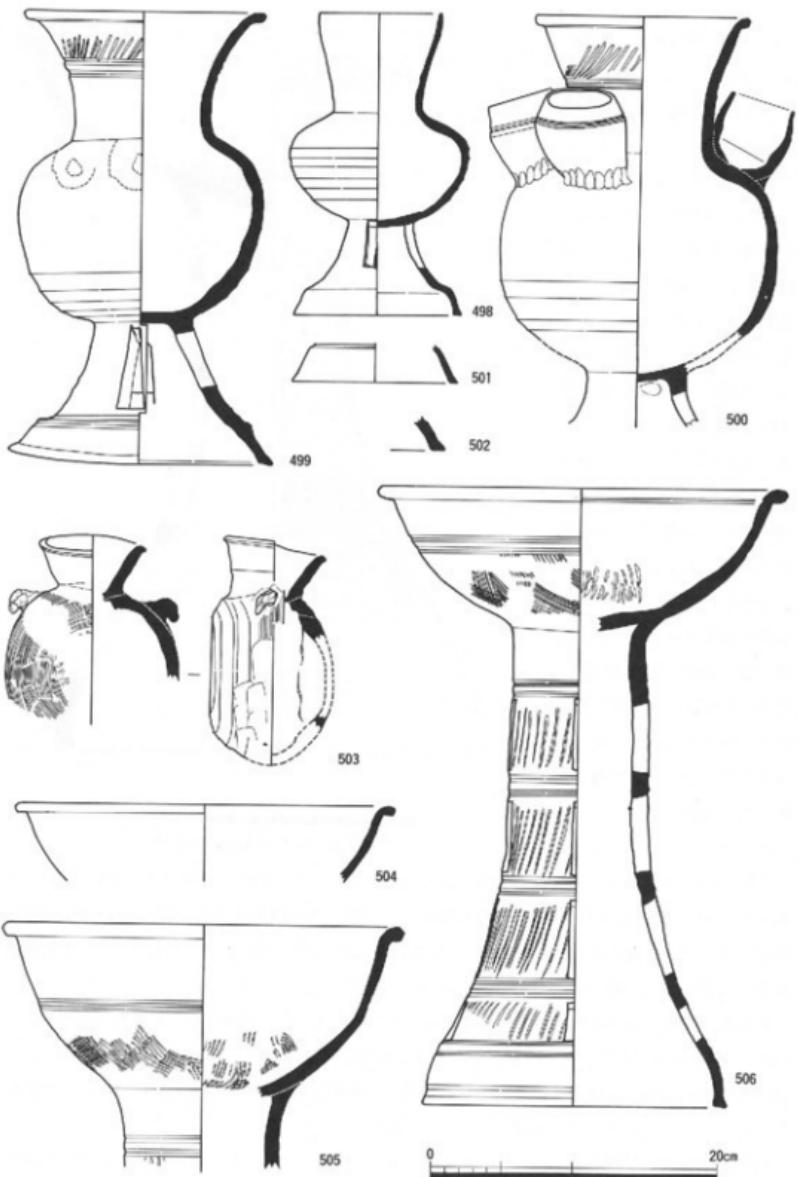
ところで、ST 8の中央部付近に擾乱があるが、ここから径1.6m程の巨石を3つ確認した。



第146図 ST 8 遺物実測図 (1)



第145図 ST 8 遺構実測図 平面 (1/150)・断面 (1/60)、鐵器出土状況実測図 (1/5)



第147図 S T 8 遺物実測図 (2)

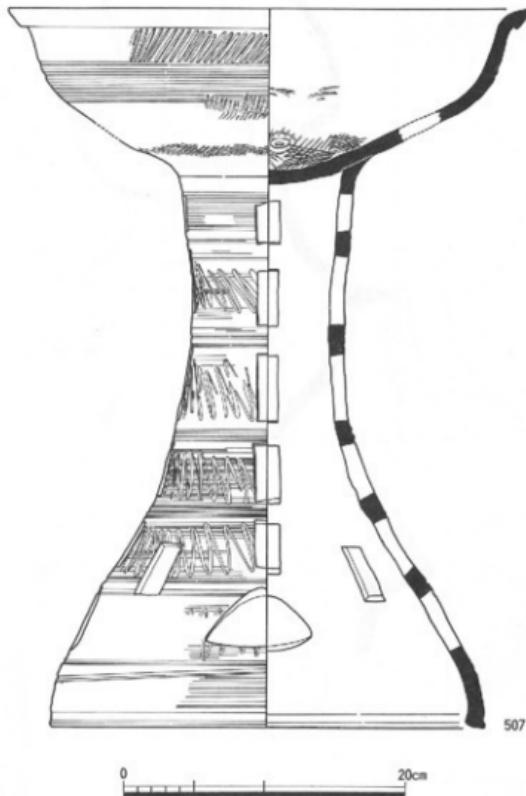
恐らく水田の開墾時に邪魔になつて埋めたものと思われる。この巨石の存在からST8の主体部は横穴式石室であったと推定される。

【遺物】周溝の南側、残存部南西端から東へ7mまでの範囲で集中して遺物が出土した。遺物の内、土器はほとんど埋土から出土した。多数の破片は石と混在していた。鉄器類はほとんどトーンで示した周溝の肩部からまとまって出土し、一部埋土からも出土した。埋土からは少數だが、施釉陶器や瓦器も出土した。このような出土状況は、ある時期に石室が破壊され、あるいは盜掘を受け遺物が撒き出され、周溝に流れ込んだ結果と思われる。横穴式石室は南側に開口するものが多く、周溝の南側だけに遺物が集中して出土したのはこのためだろう。

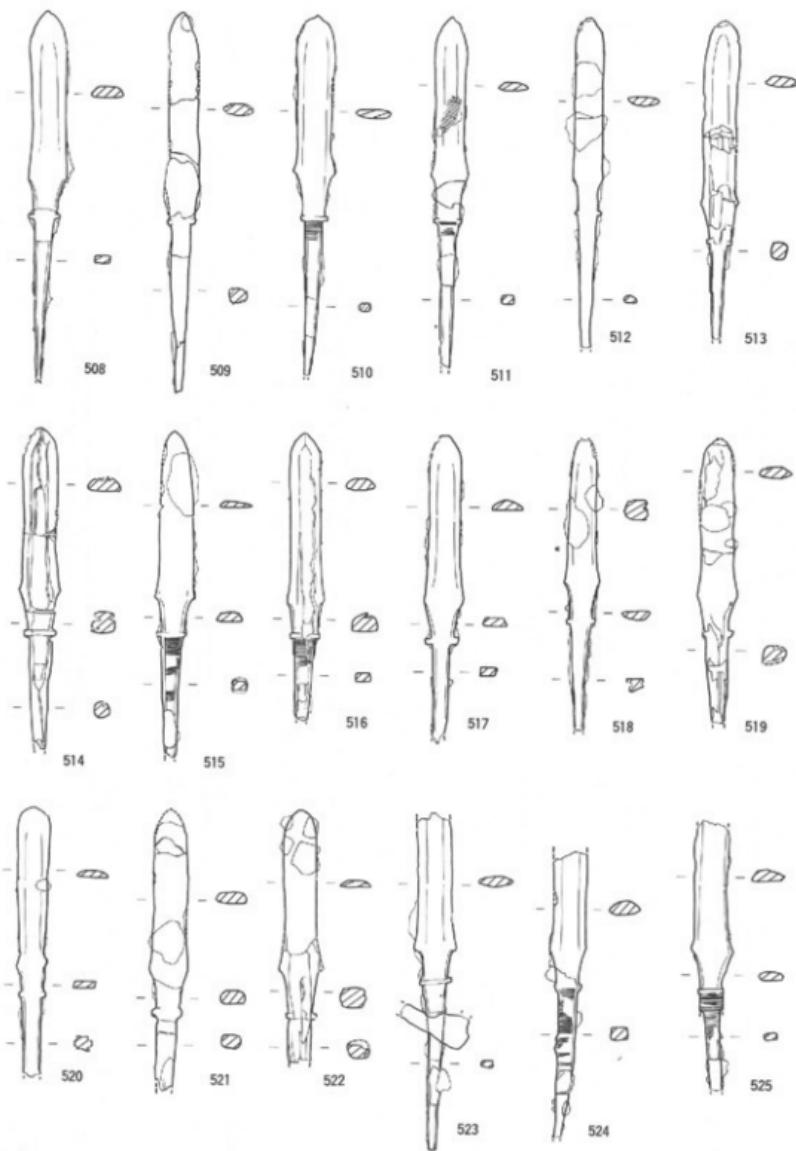
土器の内、図化できたものは須恵器のみである。杯身1点(490)、高杯3点(491~493)、壺蓋1点(494)、脚付壺1点(495)、脚付長頸壺1点(498)、脚付装饰壺4点(496・497・499・500)、提瓶1点(503)、器台4点(504~507)、不明脚部2点(501・502)などが出土した。不明脚部2点は(501)が(495)の、(500)が(502)の脚部の可能性が高い。

鉄器類は鉄鎌と馬具が出土した。鉄鎌は3タイプが出土した(第152図)。総点数は59点で、この内、少なくともAが2点分(558・559)、Bが8点分(536~540・543・544・546・547)、Cが23点分(508~535)を確認できる。その他に多くの鏡被片や茎片(541・542・545・548~566)が出土したが、どのタイプに属するものなのか確定できなかった。

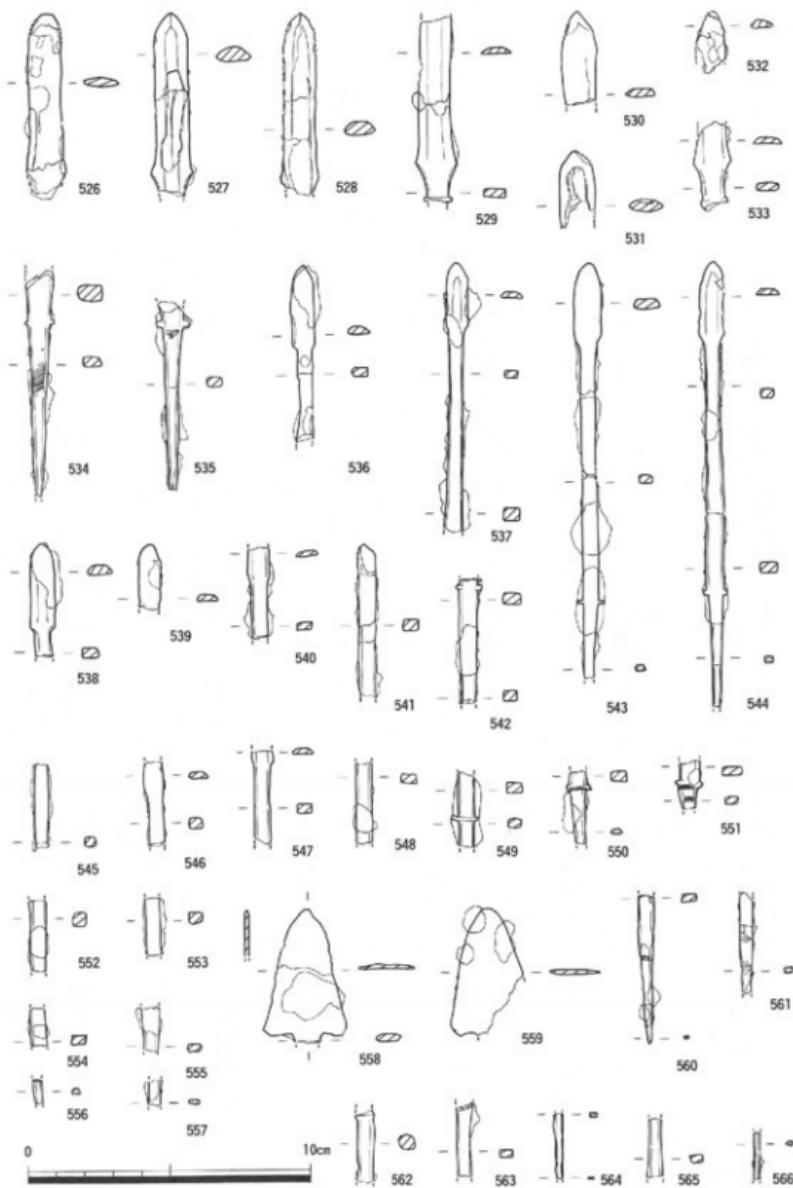
馬具は環状銕板付轡1点(570)、銚具1点(569)、杏葉のものと思われる縁金具1点、環状不明鉄器1点(568)が出土した。



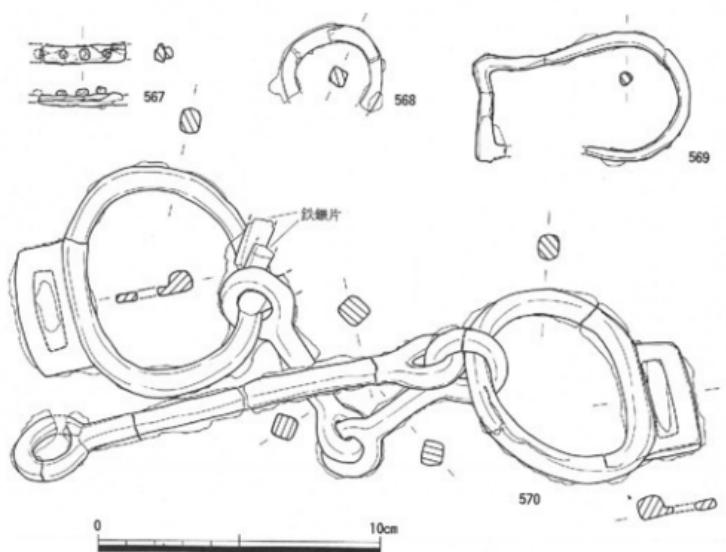
第148図 ST8 遺物実測図(3)



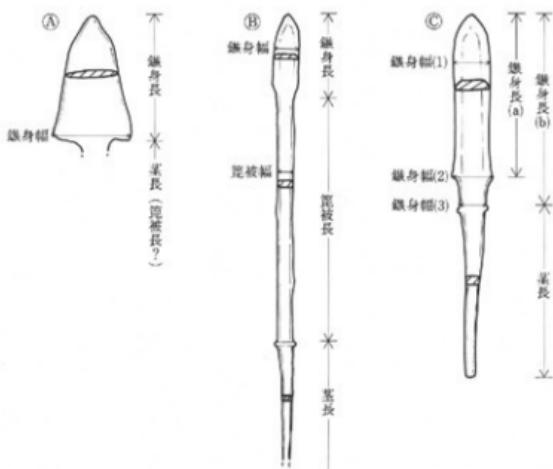
第149図 S T 8 遺物実測図 (4)



第150図 S T 8 遺物実測図 (5)



第151図 S T 8 遺物実測図 (6)



第152図 鉄錆の分類及び各計測部名称

物語番号	鍛身形 (A)	同 (b)	鍛身幅 (c)	同 (d)	同 (e)	鍛身厚 (f)	某 (g)	某 (h)	全 (i)
508	6.0	7.85	1.2	1.4	0.8	0.4	(6.95)	0.8	(18.8)
509	6.2	7.4	1.1	1.3	0.95	0.45	6.2	0.5	15.6
510	5.6	7.2	1.25	1.5	0.8	0.3	(5.7)	0.8	(12.9)
511	5.65	7.25	1.05	1.35	0.9	0.3	(5.8)	0.4	(12.55)
512	(5.7)	(6.9)	1.0	1.1	0.75	0.2	(4.85)	0.8	(11.75)
513	(6.4)	(7.7)	1.1	1.8	0.85	0.4	(9.5)	0.65	(11.8)
514	5.75	(7.25)	1.2	1.45	0.85	0.45	(4.15)	0.55	(11.4)
515	5.25	7.2	1.2	1.4	0.85	0.25	(4.45)	0.8	(11.65)
516	6.0	7.15	1.05	1.8	0.9	0.45	(8.1)	0.8	(10.25)
517	5.9	7.26	1.1	1.4	0.85	0.85	(3.75)	0.85	(11.0)
518	(5.05)	(6.85)	1.0	1.8	0.85	0.35	(3.95)	0.45	(10.4)
519	(6.6)	(6.9)	1.15	1.4	0.85	0.45	(8.8)	0.6	(10.2)
520	5.6	6.6	1.05	1.1	0.85	0.25	(3.0)	0.5	(9.6)
521	(5.25)	(6.7)	1.2	1.4	0.85	0.4	(2.85)	0.5	(9.55)
522	5.7	7.3	1.15	1.6	0.9	0.25	(1.7)	—	(9.0)
523	(4.9)	(6.0)	1.2	1.5	0.95	0.4	6.05	0.25	(12.05)
524	(3.45)	(4.75)	1.15	1.85	0.85	0.5	(5.4)	0.45	(10.15)
525	(4.6)	(6.0)	1.15	1.5	0.8	0.4	(8.6)	0.35	(9.6)
526	5.6	(6.6)	1.15	1.4	—	0.3	—	—	(6.6)
527	5.75	(6.6)	1.25	1.5	—	0.55	—	—	(6.6)
528	6.0	(6.55)	1.15	1.4	—	0.5	—	—	(6.55)
529	5.2	(6.45)	1.1	1.5	0.8	0.25	(0.15)	0.3	(6.6)
530	(2.85)	—	1.1	—	—	0.8	—	—	(3.35)
531	(2.75)	—	1.25	—	—	—	—	—	(2.75)
532	(2.1)	(2.1)	—	—	—	0.8	—	—	(2.1)
533	—	(1.85)	—	1.4	0.8	0.8	—	—	(8.2)
534	—	(1.8)	—	—	0.85	0.8	(6.8)	0.35	(8.1)
535	—	(0.7)	—	—	0.8	—	(6.05)	0.4	(8.1)

C 鉄錠の計測表 () は残存

物語番号	鍛身形	鍛身幅	鍛身厚	芯板 (e)	荒板 (f)	洗毛厚 (g)	芯 (h)	本 (i)	芯 (j)	厚 (k)	生長 (l)
536	8.05	0.85	0.8	(8.85)	0.45	0.85	—	—	—	(6.8)	
537	2.8	0.75	0.25	(7.4)	0.55	0.5	—	—	—	(9.7)	
538	3.15	0.9	0.8	(6.9)	0.65	0.85	—	—	—	(4.95)	
539	(2.95)	0.8	0.2	—	—	—	—	—	—	(2.95)	
540	(1.25)	0.8	0.2	(2.05)	0.6	0.8	—	—	—	(8.8)	
541	—	—	—	(5.5)	0.6	0.4	—	—	—	(5.5)	
542	—	—	—	(4.1)	0.65	0.4	(0.4)	0.55	0.45	(4.5)	
543	8.05	1.0	0.4	8.85	0.5	0.2	(2.8)	0.4	0.2	(14.9)	
544	2.25	0.55	0.25	8.65	0.6	0.35	(4.2)	0.8	0.25	(16.0)	
545	—	—	—	(8.1)	0.4	0.8	—	—	—	(8.1)	
546	(1.4)	0.7	0.25	(1.65)	0.55	0.4	—	—	—	(8.05)	
547	(0.6)	0.8	0.2	(2.7)	0.55	0.35	—	—	—	(8.8)	
548	—	—	—	(2.95)	0.55	0.3	—	—	—	(2.95)	
549	—	—	—	(1.6)	0.6	0.85	(1.2)	0.85	0.85	(2.7)	
550	—	—	—	(0.5)	0.6	0.4	(2.1)	0.35	0.2	(2.6)	
551	—	—	—	(0.8)	0.75	0.8	(0.95)	0.5	0.25	(1.75)	
552	—	—	—	(2.55)	0.55	0.45	—	—	—	(2.55)	
553	—	—	—	(2.05)	0.55	0.45	—	—	—	(2.05)	
554	—	—	—	(1.85)	0.65	0.8	—	—	—	(1.85)	
555	—	—	—	(1.6)	0.55	0.3	—	—	—	(1.6)	
556	—	—	—	(0.9)	0.25	0.2	—	—	—	(0.9)	
557	—	—	—	(6.8)	0.45	0.2	—	—	—	(0.9)	
558	4.5	8.0	0.8	—	—	—	(0.2)	0.9	0.25	(4.7)	
559	4.5	(5.5)	0.8	(9.1)	—	—	—	—	—	(4.6)	
560	—	—	—	—	—	—	(6.35)	0.5	0.8	(6.26)	
561	—	—	—	—	—	—	(3.65)	0.55	0.15	(8.65)	
562	—	—	—	(2.6)	0.7	0.5	—	—	—	(2.6)	
563	—	—	—	(2.65)	0.6	0.8	—	—	—	(2.65)	
564	—	—	—	—	—	—	(2.85)	0.85	0.2	(2.85)	
565	—	—	—	—	—	—	(2.1)	0.5	0.8	(2.1)	
566	—	—	—	—	—	—	(1.65)	0.25	0.15	(1.65)	

A・日新錠及びタイプ不切端・洗板の計測表 () は残存 [] は復元

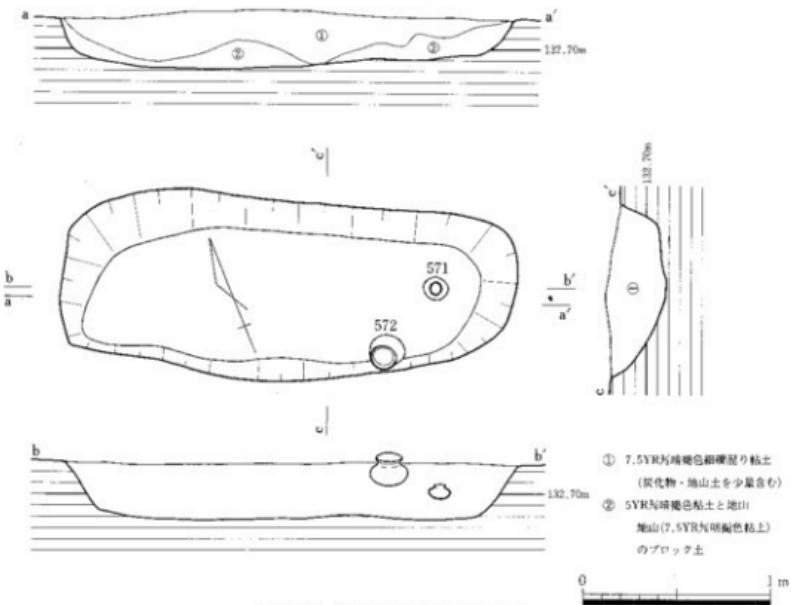
第2表 鉄錠計測表

7. 土壇墓 (S R)

(1) 概要

本遺跡では土壇墓と思われる遺構が5基検出した。いずれも2・4地区の丘陵先端部の調査区での検出である。これらも古墳(S T)と同様に3群にまとめることができ、S Tの分布と一致する。第1群にS R 1・2、第2群にS R 3、第3群にS R 4・5が含まれる。

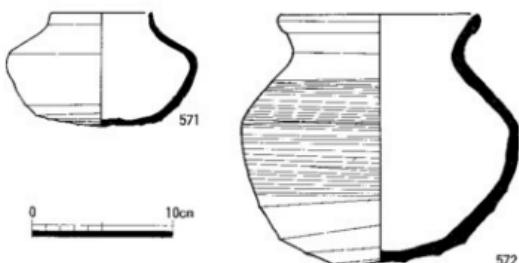
(2) S R 1 (第153・154図、図版39・87、付図2)



第153図 S R 1 遺構実測図 (1/30)

〔遺構〕 II-I-a・18で検出された。平面形は隔壁丸長方形を呈する。長2.4m、幅0.8~0.97m、深さ0.27~0.32m。主軸方向はN-66-Wで、S R 2と一致する。埋土は上層が暗褐色細緻混り粘土、下層が暗褐色粘土と地山のブロック土である。

〔遺物〕 遺構の南東側、埋土中から須恵器短頸瓶(571)、須恵器壺(572)が各1点ずつ出土



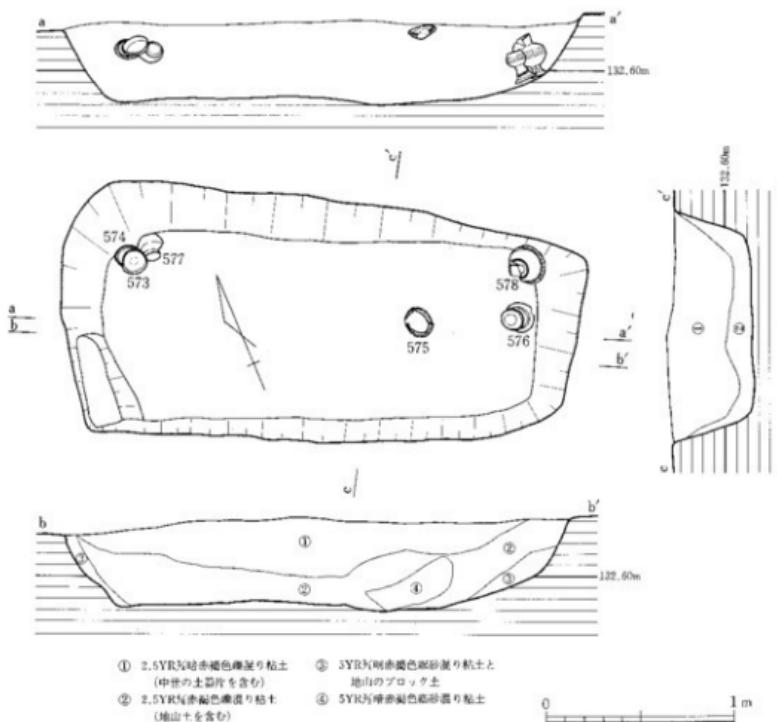
第154図 S R 1 遺物実測図

した。

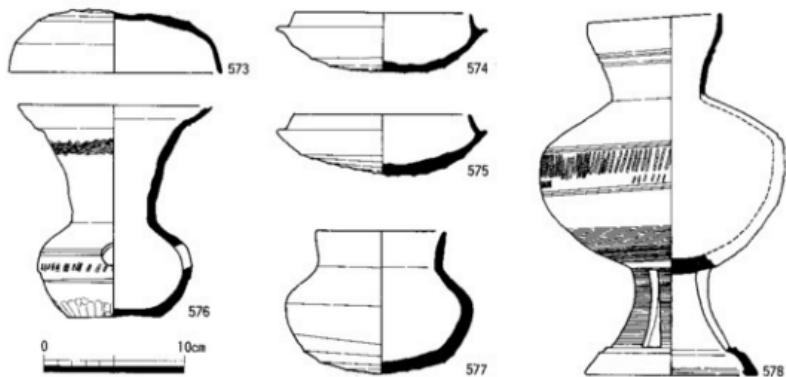
(3) S R 2 (第155・156図、図版40・87、付図2)

【遺構】 II-I-a・19で検出した。S R 1 の南側約2mに位置する。隅丸長方形を呈するが、西側にいくにつれて幅を増す。長2.8m、幅0.8~1.35m、深さ0.4m。主軸方向はN-66-Wで、S R 1 と一致する。埋土は上層から暗赤褐色疊混り粘土、赤褐色疊混り粘土、明赤褐色細砂混り粘土と地山のブロック土である。上層の暗赤褐色疊混り粘土からは中世土器が出土した。上層は擾乱を受けているようだ。

【遺物】 遺構の北西側から須恵器杯蓋(573)、須恵器杯身(574)、須恵器短頸壺(577)が、南西側から、須恵器杯身(575)、須恵器壺(576)、須恵器台付壺(578)が各1点ずつ出土した。576・578を除いてすべて埋土中からの出土である。576の壺は転倒の状態で、578は底面に接地した状態で出土した。



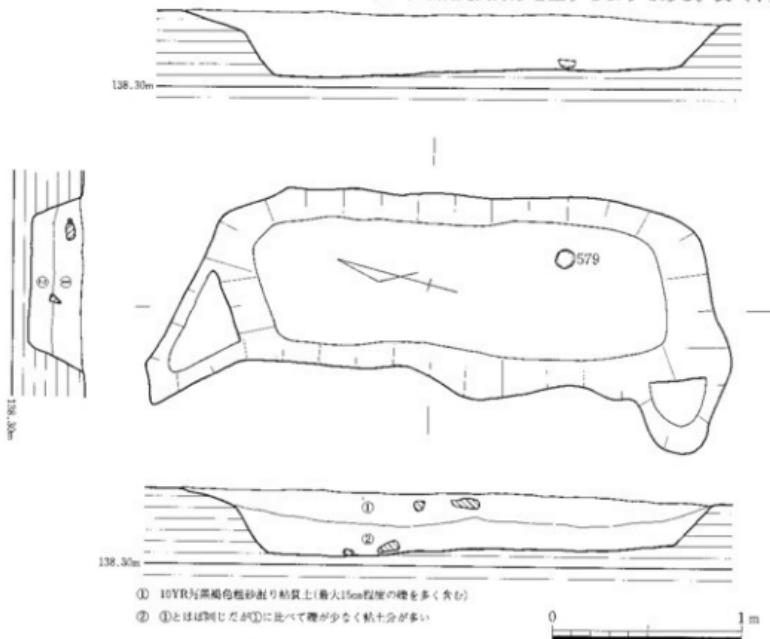
第155図 SR 2 遺構実測図 (1/30)



第156図 SR 2 遺物実測図

(4) SR 3 (第157・158図、図版41・88、付図6)

〔遺構〕 I-H-s・13~14で検出した。平面形は南北に長い不整形を呈するが、内側の深く掘り込まれた部分だけに限れば、SR 1・2 のような隅丸長方形を呈するようである。長（中央



第157図 SR 3 遺構実測図 (1/30)

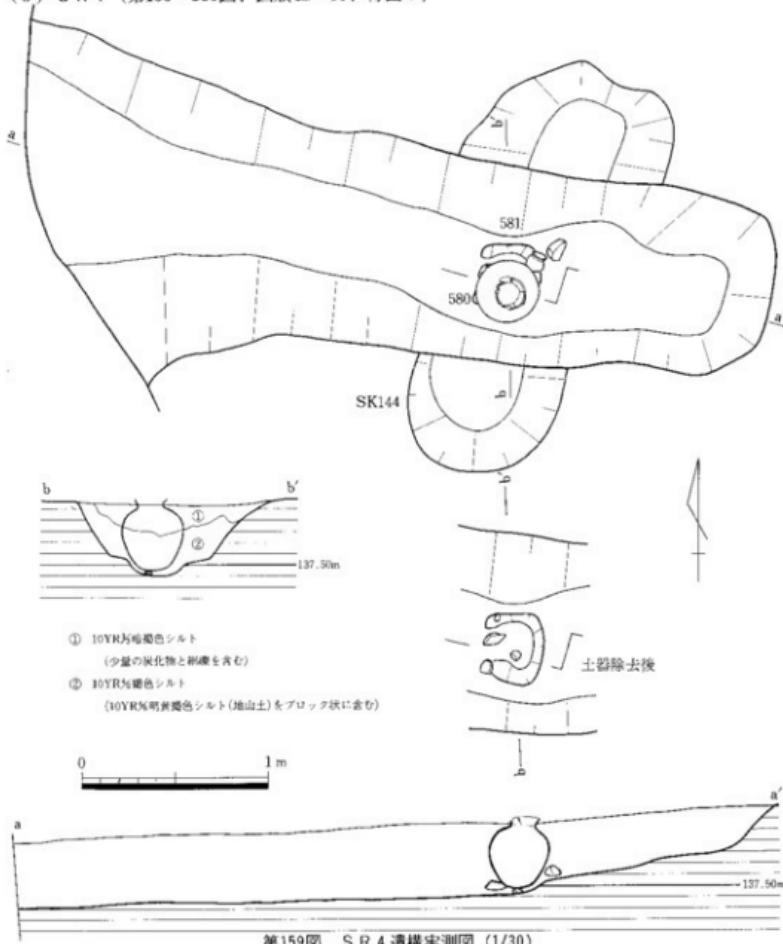
部で) 2.75m、幅0.92~1.22m、深さ0.22~0.35m。主軸方向はN-13-W。埋土は上・下層ともに礫を多く含む黒褐色粗砂混り粘質土であるが、上層に比べ下層は礫が少なく粘土分が多い。SR3は遺物も豊富でなく土壤基でない可能性も否定できないが、その位置と土壤自体の形態を重視して土壤基としておきたい。

〔遺物〕 遺構の南側、底面から須恵器蓋1点(579)が出土した。



第158図 SR3 遺物
実測図

(5) SR4 (第159・160図、図版42・88、付図7)



〔遺構〕 I-K-1・

14~m・14で検出した。

S K144を切る (SK1

44からは遺物は出土せ

ず、時期は不明)。平

面形は西側が調査区外

に伸びるため明確でな

い。現状では東西に伸

びる溝状を呈し、西に

いくにつれて幅を増す。

検出長4.0m、幅0.96

~1.65m、深さ0.4m。

主軸方向はN-82-W。

埋土は上層が暗褐色シ

ルト、下層が褐色シル

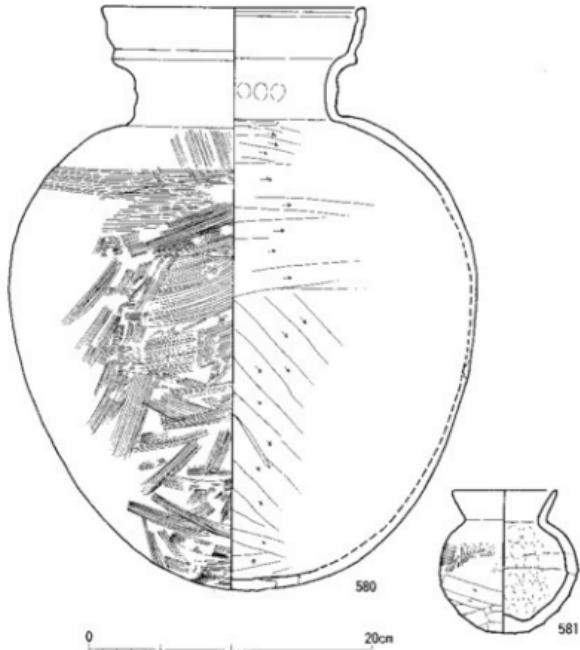
ト(地山土をブロック

状に含む)。遺構は等

高線に直交するため、

遺構の底面レベルは西

側へ低くなっている。



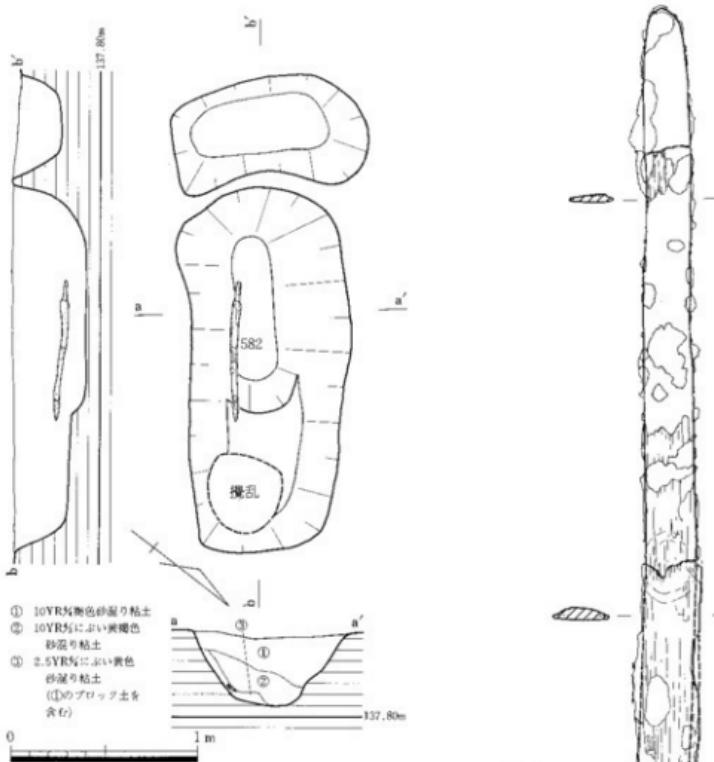
第160図 SR 4 遺物実測図

SR 4は規模が大きく、形態においても西側にいくにつれて幅が広がるなど、他の土壤墓に比べ相違点がいくつか見られる。

〔遺物〕 土師器壺1点(580)、土師器小型丸底壺1点(581)、が出土した。壺は遺構東端から約1.4m西の所で、底面を少し掘り窪め小石をおき据えられている。壺には体部中位と底部の2ヶ所に小孔が、焼成後うがたれている。小型丸底壺は壺に隣接し、壺体部中位の高さで横転の状態で出土した。

(6) SR 5 (第161・162図、図版43・88、付図7)

〔遺構〕 I-K-i・17~h・17で検出した。遺構南東側に攪乱を受けている。平面形は隅丸長方形を呈する。底面は北東側1/3を残し一段深くなっている。長1.95m、幅0.65~0.85m、深さ0.29~0.4m。主軸方向はN-53-E。埋土は上層から褐色砂混り粘土、にぶい黄褐色砂混り粘土、にぶい黄色砂混り粘土(褐色砂混り粘土をブロック状に含む)である。南西側にはSR 5に付随するように土壤が存在するが、遺物は出土しなかった。この土壤は長1.03m、幅0.5m、深さ0.25mで、にぶい黄褐色粘質土を埋土とする。



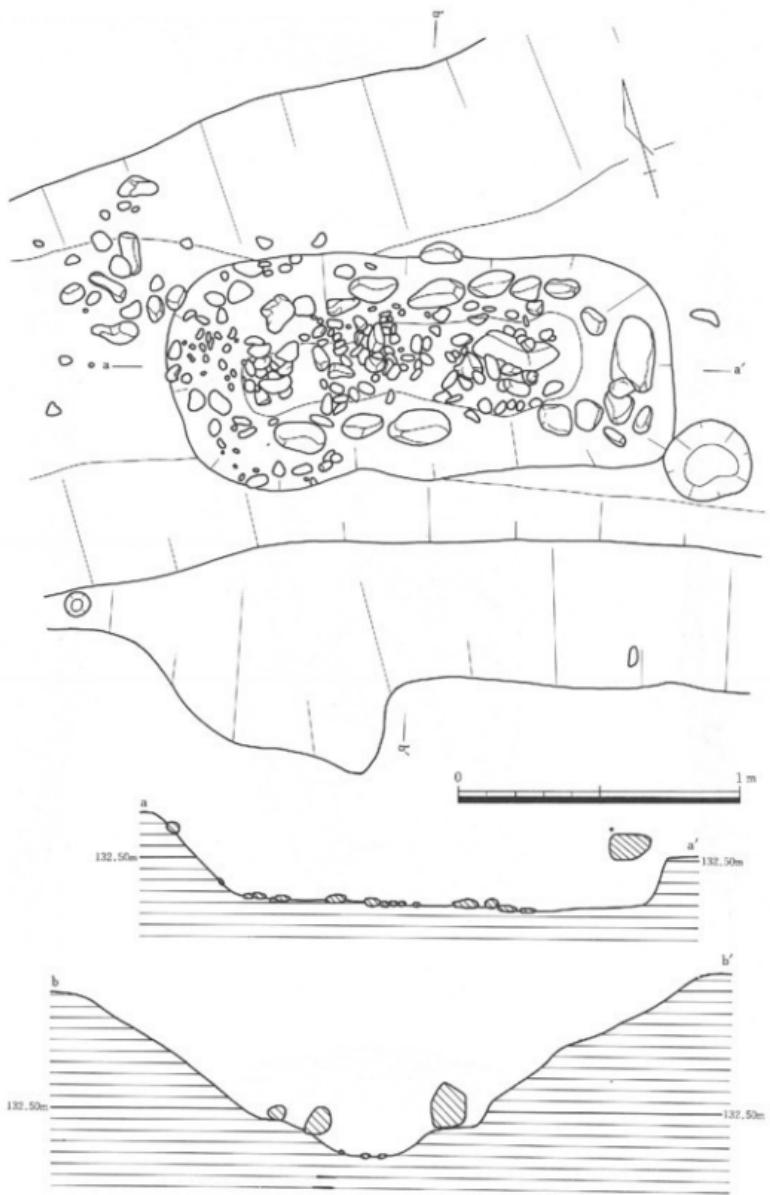
第161図 SR 5 遺構実測図 (1/30)

〔遺物〕 遺構の中央、南東壁側で、柄を南西に向け、ななめ上方に傾いた状態で鉄剣 1 点が出土した。遺存状態は比較的良好く、鞘部分の木質がよく残っている。また、X線写真により柄部分に目釘穴 2 つが確認できた。この鉄剣は長 76.3cm (この内、柄の部分は 16.3cm)、中央部で幅 3.5cm (鞘を含めた幅 4.6cm)、厚さ 0.3cm である。土器は出土しなかった。

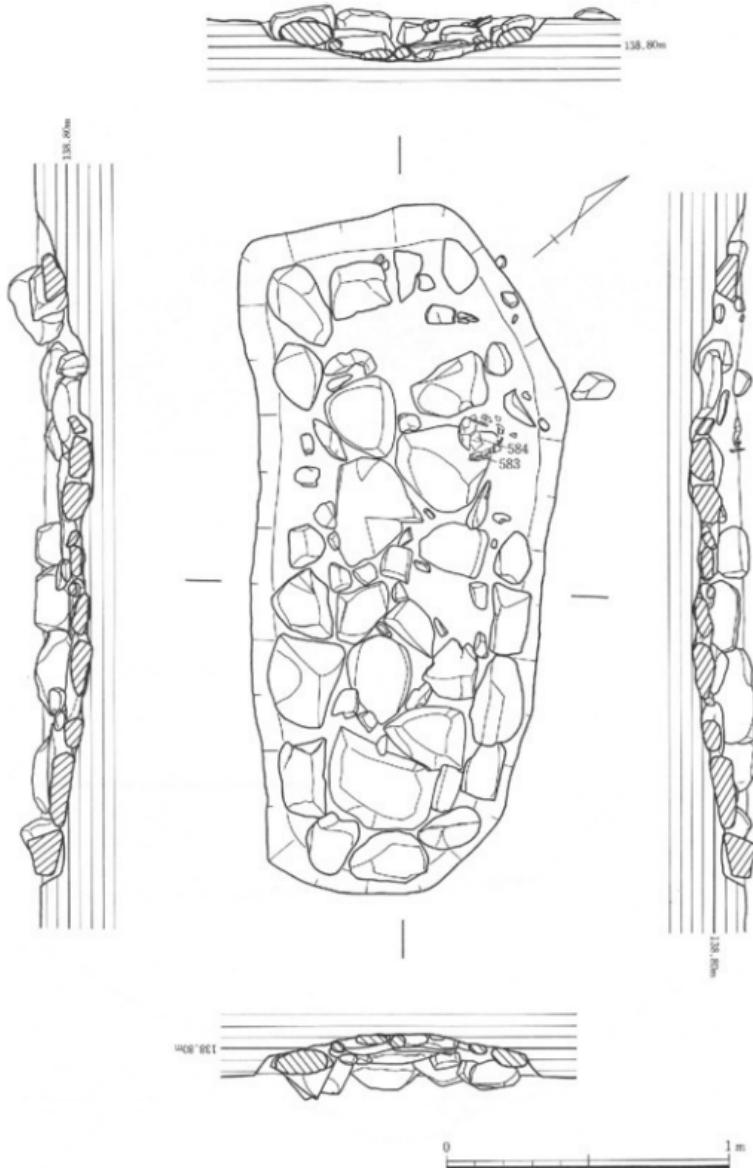
8. 穴室系小石室墓 (S S)

(1) 概要

古墳時代の穴室系小石室墓と思われる遺構が 4 基検出された。い 第162図 SR 5 遺物実測図ずれも 2・4 地区の丘陵部から検出された。SS 1 は墓群の第 1 群から、SS 3・4 は墓群の第 3 群から検出された。



第163図 S S I 遺構実測図 (1/20)



第164図 SS 2 造構実測図 (1/20)

(2) SS 1 (第163図、図版44、付図2)

〔遺構〕 I-B-t・4で検出された。SS 2の北側周溝内、中央に位置する。平面形が隅丸長方形の掘形に長方形の小石室がつくりれている。遺存状態は悪く、石室は1段目の石積みまで残存している。屍床は礫が敷かれている。掘形の長1.78m、幅0.8m、深さ0.22m、石室の内法は長1.3m、幅0.35m、残存高0.5mである。主軸方向はN-78-W。側壁は屍床から5~10cm上から積まれ、平積みによる。

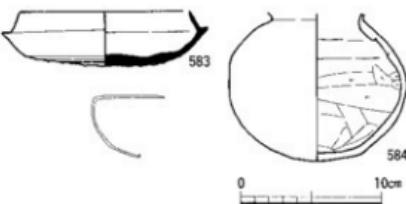
〔遺物〕 なし。

(3) SS 2 (第164・165図、図版44・88、付図3)

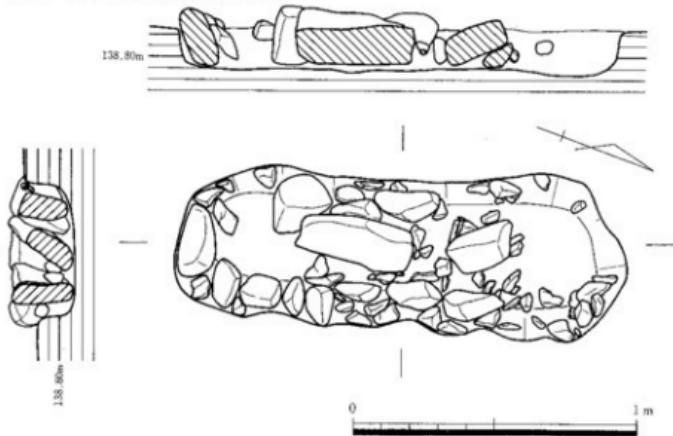
〔遺構〕 III-J-j・3~k・3で検出された。平面形が不整椭円形の掘形に長方形の小石室がつくりられている。石室は1段目の石積みまで残存している。掘形の長2.45m、幅1.05m、深さ0.15m、石室の内法は長1.86m、幅0.5~0.6m、残存高0.15mである。主軸方向はN-45-W。埋土は橙色粘質土である。石室のつくり方はまだ断面形が弧を描くよう掘削し、その中央の低い所に平坦面をもつ石で屍床をつくる。次いで掘形の高い部分に側壁のための石を平積みする。石は屍床の方が比較的大きなものを用いている。最後に屍床の石と石の間に小石を詰めて仕上げる。石は自然石を使用している。

〔遺物〕 遺構の北西側、埋土中から須恵器杯身(583)、土師器壺(584)が各1点ずつ出土した。

(4) SS 3 (第166図、図版45、付図7)



第165図 SS 2 遺物実測図



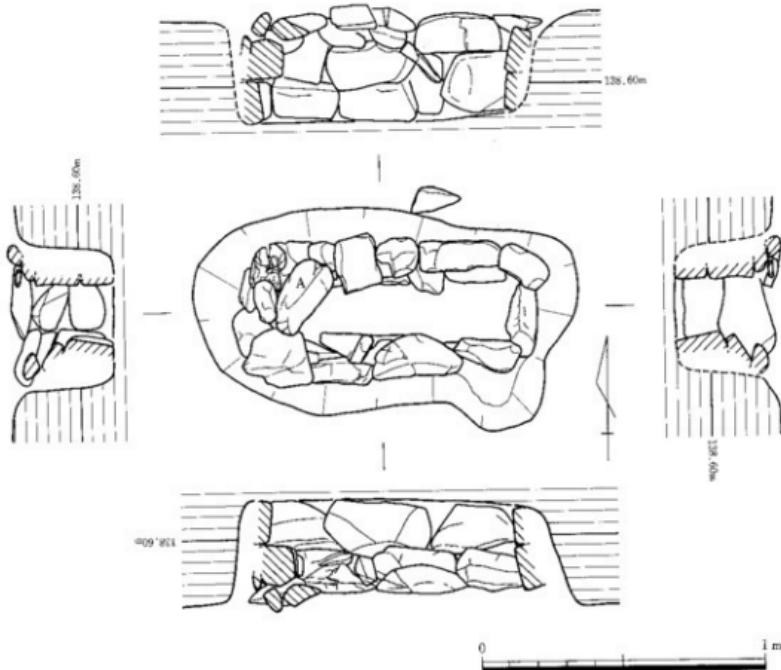
第166図 SS 3 遺構実測図 (1/20)

〔遺構〕 I-K-1・13で検出された。平面形が不整椭円形の掘形に長方形の小石室がつくりれている。遺存状態は悪い。石室はかなり崩れ、上・側部にあったと思われる石材が石室内に崩れおちている。屍床は地山そのままである。掘形の長1.6m、幅0.52m、深さ0.15m、石室の内法は推定長1.3m、推定幅0.22m、残存高0.23mである。主軸方向はN-20-W。石室は1段目の石積みまで残存している。石材はかなり自由に積まれ、小口積みと平積みが併用される。また、平積みの所は石材と掘形の間に小石を充填しているのが特徴的である。石は自然石を使用している。

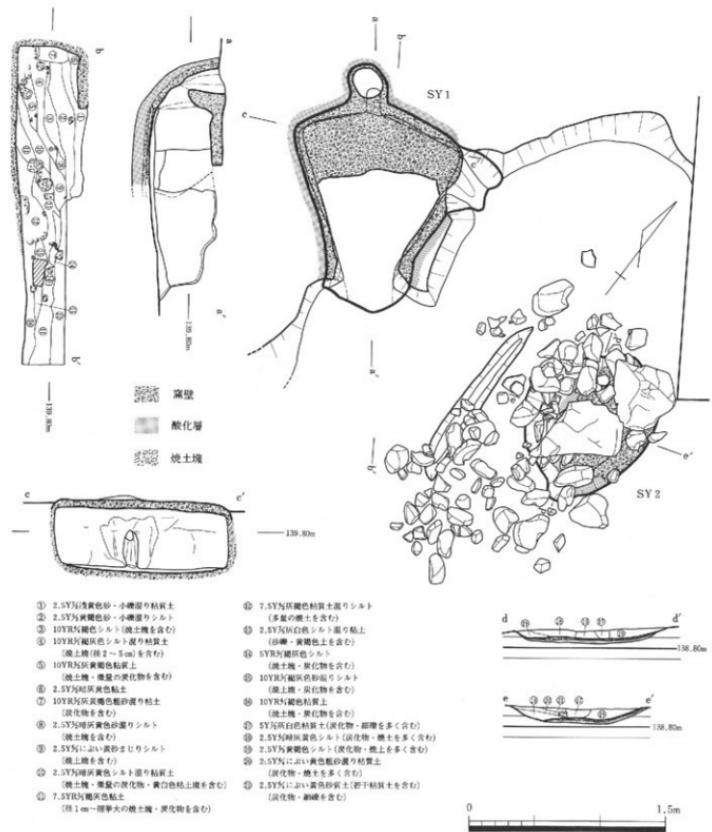
〔遺物〕 なし。

(5) SS 4 (第167図、図版45、付図7)

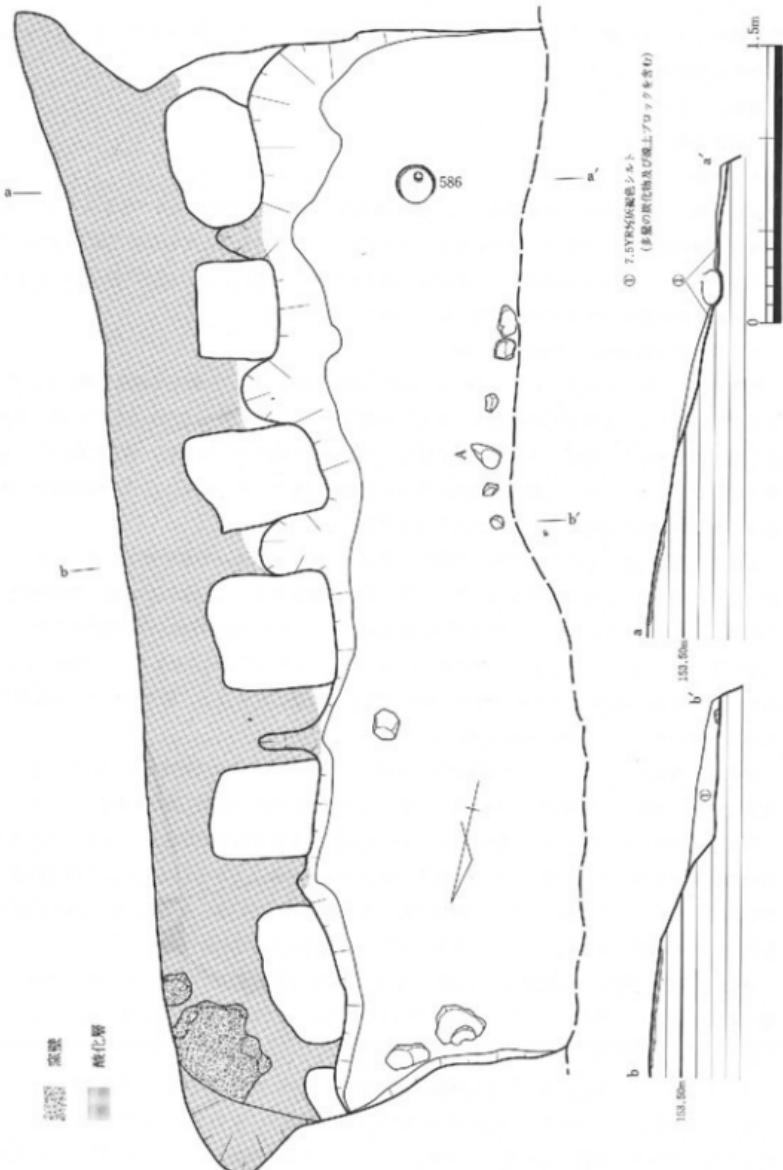
〔遺構〕 I-K-1・13で検出された。SS 3の東側約2.5mに位置する。平面形が不整椭円形の掘形に長方形の小石室がつくりられている。屍床は地山そのままである。掘形の長1.37m、幅0.7m、深さ0.37m、石室の内法は長0.85m、幅0.22m、高さ0.34m (Aを天井石とすれば) である。主軸方向はN-90-W (E)。石室は平積みによるものである。まず比較的大きい石を2



第167図 SS 4 遺構実測図 (1/20)



第168図 SY1・2遺構実測図 (1/30)



第169図 SY 3 遺構実測図 (1/30)

段に積み、その上に更に小さな石を積み石室の高さを合わしている。Aは天井石と思われる。石は自然石を使用している。

〔遺物〕 なし

9. 窑状遺構 (S Y)

(1) 概要

窯状遺構は2・4地区で3基検出した。横に開口部を1つもつ小型のもの(S Y 1・2)、横に複数の開口部をもつ大型のもの(S Y 3)の2タイプにわかれれるが、ともに木炭窯と言われるものである。S Y 3は出土遺物から6世紀末に営まれたものと思われる。これに対してS Y 1・2は正確な築造時期は不明だが、今回一括して報告しておきたい。

(2) S Y 1 (第168図、図版47、付図6)

〔遺構〕 I-K-e・3~f・3で検出された。遺存状態はよく、一部天井部まで残している。S Y 1は東西方向の谷状地形の緩斜面(地山)を掘り込み、粘土を貼ってつくられている。平窯としてその形態から一般的に木炭窯と言われている。主軸方向はN-36-W。奥壁に向かって右壁には開口部をもつため、右側面に地山を削り出し側庭部をつくる。S Y 1はその南東前方に床面だけを残すS Y 2の廃絶後、営まれたものと思われる。

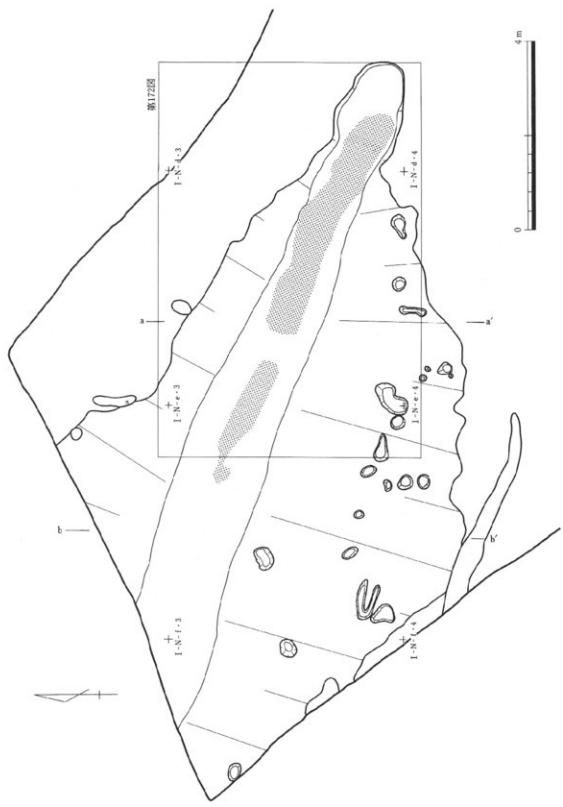
本体の平面形は膨らみをもった逆三角形で、焚口から奥壁へ向かって幅を増していく。また、焚口はハの字形に少し外側に広がる。焚口部分には粘土塊が集まっている、この粘土塊を利用して閉塞していた痕跡が見られた。奥行1.5m、最大幅1.2m、焚口の幅0.47m。床面は奥壁に向かって少しづつ低くなっていく。右・左壁は真上に直立する。天井までの高さは0.45~0.55mである。右壁には径0.3mの開口部がある。煙道は奥壁中央やや左側に孔を設け、緩やかなカーブを描きながら上方に上がる。煙道の上端の径は0.2~0.24mである。

窯壁は一番温度の高く上昇する奥壁付近の床面で、窓内に近い約2/3が浅黄色~暗青灰色還元状態であり、奥壁付近の床面での残り約1/3及び天井部・煙道部は黄褐色酸化状態を示していた。

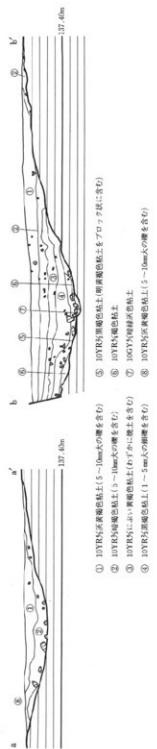
S Y 1の右前方には長1.4m、幅0.15m、深さ0.06mの構造遺構が検出されている。埋土は黄褐色細砂混り粘質土で、大量の炭化物・焼土を含んでいる。S Y 1あるいはS Y 2の関連遺構と思われる。また、その右前方に大小で構成された集石が広がっている。石と石の間の埋土には炭化物と焼土が多量に含まれていて、S Y 1と何らかの関連をもつものかも知れない。

〔遺物〕 埋土上層では須恵器・土師器片と瓦器など中世土器が混在していたが、埋土下層では須恵器・土師器片のみが出土した。図示できるものはなかったが、陶邑編年のII-4に該当するものであると思われる。

S Y 1とS Y 2は検出状況から先後関係は明らかであるが、時期を決定づける遺物が出土していない。しかし、S Y 1の前面の谷状地形には包含層が堆積し、その上面(S Y 1の天井部と同じレベル)で中世の遺構(13世紀)を検出している。この包含層を除去しなければS Y 1の前庭部は露出できないので、これを遺構の下限年代とすることができる。周辺地域で発見されたこの



第171図 S X 1 遺構実測図 (1/80)



第172図 S X 1 石敷出土状況実測図 (1/40)

タイプの窯状遺構の築造時期を見ると、河内長野市長池窯跡のものが出土遺物と熱残留時期測定から12世紀、同市棚原窯跡のものが熱残留時期測定からA.D.700~780、堺市陶邑窯発見の小型窯状遺構の中でMT209-IIがMT209-Iとの関係から8世紀後半に推定されている。

(3) SY2 (第168図、付図6)

〔遺構〕 I-K-e・3~4で検出した。SY1約1m南東前方に位置する。SY1と同じ形態の窯状遺構と思われるが、削平を受けていて床面だけがかろうじて残存する。平面形は不整形円形を呈する。残存長1.14×0.98m、残存高0.08m。埋土は上層がにぶい黄色砂質土、にぶい黄色粗砂混り粘質土、暗灰黄色シルト、灰白色粘質土で、下層が黄褐色シルトであり、炭・焼土を多く含む。SY1に先行するものと思われる。

〔遺物〕 なし。

(4) SY3 (第169~170図、図版46~82、付図9)

〔遺構〕 III-J-d・15で検出した。先端を若干切り取られた東西にのびる丘陵の西側に等高線に平行に位置する。複数の開口部をもつ一般的に白炭窯と称されるものである。焼成部の長6.35m、残存幅0.35~0.5m。主軸方向はN-18-W。焼成部上面及び焚口・前庭部は近世の整地により削平されている。北側に焼土の立ち上がりが見られ、煙道の存在をうかがわせる。床面には煙道付近にわずかに窯壁（酸化層）が残るが、全体としては非常に残存状態は悪い。

焼成部より西側に向けて幅0.2~0.4mの開口部を7ヶ所もうける。焼成部と側庭部の比高差は北側煙道付近で0.3m、南側焚口付近で0.09mである。側庭部は長5.6m、残存幅1.2mでおおむね平坦である。西側は削り取られているが、残存部西端にこぶし大の礫が6つ並ぶ。側庭部には床面には焼土は見られなかったが、多量の炭化物及び焼土塊を含んだ灰褐色シルトが堆積していて、特に開口部付近は炭化物の含有量が著しかった。

出土遺物からSY3は六世紀末に比定できる。時期のわかるこのタイプの窯状遺構としては、現在のところ最古のものである。

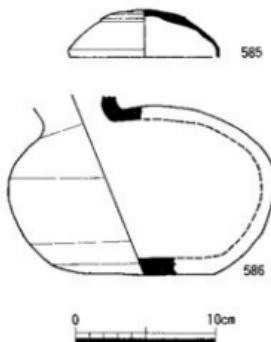
〔遺物〕 側庭部南側から灰褐色シルト上面よりピットをうがち、須恵器平瓶（586）が据えられていた。これはSY3の廃絶期に据えられたものと思われ、窯という生産用構築物に対する生業にたずさわった人々の思想を知る上で注目される。また、Aの右の下からも須恵器杯蓋（585）が出土した。

10. その他 (SX)

(1) SX1 (第171~173図、図版47~88、付図7)

第170図 SY3 遺物実測図

〔遺構〕 丘陵先端部、I-N-d・2~e・4で検出した。北西側は調査区外に伸びる。平面形が不整形を呈するおちこみ状の遺構であるが、底部は幅1.0~1.8mの溝状になっていて、西北



西—西南西方向に進む。遺構の規模はこの底部を基準として検出長13.3m、最大幅8.5m、深さ0.1~1.1mである。底部のレベルは南東端で138.08m、検出北西端で136.82mで比高差が1.26mある。底部にはかなり乱雑ではあるが、石を帶状に敷いている。

埋土は上層から灰黄褐色粘土、暗褐色粘土、にぶい黄褐色粘土、黒褐色粘土、黒褐色粘土（明黄褐色粘土をブロック状に含む）、褐色粘土、暗緑灰色粘土である。

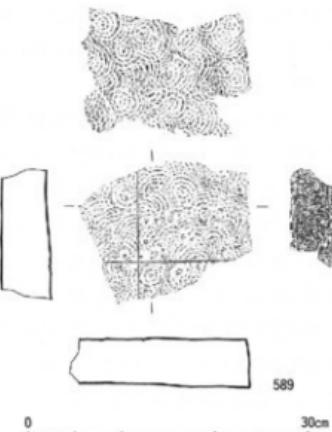
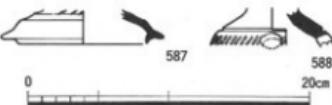
1~3層までは中世の土器と古墳時代の土器が混在するが、4層以下は古墳時代の土器だけが出土したので、この遺構を古墳時代のものと見ておきたい。遺構の性格であるが、窪んだ自然地形を利用したと思われる。

〔遺物〕 4層以下から出土した土器は3点で、図化できたのは須恵器甕（588）のみである。また、1層から出土したものであるが、他の遺構に類例を見ない遺物が出土したので合わせて報告しておきたい。（587）は須恵器高杯か杯身の蓋で、SK114例と違い天井部外面に刺突文を配する。（588）は厚さ4.5~5.0cm、最大残存長18cmの方形の壇で、表・裏面には深く同心円タタキが打ち出され、側面はヘラケズリで調整されている。片面には十字の区画線がヘラガキされている。この区画線の交点が正確に壇の中央部に位置しているとすれば、一辺の復元長は22cmほどになる。周辺地域では太子町仏陀寺古墳、美原町真福寺遺跡、富田林錦織細井庵寺などでも同様な壇が出土していて白鳳時代のものと言われる。

(高)

〔参考文献〕

- ・安濃町遺跡調査会 1987. 8. 『三重県安芸郡安濃町平田古墳群』
- ・岸和田市教育委員会他 1965. 3. 『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』
- ・大阪府教育委員会他 1986. 3. 『真福寺遺跡－調査の概要－』
- ・大阪府教育委員会他 1970 『陶邑堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要』
- ・河内長野市教育委員会 1976. 3. 河内長野市文化財調査概要『棚原窯跡発掘調査概要－河内長野市上原町所在－』
- ・河内長野市教育委員会 1971. 9. 河内長野市文化財調査概要『長池窯跡発掘調査概要－河内長野市小山田地区－』



第173図 S X I 遺物実測図

- ・(財)鳥取県教育文化財団 1981. 12. 鳥取県教育文化財団報告書8『鳥取県羽合町 長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ 天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ・(財)鳥取県教育文化財団 1985 鳥取県教育文化財団調査報告書17『鳥取県米子市 中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 上福万遺跡・日下遺跡 石州府第1遺跡・石州府古墳群』
- ・(財)大阪文化財センター 1985. 4. 河内長野市『上原地区区画整理事業予定地内 分布調査報告書』
- ・野嶋正雄 1985. 10. 「木炭生産の技術と用具—河内流域の枝炭を中心として—」『近畿民具学会年報』第9輯 近畿民具学会
- ・兼康保明 1981. 3. 「古代白炭焼成炭窯の復原」『考古学研究』第27巻 第4号
- ・野上丈助 1980. 3. 「増補 河内の古代遺跡と渡来系氏族」
- ・藤原 学 1977 「木炭窯をめぐって一大師山遺跡検出の五・六・号焼土壙に関する考察ー」関西大学文学部 考古学研究第五冊『河内長野大師山』

第5章 遺物

第1節 旧石器時代の遺物

松山聰

当遺跡からは明らかに縄文時代以降の時期に属すると考えられるものを除外した場合、181点の石器が出土している。なお最初にことわっておくが、ここでは「石器」の用語は広く石核や剝片、碎片にいたるものまでを包括する広義の意味で用いており、狭義の定型的な石器に対しては「トゥール」の用語を充てる。

出土石器の内訳は以下の通りになる。

石	核	• • • •	11点 (6.1%)
剝	片	• • • •	80点 (44.2%)
微小剝離痕のある剝片		• • • •	13点 (7.2%)
二次加工のある剝片		• • • •	13点 (7.2%)
碎	片	• • • •	53点 (29.2%)
トゥール		• • • •	11点 (6.1%)

石器は原位置を保っておらず、総て後世に形成された遺物包含層や遺構の埋土中などから出土しており、それらの所属時期に関する層位的な保証はまったく得られていない。この出土状況から考えても、様々な時代の石器が混在していることは充分に予測され、旧石器時代以降、縄文時代に至るまでの各期の所産と考えられる石器が、多數の多寡はあるにしても、認められる点から、当遺跡あるいはその周辺地域に当該期の遺跡が存在する（あるいは存在した）可能性を指摘することができよう。

上記の類型に従って以下に出土石器を概観することとする。

1. 石核

観察された剝離面が総てネガティブな面で構成されているものや調査時の折損等などからその素材の不明な石核が5点存在する。それらを除外して中では、礫素材と考えられる石核は5点であるのに対して、明確に剝片素材であると考えられる石核は1点のみである。

礫素材の石核は比較的小型のものが多く、剝取るべき剝片の企画性に関する明確な意図も読み取り難い。打面の調整・再生等の痕跡が認められる例も稀である。一方、剝片素材の石核からは、最終作業面においては横長の剝片が剥取されているが、瀬戸内技法の痕跡は認め難い。

2. 剥片

全剝片80点の内、縦長剝片は14点、横長剝片は39点、不定形の剝片は27点である。傾向としては横長剝片が多いが（全剝片中の48.8%）、出土状況から考えてもその傾向を論じる根拠は極め

て乏しい。1点のみ翼状剝片が認められるが(593)、量的に極めて貧弱であり、これに積極的に注目することはあえて差し控えたい。

3. 微小剝離痕のある剝片

剝片の縁辺部に一群の微小な剝離、潰れ等の認められる剝片の中で、その剝片の縁辺に見られる小剝離痕を、連続性、位置、結果的な剝片の形状などから二次加工によるものと認定するのが妥当であろうと考えられる剝片を除外したものを微小剝離痕のある剝片として一括した。しかし、その微小剝離痕の形成要因に関しては何ら検討を加えておらず、これらの微小剝離痕がいわゆる「使用痕」であるか否かの論議は全く次元を異にするものである。すなわちこれらの剝片に認められる微小剝離痕は、使用の結果形成されたものに自然の営力によって偶発的に形成されることも充分考えられるため、詳細に関しては個々具体例に則した検討が必要とされることは言うまでもない。

4. 二次加工のある剝片

当遺跡からは二次加工のある剝片は、縦長剝片を素材とするもの3点、横長剝片を素材とするもの5点、不定形な剝片を素材とするもの5点である。単に数量的に見るならば、その素材に関する傾向性は窺えない。またその素材が不定形な剝片は認定されたものに関しては、素材それ自身が不定形であったのか、結果的にそのような形態に落ち着いたのかは現状においては不明である。またそれらの加工部位、剝離の形状等にも一貫性は認め難い。

5. 碎片

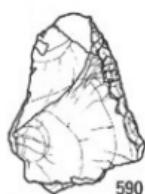
全周にわたり打点が認められない剝片の内、主要な最終剝離面の打点および加撃方向の推定が困難なものをこのカテゴリーに一括した。打点およびバルブ部分の折り取り、使用あるいは自然営力による破損、剝片剝離時の碎片等、本来細別されるべきものが今回の場合一括して扱われていると考えるべきであるが、現状においてはそれらを弁別し得る有効な手段を有しておらず、詳細な検討に関しては後日に譲らざるを得ない。

6. トゥール

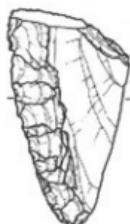
出土しているトゥールの内訳は、ナイフ形石器2点、尖頭器1点、スクレイバー類6点、楔形石器2点である。

(1) ナイフ形石器(597・599)

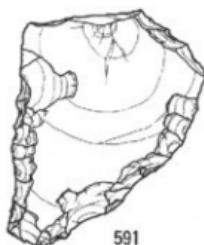
2点の内の1点(597)は、翼状剝片を素材とする国府型ナイフ形石器の範疇に入るものと考えられる。ただしプランティングの方向が、背面側→腹面側である点を考慮すると若干の疑問も残るが、腹面の打点は除去されており、プランティングも入念に行われている。基部は腹面側からの数度の加撃によって成形されたと考えられる。また先端部は調査時に欠損しており詳細は不明である。もう1点(599)は縦長剝片を素材とした小型ナイフ形石器である。プランティングは腹面側から行われているがやや粗く、不揃いな剝離面が並ぶ。基部方向にあった打点は主に腹面側からの加撃によって除去されたものと考えられる。



590



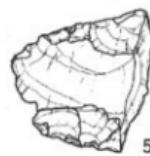
594



591



595



592



596

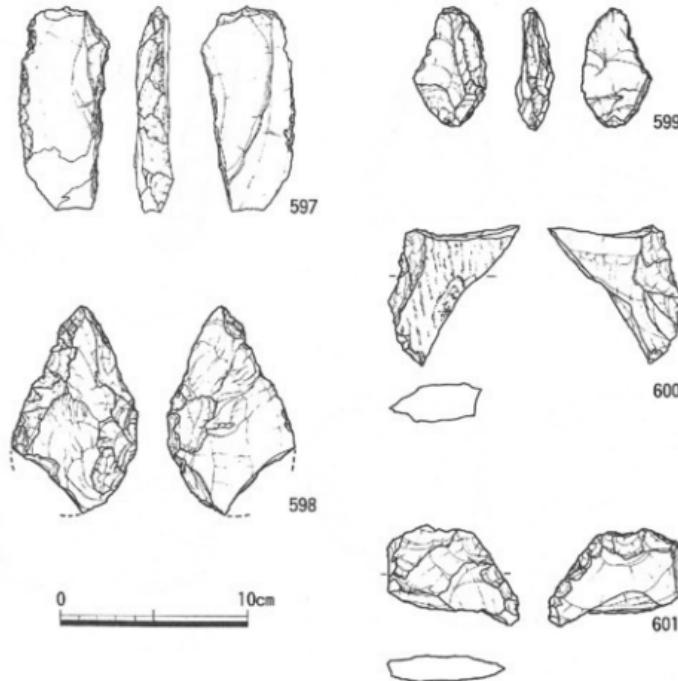


593

0

10cm

第174図 包含層旧石器実測図（1）



第175図 包含層旧石器実測図（2）

（2）尖頭器（598）

横長剝片がその素材と考えられるが、左下半部は欠損している。主に腹面側からの剥離によつて整形されているが、背面側からの加工も一部腹面左側縁下半部にかけて認められる。形態からその所属時期を限定することに若干の疑問も残るが、その系譜を縄文時代以降に求め難い。

（3）スクレイパー（590～591・594～595・600～601）

このカテゴリーに含まれるツールは、旧石器時代から弥生時代にかけて永きにわたる各期に認められ、層位的保証の得られない当遺跡においては単にその形態のみから所属時期を限定して述べることは極めて困難である。また図示してあるように、その形状、加工部位、加工程度などにも一貫性あるいは傾向性は認め難い。

（4）楔形石器（596）

出土している2点の楔形石器の内1点を図示している。上下両端に対向する小剥離、潰れ等が連続的に認められ、両極剥離の様相を呈する剥離面も認められる。

当遺跡出土の石器を概観すると以上のようになるが、出土状況が不安定であることは既に述べた通りである。従ってこれらの出土石器の性格を包括的に記述することは極めて困難であるが、

- ① 石器表面の風化程度に差が認められる。
- ② 剥片の大きさに着目した場合、大小2群のグループの混在が窺える。
- ③ 旧石器から縄文に至る各期のトゥールの出土が認められる。

以上の3点に注目すると、当遺跡出土の石器に関しては時間的あるいは空間的に隔たった複数の石器群の混在を想定する方が妥当であろうと考えられるが、上記の3条件はいずれもこれを積極的に肯定するには根拠が曖昧である点も否定し難いと結論づけられよう。ただし剥片の形態およびその剝離技術、トゥール類の出土状況等にのみ着目して考慮した場合、あえて述べるならば縄文時代以降の石器群を主体とするものであろうと予想されるが、一方旧石器時代に関しても、近畿地方において瀬戸内技法の盛行する時期の前後の状況が必ずしも明確に把握されているというわけではない点を考慮に入れると、当該期の石器群の混入の可能性が完全に否定されるわけではないと言えよう。そういう意味から見ると、単なる横長剥片の優勢は示唆的であるとも考えられる。

第2節 繩文時代の遺物

1. 土器

(1) 早期

石見川北岸の暗褐色細縞を含む粘土より、高山寺式と見られる梢円形の押型文を有する土器片が5点(602~606)出土している。小片の為器種は不明である。各片の文様は、大きさ、形に相違が認められる。

(2) 中期

石見川北岸のSK73より、北白川C式と見られる深鉢(第14図19)が出土している。口縁部は大きく広がり、山形と台形を1対ずつ組合せた波状を呈する。また文様は、体部に半截竹管を用いた縱方向の条線文を施し、肩部から口頭部には沈線で二重梢円または渦巻と逆三角形などの主文様を展開させ、口脣部と主文様帶に縄文を配したものである。器形及び条線文などは中期の特徴を示しているが、中心となる主文様の展開やその隙間を埋める縄文などは、むしろ後期の特徴を持っている。しかし、このタイプの縄文は、沈線の潰れ方から、おそらく主文様を描いた後に施されたもので、後期の磨消縄文とは別のものである。この様な点からこの深鉢は、北白川C式の中でも最終末と考えられ、中期から後期への過渡期のものと言えよう。

またSK70からも同様の沈線文を有する土器片(1)が出土しているが、小片の為器形は不明である。

暗褐色細縞を含む粘土からも同様の沈線文に縄文の施された土器片が3点(609・611・616)出土している。うち2点は口縁部の破片で、(611)は波状口縁の波頂部にあたる部分かと思われる。

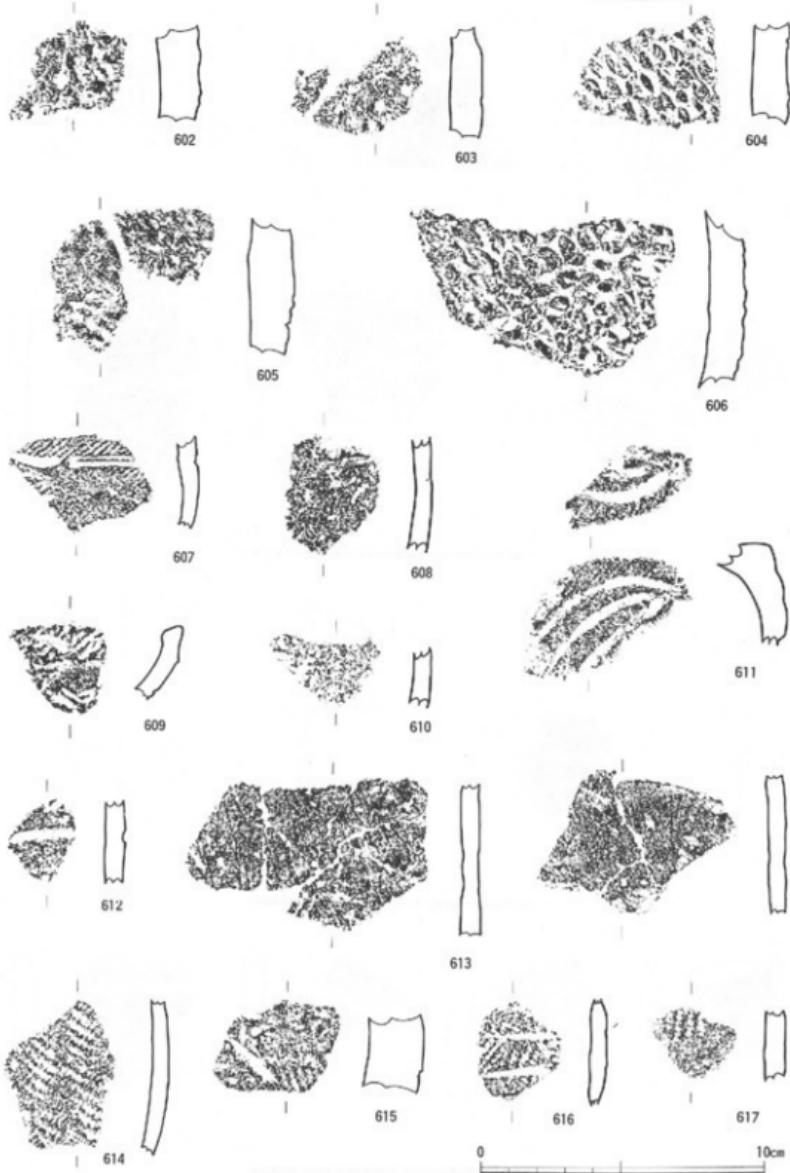
(3) 後期

石見川北岸のSK72から、中津式と見られる上器片(5・10・11・16・17)が出土している。これらの土器片には外面に磨消縄文が見られ、内面は研磨したものとナデ調整のものがある。また、同地区の暗褐色細縞を含む粘土からも同様の磨消縄文を持つ上器片(607)が出土している。また、(634)も沈線文と磨消縄文を持つ後期の土器と思われる。

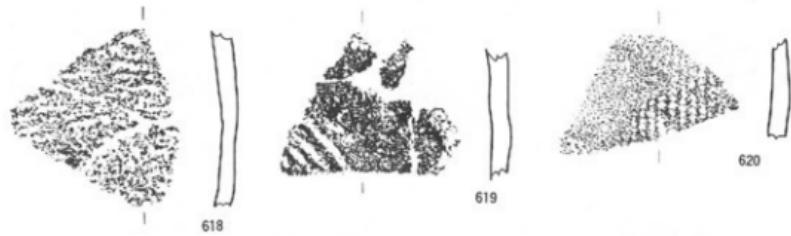
(4) 晩期

晩期の土器は、石見川南岸からも出土している。NV3から出土している土器は、滋賀里IIIに属するものである。直線的に上方へ伸びる口縁部と凹底気味の底部がある。軟質で、表面の剝離が著しいが、外面には横方向の巻貝条痕が認められる。また、石見川北岸の暗褐色細縞を含む粘土からも同じく滋賀里III式と思われる土器片、(628~631・633・635~643)が出土している。石見川南岸のものと同じ形態の深鉢である。同地区、南東部の擾乱層からは、船橋式と見られる深鉢の口縁部と底部(644)が出土している。口縁部には菱形の刻み目のある突帯を2条有し、尖底である。同様の突帯を持った破片は、暗褐色細縞を含む粘土からも出土している。(631・632)

C-1296



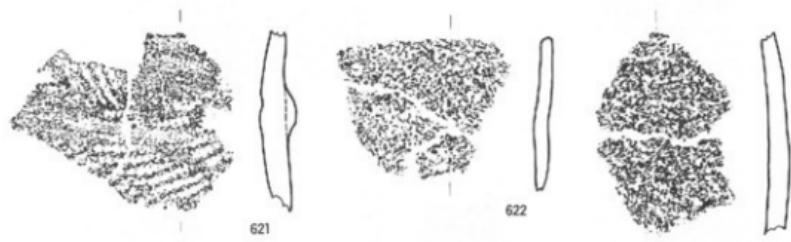
第176図 包含層繩文土器実測図 (1)



619

620

618



622

623

621

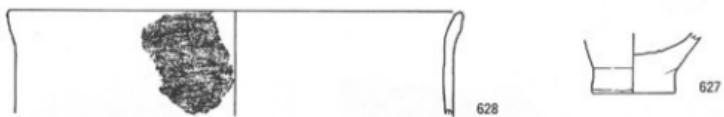
0 10cm



624

625

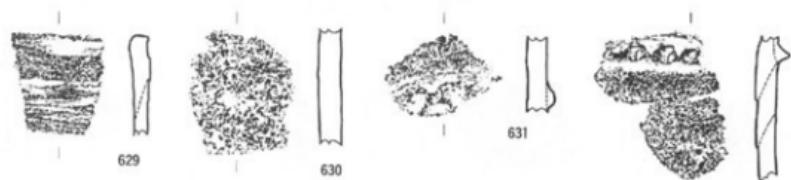
626



628

627

0 20cm



629

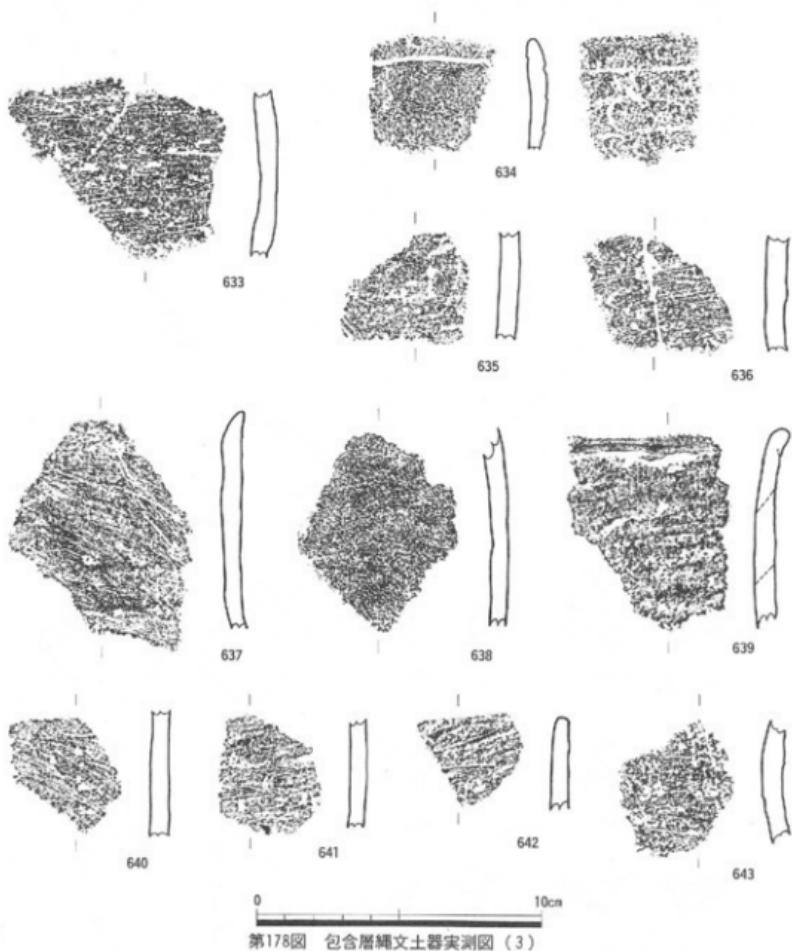
630

631

632

0 10cm

第177図 包含層縄文土器実測図（2）



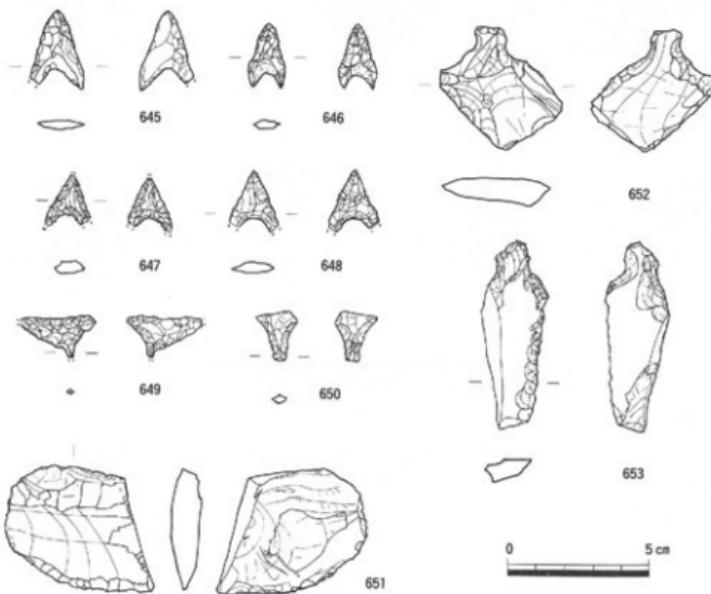
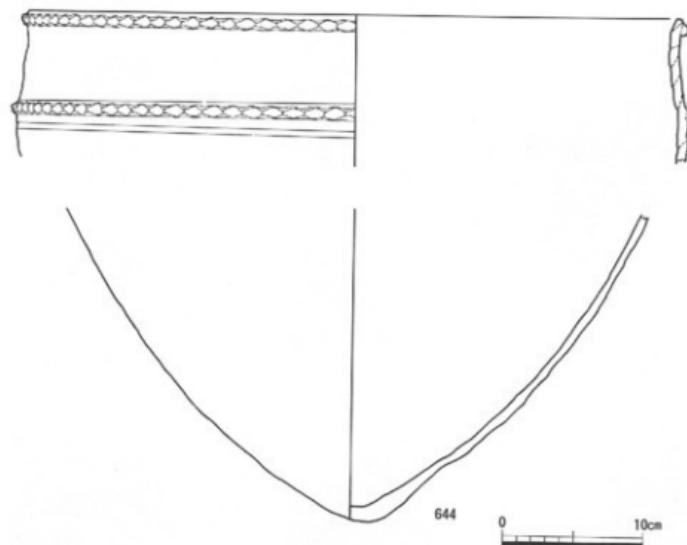
第178図 包含層縄文土器実測図（3）

2. 石器

石器は石見川南岸の1・2・3・4地区の包含層より、石鎌・石匙・不定形刃器が出土している（645～648・651～653）。いずれも石質はサヌカイトである。

（1）石鎌

4点出土しているが、完形のものは1点のみであった。全て凹基無茎式である。（645）は長さ2.85cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.05gで、4点の中で最も大きいが薄いものである。平面形は先端部と基部に丸みを持つ二等辺三角形を呈する。調整剝離は片面のみ細かく施され、表面



第179図 包含層縄文土器実測図(4)・石器実測図

は大割離を残す。風化が著しい。

(646) は長さ2.3cm、幅1.25cm、厚さ0.35cm、重さ0.72g。645と同様平面形に丸味を持つが、やや小さく、細かい調整剝離が施されている。

(647) は長さ1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ0.98g。平面形は、頂点の鋭い二等辺三角形を呈する。調整剝離は、両面とも周辺部のみに細かく施され、断面は台形を呈する。

(648) も平面形は、鋭い二等辺三角形を呈し、長さ2.25cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ0.8gである。比較的大まかな加工が施されている。

(2) 石匙

石匙は2点出土している。

(652) は非常に質の悪いサヌカイト製で、加工も粗雑である。長さ4.4cm、幅4.35cm、厚さ0.8cm。タテ長ともヨコ長とも言い難い形態である。

(653) はタテ長の石匙で、長さ6.8cm、幅2.35cm、厚さ0.65cmである。長辺の片面に細かい調整剝離が施されている。

(3) 不定形刃器

(651) は、長さ4.4cm、幅5.3cm、厚さ1.55cm。半椭円形を呈する。円周部分に調整剝離を施して刃部をつくる。上面は自然面である。

3.まとめ

以上のように、縄文時代は遺物の上から、早期から何らかの人跡があった事が確認できた。前期から中期にかけて遺物の出土が確認されなかった為、継続して生活していたかどうかは不明である。また、土器の出土が石見川北岸に集中しており、南岸から出土した土器は晩期のもののみであった。この事は、主だった遺構が検出されなかった為明らかではないが、後期迄の生活の基盤は、北岸にあったと考えられよう。

(四宮)

第3節 弥生時代の遺物

1. 土器

(1) 中期

石見川南岸のN V 3から、畿内第III様式の壺が出土している（40～48）。口縁部は形態の違う2つのタイプがある。口頭部が漏斗状に広がり、口縁部が垂下するもの（41～43・46）と、口頭部が外向して上外方へ伸び、端部は上方へ折み上げられたもの（40）がある。口縁部が垂下するものはそこに施文部を持ち、簾状文を有するもの（46）、波状に刺突文をめぐらすもの（41）、横1列に刺突文をめぐらすもの（42）、口縁部内面に円形浮文を有するもの（43）がある。（48）は壺の肩部と思われる破片で、円形浮文を有する。これには円形浮文の下に櫛描きの直線文、あるいは流水文が施されていたようであるが、摩耗が著しく詳細は不明である。これらの底部と思われる（44・45）があるが、いずれも平底である。また、（41～43・45・46・48）は、角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。

石見川北岸では、畿内第III～IV様式の土器が出土している。

S I 1から出土している甕（20～24）は、いずれも口縁部が水平方向に短く伸び、体部は張りを持ってやや長く平底のものである。外面にヘラミガキを施した（20・21）は、内面上部にもヘラミガキが見られ、外面にハケ目を施した（22）は内面もハケ目である。（20・22・23・24）は外面に煤が付着しており、煮沸用に使用されたものである。

S I 2からは、壺の底体部と高杯の脚部が出土している。（29）は、扁球形に近い体部か、やや長い体部を有する壺であると思われる。高杯（30）は、上部を欠損しており、形態は不明である。

S D30から出土している甕（31）も、やはり体部が長く、張りを持つ平底のものと思われる。

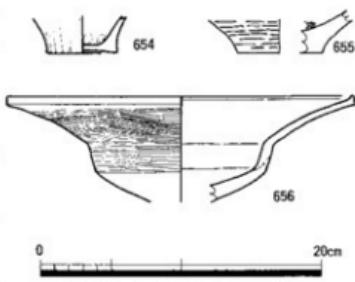
S I 1・2と同時期のものであろう。

暗褐色細緻を含む粘土からも、これらと同様の甕の底部（654）が出土している。

(2) 後期

石見川北岸のS D32から、壺の肩部と甕の底部が出土している。壺（32）は、角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。甕（33）は、ヨコ方向のタタキ目があり、同様のタタキ目を持つ体部の破片も同所から出土している。この破片の内面はハケ目調整である。畿内第V様式のものと考えられる。

5地区、暗褐色細緻を含む粘土からも、同時期の甕の底部と高杯が出土している。（655）は、外面がタタキ、内面にハケ目の施されたものである。（656）は大型の



第180図 包含層弥生土器実測図

高杯で口縁部は屈曲して広がる。外面にはヘラミガキが施されている。いずれも畿内第V様式のものである。

2. 石器

(1) 台石

S I 1 から 2 点出土している。いずれも砂岩の自然石を用いたものである。

(25) は長さ 25.4cm、幅 19.4cm、厚さ 7.4cm で、表面に豆粒大の打撃を受けた痕が十数ヶ所認められる。

(26) は長さ 28.0cm、幅 23.1cm、厚さ 9.6cm で、表面には米粒大の打撃を受けた痕と、幅 2mm、長さ 3~15cm 程の溝状の使用痕が認められる。また、同住居からはサヌカイトの剝片も多量に出土している。

(2) 石錐

3 点出土しており、いずれも掘み状の頭部を有する形態で、石質はサヌカイトである。

(28) は S I 1 から出土している。残存長 3.9cm、頭部幅 2.8cm、錐部幅 0.75cm、頭部厚さ 0.5cm、錐部厚さ 0.35cm、錐端部を欠損している。頭部には大剝離面が残るが、錐部は細かく調整剝離を施す。錐部の断面形は菱形を呈する。

(649) は石見川南岸の 4 地区包含層から出土している。残存長 1.5cm、頭部幅 2.7cm、錐部幅 0.2cm、頭部厚さ 0.5cm、錐部厚さ 0.15cm。錐部の大部分を欠損しているが、断面形は菱形である。全体に両面から細かい調整剝離が施されている。

(650) は石見川北岸の暗褐色細礫を含む粘土より出土している。残存長 1.75cm、頭部幅 1.5cm、錐部 0.55cm、厚さ 0.35cm。頭部から錐部の両面に大剝離面を残し、周辺部のみに両面から調整剝離を施す。頭部、錐部とともに先端部を欠損しているようであるが、錐部の断面形は菱形である。

(3) 不定形刃器

(27) は S I 1 から出土している。長さ 5.0cm、幅 9.7cm、厚さ 1.15cm。おおむね大剝離面で形成される。刃部は片面より 2~3 の粗い調整剝離を加えるのみで、その裏面は大きな自然面を残している。

(四宮)

第4節 古墳時代の遺物

1. 土師器

(1) 器種分類

同一器種における形態及び技法による細分が可能である主な器種、壺・甕・鉢・高杯・器台・小型丸底壺の6種について分類を行った。しかし、遺存状態が悪い為に、形態及び技法の特徴をつかむ事が困難なものも多かった。それらについても、図化できたものはできる限り分類したが、特徴をつかみ得ない何点かは分類の対象から除外した。また、1型式に1例しか見ないもの、包含層のみの出土しかなかったものでも、それが1つの特徴として成り立つと思われるものは、分類の対象とした。また、各形態の時期決定の基準として、須恵器出現以前については、纏向遺跡（纏向式）、発志院遺跡（布留式）の編年を併行させた。それ以後の土師器は、共伴する須恵器の陶邑編年を基準とした。

〔壺〕 頸部のくびれの度合が大きく、口縁高の高いものを壺とした。壺は、口縁部の形態の相違により、A～Fの6型式に大別できる。Aは、A₁とA₂の2類に細分される。A₁ (739) は、口縁部に装飾を持つ壺である。庄内式に代表される円形浮文等の装飾を有する二重口縁の壺があるが、本遺跡出土のものは、竹管の横断面の押压痕を1段連続させただけの簡素な文様である。ヘラミガキが施されていたものと思われる。A₂ (737) には装飾性ではなく、屈曲部は小さな稜をなす。布留2式古段階以前に見られる壺である。A₁、A₂とも球形に近い体部を有すると思われる。Bは、同じく二重口縁で、ほぼ垂直に立ち上がるるものである。B₁～B₃の3類に細分できる。B₁ (580) は、口縁部が直立し、端部は内厚する。体部は、やや長く、外面にハケ目、内面にヘラケズリを施す。布留2式の特徴を持つ壺である。B₂ (127) は、深く折れ曲がらず、屈曲部分外面に小さな稜を有する。B₃ (740) は、他のものに比べ、肉厚である。C (49) は、口縁端部が内厚し、体部外面はハケ目、内面はヘラケズリで、布留1式の特徴をもつ。Dは、口径が10～13cm程の小型の壺で、D₁ (738)、D₂ (741) の2類に細分できる。小型丸底壺よりも口縁部が長く、器壁が厚い。E (154・155・176・406) は、長頸壺で、調整には、指ナデとハケ目が多用されている。F (175・401) は、口頸部が短く甕に近いものであるが、体部が扁球形を呈し、その比率から甕に分類されるべきものである。

〔甕〕 壺に比べ、口縁高が低く、頸部の広く開いているものを甕とした。甕も、口縁部から肩部の形態と手法の特徴により、A～Hの8型式に大別できる。Aは、二重口縁の甕で、A₁～A₃の3類に細分できる。A₁ (53) は、やや上外方へ開く形のもので、端部は狭小な面をなす。纏向3式に類例の見られる甕である。A₂ (743) は、口縁部外面に櫛描直線文をめぐらし、体部内面はヘラケズリで薄く仕上げる。酒津式の形態を示す甕であるが、胎土は金雲母を含み褐色を呈する。A₃ (742) は、屈曲部に丸味を持つが、やはり櫛描直線文をめぐらした可能性があり、胎土もA₂と同様である。Bは、「く」の字形に屈曲する頸部を持つ甕で、庄内式あるいはその流

れを汲む甕である。B₁～B₆の6類に細分した。B₁(51・56・745)は、口縁端部を掘り上げておさめ、頸部内面は稜をなす。体部内面はヘラケズリ、外面は繊筋のタタキで、下部にはハケ目を施す。胎土は雲母、角閃石を多く含み、褐色を呈する。また外面には煤の付着が認められるものが多い。庄内式の甕である。B₂(747・752)も、体部内面をヘラケズリで薄く仕上げるが、口縁端部は内厚して丸く、体部外面はハケ目を多用する。布留1式の特徴が見られるB₃(748)は、端部がやや外反するが、体部内外面の調整や胎土、焼成はB₂と似ており、同系統のものと思われる。B₄(746)は、口縁端部を掘り上げ状におさめ、体部内面はヘラケズリを施すが、器壁は厚く、ハケ目を多用する。B₅(749)も肉厚のもので、口縁端部は内厚する。体部内面のヘラケズリはさらに簡略化され、粗いハケ目が施される。布留2式の特徴をもつものである。B₆(413)は、口縁端部を自然におさめるものである。

C(196)は、全体をナデ調整で仕上げるものである。

Dは、口縁部が肥厚するもので、D₁とD₂の2類に細分される。D₁(99・197・751)は、口径が10cm程の小型の甕である。D₂(157・326～332・384・407・486・753)は本遺跡では、多量に出土する甕である。体部は張りのない長いもので、底部は丸い。

E(377・378・381・385)は、直線的に伸びる口縁部を持つものであるが、肩部に張りのないものが多く、全形はD₂と似ていると思われる。

Fは、口縁部が外弯する甕で、ハケ目を多用する。F₁(126)は、口縁端部が面をなすもので、F₂(177・323・372)は、口縁端部を自然におさめるものである。

Gは、頸部のくびれのゆるやかな広口の甕で、口縁端部の形態によりG₁、G₂の2類に細分される。G₁(205・242・243・322・375・376・480・481)は、口縁端部を自然におさめるもので、本遺跡では多量に出土している。G₂(178・398)は、端部がやや内傾する。

Hは、口縁部が短いもので、H₁、H₂の2類に細分される。H₁(447)の口縁部は上外方に立つもので、H₂(156・188)は内弯するものである。いずれも体部の最大径はおおむね上位にある。

〔鉢〕 鉢には、口縁部と体部の区別があるものとないものがあるが、総合して鉢とした。また口縁部と体部の区別があるものでは、口径が体部最大径を凌ぐものは鉢とし、口径が体部最大径を越えないものは甕としている。鉢は、A～Fの6型式に大別できる。

小型の鉢Aは、A₁とA₂の2類に細分される。A₁(736)は、口縁部がやや長く細かいヘラミガキが施される。纏向3式に類例の見られる鉢である。A₂(54・761)は、口縁部のやや短いものである。

B(763)は大型で、口縁部は長く内弯する。

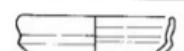
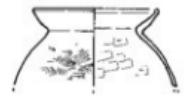
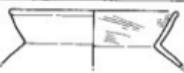
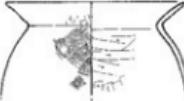
Cは口縁部が短く、底体部はやや浅い。大きさによってC₁～C₃に細分される。C₁(760)は最も小型で、C₂(128・386)、C₃(245・387)の順で大きくなる。

Dは甕に近い形態のもので、D₁～D₃の3類に細分される。D₁(76・129・755)とD₂(335)

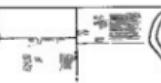
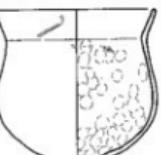
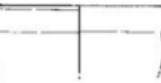
第3表-① 土器器種分類

壺 A	A ₁		屈曲部分は丸味を持ち、二段目に竹管文を有する。	二重口縁で二段目が大きく広がるもの。
	A ₂		屈曲部分は稜をなすもの。	
壺 B	B ₁		二段目は内湾しながら上方へ立ち、端部は肥厚する。	二重口縁で二段目があまり広がらないもの。
	B ₂		二段目は外反して上方へ伸び、端部は肥厚する。	
	B ₃		屈曲部分は丸味を持ち、端部は丸くおさめるもの。	
壺 C			口縁部は上外方へ大きく広がるもの。	
壺 D	D ₁		口縁端部が丸い。	口縁部が比較的長いもの。
	D ₂		口縁端部は面をなす。	
壺 E			口縁部は長く、直線的に上外方へ伸び体部は球形を呈するもの。	
壺 F			口縁部は比較的短く、立つもの。	

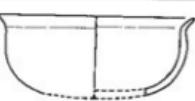
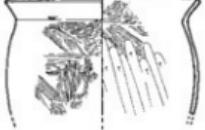
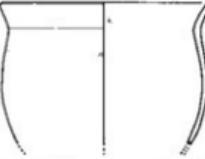
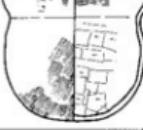
第3表-② 土師器器種分類

	A ₁		二段目が上外方広がる。	
甕 A	A ₂		二段目が直立し、櫛描き文を有する。	二重口縁をもつもの。
	A ₃		二段目が上外方へ広がる。	
	B ₁		口縁端部を上方につまみ上げておさめる。	
甕 B	B ₂		口縁端部は丸く内厚させる。	頸部は「く」の字形に展曲し、体部内面をヘラケズリしたもの。
	B ₃		口縁端部は、やや外反し丸くおさめる。 口縁部の内外面にもハケ目を施す。	
	B ₄		口縁端部を上内方へつまみあげておさめる。 口縁部の内外面にもハケ目を施す。	
	B ₅		口縁端部は内厚し、内傾する面をなす。 口縁部の内面にハケ目を施すものもある。	
	B ₆		口縁端部を自然におさめる。	
	C		口縁部は内弯気味に上外方へ伸び、端部は面をなす。 体部内面をヘラケズリしないもの。	
甕 D	D ₂		口径が10cm以上のもの。	口縁部は肥厚して上外方へ伸びるもの。
	D ₁		口径が10cm前後のもので、やや縱長の体部を有する。	

第3表-① 土師器器種分類

甕 E		口縁部は直線的に上外方へ伸び、肩部に張りを持たないもの。	
甕 F	F ₁ 	口縁端部は平面な面、または浅い凹面をなす。	口縁部はやや長く、上外方へ伸びた後外反するもの。
	F ₂ 	口縁端部は自然におさめる。	
甕 G	G ₁ 	口縁端部は自然におさめる。	口縁部は内寄しながら上外方へ伸び、肩部に張りを持たない、下ぶくれの体部を有するもの。
	G ₂ 	口縁端部は内傾する。	
甕 H	H ₁ 	上外方へ立ち気味の口縁部。	口縁部の短いもの。
	H ₂ 	外寄する口縁部。	
鉢 A	A ₁ 	口縁部は長く、内寄しながら上外方へ伸びる。	小型で、扁平な体部を有するもの。
	A ₂ 	口縁部はやや短いもの。	
鉢 B		大型で、口縁部は長く、内寄しながら上外方へ伸びる。	

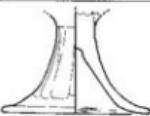
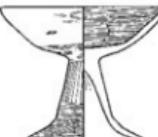
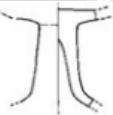
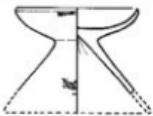
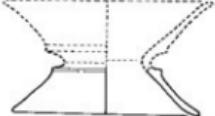
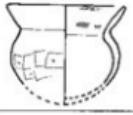
第3表-④ 土師器器種分類

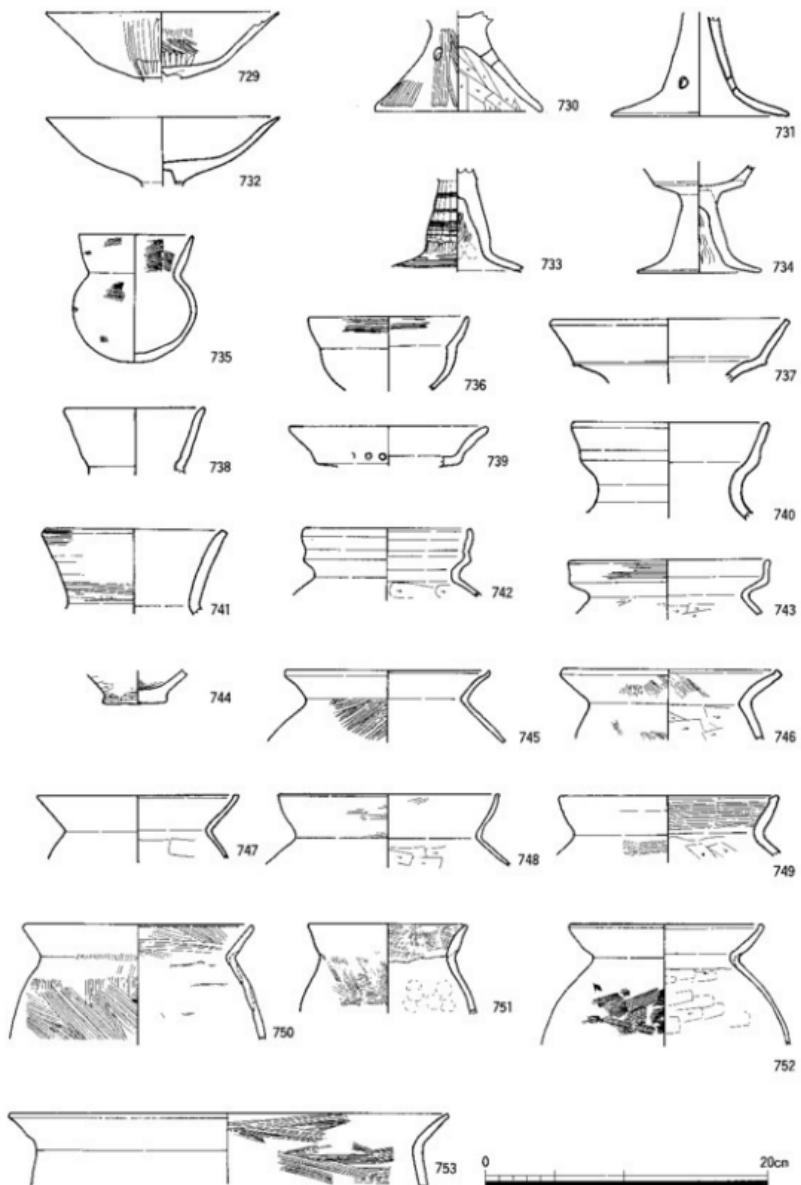
鉢 C	C ₁		口径が10cm前後の小型のもの。	口縁部は短く、上外方へ開くもの。
	C ₂		口径が15cm前後の中型のもの。	
	C ₃		口径が20cm前後の大型のもの。	
鉢 D	D ₁		口径が20cm以上の大型のもので、口縁端部は凹面をなす。	底体部が深く、ハケ目を施すもの。
	D ₂		口径が20cm以上の大型のもので、口縁端部は平面をなす。	
	D ₃		口径が15cm前後の中型で、口縁端部は自然におさめる。	
鉢 E	E ₁		把手を有するもの。	口縁部と体部の区別はなく、直線的に上外方へ広がるもの。
	E ₂		上外方へ大きく開く大型のもの。	
鉢 F			口縁端部は鋭く、底体部内面をハラケズリを施す。	

第3表-⑤ 土師器器種分類

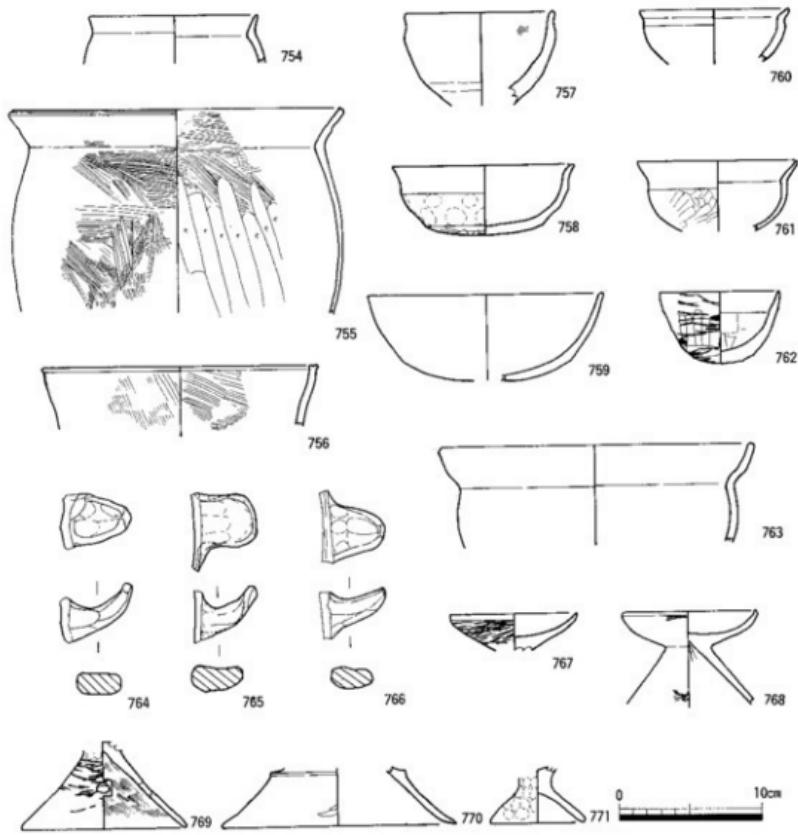
鉢 F	F ₂		口縁端部は丸く、内面にハケ目を施す。	塊形を呈するもの。
	F ₃		把手を有する。	
鉢 G	G ₁		口縁部はやや外反する。	口縁部は上外方へ広がり、底部は平らなもの。
	G ₂		口縁部は自然におさめる。	
高杯 (杯部) A	A ₁		内弯しながら上外方へ開く。	杯部はゆるやかに屈曲して、口縁部へ続くもの。
	A ₂		直線的に上外方へ開く。	
高杯 (杯部) B	A ₃		内弯しながら上外方へ開いた後外反する。	杯底部は稜をなすもの。
	B ₁		口縁部は直立する。	
高杯 (脚部) A	B ₂		口縁部は外反気味に終る。	脚部はゆるやかに広がる。 円形の透かしを有する。

第3表-⑥ 土師器器種分類

高杯脚 B		裾部の広がりが少ないもの。	
C ₁		内面のシボリ痕を少し残し、他はナデ消す。 外面にヘラミガキを施す。	
高杯脚 C	C ₂ 	内面のシボリ痕をヨコ方向にナデ消す。	裾部が屈曲して開くもの。
	C ₃ 	内面のシボリ痕を残す。	
器台 A		貫通しない皿状の受部をもつもの。	
器台 B		鼓形を呈するもの。	
小型丸底壺 A	A ₁ 	全体にハケ目を施すもの。	最大径が体部にあるもの。
A	A ₂ 	口縁部はヨコナデ。 体部外面にヘラケズリを施すもの。	
小型丸底壺 B		口縁部は直線的に上外方へ伸び、肩部にやや張りを持つ。	口径が体部最大径をしのぐもの。



第181図 包含層土師器実測図(1)



第182図 包含層土器実測図（2）

は、口縁端部の形態の相違により分けられる。D₁は、端部が内側に挿み上げられ、外端面は凹面をなす。D₂は、外端面が平面をなすものである。D₃（204・379）は、D₁、D₂よりも小型である。

E～Gは、口縁部と体部の区別がないものである。Eは、直線的に上外方へ広がる形態で、E₁（337・339）とE₂（388）の2類があり、E₁は小型で角状の細長い把手を有する。E₂は口縁部の破片のみで、全形は不明である。

Fは楕形を呈するもので、F₁～F₃の3類に細分される。F₁（60・762）は小型で、内面にヘラケズリを施す。F₂（101・757）はやや厚手で、内面にハケ目を施す。F₃（418・419）は把手を有するもので、この把手は、E₁と同形態の細長い角状を呈すると思われる。

Gは底体部の浅いもので、G₁、G₂の2類に細分できる。G₁(758)は、底部外面をヘラケズリで平らに仕上げる。G₂(186・187・336・414・759)は、ナデ及び指圧で底体部を平らに仕上げるものである。(336・414)は、口径も小さく浅いもので、(414)の内面には、放射状の暗文が見られる。

〔高杯（杯部）〕 杯部と脚部が接合された状態で、全容の把握できるのは1点のみであった。そのため高杯は、杯部と脚部を別に分類した。杯部には、底部を滑らかに仕上げるものと、稜をなすものがあり、A・Bの2型式に大別できる。

Aは、底部を滑らかに仕上げるもので、A₁～A₃の3類に細分される。A₁(59)は、内外面に非常に丁寧なヘラミガキを施すものである。A₂(57・58・729・732)は、直線的に伸びる杯部で、ヘラミガキを施すものと、ハケ目をナデ消したものがある。A₃(79・125)は、口縁端部が外反するものである。

Bは、底部に稜を残すもので、口縁端部の小差によりB₁(173・174・241)とB₂(412)の2類に細分される。B₁にも、内面にヘラミガキを施すものがある(173)。

〔高杯（脚部）〕 脚部は、裾部の広がり方によりA～Cの3型式に大別できる。

A(65・731)は、裾部がなだらかに広がるもので、内面のシボリ痕は丁寧にナデ消され、円形の透かしを有する。B(64)は、裾部の広がりが少なく、やや肉厚で、Aに比べると粗雑なつくりである。Cは、裾部が屈曲して広がるもので、C₁～C₃の3類に細分される。C₁(59・733)は、細かいヘラミガキを施すもので、内面のシボリ痕は上部に少し残るが、ほぼナデ消されている。C₂(450)は、完全にシボリ痕をナデ消すもので、C₃(125・734)は、シボリ痕をすべて残すものである。

〔器台〕 眇状の受部を有するAと鼓形を呈するBがある。A(767～769)は、小型で貫通しない眴状の受部に直線的に下外方へ広がる脚部を有するもので、縦向3式～4式に見られる器台と同時期のものと考えられる。B(770)の鼓形器台は、山陰の土器である。畿内では縦向2式期から見られ、4式期には多量に出土しているが、本遺跡ではこの1点だけであった。

〔小型丸底壺〕 口径が体部最大径を凌ぐAと、最大径が体部にあるBの2型式に大別できる。

A(63)は、体部外面にヘラケズリを施すもので、布留2式古段階の特徴を示す。

Bは、B₁とB₂の2類に細分される。B₁(735)は、全体に細かいハケ目を施すもので、B₂(581)は肩部外面をハケ目、体部から底部にヘラケズリを施すものである。

(2) 時期的分類

以上のような型式分類を行ったが、これらの中には包含層からの出土しか見られなかった形態も多く、はっきりとした時期設定は難しい。ここでは、古墳時代を3つの時期に大別し、遺構から出土した遺物の併行関係と、他遺跡の類例等により時期的な観点から見てみたいと思う。

〔I期〕 須恵器が出土する迄の時期をI期とする。この時期の土師器は、石見川北岸の5地区S I 3～8と暗褐色細繹を含む粘土(以後5地区包含層と呼ぶ)、南岸の4地区S R 4から出土

している。壺A₁・A₂・B₁・C、甕A₁～A₂・B₁～B₂、鉢A₁・A₂・F₁、高杯杯部A₁・A₂、高杯脚部A・B・C₁、器台A・B、小型丸底壺A・B₁・B₂がこの時期にあたる。壺、甕は二重口縁のものが目につく。また、体部内面をヘラケズリで仕上げるのがこの時期の特徴と言える。その他の器種では、細かいヘラミガキを丁寧に施したものが多い。

壺 A₁ (739) は形態的には、I期も中でも特に古い時期のものと考えられるが、5地区包含層からの出土のみで不明確である。B₁ (580) は、布留2式古段階に併行する甕で、小型丸底甕B₂ (581) と併にS R 4から出土する。祭祀用らしく、体部と底部に小孔が穿たれている。

甕 (743) は、酒津式の形態を示す甕であるが、胎土には金雲母を含み、暗褐色を呈する。(742) も同様の胎土で、これらは河内で製作されたものと思われる。纏向遺跡にもこのような類例が見られる。

B₁は庄内式の壺で、5地区包含層から多量に出土した。しかし、残存率が非常に悪く、口縁部のみの実測となったもののが多かった (745)。遺構では、S I 5から (51) が、S I 6から (56) がそれぞれ出土している。S I 5からは、纏向3式併行期と思われる二重口縁の甕A₁ (53) が出土している。また (50) は、小型丸底甕の口縁部のようであるが、非常に精緻な胎土で、表面には細かいヘラミガキが丁寧に施されているため、この時期の土器と考えて良いであろう。S I 6からは、明らかに布留式併行期と思われる甕 (55) や高杯 (57・58) が出土しており、(56) の器壁も他の庄内式甕に比べて厚い。これらの事から (56) は、庄内式でも新しい時期のものか、あるいは混入の可能性もある。

B₃～B₅は、全て5地区包含層からの出七であった。B₂ (747・752)、B₃ (748) の体部内面は、まだかなり丁寧にヘラケズリがなされており、器壁も薄いが、B₄ (746)、B₅ (749) は、器壁が厚くなっている。(749) には、巻き上げ痕も一部に残る。B₅は、口縁端部の形態等から布留1式併行期のものと考えられ、B₄、B₅は、布留2式古段階から新段階に併行する時期と思われる。

鉢 扁平な体部を有するAと、椀形を呈するF₁がある。I期の鉢はいずれも精緻な胎土で、細かいヘラミガキを施すもの (736・762) が見られる。

A₁ (736) は、纏向3式に類例の見られる精選された胎土をもつ小型の鉢で、同様の胎土をもつA₂ (54・761) もまた丹念なつくりたである。(54) が纏向3式併行期の甕 (53) と共に伴することもあり、A₁、A₂は、ほぼ同時期と考えられる。また、F₁ (60・762) も同様の精製された土器で、(762) は、非常に細かいヘラミガキが施されている。これらもAと同時期と考えられる。

高杯 杯部は、直線的に広がるもの (57・58・729・732) がI期には多く、底部に稜をなすものは見られない。脚部では、円形の透かしを有する (65) が見られる。

(59) は、細かいヘラミガキを丁寧に施したもので、布留式期には、このような細かいヘラミガキは見られず、それ以前のものと考えられる。また (59) の出土したS I 7では、鉢F₁ (60) が共作しており、やはり纏向3式併行期まで遡ると考えられる。

器台 器台と小型丸底壺は、I期のみに見られる器種である。小型の器台Aの出土量は多く、そのほとんどが5地区包含層からの出土であった(767~769)。しかし、図化できなかったが、布留1式併行期と見られるS I 4からの出土が確認されている。いずれも細かいヘラミガキの施されたもので、(769)の脚部の内面はハケ目で調整された、特に丁寧なつくりである。鼓型器台のBは、5地区包含で出土した(770)だけである。畿内では、櫛向遺跡に類例を見る山陰の鍵尾式の土器であるが、(770)は、遺存状態が悪く時期は不明である。

小型丸底壺 S R 4から出土した(581)は、布留2式古段階併行期の壺(580)に伴うもので、やはり体部外面にヘラケズリを施すB(63)とともに、この時期の特徴をもつものである。細かいハケ目だけで器面調整した(735)はやや古いものと考えられる。

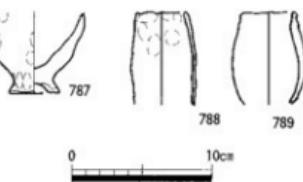
[II期] 須恵器の出現から、蓋杯Aタイプの出土する時期をII期とする。この時期の土師器は、やはり石見川北岸の5地区からの出土が多く、S I 10~15、S K 63と5地区包含層、南岸の2地区S T 1から出土している。壺C、D₁、F₁、H 1、鉢C₂、D₁、F₂、高杯(杯部)A₂がこの時期にあたる。壺は少なくなり、壺には、小型のD₁見られるようになる。器台と小型丸底壺は姿を消す。壺・壺の口縁端部の肥厚はなくなり、面をなす程度である。また、体部内面にヘラケズリを施すものも見られなくなり、粗いハケ目が多用される。

壺 II期では、遺構からの壺の出土は非常に少ない。須恵器蓋杯A₂の出土するS I 13から1点(100)と蓋杯A₂の出土するS I 15から1点(127)、蓋杯A₂の出土するS T 1から1点(446)が出土している。(100)は、頸部がやや細く、口縁高も壺に比べ高いが、体部はやや縱長であると思われ、壺D₁に近い形態である。S I 13からは他に壺D₁(99)、鉢F₂(101)等が出土している。(127)は二重口縁の壺であるが、I期のものに比べ、屈曲がゆるやかで直線に近い。S I 15からは、他に壺F₁(126)、鉢C₂(128)、D₁(129)、高杯(杯部)A₂(125)等が出土している。(446)は、直口壺で口縁部はそう長くなく、端部は自然におさめられている。形態的には壺Cの系統である。

壺 D₁は、この時期の遺構からは多く出土する壺でS I 10(75)、S I 13(99)、S K 63(197)、5地区包含層(751)から出土している。(99)の体部内面には、I期の名残のヘラケズリが残る。S I 13は、他の遺構に比べ、やや時期の遅れる住居で、(99)は、壺D₁でもやや古いものと思われる。

(126)は、須恵器蓋杯A₂とともにS I 15から出土している。III期に多く出土する壺F₂の系統であるが、端部はII期らしく面をなしておらず、徐々に端部を自然におさめるF₂に変わるものと考えられる。

鉢 II期から口縁部の外反する浅型の鉢Cが現れる。S I 15からは、中型のC₂(128)が出土している。また、大型の鉢では、D₁が同じS I 15から出土している(129)。



第183図 包含層製塙土器実測図

粗いハケ目が内外面に施されるもので、口縁端部は、I期ほどの内厚はないにしても、やや内側へつまみ上げたような形態である。D₁は他にS I 10(76)、5地区包含層(755)からも出土しており、やはり須恵器蓋杯A₂と共存する。

高杯 口縁部の外反するA₂がII期には見られる。器面調整にハケ目を多用する(79)とナデ調整の(125)があり、いずれも時期は同じであると思われる。

製塙土器 S I 13・SK 72と包含層から出土している。包含層の(787)を除き、いわゆる薄手丸底のタイプである。このタイプは口径4~5cm、体部最大径が5~6cm、載頭卵形を呈している。外面調整は指ナデ、内面ナデ一部ハケ目が見られる。しかし、外面タタキを有するものではなかった。これらの丸底タイプ、紀淡海峡に面する大阪府小島東遺跡の調査報告の中の、丸底1式に該当し、時期的にもほぼ当て嵌まる。

(787)は、一応脚台式の製塙土器と考えたが器形的には不安が残る。(771)についても脚台と考えられる。いずれも小島東遺跡の編年に当て嵌めれば、III~IVに該当する。

〔III期〕 須恵器蓋杯B、C、Dタイプの出土する時期とするが、土師器は大むね後半の蓋杯C、Dの時期のものである。石見川南岸に遺物は集中し、北岸からは、この時期の遺物は見られなくなる。S I 17~19、SK 1、36、105、106、108~115、111~143、SD 1、2、3、ST 2~5、8、SS 1、2、SX 1、SY 1~3がこの時期の遺構である。壺E、F、甕D₂、E、F₂、G₁、G₂、H₂、鉢C₃、D₂、D₃、E₁、E₂、E₃、G₂、高杯(杯部)B₁、B₂、(脚部)C₂、C₃がこの時期の遺物で、これまでにはなかった壠と瓶も加わり、器種は豊富になる。胎土は精良なものが多いが、大型の甕・壠等には砂礫を多く含む。また全体にI・II期のものに比べ軟質である。口縁部を自然におさめる形態のものが多く、調整ではハケ目、ナデを多用し、指圧痕を残すものも多い。

壺 長頸壺Eと短頸壺Fがある。EはS I 17の(154)、S I 19の(176)、SK 122の(406)がある。ST 17は、須恵器蓋D₁と身C₁の出土する住居で、土師器では他に甕D₂(157)、H₂(156)が出土している。

Fは、S I 19(175)、SK 121(401)から出土している。S I 19からは、壺E(176)も出土しており、他に高杯(杯部)B₁(173・174)、甕F₂(177)、G₂(178)、須恵器蓋D₁、杯身C₁が伴う。

甕 D₁はIII期で最も多く出土する甕である。II期の遺構であるST 6からすでに(486)が出土しているが、この時期にはこの1点で、やはり多量に出土するのはIII期である。SK 114からは、最も多く出土しており、口縁部(326~328・330・332)とともに体部と思われる(329・331)が出土している。(331)の内面にはヘラケズリが施されているがめずらしい例で、一般にはナデまたはハケ目で調整されている。

D₁に次いで多量に出土する甕にG₁がある。SK 113からは、一般的な大きさの(243)とともに口径が10cm以下の(242)が出土しているが、特に意味のあるものではないと思われる。SK 113からは他に高杯(杯部)B₁(241)、鉢C₃(245)、甕D₂(244)、須恵器は杯蓋D₁、杯身C₁に混

じって、蓋C、D₂、身C₂も出土している。F₂も比較的多く出土する壺でS I 19 (177)、S K114 (323)、S K115 (372・382)から出土している。(382)はかなり口縁部が短くなり、壺H₂に似た形態ではあるが、体部からひねり出したH₂の口縁部よりもF₂に近いと思われる。

鉢 III期の鉢の形態は様々で、これまでにもあった口縁部の外反する浅型のものと楕形に加え、上外方へ大きく広がるE₂、把手を有するE₁、E₃等が現れる。把手を有する鉢は多いらしく、S K114の(337・339)やS K137の(419)のように体部に残る例は少ないが、E₁、F 3どちらかの鉢のものと思われる把手はS K115 (390)、S I 17 (159)等からも出土している。G₂もIII期には多く見られる鉢で、S D35から出土する(186・187)をはじめ、S K114の(336)のようなやや小型のものも見られる。

高杯 杯底部に棱を残すものが一般的で、滑らかな底部のものは見られない。また脚部は、内面にシボリ痕を残したものが多く、丁寧にシボリ痕を消したS T 3の(450~452)はめずらしく、時期もやや遡ると思われる。

壺・甌 III期から新たに現れた器種である。II期においても壺、甌はあったが、平行あるいは格子状のタタキ目のある韓式系土器であった。III期には、他の土師器類と同様の胎土、手法で作られた壺、甌が見られる。

甌はS I 18 (163)、S I 19 (180・181)、S K115 (389)、S K138 (423)が出土している。(163)と(423)は底部で棒状のものを渡すための小孔が穿たれている。器面調整には2方法あり、(163・389)はハケ目を多用するもので、(181・423)は、上部はナデ調整で、底部近くにヘラケズリを施すものである。(181・423)は共伴する遺物が少なく、ハケ目調整のものとの前後関係は明瞭でないが、(163)の出土したS I 18からは、須恵器蓋杯C、Dと同時期の高杯脚部が出土している。

壺はS K114 (338・340)、S K121 (402)から出土している。韓式系土器との相違は、胎土・手法の他に舌状を呈する把手の形態が挙げられる。S K114は須恵器蓋杯C・Dの出土する土壤で、S K121も同時期と思われる。

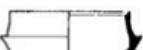
(3) まとめ

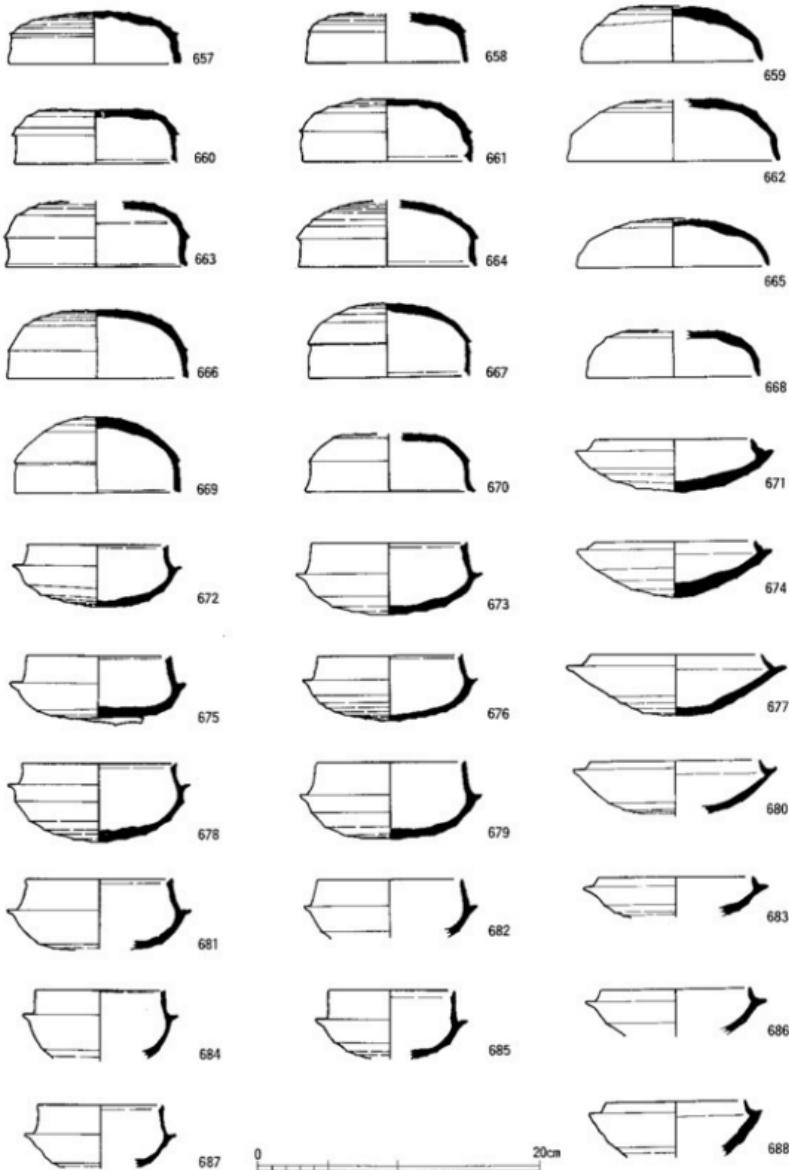
以上のように土師器についての分類を行ってきたが、時期的分類において、大和地方である纏向遺跡と布留遺跡の編年を地理的に隔りのある本遺跡の指標とする事に問題はある。しかし、他に本遺跡の遺物に普遍的に用いられる編年が見あたらず、上の2遺跡の編年を受用した。

古墳時代の土師器は、主に纏向2式併行期から陶邑II-5併行期の間に見られるが、その時期間に連続して確認されてはおらず、II期の初頭に初期須恵器の出土がなく、それに伴う土師器も確認されていない。またII期の前半は、古墳が主体である為、土師器の出土は非常に少ない。すなわち、土師器においては、I期は纏向3式併行期から布留2式古段階併行期まで、II期は陶邑I-3からI-5併行期、III期は陶邑II-4からII-5併行期が主たる年代と言える。

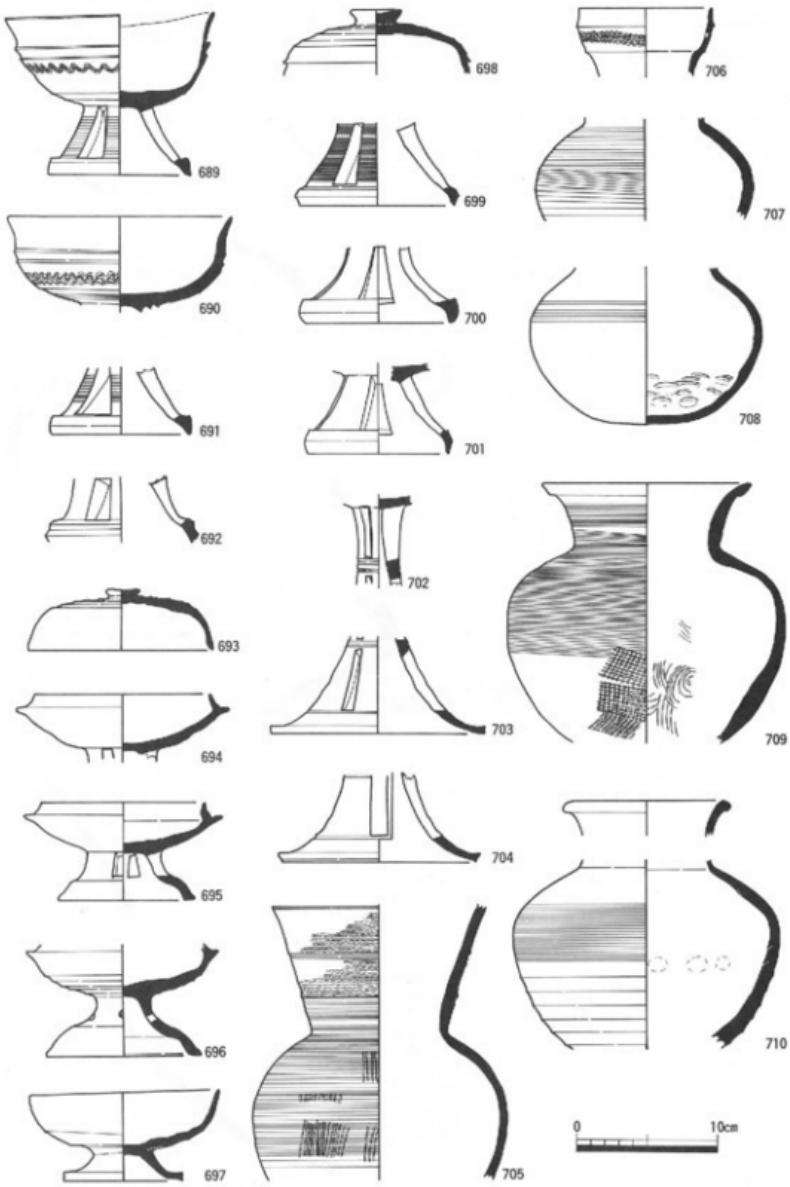
(尾谷・四宮)

第4表 須恵器蓋・杯形態分類

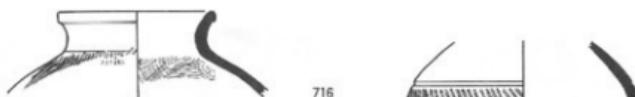
杯 蓋 A	A ₁		稜は鋭く、口縁端部は浅い凹面をなすか、丸くおさめる。天井部は扁平である。	稜が突出しているもの。
	A ₂		稜は鋭く、口縁端部は内傾する凹面、または段をなす。	
	A ₃		稜は丸みを持ち、口縁端部は内傾する凹面、または明瞭な段をなす。	
杯 蓋 B			稜は小さく、丸みを持ち、口縁端部は内傾する段をなす。	
杯 蓋 C			天井部と口縁部の境に沈線がめぐる。口縁端部は内傾する凹面、または段をなす。	
杯 蓋 D	D ₁		口縁部は下外方へドる。口縁端部にヘラによる刻み目を有するものもある。	天井部から口縁部はなだらかに下り、口縁端部は丸くおさめる。
	D ₂		口縁部は端部近くでやや屈曲する。	
杯 身 A	A ₁		底部が平らで安定感があり、口縁端部は平面、または浅い凹面をなす。	立ち上がりが長いもの。
	A ₂		底体部は深く丸みを持ち、口縁端部は凹面ないしは段をなすものが多い。	
	A ₃		口径、器高はやや小さく、口縁端部は明瞭な段をなす。	
杯 身 B			立ち上がりはやや短く、口径は大きい。底部内面中央に円弧叩きのスタンプが見られるものもある。	
杯 身 C	C ₁		立ち上がりは、内傾後直立して伸びる。	立ち上がりが短いもの。
	C ₂		立ち上がりは内傾する。	



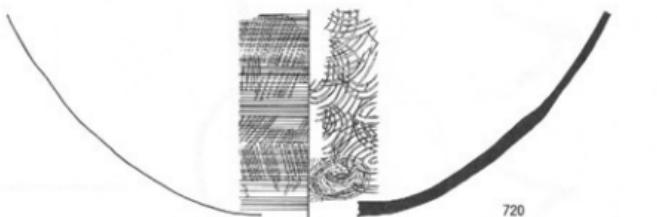
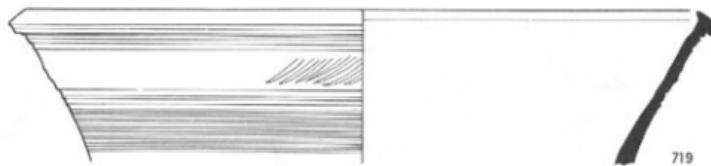
第184図 包含層須惠器実測図（1）



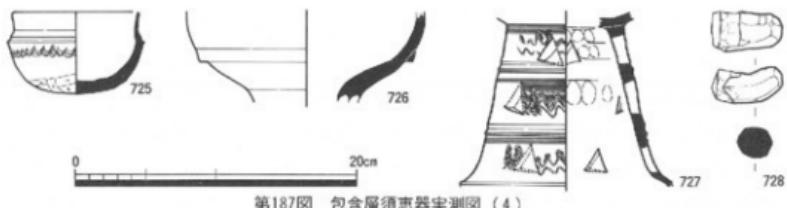
第185図 包含層須恵器実測図 (2)



0 10cm



第186図 包含層須恵器実測図（3）



第187図 包含層須恵器実測図(4)

2. 須恵器

本遺跡における須恵器の出土量は非常に多く、器種も多様である。それらはおおむね、陶邑編年を受用して細分できる。ここでは蓋杯・高杯・脚付装飾壺・提瓶・器台の5器種について説明を加えておく。

(1) 蓋杯

蓋杯は1遺構からの出土量も多く、年代による変遷が顕著なものである。本遺跡においても、他の器種と同様陶邑編年に対応させる事は可能であるが、特徴の曖昧な個体が多く繁雑な為、本遺跡出土の遺物による分類が必要となった。その上で各形態の時期決定の基準として、陶邑編年を対応させた。

〔杯蓋〕 稜の突出の度合と口縁端部の形態等により、A～Dの4タイプに大別できる。

Aは稜の突出する形態のもので、陶邑編年によれば、A₁はI-3、A₂はI-4、A₃はI-5にそれぞれ相当する。

Bは天井部と口縁部の境に沈線がめぐるものでII-2に相当する。

Dは稜の痕跡を残さないもので、D₁、D₂の2類に細分される。D₁はII-3～4に相当するもので、D₂はII-4～5に相当するが、天井部が顕著なヘラ切り未調整のものはなく、II-4に近い。

〔杯身〕 立ち上がりの長さにより、A～Cの3タイプに大別できる。

AはA₁～A₃の3類に細分され、A₁はI-3、A₂はI-4、A₃はI-5にそれぞれ相当する。

Bは立ち上がりがやや短く、口径が大きいもので、II-2～3に相当する。

Cは立ち上がりが短く、口径の小さいもので、立ち上がりの形態により、C₁、C₂の2類に細分される。C₁はII-4に相当し、C₂はII-4～5の形態を示すが、底部が未調整のものは見あたらず、II-4に近い。

以上の分類を三日市I～III期にあてはめると、蓋A₁～A₃、身A₁～A₃がII期、蓋B、C、D₁、D₂、身B、C₁、C₂がIII期にあたる。

また、蓋A₁～A₃は身A₁～A₃とほぼ対応する。蓋Bは包含層からの出土のみで、それに伴う身は見あらない。蓋Cは陶邑編年から言えば身Bと対応すべきものであるが、身Bは単独で出土しており、セット関係の確実のものはなかった。蓋Cは蓋杯A₃または、蓋D₁、D₂と混在する。蓋D₁、D₂は身C₁、C₂に対応するもので、これらは遺構に混在する場合が多いが、数量的には蓋

D₁、身C₁がはるかに多い。

(2) 高杯

高杯は有蓋高杯と無蓋高杯に大別できる。数量的には無蓋高杯の方が多く出土している。

〔無蓋高杯〕 II期の無蓋高杯は全般に脚部は短く、基部径が大きいのが特徴である。S I 9の(66)をはじめ5地区包含層から、陶邑I-3~4にあたる無蓋高杯が多く出土している。杯部の外面に凸線をめぐらし、波状文を有するもの、把手を貼付するもの(66)としないもの(689・690)がある。脚部は台形の透かしを3方向に有し、カキ日を施すものである。端部は上下に肥厚し、外端面は低い凸面をなす。

またS T 1からはやや小振りの無蓋高杯(442)が出土している。杯部は浅く、凸線をめぐらすが、波状文等の文様帶を持たず、脚部には透かしを有さないものである。杯部の形態は陶邑I-3から継続して見られるもので、脚部はまだ短く、端部の形態は上下に肥厚するもので、共伴の蓋杯A₃と時期を同じくするものと思われる。

III期になると、脚部は長くなり、細長い透かしを2段に有するものが一般的である。

S T 8から出土している3点(491~493)はIII期の無蓋高杯の好例である。杯部は浅く、外面には2条の凸線をめぐらし、無文のもの(491・492)とヘラ書き文を有するもの(493)がある。脚部は長方形または台形の細長い透かしを2段に有し、中間部に沈線を2条めぐらす。裾部にも透かしの下方に1条の沈線をめぐらすものもある。端部の形態にはいくつかあり、(491~493)のように上方へつまみ上げるようにおさめるものと、SK114の(304)のように下方へ屈曲させるもの、(305)のように端部に沈線をめぐらすもの等がある。なお、(304・305)の杯部の形態は不明である。

またIII期の無蓋高杯にも短脚のものがあり、SK114(302)、包含層から(697)が出土している。これらは、蓋杯の蓋が逆転した形態の杯部を有する。脚部に透かしではなく、端部の形態は長脚の端部と同様である。

〔有蓋高杯〕 II期の有蓋高杯の杯部はSK101から1点出土している(202)。これに伴う蓋は同土壤からは出土していない。蓋はSK113出土の(96)、S I 11の(77)等がある。共伴する蓋杯に時期の前後があるが、(202)に伴っていたであろう蓋と大差はないと思われる。脚部は短脚で(202)の基部径が、無蓋高杯の基部径と変わりなく透かしの切り込みも3方向にある事から、同様の脚部を有すると考えられる。

III期の有蓋高杯は無蓋高杯と同様、長脚のもの(430)と短脚の(695・696)がある。

(430)は蓋杯(身)C₁と同形態の杯部に、やはりIII期の無蓋高杯と同様の脚部を有する。脚基部の径はII期よりもかなり細い。共伴の遺物は杯蓋D₁と杯身C₁で、高杯に伴う蓋は見あたらぬ。

(695・696)も杯部の形態から(430)と同時期と思われる。脚部には長方形の透かしを有するもの(695)と円形の透かしを有する(696)がある。脚基部径は(695)の方が太く、この相

達は透かしの形状に起因するものと思われる。

また、全く透かしを有さない脚部（300・301）もあるが、杯部の形態は不明である。

(693) は有蓋高杯の蓋であると思われる。長脚のものも短脚のものも杯部の形態が同じである為、蓋の形態も同一であったと思われる。

(3) 脚付装飾壺

S T 8 から脚付装飾壺が一括して出土している（496・497・499・500）。この場合の装飾とは人や動物等を形どったものではなく、壺の肩部に付けられた小型の器を指す。他遺跡の出土例を見ると普通、本体をある程度忠実に模した小型のものを肩部に付けるが、S T 8 出土のものは本体とかなり形態の異なる小型の杯状のものを有する。本来、本体を模倣すべきものが簡略化されたと考えられる。また脚部を見ると、一般に子持壺の脚部には2段～3段の透かしを有するものが多いが、S T 8 の4点はいずれも長方形の透かしを1段だけ有するものである。これらは透かしを多く有するものよりも時期的に新しいと思われ、陶邑II-4～5にあたる装飾のない脚付壺や、脚付長頸壺によく見られる脚部である。同様の脚部を有する壺は、福井県の獅子塚古墳、和歌山県の有留木古墳に類例が見られるが、いずれも肩部の小型壺は簡略化されてはいない。

またS T 8 の4点の中にも2種の形態がある。口頸部が太く、文様帶を有し、口縁端部が外反して丸くおさめるAタイプ（499・500）と、長頸で文様をもたず、口縁端部を自然におさめるBタイプ（496・497）がある。Aの肩部の小型壺は口頸部と本体の境と思われる箇所に沈線がめぐらされており、かすかに模倣の意図が感じられる。しかしBタイプの肩部には、口頸部と本体の境が屈曲するだけの、より杯に近い形のものが付けられている。

小型壺や口頸部の簡略が時期の下降につながるとも考えられるが、共伴の無蓋高杯（491～493）は陶邑II-4～5にあたり、これらの時期差はあまり考えられない。

(4) 提瓶

提瓶の出土は少なく3点であるが、形態はそれぞれ異なる。

S T 2 から出土した（449）は口縁端部が上方に屈曲し、鉤状の把手を有する。口縁端部の形態はやや異なるが、陶邑MT15号窯に類例が見られる。同窯はII-1に属し、三日市ではIII期の初頭にあたる。（449）も同時期と考えられる。また背面側が欠損しており、一般に見られるような粘土板の貼り付け痕の有無は不明であるが、正面側内面にシボリ痕が残る事から、体部成形時の穿孔を埋める手段として粘土を絞り込んだという事が考えられ、その為外面にヘラケズリが施されたようである。口頸部、把手は貼り付けによる。

S K114から出土した（319）は、体部の正面と背面、両側に粘土板の貼り付け痕が残る。背面の貼付痕の方はやや丁寧にナデ消されており、正面側の内面には巻き上げの痕が顕著に残る事から、背面側を先に成形し、ある程度乾燥させた後正面側を積み上げたようである。共伴の遺物から三日市III期末、陶邑編年II-4～5にあたる。

S T 8 から出土した（503）は小型の提瓶である。体部正面側の内面に粘土板の貼り付け痕が

残る一般的な成形方法である。把手は鉤形を呈するが、非常に小さく象微程度のものである。共伴の遺物から陶邑編年II-4~5、三日市III期末にあたる。

(5) 器台

〔II期〕 II期の器台は少なく、S T 1から高杯形器台の杯部が1点(445)出土するのみである。深味のある杯部だが、陶邑編年によればやや小型化された時期にあたるI-5に相当する。外面の文様帯も一段だけであることから、共伴の蓋杯A₁と時期的に一致する。

〔III期〕 III期の器台はS T 8から一括して出土している(504~507)。(507)は杯部の端部が肥厚し、外端面は平面をなす。外面の文様はヘラ描きの斜文と沈線、カキ目によるもので、II期の文様よりも単純になっている。脚部は透かしが6段あり、最下段は丸味をもった三角形の透かしである。最上段を除く各段にヘラ描きの波状文を有する。近隣の類例として、南河内郡河南町の一須賀11号墳出土の器台があげられる。

(506)は杯部の端部を外反させ丸くおさめる。外面の文様は(507)よりもさらに単純で、杯部は沈線を2条めぐらすのみである。脚部の透かしは4段で、全て長方形である。文様もヘラ描きの斜文でカキ目等は見られない。(504・505)も同様の器台である。

S T 8出土の須恵器は装飾壺にも3種類の形態があり、器台でも同様の事が言える。この形態の相違が時間的な限りであるとすれば、この古墳での追葬の可能性も考えられるが、2種の形態の相違は微細なもので、明言するには到らない。

(四宮)

3. 韓式系土器

(1) 出土状況

5地区の古墳時代住居跡群の内、S I 9・12・13・15、古墳のうちS T 1、そして、包含層中から出土している。

住居跡では、S I 9とS I 15は竈状遺構周辺部から出土している。また、S T 1では、周溝中、他の共伴する須恵器が一括で出土したのに対して、単独で他の位置より出土している。

(2) 出土器種

各遺構、包含層の出土韓式系土器を器種別に整理すると以下のとおりである。

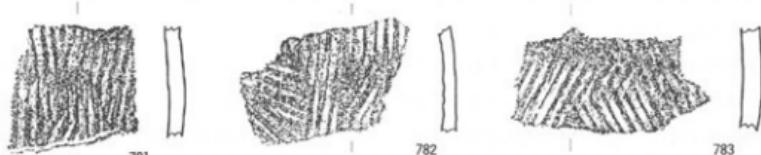
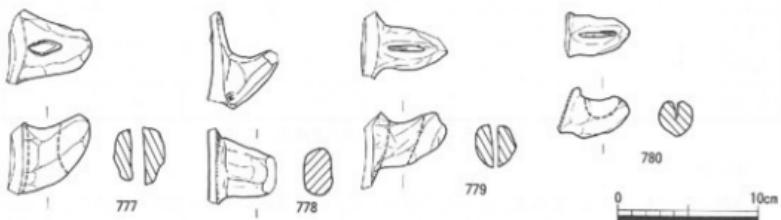
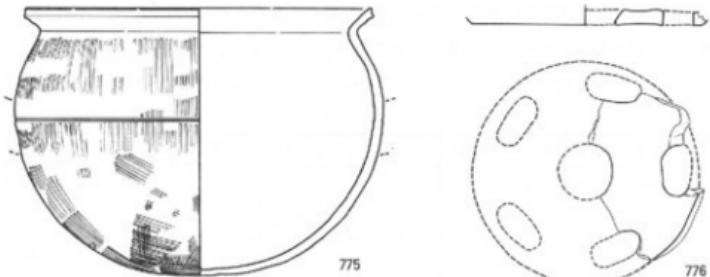
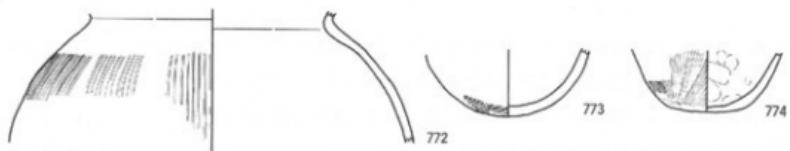
下記以外に、鍋か瓶の角状把手が3点出土している。(777・779)は切り込みが貫通し(780)は半月状に切り込んでいる。

〔長柄甕〕ハケ目を施した(67)と平行タタキの上回転ナデによって消している(69)がある。

(67)は砂礫の観察から紀ノ川流域の砂礫の混入が認められた。

〔平底甕〕外面平行タタキ 口縁部は不明であるがこの器種は他に類例を見ないものである。しかし、やや肩の張る平底の甕は半島に類似する器形が見られる。

〔円底甕〕外面平行タタキが施されている。(136)については、明らかに2次的な焼成に伴う剝離がみられる。



第188図 包含層韓式系土器実測図

〔瓶〕(132)は外面粗いハケが施されており、あるいは平行タタキ目を意識しているかも知れない。作りが稚拙である。(776)の底部はその作りから、(132)よりは精巧な作りである。

〔把手付き鍋〕いずれも平行タタキが施されている。体部は肩部から底部にかけて全体にまるみをもつもので、口縁部など多くの字に外反し端部が肥厚する。ただ、(775)については復元による把手の位置が高位になりすぎるが、体部に巡らされた沈線の位置から他の出土例にならい決定した。〔平底鉢〕ハケ目を施したもの一点出土で、やや丸みをもつ平底である。

これらの中で、(68・69・80)と、(135・772・775)については色調、胎土、焼成をみると酷似する。

	長 腹 錐	平 底 錐	円 底 錐	瓶	把手付き鍋	平 底 鉢	不明肩部	不明土器片
S I 9	67・69	68					71・72	
12					80			
13								104
15			136	131・132			135	133
S T 1								
包含層			778	776	775	714	772	781～786
合 計	2	1	2	8	3	1	2	10

第5表 韓式系土器出土遺構表

3.まとめ

本遺跡の韓式系土器は、数量的には河内平野中央部の長原遺跡や久宝寺遺跡に劣るが、住居跡出土という限定された遺構の中からの出土であり重要である。また、共伴する須恵器からの時期決定も可能であった。(1～3～4)

器種的な特徴を挙げると、タタキ目をもつ平底鉢形土器が出土しないこと、また外面のタタキが、破片の格子タタキ2点を除くと全て平行タタキであることである。

韓式系土器は、河内平野中央部ばかりでなく、大和川の支流石川の最上流部、言い替えれば河内の最深部にあたるこの地にまで分布の範囲が広がっている。石川の流域では、大和川の合流部周辺には分布密度が高い上流部では一須賀古墳群・最近確認された神山遺跡だけである。当遺跡の出土、そして、神山遺跡の出土は石川上流域での韓式系土器の出土する集落遺跡の潜在することを予測する結果となった。

4. 砂礫観察について

〔砂礫について〕土器の表面にみられる砂礫種は、花崗岩・閃緑岩・流紋岩・砂岩・チャート・片岩・火山ガラス・石英・長石・黒雲母・角閃石である。花崗岩としたものは、便宜上、石英・長石がかみ合った粒であり、閃緑岩としてものは石英・長石・角閃石がかみ合った粒である。流

試料番号	器	岩			石			物			焼 付 土 器				
		花崗岩	閃綠岩	流紋岩	砂岩	泥岩	チャート	片岩	火山ガラス	石英	長石	石英	母岩	鈍四石	蠣
1.3.2	燒 付 土 器	M-角 L-角 角	M-角 L-角 角	L-微 直角 角	30倍 視眼 20倍 視眼	30倍 視眼 20倍 視眼	30倍 視眼 20倍 視眼	S 極 直角 角	30倍 視眼 20倍 視眼	30倍 視眼 20倍 視眼	I-微 直角 角	I-多 M-微 直角 角	30倍 視眼 20倍 視眼	30倍 視眼 20倍 視眼	30倍 視眼 20倍 視眼
775	鍋	L-直 角 角	L-直 角 角	L-微 直角 角	—	—	—	S 極 直角 角	S 極 直角 角	L-中 L-中 M-板	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
774	鍋	L-角 角	M-角 角	M-微 直角 角	—	—	—	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
6.8	壺	L-直 角 角	L-直 角 角	L-直 角 角	—	—	—	L-極 直角 角	L-極 直角 角	L-中 L-中 M-板	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
7.0	?	L-直 角 角	M-角 角	M-角 角	—	—	—	M 極 直角 角	M 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
7.2	?	M-角 L-角 角	M-角 L-角 角	M-角 L-角 角	—	—	—	M 極 直角 角	M 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
6.7	長柄鑿	L-極 直角 角	L-極 直角 角	L-極 直角 角	—	—	—	L-極 直角 角	L-極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	
6.9	長柄鑿	M-角 角	M-角 角	M-角 角	—	—	—	M 極 直角 角	M 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
4.4.8	鍋	L-角 角	L-角 角	L-角 角	—	—	—	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	M 極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	
S15	粘土塊	L-角 角	L-角 角	L-角 角	—	—	—	L-極 直角 角	L-極 直角 角	L-極 直角 角	L-極 直角 角	L-極 直角 角	S 極 直角 角	S 極 直角 角	

試料番号の四桁目は、本文よりの図番号に同じ。本文よりの図番号 2 mm 深さ 0.5 mm 以上。M=粒径 2 mm 深さ 0.5 mm 以上。S=粒径 0.5 mm 未満。手による観察による範囲。L=粒径 1 mm 以上。M-板: 1 mm 未満 0.5 mm 未満。S-板: 1 mm 未満 0.2 mm 以下。SS=粒径 0.2 mm 未満。板: 板状。具: 具状。

第 6 表 出土焼式土器砂礫觀察表（奥田尚作表）

紋岩としたものは石基中に石英の斑晶が見られるものや、白色や灰色で壁開面がみられないものである。流紋岩としたものには、くさっていて壁開面が不明瞭なため、長石を流紋岩とした可能性があるものもある。石英と角閃石については、深成岩起源の砂礫と火山岩起源の砂礫とを区分する目安となるため、結晶面の有無、自形、他形について注意を配った。砂礫の観察は裸眼と倍率30倍の実体鏡とで行い、粒形は角、亜角、亜円、円の4段階に、量は非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階に区分した。

角砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰色、灰白色、暗灰色、粒形が角、粒径が0.5～1.5mmである。造岩鉱物は石英、角閃石、石英・長石・角閃石のかみ合わせからなる。角閃石は柱状の場合がある。

流紋岩：色は灰色、灰白色、粒形が角、亜角である。粒径が0.5～2mmで、稀に6mmにおよぶ場合がある。石基は白色、玻璃質で、石英の斑晶がある場合がある。

砂岩：色は灰色、灰白色、粒形が角、亜角、亜円、粒径が0.5～5mmである。構成砂粒は細粒砂である。

チャート：色は灰白色、暗灰色、暗赤褐色、茶褐色、粒形が角、亜角である。粒径は0.5～3mmで、稀に8mmにおよぶ場合がある。

片岩：色は灰色、暗灰色、粒形が亜角、粒径が0.5～2mmである。泥質片岩である。

火山ガラス：色は無色、黒色で、透明である。粒形は貝殻状、フジツボ状である。粒径は0.2～0.5mmである。

石英：色は無色透明、粒形が角、亜角、粒径が0.2～6mmである。結晶面がある場合、複六角錐をなす場合がある。

長石：色は白色、粒形が角、粒径が0.1～5mmである。バーサイト構造があるものもある。

黒雲母：色は金色、黒色、粒形が板状、粒径が0.2～0.5mmである。

角閃石：色は黒色、粒形が角、粒状、柱状、粒径が0.2～2mmである。結晶面がある場合、柱状で自形をなす場合がある。

〔砂礫構成について〕 砂礫種の組み合わせをもとにA～Cの3類型に区分した。区分は花崗岩、碎屑岩、石英の自形、角閃石と角閃石の自形等の有無を基準とした。各類型の特徴としては次のようである。

A類型：花崗岩、流紋岩、チャート、石英、角閃石を含む。石英にはごくごく僅かに結晶面があるものがみられる。

B類型：花崗岩、流紋岩、石英、角閃石が含まれ、碎屑岩が認められない。

C類型：花崗岩、流紋岩、碎屑岩（砂岩、泥岩、チャート等）、石英が含まれる。石英は量的に少なく、碎屑岩が比較的目立つ。

〔砂礫の採取地について〕 三日市遺跡については、花崗岩起源と推定される砂礫構成を主とし流紋岩が僅かに認められ、チャートが含まれる場合と含まれない場合とがある。この遺跡が位置

する付近は花崗岩類の基盤に新期層がごく薄く堆積している。また、河川の後背地は金剛山地を形成している花崗岩類であるため、付近を流れる河川の砂礫は花崗岩類起源を主とし、新期層から流入した比較的のよいチャート疊がごく僅かに認められる。また、住居跡から出土した上器製作用粘土塊の砂礫構成と比較すれば、酷似または類似するものが4点におよぶ。以上のことから、この遺跡から出土しているA類型B類型に属する土器は、当遺跡またはごく近くで作られていたと推定される。C類型に属する長胴甕は、片岩、碎屑岩、花崗岩を含み、花崗岩類起源の鉱物粒が少ないとから、和泉山脈の南麓、紀の川の北岸で作られていたと推定される。

(尾谷)

4. 増輪

(1) 概要

増輪はその出土地点により2分することができる。1つは2地区I-C区ST3、ST3北側の中世の溝、及びST3周辺の包含層から出土している。狭い範囲からの出土であり、本来ST3に樹立されていたものが、後世の削平をうけ拡散したものと想像される。増輪片は図示した44点以外に、コンテナ20箱分4327点が出土している。

もう1つは2地区I-B-a~q、13~18区の包含層から出土したもの(第190図)で、昭和59年度の試掘調査時にもほぼ同じ地点から増輪が2点出土していた。今回出土したものを含めても出土点数は5点にすぎない。

増輪の種類は普通円筒増輪が大部分を占め、その他に朝顔形円筒増輪や盾形増輪・切形増輪・人物増輪などの形象増輪も見られる。

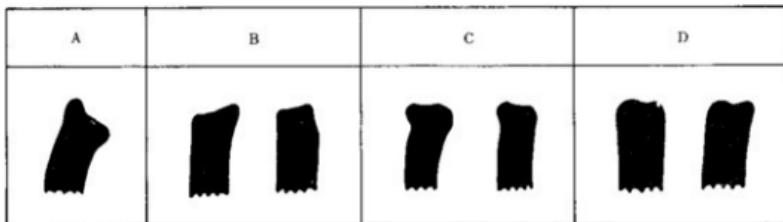
(2) 円筒増輪(第134・135図-453~470、第191・192図-790~804)

〔焼成〕 焼成は普通のものが大部分を占める。黒斑のあるものは見られず、一部須恵質(455・457・459)のものも存在する。形象増輪には須恵質のものは見られない。須恵質の全体に占める割合は約5%である。

〔色調〕 内外面は橙色・浅黄橙色・にぶい橙色など橙系統の色調を呈する。断面も同じく橙系統の色調を呈するが、焼成の良好なものは灰色を呈する。また須恵質のものは内外面が灰黄色・にぶい橙色を呈し、断面は灰黄色・灰白色・浅黄橙色を呈する。

〔胎土〕 胎土は概ね良好である。砂粒(1~10mm)を含むもの、全く含まないもの両者が見られる。砂粒を含まないもの(461~463・465)は内外面調整、口縁部の形態など他の増輪と区分できる明らかな特徴を有する(後述)。

〔形態〕 器形全体が残っているものが少なく、个体像を把握できるものが少ない。段数は4段のもの(462)、5段のもの(798)、6段のもの(455・459)が見られる。段数によって透孔の配置が異なる(後述)。(462)と(498)を比較するかぎり、4段のものと5段のものとの間には器高に差異はない。一方、6段のものは他のものに比べて、およそ1段分器高が高い。朝顔形円筒増輪も上方の朝顔部を除いて考えれば、5段のもの(804)と6段のもの(803)が見られる。



第189図 円筒埴輪口縁端部模式図

これらを比較するとやはり6段のものが1段分器高が高い。

普通円筒埴輪の法量は、器高は(462)が47.4cm、(798)が49.2cm、(455)が推定で62cmである。口縁径は19.4cm～33.4cmである。底部径は15.4～26.0cmで17cm前後のものが最も多い。

朝顔形円筒埴輪の法量は、6段の(803)が器高80.0cm、口縁径40.5cm、底部径23.0cm、五段の(804)が器高64.0cm、口縁径32.1cm、底部径17.6cmである。

普通円筒埴輪の口縁部は、その形態から大きく4つに分けることができる（第189図）。

- A. 短く上外方に外反し、端部は両端に肥厚しながら外傾する凹面をなすもの。
- B. 直口し、端部は若干内傾する凹面をなすもの。
- C. 直口し、端部が内厚し凹面をなすもの。
- D. 直口し、端部が凹面をなすもの。

口縁部の破片229点中、Aが81%、Bが6%、Cが9%、Dが3%を占め、Aが主流をなしている。

〔外面調整〕 すべて右下→左上方向のナナメハケによって調整されている。ハケの単位は多くが1cm当り7～8本であるが、荒いものや細かいものも見られる。荒いもの(453・454)は1cm当り4本、細かいもの(792・794・802)は1cm当り10～11本である。ハケは基底部から丁寧に施されているもの(459・803)もあるが、その多くは第1段中位から第2段中位の間よりハケが始まられ、ハケが施されていない部分では、ハケ施文以前の成形痕を観察することができる。

この成形痕は2種類確認することができる。1つは指による下方向からの強いナデアゲである(468・799)。これは内面でも同様に見られる。

もう1つは板状工具を使用したカキアゲと思われる調整である(461・462・463・465・467)。これは稜が明瞭に残り、外面調整のナナメハケはこの稜を意識しながら施されている。

〔内面調整〕 ハケとナデによって調整されている。ハケは大部分が右下→左上方向のナナメハケによるが、朝顔形埴輪の朝顔部にはヨコハケも見られる。ハケは丁寧に明瞭に施されたもの(455・457・459)もあるが、大部分は不明瞭で部分的にしか見られない。また、(455)の場合上部のハケを強くナデ消している。

外面調整と同じように内面調整のハケもその多くが第1段中位から第2段中位の間より始めら

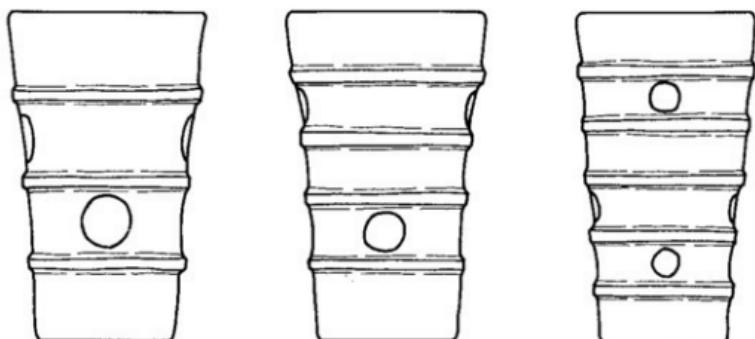
れている。ハケが施されていない部分では、ハケ施文以前の強いナデアゲ（成形痕）を観察することができる。ナデはハケの作業過程を省略したものとも考えられ、胎土のところで少しふれた胎土に砂粒を含まないものが、これによっている。

また、タガ接合時についたと思われるユビオサエが見られる。ハケはこのユビオサエの後、施されている。

〔底部調整〕 普通円筒埴輪には底部調整を行い、器壁を薄くする。これに対して、朝顔形円筒埴輪には底部調整は見られない。（470）は底部調整が行われていないので朝顔形円筒埴輪の底部と見てよいだろう。

内面の底部調整はユビオサエによるものである。

外面の底部調整は①板状工具による押圧（467）、②ナデ、③ナナメハケ（793・797）の3種類が考えられる。稜が見られるものは川西宏幸氏が言われるように板状工具による押圧と考えられ



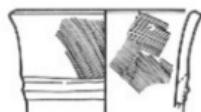
第190図 円筒埴輪透孔模式図

る。そして稜の見られないものをナデと考えて見たが、稜の見られないものの中でも表面が未調整風のものが多く、これらも板状工具による押圧とができるかも知れない。（793・797）は底部が斜め方向のハケによって調整されている。このハケの原体は内外面調整のハケとは異種のものである。①②が主流をなし、③は底部片の内で4点に過ぎない。このハケによる底部調整は天理市岩室池古墳出土埴輪にも見られる。

〔タガ〕 突出度が低く、断面が不整形である。最下段はヨコナデによるものと断続ナデ技法を使用しているものがある。

〔透孔〕 円孔で、各段対称に2つずつ透孔を有する。透孔は段ごと全部にあるのではなく、構成する段数によって透孔の配置が異なる。（第190図）

〔まとめ〕 以上項目ごとに円筒埴輪を整理して見た。色調一様系統。胎土-1~10cmの砂粒を含む。口縁-A。内外面の調整-ナナメハケだが、内面は丁寧に施されていない。またナナメハ



790



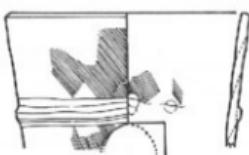
794



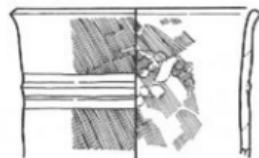
791



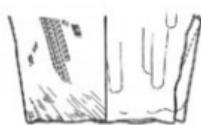
795



792



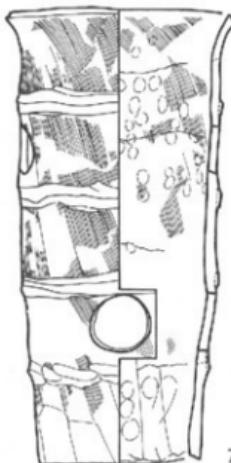
796



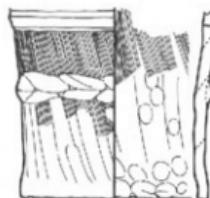
793



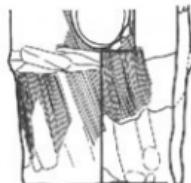
797



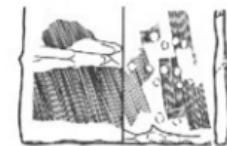
798



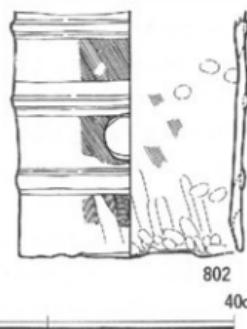
799



800



801



802

0 40cm

第191図 包含層埴輪実測図(1)

ケは第1段中位から第2段中位の間から始められている。成形痕—内外面とも強いナデアゲ。底部調整—内面はユビオサエ、外面はナデあるいは板状工具による押圧。タガー突出度の低い断面が不整形のもので最下段タガは断続ナデ技法による。透孔は円孔。これが本遺跡出土の標準的な円筒埴輪である。

これ以外に胎土・焼成・内外面調整・最下段タガの形態・口縁部の形態などによって2つの特徴的なグループを抽出することができる。1つは胎土が密で砂粒（1mm以上のもの）が全く見られないものである。調整においても内面はナデ、また成形時に板状工具を使用するなど他のものとは相違する。口縁はB・Dに限られ、最下段タガが断続ナデによらず、ヨコナデによるものであった。全体の8%を占める。

他の1つは須恵質のものである。内面調整のナナメハケが他のものに比べ明瞭に施され、外面調整も基底部から丁寧に施されている。全体的に他のものに比べ非常に丁寧なつくりと言えるだろう。また、6段の大型のものは須恵質だけに限られる。全体5%を占める。

このような埴輪間の差異は、そのまま工人あるいは工人集団の違いと考えることができるのでないだろうか。

（3）形象埴輪（第136図-471～475、第192～194図-805～813）

〔盾形埴輪〕（812・813）

盾形埴輪はS T 3周辺の包含層から2個体分出土している。1点は円筒部を除きほぼその形態を把握することができるもの（812）である。もう1点はその文様構成から盾形埴輪と推定される破片（813）である。

（812）の形態は側縁がやや外弯し、上縁は両側縁端よりやや内側から円弧状をなす。下縁は円筒部よりやや上方にのびる。形象部の復元高68cm、最大幅44.4cm、最小幅37.6cm、側縁で厚さ1.3～1.5cm。

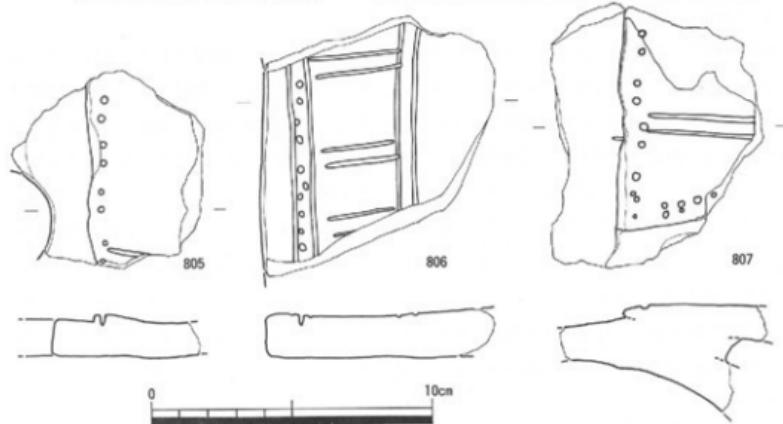
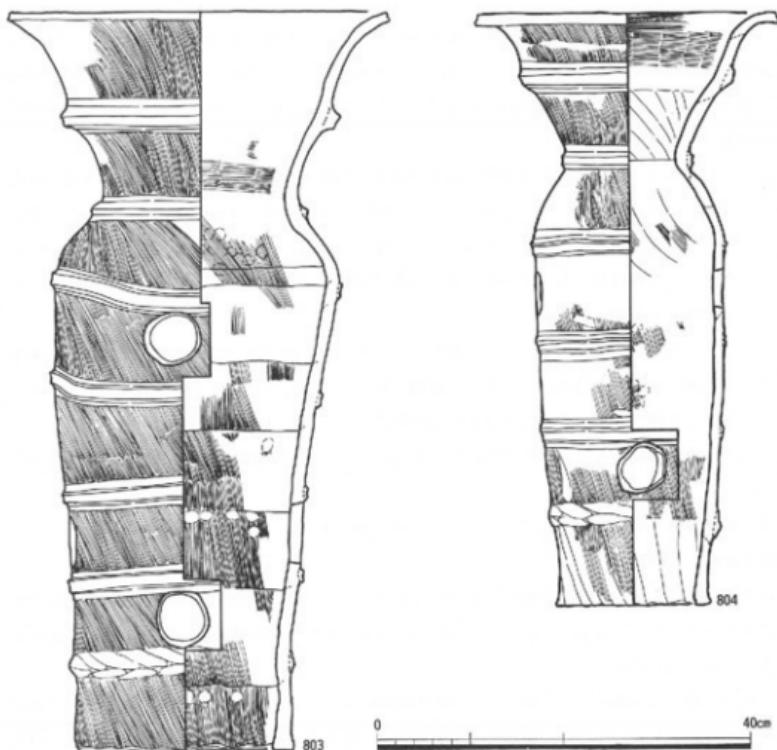
周縁を除き、形象部の表面はハケ調整、周縁と裏面はナデによって調整される。またその上からの文様に対する施文は刺突文を除きヘラガキによる。下縁部を除いて周縁に2穴1対の刺突文をめぐらし、その内側には複合鋸歯文を配し、更にその内側には線の崩れた鋸歯文を配する。内部は綾杉文・斜線文・刺突文の文様帶によって区画される。また、穿孔を内下方から外上方へなめ方向に穿つ。これらは少なくとも10ヶ所確認できる。

（813）も文様構成が（812）と近似し、盾形埴輪の一部と思われる。（812）との違いは表面・裏面ともにナデによって調整されている点と内部を区画する文様帯の文様の差異を挙げることができる。残存長22.6×8cm。

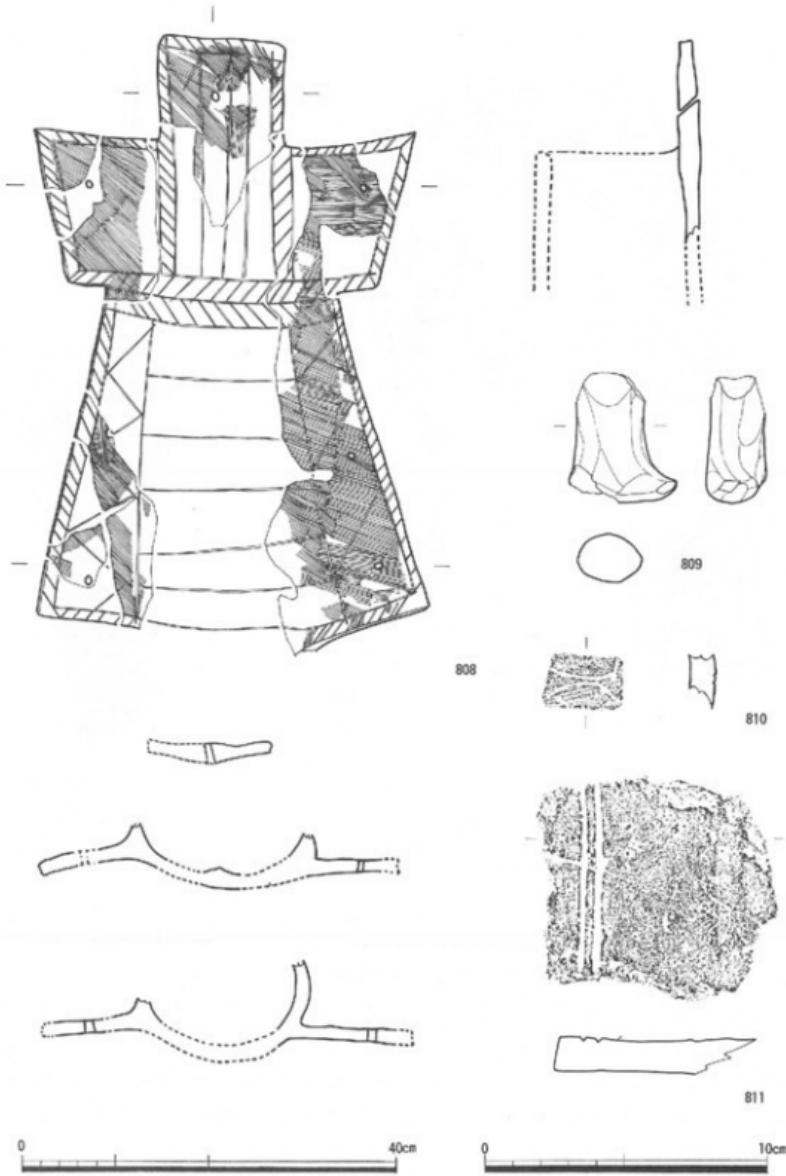
これら盾形埴輪に文様構成・形態から最も類似しているものとしては、和歌山県井辺八幡山古墳、同寺内18号墳出土の盾形埴輪を挙げることができる。

〔物形埴輪〕（808）

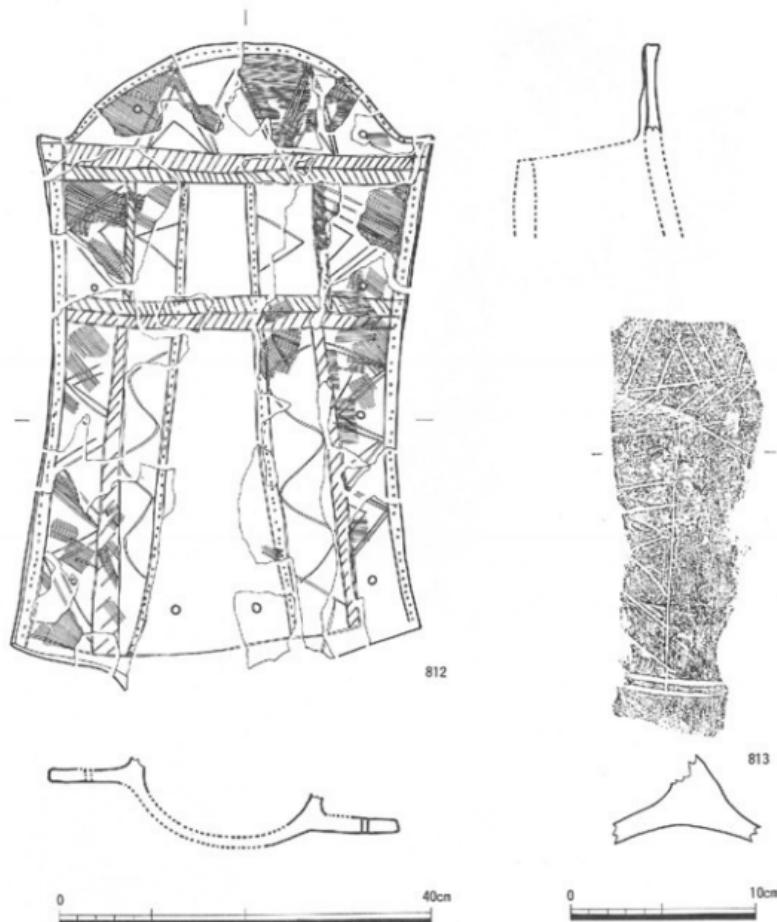
S T 3周辺の包含層から出土した。奴隸形（上端の突出した部分を頭部、その下の左右に突出



第192図 包含層埴輪実測図（2）



第193図 包含層埴輪実測図 (3)



第194図 包含層埴輪実測図（4）

した部分を袖部、その下の部分を袴部とする）を呈する。ただ、一般的に見られる奴駄形を呈する勒形埴輪の場合、袖部の下縁が上外方にのびるのに対し、本埴輪は水平方向にのびる。また袴部の幅が広いのも特徴的である。形象部の復元高66.8cm、頭部の幅13.2cm、袖部上端の幅41.2cm、袖部下端の幅33.6cm、裾部上端の幅25.2cm、裾部上端の幅42.6cm、側縁で厚さ1.3~1.6cm。

周縁を除き、形象部の表面はハケ調整、周縁と裏面はナデによって調整される。またその上からの文様に対する施文はヘラガキによる。周縁には斜線文の文様帯をめぐらし、更に内部を斜線

文の文様帯によって4区画に区分する。袴部ではその内部左右に鋸歯文を配し、中央には横方向に5本の沈線を横走させる。袖部中央下から始まる矢の表現は簡略化され、鐵は矢印状を呈する。また、穿孔を内下方から外上方へなめ方向に穿つ。穿孔は少なくとも7ヶ所確認できる。

近畿地方では六世紀代の勒形埴輪の出土例は少なく、またその多くが小型のものである。それに対し本埴輪は大型で全体像が復元できる点で注目される。鐵を矢印状に簡略化し表現した例は、大谷山22号墳、川辺町箱谷3号墳などでも見られ、この時期の近畿地方で出土する勒形埴輪の特徴とすることができるだろう。天理市岩室池古墳出土の4本矢印状にヘラガキされた不明形象埴輪片も恐らくは勒形埴輪とすることができるだろう。

〔人物埴輪〕 (471・474)

(471・474) ともにS T 3出土のものである。

(474) は人物埴輪の肩から腕にかけての部分である。腕の途中ではめこみ式になっているもので、体部は空洞となっている。調整においてハケは使用されていない。残存長11×11.3cm。

(471) は(474)と同じくはめこみ式のものである。ハリツケの粘土細を鳥足と断定できれば、馬頭埴輪の腕部分と見ることができるだろう。残存長6.3×6.2cm。

〔不明形象埴輪〕 (472・473・475・805~807・809~811)

(472・473・475) はS T 3、(809~811) はS T 3周辺の包含層、(805~807) はI-B-a~q、13~18匁の包含層から出土したものである。

(472) は鳥足状のハリツケがついた小片である。残存長3×2.4cm。

(473) は断面がほぼ円形を呈する棒状のもので、先端が丸く処理されている。残存長3.7cm、径2.4cm。

(475) は断面が不整円形を呈する柱状のものである。先端は平坦に処理され、窪みを有する。家形埴輪の堅魚木の部分とも考えられるが、明瞭な接合痕は見られない。残存長6.6cm、2.2cm。

(805) は板状を呈するもので、やや隆起した部分とそうでない部分に分かれる。隆起した部分外縁には2穴1対の刺突文を配し、その内側にはヘラガキによる沈線を配する。隆起していない部分には透孔が存在する。残存長6.8×7.1cm、厚さ1.2~1.5cm。

(806) は板状を呈するもので、外縁部分である。階段状に2条のヘラガキによる沈線を配し、更に外側の縦走する2条の沈線の間に2穴1対の刺突文を配する。残存長8.2×7.7cm、厚さ1.5cm。

(807) は昭和58年度の1次調査で出土したものを再録したものである。(805・806) と文様構成および文様が施される部分が隆起している点で(805)と近似する。即ち、隆起した部分外縁には2穴1対の刺突文を配し、その内側にはヘラガキによる沈線を配する。ただし、両者は色調・焼成が異なり同一個体ではないようである。外縁が欠失しているので明確でない。また裏面は円筒部がつくのか2重になっている。残存長9.5×7.3cm、厚さ1.2~3.8cm。

(高)

5. 鉄器

(1) 概要

本遺跡から出土した古墳時代のものと思われる鉄器は以下の通りである。

出土遺構	名 称	捕 図 番 号	備 考
S I 18	板状不明鉄器	第48図-105	
S J 15	棒状不明鉄器（鉄釘？）	第58図-134	
S I 17	鉄鎌	第59図-161	
S K 115	鉄鎌	第104図-892	
S K 137	鉄鎌、不明鉄器（刀子？）	第122図-421・422	砥石共伴
S K 143	鉄鎌	第129図-481	
S T 8	鉄鎌、環状鏡板付骨、鉗具、杏葉と思われる縁 金貝、環状不明鉄器	第149-151図-508 ～570	
S R 5	鉄劍	第162図-582	

第7表 鉄器出土遺構表

(2) 武器

〔鉄鎌〕 S T 8 からは3種類の鉄鎌が出土した（第152図）。いずれも有茎のもので、鉄鎌を偏平で幅の広い平根、細身で鋭い尖根、その他の特殊なものの3つに大別した場合、Aは平根、B・Cは尖根に分類することができる。そして S I 17出土の鉄鎌は欠損しているが、Bの可能性が高いだろう。

A…平根系統の鉄鎌で、鎌身の形態は二等辺三角形を呈し、鎌身は逆刺状に若干開くがその先端は丸くなっている。その断面は凸レンズ状である。鎌身長4.5cm、鎌身幅3.0cm、鎌身厚0.2cm（588の場合）。この鎌身に直接茎がつくのか、それとも間に籠被を介するのか欠損のため不明である。

B…尖根系統の鉄鎌で、一般に長頸鎌と言われるものである。全長は欠損のため不明だが、残存長は16.0cm（544の場合で、以下の数値も同様である）で復元すれば恐らく17cm程度になるだろう。鎌身、籠被、茎から構成され、籠被と茎の間には棘状突起を有する。鎌身は短く、その形態は柳葉形を呈する。鎌身には鍋を有し、断面は台形状を呈する。鎌身長2.95cm、鎌身幅0.85cm、鎌身厚0.25cm。籠被は断面が長方形を呈する棒状のものである。（537）や（544）は最大幅が棘状突起近くにある。籠被長8.85cm、籠被幅5.5-6.5cm、籠被厚0.35cm。茎は断面が方形のもので、欠損のため長さは不明である。

C…尖根系統の鉄鎌であるが、鎌身の形態が他に類例を見ないものである。全長は136cm（509の場合で、以下の数値も同様である）である。鎌身の形態は細身の柳葉形である。これは一般的な柳葉形のものに比べて、幅に対し長さが非常に長いのが特徴である。最も類似した例は大和二

塚古墳前方部石室出土の柳葉形鉄鎌と思われるが、これにしても鎌身幅はCタイプの約2倍ある。棘状突起から1.2~1.7cmのところに最大幅をもち、翼状に少し広がる。鎌身には鍔を有し、断面は台形状を呈する。鎌身長7.4cm、鎌身最大幅1.3cm、鎌身厚0.45cm。鎌身と茎の間に棘状突起を有する。茎は断面が方形のもので、茎長6.2cm、茎幅0.2~0.7cm、茎厚0.5cmである。茎には木質が残るものが多く、特に(525)は矢柄(箇)を糸で固定した状態を観察できる。

伴出土器からこれらの適期は6世紀後半代のものと思われる。

〔鉄劍〕 S R 5から鉄劍が出土した。その出土状況及び形態については遺構のところで述べた通りである。土器が伴出せず、その年代は不明である。鉄劍のみでどの程度時期が分かるのか今後の課題したい。

(3) 馬具 (第151図-567~570)

〔轡〕 S T 8から出土した環状鏡板付轡である(570)。鉄製で、環状鏡板と引手により構成され、鏡板には立聞がつく。遺存状態は比較的よい方だが、引手は片方が欠損している。また、一部に鉄鎌片が付着している。

鏡板は梢円形の環状のもので、立聞の形態は長方形で、外側の長辺は丸く処理されている。その中央に相似形の立聞孔をもつ。鏡板の大きさは左が長径8.2cm、短径6.5cm、右が長径8.5cm、短径7.5cmである。断面は梢円形である。立聞は左が長さ4.5×2.0cm、右が長さ4.7×2.0cmである。

衡は2本の鉄棒を中心で連結した2連式であり、端を環状にして連結している。衡どうしを連結する環の径は2.1cmだが、衡と鏡板を連結する環には引手が付いたため径3.1~3.3cmと大きくなっている。衡1つ分の長さは8.8cm、断面は棒状部分がほぼ方形、環部分が方形に近い円形である。

引手は直接鏡板に付かず、衡の環に付いている。引手の長さは17.1cm、環の径は2.5cmである。断面は棒状部分がほぼ方形、環部分が方形に近い円形である。

〔縁金具〕 S T 8から出土したものである(567)。その形態から杏葉の縁金具と思われる。鉄地金銅張製で、目釘は鉄に銀箔を巻いたものである。残存長3.1cm、幅0.6cm、厚さ0.3~0.45cm(目釘を含まず)である。ほぼ真直ぐのものである。目釘は径0.3~0.4cm、厚さ0.2~0.25cmのもので、残存する目釘は生きているものはないようである。

〔鉗具〕 S T 8から出土したものである(569)。細い鉄棒を馬蹄形に曲げてつくられたもので、本体の一部と刺金は欠損している。馬具の革帶をとめる鉗具と思われる。長さ7.5cm、最大幅4.6cm、断面は不整円形を呈する。

〔環状不明鉄器〕 S T 8から出土したものである(568)。径3.5cmの環状のものである。遺存状態は悪く、剝離や錆膨らみが甚だしい。断面をとった部分は、現状では断面形は正方形に近いが、復元すれば薄くなり長方形を呈するようだ。

(4) 鉄鎌 (第104図-392、第122図-421、第129図-431)

S K115・137・143から各1点ずつ出土した。いずれも遺存状態が悪い。(392)は残存長10.8

cm、幅1.7～2.0cm。(421)は3つの部分に分かれ接点はないが、復元すれば14.2cm以上になり、幅2.0～2.4cm。(431)は残存長4.5cm、幅1.8～2.0cm。いずれも形態は弧状を呈し、柄の付くところで若干先端部を折り曲げている。

(高)

〔遺物参考文献〕

- ・帝塚山考古学研究所 1987.7. 「高山寺式土器をめぐって—縄文早期の諸問題—」『縄文文化研究部会紀要1』
- ・泉 拓良 1983 「後期・近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』
- ・家根洋多 1983 「晩期・近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器III』
- ・滋賀県教育委員会 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』
- ・泉 拓良 1979 「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集1 日本原始』
- ・可児通宏 1979 「縄文土器の技法」『世界陶磁全集1 日本原始』
- ・平安学園考古学クラブ 1972.2. 「船橋I・II」
- ・八幡一郎編 1975.12. 「世界考古学大系I 日本I 先縄文・縄文時代」
- ・鈴木道之助 1983 「石器」『縄文文化の研究 7 道具と技術』
- ・江坂柳彌編 1973.12. 「古代史発掘2 縄文土器と貝塚 縄文時代1」
- ・北村博義 1987.4. 「布留遺跡布留地区縄文時代の出土石器」『考古学調査研究中間報告12』
- ・大阪府教育委員会 『池上遺跡 第3分冊の1 石器編』
- ・泉 拓良 家根洋多 1985 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告書III—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- ・(財)大阪市文化財協会他 1982.3改訂 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告—大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、第31・32工区の発掘調査—』
- ・小林行雄・杉原莊介編 『弥生式土器集成 本編1～2』
- ・佐原真・金開 忽編 1975.1. 「古代史発掘4 稲作の始まり」
- ・大阪府教育委員会他 1985.3. 「美闇近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」
- ・大阪府教育委員会 『池上遺跡 第3分冊の1 石器編』
- ・杉原莊介編 1975.12. 「世界考古学大系2 日本II 弥生時代」
- ・杉原莊介・大塚初重編 1974.3. 『上巣式土器集成 本編』
- ・奈良県立橿原考古学研究所編 1976.9. 「羅向 奈良県桜井羅向遺跡の調査」
- ・石野博信 1978.12. 「奈良県羅向石塚古墳と羅向式土器の評価-木下正史氏の批評に答える-」『考古学雑誌 64-4』
- ・(財)鳥取県教育文化財団 1981.12. 鳥取県教育文化財団報告書8『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書III』

- ・藤田憲司 1979 「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』61-4
- ・奈良県立橿原考古学研究所編 1980.3. 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第41冊『発志院遺跡』
- ・平安学園考古学クラブ 1972 『船橋I・II』
- ・堺市教育委員会 1984.3. 堺文化財調査報告第16集『四ツ池遺跡—第83地区発掘調査報告書一』
- ・間壁貢子 東森市良 「中・四国地方の弥生土器」『弥生文化の研究』
- ・井森暁子 学本隆裕 置田雅昭 「畿内の弥生土器」『弥生文化の研究』
- ・杉原莊介 大塚初重編 1971 『土師式土器集成 本編1~3』
- ・大阪府教育委員会 1976~1980 大阪府文化財調査報告書『陶邑』I~V
- ・中村浩 1981 考古学ライブラー5『須恵器』
- ・田辺昭三 1981. 7. 『須恵器大成』
- ・原口正三 1979. 7. 『日本の原始美術4須恵器』
- ・堺市教育委員会 1984.3. 堺市文化財調査報告第16集『四ツ池遺跡—第83地区発掘調査報告書二』
- ・韓式系土器研究会 1987.2. 『韓式系土器研究I』
- ・田中和弘 1982.3. 「矢倉古墳の調査」『はさみ山遺跡発掘調査概要IX』大阪府教育委員会
- ・川西宏幸 1977.9. 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- ・羽曳野市教育委員会 1982.3. 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書7『占市遺跡群』III
- ・天理市教育委員会 1985.3. 天理市埋蔵文化財調査報告 第2集『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』
- ・川辺町教育委員会 1984.3. 川辺町文化財調査報告書第5集『箱谷古墳群—昭和58年度発掘調査概報一』
- ・川辺町教育委員会 『川辺町史』資料第4巻
- ・第17回埋蔵文化財研究会 1985.1. 『形象埴輪の出土状況※資料※』
- ・同志社大学文学部考古学研究室 1972.6. 同志社大学文学部考古学調査報告 第5冊『井辺八幡山古墳』
- ・奈良県教育委員会 1962 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第21冊『大和二塚古墳』
- ・三田市教育委員会 1983 『北抵ニュータウン内遺跡調査報告書I』
- ・(財)大阪文化財センター 1984.3. 『三日市地区特定土地地区整理事業施行地区内 片添遺跡第1次発掘調査報告書』
- ・西川 宏 1971.7. 「武器」『日本の考古学』V 占墳時代(下) 河出書房新社
- ・奈良県立橿原考古学研究所 『見田・大沢古墳群』
- ・荒川 史 1987 「環状鏡板付巻の問題点」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・坂本美夫 1985 『馬具』 ニューサイエンス社
- ・安濃町遺跡調査会 1987.8. 『三重県安芸郡安濃町 平田古墳群』

土層番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	深鉢(破片)	織文土器	外面に沈線による連續性のある文様。	文様以外の部分は丹念なナガ	胎土：1～3mmの長石、雲母、石英を含む。表面成：堅硬。色調：内外に赤い黄。褐色。	北石川C (中越東)
2	破片	〃		内外面ともナガ。	〃	〃

土層番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
3	破片	織文土器		輪廻み捺法。内外面ともナガ。特に外面は丹念になれる。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母等を多量に含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外：赤褐色、内：褐、断：に赤い黄。	
4	破片	〃			胎土：0.5～2mmの長石、雲母等を多量に含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外：赤褐色、内：褐、断：に赤い黄。	
5	破片	〃	外面に沈線による連續性のある文様。	外面は文様を描いた後研磨。内面は研磨。	胎土：1～2mmの長石、石英、雲母を含む。表面成：堅硬。色調：外：に赤い黄～黒灰。内：浅黄。	中津(後)
6	破片	〃		内外面ともナガ。特に外面は丹念になれる。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母、石英を多量に含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：内：灰褐色、外：断：赤褐色～黒。	
7	破片	〃			輪廻み捺法。内外面ともナガ。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母を含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外：褐、内：褐灰、断：に赤い黄。
8	破片	〃			輪廻み捺法。内外面ともナガ。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母、石英を多く含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外断：に赤い赤褐色～褐、内：暗赤褐。
9	破片	〃				胎土：0.5～2mmの長石、雲母を含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外断：に赤い黄。
10	破片	〃		外面は磨削縞文。内面は研磨。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母、石英を含む。表面成：堅硬。内：に赤い黄、断：褐。	中津(後)
11	破片	〃	外面に沈線による連續性のある文様と縞文。	外面は縞文(L.R)を施した後、沈線による文様を描き、不要な部分の文様を磨消する。内面は研磨。	胎土：1～2mmの長石、石英、雲母を含む。表面成：堅硬。色調：暗灰。	〃
12	破片	〃		外面は丹念なナガ。内面は研磨。	胎土：0.5～3mmの長石、雲母を含む。表面成：堅硬。色調：外断：淡黄褐色～に赤い黄跡、内：褐。	

器 器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
13	破片	縄文土器		輪積み技術。内外面ともナデ。	胎土：0.5～3mmの長石、 石英、石英を含む。やや 粗。焼成：堅硬。色調： 外：に赤い緋。内：に赤 い赤褐色。断：明帯褐。		
14	破片	ノ		外面は丹生たナデ。内面は研 磨。	胎土：0.5～2mmの長石、 石英を含む。芯。焼成： 堅硬。色調：外：淡黄； 内：暗灰黄。断：淡黄橙。		
15	破片	ノ		輪積み技術。内外面ともナデ。	胎土：1～3mmの長石等 を多く含む。やや粗。燒 成：堅硬。色調：外断： 縁～に赤い赤褐色。内：灰 褐色。		
16	破片	ノ	外側に沈縛による文様。	外面は沈縛による文様を描い た後、研磨する。内面は研磨。	胎土：0.5～2mmの長石、 石英、石英を含む。芯。 焼成：堅硬。色調：外： 淡黄；内：黄褐色。	牛津（復）	
17	破片	ノ	外側に沈縛による文様。	外側は魔文を施した後、沈縛 による文様を焼き、不要な部分 の魔文を焼削する。	胎土：1mmの長石、雲母 等を含む。芯。焼成：堅 硬。色調：内：赤い黄褐色。	ノ	
18	破片（底部）	ノ	底径 残存高	6.6 4.5	切端であると思われ、体部は 上外方に立ち上がる。	輪積み技術。外面は、下から 上へのナデ。内面は水平方向 のナデ。	胎土：1～3mmの長石、 石英、雲母等を少量に含 む。やや粗。焼成：堅硬。 色調：内：橘；外断：灰 褐色。

S K 73

- 1 -

学名 番号	器 官	種 類	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 上 ・ 発 育 ・ 色 調	備 考
20	裏	寄生虫	口径 半径 周長 体幅最大値 14.2 3.6 23.7 16.0	平底で、体部は底部側面でくびれた後、内湾しながら上外方に伸び、体部上位で最大値となり再び内折する。口輪部は外反し、喉門は面をなす。	外面は底部側面に指圧痕が残る以外は体部はタラ方向のヘラミガキ。口歯部から舌縁部はヨコギ。内部底面から1/3まで指抨え、中間部は不定方向のカグマ。口縫合辺は不定方向のカグラミガキである。	胎上：面。 発育：翌年。 色調：外：黒一斑赤褐。 内：椎間に赤い斑塊。	中期 Ⅲ 外表面に 炭化物が付 着。

土壌番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
21	甕	弥生土器	口径 14.6 残存高 13.5	No.20と同様の形態である。 体部の1/2より底部を欠く。	外面部部はタテ方向へのラミガキ。口縁部にロップ折り曲げ時の指痕が残る。口縁端部はヨコナギ。内面ノリ跡部はヨコ方向。体部はタテ方向へのラミガキ。	胎土：1～5mmの長石等を少量含む。密。 焼成：堅緻。 色調：明赤褐～黒褐。	中期 磐内Ⅲ
22	甕	〃	口径 14.4 残存高 7.3	口縁は「く」の字形に外反し。 底部は下外方に張り出す。	外部底部から痕跡はヨコナギ。肩部はタテ方向のハケナギ。内部口縁部はヨコナギ。体部はヨコ方向のハケナギ。内面には粘土等複合層が残る。	胎土：0.5～3mmの長石、雲母等を少量含む。 焼成：堅緻。 色調：橙～灰褐。	外間に炭化物が付着。 中期 磐内Ⅲ
23	甕	〃	底径 4.2 残存高 12.9	凹底で、体部は上外方へ内湾しながら伸びる。	底部はハサ。底部斜面は指ナギ。 体部外縁、下部は斜め方向。他は不定方向のラミガキ。 内面はタテ方向の強いナギ。	胎土：0.5～2mmの長石等を少量含む。密。 焼成：堅緻。 色調：外：灰青褐～黒。内：灰黄褐～黒。	体部外面に炭化物が付着。 中期 磐内Ⅲ
24	甕(底部)	〃	底径 6.0 残存高 4.3	半球形底部側面のくびれはなく。体部が上外方へ伸びる。	外部底部は不定方向のナギ。 底部側面はヨコナギ。体部はタテ方向へのラヘケリ。後底部から体部へナギ。	胎土：0.5～3mmの長石、雲母等を少量含む。 焼成：堅緻。 色調：外：黄褐～褐灰。	外面部底付近に炭化物付着。 中期 磐内Ⅲ

S I 2

土壌番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
29	甕	弥生土器	底径 15.6 残存高 15.2 体部最大径 23.4	平底で、底部側面のくびれはあるなく、体部は上外方へ大きく張り出す。高さ14mm程で最大幅となり、再び内縮する。	表面底部上部は斜め方向へのラミガキ。下部はタテ方向のラミガキ。後、底部側面のハケナギ。一部ヨコナギ。内面側面にはハケメ。底部は指ナギ。	胎土：1～3mmの長石等を含む。密。 焼成：堅緻。 色調：外：暗青褐。内：弱青褐。 内：弱青褐。	外面部側に陶化物付着。 中期 磐内Ⅲ～Ⅴ
30	高杯(脚部)	〃	脚径 8.8 残存高 2.0	脚部は中実で、脚部の部盤も厚く内面の凹みは1cm程の高さである。脚部の残存底部が外反し始めていることから脚高は、そう高くないと思われる。	成形後、全体をアクリ調整。さらに脚部を不定方向に削り、底部側面はヨコナギ。	胎土：1mm程度の長石等を少量含む。密。 焼成：堅緻。 色調：外：灰白、黒褐、断：灰褐。	中期

S D 30

土壌番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
31	甕	弥生土器	口径 15.1 残存高 5.4	口縁は「く」の字形に外反し。 端部は薄く丸い。翼部は下外方に張り出す。	口縁部内面外周ヨコナギ。端部内面ヨコ方向のラミガキ。 体部外縁はハケ日。内面はタテ方向のナギ。	胎土：0.5～2mmの長石、石英等を含む。密。 焼成：堅緻。 色調：外：灰白、灰褐色、内：黄褐、灰青褐、断：黑褐。	体部内面に炭化物付着。 中期 磐内Ⅲ～Ⅴ

S D 32

土壌番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
32	甕(肩部)	弥生土器	瓶底径 10.8 残存高 4.3	肩部は下外方に大きく張り出し。 瓶底はほぼ垂直に上方に伸びる。	外面部と同様。特に内面に強い指ナギの痕が残る。	胎土：0.5～1mmの長石、角閃石を含む。密。 焼成：堅緻。 色調：内：灰白。	生駒西麓流域 胎土：後期 磐内Ⅳ
33	甕(底部)	〃			外縁は平行タキ。内面は爪痕が残る。	胎土：0.5～2mmの長石、石英、雲母を含む。密。 焼成：堅緻。 色調：外：橙。内：黑褐、断：灰褐。	後期 磐内Ⅴ

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
34	深鉢 (口縁部)	口径 残存高 20.5 12.2	口縁部と体部の区別はなく、上外方へ広がる。端部は曲をなす。	輪編み。内外面とも舟型なナゲ調整。	胎土：1～5mmの長石等を多く含む。やや粗。焼成：軟。色調：外：灰青褐色、内：灰白、断：灰、褐色。	圓窓型 (焼脂)
35	深鉢 (口縁部)	口径 残存高 21.8 6.3		端部はヘラ状工具によって削っている。	胎土：1～5mmの長石等を多く含む。やや粗。焼成：軟。色調：外：灰青褐色、内：灰白、断：灰、褐色。	ノ
36	深鉢(底部)	底径 残存高 5.4 2.5	凹底で、体部は上外方へ大きく広がる。		胎土：1～3mmの長石等を多量に含む。やや粗。焼成：軟。色調：外：灰白、深黄、内：灰黄。	ノ
37	深鉢(底部)	底径 残存高 8.8 7.8	体部は上外方へ広がる。		胎土：1～3mmの長石等を多く含む。やや粗。焼成：軟。色調：外：灰白、深黄、内：灰黄。	ノ
38	深鉢(底片)	ノ		外面は斜め方向の巻貝縫隙を施す。内面はナデ。	胎土：0.5～2mmの長石等を多量に含む。やや粗。焼成：軟。色調：外：にじい黄緑、黒褐、内：褐灰。	ノ
39	深鉢(底片)	ノ		輪編み。外面は水平に巻貝縫隙を施す。内面はナデ。	胎土：1～5mmの長石等を多量に含む。焼成：軟。色調：外：灰青褐色、内：灰。	ノ
40	壺(口縁部)	弥生土器 口径 残存高 23.8 7.2	口縁部は上外方に大きく広がり、口縁部は水平基部まで外反し端面は上方に折り上げられる。		胎土：1mm程度の長石を含む。表面：やや粗。焼成：軟。色調：浅黄。	中期 窓内 三～四
41	壺(口縁部)	口径 残存高 21.8 2.9	口縁部は上外方に伸び、口縁は下外方に曲折する。口縁部に刺突文を有する。		胎土：0.5～2mmの長石、角閃石を含む。表面：やや粗。焼成：中火軟。色調：外：にじい黄、内：黑褐。	生駒西窓内 胎土 中期 窓内 三
42	壺(口縁部)	口径 残存高 27.4 3.5	口縁部は上外方に伸び、口縁は下外方に曲折する。刺突文を有する。		胎土：1～3mmの長石、角閃石を含む。表面：やや粗。焼成：中火軟。色調：外：オリーブ黒～暗灰青。	生駒西窓内 胎土 中期 窓内 三
43	壺(口縁部)	口径 ノ	26.0	口縁部は上外方に広がり、口縁は下外方に曲折する。口縁外周に刺突文、端部に円形浮文を有する。	胎土：1～3mmの角閃石、長石、漂母を多く含む。おむね中火。焼成：中火軟。色調：オリーブ黒～暗灰青。	生駒西窓内 胎土 中期 窓内 四
44	壺(底部)	底径 残存高 7.8 1.4	平底で底部は上外方へ立ち上がる。		胎土：1mm程度の長石、漂母を含む。表面：やや粗。焼成：中火軟。色調：外：墨褐、灰色、内：黄灰。	中期 窓内 四
45	壺(底部)	底径 底径 6.7 1.8	平底で、体部は大きく上外方に伸びる。	底部割面と内面に指圧痕が残るが調整は不明。	胎土：0.5～3mmの角閃石、長石、漂母を多く含む。おむね中火。焼成：中火軟。色調：内：にじい黄褐色、外：にじい黄。断：灰白。	生駒西窓内 胎土 中期 窓内 四
46	壺 (口縁及び 底部)	口径 底径 23.1 3.8	口縁部は大きく上外方に伸び、口縁は外側斜め下方に曲折する。口縁と底部に陳次文の痕跡が見られる。平底。体部は欠損している。	陳次文は升の調整は不明。	胎土：0.5～3mmの角閃石、長石を含む。表面：やや粗。色調：外：オリーブ黄。	生駒西窓内 胎土 中期 窓内 三

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
47	器種不明底部 弥生土器	底径 6.2 残存高 3.05	平底で体部は上方方に伸びる。	全体に磨滅が著しいが、底部側面にテテ方向の指ナゲ痕と内面に捺压痕がある。	胎土：1mm程度の長石を含む。密。 焼成：やや軟。 色調：外：灰、淡黄。内：灰灰。	中期 畿内 目
48	破片 (東晉部)	〃	円形浮文を有する。縦縮文(直線文かあるいは波状文)を配していると思われるが、円形浮文の下にかすかに残るのみで不明。円形浮文の単位は不明であるが、3コ以上の単位である。	表面は横擦文を施した後、円形浮文を貼付ける。	胎土：1～3mmの角閃石等を多く含む。おおむね密。焼成：やや軟。 色調：外内：にぶい黄緑～灰白。断：黒褐。	生駒古墳 胎土 中期 畿内 目

S I 4

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
49	壺	土師 壺	口径 16.0 残存高 8.25	腹部は「く」の字形に屈曲し口縁部は上外方へ伸びる。端は内厚して丸い。	口縁部から腹部は内外面ともヨコナダ。口縁部外面に一部斜め方向のハケ目。肩部外面タテ方向のハケ目。内面ハラケズリ。	胎土：中や硬。0.5～2mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。 色調：外内：にぶい黄緑。

S I 5

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
50	小型丸底壺 (口縁部)	土師 壺	口径 9.4 残存高 2.4	口縁部は内両弧形に上外方へ伸び、端部は自然におさめる。	内外面とも口縁上部はヨコナダ。下部はヨコナダの後へラカケズリ。	胎土：密。1mm人の砂粒を少量含む。焼成：堅硬。 色調：緑～にぶい緑。
51	壺(口縁部)	〃	口径 14.6 残存高 2.9	口縁部は上外方へ伸び、端部はつまみ上げて終わる。器底は薄い。	内外面ともヨコナダ。	胎土：密。0.5～3mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。 色調：灰白～にぶい緑。
52	壺	〃	口径 17.8 残存高 4.7	腹部は「く」の字形に屈曲し口縁部は上外方に開く。輪部は丸い。	口縁部は内外面ヨコナダ。肩部外面はヨコナダ。内面はヘラカケズリ。	胎土：密。1～5mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：にぶい緑～淡黄緑。
53	壺(口縁部)	〃	口径 21.0 残存高 4.8	上外方に開く二重口縁で肩部はやや丸味を帯びる。端部は内厚して底をなす。	内外面ともヨコナダ。	胎土：密。0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：淡黄緑。
54	鉢	〃	口径 器高 12.0 4.8	口縁部は短く上外方へ開き、体部は張りを持たない。		胎土：密。焼成：やや軟。 色調：緑～黄緑。

S I 6

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
55	壺(口縁部)	土師 壺	口径 残存高 12.2 3.0	口縁部は内両弧形に上外方へ開き、端部はやや内厚して底をなす。	口縁部内外面ヨコナダ。	胎土：やや軟。5～2mm砂粒を含む。焼成：やや軟。 色調：にぶい緑～淡黄緑。

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考	
56	壺(口縁部)	土 部 縫 口径 残存高	17.6 3.5	肩部は「く」の字形に曲折し 口縁部は上外方に広がる。 腹部は上方に弧み上げておさ める。	口縁部外面ヨコナギ。肩部 外面はハケ目。内面はヘラケ マツリ。	胎土：泥、1~3mmの大粒石 と、0.5mmの大いの貝殻、角 閃石を多量に含む。焼成： 堅焼き。色調：灰にぶい緑。	
57	高杯(杯部)	〃	口径 残存高	14.4 4.3	底部からゆるやかに屈曲して 口縁部は外上方へ開く。腹部 は丸い。	口縁部外面ヨコナギ。内面上 部はヨコナギ、下部はヘラナ ギ。底部外面ヨコナギ。内面 はヘラナギ。	胎土：泥や粗、1~3mm の砂粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：緑～褐色。
58.	高杯(杯部)	〃	口径 残存高	19.8 5.7	底部からゆるやかに屈曲し、 口縁部は直線的に外上方へ伸 びる。腹部は丸い。	内面底部はヨコ方向のハケ目。 口縁部はハケ目をナデ消し。 外面底部から縦縫目1/3下部 を斜め刃削りのハケ目。中間部 をタテ方向のハケ目。1/3上 部はヨコナギ。また中間部以 下にも腰部分的にハケ目をナデ 消す。	胎土：泥、0.5~1mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：緑～淡緑。

S I 7

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考	
59	高杯	土 部 縫 口径 脚部 脚部 高さ	14.7 11.0 7.7 12.6	环底部はわずかに内湾し、口 縁部はゆるやかに屈曲して上 外方に開く。腹部は丸い。脚 部は中空で下外方へ伸び 屈曲して腰部分に開く。 縫合は丸い。	口縁部外面はヨコ方向のヘ ルミガキ。脚部内面はヨコ方向 のナギだら、柱状部の上部に は斜り轍を残す。内面は柱状 部2/3より上部はタテ方向の ヘラミガキ。1/3より下部はヨ コ方向のヘラミガキ。	胎土：泥、0.5~1mmの 砂粒を少量含む。焼成： やや軟。色調：杯部内外 青苔表面：泥。脚部内面 にぶい緑。脚部：にぶい 緑～オリーブ緑。	
60	鉢	〃	口径 残存高	10.8 5.3	口縁部は内湾しながら上外方 へ伸び、底部近くで腹壁は薄 くなる。腹部は丸い。	口縁部端部近くに内凹部ともヨ コナギ。以下外面不規方向の ナギ。内面はヨコ方向の ヘラケマツリ。下部は不規方向 のナギ。	胎土：泥、1mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅焼き。 色調：緑。
61	不明底部	〃	口径 残存高	6.0 2.5	凹凸で、体部は大きく外方へ 広がる。	外面底面部はヘラせ工具に 沿うるヨコ方向のナギ。上 部はタキナ。内面はハケ目で 底部中央はナギ。	胎土：泥、1~2mmの砂 粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：内外・黒、断：灰 褐色には薄青苔。
62	ミニチュア 変形土器	〃	口径 残存高	4.4 3.8	体部は球形を呈し、口縁部は 短く立ちする。腹部は丸い。		胎土：泥。焼成：軟。 色調：にぶい緑。

S I 8

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
63	小型火焔壺	土 部 縫 体部最大径 残存高	9.2 8.4 6.2	口縁部は上外方に開き、腹部 は丸い。体部に最大径があり より小さく、錐錐形を呈する と思われる。	口縁部外面ヨコナギ、内面は ハケ目。腹部から脚部外表面 ともヨコナギ。体部外面はヘラ ケマツリ。内面不規方向のナギ。	胎土：泥。焼成：堅焼き。 色調：にぶい緑。
64	高杯(脚部)	脚部 残存高	11.6 8.0	脚部は中空で、脚部にかけ てながらに広がり、腹部近く でヨコ方向に屈曲して水平になる。脚 部は丸い。	柱状部から脚部外表面はタテ方 向のヘラナギ。内面はヨコ方 向のヘラケマツリ。脚部外表面 はヨコナギ。内面はハケ目。水 平部分は内面はヨコナギ	胎土：泥、1~3mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 焼き。色調：浅黄緑～緑。
65	高杯(脚部)	脚部 残存高	13.8 8.1	柱状部に中空で、下外方に少 しひかり、腹部で大きく開く。 腹壁は膜い面でなす。中位の 3方向に円孔を穿つ。	柱状部外表面はタテ方 向のヘラナギ。内面はヨコ方 向のヘラナギ。脚部外表面ヨコ ナギ。内面ヨコナギ。内面タテ 方向のヨコナギ。	胎土：泥、0.5~3mmの 砂粒を含む。焼成：やや 軟。色調：緑。

S I 9

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
66	高杯	深 恵 瑞	口径 15.9 脚径 6.2 器高 11.5	杯部は内傾しながら上外方へ伸び、2条の鋸い凸線をめぐらし、さらに上外方へ伸びる。底部は丸い。凸線の下方に波状文(5条)を有する。中位に1対の把手を有する。脚部は外窓気孔に下外方へ広がり堆疊近くで直曲し、上下に肥厚し、外端部に凸面をなす。脚部には3方向に台形の溝を有する。	把手、脚部はハリツケ。杯底部外縁に輪ヘラケズリ。脚部外窓カキ目。他に回転ナデ。	胎土：密、5mmの大い小石を少量含む。焼成：堅硬。色調：灰、灰白。杯部内面に重複成の痕がある。	
67	長脚甌	脚式系 土器	口径 18.4 体部最大径 21.6 器高 30.0	口縁部は上外方へ伸び、脚部は丸い。底部は中位で最大径をなし、長い。底部は丸い。	口縁部外表面ともヨコナデ。底部内面は主にヨコ方向のハケ目。外縁は主にタテ方向のハケ目。体部外表面にタテ方向のハケ目。他は不定方向のナデ。	胎土：密、1mmの大い砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：にぶい黄緑。	
68	甌	タ	体部最大径 21.2 残存高 18.1	体部は上位で最大径をなし、やや長く、底部は平らに近い。	外縁は平行タタキ。内面は角オサエの後ナデ箇所。	胎土：やや粗、1~5mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅硬。色調：明赤褐、橙、にぶい赤緑。	
69	長脚甌	タ	体部最大径 25.2 残存高 21.2	肩部は内傾しながら下外方へ下り。底部は上位で最大径をなし、内窓気孔に下方へ下る。	堆疊部外表面平行タタキの後ナデ。内面はヘラ拭工具によるタテ方向へのナデの後部分的にタテ方向のナデ。	胎土：密、1~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：橙。	
70	器種不明部	タ	残存高 15.6		体部外表面平行タタキの後ナデ。内面ナデ。	胎土：密、1~3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：外断・にぶい橙、内：橙。	
71	破片	タ	残存長 2.7		外縁は格子状タタキ。内面はタテ方向のナデ。	胎土：密、0.5~1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：にぶい赤褐色、内：にぶい橙、新：灰青褐色。	
72	破片	タ	残存長 3.4		タ	タ	

S I 10

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
73	壺杯(身)	深 恵 瑞	口径 11.8 受部径 13.2 器高 5.1	立ち上がりは内傾して伸びた後直立し、底部は内傾する凹面をなす。受部は水平に伸び環部は浅い。底部は厚く、丸味を持つ。底部外表面にへら記号有り。	底部外表面輪ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転粘土。	胎土：密、1mmの大い砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：にぶい緑。	
74	酉杯(蓋)	タ	口径 12.7 残存高 4.5	口縁部は下外方へ下り、瓣部は内傾する凸面をなす。縁は鋸い。瓣部はやや高く、丸味を持つ。	天井部外表面上面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転左。	胎土：密。燒成：堅硬。色調：灰白。	
75	甌	土 間 瑞	口径 11.4 残存高 6.5	底部はわずかに外反し、口縁は短く立つ。底部は丸い。	口縁部外表面ともヨコナデ。底部外表面タテ方向のハケ目。内面タテ方向のヘラケズリの後ナデ。	胎土：やや粗、0.5~2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：淡~灰褐色。	

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
76 東	土 器	口径 残存高 27.5 5.4	口縁部は上外方へ直線的に伸び、端部はやや内厚して、強く洗い凹面をなす。	口縁部外延はヨコナダ。内面はヨコ方向のハケ目。端部から肩部内外面ともハケ目。	胎土：密、焼成：堅緻。 色調：灰、褐色～灰。	

S I 11

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
77 茶 (高杯)	直 濟 器	口径 高さ 19.2 6.1	口縁部は下外方へ下り、端部は内傾する段をなす。縁は丸い。天井部にやや高く、丸味を持つ。天井部外延中央に、上面凹状の彫みを有する。	天井部外延上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転左。	胎土：やや密、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：茶青灰～灰。	

S I 12

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
78 通	直 濟 器	口径 残存高 18.6 4.2	外輪側に向かって上方へ伸びる口縁部。端部は直立し、外縁面は後引凹面をなす。端部面下に1点の丸孔をめぐらす。	残存部は回転ナデ。	胎土：密、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：灰、内：灰。	
79 高杯	土 器	口径 残存高 16.0 5.8	内寄しながら上方へ広がる口縁部。口縁端部近くで外折し、端部は丸味を持つ。	内外面ともハケ目。特に内面は丁寧な旋削状のハケ目が残る。外側は上面を部分的にナブナデ。ロクロ回転は内外面ともヨコナダ。	胎土：密、焼成：やや軟。色調：外：灰、内：灰。	
80 埋	韓式系 土器	口径 残存高 28.6 12.4	口縁部は外折して上方へ伸び、端部は直立して圓をなす。肩部は張りを持たず、内寄しながら下外方へ下る。体部の最大径を下す位置に1点の丸孔をめぐらし、断面は円形を保する把手の痕跡がある。	ロクロ内外面ともヨコナダ。体部外延は平行タタキ。内面はナデ。手引部分の内面には擦合時の擦痕が残る。	胎土：やや粗、0.5～3mmの砂粒を多量に含む。焼成：堅緻。色調：外：灰青、内：灰。	
81 破片	#	残存長 4.8		外側は平行タタキ。内面はヨコ方向のナデ。	胎土：やや密、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：紫灰、内：にじい黄緑。焼：淡。	

S I 13

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
82 遺杯 (蓋)	直 濟 器	口径 高さ 12.3 4.8	口縁部は下外方へ下り、端部は外反して内傾する凹面をなす。縁は丸い。天井部はやや高く、上面平ら。	天井部外延回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転左。	胎土：密、1.5～3.5mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。色調：外：青灰、内：青灰。	
83 茶杯 (蓋)	#	口径 高さ 12.05 4.3	口縁部は垂直に下り、端部は内傾する段をなす。縁は小さく弧い。天井部はやや高く、上面平ら。	天井部外延回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：紫灰、内：青灰。	
84 盖杯 (蓋)	#	口径 高さ 12.8 4.6	口縁部は垂直に下り、端部は内傾する凹面をなす。縁は丸い。天井部はやや高く、上面平ら。	天井部外延上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転左。	胎土：密、1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 施 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
83	蓋杯(蓋)	口径 器高 4.3	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。端部は内傾する段をなす。 縫は鋸く。天井部はやや 高く、丸孔を持つ。	天井部外面回転ヘラケヅリ。 他は回転ナゲ。天井部内部中央 は後定方向のナゲ。ロクロ 回転左。	胎土：やや密、1～3mm の砂粒を多量に含む。燒成： 堅焼き。色調：外：灰白、 内：明青灰、断：オーリープ灰。外面自然釉 付着。	
84	蓋杯(蓋)	口径 器高 4.7	口縁部は下外方へ伸びた後外 反し、端部は内傾する段をな す。縫は鋸く。天井部はやや 高く、丸孔を持つ。	天井部外面回転ヘラケヅリ。 他は回転ナゲ。ロクロ回転左。	胎土：やや密、1～3mm の砂粒を多量に含む。燒成： 堅焼き。色調：外：明青灰、 内：明青灰、断：紫灰。外面自然釉 付着。	
85	蓋杯(蓋)	口径 器高 4.9	口縁部は内傾しながら下方へ 下り、端部は内傾する段をな す。縫は丸い。天井部はやや 高く、丸孔を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ヅリ。他は回転ナゲ。天井部 内部中央は後定方向のナゲ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅焼き。色調：灰白、 内：明青灰、断：紫灰。	
86	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高 4.7	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は内傾する段をなす。 受部は水平に伸び、縫は丸 い。底体部はやや深く、底部 は平ら。	底体部外面回転ヘラケヅリ。 他は回転ナゲ。底部内部中央 は後不定方向のナゲ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：灰～灰白。	
87	蓋杯(身)	口径 器高 4.9	口縁部は内傾しながら下方へ 下り、端部は内傾する段をな す。縫は丸い。天井部はやや 高く、丸孔を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ヅリ。他は回転ナゲ。天井部 内部中央は後定方向のナゲ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅焼き。色調：灰白、 内：明青灰、断：紫灰。	
88	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高 4.7	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は内傾する段をなす。 受部は水平に伸び、縫は丸 い。底体部はやや深く、底部 は平ら。	底体部外面回転ヘラケヅリ。 他は回転ナゲ。底部内部中央 は後不定方向のナゲ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：灰～灰白。	
89	蓋杯(身)	口径 受部径 器高 4.8	立ち上がりは内傾して伸びた 後直し、端部は内傾する段 をなす。受部は水平に伸び、 縫は鋸く。底体部はやや深 く、丸孔を持つ。	底体部外面回転ヘラケヅリ。他 は回転ナゲ。ロクロ回転左。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：明青灰。	
90	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高 3.5	立ち上がりは内傾して伸びた 後直し、端部は内傾する段 をなす。受部は水平に伸び、 縫は鋸く。底体部はやや深 く、丸孔を持つ。	底体部外面下部は回転ヘラ ケヅリ。他は回転ナゲ。ロクロ 回転右。	胎土：密、0.5～1mmの砂 粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：内外：灰青灰、 断：紫灰。	
91	蓋杯(身)	口径 受部径 器高 5.3	立ち上がりは内傾して伸びた 後直し、端部は内傾する段 をなす。受部は水平に伸び、 縫は鋸く。底体部はやや深 く、丸孔を持つ。	底体部外面回転ヘラケヅリ。他 は回転ナゲ。ロクロ回転右。	胎土：密、2mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅焼き。 色調：内外：明青灰、 たら上がり外観：にじみ 感。	
92	蓋杯(身)	口径 受部径 器高 5.3	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は内傾する段をなす。受 部は外上方へ伸び、縫部は丸 い。底体部はやや深く、丸孔 を持つ。	底体部外面下部は回転ヘラ ケヅリ。他は回転ナゲ。ロクロ 回転右。	胎土：密、3.5～5mmの 小石を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：外：灰白～ 青灰、内：断：紫灰。	
93	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高 4.3	立ち上がりは内傾して伸びた 後外反し、端部は内傾する段 をなす。受部は水平に伸び、 縫部は丸い。底体部はやや深 く、丸孔を持つ。	摩擦著しく調整不明。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：灰白～淡黄褐色。	
94	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高 4.6	立ち上がりは内傾して伸びた 後外反し、端部は内傾する段 をなす。受部は外上方へ伸び、 縫部は鋸く。底体部はやや深く、 底部は平ら。	底体部外面回転ヘラケヅリ。他 は回転ナゲ。ロクロ回転右。	胎土：密、0.5～2mmの砂 粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：内外：灰青灰、 断：紫灰。	
95	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高 4.4	立ち上がりは内傾して伸びた 後外反し、端部は内傾する段 をなす。受部は外上方へ伸び、 縫部は丸い。底体部は深く。 天井部外面中央に上面状の擴 みを有する。	底体部外面回転ヘラケヅリ。他 は回転ナゲ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：内外：明青灰、 断：明青灰。	
96	蓋(高杯)	口径 器高 5.75	口縁部は下方へ下った後外反 し、端部は内傾する段をなす。 縫は小さく鋸く。天井部 はやや高く、丸孔を持つ。天 井部外面中央に上面状の擴 みを有する。	縫みはハリツケ。天井部外 面上面は回転ヘラケヅリ。他 は回転ナゲ。ロクロ回転左。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：外：初青灰、内： 青灰、断：棱縮赤褐色。	
97	蓋(裏)	口径 器高 5.65	口縁部は下外方へ下り、端部 は内傾する要な小さな凹面をなす。 天井部は高く、丸孔。	天井部外面回転ヘラケヅリ。 他は回転ナゲ。ロクロ回転左。	胎土：密、0.5～2.5mm の砂粒を含む。焼成：堅 焼き。色調：内外：灰青灰、 断：にじみ尾尾。	

土層 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
98	甕	直 恒 酉	口径 18.1 残存高 5.0	口縁部は上外方へ伸び、端部は直立し、外縁面は凹面をなす。底面部下と口縁部中位に各1条の凸縁をめぐらし、その上下に波状文(6条)を有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密、1mmの大砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：青灰、断：にぶい赤褐色。
99	甕	七 開 酉	口径 11.7 残存高 5.1	口縁部は短く、上外方へ立ち、端部は外反して丸い。	口縁部外側ともヨコナデ。外縁底部から底部はタテ方向のハケ目。内底部はヨコ方向のハケマゼリ。	胎土：やや粗、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：底～灰褐色。
100	甕	ク	口径 9.0 残存高 7.8	口縁部は内湾しながら上外方へ伸び、端部は丸い。	口縁部外側ともヨコナデ。外縁部外側はハケ目。内面はスピオサエ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：内外：にぶい赤褐色。断：にぶい緑。
101	鉢	ク	口径 12.0 高さ 7.4	丸底で、口縁部は内湾しながら上外方へ伸び、端部は丸い。	口縁部内面はヨコ方向のハケ目。底部外側はハケマゼリ。内面不定方向のナデ。	胎土：やや粗、0.5～4mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：粗～にぶい黄。
102	輪底土器		口径 3.2 残存高 4.3 体部最大径 4.0	口縁部下方でややくびれ。全体は内湾しながら下方へ下る。	手づくね。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：淡黄。
103	*		口径 3.6 残存高 6.3	口縁部から体部はなだらかに下方へ下り、底部は丸い。口縁端部は鋸い。	手づくね。内面に強い指ナデの痕が残る。	胎土：密。焼成：やや軟。色調：緑。
104	破片	體式系 土器	残存長 6.0		外側は平行タタキ。内面はタテ方向のナデ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：外：にぶい黄緑、内断：橙。

S I 14

土層 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
106	甕(口縁部)	直 恒 酉	口径 19.0 残存高 4.3	口縁部は外寄気味に上外方へ伸び、端部は上方へ少し立ち上がり、外縁面は凹面をなす。口縁部の中位に1条の内縁をめぐらし、その上下に波状文(11条)を有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：やや軟。色調：灰白。
107	甕(口縁部)	土 酉 酉	口径 12.4 残存高 2.2	口縁部は短く上外方へ開き、端部は把厚して丸い。	口縁部外側はヨコナデ。内面は前め方向のハケ目。底部はヨコナデ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：棕～にぶい棕、一部赤灰。
108	ミニチュア 鉢形土器	ク	口径 6.8 残存高 4.3	下ぶくれの体部で口縁部は外反する。底部は丸い。	内外面に瘤状痕が残り、口縁部は部分的に外側へ折り曲げた。外側はおむね未調整である。手づくね。	胎土：密、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：内外：棕、断：浅黄。

土器 番号	器 種	縁 高	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 約 束	施 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
100 盆杯(董)	直 縁	口径 基高	11.3 4.5	口縁部は下外方へ伸び、縁幅 は内傾する凹面をなす。縁は 厚い。天井部はやや高く、丸 味を持つ。	大井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。クロロ 回転右。天井部外面に重焼成 痕がある。	粘土: やや密。1~8mm の砂粒及び小石を含む。 焼成: 蒜頭。色調: 灰白。 天井部外面自然剥離層。	
110 盆杯(董)	口	口径 基高	12.3 4.6	口縁部は下外方へ드리、縁幅 は内傾する凹面をなす。縁は 厚い。天井部はやや高く、丸 味を持つ。	大井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。クロロ 回転右。	粘土: 密。5mmの大 小石を少々含む。 焼成: やや 軟。色調: 明青灰。	
111 盆杯(董)	口	口径 残存高	12.6 5.06	口縁部は下外方へ下り、端部 は内傾する凹面をなす。縁は 厚い。天井部はやや高く、丸 味を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。クロロ 回転右。	粘土: 密。1mmの大 小石を少々含む。 焼成: 蒜頭。 色調: 淡 明青灰。	
112 盆杯(董)	口	口径 残存高	12.1 4.5	口縁部は下外方へ伸びた後外 方に反し、端部は内傾する凹 面をなす。縁は厚い。大井部はや や高く、丸味を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。クロロ 回転右。天井部外面に重焼成 痕がある。	粘土: 密。1mmの大 小石と 7mmの小石を少々含む。 焼成: 蒜頭。色調: 外: 明青灰、内: 布灰、斷 面灰。外面に自然剥離層。	
113 盆杯(分)	口	口径 受部径 基高	10.8 12.7 3.8	立ち上がりは内傾して伸びた 後直立し、端部は内傾する凹 面をなす。受部は水平に伸び、 縁幅は丸い。底部部はやや深く、 丸味を持つ。	底盤部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。腹部内 面中央以後不定方向のナダ。 クロロ回転左。	粘土: 密。2mmの大 小石を少々含む。 焼成: 蒜頭。 色調: 明青灰。底部外面 に自然剥離付着。	
114 盆杯(分)	口	口径 受部径 基高	10.5 12.4 5.25	立ち上がりは内傾した後直立 し、縁幅は内傾する段をなす。 受部はやや外上へ伸び、端 部は丸い。底部部はやや深く、 丸味を持つ。	底盤部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。クロロ 回転左。	粘土: やや粗。1~3mm の砂粒を含む。 焼成: 蒜頭。 色調: 分: 灰白。内 部: 灰。	
115 盆杯(身)	口	口径 受部径 残存高	11.0 13.1 3.3	立ち上がりは内傾して伸びた 後直立し、端部は内傾する段 をなす。受部は水平に伸び、 縁幅は丸い。	底盤部は回転ナダ。	粘土: 密。燒成: 蒜頭。 色調: 灰白。	
116 盆杯(身)	口	口径 受部径 残存高	11.2 13.5 3.4	立ち上がりは内傾して伸びた 後直立し。端部は内傾する平 面をなす。受部は外上方向へ伸 び、縁幅は丸い。	底盤部は回転ナダ。	粘土: 密。燒成: 蒜頭。 色調: 明青灰。	
117 盆杯(身)	口	口径 受部径 残存高	11.2 13.1 4.0	立ち上がりは内傾して伸びた 後直立し。端部は内傾する凹 面をなす。受部は水平に伸び、 縁幅は丸い。	底盤部回転ヘラケズリ。他 は回転ナダ。	粘土: 密。1mmの大 小石を含む。 焼成: 蒜頭。 色調: 青灰。	
118 高杯(环部)	口	口径 残存高	15.1 6.1	口縁部に内窓しながら上外刃 へ伸び、外縁を側面めぐらし さうに上外刃へ伸びる。縁部は 丸い。凸縁の間に波状文(7条) を有する。	底盤部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。	粘土: 密。燒成: 蒜頭。 色調: 明オリーブ灰。	
119 高杯(环部)	脚	脚径 残存高	8.4 3.8	外周気孔に上外刃へ下った後 下方へ屈曲し、縁部は丸い。 円形の透かしを有する。	底盤部は回転ナダ。	粘土: 密。燒成: 蒜頭。 色調: 青灰~明青灰。	
120 壶(口縁部)	口	口径 残存高	19.0 5.7	口縁部は上外刃へ伸び、縁幅 は上に肥厚して、外縁部は 凸縁をなす。口縁部の山台に 波状文(7条)を有し、その 上部に各1条の波線をめぐら す。	底盤部は回転ナダ。	粘土: 密。2~5mmの砂 粒及び小石を少々含む。 焼成: やや軟。色調: 灰 ~灰白。	
121 壶		残存高	15.4		外縁は平行タキと。底部分 にカキ目を施す。内面底部は 円形アラク真珠を残し、底部 は後ナダす。	粘土: 密。5mmの大 小石を少々含む。 焼成: 蒜頭。底 部: 明青灰。内面 底部には漆体が付着する。	

土部 番号	基 種	法 量 (cm)	形 態 の 外 観	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
122	裏	後 恵 面	体部最大径 39.5 残存高 29.0	体部は内凹しながら下内方に下る。底部は丸い。	外面斜方状タタキ。内面は同心円状當地具を一部ナゲ消し。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：外側：灰赤、内：明赤灰。外側に自然釉付着。
123	底	ア	口径 7.8 残存高 5.7	底部のやや膨らんだ形の底。口縁端部は丸い。体部外周にヘラ印等を有する。	底部外周部へラケヅリの後ナゲ。底は回転ナデ。	胎土：やや粗。1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：明赤灰～底。
124	底	ア	体部最大径 8.9 残存高 4.1	最大径となる部分に沈線を2条めぐらす。その方に刺突全文を有し、円孔を1個穿つ。	残存部は回転ナデ。	胎土：やや粗。1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内外：灰白、断：褐。
125	高杯	土 部 盆	口径 15.8 残存高 13.1	杯部は内凹しながら上方へ伸び、口縁部は外反して端部は丸い。両部は比較的細く、中空で、底部は直曲して下方へ下る。	杯部外表面は指オサエ。内面は不規方向のナデ。底は内外面ともヨコナギ。脚部に杯底部に粗粒を施して起り付けた。脚柱部以外部タテ方向へのラケヅリ。底部外周ヨコ方向のハケ目。内面タテ方向のニビゲ。段取りを残す。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：灰。杯部の歪みが大きい。
126	裏	ア	口径 12.0 残存高 5.6	口縁部は上方方に開き、端部は浅い面をなし、浅い波彫がめぐる。	口縁部外表面はヨコナギ。内面はハケ目を一部ナデ消す。底部外表面はヨコナギ、内面ハケ目。肩部外周はハケ目、内面にタテ方向カツア。	胎土：密。0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：に古い緑、内：灰。
127	裏（口縁部）	ア	口径 17.5 残存高 4.75	口縁部は外反し、壁をなしてさらに外反形状に立ち上がる二重口縁である。端部は直線をなす。	内外面ともヨコナギ。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：に古い緑～灰。
128	鋸	ア	口径 11.9 体部最大径 14.2 残存高 4.0	L字縁部はよく外反し、端部は丸い。体部は上位で最大径となるが、口径よりも小さく張りを持たせたい。底部は浅いと思われる。	内外面ともナデ。	胎土：密。0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：灰黑～黒。
129	鋸	ア	口径 30.9 体部最大径 29.8 残存高 11.6	口縁部は外上方へ開き、端部はやや把手をして、底へ通す。体部は内凹しながら下外方へ下る。	口縁部から脚部、内外面ともヨコナギ。体部外表面ともハケ目。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：赤褐色～に古い緑。内面に炭化物付着。
130	ミニチュア 皿形土器	ア	口径 8.6 残存高 1.2	非常に焼成。端部は丸くおさめる。	内外面に雨注痕及び爪隕が残る。手づくね。	胎土：密。0.5 mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：灰黑～黒。内面に炭化物付着。
131	底（口縁部）	ア	口径 23.9 残存高 4.7	ほぼ垂直に立つ口縁部。端部は内厚して面をなす。	口縁部外表面ともヨコナギ。底部は外周タテ方向のハケ目。内面不定方向のナデ。	胎土：密。1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：に古い黄褐色。
132	瓶	輪式系 土器	口径 20.3 底径 9.0 残存高 18.7	口縁部から体部は上内方に下り、口縁端部は丸い。底部は平らで、中央に1箇所と、それを探して6箇所の複円形の小孔を有する。体部内方に半角状を呈する把手を1対有する。	口縁部外表面はヨコ方向のハケ目。端部はヨコナギ。体部外表面はタテ方向のハケ目。内面はラスク工具によるナゲの後タテ方向のナデ。底部外周へラスク工具によるナデ。内面はナデ。把手は手づくねで、全体に挿入する。	胎土：密。3mmの大砂粒を少々含む。焼成：堅硬。色調：外：赤褐色、内：灰白。
133	瓶片	ア	残存長 6.1		外表面は平行タタキ。内面はタテ方向のナデ。	胎土：やや密。0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：灰褐色、内：に古い緑、断：緑。

土番 番号	若 種	法 量 (g)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
133	葉(真部)	輪式系 二層	残存高 3.1 葉部は内側丸味に下外方へ下りる。	葉部外側は平行タキ。内側と 葉部外側はリコナゲ。	胎土：若、1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：赤褐色、内：赤褐色。		
136	指標不明部	#	残存高 7.4 丸い底部。	指標部外側は平行タキ。内 側は不定方向のナゲ。	胎土：やや粗、1～3mmの 砂粒を多量に含む。焼成：堅硬。 色調：外：赤褐色、内：赤褐色。		
137	張壺二層		口径 残存高 3.6 4.4	口縁部から体部は下外方へ下 り、下外方へ広がり、口縁端部は 丸い。	手づくね。指圧痕が残る。	胎土：若、1～2mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅硬。	
138	#		口径 残存高 3.4 3.7 体部最大径 4.7	口縁部から体部は下外方へ広 がり、体部は丸味を持つ。口 縁端部は内傾して焼く。	手づくね。	胎土：若、1mm以上の砂粒 を多量含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰白色、内：内 部：灰白色。	
139	#		残存高 2.1	丸い底部。	内面にハケ目が残る。	胎土：若、焼成：堅硬。 色調：外：赤褐色、黒、内 部：淡黄褐色。	

S I 16

土番 番号	若 種	法 量 (g)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
143	蓋	須惠器	口径 若葉 14.5 4.5	口縁部は内凹しながら下外方 へ下った後外反し、端部に内 傾する平面をなす。天井部は やや低く、平ら。天井部外圍 にへう記号有り。	天井部外圍上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナガ。ロクロ 回転右。	胎土：やや粗、1～3mm の砂粒を含む。焼成：軟。 色調：外：灰白、内：淡 黃。	

S I 17

土番 番号	若 種	法 量 (g)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
144	蓋杯(笠)	須惠器	口径 若葉 12.1 4.2	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸味を持つ。	天井部外圍上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナガ。ロクロ 回転右。	胎土：中や粗、1～2mm の砂粒を多量に含む。焼 成：やや軟。色調：灰白。	
145	蓋杯(邊)	#	口径 若葉 13.2 4.0	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸味を持つ。	天井部外圍上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナガ。ロクロ 回転右。	胎土：若、1～3.5mmの 砂粒及び小石を少量含む。 焼成：軟。色調：灰白。	
146	蓋杯(裡)	#	口径 残存高 15.7 3.3	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。	天井部外圍上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナガ。ロクロ 回転右。	胎土：若、0.5～1mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：灰～灰白。	小片の為口 縁の復元は 不正確。
147	蓋杯(身)	#	口径 残存高 若葉 9.8 12.8 3.9	立ち上がりは内傾して伸び、 腹部は丸い。受部はやや外下 方へ伸び、端部に丸い。底 部にやや深く、丸い。	底部外圍下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナガ。底部外 縁は後方内のナガ。ロクロ 回転右。	胎土：若、焼成：堅硬。 色調：外：灰白、内：灰。 断：明青灰。	

上巻 番号	器 種	法 量 (cm)	形態の特徴	手 稟 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
148	蓋杯(身)	須 恵 器	口径 12.0 受部径 14.3 残存高 3.6	立ち上がりは内側して伸び、端部は丸い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底部にはやや深く、平らに近い。	底部外面回転ヘラケズリ。底は回転ナダ。	胎土：密。焼成：堅焼き。 色調：外：明青灰、灰青、明緑灰、内：明青灰、断崖灰。外面に自然釉付着。
149	蓋杯(身)	#	口径 18.0 残存高 4.7	立ち上がりは内側して伸び、端部は丸い。受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。底部部は深い。	底体部外側下部は回転ヘラケズリ。底は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：密。1.5mmの砂粒を少量含む。焼成：堅焼き。 色調：灰白。
150	盖杯(脚部)	#	口径 11.6 残存高 13.3	外向しながら下外方へ下る脚部。脚部はさらに外下へ少しきさ。端部は直線でなく、端部中位に2つの凹線をめぐらし、その上方に直方形。下方に台形の透かしをそれぞれ3方向に有する。底部にも1つの浅縫をめぐらす。	残存部は回転ナダ。内面下部にはシボリ痕を残す。	胎土：密。焼成：堅焼き。 色調：外：明青灰、灰、内：灰、黒：オーライト灰、灰。
151	蓋(裏)	#	口径 16.3 残存高 7.0	口縁部は下外方に下り、端部は丸い。天井部はやや低く、丸窓を持つ。天井部外側にヘラ記号有り。	天井部外面回転ヘラケズリ。底は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや粗。0.5～2mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：灰白。
152	高杯(杯底部)	土 部 器	残存高 2.25	底部に口縁部接合時の様を残す。	底部外面に指圧痕が残る。	胎土：密。焼成：堅焼き。 色調：内外：暗、黒：浅黄緑。
153	高杯(脚部)	#	残存高 5.8	柱状部は中空でだらかに下外方へ伸びる。	内面に絞り痕が残る。	胎土：密。2mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：灰～灰褐色。
154	壺	#	口径 10.6 体部最大径 14.85 残存高 13.75	口縁部は上外方に長く伸び、端部は自然におさまる。体部は隔壁部を量すると思われるが、底部は欠損している。	体部から脚部内面に巻き上げた度が残る。底部内外面はハゲ目。体部内面に指圧痕が残る。	胎土：密。焼成：堅焼き。 色調：暗～淡黄緑。
155	壺	#	口径 13.6 残存高 5.8	頸部是比较的長く、直立して伸び、山根部は外反する。頸部は丸い。		胎土：やや粗。0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：灰～灰白。
156	壺	#	口径 12.2 残存高 5.2	口縁部は外反して上外方に伸び端部は斜めに内側して下方へ伸びる。体部の垂みが著しい。	内面はナダ。	胎土：密。0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：弱赤褐～暗。
157	壺(口縁部)	#	口径 20.0 残存高 3.5	口縁部は上外方に広がり、端部は決け面をなす。		やや粗。0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：灰～灰褐色。
158	壺(底部)	土 部 器	残存高 11.5	丸底である。	内面は無い。ビナガ。	胎土：密。1.5～5mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。 色調：灰～弱赤褐。
159	把手	#	残存長 4.0	繊長い角状を呈すると思われるが先端部を欠損している。		胎土：密。焼成：堅焼き。 色調：灰～弱赤褐。

上部 番号	器 種	様 様	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
162	馬糞(脚部)	復 原	15.5 5.6	下外方へ下った後、底部でさ らに大きく傾く。端側は下方 に掘み出され、外端部に平凹 をなす。3方向に長方形の透 かしを有し、その下部に1条 の浅縫をめぐらす。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、0.5 ~ 1mmの 砂粒と0.6 mmの小石を少 量含む。焼成：やや粗。 色調：灰白。	
163	馬糞(底部)	土 算 器	底径 残存高 11.6 12.4	底部からほぼ直線的に上外方 に伸びる体部。底部と底盤側 面に、延きの小孔を2つ。	内面にヘラケズリの痕跡が認 められる。	胎土：やや粗、1 ~ 3 mm の砂粒を多量に含む。 焼成：やや軟。色調：に 赤い擦り灰白。	

上部 番号	器 種	様 様	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
164	酒杯(蓋)	復 原	口径 残存高 13.6 4.5	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸い。	天井部外面部回転ヘラケズリ。 他は回転ナギ。天井部内面中 央は後定方向のナギ。ロクロ回 転右。	胎土：密、0.5 ~ 3 mmの 砂粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：外：青灰、内： 明青灰、断：明綠灰。	
165	蓋杯(蓋)	#	口径 残存高 13.1 3.8	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部は高く、丸味 を持つ。	天井部外面部は無い回転ヘ ラケズリ。他は回転ナギ。大 部分内面中央は後不定方向の ナギ。ロクロ回転右。	胎土：密、1 ~ 3 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：外：青灰、内： 明青灰、断：明綠灰。	
166	蓋杯(蓋)	#	口径 残存高 14.0 3.5	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや低く、 丸味を持つ。	天井部外面部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。	胎土：密、0.5 ~ 1.5 mm の砂粒を含む。焼成：軟。 色調：灰白。	
167	蓋杯(身)	#	口径 受部径 残存高 11.0 13.6 4.0	口縁部は内側後直立し、端部 は無い。受部は水平に伸び、 端部は丸い。底部は深く、 丸味を持つ。	底部外面部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。底部内面 中央は後定方向のナギ。ロクロ回 転右。	胎土：やや粗、1 ~ 2 mm の砂粒及び小石を含む。 焼成：堅硬。色調：外： 灰白、青灰、内：青灰、 断：赤灰、暗青灰。	
168	蓋杯(身)	#	口径 受部径 残存高 11.6 14.2 3.3	立ち上がりは内側に伸びて伸び る。端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。	底部外面部下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。ロクロ回 転右。	胎土：密、1 mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：灰白。	
169	蓋杯(身)	#	口径 受部径 残存高 12.6 15.0 2.4	立ち上がりは内側後直立し、 端部は水平に伸びる。端部は丸い。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、0.5 ~ 2 mmの 砂粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：灰白。	
170	萬杯(杯部)	#	口径 残存高 11.8 4.0	口縁部はやや上外方へ伸び、 端部は丸い。底部は平ら。口 縁部下方と底面に各1条の凸 縫をめぐらす。縫部には3万 方向に透かしを有する。	残存部は回転ナギ。底盤内面 中央は後定方向のナギ。	胎土：密、0.5 ~ 3 mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：外：灰、灰 白、内：灰、淡黄、断： 灰白、青灰。	
171	瓶	#	体部最大径 残存高 9.8 4.7	体部は上空で最も太径を有し、 次第に1条めぐらす。その位 置に円孔を1個突つが透化で きない。	底盤外面部下部は回転ヘラケ ズリの後不定方向のナギ。他 は回転ナギ。	胎土：密、0.5 ~ 3 mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：灰白。	
172	甕	#	口径 残存高 12.2 4.5	口縁部は外唇突出時に上外方へ 伸び、端部は外厚し、丸い。	口縁部は内外面回転ナギ。外 面内面にハケ目が残り、内面 は同心円状アラ真底を残す。	胎土：やや密、0.5 ~ 5 mmの砂粒及び小石を少 量含む。焼成：堅硬。色調： 外内：灰白、断：灰白、 明青灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 次 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
173	高杯(杯部)	土器 底 径 14.8 残存高 5.1	口縁部は内凹しながら外方へ伸び、端部は鋸歯状。内面に放射状の暗文が施されている。		胎土：黒、1mmの大砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：灰白尾。	
174	高杯(杯部)	口 径 17.4 残存高 5.1	底部に口縁部接合時の跡が残る。口縁部は内凹しながら上方に伸び、さらに内凹して上方に立ち上がる。端部は鋸歯状。	底部に口縁部接合時の痕跡が残る。	胎土：黒、1mmの大砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：内凹：黒。断：にぶい緑。	
175	甕	口 径 10.0 体部最大径 13.2 残存高 10.9	口縁部は内凹気味に上方方に伸び、端部は鋸歯状。体部は中央で最大径をなす鐘錶形を呈する。	口縁部内面はハケ目。体部内面には指圧痕が残る。	胎土：黒、1~7mmの大砂粒及び小石を含む。焼成：やや軟。色調：明赤紅。	
176	甕	口 径 9.2 体部最大径 13.3 残高 16.4	端部は長く上方方に伸び、端部は内凹におさまる。体部は中央で最大径となる鐘錶形を呈する。	口縁部内面には不規則方向のハケ目。頂部から体部は指圧痕とハケ目が残る。	胎土：黒、1~2mmの大砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：緑。	
177	甕	口 径 12.2 残存高 3.4	口縁部は外反して上方方に伸び、端部は自然におさめる。		胎土：やや粗、1~2mmの大砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：外：明赤褐、内断：赤褐、内にぶい緑。	
178	甕	口 径 13.0 残存高 5.7	口縁部は内凹気味に上方方に伸び、端部は内凹し良い。肩部は内凹しながら下方方に下がり、あまり張りを持たない。	口縁部内外面ともナデ。体部は外反タテ方向のハケ目。内面は指圧痕が残る。	胎土：黒、1mmの大砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：色～黒。	
179	甕	口 径 12.6 体部最大径 16.5 残存高 7.6	口縁部は外反しながら上方方に伸び、端部は内凹し良い。肩部は内凹しながら下方方に下がり出す。		胎土：黒、1mmの大砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：明赤褐。	
180	甕	口 径 12.0 残存高 5.0		体部外面はハケ目。内面は指圧痕が残る。	胎土：黒、0.5~3mmの大砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：外：黒、内断：淡黄褐、内にぶい緑。	同一体と思われる点である。
181	甕(口縁部)	口 径 20.8 残存高 15.7	体部から口縁部は内凹気味にやや外方に伸びる。端部は直をなす。	外面はハケ目、内面にヘラケズリの擦痕が認められる。	胎土：やや粗、1~3mmの大砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：浅灰、内断：淡黄褐、内にぶい緑。	180と同一個体であると思われる。

S D 35

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 次 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
182	蓋杯(蓋)	口 径 13.4 残存高 3.8	口縁部は下外方へ下り、端部に丸い。大穴部はやや高く、上面平ら。	天井部外側上面は回転ヘラケズリ。蓋は回転ナデ。天井部内面中央は後定方内のナデ。ロクロ回転石。	胎土：黒、1mmの大砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：外：灰白、内：灰。	
183	蓋杯(蓋)	口 径 14.2 残存高 3.4	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。	残存部は回転ナデ。	胎土：黒、1~2mmの大砂粒を少量含む。焼成：堅焼。色調：外：灰白、内：明緑灰。	
184	蓋杯(身)	口 径 12.0 受持部 残存高 4.8 3.8	立ち上がりは内傾して伸びた後突立し、端部は丸い。受持部は上方方に伸び、端部は丸い。底部は深く、底部は平ら。	底部外側回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転石。	胎土：黒、1mmの大砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：内：灰白、断：淡黄。	

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
185	布置高杯	深 恵 器	口径 12.6 受部径 15.1 残存高 4.7	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、底部は丸い。底部外側 には脚部の痕跡があり、透か しを3方向に有する。	底体部外側下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナデ。底部内 面中央は不定方向のナデ。	胎土：密、1mm以上の砂粒 を含む。焼成：堅緻。色 調：外：オリーブ灰、灰 白、内：灰白、断：灰白。	
186	鋸	土 部 器	口径 17.2 器高 6.8	平底で、脚部は内凹しながら 上外方に伸び、底部はやや外 反し続い。	口縁部はヨコナデ。底部外側 に当圧痕が残る	胎土：密、焼成：堅緻。 色調：緑～に赤い黄緑。	
187	鋸	"	口径 18.0 残存高 4.5	体部は内凹しながら上外方に 開き、口縁部はやや外反し 続い。		胎土：密、焼成：やや軟。 色調：緑～に赤い赤緑。	

S D 40

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
188	壺	土 部 器	口径 15.7 体部最大径 17.5 残存高 11.7	口縁部は幅く外反して上外方 に開く。底部は上位で最大径 となる。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外側はハケ目。内面は相 互に圧痕が残る。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅緻。 色調：外：緑、内：淡 黄緑～青。	

S D 41

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
189	蓋杯(蓋)	深 恵 器	口径 12.8 器高 4.2	口縁部は下外力へ下り、端部 は丸い。天井部は高く、上面 平ら。	天井部外側上部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナデ。ロクロ 回転右。	胎土：やや粗、1～3mm の砂粒を含む。焼成：堅 緻。色調：外：青灰、内 ：明青灰。	

S K 1

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
190	短瓶蓋	深 恵 器	口径 7.2 体部最大径 11.35 器高 6.05	口縁部はやや外反し、端部は 平面をなす。底部は中位で最 大径をなし、底部は丸味を伴 つ。底部外側にヘラ記号有り	底体部外側下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナデ。ロクロ 回転右。	胎土：やや粗、1～3mm の砂粒を多量に含む。焼 成：堅緻。色調：外：暗青灰、 灰、内：内面に自然釉打。	
191	台付壺	"	口径 7.4 体部最大径 9.3 器高 6.6 器高 4.6 器高 10.1	口縁部は内傾して立ち上がり 端部は丸い。体部は上位で最 大径となる。底部は圓 をなす。脚部中位に2条の沈 縫をめぐらす。	底体部外側下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナデ。脚部は ハリカタ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、1mmの砂 粒を含む。焼成：堅緻。 色調：外：灰白、内： 青灰。内面に自然釉打。	

S K 36

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
192	甕	須恵器	口径 16.7 体部最大径 28.95 底存高 7.4	口縁部は外反して上方へ伸び、腹部はやや肥厚して曲をなす。体部は上位で最大径をなし、底部は丸い。	底部外周甲行タキ。肩部外周カキ目。口縁部は内外面とも回転ナゲ。体部内面同心円状アテ真面を残す。	胎土：密、1～5mmの砂粒及び小石を少量含む。 焼成：やや軟、色調：灰白、灰内、試算。

S K 38

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
193	甕	須恵器	体部最大径 10.1 体部最大径 7.4	肩部は内凹しながら下方へ下り、体表上位で膨大部をなす。底部は丸い。最大径をなす位置に円孔を1箇持つ。	底部内面中央は未調整。他は底面ナゲ。	胎土：やや粗、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬、色調：外：灰白、明オリーブ灰、内：灰灰、肩部外周自然釉剥落。

S K 39

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
194	壺杯(芯)	須恵器	口径 13.3 底存高 5.4	口縁部は下外方へ下り、腹部は内傾する形面をなす。様は継ぎ。大井部はやや高く、丸窓を持つ。	天井部外周回転ヘラケズリ。他は回転ナゲ。ロクロ回転左。	胎土：やや密、1～1.5mmの砂粒を含む。焼成：無度、堅硬、色調：外：灰白灰、底黄、内：明灰灰、断：明オリーブ灰。
195	壺杯(身)	ノ	口径 11.5 受部径 13.9 底存高 4.6	立ち上がりは内傾して伸び、腹部には内傾する段をなす。受部はやや上方へ伸び、腹部は継ぎ。底部はやや深く、底部は回状をなす。	底部外周下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナゲ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～1.5mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：明青灰。
196	甕	七輪器	口径 13.2 底存高 5.3	瓶口は「く」の字形に曲折し、口縁部は上外方へ伸びる。腹部はやや内傾し、突き出面をなす。	全体にヨコナゲ。瓶部内面に引き上げの痕を残す。	胎土：粗、0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬、色調：外：褐、内：赤褐、断：灰赤。
197	甕	ノ	口径 10.8 体部最大径 14.3 底存高 14.8	口縁部は比較的短く、上外方に開き、底部は丸い。体部は中位で最大径となる。やや縱長の体部で、丸底である。	口縁部外周ともヨコナゲ。体部外周は主にタガ方向のハケ目。内面下部は右下から左上への横ナゲナゲ。下部は不定方向のナゲ。底部外周はハケ目をナゲ消し。内面は不定方向のナゲ。	胎土：やや粗、1～3mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬、色調：明赤灰～暗赤灰。

S K 71

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考
198	製埴土器		口径 3.7 底存高 2.7	口縁部から体部はなだらかに下方へ下り、口縁端部は丸い。	手づくね。	胎土：密、燒成：堅硬、色調：淡褐、浅黄褐。
199	ノ		口径 3.8 底存高 3.9	口縁部から体部はなだらかに下方へ広がり。口縁端部は丸い。	手づくね。指圧痕が残る。	胎土：密、1～2mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬、色調：外：浅黄、内：暗オリーブ灰、内：浅黄褐、断：灰白。
200	ノ		小片の為計測不可能	口縁部から体部はなだらかに下方へ下り、口縁端部は丸い。	手づくね。	胎土：密、燒成：堅硬、色調：外：浅黄、内：灰黄、内：灰黄。

S K 101

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
201	蓋杯(蓋)	須 帽	口径 器高 19.1 5.2	口縁部は下外方へ下った後外 反し、端部は内側する浅い四 面をなす。腹は長い。天井部 はやや高く、尖端を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転等。	胎土：やや粗、1～3mm の砂粒を含む。焼成：堅 硬。色調：外：灰青灰、 明青灰、内：暗灰、断： 暗紫灰。外面自然施脂。
202	高杯(杯部)	ク	口径 受部径 残存高 9.4 11.8 4.7	立ち上がりには内傾後や直立 して伸び、腹部は丸い。受部 は外上方へ伸び、腹部は丸い。 底部外面に脚部の痕跡が残る 脚部は3方向に透かしを有す ると思われる。	底部外面下部は回転ヘラケ ズリ。その上方にカコ目を施 す。他の回転ナダ。底部内面 中央は後退力方向のナダ。脚部 はハリック。ロクロ回転等。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：外：灰、灰白、 内：明青灰、断：紫灰。

S K 108

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
203	蓋	須 惠 帽	口径 残存高 12.8 2.0	口縁部は下外方へ下った後、 外反して伸び、腹部は丸い。	天井部外表面回転ヘラケズリ。 他は回転ナダ。ロクロ回転等。	胎土：密、0.5～1mm の砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：外：灰、灰白、 内：明青灰、断：紫灰。
204	蓋	土 間 帽	口径 体部最大径 器高 16.2 15.4 14.2	口縁部は内凹しながら外方 に伸び、端部は弧形。体部は 張りを持たず、中位で最大径 となるが、口部よりも小さい 丸底。	口縁部は外表面ともハケ目。 体部から底部外表面はハケ目。 内面は摩耗著しい。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：やや軟 色調：明赤褐～褐。

S K 109

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
205	蓋	土 間 帽	口径 残存高 13.4 4.3	口縁部は上方に伸び、腹部 は自然におさめる。肩部は張 りを持たず、下外方に下がる。	外表面にハケ目の痕跡が認めら れるが、摩耗著しい。底部内 面に擦傷痕が残る。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：やや軟 色調：褐～明赤褐。

S K 111

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
206	蓋杯(身)	須 惠 帽	受部径 残存高 12.6 3.1	立ち上がりには内傾し、受部は 水平に伸びる。	底部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。	胎土：密、0.5～3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰、内：灰白。 断：明紫灰。 外面に自然施脂着。
207	蓋(口縁部)	ク	口径 残存高 31.6 8.1	直線的に上方に伸びる口縁 部で、腹部は下外方へ肥厚し 外縁部は凸面をなす。口縁部 の下方と、大腰部の下方に 各3条の疣状をめぐらす。	瓶口部は回転ナダ。文様は、 板状工具による圧痕である。	胎土：密、0.5～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：暗緑灰、内： 明青灰。

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 工 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
208	蓋杯(直)	須 恵 器 口径 底高	13.8 4.2	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸株を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。天井部 内面中央は後定方向のナギ。 ロクロ回転右。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：堅緻。 色調：灰白、明オリーブ 灰。	
209	蓋杯(舟)	〃	口径 底高 残存高	12.6 14.6 3.8	立ち上りがりは内側後直立し、 端部に丸い。天井部は上方へ 伸び、端部は丸い。底部は 深く、丸株を持つ。	底部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。ロクロ 回転右。	胎土：や密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅緻。 色調：灰白。 外圍底部に自然剥付有。

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 工 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
210	蓋杯(直)	須 恵 器 口径 底高	13.2 3.6	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部は高く、上面 平ら。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。天井部 内面中央は後定方向のナギ。 ロクロ回転右。	胎土：密、2mm大の砂粒 を少々含む。焼成：堅緻。 色調：明青灰。	
211	蓋杯(直)	〃	口径 底高	13.2 4.2	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸い。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。天井部 内面中央は後定方向のナギ。 ロクロ回転右。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を少々含む。焼成：やや 灰。色調：界：明青灰、 内斬：明青灰。
212	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	12.5 3.4	口縁部は下外方へ下り、端部 は弧形。天井部はやや高く、 平らに近い。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。天井部 内面中央は後定方向のナギ。 ロクロ回転右。	胎土：密、2～3mmの砂 粒を少々含む。焼成：堅 緻。色調：界：青灰、灰 白、内斬：灰白。
213	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	12.5 3.4	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。腹の根詰がある。天 井部はやや低く、平らに近い。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：やや軟。 色調：灰白。
214	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	13.8 3.75	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部は高く、丸株 を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。ロクロ 回転右。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少々含む。焼成：堅 緻。色調：外：明青灰、 内：灰白。
215	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	13.6 3.7	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高い。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。ロクロ 回転右。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を少々含む。焼成：堅 緻。色調：外：明青灰、 内：青灰、釉：明青灰、 紫灰。
216	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	13.4 3.3	口縁部は下外方へ下った後 反し、端部は丸い。天井部と 口縁部の境に沈縫を1条めぐ らす。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナギ。ロクロ回転右。	胎土：密、1mm大の砂粒 を含む。焼成：堅緻。色 調：外：灰白、内：明青灰、 紫灰。
217	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	13.2 3.1	口縁部は垂直に下り、端部は 丸い。	残存部は回転ナギ。	胎土：やや密、1～4mm の砂粒及び小石を少々含 む。焼成：堅緻。色調： 外：灰白、内：明青灰、 紫灰。
218	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	14.0 3.9	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。		胎土：密。焼成：堅緻。 色調：外：明青灰、内： 灰白。
219	蓋杯(直)	〃	口径 残存高	12.8 2.5	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。	残存部は回転ナギ。	胎土：密。焼成：堅緻。 色調：外：明青灰、内： 灰白。

土器 番号	蓋 種 類	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	考	
220	蓋杯(蓋)	深 突 部 口径 残存高	13.4 2.8	口縁部は下外方へ下り、端部 は鋸い。	残存部は回転ナダ。	胎土：密、4 mm 大の砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：明青灰。	
221	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	9.95 12.2 3.65	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は鋸い。底体部は やや深く丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。底部内 面中央は後不定方向のナダ。	胎土：君、1 mm 大の砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰白、断：灰。 底体部外面自然崩剥落。	
222	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	10.6 13.0 3.4	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は やや深く丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ回 転石。	胎土：やや粗、1 mm 大の 砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：青灰、内：綠 灰、断：オーリーブ灰。	
223	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	8.7 14.4 3.8	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は 深く丸味を持つ。	底体部外面回転ヘラケズリ。他 は回転ナダ。底部内面中央は 後不定方向のナダ。ロクロ回 転石。	胎土：やや粗、1~3 mm の砂粒を含む。脆皮：堅硬。 色調：外：青灰、内：綠 灰、断：青灰、明素灰、 明青灰。	
224	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	12.6 14.8 4.55	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は 深く丸味を持つ。	奉手により底体部の調整不 確は回転ナダ。	胎土：君、1~3 mm の砂粒を含む。脆皮：軟 軟。色調：外：灰白、断：灰 灰、内：灰白、断：灰。	
225	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	11.5 14.0 3.15	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転石。	胎土：君、2~3 mm の砂粒 を少量含む。焼成：や や軟。色調：灰。	
226	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	12.0 14.4 2.8	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転石。	胎土：君、2~3 mm の砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰白、内：綠 灰。	
227	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	12.4 14.3 3.0	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転石。	胎土：君、1 mm 大の砂粒 を少量含む。脆皮：堅硬。 色調：外：明青灰、内： 灰、断：青灰。	
228	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	11.4 13.4 2.5	立ち上がりは内傾後直し、 端部は丸い。受部は外下方へ 伸び、端部は丸い。	残存部は回転ナダ。	胎土：君、2~3 mm 大の砂粒 を含む。燒成：やや軟。 色調：明青灰。	
229	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	11.2 14.2 2.9	立ち上がりは内傾後直し、 端部は鋸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。底部内 面は後不定方向のナダ。ロクロ 回転石。	胎土：君、焼成：堅硬。 色調：外：明青灰、内： 灰。	
230	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	12.8 15.1 2.9	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。	胎土：君、2~3 mm 大の砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：内外：灰、断：灰。	
231	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	12.7 14.4 3.5	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は外下方へ 伸び、端部は丸い。底体部は 深く丸味を持つ。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転石。	胎土：君、1 mm 大の砂粒 を少量含む。焼成：やや 軟。色調：外：明綠灰、 内：灰白、断：灰。	
232	蓋杯(身)	口 口径 受部径 残存高	11.4 13.8 3.0	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は鋸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。底部内 面は後不定方向のナダ。ロクロ 回転石。	胎土：君、2~3 mm 大の砂粒 を含む。焼成：堅硬。 色調：外：明緑灰、内： 明青灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考		
233	蓋杯(身)	渠 懸 瓶	口径 受部径 残存高	11.6 14.0 2.5	立ち上がりは内傾して立ち、 輪郭は丸い。受部は外上方へ 伸び、堆塑は弱い。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、燒成：堅緻。 色調：外：断面：灰、内：灰 褐色。	
234	蓋(口縁部)	渠 懸 瓶	口径 残存高	8.5 3.4	口縁部は外上方へ開き、堆部 は丸い。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。燒成：堅緻。 色調：青灰。	
235	高杯(杯部)	渠 懸 瓶	口径 残存高	11.5 3.45	口縁部は外上方へ伸び、堆部 は細い。中位に刺突文を有し、 その上下に各1条波線をめぐらす。	残存部外周回転ヘラケズリ。 他は回転ナヂ。	胎土：薄、2mmの砂粒 を少量含む。燒成：堅緻。 色調：灰白。	
236	高杯(脚部)	渠 懸 瓶	脚径 残存高	15.6 8.0	外周乳頭に下方外方へ広がる脚 部。底部はさらに下方へ開き、 輪郭は浅い凹面をなす。 台形の透かしを3方向に有し、 その下方に1条の波線をめぐらす。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、燒成：堅緻。 色調：青灰～青灰青。	
237	高杯(脚部)	渠 懸 瓶	脚径 残存高	15.6 5.3	下方外方へ開き、堆部は厚さし て外周部は浅い凹面をなす。 残存部の上位に波線をめぐらし、 透かしを有する。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、1mmの砂粒 を少量含む。燒成：堅緻。 色調：外：灰白、内：灰 黄、底：灰。	
238	高杯(脚部)	渠 懸 瓶	脚径 残存高	15.5 15.0	下内方へ下った後、外周乳頭 に下方外方へ広がる脚部。 堆部は下方へ開きし、圓をなす。 残存部の上位に3条の波線をめぐらし、 その間に台形の透かしを、それぞれ3方向に 有する。下段の透かしの下に も1条の波線をめぐらす。	外周面とも回転ナヂ。	胎土：密、2～3mmの砂 粒を少額含む。燒成：堅 緻。色調：外：灰、内： 青灰、底：青灰青。	
239	高杯(脚部)	渠 懸 瓶	脚径 残存高	15.6 8.7	外周乳頭に下方外方がある脚 部。堆部は下方へ開きし、 圓をなす。残存部の上位に3 条の波線に1条の波線をめぐらし、 その間に台形の透かしを3方向に 有する。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少額含む。燒成：堅 緻。色調：外：暗灰青、 内：脚部：青灰。	
240	ねり鉢	口杯	口径 底径 残存高	12.0 9.25 12.7	体部から口縁部に上方外方へ伸 びて下方内側し、堆塑は内傾する 形態をなす。体部に2条の 波線をめぐらし、堆塑は粗粒で してやや外上方へ盛り出す。	底部外周回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。	胎土：密、2～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 燒成：堅緻。色調：外： 青灰、内：明灰灰、底： 青灰。口縁堆塑に自然触 付着。	
241	高杯(杯部)	土 脊 錐	口径 残存高	15.8 5.8	底部外面は口縫部被合時の痕 を残し、内面はしづらが上方外 方に張る堆塑部がやや直立し、 锐く。内面底盤は平らであると思 われる。		胎土：密、0.5～1mmの 砂粒を少量含む。燒成： やや灰。色調：根。	
242	便	口杯	口径 体部最大径 残存高	6.6 10.1 8.7	口縫部は短く上方外方に開き、 輪郭は自然におさまる。体部 の堆みに少なく、下位で最 大となる。丸底であると思 われる。	體部外面にハケ目、体部内面 に施正底が残る。	胎土：やや粗、1～4mm の砂粒を多量に含む。 燒成：やや灰。色調：に ぶい根～にぶい根。	
243	便	口杯	口径 体部最大径 脚高	15.6 14.9 15.3	口縫部は短く、や上方外方に 開き。底部は丸い。体部はや やくぶくれの球形を呈し、 底盤に丸い。全体的に器盤は 薄い。	外縁はハケ目。内面体部は指 圧痕が多く残る。華奢著しい。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。燒成：やや灰。 色調：にぶい根。	内面に灰白 物の付着が認められる
244	便	口杯	口径 残存高	29.4 10.9	瓶底は「く」の字形に曲折し 口縫部は膨らみを持って上方 方に広がる。底部はや内厚 し、無い面をなす。	体部に巻き上げの底が残る。 内外面ともハケ目が残る。	胎土：密、0.5～5mmの 砂粒を含む。燒成：やや 灰。色調：初期～にぶい 根。	

土器 番号	器 種	法 量 (m)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
245	鉢	土器 器高	口径 残存高 19.0 7.6	口縁部は短く、外反して上外方へ下り、端部は丸い。全体にはくらみを持たず、内面して下内方へ下る。		胎土：やや粗、1~6mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：緑～淡黄緑。
246	蓋杯	ノ	残存高 5.3	舌状を呈すると思われるが、先端部を欠損している。	先端部への強い指ナゲの痕が残る。	胎土：泥。焼成：やや軟。色調：内外：緑、断：淡黄緑。

S K 114

土器 番号	器 種	法 量 (m)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
247	蓋杯(蓋)	須恵器	口径 器高 13.0 3.85	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや高く、上面平ら。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。他是回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、2mmの砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：灰白。
248	蓋杯(蓋)	ノ	口径 器高 13.1 3.65	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや高く、丸味を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。他是回転ナヂ。天井部内面は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰、内：灰、断：明青灰。
249	蓋杯(蓋)	ノ	口径 器高 13.0 3.8	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや高く、丸味を持つ。口縁部内面に沈線を1条めぐらす。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：やや粗、1~4mmの砂粒及び小石を多量に含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰、内：灰、断：灰青灰。
250	蓋杯(蓋)	ノ	口径 器高 12.90 3.8	口縁部は下外方へ下り。端部は丸い。天井部はやや高く、丸味を持つ。口縁部外面上部にへらによるキザミ目を有する。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1~4mmの砂粒及び小石を少量含む。焼成：堅硬。色調：内外：明青灰。
251	蓋杯(蓋)	ノ	口径 器高 13.0 3.8	口縁部は下外方へ下り。端部は丸い。天井部はやや高く、丸味を持つ。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、2mmの砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：灰白。
252	蓋杯(蓋)	ノ	口径 残存高 12.8 3.4	口縁部は直角に下り、端部は丸い。天井部は高く、平らに近い。口縁部外面上部にへらによるキザミ目を有する。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1~3mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：内外：明青灰、断：赤灰。
253	蓋杯(蓋)	ノ	口径 残存高 12.5 3.2	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや低く、平らに近い。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：灰、オーバーフラッシュ、内：灰、灰白、断：灰。
254	蓋杯(蓋)	ノ	口径 残存高 15.2 2.6	口縁部は内面気味に下外方へ下り、端部は丸い。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：青灰～明青灰。
255	蓋杯(蓋)	ノ	口径 器高 12.4 3.2	口縁部はやや下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや低く、平らに近い。天井部外面上部にへら記号有り。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1~4mmの砂粒及び小石を少量含む。焼成：堅硬。色調：灰白。
256	蓋杯(蓋)	ノ	口径 器高 13.1 3.85	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや高く、丸味を持つ。天井部外面上部にへら記号有り。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。天井部内面中央は回転ナヂ。天井部内面中央は後定方向のナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、2~3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：灰。

土器 番号	器 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
257	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.6 13.2 2.8	立ち上がりは内傾後直立し、 後直立し、端部は丸い。受部 は水平に伸び、端部は統一。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。	胎土：密、3 mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅緻。 色調：灰褐色。
258	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	12.0 14.1 3.5	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部には水平 に伸び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。	胎土：やや密、1～3.5 mmの砂粒を含む。焼成： 堅緻。色調：灰白。底体 部外面自然釉付落。
259	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	12.3 14.5 4.3	立ち上がりは内傾後直立して 立ち、端部は丸い。受部は水 平に伸び、端部は丸い。底体 部は深く、丸味を持つ。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。底体内 中央は後不定方向のナヂ。	胎土：密、焼成：堅緻。 色調：外：明青灰、底灰、 内：明青灰、灰、青灰。 底体部外面自然釉付落。
260	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	11.8 13.9 3.7	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部はやや外上 方に伸び、端部は丸い。底体 部は深く、丸味を持つ。	底体部外面回転ヘラケズリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転左 右。	胎土：密、焼成：やや致、 色調：灰白。
261	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	11.4 13.8 3.2	立ち上がりは内傾して直立し、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。ロクロ 回転右。	胎土：密、1～2 mmの砂 粒を含む。焼成：堅緻。 色調：明青灰。受部に自 然釉付着。
262	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	12.2 14.6 3.8	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部はやや外上 方に伸び、端部は丸い。底体 部は深く、底層は平ら。底部 外面にヘラ記号有り。	底体部外面回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。底体内面中央は 後不定方向のナヂ。ロクロ回 転右。	胎土：密、1～3 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：明青灰、灰青灰。
263	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.6 13.4 3.6	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。底体部は深 く、丸味を持つ。	底体部外面回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。底体内面中央は 後不定方向のナヂ。ロクロ回 転右。	胎土：密、1～3 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：明青灰、内：明青灰、 断：明青灰。底体部外面 自然釉付落。
264	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	12.0 14.6 3.3	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は丸い。受部はやや外上 方に伸び、端部は丸い。底体 部は深く、底部は平ら。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。底体内 中央は後不定方向のナヂ。ロ クロ回転左。	胎土：密、焼成：堅緻。 色調：灰白。
265	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	12.0 14.8 3.5	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は深 く。底体部外面上にヘラ記号 有り。	底体部外面回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。ロクロ回転左。	胎土：密、焼成：堅緻。 色調：灰。
266	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.7 13.5 3.5	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は丸い。受部はやや外上 方に伸び、端部は丸い。底体 部はやや深く、平らに近い。 底体部外面上にヘラ記号有り。	底体部外面回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。底体内面中央は 後不定方向のナヂ。ロクロ回 転右。	胎土：密、1～3.5 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：赤灰、青灰、 内：明青灰。
267	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	11.4 13.0 3.6	立ち上がりは内傾後外反して 伸び、端部は丸い。受部は後 直立に伸び、端部は丸い。 底体部はやや深く、底部は平 ら。底体部外面にヘラ記号有り。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～3 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：明青灰、内：明青灰、 断：明青灰。明青灰。
268	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.8 13.4 4.4	立ち上がりは内傾して伸びた 後直立し、端部は丸い。受部 はほぼ水平に伸び、端部は丸 い。底体部は丸味有り。	底体部外面回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。底体内面中央は 後不定方向のナヂ。ロクロ回 転右。	胎土：密、1～2 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：明青灰。
269	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	11.8 14.0 3.7	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は やや深く、丸味を持つ。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。底体内 中央は後不定方向のナヂ。ロ クロ回転左。	胎土：密、1～2 mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：灰白。

土壌 番号	器 種	幅 (cm)	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・燒成・色調	備 考	
220	蓋杯(身)	眞惠 華	口径 受部径 器高	11.0 13.8 3.75	立ち上がりは内縫後直立して立ち、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。底部内面に後定方向のナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、やや密、2～4.5 mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内外：青灰、断：明豊灰、明オーラープ灰。	
221	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	12.6 15.5 3.75	立ち上がりは内縫後直立して立ち、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、底部は平ら。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。底部内面中央に後定方向のナダ。ロクロ回転左。	胎土：密、2 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：外：明豊灰、内：灰、断：灰白、青灰。	底体部外側に自然粘付跡。
222	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.0 15.3 4.2	立ち上がりは内縫後直立して立ち、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。底部内面中央に後定方向のナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～3 mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：青灰。	
223	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.1 15.6 4.1	立ち上がりは内縫して伸びた後直立し、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。底部内面中央に後定方向のナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：明青灰。	
224	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	12.0 15.3 3.6	立ち上がりは内縫して伸びた後直立し、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、底部は平ら。底体部にへら記号有り。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。底部内面中央に後定方向のナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、0.5～1 mの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：青灰～明青灰。	
225	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.0 13.2 3.8	立ち上がりは内縫後直立し、端部は丸い。受部にはぼ水平に伸び、端部は良い。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～3 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：明青灰。	
226	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.3 13.7 3.5	立ち上がりは内縫後直立し、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は良い。底体部は深く、半らに近い。底部外側にへら記号有り。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：やや密、1～4 mmの砂粒及び小石を少量含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰、内：明青灰、断：紫灰。	
227	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	10.8 13.8 3.9	立ち上がりに内縫後直立し、端部は新しい。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外側回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～3 mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：明青灰。	
228	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.4 13.8 3.8	立ちしがりに内縫して立ち、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、2 mmの大砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰、内：明青灰。	
229	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.0 13.4 3.4	立ち上がりは内縫後直立し、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、1～2 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：明青灰。	
230	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.6 14.4 3.6	立ち上がりは内縫後直立し、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外側回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：密、1 mmの大砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：灰。	
231	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	11.7 13.8 3.6	立ち上がりは内縫後直立し、端部は良い。受部にはぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、2～6 mmの砂粒及び小石を少量含む。焼成：堅硬。色調：外：内：明青灰、断：紫灰。体部外面に自然粘付跡。	
232	蓋杯(身)	〃	口径 受部径 器高	10.9 13.8 3.4	立ち上がりは内縫して立ち、端部は良い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸味を持つ。	底体部外側回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、1～2 mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：明青灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 工 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
283	蓋杯(身)	直 徑 受部径 残存高	13.5 15.6 3.0	立ち上がりは内傾後直立し、端部は丸い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。	残存部は回転ナデ。	胎土：密、1～4mmの砂粒及び小石を少量含む。焼成：灰白、内斬：浅黄緑。
284	蓋杯(身)	直 徑	12.0	立ち上がりは内傾して立ち、端部は丸い。受部は水平に伸び、端部は丸い。	残存部は回転ナデ。	胎土：密、2mmの大砂粒を少々含む。焼成：堅緑。色調：外：灰、内斬：明青灰。
285	蓋杯(身)	直 徑 受部径 残存高	10.6 13.2 2.9	立ち上がりは内傾して伸びた後直立し、端部は丸い。受部は水平に伸び、端部は斜め。	底部外表面下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。	胎土：密、2mmの大砂粒を少々含む。焼成：堅緑。色調：外：灰白、内斬：明青灰。底部外表面自然物付着。
286	蓋杯(身)	直 徑 受部径 残存高	12.0 14.6 2.4	立ち上がりは内傾後直立し、端部は丸い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。	残存部は回転ナデ。	胎土：密、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅緑。色調：明青灰。
287	蓋杯(身)	直 徑 受部径 残存高	11.6 13.7 2.15	立ち上がりは内傾後直立し、端部は丸い。受部は外下方へ下り、端部は丸い。	残存部は回転ナデ。	胎土：密、1～2mmの砂粒を少々含む。焼成：堅緑。色調：外：灰白、内：明オリーブ灰。断：灰白、灰。外面上に自然物付着。
288	蓋	直 徑 かえり部径 基高	10.0 11.9 3.4	天井部はなだらかに下り、端部は外下方へ広がり、丸い。端部内面には垂直に下るかえりを有する。かえりで擦地し、端部は鋸歯状。天井部外表面中央に浅い凹面をなす小さな彫みを有する。	天井部外表面下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。天井部内面中央は後不定方向のナデ。クロロ回転右。	胎土：密、1～2mmの砂粒を少々含む。焼成：堅緑。色調：界内外：明青灰、断：明青灰、素灰。
289	蓋	直 徑 かえり部径 基高	11.5 13.6 2.85	天井部は平らで、端部は丸い。端部の内側には下部へ下るかえりを有する。かえりで擦地し、端部は鋸歯状。天井部外表面中央に浅い凹面をなす小さな彫みを有する。	天井部外表面下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。天井部内面中央は後不定方向のナデ。クロロ回転左。	胎土：密、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅緑。色調：外：青灰、内：明青灰、断：灰灰。
290	蓋	直 徑 残存高	3.2	天井部はなだらかに下り。口縁部との境に彫刻を1周めぐらす。天井部外表面中央に浅い凹面をなす彫みを有する。	天井部外表面下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。天井部内面中央は後不定方向のナデ。クロロ回転左。	胎土：密、0.5～3mmの砂粒を少々含む。焼成：やや灰。色調：明青灰。
291	蓋	直 徑 基高	12.8 2.9	口縁部は外反して唇下方向へ伸び、端部は丸い。端部よりや内側で接接着する。天井部は低く、丸味を持つ。	天井部外表面下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。天井部内面中央は後不定方向のナデ。クロロ回転左。	胎土：密、0.5～4mmの砂粒及び小石を少々含む。焼成：堅緑。色調：外：灰、内：明青灰。
292	蓋	直 徑 基高	14.4 2.45	口縫部は外反して唇下方向へ伸び、端部は丸い。天井部は低く、平らに近い。	天井部外表面下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。天井部内面中央は後不定方向のナデ。クロロ回転右。	胎土：密、焼成：堅緑。色調：外：灰、灰白、内：明青灰。断：灰灰。
293	蓋	直 徑 かえり部径 残存高	11.0 13.0 1.5	天井部は外下方へ下り、端部は丸い。端部内面には垂直に下るかえりを有する。かえりで擦地し、端部は丸い。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：堅緑。色調：外：明青灰、明オリーブ灰。内：明青灰。断：明青灰、灰。
294	高杯(杯部)	直 徑 残存高	12.6 4.2	口縫部は上外方へ伸び、端部は丸い。杯部中位と底部に各1条の凸縦をめぐらす。底部外縁に透かしのぐのぎ切り込みが現る。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：堅緑。色調：内外：灰～灰白、内：明青灰。断：明青灰。
295	高杯(杯部)	直 徑 残存高	13.4 4.8	口縫部は上外方へ伸び、端部は丸い。杯部中位と底部に各1条の凸縦をめぐらし、その間にへら彫き文を有する。	底部外表面回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。クロロ回転右。	胎土：やや粗、1～5mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅緑。色調：明青灰。

上層 番号	基 層	底 層	底 部 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
296	高杯 (脚部)	礫層	残存高 6.9	2条の沈縫をめぐらし、その上方に長方形の透かしを3方向に有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。0.5～1.5 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。色調：灰白～灰。	
297	高杯 (脚部)	〃	脚径 11.4 残存高 11.7	下外方へ下った後内外両側面に広がる。端部に長い透かしをなす。脚部少位に2条の沈縫をめぐらし、その上下に、3方向、長方形の透かしを有する。	脚部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：外：暗青灰、内：暗青灰、断：紫灰。	
298	高杯 (脚部)	〃	脚径 15.5 残存高 9.6	外周気泡で下外方へ下った後脚部はさらに大きくなれる。端部はほり凹窓をなす。残存部の上位に沈縫を2条めぐらし、その上下に、3方向、長方形の透かしを有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。1 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。色調：外：暗青灰、内：断：灰白。	
299	高杯 (脚部)	〃	口径 16.4 残存高 2.6	下外方へ下った後脚部にはほぼ水平に伸び、端部は浅い凹面をなす。脚部下位に2条の沈縫をめぐらし、その上方に3方向に透かしを有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。1～2 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。色調：暗青灰。	
300	高杯	〃	脚径 8.8 残存高 4.8	脚部は内凹しながら下外方へ下り、端部に直面をなす。	残存部外面は回転ヘラケズリ。内部は回転ナデ後不定方向のナデ。脚部は回転ナデ。脚部はハリック。	胎土：やや密。1～2 mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：暗青灰、内：青灰、断：明青灰。	
301	高杯	〃	脚径 10.1 残存高 5.1	脚部は下外方へ下った後、段をなしてさらに下外方へ広がる。端部はやや内傾する深い凹面をなす。	残存部外面回転ヘラケズリ。脚部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：灰白。	
302	高杯	〃	口径 9.7 脚径 9.15 残存高 7.9	杯部は内凹しながら上外方へ伸び、端部は丸い。脚部は下外方へ下り、端部はさらに広がり、端部は下方へ屈曲し、外輪面は浅い凹面をなす。	杯底部回転ヘラケズリの後、カッコ目。脚部は回転ナデ。ロクロ回転。	胎土：密。0.5～5 mmの砂粒及び小石を少量含む。焼成：堅緻。色調：外：灰白、断：明青灰。	
303	高杯 (脚部)	〃	脚径 9.9 残存高 7.3	やや下外方へ広がりながら下り、端部はほぼ水平に伸び、端部は狭い直面をなす。残存部の上位に沈縫を2条めぐらし、その上下に、3方向、長方形の透かしを有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：青灰。	
304	高杯 (脚部)	〃	脚径 13.1 残存高 9.75	なだらかに下外方へ下り、直面でさらと開いた後、屈曲し端部は丸い。残存部の上位に沈縫を2条めぐらし、その上下に、3方向に長方形の透かしを有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：やや密。1～3 mmの砂粒及び小石を多く含む。焼成：堅緻。色調：灰白、灰、明青灰。	
305	高杯 (脚部)	〃	脚径 16.0 残存高 6.95	下外方へ下った後脚部はさらに大きくなり、端部は丸い直面をなす。端部は1条の沈縫がめぐる。3方向に長方形の透かしを有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。1～3 mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。色調：灰白。	
306	高杯 (裏)	〃	口径 14.8 壁高 4.4	口縁部は内凹気泡で下外方へ下り、端部は丸い。天井部との間に沈縫を1条めぐらす。天井部はやや低く、平。天井部外面中央にやや偏平な突起を有する。	摩擦著しく調整不明確。	胎土：やや密。2～5 mmの砂粒及び小石を多く含む。焼成：やや灰。色調：灰白。	
307	短脚盆	〃	口径 8.3 体高最大部 11.0 残存高 3.0	口縁部は短く、外弧する。端部は外厚して直面をなす。脚部は下外方へ張り出す。	残存部は回転ナデ。	胎土：密。焼成：堅緻。色調：外：青灰、内：断：明青灰。	

土盤 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
308	短腰壺	須 慈 器	口径 8.2 体部最大径 10.9 残存高 4.8	口縁部は上外方へ開き、端部は丸い。肩部は内下方へ盛り出し、全体は内窪しながら下内方へ下る。肩部外側にヘラ凹号有り。	体部外側回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。	胎土：密。燒成：堅緻。色調：外：灰、内：断：明青灰。
309	壺	×	体部最大径 13.0 残存高 5.3	体部外面にヘラ配帶有り。	肩部内外面とも回転ナダ。体部外側回転ヘラケズリ。内面回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：直、1～3.5 mmの砂粒を少量含む。燒成：堅緻。色調：外：暗青灰、内：明青灰、断：明青灰、变灰。
310	壺	×	体部最大径 13.1 残存高 8.45	肩部は内窩気株に下外方へ入り、中位で最大径をなし、全体内窩しながら内下方へ下る。最大径をなす位置に1条の施紋をめぐらす。肩部外面にヘラ凹号有り。	肩部内外面とも回転ナダ。底部外側回転ヘラケズリ。全体内面には回転ナダ。底部内面には棒状工具による圧痕が残る。	胎土：やや密。1～4 mmの砂粒及び小石を含む。燒成：堅緻。色調：外：断：明青灰。内：灰白。
311	壺	×	体部最大径 13.6 残存高 9.2	肩部は直線的に外下方へ入り、上位で最大径をなし、全体は内窩しながら内下方へ下る。	肩部内外面とも回転ナダ。底部外側回転ヘラケズリ。内面全体部は回転ナダ。底部は棒状工具による圧痕が残る。	胎土：やや密。1～3 mmの砂粒を含む。燒成：堅緻。色調：明青灰。
312	壺	×	口径 10.5 残存高 4.7	口縁部は上外方へ伸び、端部は斜面。	残存部は回転ナダ。	胎土：密。燒成：堅緻。色調：青灰。
313	壺	×	口径 12.0 残存高 8.5	口縁部は外窩しながら上外方へ伸びた後、内窩し、さらに上外方へ広がる。端部は丸い。口縁部の上位と中位に各1条の施紋をめぐらす。	肩部内面下部は下から上へのナダ。他は回転ナダ。	胎土：やや密。1～3 mmの砂粒を含む。燒成：堅緻。色調：明青灰。
314	ねり钵	×	底径 9.2 残存高 8.6	体部は内窩気株に上外方へ伸びる。底部は屈曲して下外方へ伸び出し、底部外面はやや丸味保持。	底部側面は回転ヘラケズリ。底部外面は手伸ちヘラケズリ。他は回転ナダ。底部内面中央は後定方向のナダ。	胎土：密。1～2 mmの砂粒を少量含む。燒成：堅緻。色調：外：青灰、内：青灰。
315	壺	×	口径 17.1 残存高 5.6	口縁部は外窩気株に上外方へ下った後外反し、肩部は丸い。肩部は直線的に外下方へ下る。	口縁部内外面とも回転ナダ。肩部外側平行タキの後カキ目。内面同心円状タキ。	胎土：直。0.5～2 mmの砂粒を少量含む。燒成：堅緻。色調：外：明青灰、内：青灰、断：明青灰。
316	壺	×	口径 17.5 残存高 6.85	口縁部に上外方へ伸び、端部は反し、丸い。底部直下に外下方へ下る。底部は内窩気株に外下方へ下る。	口縁部内外面とも回転ナダ。底部外側斜度見立タキの後カキ目。内面同心円状タキ。	胎土：密。0.5～1 mmの砂粒を少量含む。燒成：堅緻。色調：青灰。
317	壺	×	口径 21.0 体部最大径 44.3 復元高さ 47.7	口縁部は外窩しながら上外方へ伸び、底部は直線して茎をなす。肩部は内窩気株に外下方へ盛り出があり、全体は上位で最大径をなし、内窩しながら下内方へ下る。底部は丸い。	口縁部内外面とも回転ナダ。体部外側平行タキの後カキ目。底部外側斜度見立タキ。底部内面は同心円状で具模を残す。	胎土：密。燒成：堅緻。色調：外：青灰、内：灰白。
318	横 瓦	×	体部最大径 26.5	中位で最大径をなし、扁平な瓦形の体部。	体部外側に部分的に平行タキを残し、後カキ目を施す。内面は回転ナダの後カキ目。	胎土：密。燒成：堅緻。色調：外：明青灰、オリーブ。内：明青灰。断：明青灰。
319	捲瓶	×	残存高 15.1	体部は正面より円形を呈し、側面より底部のやや角ばった椭円形を呈する。背面は綺麗である。	体部外側、正面はカキ目。背面は回転ヘラケズリ。内面は正面と背面の中央部に斜土板を充填した痕があり、側面は回転ナダ。正面側の内面には巻き上げの痕がある。正面部分と背面部分は中央部で密合された痕がある。	胎土：密。1～2 mmの砂粒を少量含む。燒成：堅緻。色調：外：青灰、内：赤。

土壤番号	種	種	土量(cm)	形態の特徴	手土の特徴	粘土・施成・色調	備考
320	高砂	上野砂	残存高 3.7	环状部外面に口縫部接合時の縫を残し上方方に広がる。底部内面は中央が隆起する。	脚発合部の外面には擦圧痕がある。	粘土：密、0.5～2mmの砂粒を含む。施成：堅硬。色調：緑。	粘土に植物体遺存。
321	高砂(脚部)	#	底層 残存高 10.2 5.1	柱状部は中空で、環形へながら開く。端部は狭い面をなす。	柱状部の内面にしづり痕と擦圧痕がある。	粘土：密、0.5 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：にじみ緑～茶色。	
322	黒	#	口径 残存高 11.6 6.5	口縫部は内面しながら上外方に広がり、端部は自然に丸さめる。肩部はあまり張りを持たず、内窓して下外方に下る。		粘土：密、1～3 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：赤褐色。	
323	黒	#	口径 残存高 13.8 4.8	口縫部は外窓しながら上外方に広がり、端部は丸い。	外面はヨコナデ。内面はハケ目。	粘土：密、0.5～2 mmの砂粒を少量含む。施成：堅硬。色調：にじみ緑～淡緑。	
324	黒	#	口径 残存高 17.6 5.1	肩部は「く」の字形に曲折し、口縫部は上方方に広がる。端部は丸い。		粘土：密、1 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：板赤褐色～灰褐色。	
325	黒(口縫部)	#	口径 残存高 17.8 2.7	口縫部は細く上方方に開き、端部はやや内窓して丸い。		粘土：密、1 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：板赤褐色～灰褐色。	
326	黒(口縫部)	#	口径 残存高 26.6 4.0	口縫部は肥厚しながら上外方に広がり、端部は外窓して丸い。	口縫部は外側ヨコナデ。	粘土：密、0.5～2 mmの砂粒を少量含む。施成：やや軟。色調：緑～にじみ緑。	
327	黒(口縫部)	#	口径 残存高 18.8 3.5	口縫部は肥厚しながら上外方に広がり、端部は丸い。	口縫部内面はハケ目、端部外側はヨコナデ、他は摩耗著しい。	粘土：密、0.5～1 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：にじみ緑。	
328	黒	#	口径 残存高 31.0 5.4	口縫部は肥厚しながら上外方に広がり、端部は外窓して丸い。肩部はあまり張りを持たない。	内外面ともハケ目が残る。	粘土：密、0.5～4.5 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：にじみ緑～淡黄。	
329	黒	#	残存高 9.5	肩部に内窓しながら下外方に下がる。	肩部外側はハケ目、端部は摩耗著しい。内面は摩耗著しい。	粘土：やや粗。2～5 mmの砂粒を多量に含む。施成：堅硬。色調：赤：黄緑。内断：緑～にじみ緑。	
330	黒	#	口径 残存高 23.9 7.5	肩部は「く」の字形に曲折し、口縫部は上方方に広がる。端部は丸い。	内面にハケ目が残る。	粘土：密。施成：やや軟。色調：緑～淡黄。	
331	黒	#	残存高 9.2	肩部に内窓しながら下外方に下る。	体部内面はヘラケメリ。	粘土：やや粗。1～5 mmの砂粒を多量に含む。施成：やや軟。色調：緑～淡白、赤灰。	
332	黒	#	口径 残存高 25.4 5.3	肩部は「く」の字形に屈曲し、口縫部は肥厚しながら上外方に広がる。端部は狭い面をなす。		粘土：密、0.5～4 mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：緑。	

土器番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
333	更(底部)	上部器 残存高	3.0	丸底で体部は上外方に大きく広がる。	外面に捺压痕が残る。	胎土：密、0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：緑～淡黄緑。
334	器柄不明底部	口径 残存高	16.4 2.5	平底で、体部は上外方に大きく広がると思われる。		胎土：密、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：棕～灰褐色。
335	鋸	口径 体部最大径 残存高	23.8 23.8 16.7	口縁部は上外方に開き、兩部は仄い面をなす。体部は張りを持たず、最大径は口径よりも小さい。	口縁部は内外面ともハケ目。体部外側はハケ目、内面はヨコ方向のヘラケズリ。	胎土：密、0.5～4mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：棕～灰褐色。
336	鋸	口径 基盤	12.2 3.6	口縁部には内寄しながら上外方に広がり、端部はやや外反しない。	口縁部はヨコナヂ。	胎土：やや粗、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：棕～灰褐色。
337	把手付鉢	口径 残存高	13.2 8.7	口縁部はやや上外方に広がって伸び、端部はやや外反する。体部の中位に断頭が構造の把手を有するが、先端部は欠損している。	把手は基盤に挿入し、内面にナデ付ける。外面はヨコナヂ。	胎土：密、焼成：やや軟。色調：褐～淡黃緑。外面上に供化物の付着が認められる。
338	鉢	残存高	8.3	舌状を呈すると思われるが、先端部を欠損している。	把手は体部に貼付け。内面に薄く粘土を充填し、ユビオナヂ。	胎土：密、1～3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：淡緑～灰褐色。
339	把手付鉢	残存高	7.5	細長い角状の把手を有する。	更手は貼り付けで、複合部分の内面に捺压痕が残る。	胎土：密、1.5～1mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：棕～灰褐色。
340	鉢	底径 残存高	14.2 13.1	平底で、体部は丸く膨らみ、最高となる位置に舌状の把手を有する。底部は平ら。	内外面ともハケ目。内面に外よりも低いハケ目。	胎土：やや粗、1～4mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：明青緑～灰褐色。
341	把手	残存長	4.7	舌状を呈する。	表面に先端部への強いナデの痕が残る。内面にハケ目。	胎土：やや粗、0.5～3mmの砂粒を多量に含む。焼成：堅硬。色調：赤褐色。
342	把手	残存長	4.7	舌状を呈する。	先端部へのナデ。捺压痕が残る。	胎土：密、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：棕～灰褐色。

S K 115

土器番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
343	壺杯(蓋)	底底器	口径 25高	11.3 4.6	口縁部は下方へ下り、端部は低い。天井部はやや高く、丸味を持つ。	天井部背面回転ヘラケズリ。他に四回ナデ。クロロ回転右。天井部背面回転ヘラケズリ。	胎土：やや粗、1～3mmの砂粒を多く含む。植物体遺跡。焼成：軟。色調：灰、灰白。
344	壺杯(蓋)	口	口径 基盤	12.8 3.8	口縁部は下外方へ下り、端部は高い。天井部はやや高く、上面半円。	天井部背面回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。天井部内面中央部は後旋方向のナデ。クロロ回転左。	胎土：密、1mmの大砂粒を少數含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰～暗青灰、内：灰白、断：紫灰。

土器 番号	器 種	法 蓋 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
345	蓋杯(蓋)	姿 慶 部 口径 器高	12.2 3.6	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸味を持つ。	天井部外面回転ヘラケズリ。 他は回転ナダ。天井部内面中 央は後定方向のナダ。ロクロ 回転右。	胎土：透、1~5mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：灰白。	
346	若杯(蓋)	* 口径 器高	18.6 3.7	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 上面平ら。	天井部外面上部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。天井部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：透、2~3mmの砂 粒を含む。焼成：やや軟。 色調：青灰。	
347	酉杯(蓋)	* 口径 器高	13.2 3.9	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸味を持つ。	天井部外面上部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。天井部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：透、1~3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：明青灰。	
348	蓋杯(蓋)	* 口径 器高	12.8 3.6	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部はやや高く、 丸味を持つ。	天井部外面上部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。大井部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：透、1~3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：明青灰。	
349	蓋杯(蓋)	* 口径 器高	12.2 4.2	口縁部は内寄しながら下方へ 下り、端部は丸い。天井部は やや高く、上面平ら。天井部 外面にヘラ記号有り。	天井部外面回転ヘラケズリ。 他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：透、1~3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：青灰、内：明青 灰。	
350	蓋杯(蓋)	* 口径 器高	11.8 3.6	口縁部は内寄しながら下外方 へ下り、端部は丸い。天井部 は高く丸味を持つ。	天井部外面上部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。天井部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：透、1~5mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：明青 灰。	
351	蓋杯(身)	* 口径 受部径 残存高	10.2 12.5 3.2	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は弧い。受部は水平に伸 び、端部は弧い。底部はや く深く、半らに近い。	底体部外面下部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。底部内面 中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：やや粗、1mmの砂 粒と4mmの大石を含む。 焼成：堅硬。色調：外：明青灰、 内：青灰、断：紫灰。	
352	酉杯(身)	* 口径 受部径 残存高	12.0 14.4 3.45	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は弧い。受部は水平に伸 び、端部は弧い。底部はや く深く、底部は平ら。我 体部に深く、底部は平ら。	底体部外面回転ヘラケズリ。 他は回転ナダ。底部内面中央 は後定方向のナダ。ロクロ回 転右。	胎土：やや粗、1~4mm の砂粒及び小石を少粒的 の多く含む。焼成：堅硬。 色調：外：黄灰、内：灰、断：赤 灰。	
353	酉杯(身)	* 口径 受部径 器高	11.3 10.8 3.35	立ち上がりは内傾後直立し 立上り、端部は弧い。受部は水 平に伸び、端部は弧い。底 部はやく深く、底部は平ら。 底部外面にヘラ記号有り。	底体部外面下部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。底体部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：透。焼成：堅硬。 色調：青灰。	
354	蓋杯(身)	* 口径 受部径 器高	12.3 14.3 4.15	立ち上がりは内傾後直立し 立上り、端部は弧い。受部は水 平に伸び、端部は弧い。底 部はやく深く、底部は平ら。 底部外面にヘラ記号有り。	底体部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。底体部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転左。	胎土：透、1~3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：黄灰、内：青灰、 断：紫灰。	
355	蓋杯(身)	* 口径 受部径 器高	12.3 14.9 5.8	立ち上がりは内傾後直立し 立上り、端部は弧い。受部は水 平に伸び、端部は弧い。底 部はやく深く、底部は平らに近い。	底体部外面下部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：透、3mm大砂粒を 少量含む。焼成：やや軟。 色調：外：灰、底：灰白、内 断：明綠灰。	
356	蓋杯(身)	* 口径 受部径 器高	11.9 13.2 3.2	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は弧い。受部は外上方へ 伸び、端部は弧い。底体部は 深く、底部は弧い。	底体部外面下部回転ヘラケズ リ。他は回転ナダ。底体部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：透。焼成：堅硬。 色調：明青灰。	
357	酉杯(身)	* 口径 受部径 器高	11.4 13.6 4.2	立ち上がりは内傾して立ち、 端部は弧い。受部は外上方へ 伸び、端部は弧い。底体部は 深く、丸い。	底体部外面回転ヘラケズリ。 他は回転ナダ。底体部内面中 央は後定方向のナダ。ロクロ回 転左。	胎土：透、1~7.5mmの 砂粒及び小石を少量含む。 焼成：軟。色調：灰白。	

土器 番号	器 種	体 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・ 焼成・色調	備 考	
358	蓋杯(身)	深思器	口径 受部径 残高	11.7 14.0 3.9	立ち上がりは内傾して立ち、 底部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。底部部は深 く、丸味を持つ。底部外面に ヘラ記号有り。	底外部下面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。底部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転左。	胎土：やや重、1~5mm の砂粒及び小石を含む。 焼成：堅緻。色調：青灰。
359	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	11.5 14.0 3.9	立ち上がりは内傾後直立して 立ち、端部は丸い。受部は水 平に伸び、端部は丸い。底 部部はやや深く、底部はすらら。	底外部回転ヘラケズリ。他 は回転ナダ。底面部山尖は 後定方向のナダ。ロクロ回転 左。	胎土：重。焼成：堅緻。 色調：内灰：青灰、外 青灰、紫灰。
360	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	12.4 14.8 3.95	立ち上がりは内傾して立ち、 底部は丸い。受部に外上方へ 伸び、端部は丸い。底 部部は深く、丸味を持つ。	底外部外面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転右。	胎土：重。0.1~3mm の砂粒を少量含む。焼成： やや軟。色調：灰白。
361	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	12.2 14.4 4.1	立ち上がりは内傾して立ち、 底部は楕円。受部は外上方へ 伸び、端部は楕円。底 部部は深く丸味を持つ。	底外部下面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転左。	胎土：重。1mm大砂粒と 5mm大の小石を含む。燒 成：堅緻。色調：褐青灰。
362	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	12.1 14.4 3.6	立ち上がりは内傾後直立して 立ち、端部は楕円。受部は水 平に伸び、底部は楕円。底 部部は深く、丸味を持つ。	底外部回転ヘラケズリ。他 は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：重。1mm大砂粒と 5mm大の小石を含む。燒 成：堅緻。色調：褐青灰。
363	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	12.8 16.1 3.8	立ち上がりは内傾後直立して 立ち、端部は丸い。受部は外 上方へ伸び、端部は丸い。	底外部下面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。底部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：重。焼成：堅緻。 色調：褐青灰。
364	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	11.8 14.0 2.7	立ち上がりは内傾して立ち、 底部は丸い。受部は外上方へ 伸びて後曲して外上方へ伸 び端部は丸い。底外部はや や深く、平らに近い。	底外部外面回転ヘラケズリ。 他の回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや重。3~8mm の砂粒及び小石を少額含 む。焼成：外青灰。 色調：外青灰、橙、内蔵：灰白。
365	蓋杯(身)	ク	口径 受部径 残高	13.8 16.0 3.7	立ち上がりは内傾後直立して 立ち、端部は丸い。受部はや や外上方へ伸び、端部は丸い。 底外部はやや深い。	底外部下面下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転右。	胎土：重。焼成：やや軟。 色調：灰白。
366	高杯	ク	口径 受部径 残高	12.2 9.0 8.85 4.4	口縁部は内側しながら外方へ 伸びて丸み反し、端部は丸 い。肩部はなだらかに下外方へ 下り、底部は丸い。	杯底部外面回転ヘラケズリ。 他の回転ナダ。杯底部内面は 後不定方向のナダ。脚部はハ リッケ。ロクロ回転右。	胎土：重。1~3mm の砂粒を含む。焼成：やや軟。 色調：灰白。
367	高杯(脚部)	ク	脚径 脚高 残存高	8.6 2.55 3.75	脚部は下外方へ下り、脚部は 屈曲してから外方へ下り、開 湯部は下部に集中して外周面 は浅い凹面をなす。杯底部内 面にヘラ記号を有す。	杯底部外面回転ヘラケズリ。 他の回転ナダ。脚部はハリッ ケ。ロクロ回転右。	胎土：やや重。1~6mm の砂粒及び小石を含む。 焼成：堅緻。色調：灰~ 灰白。
368	盆	ク	体部最大径 残存高	9.3 11.1	口縁部は外方へ伸びる。肩 部は直線的に下外方へ下り、 受部は上部で最大径をなし、 その位置に円孔を1個持つ。 底部は丸い。	脚部外面回転ナダ。内面には シボリ痕が残る。底外部は 回転ヘラケズリ。他の回転ナ ダ。	胎土：重、1mm大の砂粒 を少額含む。焼成：堅緻。 色調：内外：灰白、脚： 赤灰。外腹脚部自然剥離 等。
369	高杯(杯底部)	土鉢器	残存高	2.1	底部は平らで、外周には脚部 接合時の接ぎ目を残す。		胎土：重。0.5~1mm の砂粒を含む。焼成：やや軟。 色調：棕。
370	高杯(脚部)	ク	残存高	5.1	柱状部は中空で、下外方に広 がる。	外縁はタテ方向のヘラナダ。 内面には段り目を残す。	胎土：重。焼成：やや軟。 色調：棕。

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 築 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
371	高杯(脚部)	土 部 高 残存高	7.7	柱部は中空で、下外方に開き、腹部はさらに広がると思われる。	外面はタテ方向のヘラナヂ。内面には絞り痕を残す。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：内外：緑、底：灰白。
372	甕	口径 残存高	14.8 5.2	口縁部は外寄しながら上外方へ伸び、腹部は丸い。	口縁部外面と腹部はヨコナヂ。内面はヨコ方向のハケ目。肩部外面はタテ方向のハケ目を一筋ナヂ消す。内面はナヂ。	胎土：密。焼成：堅硬。色調：灰赤～にぶい赤橙。
373	輪縁不規 口縁部	口径 残存高	13.2 3.7	口縁部は直く立ち、腹部は丸い。		胎土：やや粗。1～2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：暗褐～黒。
374	甕	口径 残存高	14.9 3.65	腹部は「く」の字形に曲折し、口縁部はやや肥厚しながら上外方に開く。腹部は丸い。	口縁部内面にハケ目が残る。外面はヨコナヂ。体部内面はタテ方向のナヂ。	胎土：密。焼成：やや軟。色調：初男～緑。
375	甕	口径 残存高	14.8 4.8	口縁部は上外方に伸び、腹部は自然におさめる。肩部は張りを持たず。下外方に下がる。	口縁部内面にハケ目を残す。他はナヂ消す。	胎土：密。0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：にじみ緑。
376	甕	口径 残存高	14.5 5.8	口縁部は上外方に伸び、腹部は自然におさめる。肩部は張りを持たず。下外方に下がる。	肩部外面は細かいハケ目。	胎土：密。0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：内：灰赤。外：淡黄緑。
377	甕	口径 残存高	16.2 5.5	口縁部は上外方に伸び、端部は自然におさめる。	口縁部内面はヨコナヂ、肩部内面に指圧痕が残る。	胎土：密。1～2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：黒。
378	甕	口径 残存高	17.0 6.6	腹部は「く」の字形に曲折し、口縁部は直線的に上外方に伸びる。腹部は自然におさめる。	体部内面にヨコ方向のハケ目	胎土：密。1～2mmの砂粒を少額含む。焼成：やや軟。色調：にじみ緑～黒。
379	甕	口径 残存高	16.5 6.7	口縁部は上外方に開き、腹部は自然におさめる。肩部は張りを持たず、下外方に下がる。	外面はタテ方向のハケ目を一筋ナヂ消し。内面口縁部はヨコ2方向のハケ目。体部は主にタテ方向のヘラナヂ。	胎土：やや粗。1～1.5mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：外：暗赤灰、内：にじみ緑、新：赤。
380	甕	口径 残存高	15.6 5.8	口縁部は外反して上外方に開き、腹部は丸い。肩部は張りを持たず、内面しながら下方に下がる。		胎土：粗。1～4mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：外：にじみ赤。内：淡～黒。
381	甕	口径 残存高	18.2 5.5	腹部は「く」の字形に曲折し、口縁部は直線的に上外方に伸びる。腹部は自然におさめる。		胎土：密。0.5～2mmの砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：にじみ緑。
382	甕	口径 残存高	14.2 6.1	口縁部は短く上外方に開き、端部はさらに外反し、張り目をなす。肩部は内面しながら下外方に張り出る。	口縁部内面ともナヂ。肩部内面はタテ方向のハケ目。内面はナヂ。肩部に口縁成形時のヘラ状工具による比較が残る。	胎土：密。焼成：やや軟。色調：明赤褐。
383	甕	口径 残存高	16.6 9.4	腹部は外寄しながら上外方へ伸び、腹部は丸い。肩部は張りを持たず、下外方へ下る。	肩部外面は平行なタタキ。他はナヂ。	胎土：やや粗。1～3mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：にじみ緑～淡黄緑。

土管 番号	器 種	法 量 (rs)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
384	壺	土 間 筒 口径 21.6 残存高 5.0	口縁部は上外方に大きく開き、端部にやや肥厚して丸い。	肩部内面はテテ方向のヘラクズリ。	胎土：やや粗、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：中火候。色調：橙～淡黄。	
385	壺	口 筒 口径 27.2 残存高 5.5	腹部は「く」の字形に曲折り、口縁部は直線的に上外方に伸びる。端部は丸い。	口縁部外側はココナデ。外面は粗いハケ目。	胎土：壺、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にぶい青。	
386	鉢	口 筒 体部最大径 17.0 体部最小径 17.2 残存高 5.9	口縁は近く外折し、端部は丸い。体部にやや深いと思われる。		胎土：壺、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内外：淡黄、断面：にぶい青。	
387	鉢	口 筒 体部最大径 19.6 体部最小径 18.6 残存高 5.0	口縁部は外反して上外方に開き、端部は少し肥厚して丸い。体部中央で最大径となる。	端部外側に口縁成形時のヘラ拭工具の痕を残す。他は丹念なナグ。	胎土：壺、焼成：堅硬。色調：にぶい黄緑～にぶい青。	
388	鉢	口 筒 口径 24.5 残存高 8.0	口縁部は上外方へ広がり、肥厚する。端部は面をなす。	内面にココナデ。巻き上げ痕が残る。	胎土：中や粗、1～2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：にぶい緑。	内面に炭化物の付着。
389	壺	口 筒 口径 22.8 残存高 7.2	口縁はほぼ直立し、端部は面をなす。	外側はハケ目の後、口縁部近くでココナデを施す。内面に巻き上げの痕が残る。	胎土：壺、1～5mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にぶい緑。	外側に炭化物の付着が認められる。
390	把手（鉢）	残存長 4.3	延長い角状を呈する。			胎土：壺、焼成：やや軟。色調：緑～淡黄。
391	把手（壺）	残存長 4.4	舌状を呈する。	施用痕が残る。	胎土：やや粗、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：壺～黄緑。	炭化物の付着が認められる。

S K 118

土管 番号	器 種	法 量 (rs)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
390	蓋杯（壺）	直 壁 口径 15.2 残存高 3.9	口縁部は内凹気味に下外方に下り、端部は丸い。天井部はやや低く、平らに近い。天井部外側にヘラ記号有り。	天井部外側回転ヘラケズリ。他は回転ナグ。ロクロ回転右。	胎土：壺、1mm大の砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：内外：明青灰、断面：翠青。	
394	蓋杯（身）	口 筒 受部径 12.4 受部深 15.2 残存高 3.0	立ち上がりは内輪にして伸びた後直立し、端部に無い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。	底体部外側下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナグ。	胎土：壺、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外断：明青灰、内：青灰。	

S K 119

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
390	蓋杯(西)	須 恵 器	口径 12.6 残存高 2.5	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。	残存部は回転ナゲ。	胎土：密。焼成：堅緻。 色調：外：灰青灰、内：灰 白、断：紫灰。	
396	蓋杯(身)	"	口径 9.8 受部径 15.4 残存高 2.9	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は弧い。受部は下外方へ 伸び、端部は丸い。	残存部は回転ナゲ。	胎土：密。焼成：堅緻。 色調：内外：明青灰、断 灰白。	
397	蓋杯(身)	"	口径 11.6 受部径 13.8 残存高 4.2	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は弧い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。底部は深 く、底辺は平ら。	底部外側回転ヘラケズリ。他 は回転ナゲ。底部内面後上方 に向のナゲ。クロロ回転右。	胎土：密、0.5 ~ 4.5 mm の砂粒及び小石を少量含む。 焼成：堅緻。色調： 外：灰、灰灰、内：明青 灰、断：灰白、紫灰。 底部外側自然海綿底。	
398	便	土 部 器	口径 14.2 残存高 6.0	口縁に内向気味に上外方に伸 び、端部はやや内傾して丸い。	口縁部内面はハケ目。体部内 面はユビナゲ。	胎土：密、0.5 ~ 1 mm の砂粒を少量含む。焼成： 堅緻。色調：外：に赤い 緑～赤緑、内：に赤い緑 ～灰黄緑。	

S K 120

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
399	蓋杯(蓋)	須 恵 器	口径 12.6 高さ 5.3	口縁部は下外方へ下り、端部 は丸い。天井部は低く、半ら に近い。天井部外面にヘラ記 号あり。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナゲ。天井部 内部小辺は後不定方向のナゲ クロロ回転右。	胎土：密、1 ~ 4.5 mm の砂粒及び小石を少量含む。 焼成：堅緻。色調：外 明青灰、内：灰白。	墨みが著し い。

S K 121

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
400	便	須 恵 器	口径 18.0 残存高 15.5	口縁部は外寄しながら上外方 へ開き、端部は外厚し、丸い。 肩部は内向しながら下外方へ 伸びる。底部外側にヘラ記号 あり。	口縁部は内外面とも回転ナゲ 体部外側平行タマキ。内面は 円弧状の逆真底ナゲ消す。	胎土：密。焼成：軟。 色調：灰白。	
401	便	土 部 器	口径 11.4 体部最大径 13.0 残存高 8.4	口縁部は直線的に上外方に伸 び、端部は丸い。体部は中位、 で最大径となる。		胎土：密、0.5 ~ 2 mm の砂粒を含む。焼成：やや 軟。色調：外：灰白～褐灰。 内：橙～灰白。	
402	便	"	体部最大径 26.7 残存高 9.55	体部の最大径となる位置に舌 状の把手を有する。	体部内面ヨビオサエの後ハケ 目。	胎土：やや粗、1 ~ 4 mm の砂粒を多量に含む。 焼成：堅。色調：粗。	

S K 122

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
403	台行策 (脚部)	須 恵 器	脚径 13.2 残存高 8.0	外寄しながら下外方へ下った 後、筋筋で段をなし、沈澱 を疊めぐらし、さらに下外方 へ下る。端部は肥厚し、面を なす。3方向に長方形の透か しを有する。	残存部は回転ナゲ。	胎土：密、0.5 ~ 4.5 mm の砂粒及び小石を少量含む。 焼成：堅緻。色調： 内外：明青灰、灰白、新 明青灰、紫灰。 外面自然海綿底。	

S K 123

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考	
404	蓋杯(身)	須 恵 鎏	口径 11.3 受部径 13.3 残存高 3.7	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底部は深く、 底面は平ら。	底部外腹下部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナヂ。ロクロ 回転。	胎土：やや密、1～6mm の砂粒及び小山を少量含む。 焼成：堅緻、色調： 外輪：灰白、内：明オリ ーブ灰。外輪自然施割落。	
405	蓋杯(身)	ノ	口径 9.6 受部径 12.6 残存高 1.8	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。	底面部は回転ナヂ。	胎土：密。燒成：軟。 色調：灰白。	
406	壺	土 鎏 鎏	残存高 4.5	腹部はやや上方に開き、直 線的に伸びる員輪窓であると 思われる。		胎土：密。施灰：堅緻。 色調：外：淡青～淡黄青。 内：灰白。	
407	壺(U縫部)	ノ	口径 17.2 残存高 4.0	口縫部は上外方に伸び、端部 は丸い。	内面は口縫部から節部にハケ 目。	胎土：密、1mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅緻。 色調：淡黄～明褐色。	

S K 132

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考	
408	蓋杯(身)	須 恵 鎏	口径 12.1 受部径 14.4 残存高 3.5	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。底部はや や深く、底面は平ら。	底部外腹回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。ロクロ回転。	胎土：密、0.5～2mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅緻。色調：稍青灰。	

S K 133

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考	
409	蓋杯(身)	須 恵 鎏	口径 12.3 受部径 14.2 残存高 3.9	立ち上がりは内傾して伸びた 後直しし、端部は丸い。受部 は水平に伸び、端部は丸い。 底部は深く、底面は平ら。	底部外腹回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。ロクロ回転。	胎土：密、0.5～2mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅緻。色調：青灰～暗青 灰。	

S K 134

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考	
410	蓋杯(蓋)	須 恵 鎏	口径 13.9 高さ 4.25	口縫部は下外方へ伸び、両端 部は丸い。尖井部はやや高く、 丸皿を持つ。	天井部外腹上面部は回転ヘラケ ズリ。他の回転ナヂ。ロクロ 回転。	胎土：密。燒成：軟。 色調：外：淡青、内：灰 灰。	
411	蓋杯(身)	ノ	口径 12.3 受部径 11.9 残存高 3.8	立ち上がりは内傾而直立し、 受部は丸い。底部は深く、 丸皿を持つ。底部外面に へら記号有り。	底部外面に回転ヘラケズリ。 他の回転ナヂ。底部内腹下部 は保定向のナヂ。ロクロ回 転。	胎土：密、1mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外内：青灰、断：灰 褐色。	
412	高杯(杯底)	土 鎏 鎏	口径 16.8 残存高 6.3	底部は内面中央がやや隆起し て外側の口縫部との接合部に縦 れを残す。中央でやや僅み再び 内側ながら上外方に伸びる。 端部外反し鋸形。内面に放 射状の略文が見られる。	底部外側には折底が残る。 口縫部はロコナヂ。内面はリ コナヂの後縞文を施す。	胎土：密。燒成：堅緻。 色調：青。	

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
413	更	土 師 瓶	口径 21.0 残存高 14.2	瓶部は「く」の字形に展開し、口縁部は上方方に大きく広がる。瓶部に自然におさめる。	口縁部外面上面はヨコナダ、下部はユビオサエ。内面はヨコナダ。体部外面はハケ目。内面はヘラケズリ。	胎土：密、1~3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：淡黄~淡橙。

S K 135

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
414	鉢	土 師 瓶	底径 7.8 残存高 3.0	底盤は平らで、口縁部は上外方に広がる。内面に放射状の繊維が認められる。	外面部底盤はユビオサエ。他はヨコナダ。一部に朱の模様が認められる。	胎土：密、0.5~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：橙~赤に赤い斑。

S K 136

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
415	更(口縁部)	須 市 瓶	口径 33.2 残存高 4.6	直線的に上外方に伸びる口縁部。底部は上下に肥厚し、外周面は凸面をなす。	瓶底部は回転ナダ。	胎土：密、1~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：暗青灰、青灰。内：灰白。内面に自然點付着。

S K 137

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
416	蓋杯(蓋)	須 市 瓶	口径 12.6 残存高 4.0	口縁部は下外方に下り、瓶部に丸い。天井部はやや低く、半らに近く。天井部外縁にヘラ記号有り。	天井部外縁上面は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転れ。	胎土：密や軽、1~7mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅硬。色調：外：内：青灰、断：暗青灰。
417	蓋杯(身)	ノ	口径 11.8 残存高 14.0 残存高 3.5	立ち上がりに内縫縫直立し、縫縫部は丸い。受部は外上方へ伸び、縫縫部は丸い。底盤部は伸びる。	底盤部外縁下面は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。	胎土：密、1mm以上の砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：外：内：青灰、断：青灰、明青灰。
418	把手付鉢	土 師 瓶	口径 11.5 残存高 6.45	419と同じであるが、把手部分は欠損している。	口縁部はヨコナダ。	胎土：密、0.5~2mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：橙~淡褐。
419	把手付鉢	ノ	口径 11.8 残存高 6.95	丸底で、体部中位に、断面が横円形を呈する縫縫把手を有する。口縁部はやや内側しながら内縫し、縫縫部は少し外反して縫い。	把手はハリツケで、体部内面にハリツケ時の削痕が残る。口縁部はヨコナダ。	胎土：密、0.5~2mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：橙~淡褐。

S K 138

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
420	瓶	土 師 瓶	底径 12.4 残存高 10.4	底盤は内寄し、瓶部は丸い。側面には穴を穿つ。体部は上外方に伸びる。体部には逆縫をめぐらす。	外面部底盤下部から底盤と内面底盤はヘラケズリ。他はヨコナダ。	胎土：密、0.5~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：浅灰褐~灰白。

S K 140

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
424	蓋杯(身)	直 恵 錫	口径 12.8 受部径 3.7 残存高 3.7	立ち上がりは内傾して伸びた 直立し、端部は丸い。受部 は水平に伸び、端部は丸い。	底面部外側下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。ロクロ 回転右。	胎土：密、0.5～3mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：外：青褐色。 内面：青褐色。
425	鉢	土 錫 錫	体部最大径 19.4 残存高 10.9	口縁部は短く外方に開く。 体部は中央で最大径となるが 口縁よりも小さい。	口縁部外側斜め方向のハケ目 内面ヨコ方向のハケ目。体部 外側タテ方向のハケ目。内面 はタテ方向のハケズリ。	胎土：やや粗、0.5～4 mmの砂粒を含む。焼成： 堅硬。色調：外：粗褐色～ 黒褐色。

S K 141

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
426	蓋杯(身)	直 恵 錫	口径 13.0 受部径 3.5 残存高 3.5	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。底面部は深 く、平らに近い。	底面部外側下部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。ロクロ 回転右。	胎土：密、0.5～3mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：外：青褐色、 内面：青灰色。外面に具備 体付垂。

S K 143

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
427	蓋杯(蓋)	直 恵 錫	口径 12.3 残存高 4.1	口縁部は下方へ下り、端部は 丸い。天井部はやや高く、丸 い。	天井部外側上面は回転ヘラケ ズリ。へたり具脚部を部分で 押す。他は回転ナヂ。天井部 内面中央は、保定方向のナヂ ロクロ回転右。	胎土：やや粗、1～3mmの 砂粒を含む。焼成： 堅硬。色調：外：灰白、内 ：明青灰、断：灰赤。
428	蓋杯(身)	△	口径 10.4 受部径 2.8 残存高 2.3	立ち上がりは内傾後直立し、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底面部は やや深い。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、燒成：堅硬。 色調：明青灰。
429	高杯(脚部)	△	脚径 13.9 残存高 2.2	下ろし方へ下り、面部でさらに 外下方へ広がる脚部。端部に 浅い凹窓をなす。面部に2条の 浅溝をめぐらす。	残存部は回転ナヂ。	胎土：密、燒成：やや粗。 色調：灰白。
430	高杯	△	口径 10.8 受部径 13.6 脚径 12.8 残存高 11.5 総高 15.5	杯部の立ち上がりは内傾して 伸び、端部は丸い。受部は外 上方へ伸び、端部は丸い。底 面部は浅く、丸味を持つ。脚 部は表面に下った凹窓へ広がり、 脚部はさらに外下方へ開く。 端部は凹窓をなす。脚 部に上段に浅方孔、下段に 台形の凹窓をなす。各2方向に 有する。上段の下方と、下段 の下方に各2条の浅溝をめぐ らす。	杯底面部外側下部は回転ヘラ ケズリ。他は回転ナヂ。杯部 内面底部中央は後不完全方向の ナヂ。脚部内面上部にはシボ リ痕が現る。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：やや粗。 色調：脚部外面に：灰白 脚：灰白。

S T 1

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
432	蓋杯(蓋)	直 恵 錫	口径 12.3 残存高 4.3	口縁部は外方へ下り、端部 は内傾する段をなす。様は既 い。天井部はやや高く、上面 半ら。	天井部外側上面回転ヘラケ ズリ。他は回転ナヂ。ロクロ 回転右。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：暗青灰。

十 器 番 号	器 種	形 状	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
433	蓋杯(蓋)	直底器	口径 高さ 5.0	口縁部は垂直になり、腹部は内傾する段をなす。腹は細い。天井部は高く丸い。	天井部外側回転ヘラケズリ。 他は回転ナグ。天井部内面中央は後退方向のナグ。ロクロ回転左。	胎土：密、1~3mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：外：灰白、灰、内：灰、断：灰。	
434	蓋杯(蓋)	"	口径 高さ 4.9	口縁部は下外力へ下り、腹部は内傾する段をなす。腹は下方に斜線がめぐる。天井部はやや高く丸い。	天井部外側上位回転ヘラケズリ。 他は回転ナグ。ロクロ回転右。	胎土：密、1~3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：外：灰灰、内：灰。	
435	蓋杯(蓋)	"	口径 残存高 4.3	口縁部は下外方へ伸び、腹部はやや外反して内傾する面をなす。腹は小さいが深い。	天井部は回転ヘラケズリ。他 は回転ナグ。ロクロ回転左。	胎土：やや粗、1mmの大 砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：灰白。	
436	蓋杯(身)	"	口径 受部径 高さ 4.8	立ち上がりはやや内傾して伸びた 後外反し。腹部は内傾する段をな す。受部はほぼ水平に伸び、 腹部は丸い。底体部は深く丸い。	底体部外側下部回転ヘラケズ リ。他は回転ナグ。ロクロ回 転右。	胎土：やや粗、0.5~4 mmの砂粒及び小石を含む。 焼成：堅焼き。色調：外： 青灰、内：灰褐。	
437	蓋杯(身)	"	口径 受部径 高さ 4.75	立ち上がりは内傾して伸びた 後外反し。腹部は内傾する段をな す。受部は水平に伸び、 腹部は丸い。底体部は深く、 丸い。	底体部外側回転ヘラケズリ。他 は回転ナグ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、1~2mm の砂粒を含む。焼成：堅 焼き。色調：外：青灰、内： 灰、断：灰褐。	
438	蓋杯(身)	"	口径 受部径 高さ 4.8	立ち上がりは内傾した後直立 し、腹部は内傾する段をなす。 受部はやや上方へ伸び、 腹部は丸い。底体部はやや深く 丸味を持つ。	底体部外側回転ヘラケズリ。他 は回転ナグ。ロクロ回転左。	胎土：密、2mmの大 砂粒を含む。焼成：堅 焼き。色調：明灰灰~明オリーブ 灰。体部外面に自然附着 付着。	
439	直折(身)	"	受部径 残存高 4.1	立ち上がりは内傾した後直立 する。受部は水平に伸び、 腹部は細い。底体部はやや深く 底部は平ら。	底体部外側回転ヘラケズリ。他 は回転ナグ。ロクロ回転左。	胎土：密、1~1.5 mmの砂粒を含む。焼成： 堅焼き。色調：外：灰白、 灰、明オリーブ灰、内： 灰白。外面に自然附着 付着。	
440	盖杯(身)	"	口径 受部径 残存高 4.7	立ち上がりは内傾して伸び、 腹部は内傾する段をなす。受 部は上方へ伸び、腹部は丸 い。底体部は深く丸い。	底体部外側回転ヘラケズリ。 他は回転ナグ。ロクロ回転左。	胎土：密、燒成：堅 焼き。色調：外：青灰~明灰灰、 内：青灰。外面に自然 附着付着。	
441	蓋杯(身)	"	口径 受部径 残存高 4.7	立ち上がりは内傾した後外反 し。腹部は内傾する段と底面 をなす。受部はやや上方へ 伸び、腹部は丸い。底体部は深 く丸い。	底体部外側回転ヘラケズリ。 他は回転ナグ。ロクロ回転右。	胎土：密、1mmの大 砂粒を含む。焼成：やや軟。 色調：内：明灰灰~灰。外：灰白。	
442	高杯	"	口径 残存 高さ 4.9 8.5 4.9	杯縁は内窪しながら上方へ 伸びる。口縁部はやや外反し 腹部は丸い。口縁部下部に凸 縁を1条めぐらす。脚部はな だからに上方へ底がり、脚 部でさらに大きく突き、脚部 は肥厚し、外端部は凸面をな す。	底体部外側は回転ヘラケズリ。 他は回転ナグ。	胎土：やや密、1~2mm の砂粒を含む。焼成：堅 焼き。色調：外：灰、灰白、 内：青灰。	
443	縁	"	口径 残存高 2.5	口縁部は上方へ伸びる。口 縁下部に凸縁をめぐらし、そ の下方に渡状文(きよみ)を有 する。	残存部は回転ナグ。	胎土：密、1mmの大 砂粒を含む。焼成：堅 焼き。色調：内：明灰灰~灰。 外：灰白。外面に自然 附着付着。	

土管 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考		
444	台付 裏 漢 器	口径 体部最高径 脚径 復元脚高	14.0 39.1 34.2 10.3	口部は上方へ伸び、端部は圓をなし、下方に凸縁をめぐらす。脚部下位にも1条の凸縁をめぐらし、その下方に唐草文(10巻)を有する。脚部は中位で膨張をなす。やや肩の後の脚部には圓錐形を有する。脚部は、体部との接合部に凸縫を1条めぐらし、さらに脚部を3分する位置に凸縫を各1条めぐらす。上口には5方向に長方形の窓孔を有し、底文(5巻、2段)を有する。中腰には三角形の窓孔を5方向に有し、底文(10巻、2段)を有する。脚部は内面浅い凹面をなす。	口部は内外面とも回転ナデ。体部外面上中位には平行タタキ。下位は施字状タタキ。内面上部は回転ナデ。下部は不定方向のナデ。底部は内外面とも回転ナデ。	胎土：青、1mmの大砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：灰白、暗灰、内：灰色、暗灰。断：灰白。口縫部外面、体部内面に自然剥付痕。		
445	舞台(杯部)	#	口径 残存高	31.8 12.4	内凹しながら上方へ伸びる杯部。脚部は外反し窓をなす。外側には2条の内縫と2条の外縫をめぐらす。外縫と内縫の間に施文(8巻)を有する。	外側下部はカキ目の後平行タタキ。他は回転ナデ。口縫部内面には胎土を補強した板が残る。	胎土：青、1mmの大砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：暗青灰、内：暗オリーブ、淡オリーブ。断：灰白、赤。内面に自然剥付着。	
446	臺(口縫部)	土 脚 器	口径 残存高	15.5 4.9	比較的高く、直線的に伸び、端部は自然におさめる。		胎土：青、胎母を少量含む。燒成：堅緻。色調：内外：青、断：淡黄緑。	
447	臺	#	口径 残存高	11.8 3.9	口縫部は短く、内面弧度に上方方に伸び、脚部はやや膨厚して丸く、肩部は丸く盛り出す。	残存部はヨコナデ。	胎土：青、焼成：やや軟。色調：内外：青、断：点々青緑。	
448	壇	神武天器	口径 残存高	19.5 13.4	口縫部は外折して上方へ伸び、脚部には窓をなす。体部は上位で膨張をなし、その位置に1条の施縫をめぐらし、半角状窓を深めに開けた把手を1対有する。把手は貫通しない切り込みを有する。	口縫部内外面ともヨコナデ。体部外面上には平行タタキの模様が残る。把手はハリツケ、ナギ調整。	胎土：やや粗。1~5mmの砂粒及び小石を含む。焼成：やや軟。色調：青。	

S T 2

土管 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考		
449	提瓶	裏 漢 器	口径 最高 基部径	8.2 24.85 6.1	口縫部は外青しながら上方へ伸び、脚部近くで屈曲して上方へ立ち上った後、内傾し、外縫部は浅い凹面をなす。体部は正面より円錐形を呈し、側面より横円錐形を呈する。肩部外面に、下方へ屈曲して先端部の丸い、一方への把手を有する。	口縫部、把手はハリツケ。口縫部内外面とも回転ナデ。体部外表面はヘラケズリ。中央部は不定方向の静止ヘラケズリ。内面回転ナデ。中央部にシボリ痕が残る。	胎土：青、1~3mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：灰白、内：灰。	

S T 3

土管 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考		
450	高杯(脚部)	土 脚 器	残存高	5.5	柱状部は中位で下方方に聞く	外表面はタテ方向のヘラナデ。内面は不定方向のヘラケズリの後、底部にヨコ方向のハハキ。	胎土：青、1~4mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。色調：外：灰白、内：点々青緑、黒。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
451	高杯(脚部)	土 部 番 残存高	12.2	柱状部は中央で、やや下外方 開く。	外圍は厚延著しい。内面はヨ コナヂ。	胎土：密、0.5～2mmの 砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：内：淡黄褐、 外：灰白。
452	高杯(脚部)	〃	7.7	柱状部は中央で、やや下外方 に開いて伸び、底部は屈曲し て開く。	内面ともナガ。	胎土：密、0.5～2mmの 砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：緑～淡黄褐。

S T 4

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
476	蓋杯(腹)	痕 残 等 口径 残存高	12.4 3.4	口縁部は下外方に下り、彫刻 は無い。受部はやや高く、 丸味を持つ。	天井部外周上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナガ。天井部 内面中央は後定方向のナヂ。 ロクロ回転石。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅硬。 色調：明青灰。
477	蓋杯(身)	〃	12.3 14.1 3.5	立ち上がりは内傾後直立し、 底部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は 深く、丸味を持つ。	底部外周回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1～8mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：やや軟。色調：明 青灰。
478	蓋杯(身)	〃	13.0 13.3 3.9	立ち上がりは内傾後直立し、 底部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。彫刻は丸い。 底体部はやや深く、底部は平 ら。	底部外周回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。底部内面中央は 後不定方向のナヂ。ロクロ回 転石。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：内：青灰、 外：赤灰。
479	蓋杯(身)	〃	11.6 13.8 3.4	立ち上がりは内傾後直立し、 底部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は上外へ折み上げら れ丸い。底体部は深く、底面 に平ら。底部外周にヘラ記号 有り。	底部外周回転ヘラケズリ。他 は回転ナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：外： 青灰、灰白、内：暗青灰、 断：淡灰。外面白無地剥 落。
480	甕	土 部 番 口径 残存高	12.0 4.5	口縁部は上外方に伸び、端部 は自然におさめる。肩部は張 りを持たない。	口縁部外周はヨコナヂ。内面 はヨコ方向のハケ目。肩部外 面はヨコナヂ。肩部外 面はヨコ方向のハケ目。内面 は斜め方向のヘラケズリ。	胎土：密、1mmの砂粒 を含む。焼成：やや軟。 色調：外：灰赤、内：にほ い赤褐、内：灰灰、にほ い赤、断：にほい模。
481	甕	〃	14.0 5.2	口縁部は上外方に伸び、端部 は自然におさめる。	口縁部外周はヨコ方向のハケ 目。外周はヨコナヂ。肩部外 面はヨコ方向のハケ目。頸部 はナギナナギ。肩部内面はタテ 方向のヘラケズリ。	胎土：密、1mmの砂粒 を含む。焼成：堅硬。色 調：外断：模、内：にほ い模。

S T 5

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
482	蓋杯(身)	痕 残 等 口径 受部径 残存高	12.6 15.4 5.4	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は丸い。受部は水平に伸 び、端部は丸い。底体部は深 く、丸い。	底部外周回転ヘラケズリ。内 面は内張状で底腹を残す。 中央は後回転ナヂ。他は回転 ナヂ。ロクロ回転石。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を含む。焼成： 堅硬。色調：外部：灰白、 内：青灰。

S T 6

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
483	蓋杯(身)	底 深 篓 口径 10.0 受部径 12.3 器高 4.8	立ち上がりは内傾して伸び、 腹部は内傾する段をなす。受 部は水平に伸び、底部は最も 広い。底部はやや深く、底部は平 ら。	底体部外側下部は回転ヘラケ グリ。他の回転ナダ。ロクロ 回転。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：青灰、 灰白。	
484	短縗甌	身 口径 7.5 体部最大径 11.8 器高 7.1	口縗部は外方へ伸び、腹部 は丸い。体型は中位で最大径 をなし、底部は平ら。	底体部外側下部は回転ヘラケ グリ。体部内面下部は棒状工 具による回転ナダ。他の回転 ナダ。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：灰青灰、灰白。	
485	甌	身 口径 9.6 器高 6.2	口縗部はほぼ垂直に伸び、腹 部は丸い。底体部はやや深く 丸所を持つ。口縗部の方に2 本の縫をめぐらし、その下方 に4条の波状文を有する。	底体部外側下部は手持ちヘラ ケグリ。他の回転ナダ。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：青灰、明青灰。 内外面自然釉封層。	
486	甌	土 筒 篓 口径 17.7 残存高 5.3	口縗部は厚さしながら上方 に伸び、腹部は丸い。	口縗部から底体外側ハケ目の方 後ヨコナダ。内面はヨコ方向 のハケ目。腹部はヨコナダ。 底体外側ヨコ方向のハケ目、 内面ナダ。巻き上げの痕が残 る。	胎土：密、0.5～1mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：にぶい赤褐。	
487	甌	重 恵 篓 口径 20.6 体部最大径 44.0 残存高 44.5	口縗部上方へ伸びた後外折 し、腹部は厚岸して頭をなす。 体部は上位で最大径をなす。	口縗部は回転ナダ。口縗部 外側はカキ目。内面回転ナダ 。底体外側は平行タタキの後部 方にカキ目を施す。内面は 同心円状で具模が残る。底 部内面は脂油サエ。	胎土：やや密、1～2mm の砂粒を含む。焼成：堅 硬。色調：外：暗赤、内：にぶ い赤褐。	

S T 7

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
488	高杯(脚部)	土 筒 篓 残存高 7.5	脚状部に中心で、やや膨らみ を持って下方へ広がる。	柱状部外側ヨコ方向のヘラナ ダ。内面は枚引き模を残すが、 最初にかけてヨコ方向のヘラ ケグリ。底体部内面はヘミ ギヤ。	胎土：密、0.5～2mm の砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：根にぶい赤褐。	
489	甌	身 体部最大径 12.8 残存高 6.95	体部は中位で最大径となる頸 部を以て、口縗部は外反し て上方へ伸びる。	内面口縗部から体部上部はヨ コナダ。下位は強いユビナダ 。外側体部はハケ目。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：にぶい赤褐～明赤 褐。	

S T 8

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
490	蓋杯(身)	底 深 篓	立ち上がりは内傾して立ち、 腹部は丸い。受部は外上方へ 伸び、腹部は丸い。	底体部は回転ナダ。	胎土：密、焼成：堅硬。 色調：灰。	小片の為法 量は計測で きず
491	高杯	身 口径 11.7 脚径 12.1 脚高 11.8 器高 16.1	口縗部は上方へ伸び、腹部 は丸い。脚部中央に凸板をめ ぐらす。脚部は下方へ下っ た後、外側しながら下外方へ 伸び、腹部はさらに大きくな く。腹部は上方へ少し厚岸 し、茎になす。脚部中位に2 本、下位に1条の縫をめぐ らす。脚部には2段、3方向 に菱形の透かしを有する。	全体回転ナダ。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰白、内： (杯部)灰、赤灰、明黄 褐、(脚部)灰白、断： 赤灰。脚部内面自然釉封 層。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・焼成・色調	考 察		
492	高杯	■	口径 脚径 復元器高	12.5 11.2 17.4	口縁部は外方へ伸び、端部 は鋸ぐらし。軸部中央に2条の内 縫を有す。縫部は内凹しながら下外 方へ下り、縫部は水平に伸び る。端部は上外方へ肥厚し、 頭をなす。軸部中央に2条の 沈縫を有ぐらし。その上下に それぞれ3方向に弓馬形の透 かしを有する。軸部外縫に ヘラ記号有り。	全体回転ナダ。	粘土：西、1mm大砂粒を 含む。焼成：堅焼き。色調： 外：灰、灰白、内：明青 灰、断：青灰。 内外面自然釉剥落。	
493	高杯	■	口径 脚径 復元器高	14.2 12.7 17.7	口縁部は外方へ伸び、端部 はやや鋸ぐらし。軸部中央に凸縫 を1条有ぐらし。下位に沈縫 を2条有ぐらす。縫部と沈縫 の間にヘラ彫文字を有する。 軸部は外縫しながら下外方へ 下り、端部は頭をなす。脚中 位に3条の疣縫を有ぐらし。 その上下に、それぞれ3方向 に長方形の透かしを有する。 下段の透かしの下には疣縫を 1条有ぐらす。軸部外縫に ヘラ記号有り。	全体回転ナダ。	胎土：赤、0.5～1mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅焼き。色調：外：青灰～ 緑灰、内：青灰、断：明 青灰。	
494	壺（茎）	■	口径 かえり部径 器高	8.7 11.9 4.2	天井部はゆるやかに外方へ 下り、端部は丸く。内面端部 に内縫ながら2条を有する。 かえり部端部が鋸ぐらし。端部は鋸ぐ らし。天井部は脚中央に、上面凹状 の溝みを有する。	天井部外縫に回転ヘラケズ リ。他の回転ナダ。かえり、 端部はハリツケ。クロロ回転 石。	胎土：赤、1mm大の砂粒 を含む。焼成：堅焼き。色 調：灰白。	
495	脚付壺	■	口径 体部最大径 底径	10.6 15.4 21.5	口縁部は外方へ伸びた後、 内凹しながらさらく伸び、端 部は鋸ぐらし。軸部は外 方へ下り、体部は上位で 最大径をなし、内凹しながら 下外方へ下る。脚部には3方 向に透かしを有する。	肩部から体部外縫上位はカク 目、以下は回転ヘラケズリ。 他の回転ナダ。底部内面中央 は後定方向のナダ。	胎土：赤、1mm大の砂粒 を含む。焼成：堅焼き。色 調：色白。	
496	脚付瓶飾壺	■	口径 体部最大径 脚径 脚高	10.8 10.25 14.1 29.5	口縁部は外方へ伸びた後、 内凹しながらさらく伸び、端 部は丸く。肩部は外 方へ下り、裏側の複数縫が 認められる。その下方に疣縫 を1条有ぐらす。体部は上位 で最大径をなし、内凹しながら 下外方へ下る。脚部は外周 気味に下外方へ下り、他の脚 は既に内窓を有ぐらし下外方へ 下り、段をなし、沈縫を1条有 ぐらし。端部は頭をなす。脚部 は3方向に長方形の透かしを 有する。	肩部、脚部はハリツケ。体 部下部に回転ヘラケズリ。他 は回転ナダ。底部内面は後不 定方向のナダ。	胎土：赤、1mm大の砂粒 を含む。焼成：堅焼き。色 調：色白。	
497	脚付瓶飾壺	■	口径 長脚径 脚高 器高	10.6 5.3 17.00 15.6 8.1 27.7	口縁部は外方気味に外方へ 伸び、端部は丸く。肩部は外 方へ下り。小型の脚部を有する。 脚部は内窓ながら下外方へ 下り、段をなし、沈縫を1条有 ぐらし。端部は頭をなす。脚部 は3方向に長方形の透かしを 有する。	脚部、脚部にハリツケ。体 部内面中位以下回転ヘラケズ リ。他の回転ナダ。底部内面 中央は後不定方向のナダ。	胎土：やや赤、1～2mm の砂粒を含む。焼成：堅 焼き。色調：外：暗青灰、 青灰、灰白、内：明青灰、 灰白、断：灰青。	
498	脚付長颈壺	■	口径 体部最大径 脚径 脚高 器高	8.7 12.75 6.9 21.7	口縁部は上外方へ伸びた後、 内窓ながらさらく伸び、端 部は丸く。肩部は外周的に外 方へ下り。体部は上位で最 大径をなし、内窓ながら下 外方へ下る。脚部は下外方へ 下った後、段をなして下外方 へ聞く。端部は厚壁して平盤 をなす。	口縁部から肩部内面回転ナ ダ。体部から底部外面回転ヘ ラケズリ。内面回転ナダ。脚 部内外面回転ナダ。	胎土：赤、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 焼き。色調：内外：暗青灰、 青灰、灰白、内：明青灰、 灰白。断：灰青。 口縁部内面、外蓋全体自 然角剥落。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 上 ・ 施 成 ・ 色 調 色	備 考	
499	脚付横椭室	底 厚 3.7	口径 16.8 脚径 18.4 体部最大径 17.4 脚高 10.3 高さ 32.7	口縁部は外寄り気味に上方へ伸び、中位に2条の沈線をめぐらし、その上方にヘラ彫き文を有する。端部はさばに反して膨らむ丸。脚部は外下方へ広がり、脚部の腹跡が認められる。体部は上方で整然としない。内寄しながら下内へ下る。脚部は下外方へ広がり、腹部の段をなして、沈線を1条めぐらし、さらに下外方へ開く。端部には内傾する脚をなす。脚部には3方向に不規則な台形の透かしを有する。	体部下位から底部の軸へラケヅリ。他は回転ナダ。底部は後定方向のナダ。脚部はハリツケ。	胎土：密、1~2mmの大砂粒を含む。施成：堅繩。色調：外：灰赤、暗青灰、内：青灰、断：灰赤。脚部外面と底部内面、自然剥落。	
500	脚付横筒室	*	口径 14.8 脚部口径 4.6 体部最大径 19.5 残存高 23.2	口径部は99と同様の形態を呈する。肩部に小型の斜形を呈する。腹部は6面形に有する。体部は中位で最大径をなす。	肩部はハリツケ。体部外面下部は邵板ヘラケヅリ。他は回転ナダ。	胎土：やや密、1~2mmの砂粒を含む。施成：堅繩。色調：外：灰、紫灰、内：灰、断：紫灰。外側自然剥落。	
501	基盤不規脚部	*	口径 11.8 残存高 2.8	段をなして下外方へ下る脚部。端部はやや肥厚して、頭をなす。残存部の上部に沈線を1条めぐらす。	残存部は回転ナダ。	胎土：密。施成：堅繩。色調：内外：灰、断：紫灰。	
502	基盤不明脚部	*		内寄しながら下外方へ下り、端部に頭をなす。	残存部は回転ナダ。	胎土：密。施成：堅繩。色調：内外：灰白、断：灰白、紫灰。	小片の為法量の計算不可
503	脚板	*	口径 6.8 基盤径 5.0 残存高 15.7 体部最大径 12.6	小型の脚板で、口縁部は上外方に伸び、脚部は外反して、抉いて頭をなす。体部は正面より円形を呈し、側面より、背面の扁平な構造形を有する。脚部に、下後方へ屈曲し、脚部のやや弱い把手を1対有する。	口縁部と把手はハリツケ。口縁部内外側回転ナダ。体部外側正面は無いとき。背面は回転ヘラケヅリ。内面は回転ナダ。	胎土：密、1~2mmの大砂粒を含む。施成：堅繩。色調：外：青灰、灰白、内：灰白、断：灰、灰白。	
504	臺台 (口縁部)	*	口径 27.4 残存高 3.5	内寄しながら上外方に伸びる口縁部。端部は外反して丸い。	残存部は回転ナダ。	胎土：密、0.5~1mmの砂粒を含む。施成：堅繩。色調：内外：灰、断：灰。	
505	臺台	*	口径 25.9 残存高 17.3	碎部は内寄しながら上外方に伸び、端部は外反し、膨らんで丸い。中位に2条の沈線をめぐらす。脚部は下外方に伸び、中位よりやや下外方に広がる。脚部は内側して下外方にへり、脚部は外厚い。頭をなす。脚部には2条ずつの沈線を5段有し、その間にヘラ彫き文と、上3段には長方形の透かし、下1段には台形の透かしをそれぞれ4方向に有する。	脚部外面、沈線より下方は平行タキ。その内面は同心円状で当て丸模を一部ナゲ青シ。他は回転ナダ。	胎土：やや密、1~2mmの砂粒を含む。施成：堅繩。色調：外：青灰、内：灰、断：明青灰。	
506	臺台	*	口径 28.4 脚径 21.1 脚高 31.2 高さ 44.4	脚部は内寄しながら上外方に伸び、端部は外反して丸い。外面中位に2条、内面端部近くに1条ずつの沈線をめぐらす。脚部は下外方に伸び、中位よりやや下外方に広がる。脚部は内側して下外方にへり、脚部は外厚い。頭をなす。脚部には2条ずつの沈線を5段有し、その間にヘラ彫き文と、上3段には長方形の透かし、下1段には台形の透かしをそれぞれ4方向に有する。	脚部外面、沈線より下部は平行タキ。その内面は同心円状で当て丸模を一部ナゲ青シ。他は回転ナダ。脚部はハリツケで内外側ともナダ。	胎土：密、1~2mmの砂粒を含む。施成：堅繩。色調：外：灰、灰白、内：断：明青灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
507	器台	須 烧 器	口径 36.8 脚径 30.4 脚高 39.5 腹身基高 51.5	底部は内凹しながら上方へ伸び。端部は外反し、把手を2条めぐらし、その上方に2条めぐらし文を有する。腹部は下方へ下った後、内面気味に下方へ広がる。面部はさらに内曲し、端部はやや内傾する直線をなす。肩部には沈縫2条及び6段で施し、それぞれの沈縫の上方に、上4段は方形の透かしを4方向に有し、下から2段目に短い長方形と長い長方形の透かしを交互に有する。下1段は角の丸い三角形の透かしを4方向に有する。また下4段にはヘアによる無い波状文を有する。	底部外側、沈縫より下部はカギ目の保平行タタキ。その内面は円心円弧当て具慶を残す。他は回転ナデ。腹部外周カキ目の後文様、透かしを施す。内面は回転ナデ。	胎土：密、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：内外：灰、断：赤灰。

S R 1

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
571	研磨壺	須 烧 器	口径 7.2 体部最大径 13.8 基高 8.1	口縁部は輪轉して立ち、輪部は厚く、肩部は直線的に外下方へ張り出し、体部は上位で最大径をなす。底部は丸くを持つ。	底部外周下部は回転ヘラケメリ。底部外周中央には末鋼盤部分を残す。他は回転ナデ。	胎土：密、1.5～3mmの砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：青灰。
572	壺	〃	口径 14.0 体部最大径 19.8 基高 13.5	口縁部は外方へ伸び、輪部は厚く、肩部は直線的に下外方へ下り、体部は上位で最大径をなす。底部は丸くを持つ。	底部外周下部は回転ヘラケメリ。底部から体部外周カキ目。他は回転ナデ。底部内面は後不定方向のナデ。	胎土：やや粗、1～1.5mmの砂粒及び小石を含む。焼成：やや軟。色調：内外：明青灰、断：灰青。

S R 2

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
573	壺(蓋)	須 烧 器	口径 15.3 基高 4.55	口縁部は下外方へドリ、輪部は丸い。天井部は高く、さらには近い。	天井部上面は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	胎土：やや粗、1～7mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅焼。色調：明綠灰～明青灰。
574	壺(身)	〃	口径 受部径 4.3 基高 4.3	立ち上がりは内傾して伸び、輪部は張り。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、丸味を持つ。蓋みが割れい。	底体外周下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	胎土：密、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：灰青灰～灰白。
575	壺(身)	〃	口径 受部径 4.3 基高 4.3	立ち上がりは内傾して伸び、輪部は丸い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、丸味を持つ。蓋みが割れい。	底体外周下部は回転ヘラケメリ。他は回転ナデ。底部内面中央は後不定方向のナデ。ロクロ回転右。	胎土：やや粗、1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅焼。色調：外：灰青灰、内：灰。立ち上がりから受部に自然剥付着。
576	壺	〃	口径 13.8 受部径 10.96 基高 6.4 高さ 15.2	輪部は外周気味に上方へ伸び、ロ縫部は段をなし、さらには上方へ伸びる。端部に内傾する段をなす。輪部上位に波状文(16条)を有する。体部は中位で最大径をなし、削突文を有する。その下に各1条の波状文をめぐらし、上部に円孔を1個持つ。底部は平ら。	底部下部から底部外周手持ちヘラケメリ。他は回転ナデ。	胎土：密、1～3mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅焼。色調：外：青灰、内：青灰、オーラン。ブズ、断：にぶい赤褐。内面ロ縫部と底部に自然剥付着。

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・ 焼成・ 色調	備 考
577	短壺蓋	深 さ 9.4 体部最大径 13.5 容 量 10.2	口縁部は直線的にやや上方へ開き、端部は丸い。肩部は直線的に下方へ張り出し、体部は上位で最大径をなす。底部は半円に近い。	底部外下面部は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。底部内面中央は後定方向のナダ。	胎土：赤、1mmの砂粒を含む。焼成：やや黒。色調：灰白。	
578	台付壺	口 径 9.4 体部最大径 17.4 肩 径 12.5 脚 高 7.7 容 量 17.4	口縁部は上方へ伸びた後内側する。底部は丸い。口縁部中央は3条の沈縫をぐらす。肩部は3点で内側しながら下方へ下り、体部は上位で最大径をなす。肩部は直線的に下がる。肩部と体部中央に各1条の沈縫をぐらし、その間に刺突文を有する。脚部は外側しながら下方へ下り、底部は直線をめぐらし、段をなして下方へ広がる。底部は内側へ彎折し、面をなす。3方向に台形の凸起を有する。	底部外下面部はカキ目。脚部はハリック。外表面は筋状に凸凹がある。底部内面は脚部内面状で直角を後回転ナダにより消す。他の回転ナダ。底部外表面の刺突文は施文後部分のナダ消す。	胎土：赤、1~3mmの砂粒を含む。焼成：堅黒。色調：内外：灰~灰白、断面：灰赤。	

S R 3

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・ 焼成・ 色調	備 考
579	蓋(裏)	深 さ 10.0 容 量 3.9	口縁部は下外方に下り、端部は丸い。天元部はやや低く、丸い。天井部外表面にヘラ記号有り。	天井部外表面は回転ヘラケズリ。他の回転ナダ。天井部内面中央は後定方向のナダ。ロクロ回転右。	胎土：赤、0.5~1mmの砂粒を少量含む。焼成：やや黒。色調：明青灰~明緑灰。	

S R 4

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・ 焼成・ 色調	備 考
580	壺	土 壺 口 径 18.6 体部最大径 33.4 容 量 41.8	口縁部はほぼ直立する二重口縁で、肩部は横たわる。端部は内側して面をなす。体部は上位で最大径となり、ゆるやかに下外方に伸び、底部は丸い。底部と体部中央に各1コ、径1.5cm程度の小孔を穿つ。	口縁部外表面ともヨコナダ。肩部外表面ヨコナダ。内面はユビサエの後ヨコナダ。体部から底部外表面不定方向のハケ目、内面ヘラケズリ。底部と体部の小孔は施文後に穿ったものである。	胎土：赤。焼成：堅黒。色調：墨。	
581	小型丸底壺	口 径 7.4 体部最大径 9.7 容 量 10.0	口縁部は上方に開き、端部は丸い。体部は中央で最大径となる偏球形を呈する。	口縁部外表面ともヨコナダ。底部外表面はハケ目。内面はユビサエ、及びユビケタ。内面に動き上げの模様がある。	胎土：墨、3mmの大砂粒を多量に含む。焼成：堅黒。色調：墨。	

S S 2

土器 番号	器 種	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・ 焼成・ 色調	備 考
583	蓋杯(身)	深 さ 12.1 受盤径 14.7 容 量 3.95	立ち上がりに内傾して伸び、端部は丸い。受盤は水平に伸び、溝は深い。底部外表面は浅く平らに近い。底部外表面にヘラ記号有り。	底部外表面ヘラケズリ。他の回転ナダ。蓋部内面中央は後定方向のナダ。ロクロ回転右。	胎土：赤。焼成：堅黒。色調：灰白。	
584	壺	土 壺 口 径 21.0 体部最大径 30.5 容 量 10.5	丸底で体部は中位で最大となる。	体部内面は不定方向の強いヨコナダ。巻き上げの模様がある。	胎土：赤。焼成：堅黒。色調：墨~灰白。	

上器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
585	盃杯(底)	直 径 高 さ	口縁部は短く内傾し、底部は丸い。天井部は高く、丸い。	天井部外側上部に削輪ヘラ切 りの後ナダ。他に回転ナダ。 天井部内面下部は旋定方向の ナダ。	胎土：やや粗、0.5～2 mmの砂粒を含む。焼成： 堅緻。色調：灰白。	
586	平底	×	体部最大径 19.1 底存高 12.6 底径 9.5	体部は上位で最大径をなし、 丸い。底部は平ら。		胎土：やや粗、1～2 mm の砂粒を多量に含む。焼 成：やや軟。色調：灰白。

下器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
587	盆(底)	直 径 9.2 口径 11.8 底存高 2.4	口縁部は外下方へ下り、底部 は丸く、内傾し、底面の裏 かえりを有する。かえりで接 地する。天井部外側に刻文 を有する。	天井部外側上部は回転ヘラケ スリ。他は回転ナダ。	胎土：粗、0.5～2 mmの 砂粒を多量含む。焼成： 堅緻。色調：外：青灰 内：青灰。断：赤灰。	
588	盆	×	体部最大径 8.8 底存高 2.7	体部最大径をなす直腹に刻 文を有し、円孔を1個留つ。 その上部に横線を1条めぐら す。	底が部に回転ナダ。	胎土：粗、1 mmの大砂粒 を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：灰、灰白、内 ：青灰。断：赤灰。 外面自然釉付着。

包含層出土 織文土器

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考	
602	破片	織文土器 基厚	1.5	外面に横円形押型文。	内面はナダ。	胎土：0.5～3 mmの長石 等を含む。やや粗。焼成： 堅緻。色調：外：淡黄緑、 内：灰、断：灰青緑。	高山寺 (早)
603	破片	×	基厚 1.2	外面に横円形押型文と思われ る文様。	内面はナダ。	胎土：1～3 mmの長石、 石英等を含む。粗。焼成： 堅緻。色調：外：灰、 内：淡黄～にじみ、断：灰 黒緑。	×
604	破片	×	基厚 1.2	外面に顯著な押型文。	内面は丹念なナダ。	胎土：0.5～1 mmの長石、 石英等を含む。粗。焼成： 堅緻。色調：外：淡黄、内： 灰灰。断：灰青。	×
605	破片	×	基厚 1.6	外面に横円形押型文。	内面は丹念なナダ。	胎土：1～5 mmの長石を 含む。粗。焼成：堅緻。 色調：外：淡黄、内：灰 灰。断：オリーブ灰。	
606	破片	×	基厚 1.2	外面に横円形押型文。	輪削み技術。内面はヨコ方向 のケツリの後ナダ。	胎土：0.5～3 mmの長石を 含む。粗。焼成：堅緻。 色調：外内：にじみ、断：灰 黒。	高山寺 (早)
607	破片	×		外面に纏文(L.R.)と、沈線 による文様。	外面は纏文を施した後、沈線 による文様を接着し、不要な箇 所の纏文を春渕する。内面は 丹念なナダ調整。	胎土：1～2 mmの長石等 を含む。粗。焼成：堅緻。 色調：外：墨黒、内：黑 断：褐色。	中床 (後期)

土器 番号	器 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・被皮・色調	備 考
608	破片	醜文十部		外面に研磨。	胎土：0.5～2mmの長石、 雲母を含む。密。燒成： 堅硬。色調：外：にぶい 黄褐色、断：に赤い黄褐色。	内面に炭化 物付着。
609	破片 (口縁部)	ア	口唇部は折曲げて肥厚させる 口輪とその下方に醜文を施す。	内面はナデ。	胎土：0.5～2mmの長石、 云母を含む。密。燒成： 堅硬。色調：内：にぶい 黄褐色、断：白。	北白川 (中期末)
610	破片	ア				内面に炭化 物付着 (後期)
611	深鉢 (口縁破片)	ア	波状口縁の底頂部。外面に太 めの波線と、それを繋ぐよ うに醜文を施す。	内面は下から上へのナデ、左 右を内側へ折曲げて肥厚させ る。ヘラ状工具による波線文 を施した後醜文を施す。	胎土：1～3mmの長石、 云母を含む。おおむね密。 燒成：堅硬。色調：外：明 黄色、内：明黄色、 断：黒褐色。	北白川C (中期末)
612	破片	ア	沈醜文であるが、文様の形は 不明。		胎土：0.5～2mmの長石 を含む。やや軟。燒成： 堅硬。色調：外：明赤褐、 内：灰黄、断：にぶい黄 褐色。	(後期)
613	破片	ア		内外面とも研磨。	胎土：0.5～2mmの長石、 雲母を含む。密。燒成： 堅硬。色調：外：灰黃、 内：褐灰、断：にぶい黄 褐色。	(後期)
614	破片	ア	外面に醜文(R.L.)を施す。	内面は研磨。	胎土：1～3mmの長石等 を含む。密。燒成：やや 軟。色調：外：にぶい黄 褐色、内：灰黄、断：にぶ い橙、黒褐色。	
615	破片(底部)	ア	器厚 1.9 外面に沈継と醜文を施す。	内面はナデ。	胎土：2～3mmの長石を 少含む。密。燒成：堅 硬。色調：外内：にぶい 黄褐色、断：灰黄褐色。	
616	破片	ア	外面に沈継文と醜文を施す。	外面にヘラ状工具による沈継 文を施した後S-Lの方向に醜文 を施す。支脚部以外の裏面所 ナデ。	胎土：0.5～2mmの長石、 石英、雲母を多く含む。 やや軟。焼成：堅硬。色 調：外：灰黄、内：灰黄 褐色、断：黄褐色。	内面に炭化 物付着。
617	破片	ア		輪削み。	胎土：0.5～3mmの長石、 石英、雲母を多く含む。 やや軟。焼成：堅硬。色 調：外：灰黄、内：灰黄 褐色、断：黄褐色。	
618	破片	ア	外面に醜文を施すが磨滅が著 しい。		胎土：1～3mmの長石等 を含む。密。燒成：軟。 色調：灰褐色。	
619	破片	ア	外面に人字平行な沈継による 文様。	内面は下から上への強いナデ。	胎土：1～2mmの長石、 雲母を少量含む。密。 焼成：堅硬。色調：外内 にぶい黄褐色、断：にぶ い黄褐色。	
620	破片	ア	外面に醜文(L.R.)を施す。	内面は不定方向のナデ。	胎土：0.5～2mmの長石、 石英、雲母を多く含む。 やや軟。焼成：やや軟。 色調：灰褐色～棕。	

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考	
621	破片	縄文土器	尖部を有する。外面、尖部の上も縄文を施す。	内面はナデ、外部は尖部をはりつけ、ヨコ方向のナデで削らかにした後、縄文を施す。	胎土：1～2mmの長石、雲母等を含む。密。色調：外：にぶい黄褐色、内：灰白、断：灰灰。		
622	破片 (口縁部)	〃	口縁部はやや内傾し、内寄しながら上方へ伸びる。	外面に縄文を施すが、磨滅著しい。	胎土：1～2mmの長石等を含む。密。焼成：數。色調：明黄褐。		
623	破片	〃	外面に縄文を施すが、磨滅著しい。		胎土：1～2mmの長石等を含む。密。焼成：數。色調：明黄褐。		
624	底部	〃	底径 9.6 残存高 3.4	平底、体部はゆるやかに上方へ伸びると思われる。	輪轍み。底部側面に指圧痕、底部の外側に爪痕が残る。底部内面はナデ調整。	胎土：1～2mmの長石、雲母を多く含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外：にぶい黄褐色、内：灰灰、断：暗灰質。	
625	底部	〃	底径 9.8cm、残存高2.85cm半底で、体部は上方へ伸びる。	輪轍み技術。底部側面はヨコ方向のナデ。体部外側は下から上のナデ。底部に爪痕、輪轍みが残る。内面はナデ。	胎土：1～2mmの長石、雲母、角閃石を含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外：にぶい黄褐色、内：暗灰質。		
626	底部	〃	底径 5.6 残存高 4.7	底径は凹面をなし、体部は上方へ伸びる。	輪轍み。体部外側に指圧痕と強いナデの痕が残る。内面は糸目なナデ。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母を含む。密。焼成：堅硬。色調：外：灰灰、内：黄灰、断：灰灰質。	
627	底部	〃	底径 6.0	平底で、一度内傾した後上方へ伸びる。	底部外側は削痕を指でフマキ成し、体部は下からヒへのケズリ。底部内面には成形時の垂れ痕と爪跡が残る。	胎土：0.5～2mmの長石等を含む。密。焼成：堅硬。色調：外：灰灰、内：黄灰、断：灰灰質。	底質量(晚期)
628	厚跡 (口縁部)	〃	口径 32.0	口縁部はほぼ直立し端部は丸い。	輪轍み技術。外面は巻貝調整、内面は巻貝調整の後ナデ。	胎土：1～2mmの長石、雲母を含む。密。焼成：数。色調：外：灰灰、内：灰灰、断：黑褐。	〃
629	鉢 (口縁部 破片)	〃			外面と内面の口縁部に巻貝調整。他はナデ。	胎土：0.5～1mmの石英、長石含む。密。焼成：堅硬。色調：外：灰灰。	〃
630	破片	〃			内外面に巻貝調整を施す。	胎土：0.5～3mmの長石等を含む。密。焼成：やや軟。色調：外：灰灰、内：灰灰、断：灰灰。	〃
631	破片	〃	尖部を有する。尖部上に變形の縞目が右から左回りに付けられている。	尖部はナデ。尖部はハリツケ。内面はヨコ方向のケズリ。	胎土：1～2mmの長石等を含む。密。焼成：堅硬。色調：外：灰白、内：黄灰、断：灰灰。		
632	厚跡(破片)	〃	尖部を有する。尖部上には變形の縞目が右から左回りに付けられている。	輪轍みの痕が顯著に残る。外面上にナデ。尖部はハリツケ。内面は水平方向のケズリ。	胎土：0.5～2mmの長石、雲母等を含む。やや粗。焼成：堅硬。色調：外：灰灰、断：明赤褐。	船橋 (晚期)	
633	破片	〃		内外面に水平方向の巻貝調整	胎土：0.5～2mmの長石等を含む。密。焼成：堅硬。色調：外：灰灰褐、内：灰灰。	底質量(晚期)	

上部 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
634	破片 (口縫部)	繩文土器	内面口縫部に沈縫をめぐらす。外縫には水平な直縫と横門形の連続する密縫文。	内面はナデの後沈縫をめぐらす。	胎土：1～3mmの長石等を含む。密、燒成：堅硬。色調：内：にじい黄褐色、外：にじい黄褐色。	(乾燥)
635	破片	ア			胎土：0.5～2mmの長石を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：灰黃褐色、内：断：にじい黄褐色。	非異里 (乾燥)
636	破片	ア		内外面に水平に巻貝調整を施す。	胎土：0.5～2mmの長石を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：黑、内：黄褐色、断：にじい黄褐色。	ア
637	破片 (口縫部)	ア	口縫部に丸く口縫部はややくびれていますと思われる。	外縫側方向の巻貝調整。内面はナデ。輪積み。	胎土：0.5～2mmの長石を含む。密、燒成：堅硬。色調：内：にじい黄褐色、断：紙槌状痕。	ア
638	破片	ア		外面はタテ方向に研磨。内面は斜め下から上への傾いナデ。	胎土：1～3mmの長石、黒褐色等を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：灰黃褐色、内：灰、断：オーリーブ灰。	(乾燥)
639	破片 (口縫部)	ア	口縫端部は外反し丸い。	輪積み焼法。口縫端部は外側へ折り曲げ、丸く肥厚せしむ。内外面に巻貝調整を施す。	胎土：1～3mmの長石等を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：灰黃褐色、内：灰、断：黒褐色。	非異里 (乾燥)
640	破片	ア		内外面に巻貝調整を施す。	胎土：0.5～2mmの長石を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：灰黃褐色、内：断：海灰。	ア
641	破片	ア		内外面に巻貝調整を施す。	胎土：0.5～2mmの長石を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：灰黃褐色、内：断：にじい黄褐色。	ア
642	破片 (口縫部)	ア		内外面とも巻貝調整。	胎土：0.5～2mmの長石を多く含む。密、燒成：堅硬。色調：内：灰褐色。	ア
643	破片	ア		外面は斜め方向の巻貝調整の後ナデ。外面はヨコ方向の巻貝調整の後ナデ。	胎土：1～2mmの長石等を含む。密、燒成：堅硬。色調：外：にじい黄褐色、内：灰。	ア
644	陶鉢	ア	口径 46.0 尖底で体部は上の方へ伸び、口縫部はやや内側する。突唇を2条めぐらす。突唇上に菱形のあみ目を施す。	輪積み。底部から体部外周は下から上へのケツリ、内面はナデ。突唇はハリコツで、皮時計回りに押し引きの刺み目を施す。他はナデ調整。	胎土：0.3～3mmの長石、胎母多く含み、セサを混入している。やや粗。燒成：堅硬。色調：外：黒褐色、内：にじい黄褐色。	胎鉢 (乾燥)

包含層出土 非生土器

上部 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
651	壺(底部)	弥生上器 底 残存高 3.1	底径 5.0 平底。底部側面はわずかに瘤み、体部は内凹しながら上外方へ伸びる。	底部側面は不定方向のナデ、底部側面から体部へ傾いた方向の捺ナデの後ヨココロ。内底部は指オサエ、体部はナデ。	胎土：1～3mmの長石、チャーレ等を含む。密、燒成：堅硬。色調：にじい黄褐色～灰褐色。	外側に少量の灰化物が付着。 中期後内面

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考		
655	甕(底部)	弥生土器 底径 残存高	3.0 2.4	平底で底部は大きく上外方へ広がる。	底部側面から底部は平行タタキ。 内面はハケメが残る。	胎土：0.5～3mmの長石等を含む。表面：やや艶。 焼成：やや艶。 色調：に点々・褐～灰褐色。	後期 磁内 V	
656	高杯(杯部)	ク	口径 残存高	24.4 7.5	内寄する底部から追加して立ち上がり、再び外折して外上方へ伸びる。口縁部は内側へ隆起し、外側は浅い凹面をなす。	口縁部はヨコナギ。体部外側へラミガキ。内面はヨコナギ。	胎土：やや粗。1～4mmの砂粒を含む。焼成：やや艶。 色調：淡黄褐色。 (黒斑有り)	後期 磁内 V

包含層出土 順次器

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 燒 成 ・ 色 調	備 考		
657	蓋杯(蓋)	須志器	口径 基高	12.2 3.7	口縁部は下外方へ下り、端部は浅い凹面をなす。梗は小さく無い。天井部はやや低く、丸味を持つ。	天井部外側回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転左。	胎土：密。0.5～1.5mmの砂粒を少量含む。焼成：やや艶。 色調：外：反白、内：明青灰。	
658	蓋杯(蓋)	ク	口径 残存高	11.4 3.5	口縁部は下外方へ下り、端部は浅い。梗は小さく無い。天井部は低く、平ら。	天井部外側回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。天井部内面中央は後不定方向のナヂ。ロクロ回転右。	胎土：密。0.5mm以上の砂粒を少量化。焼成：堅緻。 色調：外：反白、内：青灰、断：紫灰。	
659	蓋杯(蓋)	ク	口径 器高	12.9 4.1	口縁部は下外方へ下り、端部は浅い。天井部は高く、丸味を持つ。	天井部外側上面は回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。天井部内面中央は後不定方向のナヂ。ロクロ回転右。	胎土：やや密。1～4mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅緻。 色調：外：内：明青灰、断：暗青灰。	
660	蓋杯(蓋)	ク	口径 器高	11.4 3.9	口縁部は下外方へ下り、端部は内傾する凹面をなす。梗は浅い。天井部はやや低く、上部平ら。	天井部外側回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転左。	胎土：密。焼成：堅緻。 色調：灰白、暗灰。 自然物付着。	
661	蓋杯(蓋)	ク	口径 基高	12.0 4.6	口縁部は内傾して下方へ下り。端部は内傾する段をなす。梗は浅い。天井部はやや低く、丸味を持つ。	天井部外側上面は回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転右。	胎土：密。0.5～3mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：断：明青灰。内：灰。	
662	蓋杯(蓋)	ク	口径 残存高	15.1 4.4	口縁部は外側丸味に下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや高く、上部平ら。	天井部外側上面は回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。天井部内面中央は後不定方向のナヂ。ロクロ回転右。	胎土：密。焼成：堅緻。 色調：青灰。	
663	蓋杯(蓋)	ク	口径 残存高	12.8 4.7	口縁部は下内方へ下った後や外反し、端部は内傾する段をなす。梗は浅い。天井部はやや高く、上部平ら。重みが著しい。	天井部外側上面は回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転右。	胎土：やや密。1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅緻。 色調：灰白。	
664	蓋杯(蓋)	ク	口径 残存高	12.6 4.8	口縁部は下外方へ伸び、端部は内傾する段をなす。梗は浅い。天井部はやや低く、丸味を持つ。	天井部外側回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転左。	胎土：密。0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：灰、灰オリーブ、内：灰白、断：灰。	
665	蓋杯(蓋)	ク	口径 器高	13.7 3.4	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや低く、平らに近い。	天井部外側上面は回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。天井部内面中央は後不定方向のナヂ。ロクロ回転左。	胎土：やや粗。1～5mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅緻。 色調：外：断：明青灰、内：灰白。	
666	蓋杯(蓋)	ク	口径 基高	12.8 4.9	口縁部は下外方へ下った後や外反し、端部は内傾する凹面をなす。梗は深い。天井部はやや高く、丸味を持つ。	天井部外側上面は回転ヘラケヅリ。 他は回転ナヂ。ロクロ回転左。	胎土：密。0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成：堅緻。 色調：外：明青灰、内：青灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
657	蓋杯(箇)	口径 5.4 深さ 5.4	口縁部は内凹気味に下方へ下り、端部は内縮する段なす。 枝は丸い。天井部はやや高く丸味を持つ。歪みが大きい。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転右。	胎土：やや密、1mmの大 砂粒を含む。焼成：堅硬。 色調：外内：明青灰。断 面：灰。	
658	蓋杯(箇)	口径 3.3 深さ 3.3	口縁部はほぼ垂直に下り、端 部は丸い。天井部はやや低く平ら。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：青灰。	
659	蓋杯(箇)	口径 5.4 深さ 5.4	口縁部は下外方に下り、端部 は内傾する平面なす。縁は 丸い。天井部はやや高く、丸 い。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転右。	胎土：やや密、1～2mmの 砂粒を含む。焼成：や や軟。色調：明青灰、灰 白。	
660	蓋杯(箇)	口径 4.1 深さ 4.1	口縁部は下外方に下った後外 反し、端部は内傾する面をな す。後の根脚を置す。天井部 はやや高く、上部平ら。	天井部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転左。	胎土：密、0.5～3mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：灰白。	
671	蓋杯(身)	口径 3.7 受部径 3.7 深さ 3.7	立ち上がりは内傾直立し、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は 丸く、丸味を持つ。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。底部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転右。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：外： 灰青～暗青灰、内：明 青灰。	
672	蓋杯(身)	口径 4.45 受部径 4.45 深さ 4.45	立ち上がりは内傾直立し、 端部は内傾する面をなす。受 部にはほぼ水平に伸び、端部 は丸い。底体部はやや深く、丸 味を持つ。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転右。	胎土：密、1mmの大砂 粒を少量含む。焼成：堅硬。 色調：青灰。	
673	蓋杯(身)	口径 5.1 受部径 5.1 深さ 5.1	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は内傾する面をなす。 受部にはほぼ水平に伸び、端部 は丸い。底体部はやや深く、丸 味を持つ。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転右。	胎土：密、1mmの大砂 粒を少量含む。焼成：堅硬。 色調：外内：明青灰、断 面：明赤褐。	
674	蓋杯(身)	口径 3.95 受部径 3.95 深さ 3.95	立ち上がりは内傾直立し、 端部は丸い。受部は外上方へ 伸び、端部は丸い。底体部は 丸く、丸味を持つ。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1～2mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：外： 灰青、灰黄、オリーブ灰。 内：灰白。底体部外面 自然釉及び風済釉付着。	
675	蓋杯(身)	口径 4.4 受部径 4.4 深さ 4.4	立ち上がりは内傾して伸びた 後直立し、端部は内傾する回 転部をなす。受部にはほぼ水平に 伸び、端部は丸い。底体部は やや深く、底部は平らに近い。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。底部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転左。	胎土：密、1～6mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅硬。色調：外： 灰青、灰黄、オリーブ灰。 内：灰白。底体部外面 自然釉及び風済釉付着。	
676	蓋杯(身)	口径 4.65 受部径 4.65 深さ 4.65	立ち上がりは内傾して伸び、 端部は丸い。受部にはほぼ水平に 伸び、端部は丸い。底体部は やや深く、丸味を持つ。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、0.5～2 mmの砂粒を含む。焼成： 堅硬。色調：外内：青灰、 明青灰。断：灰灰。	
677	蓋杯(身)	口径 4.3 受部径 4.3 深さ 4.3	立ち上がりは内傾直立し、 端部は丸い。受部にはほぼ水平に 伸び、端部は丸い。底体部は やや深く、丸い。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。底部内 面中央は後定方向のナダ。ロ クロ回転左。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を少量含む。焼成： 堅硬。色調：外：灰白、内 ：明青灰。	
678	蓋杯(身)	口径 5.6 受部径 5.6 深さ 5.6	立ち上がりは内傾して伸びた 後反し、端部は内傾する浅 い切面をなす。受部はやや外 方に伸び、端部は丸い。底 体部は深く、丸い。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：密、焼成：堅硬。 色調：外：灰、内：明 青灰。	
679	蓋杯(身)	口径 3.4 受部径 3.4 深さ 3.4	立ち上がりは内傾直立し、 端部は丸い。受部はやや外 方に伸び、端部は丸い。底 体部は深く、丸味を持つ。	底体部外面上部は回転ヘラケ ズリ。他は回転ナダ。ロクロ 回転左。	胎土：密、1mmの大砂 粒を含む。焼成：軟。色調： 外：灰白、灰、内：灰黄。 断：明青灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (ml)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	施 土・被 成・色 調	備 考
680	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	12.0 14.6 3.7	立ち上がりは内傾して伸び、端部は丸い。受部は外上方へ伸び、端部は丸い。底体部は深く。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：滑、1～2mmの砂粒を含む。施成：堅緻。色調：青灰。
681	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.3 13.2 3.0	立ち上がりは内傾して伸びた後方に反し、端部は内傾する平面になす。受部は水平に伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、底部は平ら。	底体部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：滑、1mmの砂粒を少量含む。施成：堅緻。色調：明青灰。
682	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.4 13.4 4.1	立ち上がりは内傾して伸び、端部は丸い。受部は水平に伸び、端部は深い。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：やや密、1～2mmの砂粒を含む。施成：堅緻。色調：灰白、灰。
683	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	11.0 13.2 2.8	立ち上がりは内傾して伸び、端部は丸い。受部は水平に伸び、端部は丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：滑、1～3mmの砂粒を含む。施成：堅緻。色調：明青灰。
684	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.6 12.8 4.9	立ち上がりは内傾して伸び、端部は内傾する平面になす。受部は水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く。	底体部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、0.5～2mmの砂粒を含む。施成：堅緻。色調：内外：青灰、断：明褐色、明青灰。
685	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	9.0 10.9 4.9	立ち上がりは内傾後直立し、端部は内傾する段をなす。受部はやや外上方へ伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、丸い。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：滑。施成：堅緻。色調：明青灰。底体部外面自然釉剥落。
686	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.6 13.0 3.4	立ち上がりは内傾後直立し、端部は丸い。受部は水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：滑、1～2mmの砂粒を含む。施成：堅緻。色調：外断：明褐色、内：灰白。
687	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	8.9 10.8 4.4	立ち上がりは内傾して伸びた後方に反し、端部は内傾する段をなす。受部は水平に伸び、端部は丸い。底体部はやや深く。	底体部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転左。	胎土：やや密、0.5～1mmの砂粒を含む。施成：堅緻。色調：外断：灰白、内：赤灰。
688	蓋杯(身)	口径 受部径 残存高	10.0 12.4 3.95	立ち上がりは内傾後直立し、端部は鋭い。受部はやや外上方へ伸び、端部は鋭い。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。ロクロ回転右。	胎土：やや密、2.5～3mmの砂粒を含む。施成：やや軟。色調：外断：灰白、内：オーラー灰。底体部外面自然釉剥落。
689	高杯	口径 脚径 脚高 脚周	14.9 10.2 4.9 11.4	杯部は外方へ伸び、端部は丸い。脚部やや立ちに凸線をめぐらし、さきに上外方へ伸びる。端部は丸い。底部は丸く狭く持つ。凸縁の下方に波状文(6条)を有する。	杯部外面回転ヘラケズリ。脚部はハリケ。脚部外面端部には外辺カキ目。杯底部外面中央には後退方向のナダ。	胎土：やや密、1～3mmの砂粒を含む。機成：堅緻。色調：内外：明青灰、断：暗紫灰。外面自然釉剥落。
690	高杯	口径 残存高	16.0 6.9	杯部は内側しながら上方へ伸び、杯盤中位で2条の凸線をめぐらし、さきに上外方へ伸びる。端部は丸い。底部は丸く狭く持つ。凸縁の下方に波状文(6条)を有する。	杯底部外面回転ヘラケズリ。後退部分的にカキ目を施す。脚部はハリケ。他は回転ナダ。	胎土：滑、0.5～3mmの砂粒を少量含む。施成：堅緻。内外：明青灰、断：明紫灰。内面に自然釉付着。
691	高杯(脚部)	脚径 残存高	9.8 6.6	下外方へ伸び、端部は上下に凸縁し、外縁部はゆるやかな凸面になす。5方向に台形の透かしを有する。	脚部外面中位はカキ目。他は回転ナダ。	胎土：密、0.5～5mmの砂粒及び小石を少量含む。施成：堅緻。色調：内外：明青灰、灰白、断：赤灰。

土器 番号	器 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
692	高杯(脚部)	須 恵 器 残存高	14.65 下外方へ伸びた後さらに曲折して下方へ開く。端部は下方へ屈曲する。3方向に台形の透かしを有するとと思われる。	残存部は回転ナヂ。	胎土：やや粗、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰。内：内外面に自然難付着。	
693	蓋(高杯)	口径 脚高	13.1 4.35 口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。天井部はやや高く、平らに近い。外側は丸形に、上面はららぬ込みを有する。	天井部外面上部回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。天井部内面中央は後上方内のナヂ。拂みはハリック。ロクロ回転右。	胎土：粗、1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：青灰。内：明瞭灰。断：明灰。	
694	高杯	口径 受部径 残存高	12.4 15.2 4.8 立ち上がりは内傾腹上内方に伸び、端部は丸い。受部は水に伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、丸形を持つ。脚部には3方向に透かしを有する。	残存部は回転ナヂ。杯底部内面中央は後上方内のナヂ。	胎土：粗、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：粗灰。	
695	高杯	口径 受部径 脚径 脚高 卷高	11.6 14.0 9.7 3.5 立ち上がりは内傾腹直立し、端部は丸い。受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部はやや深く、丸形を持つ。脚部は下外方へ下った後脚部中位で段をなし、さらに内弯しながら下外方へ下る。端部は圓になす。2方向に長方形の透かしを有する。	全体に回転ナヂ。杯底部内面中央は後上方方向のナヂ。脚部はハリック。	胎土：粗、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内：青灰、断：明灰。	
696	高杯	受部径 脚径 脚高 残存高	13.6 10.9 4.3 8.0 受部はほぼ水平に伸び、端部は丸い。底体部は深く、丸形を持つ。脚部は丸形で丸形に下った後、段をなしてさきに下外方へ広がる。端部は斜削して面をなす。脚部の上位、4方向に円形の透かしを有する。	底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。脚部はハリック。	胎土：やや粗、1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：明灰灰、内：明青灰。	
697	高杯	口径 脚径 脚高 器高	13.3 8.4 2.15 6.3 口縁部は内弯気味に上外方へ伸び、端部は丸い。底体部はやや深い。脚部は下外方へ下り、端部はほぼ水平に伸び、端部は厚めで、外端面は浅い凹面をなす。	底底部外回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。脚部はハリック。	胎土：やや粗、0.5～4mmの砂粒及び小石を含む。焼成：堅硬。色調：外：灰オリーブ褐、内：青灰、断：灰。外表面自然釉剥離。	
698	蓋(高杯)	残存高	4.7 天井部は丸形を持ち、縁は段状を呈する。	天井部外面上部は回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。拂みはハリック。ロクロ回転左。	胎土：やや粗、1～2mmの砂粒を多量含む。焼成：堅硬。色調：外：灰オリーブ褐、内：青灰、断：灰。外表面自然釉剥離。	
699	高杯(脚部)	脚径 残存高	11.2 5.9 下外方へ伸び、端部は下方へ屈曲し、端部は長い。4方向に台形の透かしを有するとと思われる。	外端部以外はカキ目。他の回転ナヂ。	胎土：粗、0.5mm以上の砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：外：灰白、灰、断：灰白、褐灰。自然釉剥離。	
700	高杯(脚部)	脚径 脚高 残存高	10.3 5.6 6.5 外向しながら下外方へ下り、端部は上下に屈曲し、外端面は凸面をなす。4方向に台形の透かしを有するとと思われる。	残存部は回転ナヂ。	胎土：やや粗、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外内：灰青灰、断：灰、黒、灰。	
701	高杯(脚部)	脚径 脚高 残存高	10.1 5.6 6.4 脚部は下外方へ伸び、端部は下方に屈曲し、外端面は凸面をなす。4方向に台形の透かしを有するとと思われる。	外端部以外はカキ目。他の回転ナヂ。	胎土：粗、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内：灰青灰、断：明灰。	
702	高杯(脚部)	残存高	5.8 下外方へ下った後下外方へ伸びる。脚部中に2条の北緯をぐらし、その上、下、3方向に長方形の透かしを有する。	残存部は回転ナヂ。	胎土：粗、1～2mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：外内：灰～灰白、断：灰、赤。	

土器 番号	器 種	法 量 (g)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 、燒 成 、色 調	備 考	
703	高杯(脚部)	須 恵 高	脚径 残存高 15.2 6.7	外輪気味に下外方へ下り、裾 部でさらにはがる脚部。底部 に浅い凹面をなす。脚部中位 に2重の疣状をめぐらし、そ の上下、3方に透かしを有 する。下脚に透かしの下にも 1条の疣状をめぐらす。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：堅硬。 色調：青灰～明青灰。	
704	高杯(脚部)	♂	脚径 残存高 13.8 6.4	外輪気味に下外方へ下り、裾 部でさらにはがる脚部。底部 に底をなす。残存部の上部に 疣状をめぐらし、2方向に透 かしの透かしを有する。透か しの下方にも1条の疣状をめ ぐらす。	残存部回転ナギ。	胎土：やや密、1～8mm の砂粒及び小石を含む。 焼成：堅硬。色調：外： 明青灰、内：青灰。	
705	長瓶壺	♂	体部最大径 残存高 18.2 20.0	瓶部は上外方へ張く伸び、体 部は錐球形を呈すると思われ る。瓶底部が約3等分するよ うに疣状1条ずつでくび る。中段に6条と2段、上段に3条 の疣状を有する。	瓶部から肩部外面にカキ目を 施した後、旋文する。内面は 回転ナギ。体部外面平行タタ キの後カキ目。内面は同心円 状で直痕を不定方向にナギ 消す。	胎土：密、2.5mm大の砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：外：青灰～默 灰、内：青灰～明青灰。 断：暗青灰～灰綠灰。	
706	長瓶壺	♂	口径 残存高 9.6 4.9	口部は上外方へ伸び、段を なし。外側に凸縁をめぐらし 内輪気味に上外方へ伸びる。 再び外側に凸縁をめぐらして 上外方へ伸び、瓶部は丸い。 凸縁の間に透状文(6条) を有する。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、燒成：堅硬。 色調：外：明青灰、内： 灰白。内面に自然釉付着。	
707	壺(体部)	♂	体部最大径 残存高 15.6 7.3	体部最大径をなす窓跡 部を有する。底部はやや平ら。	肩部から体部上部はカキ目。	胎土：やや密、1～3mm の砂粒を含む。焼成：堅 硬。色調：外：灰白、暗 オリーブ、内：青灰、斷： 明青灰。肩部外面に自然 釉付着。	
708	壺	♂	体部最大径 残存高 16.6 8.4	体部上位で最大径をなす窓跡 部を有する。底部はやや平ら。	肩部外面カキ目。底部内面は は薄付て風による疣状が残る。 他は回転ナギ。	胎土：密、1mm大の砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰、底：灰白、 断：明赤灰。外面に自然 釉付着。	
709	広口壺	♂	口径 体部最大径 残存高 15.2 19.9 18.5	口部は外寄しながら上外方 へ伸び、腰部は外厚し、丸い。 体部は上位で最大径をなす。	底部外面下部は格子状タタ キ、内面は同心円状で直痕 を残す。体部外表面からロ 繩部外面はカキ目、他は回転 ナギ。	胎土：密、1mm大の砂粒 を少量含む。焼成：堅硬。 色調：外：灰、内：灰白	
710	壺	♂	口径 体部最大径 11.0 18.9	肩部はだらかに外下方へ下 り、体部は上位で最大径をな す。外輪気味に上外方へ伸び、 瓶部が外厚して丸い口部基部を 有する。	底部外面下部は回転～ラケ マリ。体部外表面、最大径をな す位置にカキ目を施し、他は 回転ナギ。内面の部は推定不 定方向のナギ。中位には推定直 痕を残る。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：外：明青灰、 内：青灰、断：灰赤～青 灰。	
711	壺(口縁部)	♂	口径 残存高 12.5 4.7	口部は上外方へ伸び、瓶部 は下方へ肥厚し、外輪部は凹 面をなす。瓶部の中位に凸 縁を1条めぐらし、その上位に 1段8条、下段14条の透状 文を有する。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、0.5mm大の砂 粒を少量含む。焼成：堅 硬。色調：外：暗緑灰、 内：明青灰、紫灰。	
712	壺(口縁部)	♂	口径 残存高 13.2 5.5	口部は上外方へ伸び、瓶部 上方へ肥厚し、瓶部は凹 面をなす。瓶部中位に凸 縁を1条めぐらし、その上方に 波状文(9条)を有する。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、1mm大の砂粒 を少量含む。焼成：やや 軟。色調：灰白。	
713	壺(口縁部)	♂	口径 残存高 13.2 4.7	口部は上外方へ伸び、瓶部 上方へ肥厚し、瓶部は凹 面をなす。瓶部底面と口縁 部中位に各1条凸縁をめぐら し、その間に透状文(7条) を有する。	残存部は回転ナギ。	胎土：密、焼成：堅硬。 色調：外：青灰、断： 青灰、黄灰。	

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・ 焼成・ 色 調	考 察
714	甕(口縁部)	直 底 残存高 5.6	口縁部は上外方へ伸び、端部は外傾する凹面をなす。口縁部を3段分けるように各1条凸縁をめぐらし、上段2条、中段3条。下段4条の波状文を有する。	外腹面はカキ目状の優施文する。他の回転ナデ。	胎土：白、6mm大の小石を1個含む。焼成：堅焼き。色調：白：明緑灰、断面灰。自然胎付着。	
715	甕(口縁部)	口径 残存高 3.9	口縁部は外周気泡に外上方へ伸び、端部は凹面をなす。端部の下部に1条の凸縁をめぐらし、その下方に波状文(6条2段)を有する。さらにその下方には1条の波状文を有する。	残存部は回転ナデ。	胎土：白、1~3mmの砂粒を少含む。焼成：堅焼き。色調：外：灰白、内：翠灰、断：明青灰。内面に自然胎付着。	
716	甕	口径 残存高 6.2	口縁部は内窓しながら上外方へ伸び、端部は外周へ伸びて丸い。端部は内窓しながら下外方へ下る。	口縁部内外面回転ナデ。肩部外側平行タキの後回転ナデ部分的に斜め方向のハケア。	胎土：白、0.5~1mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：灰口。	
717	甕(口縁部)	口径 残存高 3.0	上外方へ伸びた後、段をなし内窓気泡にさざに上外方へ伸びる口縁部。端部は外傾する凹面をなす。段をなした位置に波状文をめぐらし、その上下にクシタビ文と波状文を有する。残存部の下段にも波状文をめぐらす。	残存部は回転ナデ。波状文はヘラによる。	胎土：白、0.5~2mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：灰~灰白。	
718	甕	口径 残存高 9.4	口縁部は外周気泡に上外方へ伸び、端部は肥厚し、外端面は回転せず、肩部は内窓しながら下外方へ伸びる。	腹部に平行タキの後回転ナデ。肩部外側平行タキの後カキ目を施す。内面は同心円状当て具模を残す。他の回転ナデ。	胎土：白、0.5~3mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：外内：青灰、胎：青灰、底灰。	
719	甕(口縁部)	口径 残存高 11.0	直線的に上外方へ伸びる口縁部。端部は肥厚し、外端面は外傾する凹面をなす。端部直下に1条の凸縁をめぐらし、その下方に深い沈縁をめぐらす。口縁部上位にヘラ捺き文を有し、その下方に波状文を2段めぐらす。	残存部の下部外腹面はカキ目。他の回転ナデ。	胎土：白、1mmの砂粒を少含む。焼成：堅焼き。色調：外：赤灰、内：明オーラーブ、断：明青灰。外面自然胎付着。	
720	甕(底部)	残存高 19.5	底部は大きく、体部は内窓しながら上外方へ伸びる。	残存部外腹面平行タキの後カキ目。内面は同心円状當て具模を残す。	胎土：白、0.5~1mmの砂粒を少含む。焼成：堅焼き。色調：底：明オーラーブ、内：明青灰。	
721	甕(口縁部)	口径 残存高 3.3	口縁部は上外方へ伸び、端部は内窓する凹面をなす。中央に1条の凸縁をめぐらし、その上段に5条、下段に13条の波状文をめぐらす。	残存部は回転ナデ。	胎土：白。焼成：堅焼き。色調：外内：明オーラーブ灰、断：赤灰。内面に自然胎付着。	
722	甕	体部最大径 9.7 残存高 7.0	口縁部は上外方へ伸び、波状文を有する。体部は上位で最大径となり、底部は丸い。体部の最大径をなす位置に内孔を1個持つ。	体部外腹面には低いカキ目。底部外腹面は体部から腹部へのナデ。他の回転ナデ。	胎土：白。焼成：堅焼き。色調：外：灰~灰白、内：青灰、断：青灰。脇部外腹面自然胎付着。底部内面に自然胎付着。	
723	甕(体部)	体部最大径 10.6 残存高 6.0	肩部に刻文文を有し、その上にヒビ縫を各1箇めぐらす。体部の最大径をなす位置に内孔を1箇持つ。	底部内面は棒状工具による压痕が残る。他の回転ナデ。	胎土：やや白、0.5~1mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：外：灰~灰白、内：明青灰、断：明青灰。内面に自然胎付着。	
724	甕(体部)	体部最大径 16.9 残存高 7.8	肩部に刻文文を有し、その上にヒビ縫を各1箇めぐらす。	残存部は回転ナデ。	胎土：やや白、1~3mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：灰。	
725	垢	口径 残存高 5.8	口縁部は上外方へ伸び、端部は丸い。口縁部下方に横「波」文を有する。底盤部に深く丸い。横の下方に波状文(4条)を有する。	底盤外腹面不定方向の手押ちラケテ。他の回転ナデ。底盤内面中央は後定方向のナデ。	胎土：やや白、1~2mmの砂粒を含む。焼成：堅焼き。色調：外：灰、内：断：明青灰。内面に自然胎付着。	

土器 番号	器 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
726	筒型器台	深 度	残存高 6.5	受部は内凹しながら上外方へ伸びる。残存部の中位に突出をめぐらす。	突起はハリッケ。残存部は斜面ナゲ。	胎土：密、1mmの大砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：灰白、灰、内：褐青灰。
727	脚部 (器台か?)	〃	残存高 12.4	下外方に下った後段をなしてさらに下る。残存部を2等分するよう、2条ずつ浅縫をめぐらし、それぞれの間に波状文(8条、2段)と三角形の透かしを4方向に有する。	外縁は斜面ナゲの後カキ目を部分的に施す。他の部分は斜面ナゲ。	胎土：密、1~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：灰白、灰、内：青灰、断：褐灰
728	把手(底)	〃	残存長 5.1	先端部の丸い角状を呈する。	手づくね。胎土を充填して底部にハリッケ。捺印痕が残る。	胎土：密、0.5~1mmの砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：灰白。

合巣出土 土器器

土器 番号	器 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
729	高杯(杯部)	上 部	口径 残存高 16.8 4.7	底盤はゆるやかに内凹し、口部は外反して上外方へ伸びる。	内面側ともヘラミガキを施す。	胎土：やや粗、1~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：棕～灰褐色。(黒斑有り)
730	器座不規則部	〃	脚径 残存高 11.8 6.8	中空で直線的に下外方へ広がる脚部。端部は丸い。脚上位3方向に円滑の透かしを有する。	外縁はタテ方向のヘラミガキを施す。下部は部分的にヨコナゲ。	胎土：やや粗、0.5~2mmの砂粒を多量に含む。焼成：堅硬。色調：棕～灰褐色。
731	高杯(脚部)	〃	脚径 残存高 12.6 7.7	柱状部は中空で、ゆるやかに下外方へ広がり、底部はまことに下外方へ屈く。端部は丸い。柱状部の下位に内形の透かしを3方向に有する。	柱状部外縁はタテ方向のヘラミガキ。内面はヘラを右回りに回転させたハラケズリ。	胎土：密、1~2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内：棕、断：灰～ぶい緑。
732	高杯(杯部)	〃	口径 残存高 16.7 4.6	上外方へ広がる杯部。端部近くでやや外反し、端部は丸い。		胎土：密、1mmの大砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：にぶい緑～にぶい黄。
733	高杯(脚部)	〃	残存高 7.4	柱状部は中空で、下外方へやや広がり、底部は屈曲してさらに広がる。	柱状部外縁タテ方向のヘラミガキの上部にヨコ方向のヘラミガキ。下部はタテ方向のヘラミガキ。内面は段り度を残し、下部はユビナサエ。基部外縁はヨコ方向のヘラミガキ。内面はヨコナゲ。	胎土：密、表面を少量含む。焼成：堅硬。色調：にぶい緑～。
734	高杯	〃	脚径 残存高 8.7 6.8	杯底部外縁は口縁部接合時の痕を残し、口縁部は上方へ広がる。脚部は比較的小さく柱状部は中空で、なだらかに下外方に広がり、底部はまことに大きく広がる。端部は丸い。	脚部内面に粒状感が残る。	胎土：密、1mmの大砂粒を少量含む。焼成：やや軟。色調：棕～にぶい緑、断：灰白。
735	小型丸底壺	〃	口径 体部最大径 器高 8.2 8.9 9.1	口縁部は直線的に上外方へ開き、脚部は自然におさまる。体部は上位で最も大きくなる圓錐形を呈する。	口縁部内外面ハケ目。体部外縁はハケ目。内面はヘラケズリの後ナゲ。	胎土：密、焼成：やや軟。色調：にぶい緑。
736	鉢	〃	口径 残存高 11.2 5.25	口縁部は内凹しながら上外方へ伸び、端部は丸い。圓錐の折れはほとんどなく、体部は内凹して下外方へ下る。	口縁部の内外面にヘラミガキ。	胎土：密、1mmの大砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：棕～にぶい緑。

上管 番号	種 類	法 量 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・熟成・色調	備 考		
737	甕(口縁部)	土 間 瓶 口径 残存高	17.0 4.5	上外方へ大きく開く二重口縁で、足折部は接をなす。口縁端部は肥厚して面をなす。	内外面ともヨコナダ。	胎土：やや粗。1～3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：浅黄～にじい黄緑。		
738	甕(口縁部)	ア	口径 残存高	10.0 4.75	口縁部は比較的長く直線的に伸び、端部近くで内反する。端部は丸い。	外腹に細かいヘラミガキが施されていたらしい。	胎土：やや粗。1～2mmの砂粒を多量に含む。焼成：堅硬。色調：内外：粗、断：淡乳。	
739	甕(口縁部)	ア	口径 残存高	14.0 7.0	上外方へ大きく開く二重口縁で、足折部は丸柱を有する。口縁端部は丸い。	内外面ともヨコナダ。	胎土：やや粗。1～3mmの砂粒を多く含む。焼成：堅硬。色調：浅黄～にじい緑。	
740	甕(口縁部)	ア	口径 残存高	14.0 7.0	上外方へやや開く二重口縁で、足折部は丸い。端部は丸い。	外腹ヨコナダ。	胎土：やや粗。1～3mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：浅黄緑。	
741	甕(口縁部)	ア	口径 残存高	12.8 6.0	口縁部はやや外反しながら上外方へ長く伸び、端部は少し肥厚して裏面をなす。	口縁部外腹ヨコ方向のハケ目 内面ハケ目とのヨコナダ。	胎土：やや粗。1～7mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にじい黄緑。	
742	甕(口縁部)	ア	口径 残存高	11.7 4.8	口縁部は一段目が内弯気味に立ち二重口縁で、足折部は丸柱を持ち、端部近くでやや瘤む。端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナダであるが、外面には櫛描文が施されていた可能性もある。肩部内面はヘラケズリ。	胎土：やや粗。0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：にじい黄緑。	
743	甕(口縁部)	ア	口径 残存高	14.2 4.0	下段は大きく上外方へ開き、上段は直立する二重口縁で、足折部は丸い。端部は肥厚して丸い。上段には櫛描きと螺旋文が見られる。	口縁部外面はヨコナダの後、櫛描き文を施す。内面はヨコナダ。肩部外腹ヨコナダ。部分的にハケ目が見られる。内面はヘラケズリ。	胎土：やや粗。1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にじい黄緑～灰黄緑。	
744	器種不明底部	ア	底径 残存高	4.2 2.5	高台状の脚を貼り付けた底部であるが、中央が僅か程度ではほぼ平らである。	底部側面から底部外腹はヨコナダ。底部外面はナゲ。内面はハケ目。	胎土：やや粗。3～6mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：にじい褐色、内：底白、断：明褐色。	外面上に底付 着
745	甕	ア	口径 残存高	14.5 5.25	口縁部は外反して上外方へ伸び、端部は内側へ昂昂する。	口縁部外腹ヨコナダ。肩部はハケ目。	胎土：やや粗。0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：周～にじい黄緑。	
746	甕	ア	口径 残存高	15.2 5.0	口縁部は外反して上外方へ開く。端部は上方へ立ち、面をなす。	口縁部内外面ともヨコナダの後、部分的にハケ目。肩部外腹はハケ目。内面はヘラケズリ。	胎土：甕、1～2mmの砂粒を少量含む。焼成：堅硬。色調：にじい褐色。	外側西壁底 胎土 外面上に底付 着
747	甕	ア	口径 残存高	14.3 4.5	口縁部は内弯気味に上外方へ開き、端部はやや肥厚して丸い。	肩部内面はヘラケズリ。	胎土：やや粗。0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：粗。	
748	甕	ア	口径 残存高	15.6 5.15	口縁部は内弯しながら上外方へ開き、端部は内弯して丸い。	口縁部内外面ハケ日の後ナゲ。肩部外腹ナゲ、内面ヘラケズリ。	胎土：甕、1～4mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にじい黄緑。	
749	甕	ア	口径 残存高	15.4 3.5	口縁部は内弯しながら上外方へ開き、端部は内弯して、浅い苦面をなす。	口縁部外面はヨコナダ。内面はヨコ方向のハケ目。肩部外腹はハケ目。内面はヘラケズリ。	胎土：甕、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：灰褐。	

土器 番号	基 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土・燒 成・色 調	備 考
750	甕	土器 残存高 16.4 8.4	口縁部は直線的に上方へ開き、端部は内厚して丸い。	口縁部外側ヨコナギ。内面ハケ日。体部外側ハケ目を一段ナゲ消し。内面は強いユビナギ。巻き上げの模様。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：外：褐、基部、内：褐、断：にぶい緑。	
751	甕	口径 残存高 11.1 6.3	口縁部は断面に膨らみを持つて上方へ開き、端部は丸い。	口縁部外側ヨコナギ、内面ヨコ方向のハケ日。頂部はハケ目をナゲ消し。内面はユビナギ。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：緑、灰白。	
752	甕	口径 残存高 13.5 8.6	底部は「く」の字形に曲折し口縁部は内面気株に上方へ伸びる。端部は内厚して丸い。	口縁部から腹部内外面ともヨコナギ。体部外側ハケ目。内面ヨコ方向のヘラケズリ。	胎土：やや粗、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にぶい緑～にぶい緑。	
753	甕(口縁部)	口径 残存高 31.4 5.3	口縁部は肥厚して上方へ伸び、端部は幾小な窪になす。肩部は張りを持たず、下外方に削る。	内面口縁部から体部、ハケ日。	胎土：やや粗、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：にぶい緑。	
754	甕(口縁部)	口径 残存高 11.6 3.45	口縁部は極く上方方に立ち、端部は丸い。	内面口縁部から体部、ハケ日。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：緑～にぶい緑。	
755	瓶	口径 体部最大径 残存高 24.0 23.6 14.3	口縁部は直線的に上方へ開き、端部は内側に隆起する。体部はゆるやかに内凹し、最も大径は口径よりも小さい。	口縁部外側ヨコナギ。内面ハケ日。体部外側ハケ目。内面上面はハケ目を残し、下部は強いユビナギ。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：にぶい緑。	
756	瓶(口縁部)	口径 残存高 19.8 4.3	口縁部にやや内凹し、端部は肥厚して幾小窪になす。	口縁部はヨコナギ。口縁部外側上面はハケ日の後ヨコナギ。以下はハケ日。内面はハケ目。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：外断：にぶい緑。内：灰黄褐。	
757	瓶	口径 基部 6.3	体部は内凹して上方方に開く。口縁部は外反し、端部は丸い。器底が比較的厚い。	口縁部外側ヨコナギ。体部から底部内面はハケ日の後、不完全方向のナギ。底部には巻上げ模様がある。	胎土：やや粗、1～6mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：緑～浅い黄緑。	
758	瓶	口径 器高 5.0	底部は立ちにくく、口縁部は内凹しながら上方へ伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。	口縁部上部は内面とヨコナギ。下部は外側ユビナギ。内面不定方向のナギ。底部には巻上げ模様がある。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：にぶい緑～赤緑。	
759	鉢	口径 残存高 16.8 6.2	底部は丸味を持つ。口縁部は内凹しながら上方へ伸び、内面は下方へ伸び、端部は外反して丸い。	内面ヨコナギ。口縁部から体部にかけて、粘土を補った痕が認められる。	胎土：密、0.5～3mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：緑～明赤緑。	
760	鉢	口径 体部最大径 残存高 10.4 10.0 3.9	小型の鋸だが比較的直線的な鋸刃。口縁部は丸く、口縁部はわずかに内凹しながら上方へ伸びる。端部は上位で最も大径となるが口径よりも小さい。	内外面ともヨコナギ。口縁部から体部にかけて、粘土を補った痕が認められる。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：緑～明赤緑。	
761	鉢	口径 体部最大径 残存高 9.8 5.0	口縁部は内面気株に上方へ伸び、端部は少し内厚して丸い。体部は張りを持たず、内凹しながら下内方に下する。	体部から底部外側斜め方向のヘラケズリ。他はヨコナギ。	胎土：密、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：緑～にぶい緑。	
762	鉢	口径 基部 8.4 5.15	小窪で崩壊を呈し、底部は丸く、口縁部はわずかに内凹しながら上方へ伸びる。端部は丸い。	口縁部近くは外側ヨコナギの後ヘラミガキ。内面ヨコナギ。以下外側ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：外：明赤緑、内：褐、断：にぶい緑。	

土器 番号	基 種	法 量 (cc)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	陶 土・燒 成・色 調	備 考
763	鉢	土器部	口径 22.0 体部最大径 19.9 残存高 7.2	口縁部は内凹しながら外方へ伸び、端部はやや肥厚して丸い。	内外面ともヨコナダ。	胎土：やや粗、0.5～5mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：浅黄褐色。
764	把手	ア	残存長 5.2	舌状を呈する。		胎土：密、0.5～1mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：暗～浅黄褐色。
765	把手	ア	残存長 4.85	先端部の方が幅の広い舌状を呈する。	胎土を補充して体部に貼り付け。全体をナデ調整。体部外面は把手跡に付けてタテ方向のハケ目。内面タテ方向のナダ。把手の基側には接着時の擦圧痕が残る。	胎土：密、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：にじみ、暗～褐色。
766	把手	ア	残存長 4.65	舌状を呈する。		胎土：やや粗、0.5～4mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：深褐色～灰白。
767	器台（杯部）	ア	口径 9.2 残存高 2.6	小型で皿状化呈する。口縁部は内凹し、端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナダ。底部外面はハラミガキ。内面は不定方向のナダ。	胎土：密、1～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：内外：暗、裡：にじみ、黄褐色。
768	器台	ア	口径 16.4 残存高 6.8	小型で圓盤状の受部は、端部がやや内側に傾いて、周縁部は直線的に外方へ伸びるが、端部は欠落している。	外面は全体に細かいヘラミガキ。内面は摩擦加工している。脚部内面には擦り痕が残る。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：内外：暗～にじみ、裡：にじみ、灰白。
769	器台（脚部）	ア	脚径 11.9 残存高 6.3	中空で直線的に下外方へ広がる脚部、脚部は丸い。脚中位4方向に円形の透かしを有する。	杯底部に埴入して接着されており、脚上部外面はタテ方向のハラミガキ。内面は細り幅がある。中間部外面はヨコタテ方向のハラミガキ。内面はヨコタテ方向のハラミガキ。下部は内外面ともヨコナダ。	胎土：密、焼成：堅硬。色調：にじみ、暗～黄褐色。
770	器台	ア	口径 16.6 残存高 4.2	受部と脚部が貫通する鼓形器台で、脚部は段として下外方開く。脚端部は鋸い。	外面はヘラミガキ。内面はヘラケツリ。	胎土：やや粗、1～3mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：にじみ、暗。
771	輪埴器		脚径 脚高 残存高 6.8 3.8 4.0	脚部は外下方へ広がり、端部は丸い。比較的基盤が厚い。	手づくね。脚部外面には擦圧痕が残る。内面はナダ。	胎土：やや粗、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：堅硬。色調：外：暗、内：灰白。

包含層出土 韓式茶土器

土器 番号	基 種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	陶 土・燒 成・色 調	備 考
772	壺（肩部）	輪式系 土器	残存高 9.3	肩部は内凹しながら下外方へ下る。	肩部外面平行タタキ。他のヨコナダ。	胎土：密、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成：やや軟。色調：外：灰褐色、裡：灰褐色。
773	器體不明瓶	ア	残存高 4.8	丸い底部。	底部外面平行タタキ。内面はヨコナダ。底部中央は不定方向のナダ。	胎土：やや粗、0.5～2mmの砂粒を多量に含む。焼成：やや軟。色調：外：暗褐色、裡：にじみ、黄褐色。

土器 番号	器 種	法 算 (ca)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
774	甕(底部)	縦式系 土器	残存高 4.3	丸い底部。	残存部外面平行タタキ。内面 底部は拙オサエ。体部はヨコ ナデ。	胎土：密、0.5～1mmの 砂粒を含む。焼成：堅緻。 色調：底、にぶい黄緑。
775	甕	#	口径 24.6 底部最大直径 25.9 高さ 19.1	口縁部は外折して上外方へ伸 び、端部は凹面をなす。体部 は上部で最大径をなす、ほぼ 球形を示す。最大径をなす 位置に1条の沈線をめぐらし、 その位置に把手を有すると想 われる。	口縁部外面ともヨコナデ。 体部から底部は平行タタキ。 底部内面はヨコナデ。底部内 面は不定方向のナデ。	胎土：密、0.5～3mmの 砂粒を含む。焼成：堅緻。 色調：にぶい黄緑。
776	甕(底部)	#	底径 16.3	平底で、中央に1箇とそれを 囲んで5箇の椭円形の小孔を 有する。	外表面とも不定方向のナデ。	胎土：密、0.5～1mmの 砂粒を含む。焼成：堅緻。 色調：外：灰赤、内：灰 にぶい黄緑。
777	把手	#	残存長 6.0	牛角状を呈する把手。貫通す る切り込みを有する。	残存部はナデ。	胎土：密、0.5～3mmの 砂粒を少量含む。焼成： 堅緻。色調：にぶい黄緑。
778	把手	#	残存長 4.9	舌状を呈する把手。	把手部分はナデ。体部の残存 部外表面に平行タタキの痕が残 る。	胎土：密、0.5～2mmの 砂粒を含む。焼成：堅緻。 色調：外：橙、内：灰白。
779	把手	#	残存長 6.05	牛角状を呈する把手。貫通す る切り込みを有する。	残存部はナデ。	胎土：密、1～4mmの砂 粒及び小石を少量含む。 焼成：堅緻。色調：外： 橙、内：明赤褐色。
780	把手	#	残存長 4.6	牛角状を呈する把手。貫通す る切り込みを有する。	残存部はナデ。体部との接合 部にはハリッケの為のキズミ 目が残る。	胎土：やや粗、1～3mmの砂 粒を多量に含む。焼成： やや緻。色調：外： 橙、内：淡黄。
781	破片	#	残存長 3.9		外表面は平行タタキ。内面はタ タキ方向のナデ。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：やや緻。 色調：外：褐、内：灰 にぶい黄緑。
782	破片	#	残存長 3.7		外表面は平行タタキ。内面はタ タキ方向のナデ。	胎土：密、1～3mmの砂 粒を含む。焼成：やや緻。 色調：外：褐、内：灰 にぶい黄緑。
783	破片	#	残存長 3.7		外表面は平行タタキ。内面はタ タキ方向のナデ。	胎土：やや密、0.5～5 mmの砂粒及び小石を含む。 焼成：堅緻。色調：外： 橙、内：灰。
784	破片	#	残存長 9.1		外表面は平行タタキ。内面はタ タキ方向のナデ。	胎土：やや粗、0.5～3 mmの砂粒を多量に含む。 焼成：堅緻。色調：外： 赤、内：灰。
785	破片	#	残存長 4.8		外表面は平行タタキ。内面はタ タキ方向のナデ。	胎土：密、0.5～2mmの砂 粒を含む。焼成：やや緻。 色調：外：褐、内：灰 にぶい黄緑。
786	破片	#	残存長 1.6		外表面は格子状タタキ。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を含む。焼成：やや緻。 色調：外：褐、内：灰 にぶい黄緑。

包含層出土 製塙土器

土器 番号	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	備 考
787	製塙土器	土 部 質 縦径 3.4 残存高 3.75	幅く下外方へ開く腹を有し、 体部は内凹しながら上外方へ 伸びる。	体部外面はユビオサエ。内面 は不定方向のナザ。腹部外面 はユビオサエ。内面ナザ。	胎土：密、1mmの大砂粒 を含む。焼成：堅成。色 調：明黄褐色～緑。	
788	製塙土器	* 口径 3.6 残存高 6.6 体部最大径 4.75	口縁部から体部はなだらかに 下外方に下り、体部はやや丸 味を持つ。口縁端部は丸い。	手づくね。指圧痕が残る。	胎土：密、1～2mmの砂 粒を少量含む。焼成：堅 成。色調：に高い緑。	
789	製塙土器	* 口径 3.5 残存高 6.5 体部最大径 5.1	口縁部から体部は下外方へ広 がり、体部は丸味を持つ。口 縁端部は丸い。底部は丸い。	手づくね。	胎土：密、0.5～2mmの 砂粒を少量含む。焼成： やや軟。色調：外：浅黄 褐色、内：明褐 灰、斷：黒褐、浅黄褐。	

第6章 遺構・遺物の科学的処理

第1節 三日市遺跡（5地区 北壁）試料

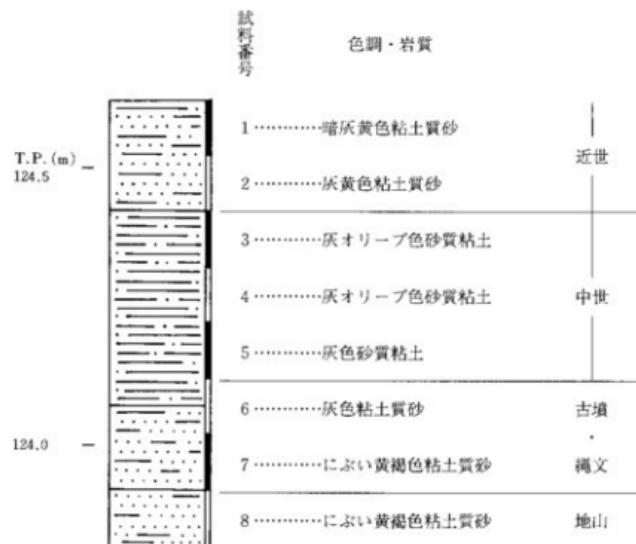
花粉分析及び珪藻分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 花粉分析

(1) 試料

試料は、三日市遺跡 第5地区 北壁より採取された（地山・縄文・古墳・中世・近世に相当する堆積物）8点である。各々の岩質は、第195図に示した。



第195図 三日市遺跡（5地区北壁）試料採取地点土層模式柱状図（1/10）

(2) 化石の抽出

花粉・胞子化石の抽出は、試料15~20 g（湿重）を秤量し、48% HF（加熱・振盪約一時間）-重液分離（ZnBr₂・比重2.15 1000rpn15分・3000rpn20分）-アセトトリシス処理（無水酢酸9に対し濃硫酸1の割合の混液、湯煎約10分）-10% KOH（湯煎約15分）の順に、物理・化学処理を行った。残渣をグリセリンゼリーで封入、検鏡した。

(3) 分析結果及び考察

固定においては、プレパラート全面を走査した。その間に出現したすべての分類群及びその個数を第7表に示した。樹木花粉が100個体を越えた試料に関しては、花粉化石群集変遷図として示した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本・胞子はそれらに樹木を加えたものを基数とし、百分率で算出した。図表において複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。

No. 3, 4 を除いては、樹木花粉は著しく少ない。しかし、総花粉・胞子数では、No. 1, 2 は多く出現したが、大半をシダ類胞子が占める。

No. 3, 4 では、アカガシ亜属・コウヤマキ属が比較的高率に出現、コナラ亜属・スギ属・モミ属・シノキ属を伴う。草本・胞子では、No. 4 ではカヤツリグサ科が、No. 3 ではイネ科が比較的高率に出現する。他に、オモダカ・コナギ・キカシグサ各属及びサンショウモを僅かながら伴う。コウヤマキ属の多産、あるいは比較的高率出現は、大阪平野のいくつかの遺跡で認められる〔山賀（その4）など〕。しかし、時代と出現傾向は一定せず、低率でほとんど変化しないものも見られる。このことは、飛来花粉というよりは、大半が河川により搬入された可能性を示唆させる。当遺跡においては同様の傾向と推定される。コウヤマキの分布は、金剛山地にあったのであろう。周囲の丘陵・山麓にはカシ・シイ各類よりなる照葉樹からなっていたものと推定される。一方、低地においては、イネ科・カヤツリグサ科とともに水生植物が出現することから、低湿地が形成されていた。試料採取地の層相変化から考えると、河川の影響を受けやすい後背湿地に位置していたものと推定される。しかし、低湿地の発達規模は十分でない。安定した後背地や低湿地の堆積物であれば、一般的にもっと多くの花粉化石が検出されてもよいはずである。2の珪藻分析結果でも、同様のことがいえる。

引用文献

- ・パリノ・サーヴェイ 1983 「山賀遺跡（その4）試料 花粉分析報告」『山賀（その4）、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪文化財センター

2. 硅藻分析

(1) 試料

珪藻分析試料は8点で、花粉分析と同一試料を2分したものである。試料については第195図を参照されたい。

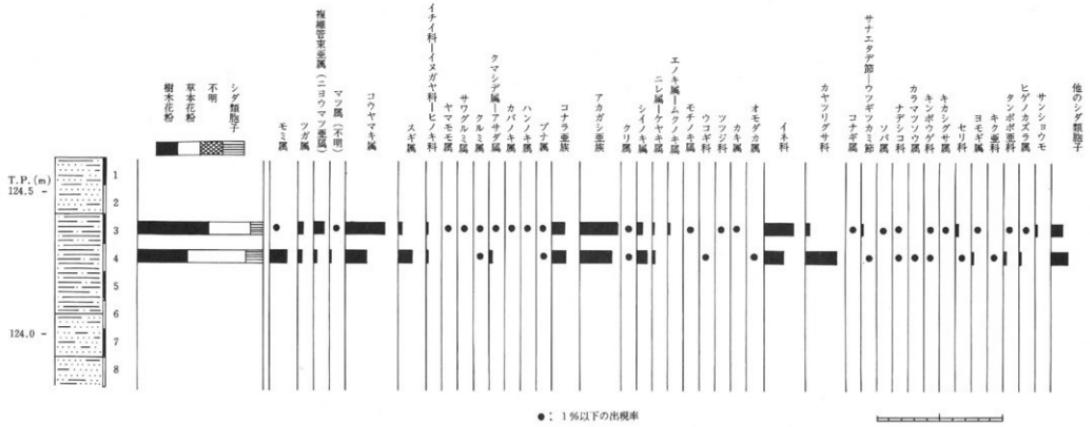
(2) 分析方法

珪藻化石の抽出は、以下に示す方法で行った。

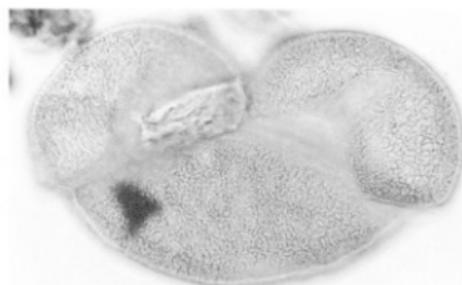
1) 試料の秤量 (500ccのトルビーカ使用)

①岩質により秤り取る量を変える（泥炭1~2g:シルト、粘土7~10g:砂、砂質シルト、細砂15~30g）。当遺跡では、15g秤量した。

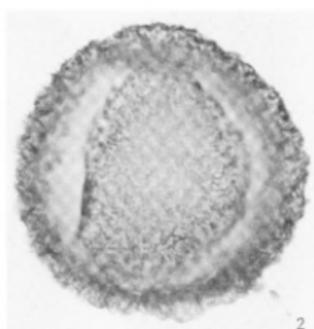
2) 過酸化水素水 (H_2O_2) 濾理（効果：試料の泥化、有機物の分解と漂白）



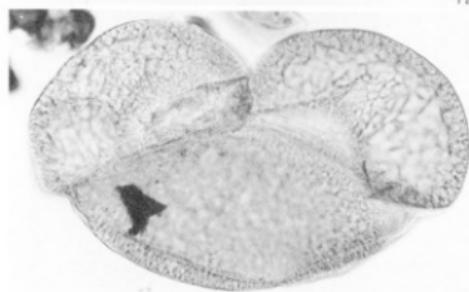
第196図 三日市遺跡における花粉化石群集変遷



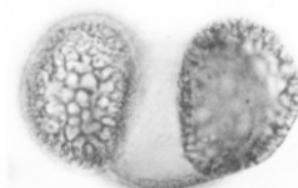
1a



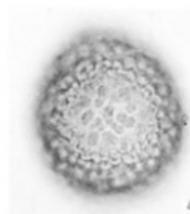
2



1b



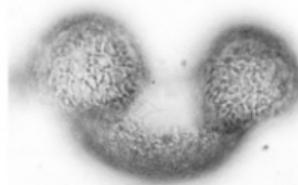
3a



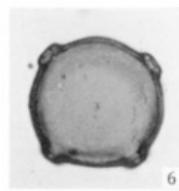
4



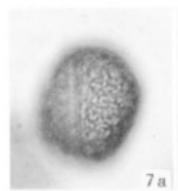
5



3b



6



7a



7b

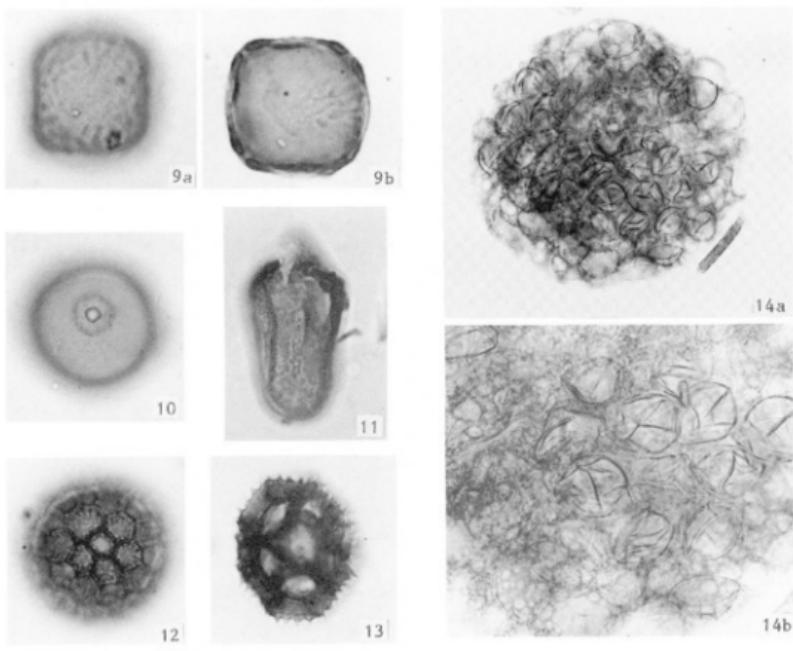


8a



8b

第197図 花粉・孢子化石顕微鏡写真（1）



50 μ
14 a

50 μ
1 a, 1 b, 14 b

50 μ
その他

〔図版説明〕

写真番号	花粉・胞子名	試料番号	写真番号	花粉・胞子名	試料番号
1 a b	モミ属	4	8 a b	アカガシ亞属	3
2	ツガ属	3	9 a b	ケヤキ属	3
3 a b	複縫管束亞属	3	10	イネ科	4
4	コウヤマキ属	3	11	カヤツリグサ科	4
5	スギ属	4	12	サンエタデ属—ウナギカツミ属	3
6	クマシデ属—アサダ属	3	13	タンボボ亞科	5
7 a b	コナラ亞属	3	14 a b	サンショウモ	3

第198図 花粉・胞子化石顕微鏡写真 (2)

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
モミ属	—	—	2	32	—	2	—	1
ツガ属	—	—	10	7	—	1	—	—
復葉管束亞属(ニヨウマツ亞属)	4	1	20	4	—	1	—	—
ツツ属(不明)	2	1	2	3	—	—	—	—
コウヤマキ属	14	4	73	88	4	—	1	2
スギ属	1	5	7	25	—	1	—	6
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	—	—	3	3	—	—	1	1
ヤマモモ属	—	—	1	—	—	—	—	—
サワグルミ属	—	—	1	—	—	—	—	—
クリミ属	—	—	1	1	—	—	—	—
クマシデ属-アサダ属	—	—	2	4	—	—	—	—
カバノキ属	—	—	2	—	—	1	—	—
ハンノキ属	1	—	2	—	—	—	—	—
ブナ属	—	—	2	1	—	—	—	—
コナラ属	3	1	24	25	1	—	—	4
アカガシ属	5	4	75	55	—	2	1	7
クリ属	—	—	1	1	—	—	—	—
シイノキ属	2	—	9	17	1	—	—	1
ニレ属-ケヤキ属	—	—	3	4	1	—	—	—
エノキ属-ムクノキ属	—	—	3	—	—	—	—	—
モチノキ属	—	—	1	—	—	—	—	—
グミ属	1	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ属	—	—	—	1	—	—	—	—
ツツジ科	—	—	—	1	—	—	—	—
カキ属	—	—	—	—	—	—	—	—
ハイノキ属	1	—	—	—	—	—	—	—
オモダカ属	—	—	—	2	—	—	—	—
イネ科	30	6	101	84	2	7	—	3
カヤツリグサ科	—	1	14	186	2	3	1	2
コナギ属	—	—	1	—	—	—	—	—
サンエタデ節-ウナギツカミ節	2	2	5	3	—	—	—	—
ソバ属	2	2	3	—	—	—	—	—
ナデシコ科	1	—	3	2	—	—	—	2
カラマツソウ属	—	—	—	1	—	—	—	—
キンポウゲ科	—	—	2	2	—	—	—	—
アブラナ科	3	2	—	—	2	—	—	1
キカシゲサ属	—	—	1	—	—	—	—	—
セリ科	2	—	11	3	—	—	—	—
ヨモギ属	2	—	2	7	2	1	—	—
キク亞科	2	2	—	5	—	—	—	—
タンボボ亞科	3	2	2	10	1	1	—	—
不明花粉	2	2	2	2	—	1	—	2
ヒカゲノカズラ属	4	9	1	7	5	—	2	2
サンショウモ	1	—	6	—	—	1	—	—
他のシダ類胞子	453	188	33	70	64	13	13	25
Pseudoschizaea	2	—	—	—	—	—	—	—
樹木花粉	34	16	251	221	7	8	3	22
草木花粉	47	17	145	255	9	12	1	8
不明花粉	2	2	2	2	0	1	0	2
シダ類胞子	458	197	45	77	69	14	15	27
細花粉・胞子	541	282	448	555	85	35	19	59

第9表 三日市遺跡試料花粉分析結果

①試料が漫る程度に蒸留水を加えてから28% H_2O_2 溶液を10cc加え、ホットプレート上で加熱処理する。

②反応が止まつたら再度28% H_2O_2 溶液を10cc加え①と同様に処理する。

③試料が灰白色になつたら処理を中止する。

3) 粘土分の除去

① H_2O_2 処理済み試料に蒸留水を加え全量を500ccにする。そのまま7時間以上放置し、粘土分と珪藻殻からを含む砂分とを分離する。

②放置後、真空ポンプで上澄み液を取り粘土分を除去する。

③分散剤（ピロリン酸ナトリウム）を加え、①、②の操作を上澄み液が透明になるまで繰り返す。

4) L字形管分離（効果：細砂分と珪藻殻とを分離し珪藻殻の濃縮を行う）

①蒸留水を約7～8割満たしたL字形管の中に水洗を終了した試料をあける。そのまま1～2分放置した後、底部に沈澱した砂をピンチコックをあけて流し去る（砂の多い試料に限る）。

②懸濁液をビーカに約半分流し込む。そのまま2分間放置し、上澄みだけをL字形管にもどす。ビーカの底に残った砂は捨てる。

③②の操作を4～5回繰り返し、細砂分を除去する。

5) 敷布

①検鏡し易い濃度に希釈した懸濁液をピベットで0.5cc測り取り、18×18m/mのカバーガラス上に静かに滴下する。そのまま自然乾燥するまで放置する（パラフィン伸展器を用いて対流の起こらない温度40～50°Cで乾燥しても良い）。1試料につき2～3枚のプレパラートを作製する。

6) 封入

①乾燥したカバーガラス上にプリュウラックス1滴を滴下し、パラフィン伸展器で加熱し、溶剤のエタノールをとぼす。

②スライドガラスに貼りつけ、ホットプレート上で加熱しながら完全にエタノールをとぼし、気泡が残らないように爪楊枝などを用いてカバーガラス全体を押しつけ、永久プレパラートを作製する。

7) 検鏡

①珪藻殻の算定は、メカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ任意に出現する。珪藻200個体以上になるまで行う（尚、珪藻の非常に少ない試料はこの限りでない）。

②半分以上破損したものや溶解したものは1個体として数えなかった。また、細長い針状形の珪藻は先端が2個体検出された時、1個体として数えた。また、ハイフォンで結んだ分類群は双方の区別が明確でないものである。

（3）分析結果

第10表 珪藻の区分・適応性・環境

区 分	適 応 性	地 带	地 帶 (例)
強塗壁種 (Polyvalloous)	地分濃度 40,000 倍 / 1 以上に出現するもの	低鹽度熱帶海域、塩水湖	一般海城 (ex 大陸棚及び大陸以東の浅海・深海)
貧塗壁種 (Euhalobous)	海塩度、地分濃度 30,000 倍 / 1 ~ 40,000 倍 / 1 に出現するもの	一般海城	
中塗壁種 (Mesohalobous)	内水塩度 : 地分濃度 500 倍 / 1 ~ 30,000 倍 / 1 に出現するもの	河口・内湾、沿岸、塩水湖、潟	
貧塗壁種 (Oligohalobous)	淡水地 : 地分濃度 500 倍 / 1 以下に出現するもの	一般後水城 (ex 潮沼・池沼・沼・河川・川・沿岸地・塩場) 貧塗壁 - 不定性種 (Indifferent) 注 2 貧塗壁 - 増塗壁性種 (Halophytous) 注 1 (ハイドロケ種) 注 8 (Phanophytous) 注 8	一般後水城 (ex 潮沼・池沼・沼・河川・川・沿岸地・塩場) 一般淡水
淡水塗壁種 (Euryhalobous) (Euryalimous)	低鹽度から高鹽度まで広い範囲の地分濃度に適応して出現する種類		
pH に対する 適応性	対応性種 (Acidobiotic) 好酸性種 (Acidophilous) pH - 不定性種 (Indifferent) 好アルカリ性種 (Alkaliphilous) 真アルカリ性種 (Alkalibiotic) 真淡水種 (Limnohalotrophic) 好止水性種 (Limophilous) 淡水不定性種 (Indifferent) 好流水性種 (Rhizophilous) 真流水性種 (Rheobiontic) 好気性種 (Aerophilous species)	pH. 7 以下に出現、pH. 5.5 以下で最もよく生育するもの pH. 7 付近に出現、pH. 7.0 以下で最もよく生育するもの pH. 7 付近で最もよく生育するもの pH. 7 付近に出現、pH. 7.0 以上で最もよく生育するもの アルカリ性水城にのみ出現するもの 止水にのみ出現するもの 止水に特徴的であるが、淡水にも出現するもの 止水にも淡水にも普通に出現するもの 淡水に特徴的であるが、止水にも出現するもの 淡水城にのみ出現するもの 好気的種 (Aeriahalobionta)	海岸・港域・河口部 (酸性水) 海岸・港域・沿岸地 一般海水 (ex 潮沼・池沼・河川) アルカリ性水城 (少ない) 流入水のない潮沼・池沼 潮沼・池沼・流れの緩やかな川 河川・川・潮沼・露沼 河川・川・小川・上流域 河川・川・流れの速い川・河川・上流域 ○ 土壌表面、○ 植物や根木上のコケに付着、 ○ コケに付着、○ 大根元の表面に付着、○ 流れたる土に付着、 ○ 濱の表面に付着、○ 濱の根株で固めたコケに付着、 ○ 岩石表面に生えたコケに付着など 注 1) 少量の場合はある方がよく生育するもの、これによく育てるもの、注 3) 少量の場合は多く育てるもの、注 8) 少量の場合はほとんどないもの 注 2) 少量の場合はあるものであるもの、注 3) 少量の場合は多く育てるもの、注 8) 少量の場合はほとんどないもの 注 4) 分区、適応性は田中・吉田・中嶋、1977 年刊地学雑誌に掲載 注 5) P. 114 ~ 185 を基に一部削除、環境については加筆して作成した)

各試料とも珪藻の含有が極めて少なく、古環境について解析することは困難であった。

同試料の花粉分析結果では、オモダカ・コナギ・キカシグサ各属、サンショウウオなどの水生植物がNo. 6以浅で検出されており、湿地的環境が推定できるが、珪藻分析からはそのような水域環境が不明である。このことは、今回の試料採取地においての堆積状況に原因があると思われる。十分な湿地が発達していれば、種類、量とも多くの化石が検出されるが、当地点はそのような環境ではなかった。全体的に、砂分の多い試料であることなども考え合わせれば、各時代、各々短時間に堆積したとも考えられる。

試料採取地点付近には、今回の分析結果からさらに良好な湿地堆積物の存在が考えられるので、今後はそのような場所を選択し分析されれば、堆積環境もより推定できると思われる。

Species Name	Ecology			1	2	3	4	5	6	7	8
	H.R.	pH	C.R.								
	Oph-unk	unk	unk								
<i>Cocconeis</i> sp.				-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Disioneis</i> sp.				-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Nucula</i> sp.				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>pouzolzii</i> (Grun.) Cleve				1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> sp.				-	-	-	-	-	1	-	-
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				1	0	1	1	1	1	0	0
Total Number of Diatoms				1	0	1	1	1	1	0	0

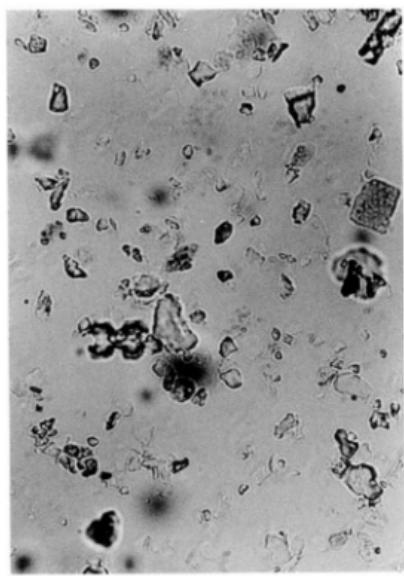
Legend

H.R : Halobiont rate	pH : potential of Hydrogen	C.R.: Current rate
Oph-hil : Oligohalobiont halophilous forms	ac-bi : Acidobiontic forms	t-bi : Limebiontic forms
Oph-ind : Oligohalobiont indifferent forms	ac-it : Acidophilous forms	t-ph : Limophilous forms
Oph-hb : Oligohalobiont halophilous forms	it-bi : Indifferent forms	Ind : Indifferent forms
Oph-unk : Oligohalobiont unknown	al-bi : Alkalibiont forms	r-bl : Rheobiontic forms
	al-it : Alkaliphilous forms	r-ph : Rheophilous forms
	unk : Unknown	unk : Unknown

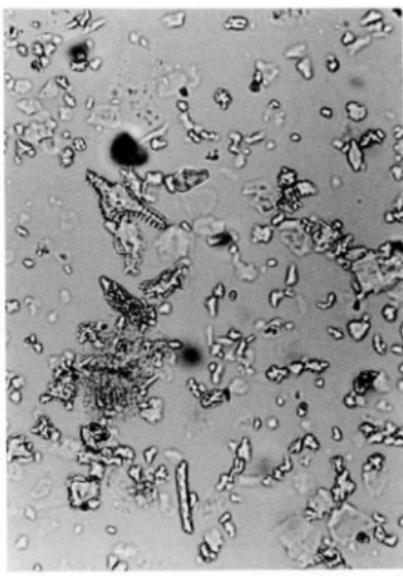
第11表 三日市遺跡試料珪藻分析結果

〔図版説明〕

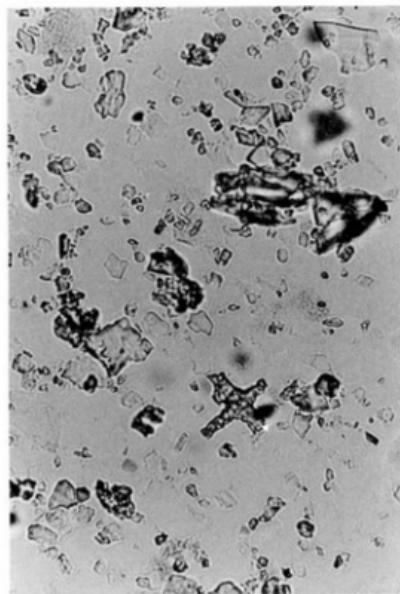
写真番号	試料番号	写真番号	試料番号
1	1	5	5
2	2	6	6
3	3	7	7
4	4	8	8



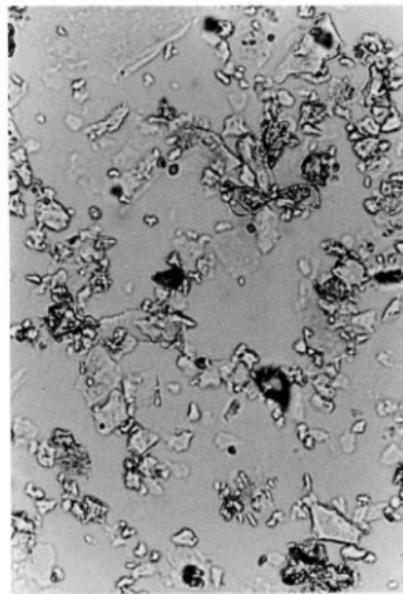
1



2

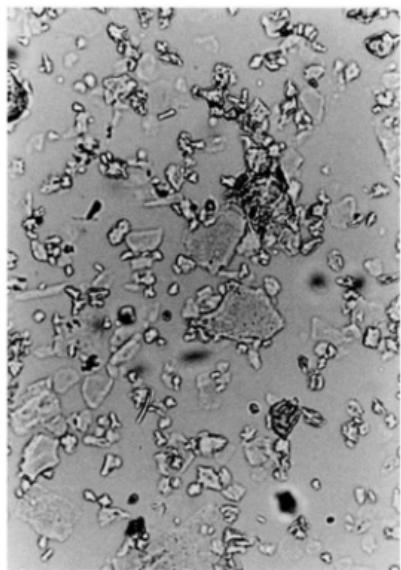
10 μ 

3

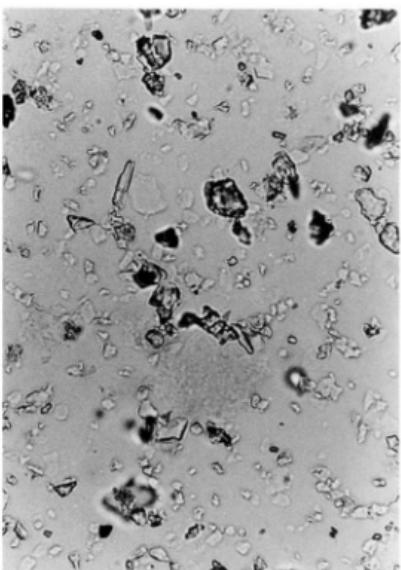


4

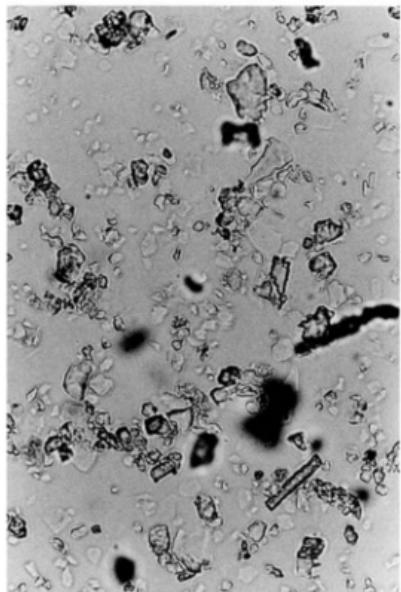
第199図 硅藻化石状況顕微鏡写真 (1)



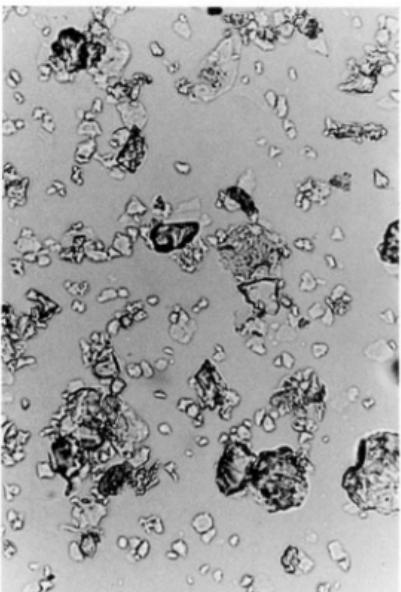
5



6

10 μ 

7



8

第200図 硅藻化石状況顕微鏡写真（2）

第2節 三日試料遺跡出土堅穴住居跡の保存処理について

京都科学標本株式会社

1.はじめに

三日試料遺跡における弥生時代中期の円型堅穴住居跡は、貴重な類例であるため、教育普及と学術資料蓄積との双方の目的をもって、立体記録保存作業を行うよう委託された。

2.方法

本件の技術的特徴は、本社で長年にわたる複製品製作の実績を生かして、立体面の遺構・土層面のはぎとりを行い、これを実物通りの形に再現する“はぎとり複製法”ともいべき資料保存の方法を行った。

3.作業順位

今回の堅穴住居跡は、立体記録保存を行うための形状・土質等の条件がはぎとりに適したものであり、調査担当者の指導のもとに仕様検討の結果、下記の方法を採用した。

(1)型取り

三日市堅穴住居跡の土質は小礫の多いシルト層であるため、平均的な厚みでのはぎとりが可能である。

まず遺構面を少し乾燥させて細かいクラックを発生させ、型取り用シリコンゴムとはぎとり面である表土とのかみ合わせをよくした後、型取り用シリコンゴムを塗布した。シリコンゴムの硬化後、形を保つための外型としてポリエチレン(FRP)製の型を作り、相対的レベルを測量した。更に木枠で強化した。

シリコンゴム型・外型ともはぎとり易く、かつ成形・運搬の合理性を考慮して、18ブロックに分割出来るように細工した。

(2)はぎとり(脱型)

木枠・外型をはずしたのち、シリコンゴムを少しづつめくり、かみ合わせではぎとった土がシリコンゴムからはずれないよう注意して外型に納めた。これにアクリル樹脂エマルジョンを塗布して土層を安定させた。

(3)成形

水平面で型を組合わせて、ポリエチレン樹脂を塗り、ガラス繊維積層し、硬化後更に鋼枠を取り付け全体の強度を出した。

成果品の仕上がり具合と作業上の効率から最も適した4分割にて成形した。

(4)型をはずし

成形したものを型共に反転したのち、木枠・外型・シリコンゴムの順に型をはずした。

シリコンゴムははぎとった土壤がこまかくかみ合っており、喰い込みが強く破れた個所もあったが、ほぼ全面に5~10mmの厚さのはぎとりが出来た。

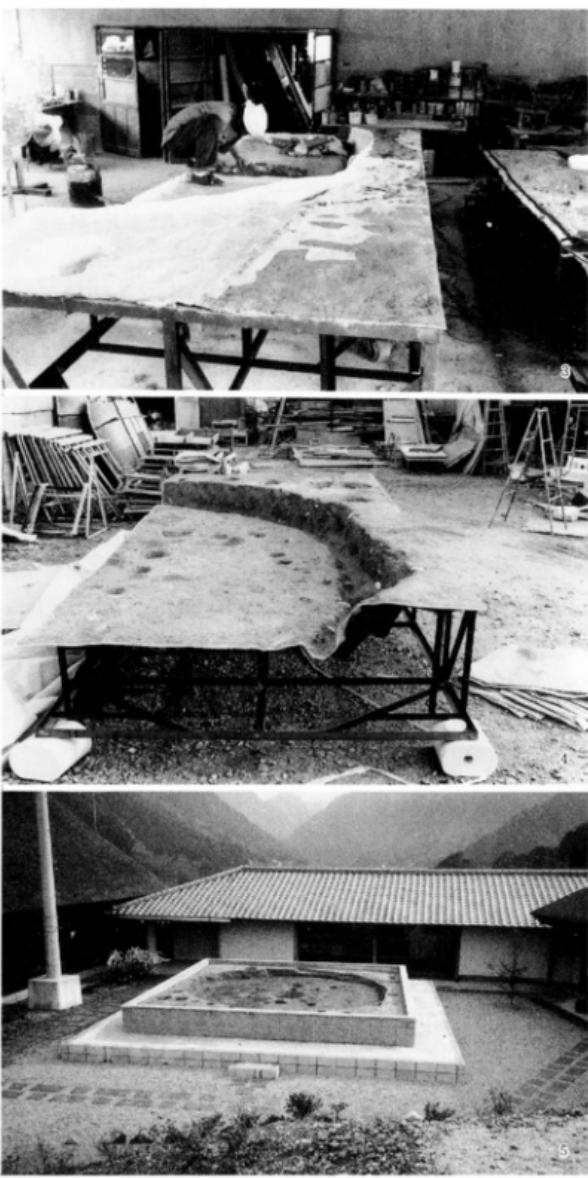
(5) 仕上げ及び据付け

4分割した成形品を仮接合して、接合部の仕上げを行った。更に発掘された状態に再現された成形品の表面からアクリル樹脂を塗布してはぎとった土がはずれないよう強化した。

据付けは、河内長野市立淹畠歴史民俗資料館の中庭で行った。



第201図 模型製作作業風景 (1)



第202図 模型製作作業風景（2）

第3節 三日市遺跡出土の金属器の保存処理

西山要一

1. 出土鉄器の腐蝕と保存

三日市遺跡の古墳より出土した金属器約50点（鉄劍・鉄鎌・鉄製紋具・鉄製轡・鉄地金銅裝杏葉破片等）の保存処理を行ったので報告する。

鉄は自然界において、磁鐵鉱・褐鐵鉱・砂鉄などの酸化鉄、すなわち錆びた鉄として存在する。人類はこれを採集し、木炭を使って酸素を取り除いて（還元）鉄素材とし、鉄器を製造した。鉄は種々の金属のなかでも不安定な金属で、常に酸素と結びついて酸化、すなわち錆びようとする。人類は鉄を発見し、鉄器を発明するという偉大な業績をあげると同時に錆との闘いを始めなければならなかった。

古墳時代の鉄器も、また、例外ではない。手入れの行き届いた錆の一点もない刀や刀子も、古墳や住居跡などの土中に埋められるやいなや表面より錆び始め、しだいに鉄器内部へと進みつつ、膨張したり亀裂を入れたりした変形させ、溶け出した鉄錆は周囲の土や砂を巻きこんで大きな鉄錆の塊りとなっていく。

鉄錆の塊りとなって発見される鉄器を文化財として保存活用するには、解決すべき3つの問題点が存在する。一は、内部まで錆が進み脆弱となった鉄器を強化すること、二は土中から大気中に取り出されると同時に再び錆び始める鉄器は、放置すると粉状に損壊して価値を失うため防錆の処理を構じること、三は変形や切損した鉄錆の塊りを、可能な限り原形にもどすことである。

2. X線写真の撮影

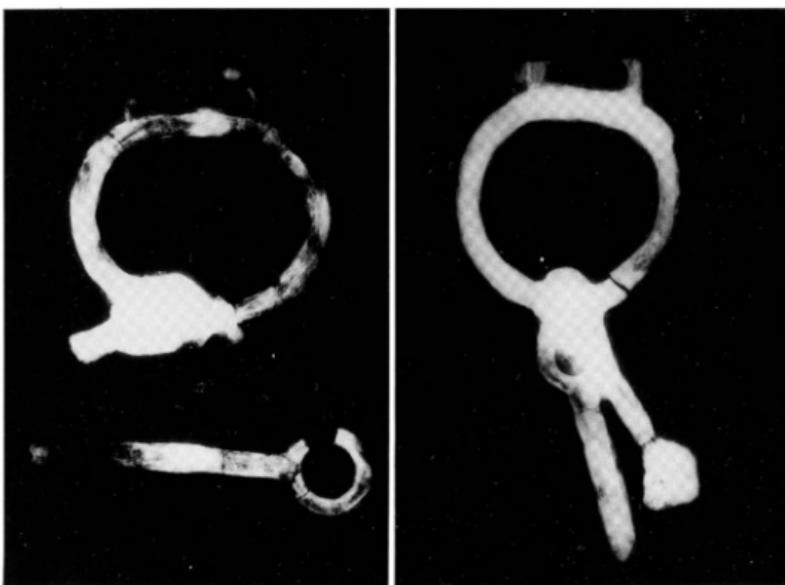
たとえ学術研究のためとはいっても、文化財を破壊した内部を調査することはできない。そこで非破壊で文化財の形や内部構造、製作技法を知るためにX線写真を撮影する。佛像を対象としたX線写真撮影は半世紀も以前から行われているが、出土文化財については、ようやく10数年前に始めたばかりである。

本遺跡出土の金属器の場合、錆化の程度、膨張や亀裂による損壊の状況、錆の下に隠された原形などを知るためにX線写真を撮影した。

出土時の轡は、鉄錆と土の大きな塊りとなっていた。X線フィルムには、円環状の鏡板と長方形の立聞き、二連式の衝、鏡板に連結する衝両端の環に引手の環を連結していること等の様子が鮮明に写し出されている。また、鏡板の環の一部に金属鉄が残るもの、全体に鉄錆と化し、内部が空洞になっていたり、破断や亀裂がいたるところに生じていることも判る（写真1）。

鉄劍の目釘穴や関部の形、鉄鎌の茎元の凸起などの形態・構造や、錆化に伴う亀裂・破断、クレーター状の内部空洞の錆など腐蝕状況もX線フィルムに余すところなく映し出されていた。

3. 保存処理



第203図 唐X線写真

保存処理を実施するにあたり、前記のように、脆弱になった金属器を強化すること（強化処理）、金属器の錆の再発・進行を防止すること（防錆処理）、錆の再発の原因の1つである金属器内に浸透している塩素を除くこと（脱塩処理）、不要な錆を削除したり切損部を接合し、可能な限り原形に復すること（整形・復原）に重点をおき、永久的保存と活用を可能とする保存処理をめざした。

保存処理は次の工程・方法・材料により実施した。

(1) 現状調査

写真撮影、実測図作成、錆の原因・形などの保存科学的観察を行い現状を把握するとともに保存処理実施の方針を決定した。

(2) 脱塩

水酸化リチウムの1%水溶液に浸漬して3週間（1週間ごとに溶液交換）行った。この間、2日に1度の目視によって、新たな錆の発生・進行のないことを確認した。

(3) 洗浄・乾燥

脱塩終了後、アルコールで洗浄、さらに有機溶剤洗浄後（アルコール・キシレン・酢酸エチルの混合液）で表面付着の土砂を洗浄し、風乾ののち、防爆形乾燥器を使って摂氏105度で充分に乾燥した。

(4) 樹脂含浸

樹脂含浸装置に金属器を装置密閉し、減圧状態を2時間保って後、アクリル系合成樹脂を流入し一夜これに浸漬した。風乾ののち再び防爆形乾燥器で摂氏80度で一昼夜乾燥した。樹脂含浸することによって金属器は強化・防錆される。樹脂含浸は3度繰り返し行った。

(5) 銹落し

金属器の錆化が進んで膨張変形した部分や、土・砂をまき込んで錆の塊りとなった部分など、金属器の原形を損なっている錆を、注意深く、ニッパー・ナイフ・精密加工グラインダー・エアー・ブラシ等を使って除去した。

(6) 接着復原

破損部分、破損小片を絶て検討し、連続するものと確認できた部分についてのみエポキシ系接着剤を使って接合した。

(7) 樹脂塗布

金属器表面にアクリル系合成樹脂を塗布し、皮膜を形成した。大気中の水分が付着した錆が発生するのを防ぐためである。

以上の保存処理によって、脆弱であった鉄器は充分に強化・防錆されるとともに、適度の錆落しと接合によって、ほぼ原形を蘇うことの出来る状態となった。特に轡各部の組合せ部分、鉄鎌の茎基部の凸起などの細部を鮮明にすることができた。

4. 保管と活用

しかし、鉄器の保存はこれで完璧とはいえない。保存処理後の管理中の温度・湿度の変化、紫外線の影響などによって合成樹脂に劣化が生じたり、取扱い上の不手際により破損した場合、その個所から再び錆化が進み、鉄器を粉砕するおそれがある。保存処理完了後であっても、乾燥した・温度の一定した・直射日光の照射しない環境に保存し、取扱いには布手袋をするなど細かい心使いを必要とする。

鉄器の保存は土中より発見されると同時に始まり、保存処理を経て後もなお、形ある限り注意を怠ることのないよう、保存科学研究に携わる者として心懸けるとともに、考古学者・博物館学芸員の方々など鉄器保管・展示・研究に携わる方々にも配慮いただけるようお願いしたい。

第7章 まとめ

第1節 遺跡の変遷

1. 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺構は確認されなかったが、サヌカイトの石核・剣片・ナイフ型石器・尖頭器が石見川北側（中位段丘）の丘陵から採集されている。

縄文時代の中・後期の遺構と早期からの土器の大部分は、石見川の南岸5地区から検出されている。中期・後期とも土壤のみで、住居等は確認されなかった。しかし、中期後半のS-K70の北白川C式の深鉢の出土状況から土壤墓の可能性があり、近接して住居域の存在する事は間違いないだろう。

このことは、縄文時代の遺構・遺物の集中する石見川の北岸の低位段丘の環境が、前面に天見川とそれによって開かれた谷、そして周囲には左右、後背には丘陵といった狩猟採集社会における良好な条件であったことから推測される。

2. 弥生時代

中期の堅穴住居が2棟検出されたが、その位置は地区の調査区の北端部分であり、この時期の集落は北側の調査区外に広がるものと思われる。しかし、地形的立地とS-I-1・2との配置間隔を考えた場合、住居の数は余り増えないものと考えられる。3～5棟位の集団の居住域かも知れない。

後期の遺構は溝と土壤のみで、土器などの遺物も少なく、生活領域内といえるかどうか疑問である。中期の状況も踏まえ弥生時代における三日市遺跡は密度の低い状況である。このことが、石川の最上流部の弥生時代の状況を示すものかは判断しがたい。ただ、中期以降における集落の増大が、石川の最上流部まで及んでいることは間違いない。

3. 古墳時代

古墳時代は大きくI～III期に分けることができる。I期は須恵器出現までとし、布留式土器の2式（古）、II期は陶邑編年のI-5まで、III期は陶邑編年のII-6までと考える。

（1）古墳時代I

この時期の以降は、住居が5地区で土壤墓が4地区で検出されている。

検出された遺構は堅穴住居6棟であった。住居の配列は調査区の南端に、南側を中心に扇形をなしている。これらの住居から出土する土師器は、布留式土器の2式（古）までのものである。住居間の時期差については明瞭でない。しかしS-I-7・8の切りあいを見るかぎり、全て6棟同時平行ではない。6棟の中で出土遺物において特徴的な住居はなかった。しかし、規模の上からでは、S-I-8が6m弱でS-I-7が5mあり、他の住居が4mを越えないことから考えれば、大型



第204図 遺構変遷図(1)



第205図 遺構変遷図(2)

編文系生		古墳時代			
		I	II	III	不明
SB					11・12
SD	29-60-22			35・36 40・41	
SI	1・2	3～8	9～16	17～19	
SK	79-72-7B	100	58-69-71-101	1-96-106 106-109-115 119-148	69・74 107-144
SR		4		1-2-3	5
SS				1・2	3・4
ST			1-6-7	2-8-4-5-8	
SX					1
SY				1-2-3	
NV	2				

第12表 遺構時期別分布表

で特徴的なものである。

土壙墓は石見川南側の丘陵から、複合口縁をもつ大型の壺と小型丸底壺が出土した S R 4 がある。しかし、1基だけというのも不自然であり、近接して土器は出土しなかったが鉄劍の出土した S R 5 も同時期の可能性がある。

(2) 古墳時代II

この時期の遺構は、5地区から住居と8棟、掘立柱建物2棟、土壙4基が検出されている。また、2地区・4地区から古墳3基と土壙1基が検出されている。

〔5地区の状況〕 5地区的住居群の検出された配列を見ると逆L型になり、S B 11・12付近には竪穴住居のない空間が存在する。これらの住居から出土する須恵器は、大部分がI-3・4の特徴をもつものである。出土須恵器の時期については、集落という消費側でのものであり、遺構によってはI-3やI-4の傾向を示すものがそれぞれの時期に混在している。

これらの住居を出土遺物等によってグルーピングすると次のようになる。

<A> S I 9・10・12・13・16・S K63・101

住居のうちS I 9・10は他に比べ一辺が6m弱を計り大型である。またS I 9には、南辺から甕状遺構が検出され、韓式系土器が出土している。韓式系土器は、他にもS I 12・13からも出土し、S I 13は須恵器も多量に出土している。出土須恵器はI-3傾向を示している。



第206図 5地区 住居配置図

< B > S I 11・14・15・S B 11・S K 58

S I 15が6m弱で大型の住居であり、住居内北側から竈状遺構が検出されている。また、この住居からは多くの遺物が出土し、韓式系土器も出土している。このグループは大小の住居と掘立柱建物の倉庫と土壤という一のセット関係を代表するようである。須恵器はI-4の傾向を示している。

上記のように須恵器から2グループに分けたが、個々の住居の出土遺物の差やAグループの細分化可能かどうか今後の検討を要する。

〔石見川南岸丘陵の状況について〕 古墳が3基検出されている。いずれも丘陵の西端からである。特に、S T 1は、前述の住居群を見下ろす位置にあり、出土土器からも同時期のものである。S T 6・7もほぼ同時期のものである。しかし、S T 1と6・7とは距離的には離れており、S

T 1は2・3とS T 6・7は4・5とそれぞれ考えなければならないグループである。

(3) 古墳時代III

この時期の遺構は、石見川南岸丘陵から検出されている。堅穴住居が3棟、土壙38基、溝6条、土壙墓3基、堅穴系小石室墓2基、古墳5基、窓状遺構3基、その他1が丘陵の西端に南北に分布している。

これらの遺構を出土遺物から見ると、大きく2グループに分けることができる。

〔A 出土須恵器が陶邑編年II-2~3に該当するもの。〕 古墳ではS T 2・5、土壙墓のS R 1・2、堅穴系小石室墓ではS S 2がこの時期にあたる。全て墳墓である。S S 2を除くと全て丘陵の西端に分布している。

〔B 出土須恵器がII-4~5〕 一番遺構の集中する時期である。古墳ではS T 3・4・8、S R 3、S K 1・3・105・106・108~115・118~143、S Y 17~19である。古墳の分布を除くとS I 17を中心に遺構が集中している。

古墳ではS T 3に唯一埴輪が集中し、S T 8は横穴式石室を有していたようである。住居は3当ともに竪状遺構が付設されており、またS I 18・19は切りあい関係を示しS I 19が新しい。しかし、出土遺物では時期差は認められない。さらにS T 17からは鉄鎌が出土し興味を引く。土壙ではS K 113・114に土器が集中しており、住居との関連が注目される。窓状遺構のS Y 1はこれらを見下ろす中位段丘上段に位置している。大形の長方形の炭窯が単独で存在することも類例がなく、周辺に関連する遺構を求めたが検出されなかった。

この時期の遺構の特徴は、住居と土壙の関係が、住居を中心に関連して土壙が分布している。特に、S K 113~115の土器の集中は、特別の意味をもつものであろうか。

また、S Y 2・3については、その埋土下層に古墳時代以降の土器を含んでいない。この結果をもとに、古墳時代の可能性を持っているということで今回の報告に記載した。しかし、平面形態から見れば、他の類例と比較して、平安時代以降の可能性もあることを記しておきたい。

以上、簡単に変遷を見てきたが古墳時代は群集墳が増加する時期に合わせるように、古墳時代IIIに遺構が増加しているのが特徴的である。

第13表 土師器・須恵器時期別分布表

第2節 古墳時代墳墓の変遷

三日市遺跡で検出された古墳・土塙墓・竪穴系小石室という墳墓の分布を、もう一度ミクロ的に観察してみたい。

1. 立地

今回検出された墳墓の分布する立地を見てみたい。大きく見れば、石見川の南岸にあたる中位段丘の下段端に分布している。この中位段丘は、東に入り込む2本の小さな谷によって北、中央、南の3小地域に分割できる。

墳墓は、天見川を見下ろす西端に分布している。現在南海高野線がこの西端を南北にはしっているが、この線路と古墳の分布する位置とは、約10mの段丘崖となっている。

2. 変遷

(1) 北側第1群

まず、北側を見ると円墳であるST1・2、形態不明のST3が目を引く。これらの古墳がST1→ST2→ST3の順に築造されている。これにあわせて、ST2の時期にSS1が、ST3の築造前後にSR1・2が造られている。

土器の出土しなかったSS1はST2との関係から時期を決めた。また、ST3は出土した埴輪の中に、いわゆる須恵質のものつ、そして、円筒埴輪の中にタガの最下段に断続ナデ技法が見られるものがある。このことから、川西編年の第V期でも後半に相当するものと理解した。

またこの一群、特に、ST1の北側には、ST1と余り時期の差ない5地区で検出されたムラが存在し、密接な関係を持っているものと考えられる。

(2) 中央部第2群

墳墓の分布がわずかST8のみである。しかし、ST8の北側60mに位置するSK36は土塙であるが形態、出土遺物から古墳の周溝の一部である可能性がある。また、同じくSK1も土塙墓の可能性がある。しかし、北側、南側に比べれば数は少ない。

SK8は主体部は、おそらく水田の開墾時に埋めたと思われる巨石の存在から横穴式石室を有していたものと思われる。また、周溝から出土した装飾付壺や脚付壺、器台などの須恵器、鉄鏃、馬具などの鉄器類は、典型的な後期古墳の副葬品である。しかし、また、周辺の古墳では余りまとまって出土していないものもある。

(3) 南側第3群

古墳ではST4～7の方墳が等高線に沿ってならび、更にその西側にSR4・5の土塙墓が位置している。また、ST4の北側に、遺物が出土しなかった竪穴系小石室墓のSS3・4がある。

造営の順序はSR4?・5→ST7?・6→ST5→ST4と見られる。方墳は一辺5～10mの小型で、そのほとんどが削平を受けており主体部も明確には検出されなかった。しかし、ST

6・7には、中央部に土壙が検出されており、主体部の可能性を持つものである。

北側第1群の円墳に対し南側第3群の方墳という好対象を見せてている。また、S R 4・5といふ土壙墓の存在も注目を引くものである。

(4) まとめ

このように見てみると、当遺跡での墳墓の分布は、その位置する所によりそのまま3グループに分けることができる。第1群と第2群を比較した場合、第1群の3基の古墳はそれぞれ特徴を持ち、時期毎に出土遺物や規模が変化している。それに比べ第2群では、S T 4～7は規模は変化するが周溝からの出土遺物には変化がない。そして、第1群と第3群内の時期的な変遷はほぼ並行して変化している。更に、第2群のS T 8の出土遺物の圧倒的な量を見ても各群が特徴を示している。そのことが、そのまま古墳の被葬者の属する集団の違いを表していると見るのが妥当ではなかろうか。

これらの古墳築造の基盤となる集団は、一つには、5地区の中期末のムラをあげができる。しかし、後期に該当するのは三日市遺跡では4地区における3棟住居をあげられるが、同時に並行していたのは2棟のみである。また、住居の立地を考えてもムラの一部というより、なんらかの目的のための一時的な住居であろう。つまり、当遺跡では中期末のムラに匹敵する後期のムラは確認されていない。この時期の遺跡は、当遺跡の東側の天見川の流域に求められるのではないだろうか。しかし、この流域では該当する時期の遺跡は、現在まで尾崎遺跡だけであるが、今後は調査の進展により増えることは確実である。

3. むすびにかえて

天見川の流域では、天見川東側の丘陵端に位置する市内唯一の前期の大師山古墳、後期と思われる大師山南古墳、そして、石川との合流部を見下ろす鳥帽子形古墳があり、いずれも当遺跡の北側に位置している。天見川流域では、一応前期、中期末、後期の各古墳が揃うことになる。

この、三日市遺跡を含む市内の古墳を石川流域全体のなかで比較してみると著しい差を見せる。

(1) 前期

この時期の古墳は石川の下流、大和川の合流部に玉手山古墳群と松岳山古墳群が位置している。しかし、群として捉えるのはこの2群だけである。石川の中・上流にかけては単独に存在する。下流東側には羽曳野市帝井に御旅山古墳、中流域では富田林市域に鍋塚・真名井・甘山・板持丸山・板持3号などの各古墳が分布している。そして、上流部に大師山古墳が位置している。

これらの古墳が石川流域における古墳時代前期の地域毎の集団を示していると考えられる。集団が立地する条件は石川の本流によって開けた中・下流域と、地形的に小河川によって区分できる上流域の場合とは相違する。大師山古墳は小河川の一つ天見川の谷を取り込んだ丘陵上に位置している。このことは、当古墳が上流域（市域全域）を全て含む地域集団を表しているとは言い難い。むしろ、天見川流域という小地域の集団を想起させるものであり、本市の高向地区を含む右川最上流域にも規模、内容は貧弱であれ、前期古墳の存在は予想される。

(2) 中期

この時期は、下流域に古市古墳群という大王級の古墳が築造されている。それに引き換え、石川中・上流域には中期古墳の存在は希薄になる。それも、中流域では川西・新家・彼方丸山の各古墳と寛弘寺古墳群があげられるだけである。

三日市遺跡から検出されたS T 1・6は中期末に位置し、前期の大師山古墳とは時期的には連続するものではない。あえて、中間に位置するものをあげれば、S R 4の様な土壙墓である。むしろ、後期の古墳との関連が注目される。中期の石川流域は古墳の築造が希薄になるまでに在地の勢力が低下した時期であろう。

(3) 後期

後期における群集墳は、石川中流域東側の一須賀古墳群を筆頭に幾つか形成されている。中流域においても本市と接する石川の東側に流域最南端に位置する獄山古墳群との関係が深いと思われる。市内には、三日市遺跡の古墳以外には、塚穴古墳、あるいは宮山古墳、消滅した五の木古墳など単独で存在する古墳が数基確認されているだけである。これは、この地域の在地集団ないの構造が家族墓としての群集墳を築造するだけの家父長的家族の形成が未発達な状態によるものであるのか、この地域の経済的立地基盤から家族数が少數なのか問題であろう。

このような中で、今回の三日市遺跡での古墳の検出は、三日市古墳群とでも呼ぶことの出きるものである。しかし、この古墳群は、確実に横穴式石室を有していたと判明する古墳はS T 8だけであるが、第1群のS T 2・3は石室を有していた可能性もある。S T 17やS T 4～7の方墳群は木棺直葬の可能性が高い。S T 8などは、市域に単独に見られる横穴式石室を有する古墳と同様な立地と性格であると考えられる。

当遺跡の古墳群は中期末から後期にかけて小さくまとまったもので規模から見ても天見川流域の小地域での古墳の状態を示している。

今後、市内でも調査が進むにつれて古墳跡が検出されるであろうが、高向地区などの石川流域で三日市遺跡と同様の小流域で完結する規模の小さな古墳群が検出されるのではなかろうか。それは、石川最上流部に位置し、その農業における経済的基盤が中、下流域に比べれば条件的に悪いこの地域の状況を表すものである。そして、第1群の円墳やS T 8に代表される多量の須恵器や馬具、鉄鎌を副葬された古墳の被葬者は中央と関係を持ったこの小地域の首長層であり、S T 4などの小型方墳を含む第3群や堅穴系小石室墓の被葬者は首長層の勢力下にある有力な構成世帯の長の墓ではなかろうか。

いずれにしても、今後の調査により明確にされていくと思われる。

第3節 総括

1. 繩文時代

石川流域の遺跡は、大和川との合流部に位置する国府遺跡が著名である。そして中流域では錦織遺跡が位置しており、いずれも前期からの土器が出土している。

このような状況の中で、錦織遺跡から南に直線距離にして5kmに位置する三日市遺跡における早期押型文の出土は石川流域の縄文時代を考える上で重要である。そして、中期末から後期初頭の土壙の確認は、遺構の検出例の少ない中で貴重な資料である。

2. 弥生時代

弥生時代の遺構は中期の堅穴住居2棟と後期の溝状遺構のみという希薄な状態である。しかし中期の遺跡が右川中流域の貴志・中野遺跡、そして、市内塙谷遺跡というやや規模の大きい母村的遺跡の存在と当遺跡のような小さな分布を示す遺跡が、この右川流域の小河川の谷部などに分布し、母村的遺跡と強く結び付いているのではないか。また、後期は当遺跡のすぐ北側丘陵上に高地性集落と考えられている大師山遺跡が有り、段丘に位置する当遺跡と関係が想起される。

3. 古墳時代

古墳時代は前期、中期末のムラが検出されたことにより、従来不明なことがわかった石川中・下流域の聚落遺跡の一部が確認できた。前期のムラが指呼の距離に有る大師山古墳を築造した基盤となる地域集団の一部である可能性が高い。また、中期のムラから出土した韓式系土器により、中期における大阪湾周辺部の韓式系土器出土遺跡の増加が石川上流域まで広がりを見せていることを示した。このことは、渡来系の人々との関係も示唆するものであり、時代は下がる「新撰姓氏錄」に記載されている百濟の渡米系氏族錦部氏や「和名類聚抄」の錦部郡の郷名に現れる百濟の地名との関連性について今後の研究が必要である。

中期末から後期にかけての古墳の検出は、小河川流域における完結した小古墳群の状況を表している。中央と結び付いた小地域（小河川流域の場合天見川）の首長層とその勢力下にある有力世帯の長の関係をそのまま表す古墳群である。古墳以外に注目されるのが窯状遺構である。河内長野市域には現在まで多くの小型窯状遺構が見つかっており、早くから炭生産との関係が示唆されていた。時期としては遅っても平安時代である。今回発見されたSY1は従来と異なり古墳時代後期と考えられるものである。時期的にも注目されるが単独に存在し、周辺には製鉄遺構のような炭を使用する施設は検出されなかった。この窯は河内長野の炭生産史の中で今後の課題である。

以上のように、三日市遺跡は河内長野市という地域での郷土史のダイジェスト的な遺跡である。調査の結果は、郷土史の中での位置だけでなく、河内南部の石川流域というもう一步踏み出した中での位置付けをしなければならない問題が数多くあることが判明した。今回の報告書の刊

行による資料公開に拘り、地域史、郷土史研究の進展を期待するものである。

4. 最後に

当遺跡は、旧石器時代から江戸時代に複合遺跡であり、かつ、段丘状の遺跡であり地山面に全ての時代の遺構が集中している。この様な遺跡の状態で、古墳時代を一区切りとした調査報告書の刊行は、時代を追って遺跡の復元を第1に主眼を置いたためである。大規模発掘における資料の早期公開は、非常に困難なものである。しかし、大規模発掘でよく問題となる外業調査終了後の調査担当者の分散と整理予算の不足から報告書が遅れるということをできるだけ回避するために、粗削りのものであっても時代を追った報告書を早く刊行することを目的としたことを理解願いたい。また、今後の報告書IIの刊行のためにもご批判を請うものである。

(尾谷)

図版

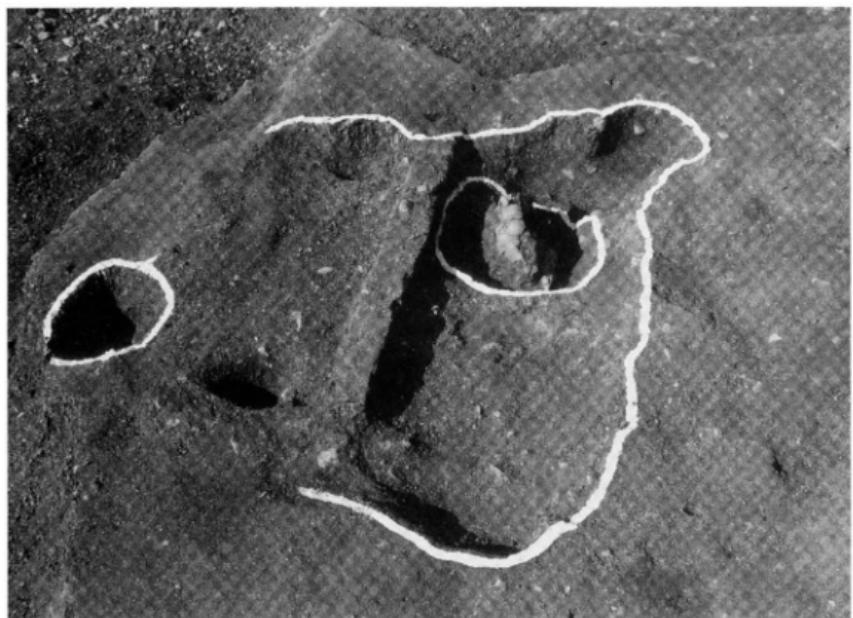


ST 8 出土土器

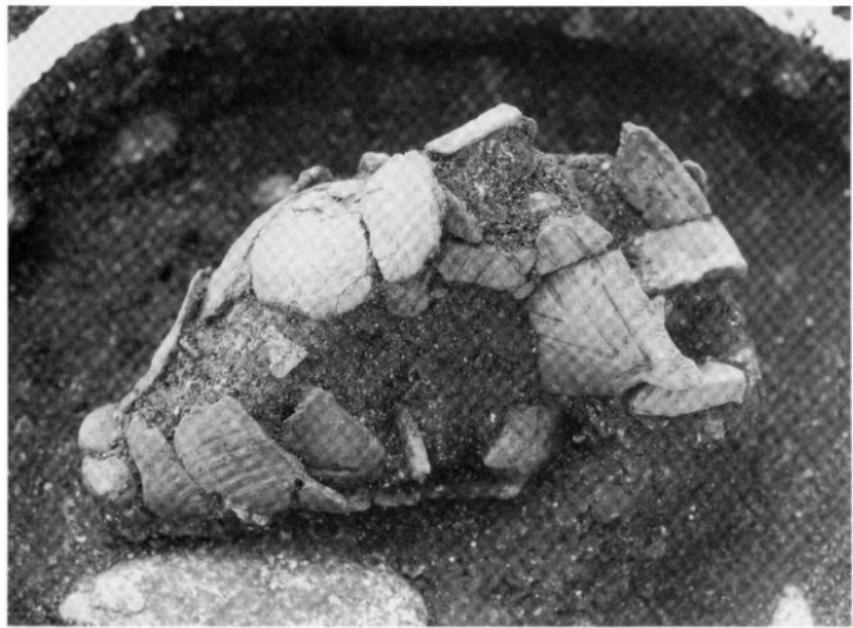
三日市発掘調査に伴う航空写真測量委託



遺跡全景写真



SK73全景（南東から）



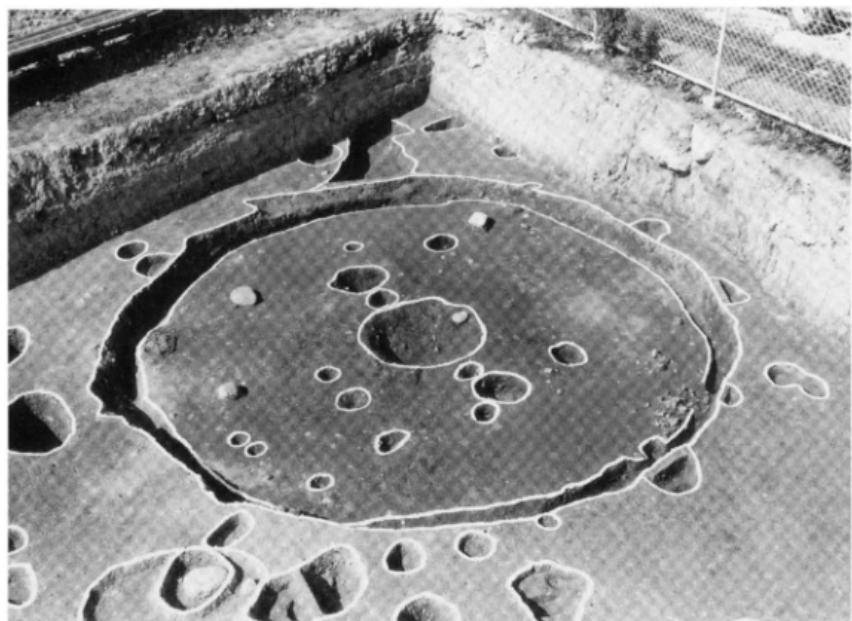
SK73縄文土器出土状況



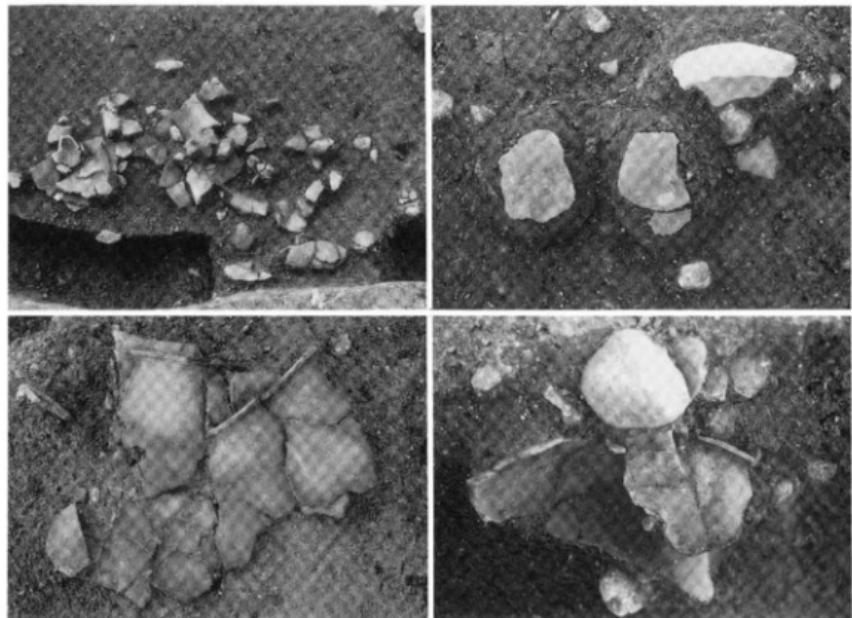
SI 1～2 全景（上が北東）



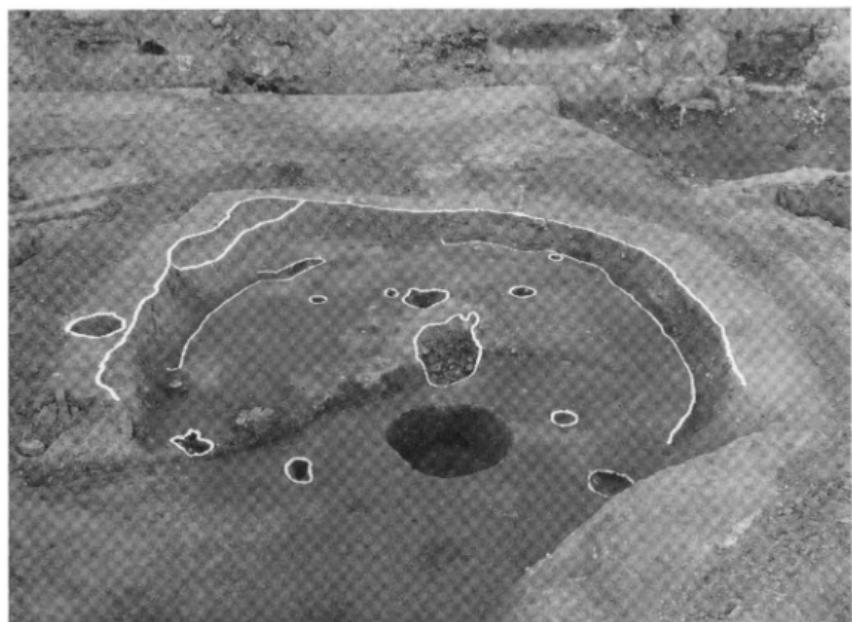
SI 1～2 全景（南西から）



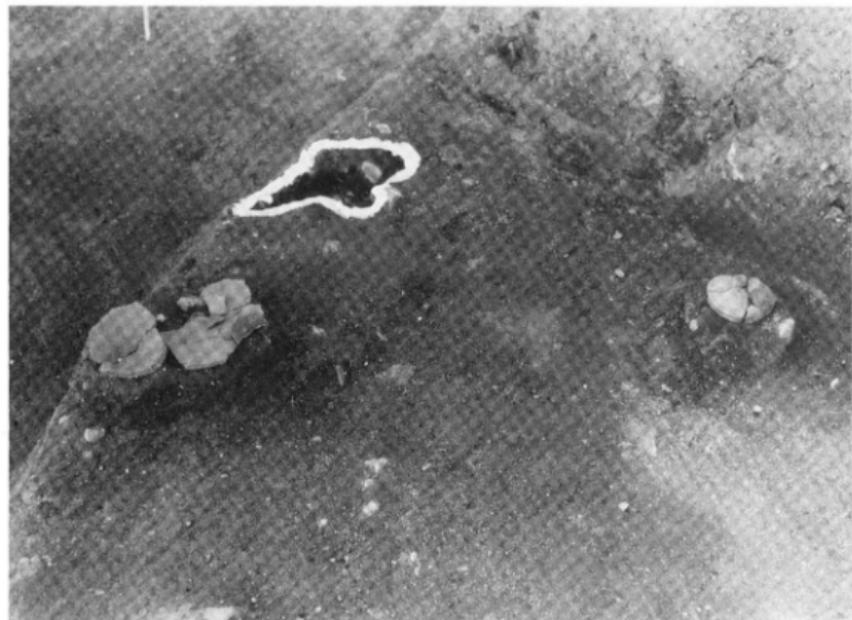
SI全景（南から）



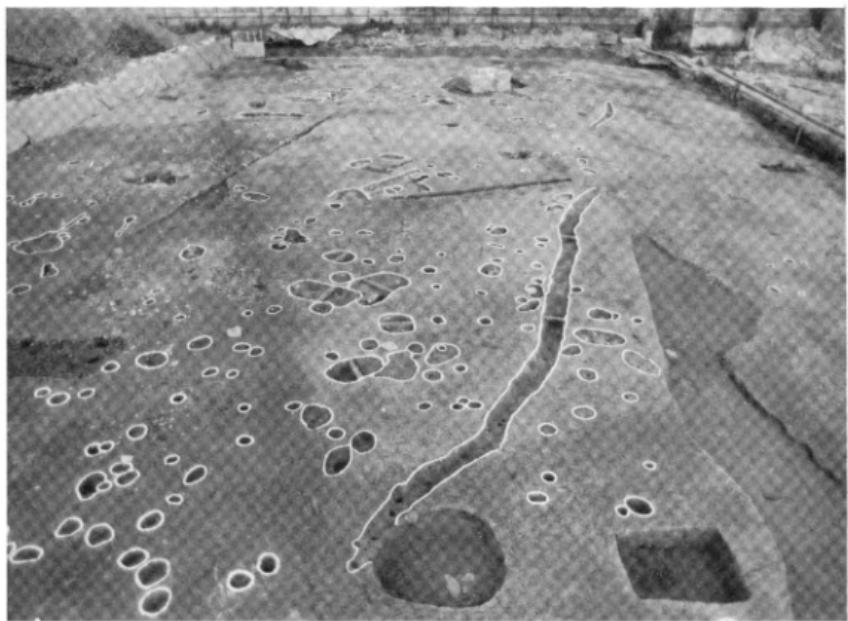
SI 1 遺物出土状況



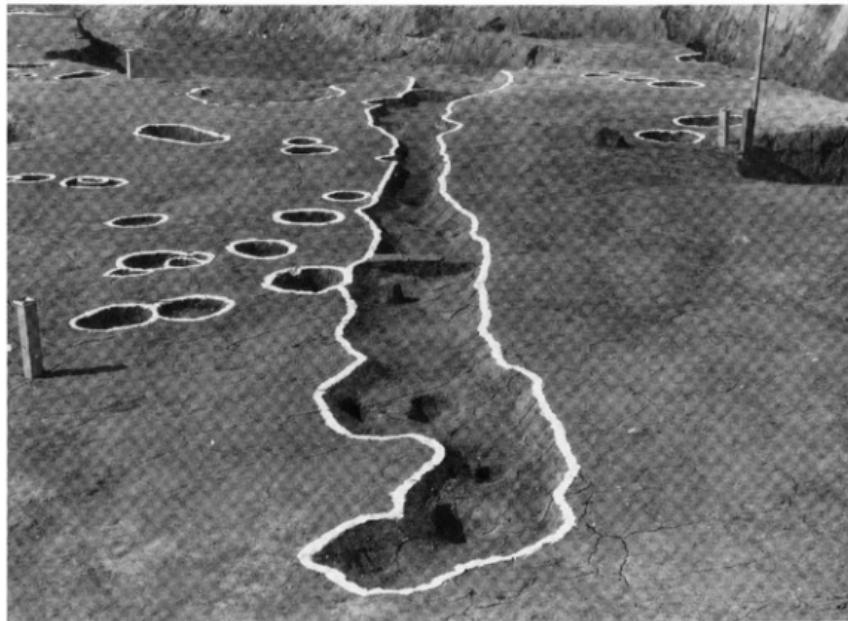
SI 2 全景（南西から）



SI 2 土器出土状況



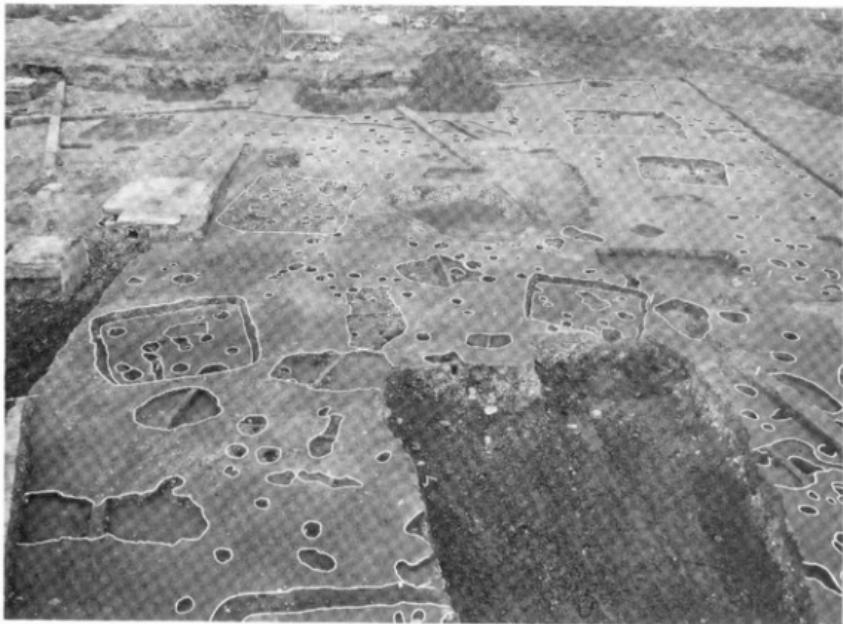
SD29全景（西から）



SD30全景（南東から）



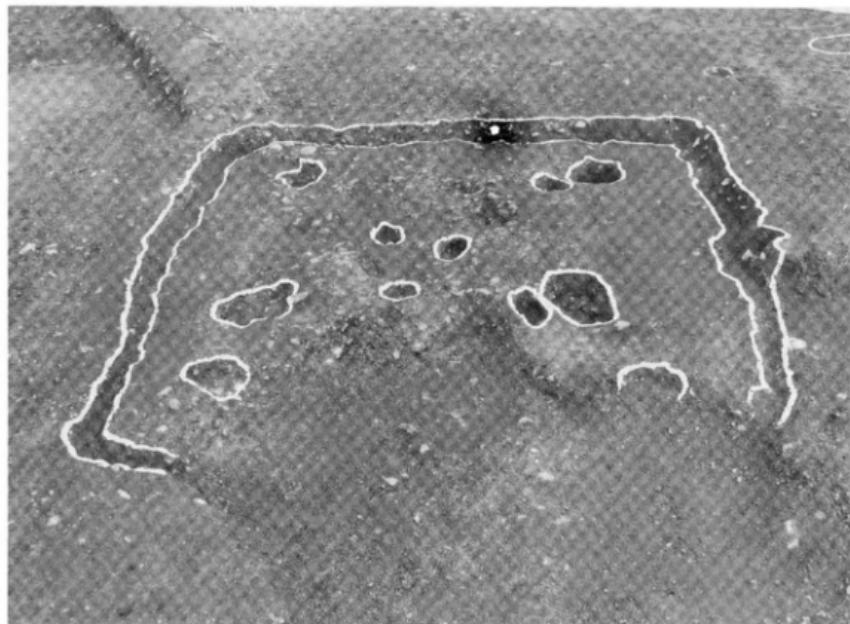
SI 3～16全景（上が南西）



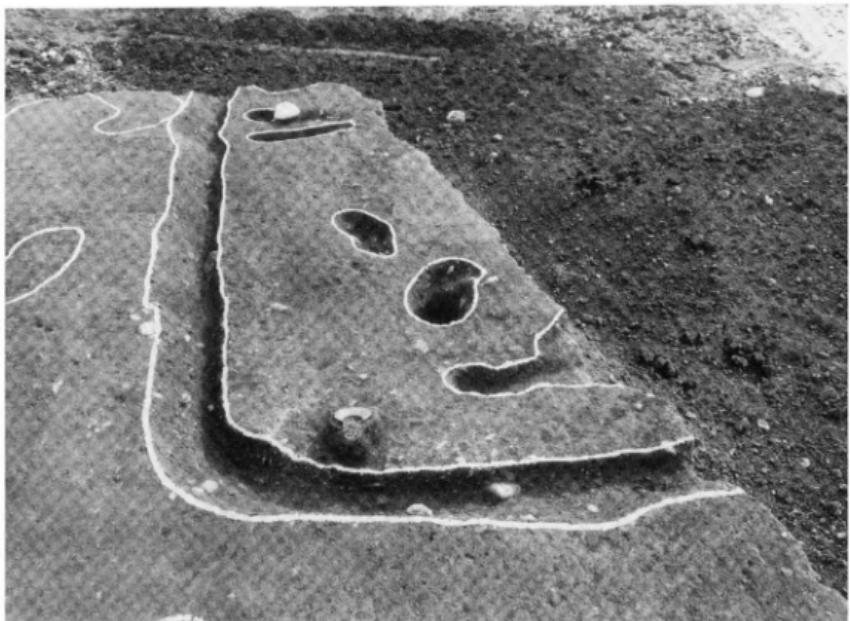
SI 3～16全景（南から）



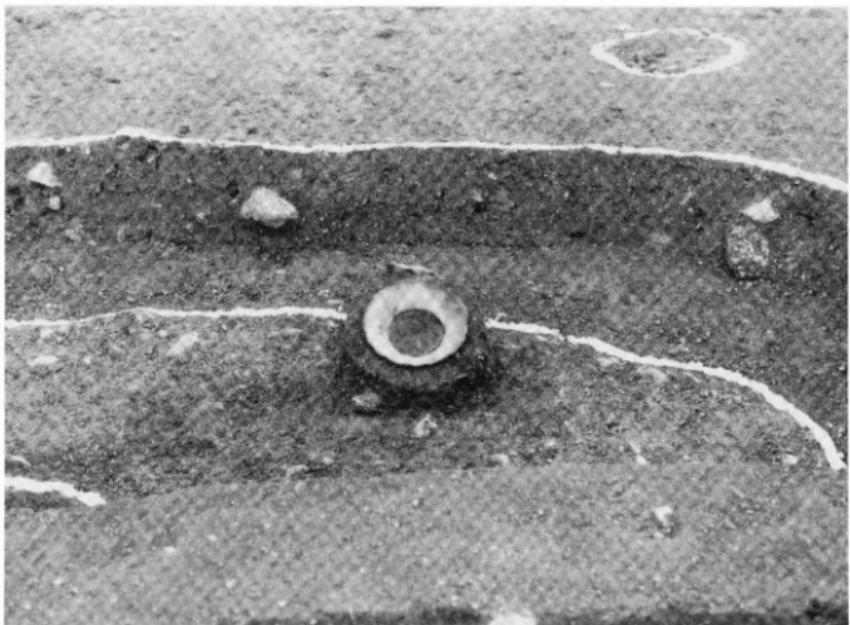
SI 3 ~16全景（北西から）



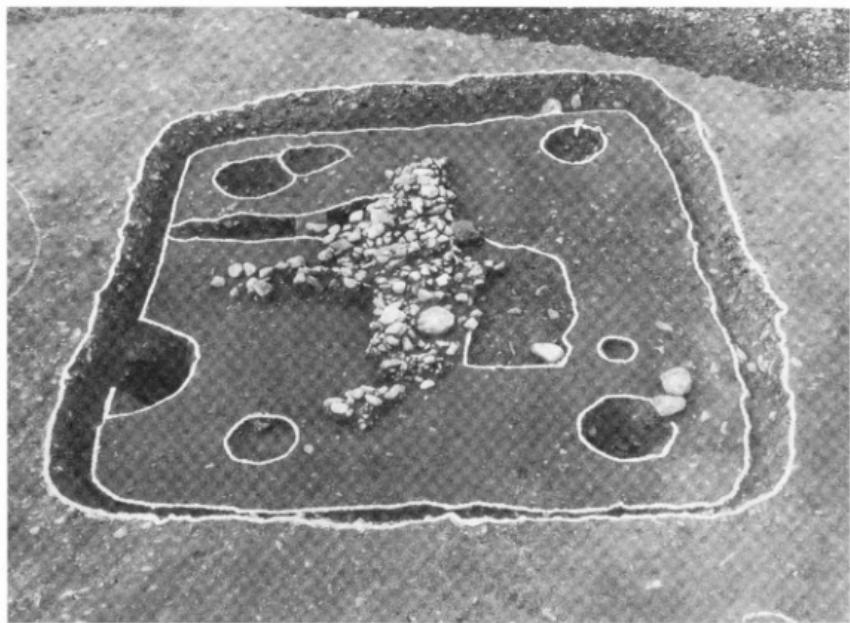
SI 3 全景（南西から）



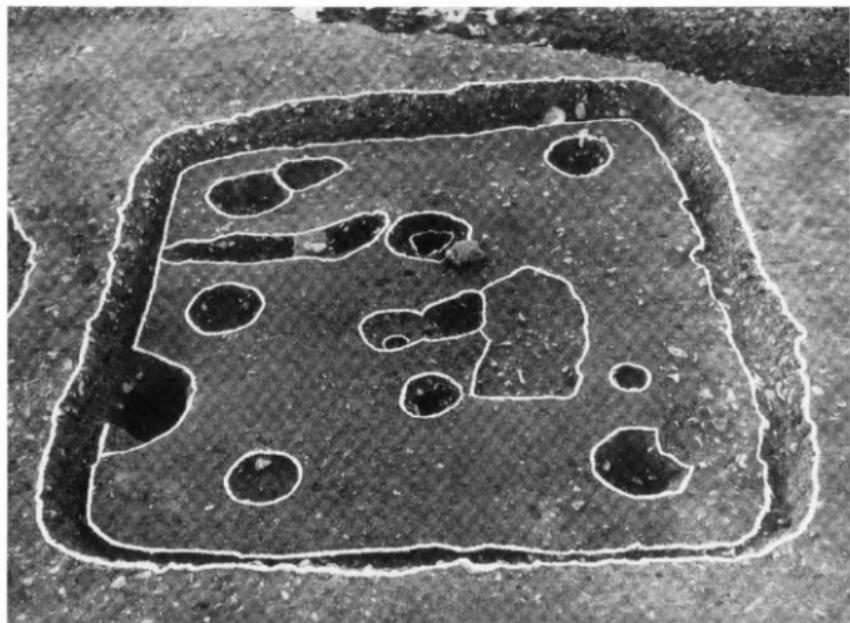
SI 4 全景（西から）



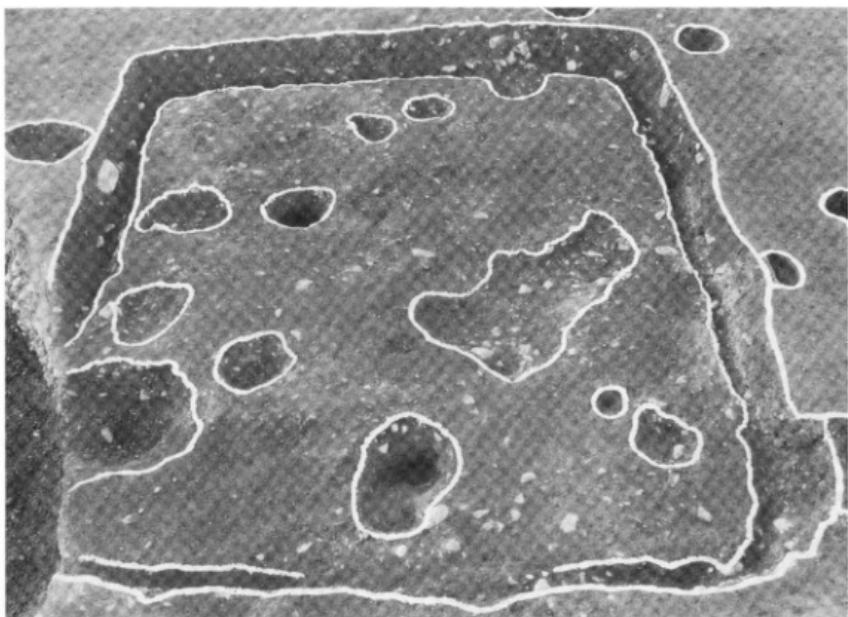
SI 4 土器出土状況



SI 5 集石検出状況（東から）



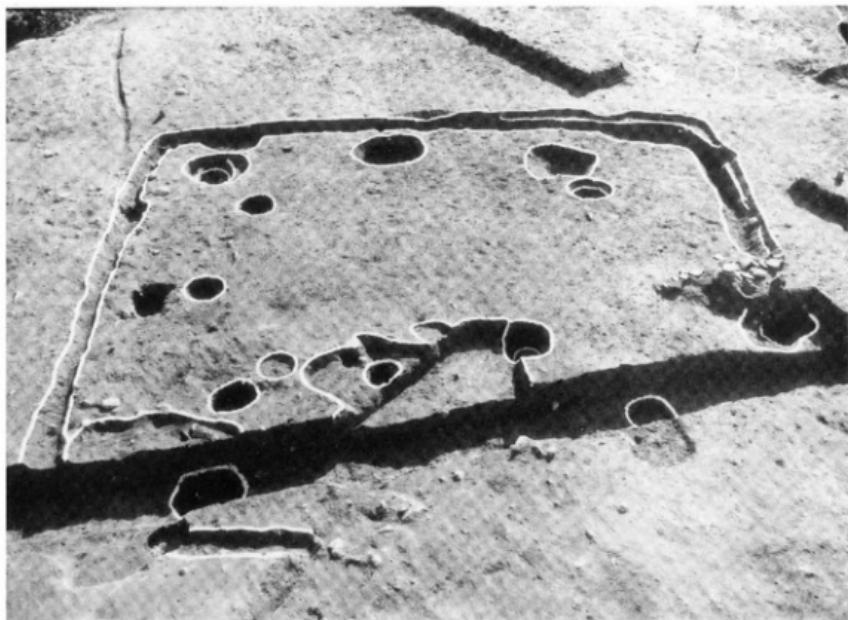
SI 5 全景（東から）



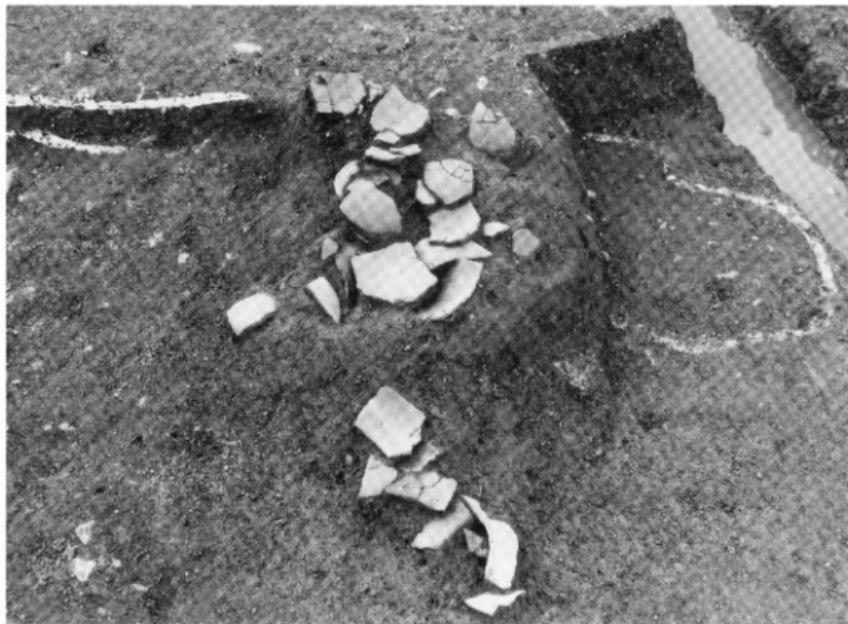
SI 6 全景（南東から）



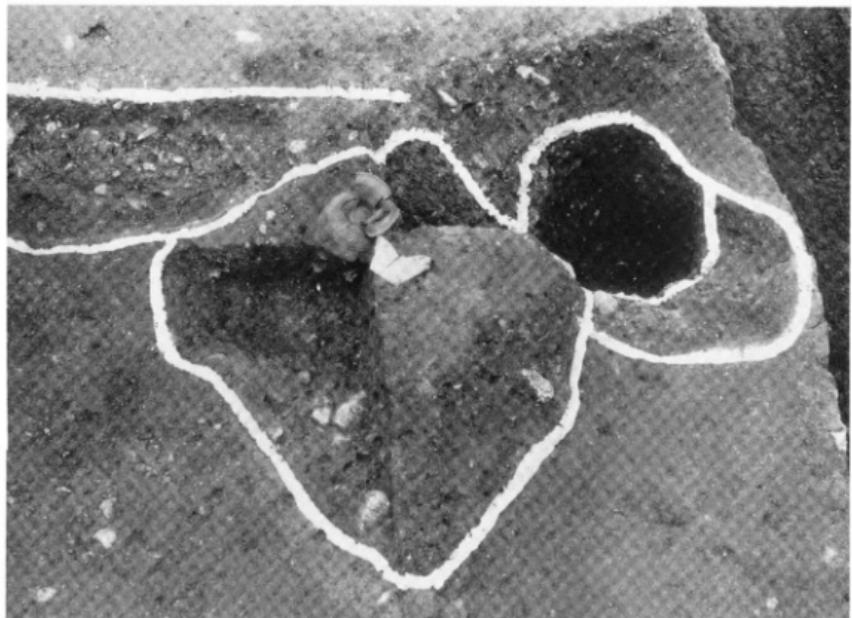
SI 7・8 全景（西から）



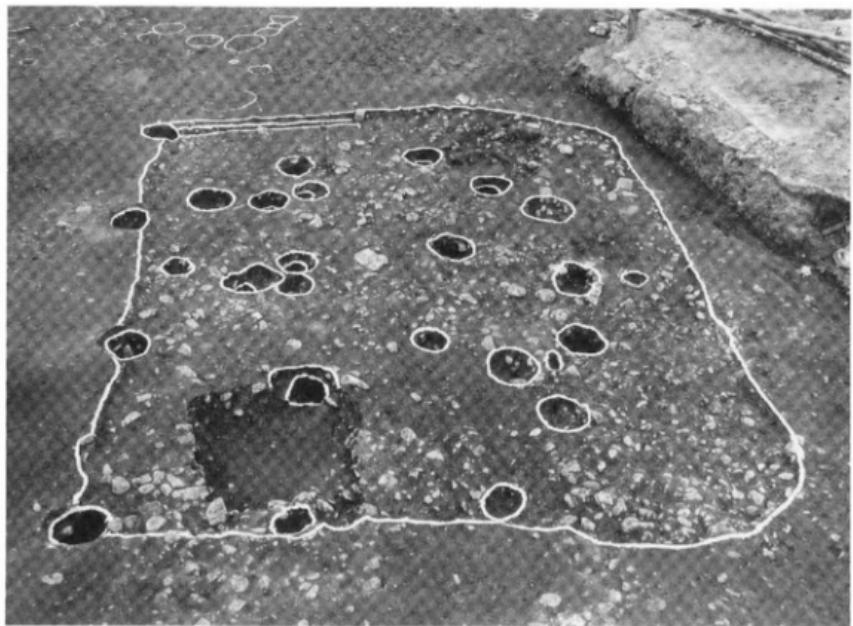
SI 9 全景（北西から）



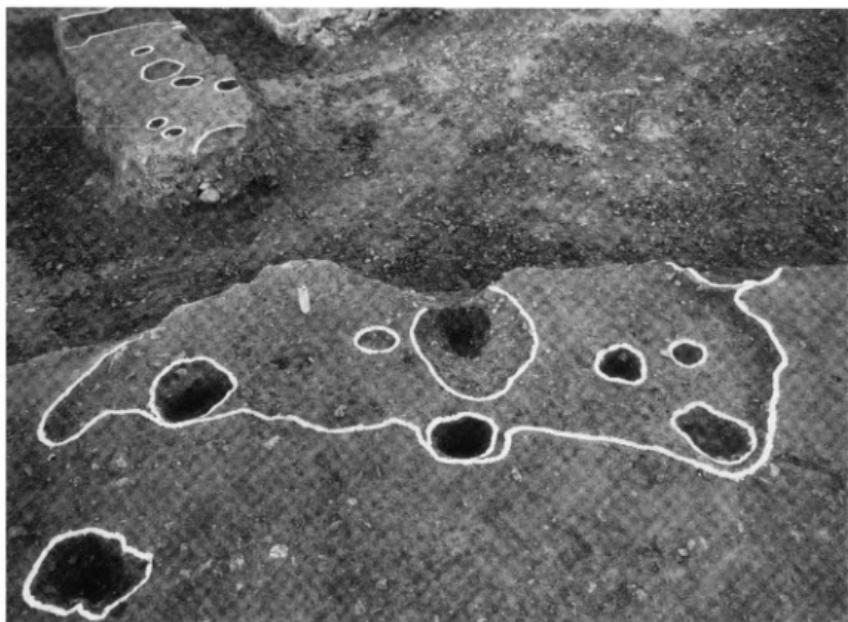
SI 9 崩壊遺構



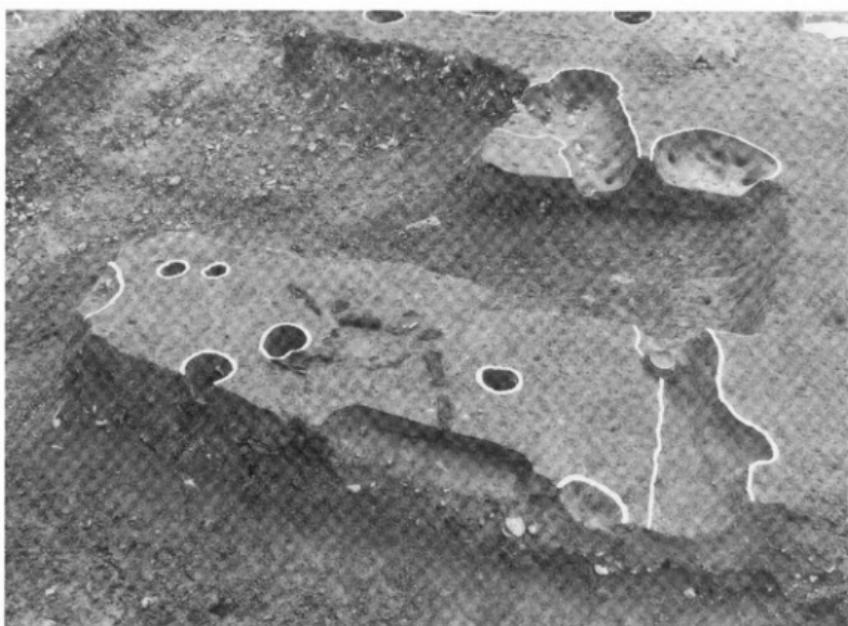
SI 9 壺状遺構（上部土器除去後）



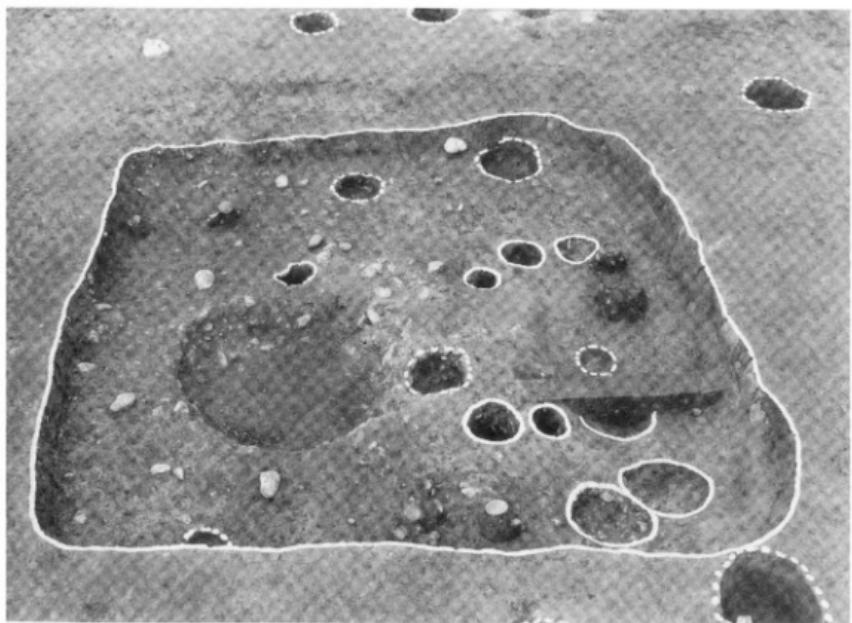
SI 10 全景（北東から）



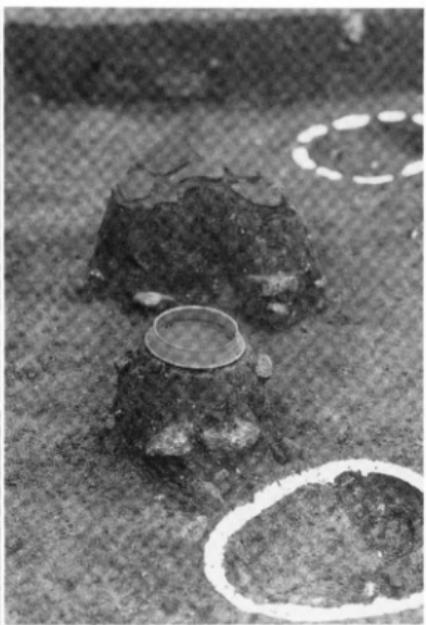
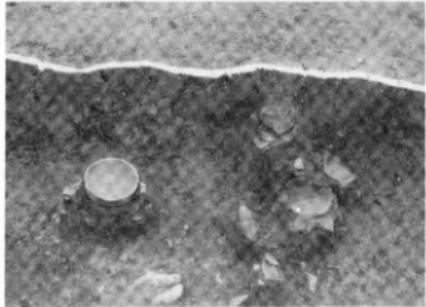
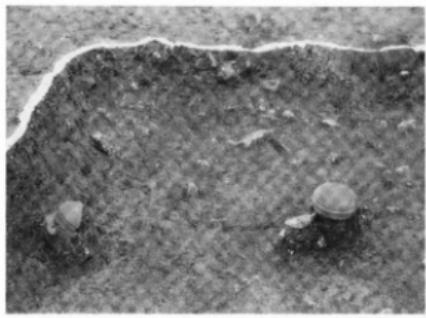
SI11全景（南東から）



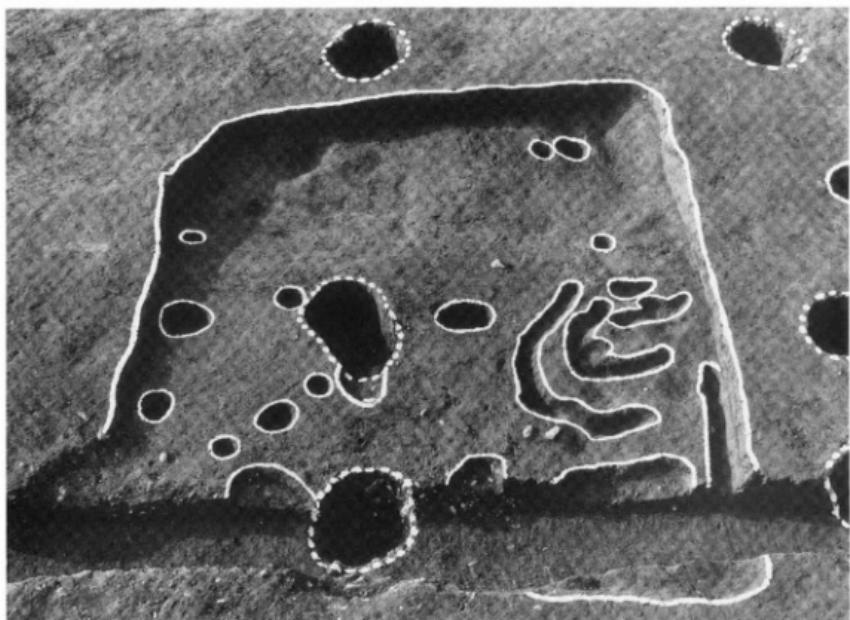
SI12全景（北から）



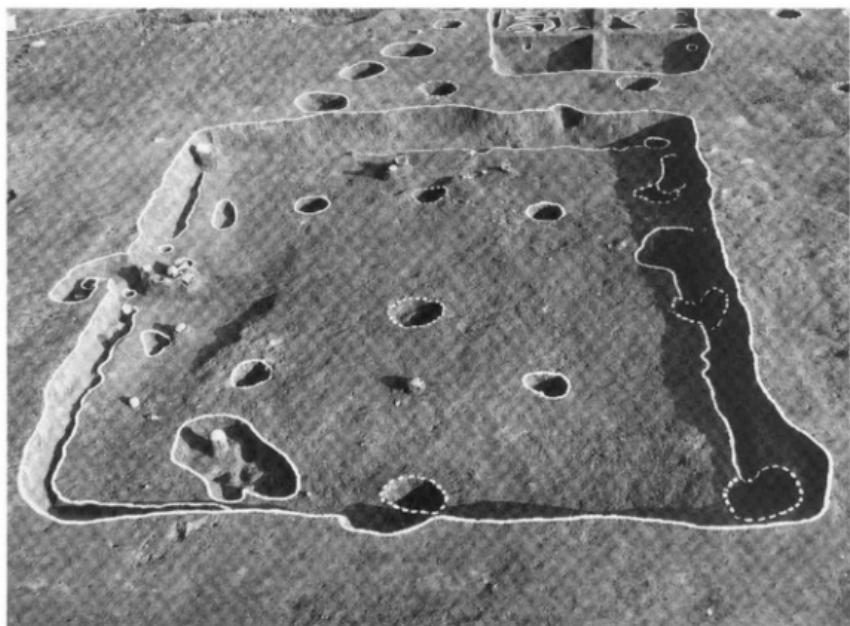
SI13全景（南東から）



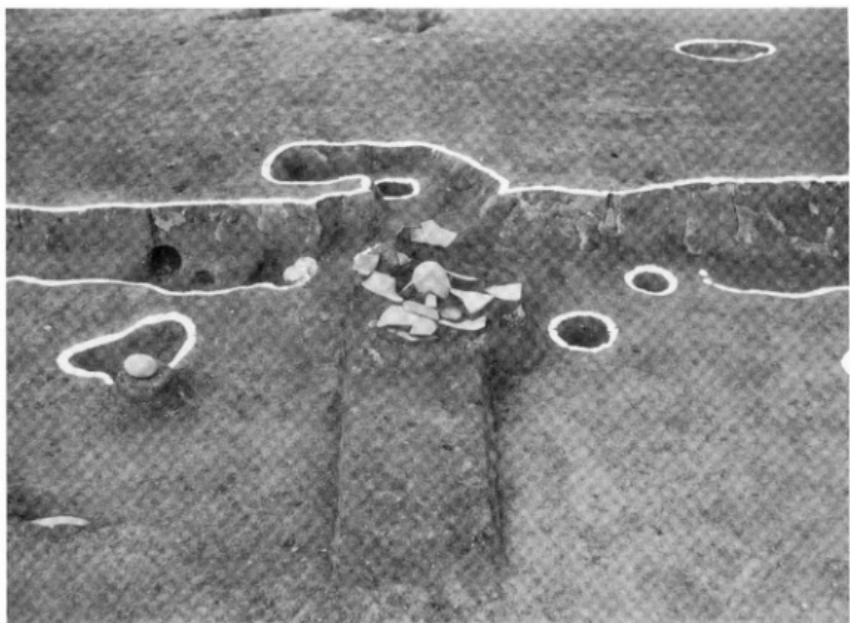
SI13土器出土状況



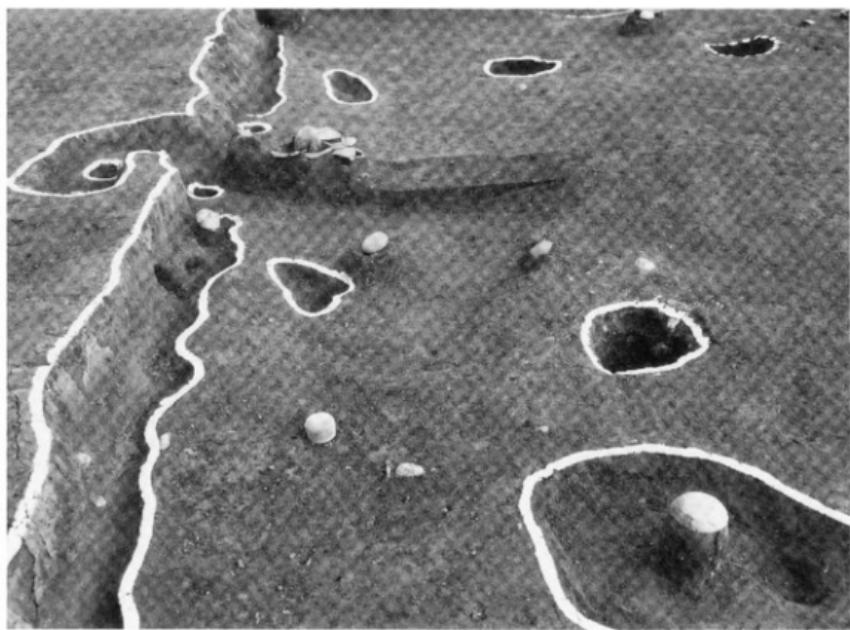
SI14 全景（南東から）



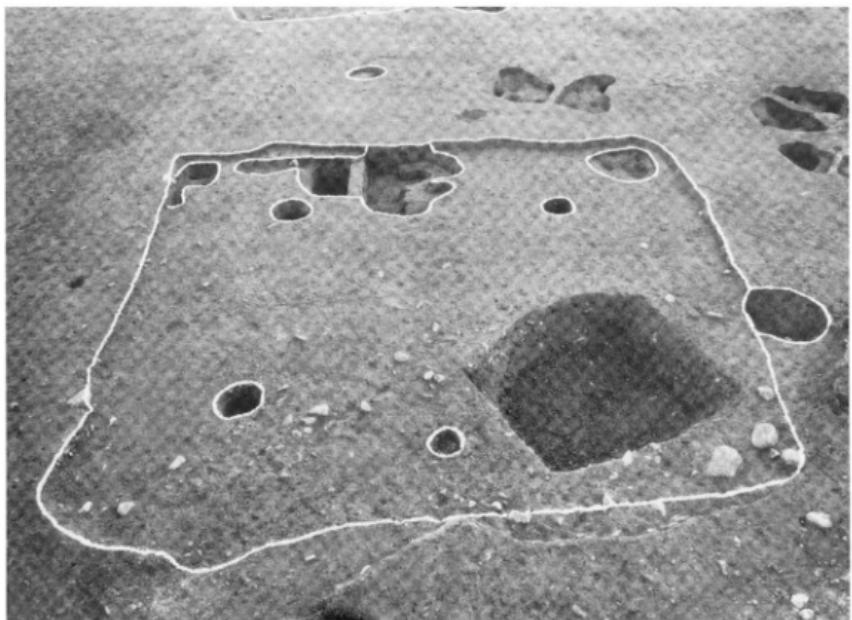
SI15 全景（北西から）



SI15窓状遺構



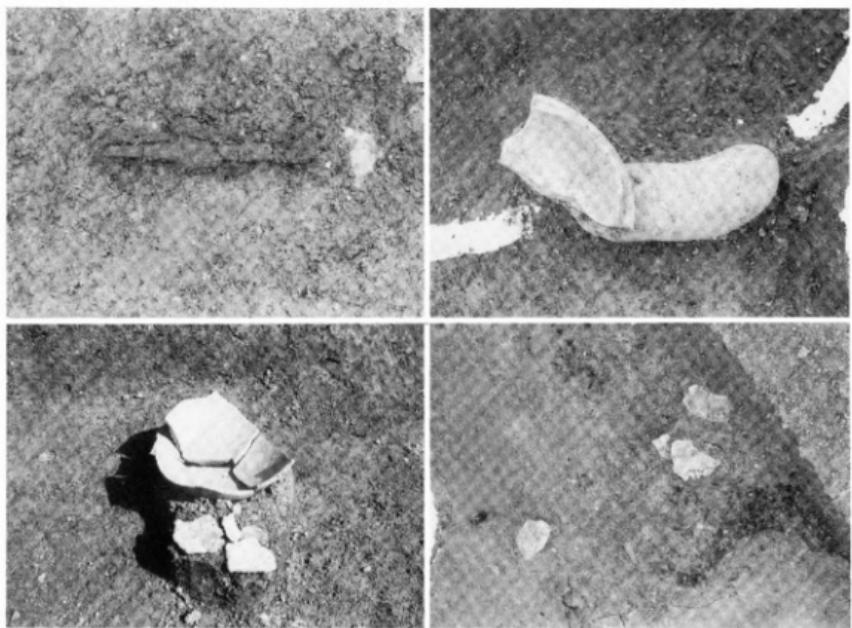
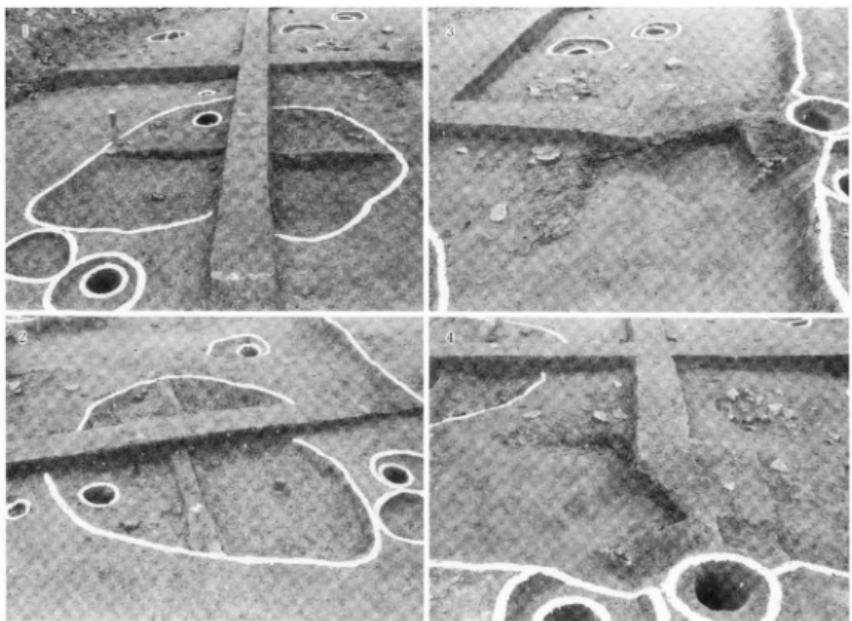
SI15上部出土状況



SI16全景 (北東から)

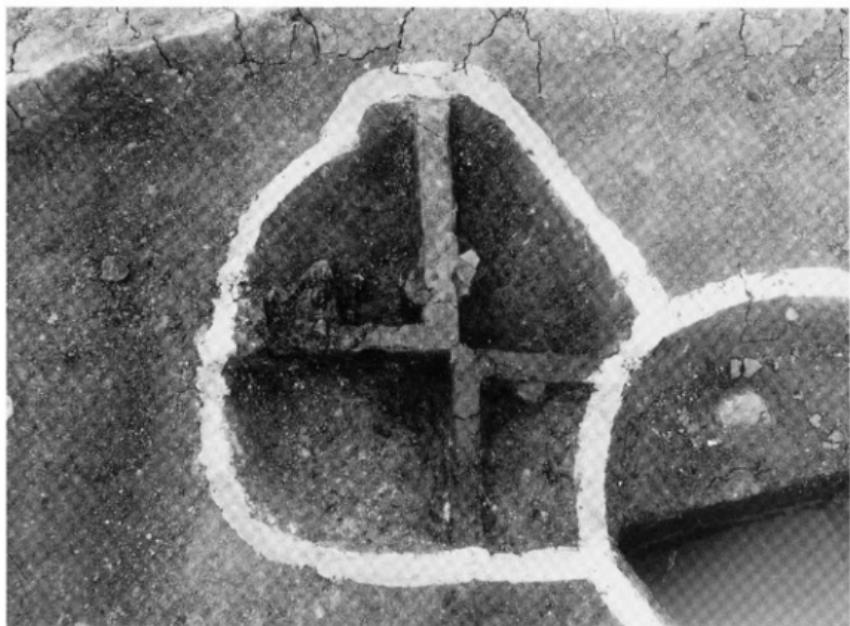


SI17全景 (南東から)





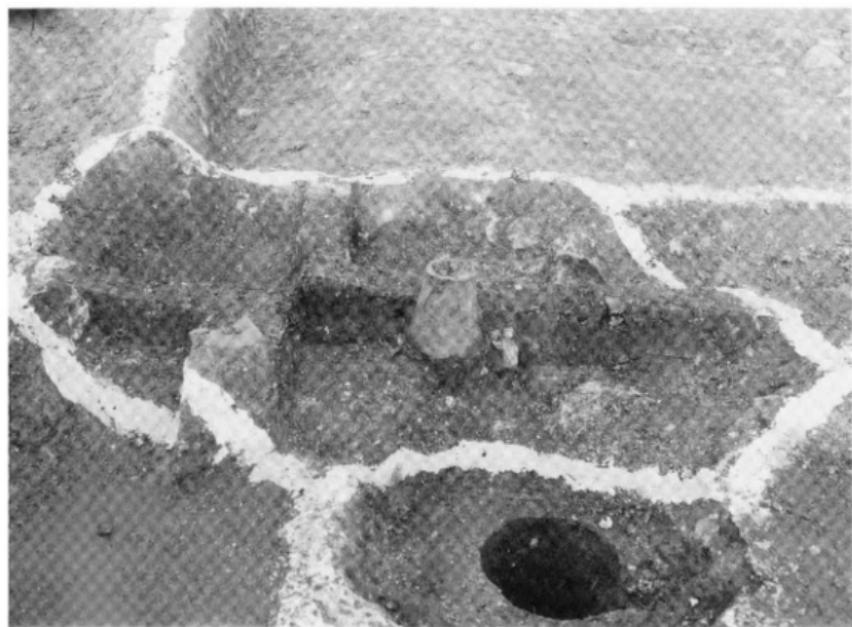
SI18・19, SD35全景（北西から）



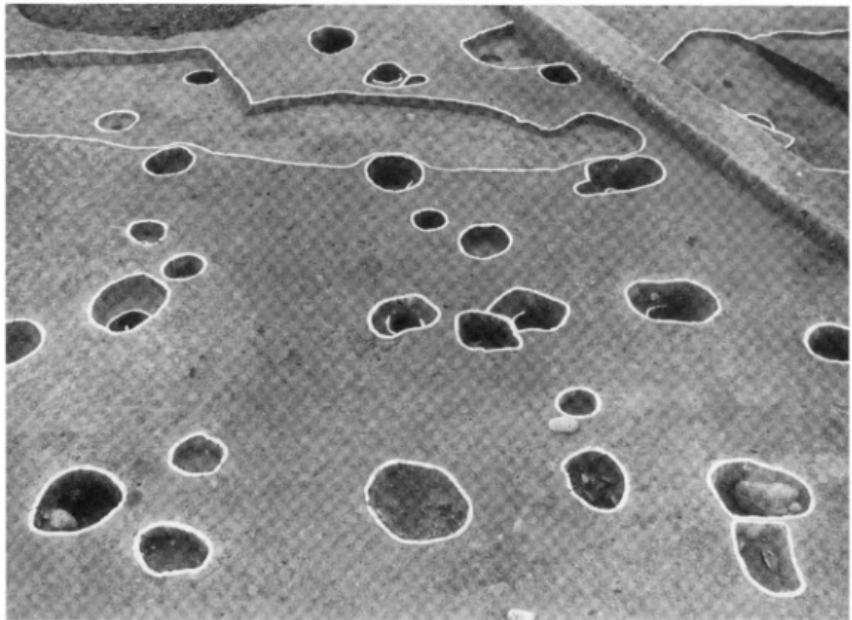
SI18壇状遺構



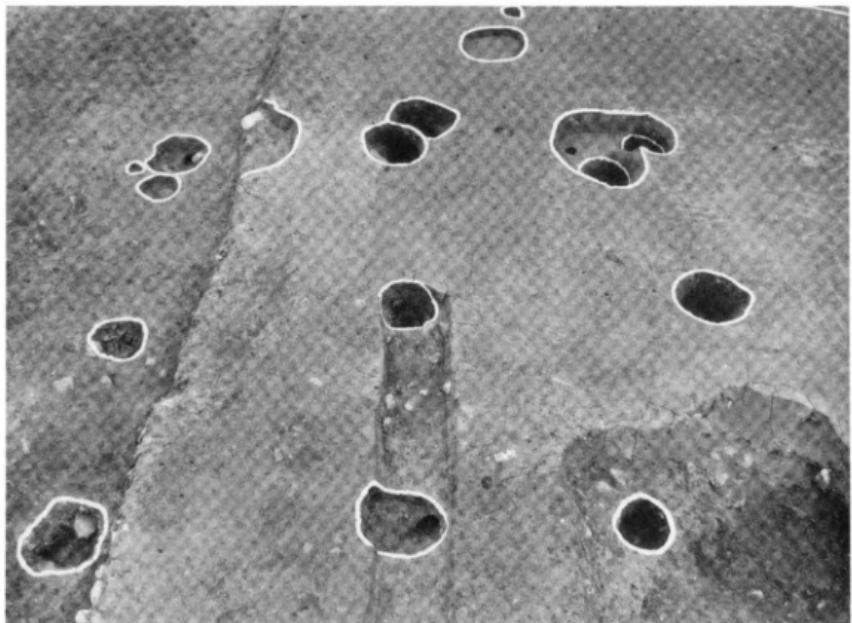
SI19竪状遺構（左側）及び土器出土状況



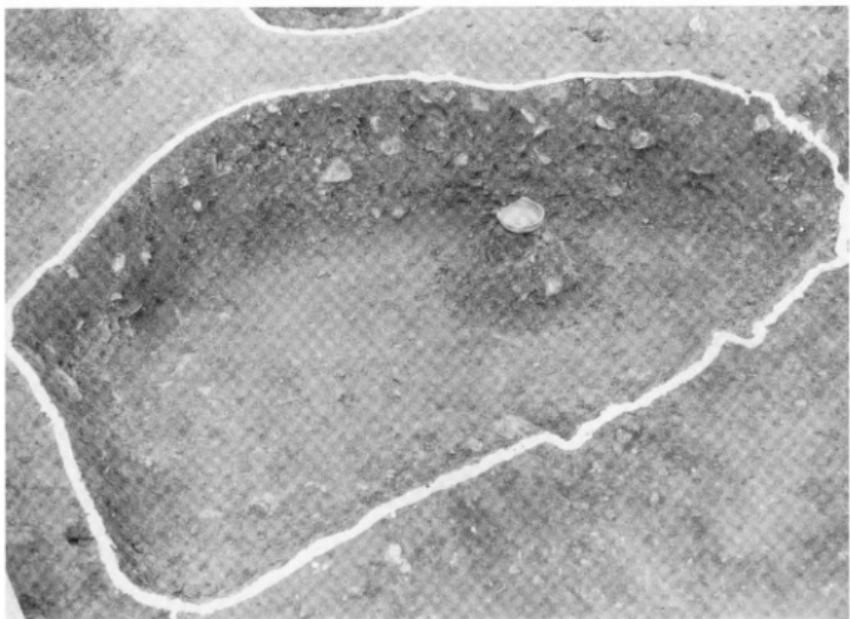
SI19竪状遺構



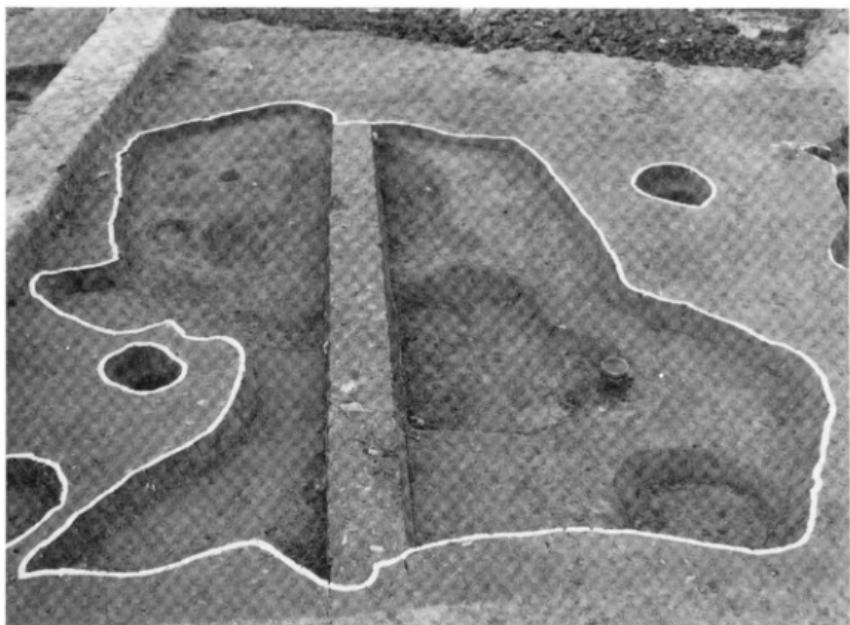
SB11全景（南西から）



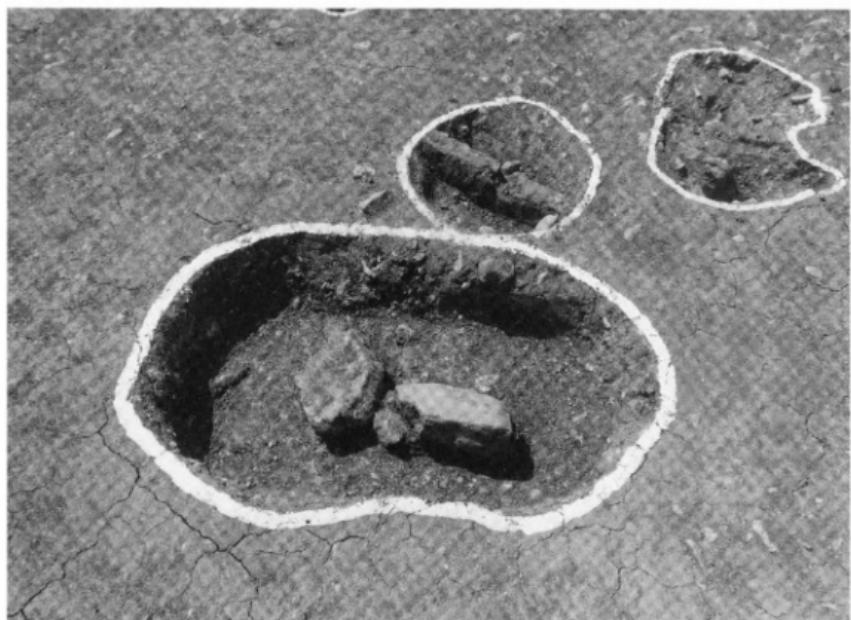
SB12全景（南西から）



SK63全景（北西から）



SK101全景（南から）



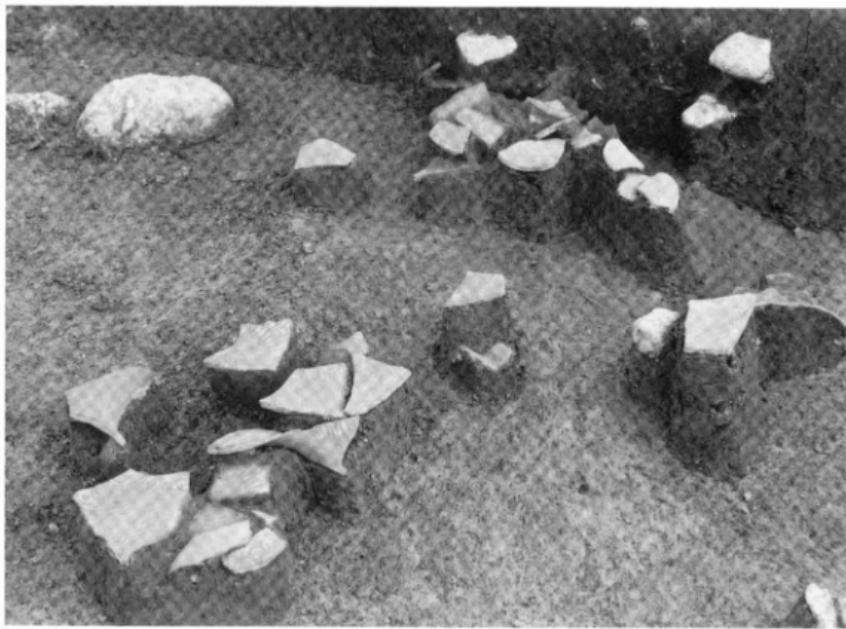
SK110・111全景（北から）



SK113 全景（北西から）



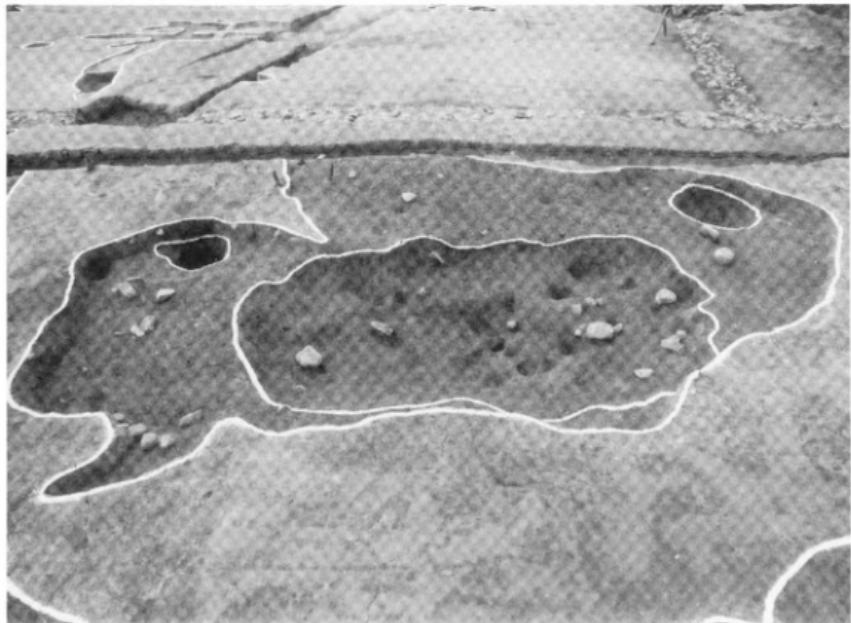
SK114全景（東から）



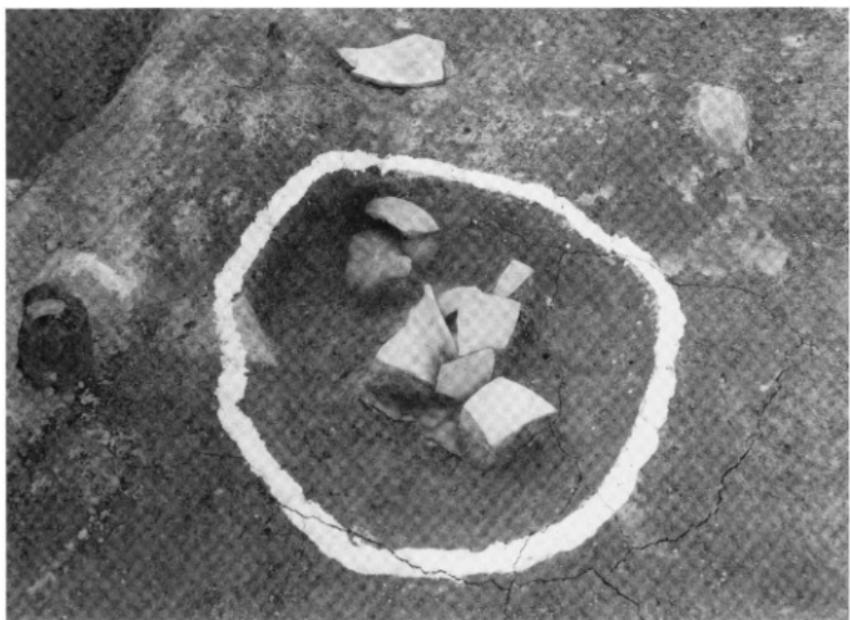
SK114土器出土状況



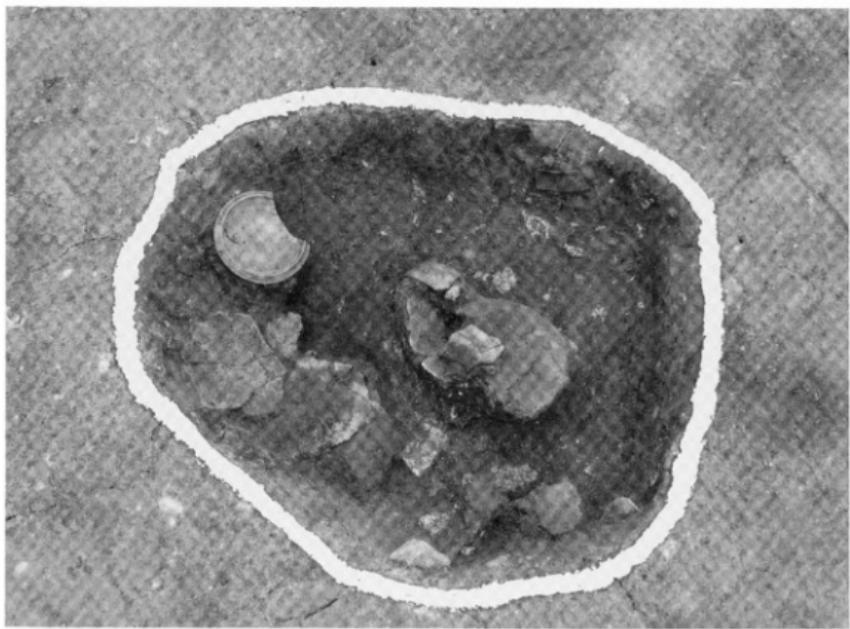
SK115全景（北東から）



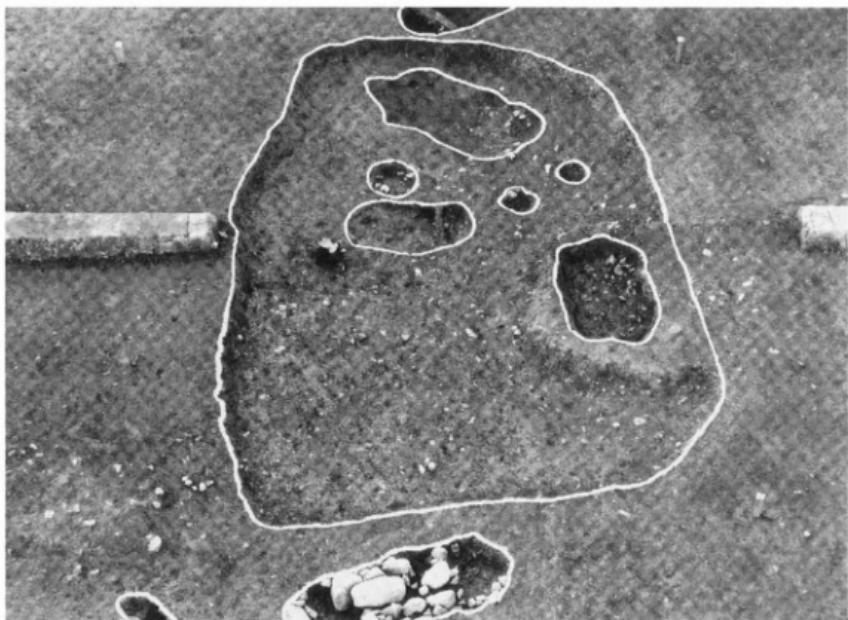
SK115完掘後



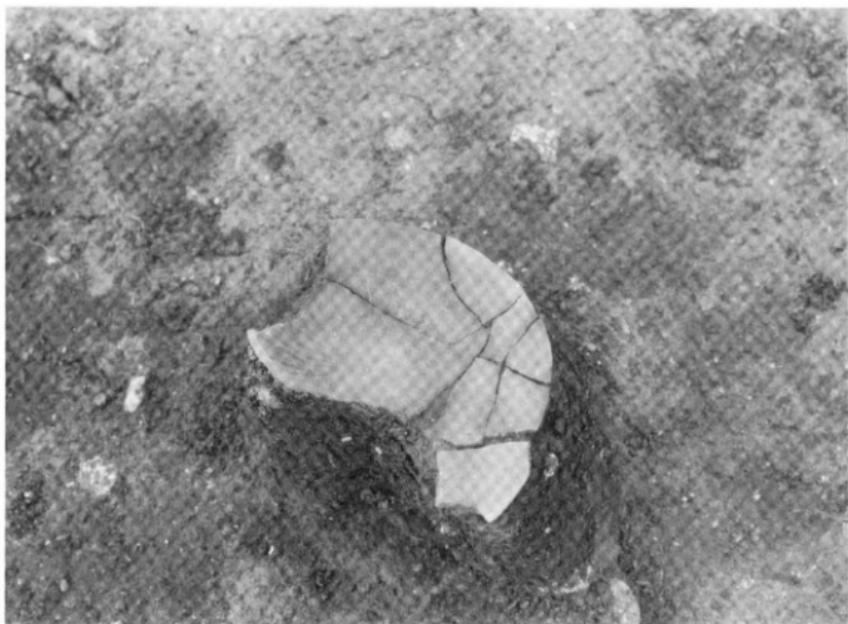
SK121全景（南東から）



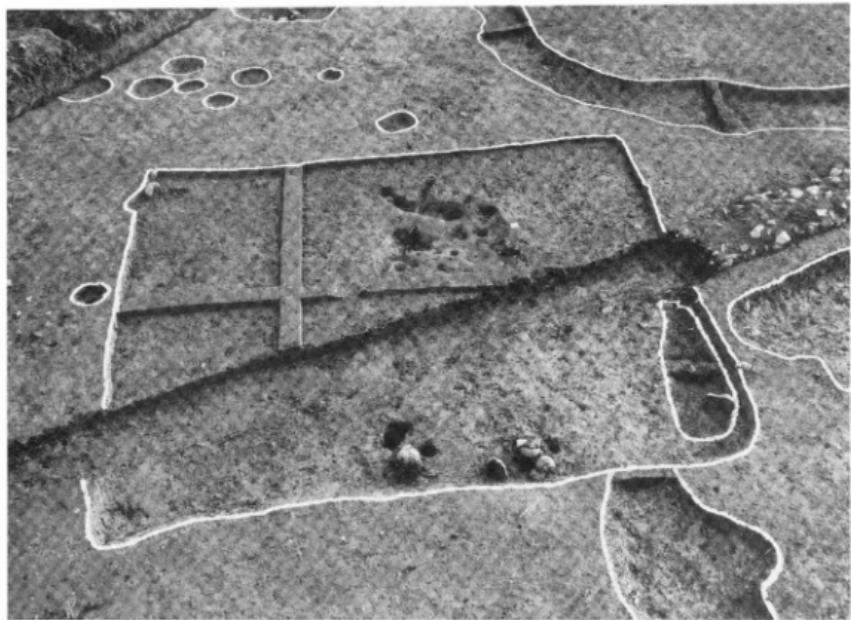
SK123全景（西から）



SK134全景（東から）



SK134土器出土状況



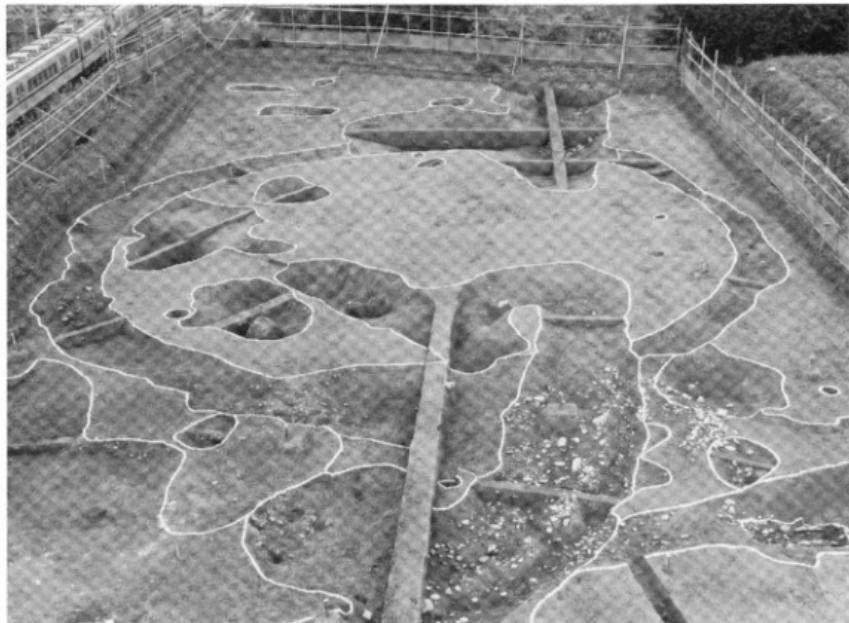
SK137全景（北から）



SK137土器出土状況



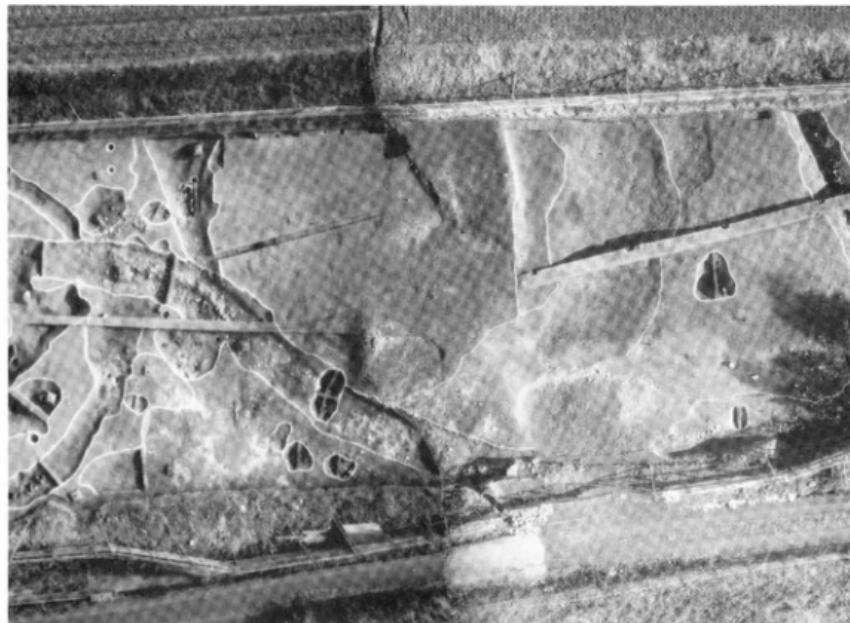
ST 1 ~ 3 全景（上が東）



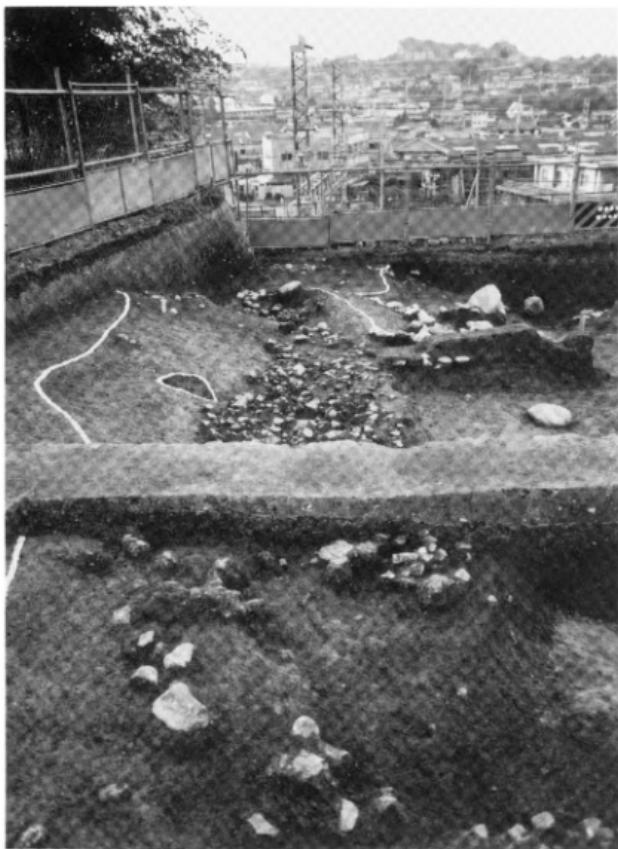
ST 1 全景（南から）



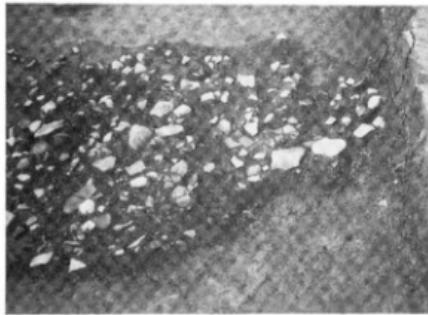
ST 1 土器出土状況



ST 2 全景（上が東）



ST 3 全景（東から）



ST 3 塗輪出土状況（東側部分）



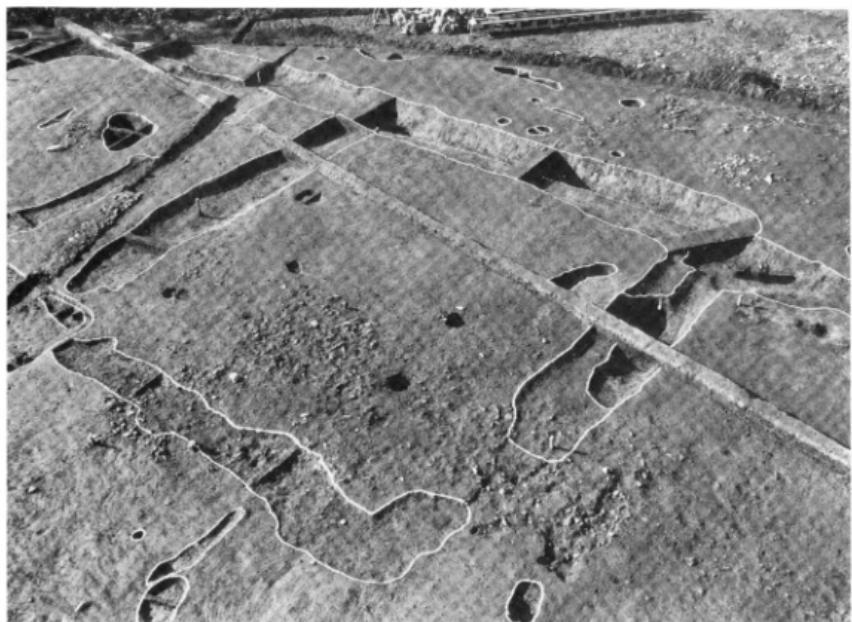
（西側部分）



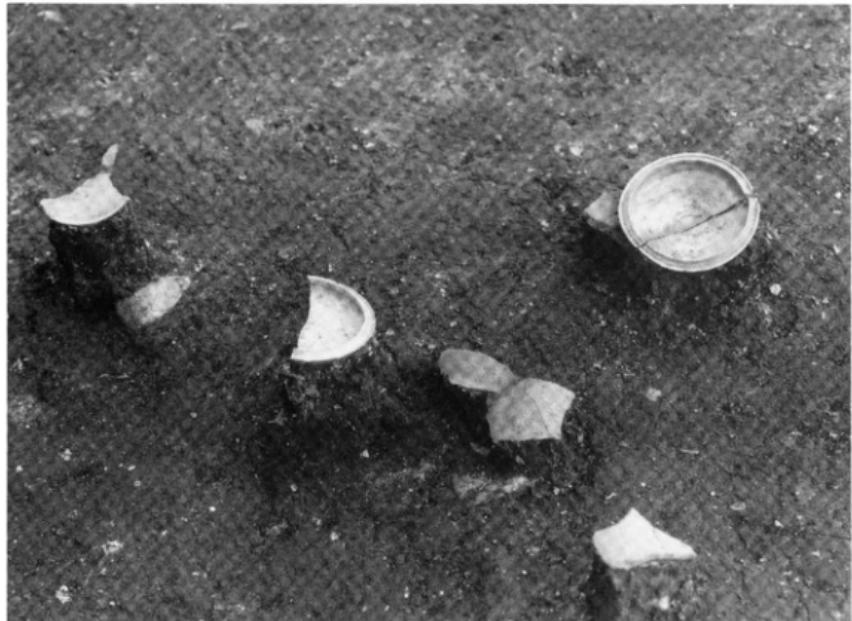
ST 4~7 全景（上が南西）



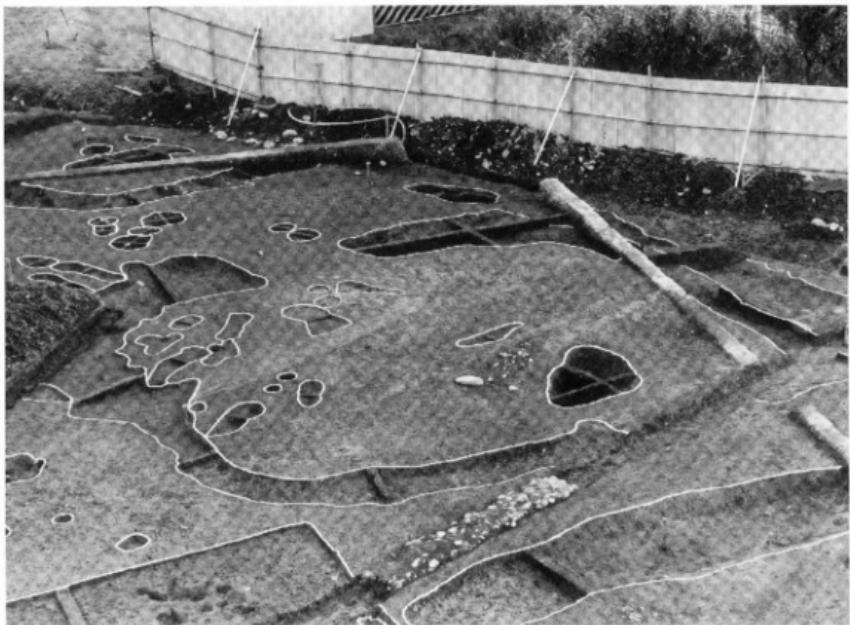
ST 4・5 全景（南から）



ST 4 全景（北東から）



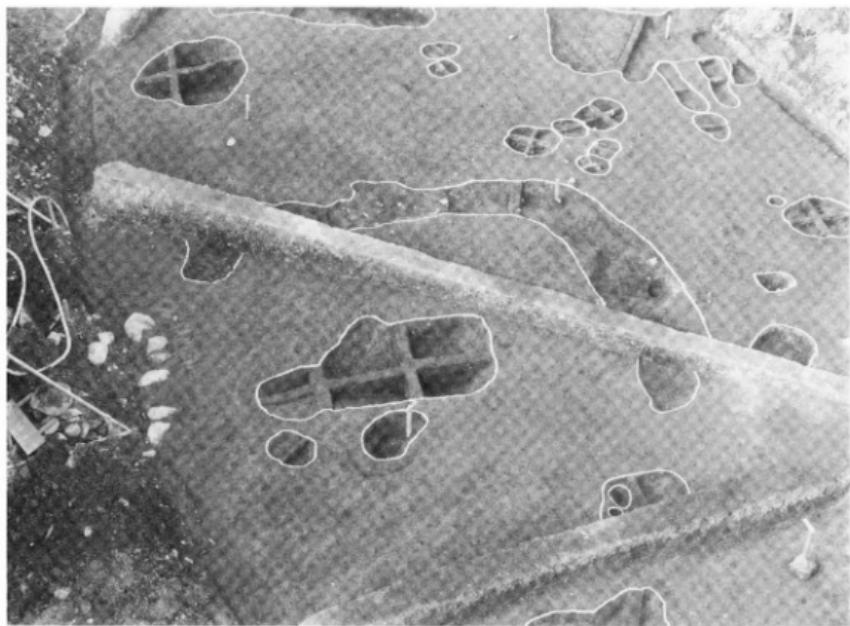
ST 4 土器出土状況



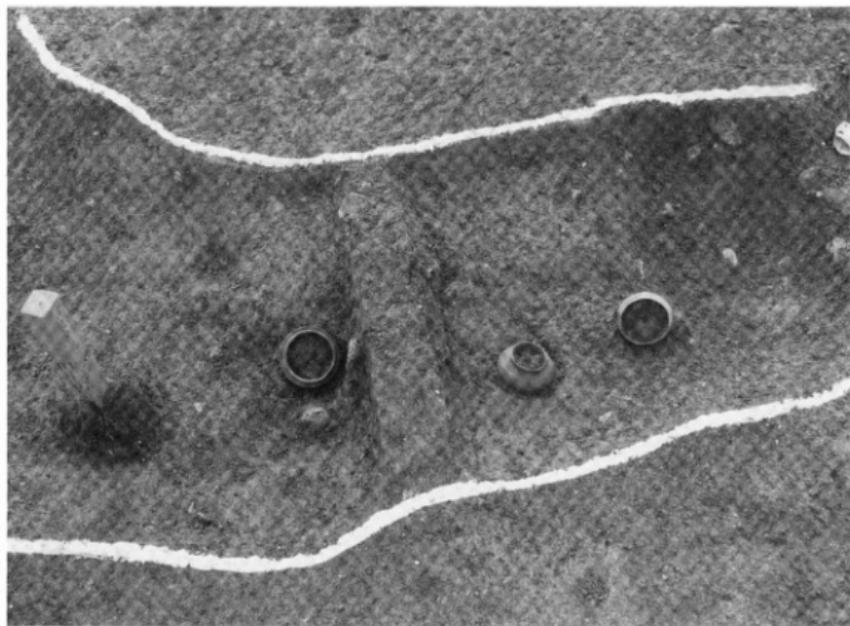
ST 5 全景（北から）



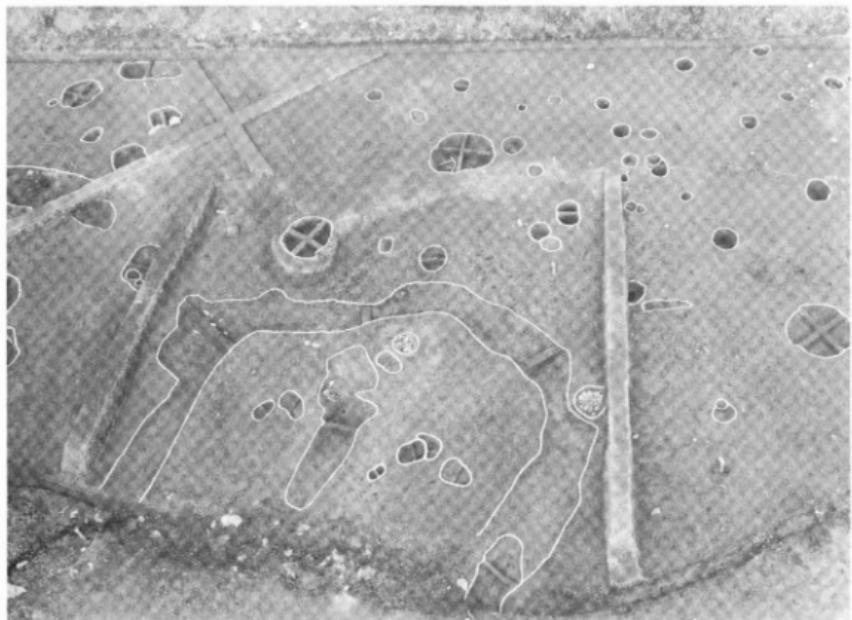
ST 6・7 全景（南から）



ST 6 全景（南東から）



ST 6 土器出土状況



ST 7 全景（南西から）



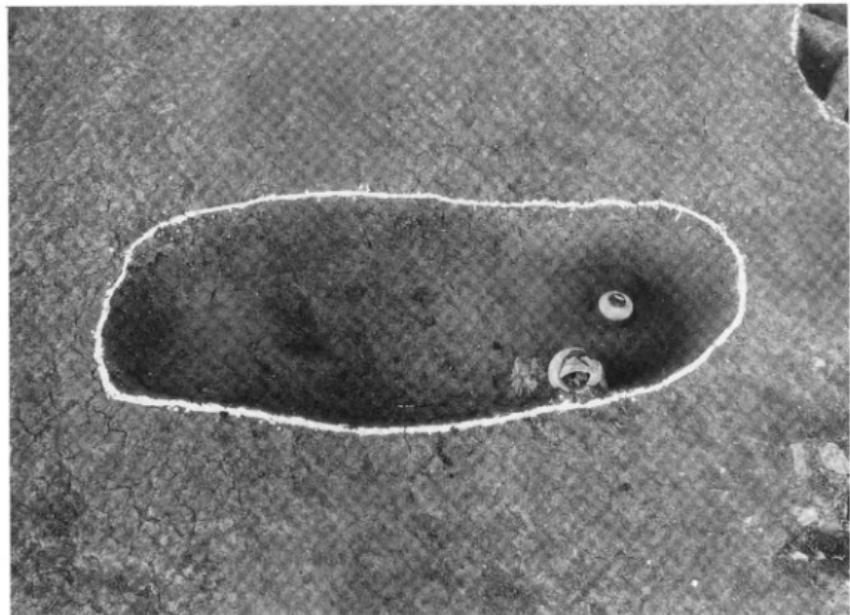
ST 8 全景（北から）



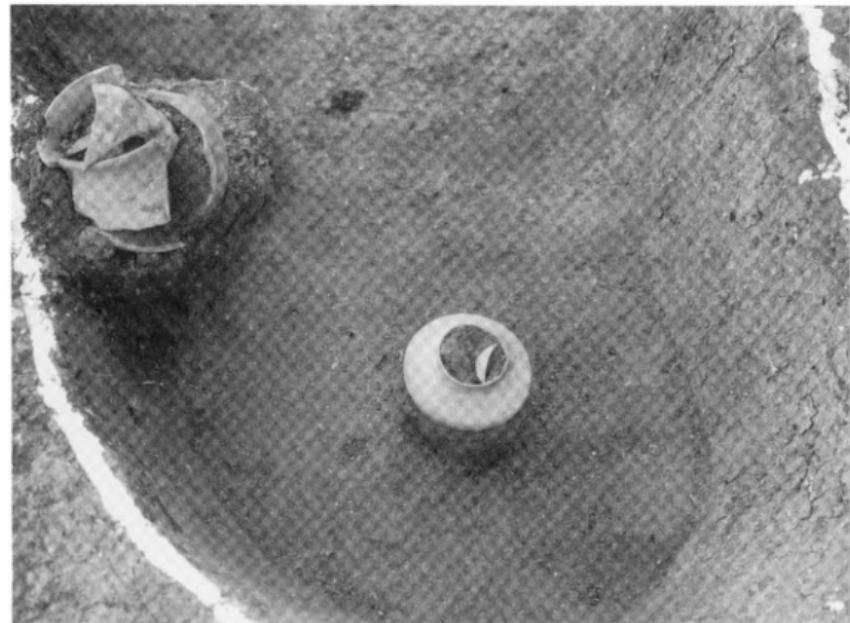
ST 8 土器出土状況



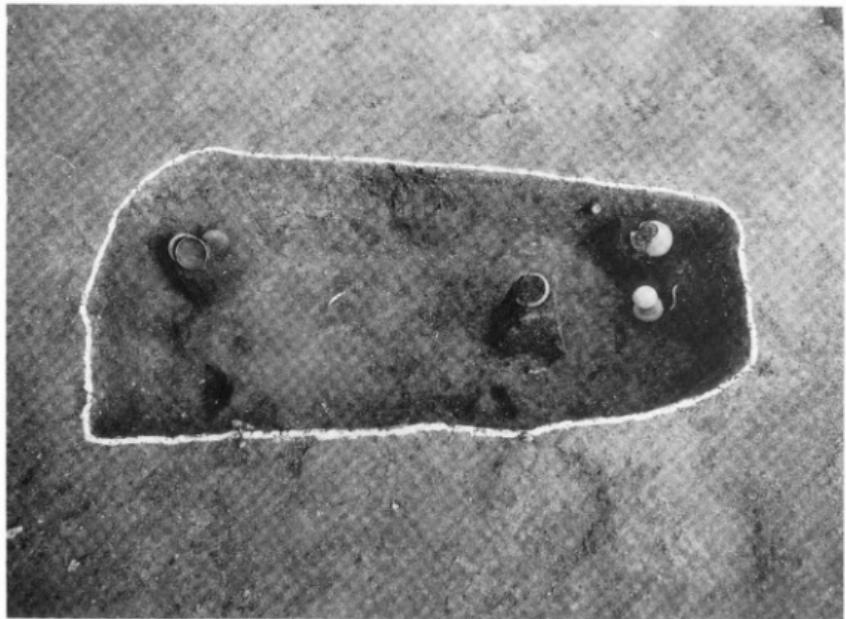
ST 8 鉄器出土状況



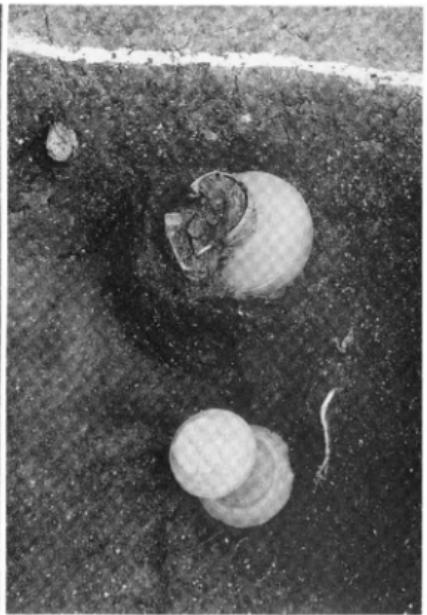
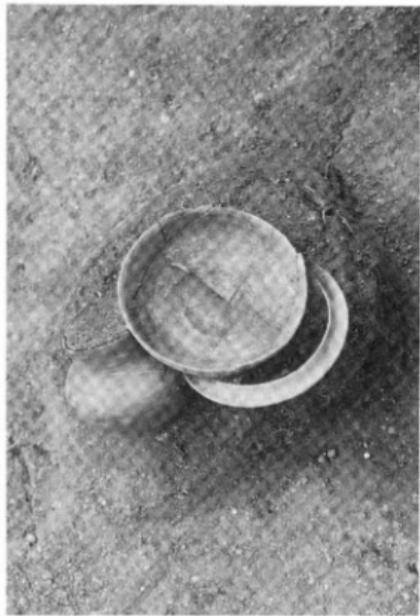
SR 1 全景（南西から）



SR 1 土器出土状況



SR 2 全景（南西から）



SR 2 土器出土状況